
亡国の幻将

モアイ・イースター・タヌキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亡国の幻将

【Nコード】

N0693X

【作者名】

モアイ・イースター・タヌキ

【あらすじ】

高二病と大二病を併発した作者が鬱屈とした日々の中で書いたファンタジーな小説です。

古代風の異世界を舞台にして、登場人物たちが馬に乗ったり、剣を振ったり、矢を撃ったり、本を読んだり、相撲をとったり。

1・戦場後地にて

見渡す限りの屍しかはねの群れ。青々とした草原に横たわる死体には、もうピクリとも動く様子はないけれど、ついさっきまで、ほんのついさっきまで、魂が宿っていたのだ。命がほとばしっていたのだ。

その風景を見ていたのは、夏の晴れ空のような、はっきりとした青色の瞳だった。彼は……シャンティは自分のすぐ足もとにも転がっている死体を踏みつけないように、下を向きながら、とぼとぼと歩いた。

そよ風が彼の豊かな金髪とマントを揺らし、同時に血から発せられる鉄の臭いを彼の鼻に運んだ。息を吸う際にその匂いを嗅いだ彼は一層気が滅入ったかのようにがっくりと肩を落とした。下を向いていたので、彼には空の色はわからなかったが、きつとこの状況にはおおよそ、うってつけとは言えない晴天が広がっているのだ、と彼は思った。

「こっちはカバルス同盟国兵」ふと目についた死体を見つめながらそう呟いて、すぐ隣を見た。そこにも死体が寝転がっている。「こっちは我らがサウルス兵だ」

シャンティはくだらない、と言うように目を瞑こむって、下唇を噛みしめながら首を振った。そんなことをしても、目を開けばまた同じ光景が広がっているのは彼にも分かっていた。

十九歳にもなつて、こんなちやっちな現実逃避だなんて、我ながらみつともない。自分の行動を卑下しながらも、彼の目は閉じられたままだった。それはどこことなく祈りにも似ている。

「シャンティ！」不意に怒号が響いた。シャンティはびっくりして声の方を見た。そっちには、青色の瞳、長い金髪、つまりシャンティとほとんど同じ顔の青年が、すらりとした馬に乗ってムスツとした顔で立っていた。シャンティと相手、両者の端的な違いは髪の長さ・目の吊りあがり方だけだ。馬上の青年には多くの騎兵が付き従

っており、彼ら騎兵は自分の主である青年を中心にして堅固な感じ
で彼を守っていた。「近衛兵団はどうした？ 馬は？ なぜ、一人
でうるついでる？」

「ジニー、そんなに怒るよなことじゃないよ。なにせ、もう戦争は
終わったんだから。それでね、さっきの質問だけど……近衛兵団に
は死体に群がるカラスを追い払うように頼んだんだ。馬は……」と
いった後、シャンティは少し困ったように小高い丘の上に目をやっ
た。そこには大きな白馬とその馬の手綱を掴んでいる男がいた。白
馬はどうも男の手に負えないようで、後ろ足を蹴りあげたり頭を激
しくがくがく振りまわしたりして、男を困らせている。「あのご様
子だからね」

ジニーと呼ばれた彼は、本名をジャーニイという。シャンティの
双子の兄でもある。彼は不機嫌そうな顔を丘の上に向けると、すぐ
さまシャンティに視線を戻して、また怒鳴り声をあげた。

「あんなくだらない馬はさっさと捨てる。それに、お前、近衛兵団
つてのがどういふ組織なのかわかってるのか？ 近衛兵団はおれた
ち王族を守るための組織だ」厳密に言えば国家元首を守る組織が近
衛であり、その他は親衛という言葉を使うべきであるが、彼らの国
ではそれを分けない。「お前はそれを、死体なんかの、それもカバ
ルスの死体なんかを守るために使うなんて……。おい、これから先
はどんなことがあっても自分の身边から近衛兵団を遠ざけるな。お
前は……」

ジャーニイが小言を言いだすとシャンティは困ったような笑みを
返した。

「どんなことがあっても……とは言うけどねえ、ジニー」シャンテ
イは同じ表情のまま、この陰惨たる草原のどこかの虚空に目を移し
た。「なにも起こりはしないさ。なにせ、すべてはもう終わったあ
と……だろ？」

「……」ジャーニイは呆れたという感じの顔をシャンティに向けて、
それでも彼の抱いた無常感と同じようなものを自分の胸にも感じつ

つ言った。「カバルスの王族や軍人、職民議員との講和が成立すれば、ひとまずは決着さ。けれどもな、シャンティ。終わったのは全てじゃない。今回の戦争が終わったに過ぎない。それだけに過ぎない。そうだ！ 父上はまだ征服を止めはしない、版図の拡大を終わらせはしない、さらなる国の繁栄を諦めはしない。この戦争が終わっても、またすぐに次の戦争だ。それも全て国のためだ、国民のためだ。馬鹿みたいに本ばかり読んでいるお前なら、わかってるはずだろう、シャンティ？ そして父上の息子であるおれたちは次の戦争にも参加せねばならない。誇り高く、なおかつ、民に畏怖・畏敬される王族として……次世代の王の候補として」

「そうだね……」視線を虚空から兄に移してシャンティは言った。「そんな、おおよそ崇高で誉れ高い大義名分……全く持って、糞くらえだけれども、それでも戦わなくちゃならないのは事実だ」

ジャーニイはシャンティのすぐ近くまで寄ってきて、馬の上から手を伸ばした。ジャーニイが近くの兵士に「おれの馬に乗せる。手伝ってやれ」と言うと、一人の近衛兵が馬を下りてシャンティの足を持ち上げた。

この時代にはまだ鎧が発明されておらず、乗るのにも人の手を借りなければならぬ。この鎧がないばかりに、この時代に騎乗には色々な弊害が発生していた。が、話からそれるので詳しくは話さない。

で、シャンティがジャーニイの馬の背中に乗り終えると、ちょうどある知らせが届いた。知らせを届けたのはシャンティの忠実な側仕え、つまりは侍従であり、さらにはシャンティの近衛兵団の隊長であり、はたまた家庭教師でもある頬髭びっしりのウイスカだった。

「ジャーニイ様、シャンティ様」

ウイスカは少し慌てた様子で馬を走らせてきた。

「ウイスカ、どうしたんだい？」シャンティが身を乗り出して聞く。馬上が不安定になって、ジャーニイはちょっとシャンティを怒った。

怒りはシャンティだけでなく、近衛兵団の隊長の身分でありながら自分の主のもとを離れたウイスカにも及ぶ。「ああ、もう。はいはい、わかったよ。小言なら後で聞くから。それよりも、今回は先にウイスカの話しを聞こう。で、ウイスカ？」

要件は？

「はい。実は、つい先ほど私の息子が、ここから少し離れた所で二人のカバルス人を見つけまして、その片方が軍人でございます。でもう片方が、少し衣類が汚れておりますが、私が見た感じではおそらく……カバルスの王族かと思われます」

シャンティとジャーニイは目を丸くして見合わせた。目が合うと同時に頷きあつて、すぐに現場に案内するようにウイスカに頼んだ。「はっ、こちらでございます」

ウイスカは馬の腹を蹴りながら、手綱を引く。自分の体の一部のように馬をひよいと操つて、目的地の方向に翻る。彼はシャンティたちに目配せして、もう一度馬の腹を蹴った。目的に向けて走りだした彼の後を追ってシャンティとジャーニイ、そして彼の近衛兵団も馬の腹を蹴って駆けだす。

一行は障害物のように死体が散乱する草原を走つた。ウイスカを追いかけて始めてしばらくすると、シャンティはそこいら中からぼきぼき、と軽快な音がするのに気がついた。ちらりと下を向いてみると、ジャーニイ含む、全ての騎兵が死体の骨を遠慮もなく踏みならしている音だと知った。

シャンティは肝を冷やし、大声で「止まれ」の声を発したが、ほとんど間をおかずにジャーニイは「いや、止まるな」の声を発した。近衛兵たちは自分たちの主であるジャーニイの命令通り馬を走らせ続けていたが、やはり、少し困惑した表情を浮かべた。近衛兵団の中にいたジャーニイの侍従であり、さらにはジャーニイの近衛兵団の隊長であり、はたまた家庭教師でもある顎鬚びっしりのベアードは、私は慣れたものだ、と言う感じに苦笑を浮かべていた。

ついでの話だけれど、シャンティとジャーニイの両従者は共にバ

ルバムという姓であるが、二人に血縁関係はない。

そうこうしているうちにシャンティとジャーニイの喧嘩が始まっていた。

「ジ、ジニー。何をやっているのかわかっているのか？ ジニー、彼らは」と、シャンティは顔を真っ青にしながら死体を指さした。

「彼らは終戦が決まると同時に、カバルスの人たちによって回収され、それぞれがそれぞれの家族の下に戻って行くんだ。それなのにっ」

「うるさい、今はそれどころじゃない。だいたい、カバルスの兵隊など」

「カバルス人だけじゃなくて、サウルス人も踏んでるよ、君は」

「それならば、死体などを気遣ってそろりそろりと歩けというのか？ ふざけるな！ この数の騎兵がそんなことをしてみる、王家の誉れも一瞬にして地に落ちるわ！」

「誉れ？ ああ、我が兄にしてなんとも愚かなで浅慮な発言だ！

何が誉れだ。自尊心、自尊心の間違いだらう？」

「愚かで浅慮？ まるで、自分の頭脳は賢しく明晰であるような言い方だがな、お前なんぞは本の読み過ぎで、いつまでたつてもお子様な幻想から抜け出せない精神未熟者じゃないか！」

「ああ！ 君、ぼくならまだしも、偉大なる先人たちの残した金言や知識、知恵、思想をも侮辱するなんて……暴言だ、それは暴言だぞ。頼むから取り消してくれ、そうじゃないと後ろから……」

「御二方、つきましたぞ！」二人の喧嘩を仲裁したのはシャンティの侍従ウイスカだった。

二人は一旦休戦ということにして、本来の目的である戦場後に迷い込んだカバルス人の方に集中することにした。

二人のカバルス人の姿は馬の上からでは見えなかった。なぜならカバルス人がいるであろう所にはシャンティの近衛兵団が群がっていたからだ。シャンティが「開けてくれないか？」と優しくに命令すると、彼を主と認める近衛兵団は左右に開いて道を作った。

道の奥にはカバルス軍の軍装をつけた大きな体の男がいて、その大きな背中にいる、フードをかぶった小柄な人を隠すように胸を張って立っていた。

彼の髪は白髪交じりの黒い髪、短く切りそろえられたそれはツンツンにとんがっている。目は黒く、鋭く、多くの敵兵に囲まれているのに、その瞳のどこにも恐怖心は見えなかった。右手にはカバルス地方特有の形をなした剣が握られ、その切っ先は地面に向けられている。口元は、口角が上がっている。微笑んでいるようだった。髪のにこそ白髪は交じっているが、彼自身の体つきは若者のそれである。

シャンティが対応すべく馬を下りると、ジャーニーもなんとなく下りた。本来ならば、敗北国の敵兵を相手にするのだから礼儀を欠こうがどうでもいいはずで、馬の上からでもよかつたわけだが、シャンティがあまりにも当たり前のように馬を下りるのでジャーニーも下りてしまった。ジャーニーは地面に足をつけた瞬間、周りの近衛兵団がちよつとざわつくのを見て、自分がつまらないことをしたと気がつき、何となく恥ずかしく思った。とりあえずシャンティを恨むことにした。

シャンティはそんなジャーニーの想いも知らないで、彼の方を向くと小さな声で「ぼくが対応するよ」と微笑みかけた。ジャーニーは敵わないという感じに「どうぞ」と手を指示す。もっとも、ジャーニーは言語学が苦手であり、カバルス語もそれほど習熟してはいなかったため、始めから対応などをするつもりもなかったわけだけれど。

満面の笑みを浮かべてカバルス人の方に振り返ると、シャンティは流暢なカバルス語で挨拶し始めた。

「はじめまして！ ぼくはサウルス地方を治める王族レジエム、の現王シユラクの三男であるシャンティと言います」彼はそれでも無表情なカバルス人の方へ、彼も恐怖を感じていないかのように歩きます。「いいえ、警戒しないでください。ぼくたちはあなたたちに

危害を加えたり、辱めを与えたりは、一切しません。だから、まずその手に握っている剣を離してはいただけないでしょうか？」

シャンティがそこまで言っても通じていないのか、カバルス人は剣を離そうとはしなかった。シャンティは無言のまま彼を見つめ続けた。辺りに重苦しい空気が漂い始める。特に、シャンティの近衛兵団は相手の一挙手一投足を食い入るように見つめていた。彼らのその行動は、シャンティにもしものことがあると自分たちは自害せねばならない、という恐怖から来ている。けれども、もちろんそれだけではない。勤労の一番の理由を上げるならば、この優しく聡明で誰にも分け隔てない王子への愛情こそが、それだと言えるだろう。

カバルス人は沈黙を保ったまま、剣を持ちあげた。近衛兵団が一斉に構え、誰かがシャンティの服を掴んだ。カバルス人は嘲笑のような表情を少し浮かべて、空いている方の手で、自分の剣をつんつんとつついた。彼は流暢なサウルス語でしゃべった。

「お前の兵士たちが一人残らず剣を地面に捨ててくれるなら、おれも捨ててやる」

「よし、そうしよう」シャンティは間髪いれずに答えを返した。「みんな、剣を地面においてくれ」

兵士たちは啞然としていた。そんな彼と長年連れ添った従者ウイスカも、さすがに何か口を挟もうとしたが、それをするまでもなくジャーニイが怒鳴り声をあげた。

「何が、剣を地面においてくれ、だ。シャンティ、それは勝利国の王族であるおれたちがすることではない」ジャーニイは兵士たちの間を縫いながらシャンティのもとにやってきて、カバルス人の方を睨みつけながら続く言葉を言った。「蛮族の軍人よ。どうやら、お前はサウルス語に通じているみたいだから、この蛮族の地では知識人のようだな。しかしその識者もこの世の道理には通じていないらしい。これから我らが高貴なるサウルス国の一州の、その一員となるお前に、このおれが直々にこの世の道理というものを教授してやる」

そう言うとジャーニイは自分の近衛兵団の方へ向いて命令を発した。

「我が身を守る近衛兵たちよ、我が戦友たちよ、剣を……」そこまです言った瞬間、ジャーニイの右頬に衝撃が走って、次の瞬間には地面に伏していた。眼前に広がる蒼天を見て、ジャーニイは瞬時に、しまった、敵に先手を取られてしまった、と感じた。

しかしそうではなかった。カバルス人はさっきのポーズからちよつとも動いてはいない。けれども、さっきまでとは違い、顔には少しばかりの驚きの表情が見えた。

「すまない」カバルス人に対してそう言ったシャンティの左の掌はさっきまで、ジャーニイの顔があつた所に突き出されていた。ここまで言えば後は言わずもがな。ジャーニイを突き倒したのはシャンティである。「彼はぼくの兄でね、弟想いなのはいいけれども、激情家なのが玉に傷だ。まあ、何もなかったと思ってくれば、それで万事オーケー。よし、それじゃあ、みんな……」

シャンティが屈託のない笑顔で振り向くと、近衛兵団も、仕方がない、と言う風に苦笑を浮かべて地面に剣を置いた。

「待て、待て待て」ジャーニイは顔を真っ赤にして立ちあがつた。マントについた土を払い、胸に手を当てて息を落ち着け、準備が整うとカバルス人を指さして例のごとく怒鳴りを上げた。「なんで、そんなことをする。おれを地面に押し倒してまで、なぜ蛮族の言うことを聞く。シャンティ？ おれたちは勝利者だぞ、奴らは敗北者だ。これから奴らの国を潰し、奴らを我らの配下となす。そうなれば奴らの全ての生殺与奪の権利はおれたちにあり、人種として高みにあるのはサウルス人と、証明せしめて、遙かなる歴史の上にも既成事実とそれを刻みつける。そんなおれたちが、なぜ………考えても見る、奴のあの態度は侮辱罪だぞ。違うか？ どうだ？」

「ぜんぜん違うね。というか、君の言葉は全くもって聞くに堪えない。人種としての高み？ 人種間に高低なんかあるのかい？ ぼくは聞いたことはないぞ。あつたとしても、それがいつわかつた。い

つだ？　もしかして、今回の戦争でそれが証明されたとでも？　馬鹿言っちゃあいけない。今回の戦争ではそんなつまらない証明なんてされていない。我々サウルス軍が我々の兵数の三分の一ほどの兵数しかもたないカバルス軍から大損害を受けながらも、なんとか辛勝をもぎ取った……今回の戦争は、その事実しか生んじやいない。人種の優劣など……」

「王族の誇りを！」　ジャーニイはシャンティの片手で胸倉をつかむと、さっきの逆襲とばかりに空いている方の手でビンタを打った。「注入してやる！」

「なにが！」　シャンティは胸倉を掴んでいる方に噛みつきながら叫んだ。「誇りだ！」

歴史だなんだ、証明だなんだ、優劣だなんだ、誇りだなんだ、と口走ってはいるものの、それは結局のところ、みっともない兄弟喧嘩でしかなかった。彼らは臆面も恥も外聞もなく、自分を育てた従者の前で、自分を主と認める兵士の前で、はつきりとした身分もわからない異邦人の前で、世にも低俗で微笑ましい戦争をおっぴじめた。

「お、王子を」　ウイスカとベアードの両従者があたふたしながら兵士に命令した。「王子たちを止める」

上司の声にハツとして、「おお、そうだ。止めなきゃあ」と我に返った近衛兵たちがわらわらと王子たちに取りつき始めると喧嘩は強制的に収まった。けれども当の本人たちはまだやり足りないようで、顔を張らして、一方は泣きじゃくりながら、一方は癩癩を起しながら相手を睨みつけていた。

不意に、地面に金属の落ちる音がした。

「姫」

と、握っていた剣をはたき落とされたカバルス人は、さっきまで自分の後ろに身を潜めていた女性を見つめながら言った。

シャンティは、そのとき初めて、そのカバルス人の瞳に何らかの光が宿ったのを見た。

「ギャロップ、もういいわ。あの方たちは私たちに害を与えるような方々ではないし、それに……」カバルス人の女性は思慮深そうな、それでいて優しげな表情を相手に向けて言った。「ええ、もういいの。うん、ここまで……楽しかった」

それに彼女は美しかった。

一人、とある理由から彼女の虜にならなかったシャンティは周りを見渡した。若い兵士も、古参の兵士も、ジャーニイも、誰もが皆その女性の美しさに見とれていた。息をのんで、目をいっぱいに広げ、頭をからっぽにして、彼女の全てを、自分の頭の中にあるキャンパスに収めようとしているみたいだった。なるほど、衣類をいくら代えたとしても、日々の生活で身についたその人間の持つ高貴さと言うものはそうそう隠せるものではない。ギャロップと呼ばれた男の顔を見る彼女の顔は、名状しがたい究極さ、と言うものを表わしているようにも思えた。

彼女は熱を持った目でひとしきりギャロップを見つめた後、そつと流れるように目をそらした。ほとんどすべての人々は彼女の仕草だけをつぶさに観察していたが、シャンティだけはギャロップを見ていた。そして、彼は、何十人の兵士たちに剣を突き付けられてもひるみもしなかった軍人ギャロップの何かが崩れるのを見てとつた。膨大な数の日記や著作を後世に残したこの筆まめ王子シャンティは、ある日の日記の中にこのような記述をしている。

『ヒツパリオン・ユルシュ……亡国の幻将ギャロップが、戦争のほか唯一愛した者』と。

カバルス人の二人がジャーニイとシャンティの双子の王子に保護されてすぐに、サウルス国とカバルス同盟国間の講和が結ばれた由の報告が知らされた。

この講和の後、カバルス地方に多く存在する部族の内、その大半の部族を治めカバルス地方の盟主として存在していたカバルス同盟国は独立国としての機能を失うことが決まった。カバルス同盟国は

そのとき持っていた領土を全てサウルス国のものとすると同時に、
サウルス国の一地域となる。

> i31945 — 4057 <

1・戦場後地にて (後書き)

読みにくいのもご愛嬌、と言いつつとでよろしくお願いいたします。

2・サウルス国史

> i31953—4057<

この時代の数少ない大国であるサウルス国も、誕生した当初は小さな都市でしかなく、また、侵略や征服を繰り返して領土を拡大するような、ある種の病にも似た性質を持ち合わせてはいなかった。

小都市サウルスのあったコミッセオ地方は多種多様な文化の交わる地で、緩衝地帯とも言えるようなあやふやな地域だった。それは特殊な立地に端を発している。

そのコミッセオ地方より遙か遙か東にはウアズマ地方と呼ばれる華々しい文化を持った地域があった。絨毯などの毛織物や、金細工、農耕法、薬学、戦争学、思想……多くの物が生み出され、それは高い山や灼熱の砂漠や流れの急な川や深く険しい森を越えて、さらにコミッセオ地方のすぐ東の、常時民族間で戦争を起こしあっている蛮族の地・小ウアズマ地方を越えてやっと西のコミッセオに伝えられた。

> i31954—4057<

そのコミッセオ地方と小ウアズマ地方を陸路で結ぶ道は呆れるほどに少ない。と言うよりもほぼ一本しかない。通称 竜の鼻の穴と呼ばれる一本道は、南北の海がこの二つの地方を切り離そうとするように、ぐぐぐつと陸地に食い込んできているせいで生まれている。その一本道もそうたやすく踏破できるようなものではなく、大集団での移動が困難なので、その時代の後進地方であったコミッセオは他の蛮族たちからの侵略を受けないで済んだ。

コミッセオの北には優れた建築技術と教育制度、さらには解剖学、地図学の知識を持つモーキリニア地方がある。さらに言えばその北には偉大なる遠征王が築いた国があったがこれはあまり関係ない。

それで話を戻すが、コミッセオとモーキリニアを結ぶのも海によって自然に作られた一本道で、これはコミッセオの北西にある。し

かし、この一本道はそれほど険しくはなく、たびたび北からの侵略を受けていたので、コミツセオの北部に栄えていた王国カンプトケフアレは防衛を容易にするために海をつなげて小さな川を作った。

潮の川 と呼ばれるこの防衛線はうまく機能した。

西には、からりとした風土のカバルス地方があった。騎馬技術と牧畜の知恵が蓄積されており、草原の多さなどから良馬の産地としても知られている。コミツセオとカバルスをつなぐ道はいくらかあるが、世界地図を見ると、やはり海によって陸地がきゅっとすぼまっているように見える。

つまるところ、コミツセオ地方は訪れるための通路の小ささと小ささから他地方からの侵略を受けにくい性質を持っていたのだ。そして文化と知識を有した人間の往来は何とかできるせい、各地の文化が入り混じったあやふやな特色を持つことになる。

もう一度地図で見してみる。少しすれば気が付くが、コミツセオ地方は竜の頭のような面白い形をしており、前述の 竜の鼻の穴 と言う一本道も、ちょうど竜の鼻に見える辺りに道があるから称されたものである。この地方は地図技術の進化した中世にはその形から竜頭地方とも呼ばれ、豊かな文化の発信地に成長していた。

さて、話を小都市サウルスに戻す。

小都市サウルスは聖獣信仰せいじゅうのんじゅうの対象を竜としている小都市で、コミツセオ地方の中心近くに存在していた。その立地のせいかコミツセオ内に存立する数国からたびたび略奪を受けたり、国同士の戦争の宿营地などとして都市の宿舎と食料を差し出すことを強要されたりした。

サウルスの長であったサウルス・ジャクナー一世はその状況を打破するために富みを蓄え、兵士を鍛え、他国との戦争より疲弊していたコミツセオ南部グナトウス王国に侵攻した。一三二二年の冬のことである。

彼らが掲げた旗は深紅に染め抜かれた布に竜の紋様もんようが金糸で縫い

付けられていた。それを見た兵士隊は自分たちが聖獣に守られているのだと確信した。団結力高き彼ら歩兵の密集隊形によりグナトウスは瞬く間に落とされた。ジャクナ一世はグナトウス王族と貴族を抹殺し、代わりに自分の親族を領主とした。ジャクナ一世は誉れある歩兵部隊と共に小都市サウルスに凱旋し、市民に歓呼と（冬の時節にどうやって手に入れたのか）花吹雪で迎えられた。さらに新王国サウルス建国の由をコミッセオ内の各王国に到達する。グナトウスはサウルス国南部グナトウス地域と呼ばれることになる。

さて、地味豊かな南部の土地を手にしたことで彼らの国力は大きく増大したが、ジャクナ一世の親族はグナトウスの統治に失敗。グナトウスの民衆は暴徒と化した。一三七年、ジャクナ一世は嫡男のジャクナ二世を派遣し、彼はまだ若いにもかかわらず、父の期待にこたえてその翌年に暴動を治める。

ジャクナ一世の執った「前支配者の血筋の抹消」という行動は後世に書かれた「君主論」にしてみれば満点を与えられるものだった。しかし、この時グナトウスの鎮定にあたったジャクナ二世は「今回の南部暴動は、元からいた支配者を全て殺してしまったせいだ」と考え、これを何らかの書物に記録しているが、何に記録したのかはわからない。けれどもこれが後のサウルス国の領地支配方法の確立につながる。

ジャクナ二世が南部を平穩に治めているのを見た父ジャクナ一世は彼に王位を譲ることを決意し、ジャクナ二世は一四三年に戴冠を果たした。

ジャクナ二世はグナトウスを気に掛けながらサウルス国をうまく統治していくが、コミッセオ北部の王国カンプトケファレからのたびたびの侵攻には辟易していたようだった。

他国からの侵略行為に頭を悩ます父を見て育ったシハルクは「豊かな国力を持つ国は他国からの侵略の的にされやすい」という事実を知る。同時に「自国の平和を維持するために他国との戦争を辞さない」という彼の、否や、サウルス国の理念を確立した。

シハルクは後のことを考え早くから軍隊の育成に努めていた。中でも、戦争に際して自分の周りにいて自分を守り、時には自分の命令を忠実に聞き、その通りに戦争をコントロールする心身ともに屈強な精鋭兵団の育成を重視した。これは後の近衛兵団の走りである。彼は一七一年の王位継承の戴冠式の後、すぐに北部に進攻しようとし始めた。

が、過去の南部鎮定の際にグナトウス民に色々な優遇を与え、その後も民に尽くしてくれた名君ジャクナ二世の引退と共に、南部民の間に次王への不安感が強まってくる。それはすぐに広がって南部グナトウスではまたしても反乱が起こった。彼はまず、その鎮定をしなければならなかった。サウルス軍とグナトウス反乱軍の間で一度の会戦が行われた。この時の戦況はコミツセオ地方の他の二国のスパイによつて各々の国に伝えられ、その内容を聞いた二国の王族は戦々恐々とした。それほどにサウルス軍の力はすさまじかったのだ。

南部鎮定後すぐに北部に向かったシハルクはじわじわとカンプトケファレ国を侵略していった。カンプトケファレはこの侵攻を予期しており（サウルスが小都市だった頃、彼らを一番いじめていたのが南部の国グナトウスと北部の国カンプトケファレだったから）、国内のいたるところに防備軍を敷いていたが、それでもサウルス軍の猛攻は止められなかった。

シハルクとサウルス軍はついにカンプトケファレの王都ウチノホークをぐるりと囲い、攻城戦を開始。数日後には陥落せしめ、シハルクは兵たちに二日の略奪を許すとともに、カンプトケファレとの「講和」を結んだ。

シハルクは前述したジャクナ二世の考えを残したメモをすでに読んでおり、カンプトケファレ国の王族を民衆の前ですぐに斬首するようなことはしなかった。しかし、彼はカンプトケファレ王族を殺す。ただ、その行為に対して、カンプトケファレ民に王族殺しを認めさせる、ある程度の正当性を求めていた。

彼はまず自国の法廷にカンプトケファレ王族を呼びよせ、そこで今回の戦争の責任としての処刑を要求し、当たり前だが、これが法廷によって認められる。シハルクは法律の上でカンプトケファレ王族と今回の戦争に加わった上級將軍たちを戦争犯罪人として処罰することを発表した。同時に、カンプトケファレ内の親サウルス派の貴族を「サウルス国北部カンプトケファレ地域監督者」として取立て、その上にフィクサーのような立場としてサウルス王族を「カンプトケファレ総督」と言う役職で置いた。これが功を奏してくるとシハルクは南部にも同じ処置を施そうとするが、南部は王族だけでなく、その他の貴族も全て殺されていたせいで実施できなかった。それでも一部の北部市民の不安は収まらず、シハルクが北部市民の保護を法律として公布すると、市民はやっと彼らを新たな支配者と認め始めた。

シハルクは国内で大きな裁判が起こった時は自ら出向き、公正なしかし、ややサウルス側よりの判定を下した。それでも、この時代においては他の裁判官と比べ相対的に公正な裁判を行っていたせいか、彼は後に「法務王」と冠されることもある。

北部の治安が穏やかになり始めた一七四年の夏頃、シハルクはまだ幼い息子たちを書記などの役職で従軍させコミツセオ東部を支配していたヘドロケラス王国に侵攻し、また瞬間にこれを成功させる。ヘドロケラスの統治にも今までと同じ方法を取り、この国をサウルス国の一部とした由をコミツセオ地方全域に公布した。つまりは、サウルス国はコミツセオ地方を平らげたわけである。

この事実^に気を良くした彼は「コミツセオ地方をサウルス地方と称するように」との書簡を小ウアズマ、モーキリニア、北の王国群カバルスの各地方に送った。これより先、現在に至るまで元コミツセオだったこの地方はサウルス地方と呼ばれることになる。

サウルス地方を併呑し、サウルス地方各地域の平和を維持し始める政策を施し始めると、シハルクの自由な時間は格段に増えた。そうなるにつまらないことを考えてしまうのが人の常である。

「……各国から考えて私たちの都は、サウルス地方のサウルス国の中央部の王都サウルスとなる」シハルクは何となくそれが嫌だった。「新しく決めた名前に関する法律では、公で名乗るとき出身地域名出身町村名、家名、そして自分の名前を順々に言うことになっている。となると、私の名前は……サウルス・サウルス・サウルス・シハルクとなる」

大体、サウルスと言う名前はサウルスの王族の身が使えたものであったはずが、新しい法律では、出身地によっては一般人にも使われるようになる。そうになると、サウルスの名前も羨望のまなざしでは見られなくなるのだ。

「まあ……しかし、サウルスの名が庶民に溶け込むいい機会かもしれん」

シハルクは簡単にその不満を投げ出して、次には「いつそ、自分の名前をサウルスにし、サウルス・サウルス・サウルス・サウルスとして箔をつけようかしらん」とも思ったが、子供たちが何となく居た堪れなくなってやめた。彼の名前に関する葛藤は息子たちへの手紙の中で書かれており、この話は中世に「シハルク王の葛藤」と言う名の喜劇として発表された。

話しを戻す。それで結局、彼は他を変えることにした。

まず、王都をその時より少し北に建設し始め、そこを新王都「センチュリオン」とした。これで彼の名前はサウルス・センチュリオ・サウルス・シハルクとなった。

こうなると間に挟まれたサウルスがみずばらしい。彼は新しい家名を考えることにした。サウルスと言う家名を捨てるのは先人への無礼に当たるかもしれないとは感じたが、最初にサウルスがあるので、その時感じたことには目をつぶることにした。

彼は、王の意味がある「レジエム」を家名にすることに決め、これでサウルス・センチュリオン・レジエム・シハルクの名前が出来上がった。

一八〇年から建設を開始したセンチュリオンは一八九年に完成。

少し長くなつたが、サウルス国の基盤はこのように出来上がったこととなる。

シハルクの次の王がシャンティたちの父親であるシュラクであった。ライオンの鬣たてがみのような、金髪でぼさぼさの髪の毛と髭ひげを持った彼は、シハルクが東部ヘドロケラス国を攻めた時に、些細な役職で従軍した三人の息子の末弟であつた。

彼はその後、各地の小さな反乱などを素早く鎮定した武功や軍内で高まつた名声によつてシハルクから次王に選出される。次王に選出された時、彼はすでに三十歳を越えていた。

一九八年、シュラク三十二歳の春。戴冠と共に彼はサウルス地方を飛び出した。二人の兄や先祖の育てた兵隊たちと共に東へ向かい、竜の鼻の穴の一本道を通り小ウアズマ地方に侵略を開始した。

まだ小部族同士で交戦していた時代の小ウアズマ兵などはサウルス軍の敵にならなかつた。サウルス軍は、まるで足元の小石を蹴飛ばすように小ウアズマ兵を撃退していった。

どんどん小ウアズマの奥地へ進んでいったが、それがまずかつた。勝手知らぬ奥地に踏み込み過ぎ、さらに、完全に支配したと思つた部族の反乱からサウルス軍の補給線は分断された。彼らは現地調達により何とか食いつなごうとし、少数単で各地の村を荒らしまわつたが、それもいけなかつた。各地の村の戦士たちは珍しく手を取り合つて自警団を組み、地の利を生かしたゲリラ作戦に出た。

サウルス軍は苦境に立たされた。雨が常時しとすと降る小ウアズマでは、大勢で固まっていると糞尿の始末などのせいで衛生状態は急激に悪くなる。食料部族のせいで十分な栄養を取れず、一度病が発生するとその感染拡大を止める術もなかつた。

二〇三年。五年にも及ぶ遠征の末、ついにシュラク王はサウルス地方への撤退を決意。サウルス軍はゲリラに応戦しながら何とか竜の鼻の穴を通つたが彼の二人の兄はすでに死んでいた。これに関して、現代の歴史研究家は『シュラクは目の上のたんこぶで、さらに

は近未来的に脅威にもなりうる二人の兄をこの逃亡劇の最中に殺した。なぜなら、まとまりのない蛮族相手にこのような大敗を喫してしまったのだから、帰った際には兄への譲位を求められる危険性が出てくるからである。現に、軍部内ではすでに二人の兄を取り巻く派閥が出来上がっていた』と記述している。この記述の正誤はわからないが、事実としてサウルス軍は初めての敗北を喫してしまった。シユラクはサウルス国に戻ると、反乱が起こらないように気を配った。まず竜の鼻の穴に大きな砦を設け、小ウアズマの蛮族が侵攻してこないようにして、国内の不安を和らげた。さらに各地域を親善訪問し、「この先十数年は他国・他地方への侵略を行うことをせず、国内のさらなる発展に取り組むことを約束する」と演説してまわった。

そんな二〇四年頃、シユラクは三十八歳にして初めての子供を手に入れた。燃えるような赤色の毛を生やした男の子であった。彼はジャクナ三世と名付けられ、シユラクは隠されていた親馬鹿の才を發揮して彼を可愛がった。その二年後には他の妃との間に双子の男の子が生まれる。兄の方がジャーニイで弟がシャンティである。王位継承権第一位はジャクナ三世。第二位はジャーニイ。第三位はシヤンティとされた。この後もシユラクは数人子供を作った。

二二四年、嫡男ジャクナが二十歳になったに際し、西のカバルス地方への侵攻を開始する。小ウアズマとの戦さに使う馬を求めての行動である。そして、その遠征にはジャクナ王子と双子の王子も將軍として参加することになる。

2・サウルス国史（後書き）

名前の語順からすると、サウルス国では日本語みたいな語順の言葉を使っているんだろうか。とか考えてはいけません。僕は深く考えてないのです。

3・シャンティとギャロップ

> i32005—4057<

シャンティ王子が手に持つ「西方馬族」という名うたれたパピルス製の巻物にはこんな内容が書かれている。

『カバルス地方。良馬や毛類の産地にして狩猟民族、遊牧民族の多く住む地方。そこに住む多くの部族は、古来お互いのことをあまり気にせず自由に暮らしていた。けれどもカバルスから南にだいぶん行った所に存在するイハテリオ地方に存在する一國・ナランの技術者がこの地方を訪れ、一つ所に住み始める様になると、遊牧民たちはその技術に感心し、徐々に彼ら技術者と共に都市を形作ることになる。都市と呼ばれ出した頃には、すでに彼らは一角獣ユニコーンを聖獣として信仰していた。』

『都市を作る時に尽力したヒツパリオン族はこの都市の有力者となる。都市が栄え始めると、その富に惹かれた貧困部族が都市を襲撃し始めた。ヒツパリオン族はこれを撃退していくが、都市への襲撃はその苛烈さを増していく。ヒツパリオン族はカバルス東部で最強とされていたエウクス族に対し助力を求め書簡を送り、カバルス族は都市のために傭兵として働き、その見返りとして富を享受していく。』

『ヒツパリオン族は技術者（この時には職人と呼ばれ始めている）と話し合い、貧困部族の受け入れを始め、彼らには馬を捨てさせる代わりに都市の衛生管理などの職を与えた。』

『多くの部族を手際よくまとめ上げたヒツパリオン族はその功績により族長とその家族を王族として、最初期からいた部族の有力者を貴族として都市市民から認められることになる。彼らは名無しだった都市をヒツパリオンと名付け、同時にそこを王都としてカバルス同盟国を立ち上げる。』

『カバルス同盟国は来るもの拒まず、去る者追わずの自由な環境だ

つた。国内の法律や大規模な工事は話し合い、つまり議会によって決定されていた。この議会での最有力者はヒツパリオン王族と貴族階級。次に有力なのは職業ごとに代表者を投票で決めて適時選出される多数の職人議員。市民が代表を投票で決めて適時選出される少数の市民議員。』

この部分はかなり重要である。詳しくこの後の「西方馬賊」を読めば彼らのそれが、寡頭制の民主主義とはやや異なっているのがわかる。とはいえ、王族の票と市民議員の票の価値には差があったらしい。まあ、「民主主義的な君主制」ということだろう。

『他の有力者は軍人である。彼らは都市の外に本拠地を置く民族からなり、多くの民族がいるが、その代表がエウクス族である。彼らはその強さと職業的な態度から 生まれながらの傭兵 とも称される。彼ら軍人は、一定期間毎に交代で都市に住みこみ、その都市を守る。また有事の際には残りの民族をも結集して軍団を作ることもある。このような大規模な軍事行動の場合にも、議会の決定が必要となる。なお、軍人は議会に参加する権利を有しておらず、これに關する理由はわからない。』

これに関する理由は後世の著作に詳細が記されており、なんでも、国が作られる以前の議会で軍人が彼らのお得意の暴力により議会の裏から牛耳ろうとしたことがあったらしい。これをした民族は先天^{がらの}的傭兵エウクス族によって掃討された。

文民統制などの政治と軍事の分離は今となっては常識であり、少し考えれば大体の予想はつくし、このすぐ後にほとんど答えを自分で言っているが、この本が書かれた時代には議会すら珍しいものであるから、このような考察の際にはふとした漏れが散見されても仕方のないことではある。

『重要なことは、この議会に参加する議員とその家族、職人の親方階級者とその家族、そして軍人とその家族には王族と結婚する権利が認められていないことである。これは王族が議員と結託して好きに議会を操らないように、王族が軍人と結託して議会をないがしろ

にしないようにするためである。つまり王族の結婚は、王族同士、もしくは貴族との結婚、議員を親族に持たない市民、傭兵業を行わず放牧などで暮らしをする同盟国部族、それらに限られる』

ここでシャンティは巻物を閉じ、少し息を吐いた。

彼はカバルス同盟国の王都ヒツパリオンの離宮のすぐそばにある木陰でそれを読んでいた。同じ木陰で愛馬ルルディファイロは心地よさそうに草の布団に寝転がって眠っていた。

遠くからからの乾いた風が吹いてきた。時刻は昼過ぎで、太陽の光が活発に侵略をできて皆を辟易させる頃合いである。けれどもカバルス地方はサウルス地方よりも湿度が低く、気温が暑くてもそれほど気にはならない。

シャンティは木陰から出て辺りを見渡した。草原の国であることは知っていたけれども、都市の様相は思っていたよりもごちゃごちゃとしていて、その賑やかさはセンチュリオンにも負けてはいなかった。それでも建物の姿かたちは質素で、機能性だけを追求しているようで、彼は何となく先進的だと思った。

「王子」と近くにいた従者ウイスカが声をかけた。シャンティが振り向くと、彼は庭におかれた丸テーブルの近くにいて手にポットとコップを握っていた。「ジューズをお持ちしましたが……」

飲みますか？ と訊く前にテーブルのすぐそばに置いてあった椅子に座っていた軍人工ウクス・ギャロップが返事をした。

「ああ、飲もう」彼はそう言うのと、人差し指でちよいちよいとテーブルを指さして、さあ、注げ。とジェスチャーした。敵に囲まれていてもこのように大物然とした態度をとっているが、彼は意外にも若く、歳を聞いてみるとシャンティと二つと離れていなかった。

「よし飲もう」と、シャンティが笑いながらテーブルに寄ってきて、椅子に腰を下ろすと、ウイスカは困ったようにジューズを注ぎ始めた。「ギャロップ、これは、冷水とレンゲの八チミツ、小麦粉、レモンやブドウなどの数種の果汁を混ぜ合わせたものだ。君の国にもこれと同じものはあるかい？」

「似たようなものはある」ギャロップは自分のコップに注がれたジュースを飲んで、少し驚いたような顔をしたが、すぐに平静を装った顔をした。「お前たちサウルス人はいつもこんな贅沢な物を飲んでんか」

「どうだろうか。そう言えば、子供の時はよく飲んでいたな。それと、戦さの前も兵士たちに配る。これは栄養価が高いからね。君たちの国にはそんな習慣はない？」

「カバルスは馬の国だからな、戦さの前と言えば馬の乳だ。良い、乳は良い」ギャロップは虚空を見つめながら哀愁味溢れる感じに言った。「おれも遠出して迷子になった際、食う物も飲む物も無くなつた時、馬の乳から馬乳が出たのは感動した。あれ以来、おれの馬は雌馬だ。馬と言えば、お前の馬は駄馬だ」

「いきなりなんだ。いや、大体……そんなことはない！」シャンテイは木陰の所にいる愛馬ルルディファイロを熱っぽいまなざしで見ながら言った。「彼は良馬だ、い・い・う・ま・だ。彼はぼくが馬主から貰ってきて、東国の栄養価の高い花を食べさせて育てたんだ。だから名前もルルディファイロ！」

花好きという意味である。

「馬鹿言うな、馬っていうのは基本的に、寝るときだって立ったまま寝るもんだ。それなのに、あいつを見る。寝転がったまま本気で寝てやがる。……雌か？」

「いや、雄だ。純然たる雄だ」

「最後の希望が潰えたな」

シャンテイは救いを求める様にウイスカの方を見た。ウイスカはそれに関してはギャロップと同意見、と言うように苦笑しながら首を縦に振った。

「ウイスカ、お前もか！」

シャンテイとギャロップがここでこうやって和やかに会話しているのは、シャンテイが父たちにそれを頼んだからである。

戦場後地から帰ったシャンテイたちは、軍人ギャロップと姫ユル

シユを王族や貴族の間に連れていった。まだ講和が決定したばかりなので、ヒツパリオン王族もまだ裁判にはかけられておらず、ユルシユは彼らの元に帰ることになった。一方、軍人であるギャロップは捕虜が集められた場所に行くはずだったがシャンティがそれを引き留め、息子には弱いシユラク王はシャンティに彼を自由にする権利を与えた。

サウルス国はこの後、自国の法律に基づいた裁判をする予定であるが、それは難航しているようだった。サウルス国の戦争後裁判は通常、敵国の王族、貴族など有力者階級、上級將軍などを呼び寄せ、戦争の責任をとらせるものだが、今回の激しい戦争で敵国の隊長階級以上の兵を九十五パーセント以上失っており、大規模指揮をした將軍クラスはひとりも生き残っていないとされていた。その責任をとらせる相手が極端に少なかったのだ。

その事実を知ったサウルス軍内の、同じ処置を受けたことのある地方出身有力者は「今回に関しては、戦争責任はすでにとられているのではないか」とシユラク王に進言した。しかし前支配者の抹殺は新しい領土を治めるためには必要なことである。

「けれども、今回の戦争は今までのそれとは少し毛色が違うんだ」
シャンティはギャロップを励ますような、優しい口調で言った。「今までの戦争ではこんなに多くの兵は死ななかった。自国兵も敵国兵も……。大体、王族の抹消は新領地を治めやすくするためにするための行動だ。けどね、今回、もしこれ以上の仕打ちをカバルス同盟国に求めるものならばそれこそ、カバルス同盟国の人々は黙っていないだろう」

「確かに、カバルス同盟国は三万以上もの死者を出した。けれども！……お前たちは、はん、勝利者のくせに四万人の死者を出した」
ギャロップはシャンティの樂觀思考をはねのける様に言い返す。「こんな様で、カバルス同盟国の有力者に手を出さない、じゃあ、サウルス国側から不満が吹き出るぜ」

「それでも……カバルス地方でまた君たちと戦争をするよりかは、

いくらか楽さ」

シャンティがあっけらかんと皮肉を受け止め、捉えようによってはそれ以上の皮肉にもとれる言葉を、屈託のない笑顔で返すと、ギヤロップはなんだか自分がバカらしくなって顔をそらした。

「ところで……お前はなんでおれを引き取った。まさか、ホモなんじゃあるまいな。悪いが、おれはそんな趣味に付き合うくらいなら死ぬことを選ばずぜ」

「ならば君は一命を取り留めたね、運がいい。なに、ぼくは見ての通り……」シャンティは手に持っていた巻物を見せた。「歴史やら物語やらが好きだね。つまり、ぼくは知りたいのさ、君の物語を……。とはいっても、君の出生時から語ってもらう気はない。いや、後々話してもらうかもしれないが……そんなに睨まないでくれないか？ うん、なに、まあ、で？ 聞かせてくれるかい？ 君が、ユルシュ姫と二人きりであそこにいた理由を」

シャンティがそこまで言うと、ギヤロップはいつも通りの無表情で彼を見つめた。ウイスカも少し興味があるようでそつと耳を澄ました。シャンティはギヤロップが何も言わないので、再度催促するように、そつと首を傾けた。「言ってくれないのかい」と。

ギヤロップはあごひげをさすりながら言う。

「理由つて……お前、聞かなくてもわかっているはずだぜ。おれは王族を守る軍人なんだぞ。あそこにいたのだから、あいつを逃がすのに良い道だと思つて選んだだけさ」

それは、定型文とも取れる発言で、それでもシャンティはがっかりすることもなく返した。

「あの道を選んだ理由はたぶん君の言つた通りだろうね。それでも君と彼女の関係はそうじゃないはずだよ」

「その巻物で読んでないのか？」ギヤロップはシャンティの手にある巻物を指さした。

「……君と彼女の関係はこれには載つてない」と言う言葉を、途中まで言つてシャンティは止めた。これは辛辣で卑劣な挑発ともとれ

る言葉だ。「いや……」

「ふん、本当さ」ギャロップの方も、シャンティの中でなんらかの自責の念が生まれたことを感じ取って、気のせいか彼を励ますように言った。「あいつとおれは何でもない。なんせ、王族と軍人だからな」

そう言った後、ギャロップは奇妙に清々しそうな顔つきになった。シャンティはハツとして、思わず巻物を握り締めた。その巻物の中には、王族と軍人の婚姻は認められていない、と書かれている。そしてシャンティは彼のその言葉を聞いて、顔つきを見て、知った。

この人は、まだ彼女に想いすら告げていないんだ。

残酷すぎる。と、彼は齒ぎしりした。さつきはああ言ったけれど、おそらくヒツパリオン王族は殺されるのだ。そして彼はこれから先、自分のその想いを、一生告げることでもできずに生きていくのだ。そう思うと、ついさつきまで存在すら知らなかったギャロップのための涙が、急に込み上げてきた。

シャンティが突如として泣き始めたのを見てウイスカは駆けよつた。彼は、シャンティがどういう考えの果てに泣きだしたのかは知らなかったが、それでも、自分が愛し育てたこの王子が泣くのはいつだって誰かのためだということを彼は誰よりも知っていた。ウイスカはギャロップの方を見た。彼はやはり無表情で、今はもうシャンティすら見ていなかった。

「シャンティ！」怒鳴り声が聞こえた。こうやって怒鳴り声でシャンティを呼ぶと共に現れるのは彼の兄のジャーニー一人しかない。彼は原っぱを全速力で駆けてきて、しくしくと泣く弟の元に馳せ参じた。ウイスカの方を向くと、やけに苛々しながら、怒りを隠しもせずに聞いた。「おい、どうした。何があつた。まさか……」

ジャーニーはギャロップの方を見た。ギャロップの方も彼を見かえず。

「まさか」つまらなそうに彼は言った。「勝手に泣きだした」

「ふん」ジャーニーの方もつまらなそうにそっぽを向いた。「そん

な、とこだらうな。……おい、んなことよりも、シャンティ。今回の件、決着がついたぞ」

「……何だつて？」シャンティはびっくりとした。潤む瞳をジャーニイに投げかける。「……それで？」

「王族は貴族階級に格下げ、同時に現王はサウルス国西部カバルス地域監督者任命。その他有力者もその地位の剥奪など軽めの刑罰で済み、軍人は……なんせ、末端の奴らばかりだからな、殺しても何の効果もない。……とはいっても、それを決める裁判はこれから行われるわけだから、小さなことは計画と変わってくると思うが」

「……驚いた」シャンティは立ちあがってジャーニイの肩を掴んだ。その顔にはもう涙は浮かんでいなかった。それどころか、晴れ晴れとした表情と眩しいばかりの瞳の輝きを見せていた。「父上たちはなんで、そんなに寛大な処置を？」

するとジャーニイは心底嫌そうな顔を浮かべ、本当に吐き捨てる様に言った。

「ジャクナの進言のせいさ……ジャクナが、ヒツパリオンの姫様に惚れたんだ。そうになると……姫様一人だけ残すわけにはいかないだろう？」シャンティは眉毛を八の字にして、我が耳を疑っているかのような表情をした。ジャーニイはそんな彼のことも見ずに続ける。「我が兄上、ジャクナ三世王太子はヒツパリオン・ユルシュを手に入れるために、より良き統治方法と、国内主力意見を無視するわけだ！ お笑いだぜ。父上もあんな馬鹿の言うことを聞くだなんて……全く、全く……」

ジャーニイはシャンティの手を払った。彼の機嫌の悪さは、兄であるジャクナの我が儘だけに端を発していないのはシャンティにはわかってはいたが、それでも今一番心配だったのはギャロップの様子だった。

彼はギャロップの顔が見られなかった。ずっと不機嫌そうにしてある兄の足元を見てそれをやり過ごそうとした。すると、後ろで彼の立ちあがる音がした。シャンティはすぐさま振り向いた。

「そうか、結婚が決まったか」ギャロツプはやっぱり無表情だった。「なら、お祝いを言つてやらんといかん」

二二五年。サウルス国、カバルス同盟国の戦争は講和が結ばれて終わった。カバルス戦役 と呼ばれることになるこの戦争の勝利により、サウルス国は新たな領土と良馬を大量に手に入れた。

前述しているが、再度言う。カバルス同盟国はサウルス国西部カバルス地域として独立国としての機能を失うことが決まり、その時持っていた領土を全てサウルス国のものとすると同時に、カバルス国の一地域となる。長い期間をかけてそのノウハウを蓄積してきた民主議会はいとも簡単に取り潰された。

サウルス国王太子（王位継承権第一位）ジャクナ三世はカバルス地域貴族ヒツパリオン・ユルシユを妃として迎え、元王都、現西部首都ヒツパリオンにて派手な祝言を行った。

サウルス軍はその一部をヒツパリオンに残すと帰路についた。手に入れた良馬や財貨や捕虜や奴隷……そして王太子の姫君を連れて戻ってきた彼らはセンチュリオンに凱旋帰国を果たし、彼らはシハルクの作った凱旋門を潜った。

帰国と共にシユラクはサウルス国内各地域の有力者を王都に招き、息子と妃の二度目になる祝言をあげさせた。集まってきた有力者たちは王太子の妃の美しさに驚いているようだった。

この時代の書物の中にこんな話が載っている。『「まさか、あんなに美しく高貴な乙女が蛮族たちの土地にいるなんて」と誰かが言うのと、それを聞いたある者は「まさか、あんな蛮族の女が高貴な王太子妃の地位にいるなんて」と言った。人々は哄笑して王太子の好色を笑った。』これは、小さな不和の現れで、次王になるであろうジャクナ三世への小さな不信感を証明する言葉だった。

3・シャンティとギャロップ (後書き)

上の画像はシャン太郎ですが、画像でけえ。

4・戦争の真ん中の軍人

> i32036—4057<

戦争の一年後、二二六年の秋。カバルスの各地では今でも小規模部族の反乱が起こっていたが、サウルス国全体で考えると平穏とも捉えることができた。

御年六十二歳おんとしにもなったシユラク王は王都にて、休養をとりながら、次の遠征のことを考えていた。彼はそろそろ王位継承をするべき頃合いだと考えながらもそれを決断できずにいた。彼は王位継承権第一位のジャクナのことを愛していたし、ジャクナはここまで見る限り戦争もそつなくこなし、政治の才能もあるようだった。しかしふとした瞬間の彼の浅慮がシユラク王を不安にさせるのだった。

現に独断で蛮族の姫を妃に迎えることを決め、その行為を是正するために他の王族を生かすことにした、そのことにだつて民衆たちは、今はもう目に見える形で不満を表し始めている。王都センチュリオン内では息子や親友や恋人をカバルス人に殺された人々が「カバルス人を王都から追い出せ」とふとした拍子に叫んでいる。それはまぎれもなく王太子妃に向けられたものである。

「ジャクナは……………。では誰なら？ 第二位のジャーニイや第三位のシャンティは？」と彼は王宮の政務室で独り自問した。「ジャーニイは貴族内での人気もあり、リーダーシップも取れる。戦史の研究にも余念がないし、カバルス戦役が終わつてからも熱っぽく騎兵の増員を語ってきて新しい物をとりいれようとする向上心もある。でも、自分のことに目が行き過ぎているせいか他の人をぞんざいに扱いつぎる。穏健派にはあまり良い印象を持たれていないようだ。それに反してシャンティは優しく温厚で、多くの臣下からも信頼を集めている。けれども、彼の優しさは平時には大きな才能だが、戦争、侵略、領地拡大を求めるサウルス国にはまだまだ不要だ。それでもシャンティなら今はもう反乱の兆しすら見えない南部グナトウ

スの良き領主、総督として多くの民からも信頼を集めるだろう」

シユラク王はこんなことを考えて、なんだか自分がずいぶん歳をとったことを感じた。

「悩んでいてもしょうがない。……気が付けば、私は六十二歳で、父上の亡くなった歳も越してしまっただが、私はまだ生きることができらるうさ。なあに、死ぬまでに決めればいい。ゆっくり考えよう。もし突然死んでしまったとしても、あの三人ならうまくやっていけるはずだ。そうだ、私も、三兄弟だったのだ……私たち兄弟も……」

そうやって、今回も結論を先延ばしにすることを決めると、すつと胸が軽くなつて、彼はすうすう息を立てながら昼寝を始めた。

ギヤロップはカバルス地域から派遣されたユルシユ姫近衛騎兵隊としてサウルス国に来ていた。とはいえ、サウルス国内の、しかも王都センチュリオンでは彼らの肩身は狭く、訓練一つするのに何度も嫌な思いをしなければならず、ギヤロップを除くカバルス騎兵の士気はいまいち高まらずにいた。

ギヤロップがむつつりしながら、王太子妃ユルシユのために新たに作られた離宮内をがに股でぶらついて……もとい、がに股でパトロールしていると、向こうの角の所から兵士たちの笑い声が聞こえてきた。ギヤロップは来たな、と思つてそこに立ち止った。やがて角を曲がってやってきたのはシャンティだった。彼は長く美しく艶のある豊かな黒髪を持った、鋭い目つききの女性を腕に抱えていた。彼女はシャンティの妻であり、名前をエレと言う。なんでも、すでに六年前も前、つまりはシャンティが十四歳のころから婚約をしていたのだそうで、三年前には結婚式もすませていたそうだ。

「ふん、シャンティ、また嫁を甘やかしているのか。ん？ 今回はどういう理由で、そのマダム……エレ様の足代わりになっているかね？」

ギヤロップが笑みを作りながら聞くとシャンティの腕の中にいる

エレが夫を手で制して、代わりに答えた。

「昨日は体形管理のために中庭を散歩しまして、そのせいで今日は筋肉痛ですの。足がぴくぴくして歩きにくいから、こうやって良人におぶってもらっているのですが……あら？ どうしました？ あなたは顔がぴくぴくしていますが、もしかして、あなたも筋肉痛ですか？ 慣れぬ笑顔にもう顔の筋肉が疲れましたの？」

「ははは、いえいえ、そうではありません。まあ、どこかが傷んでいるのは事実です。腹が痛いんですよ、腹が。どうもおれはあなたに会うとなんでか腹が痛くなってしまふ病でして、これをあなたの夫に聞きました所、それは精神的なダメージからくる病だ、と言われましてね。なんで、そんなものがあなたと会う時に顔を出すのか……いやはや、さっぱりわかりませんなあ」

「きつと、私の美しさにあてられてストレスを受けておいでなのね。可哀そうに」

「ははは、そうですか。あなたにも他人のことも思わう心がありましたか」

「わかりました？ 実は可哀そうだなんて思ってませんの、私。心根を申しますと、私はあなたのことは良人の持つ駄馬ルルディファイロと同じくらいの生き物だとは思ってないから……」

「ははは」と、シャンティは険悪な仲の二人の会話を中断するため無感情な風に笑った。「で、そろそろいいかい？ じゃあ、ギャロップ、ぼくはエレを義姉様の所に送ってくるよ。ふむ、二人とも言い残したことはないようだね？ それなら良い。まあ、ルルディファイロはれつきとした良馬だということを再認識はしておいてほしいけれどね」

シャンティは悲しそうに言うと言とギャロップの横を通り過ぎていった。

カバルス戦役でのカバルス人の勇猛さを聞いた多くの人々は、彼らが自分たちに復讐しに来るのではないかと思っている。時間と共にその恐怖や不信感徐徐に杞憂だったとわかり始めるが、戦役後

まだ一年ほどしかたっていないこの時には、依然として多くの人がカバルス人への不信感・不安感を抱いており、ギャロップが訓練一つに多くの嫌がらせを受けたのも人々のこのような感情が原因だった。

そんな中でシャンティとエレの夫婦は時々こうやってユルシユのもとに訪ねてきては、彼女の話し相手になってくれる稀有な存在だった。

少しすると、ぶらついている……もとい、パトロールしているギャロップの所にシャンティがやってきて彼を呼びとめた。

「やあ、君はまた、ぶらパトロールをしているのかい」シャンティは冷やかすような笑顔で言った。

「否や、パトロぶらつきールをしている。給料は市民の血税から出ている」

「ははは、ならばそのパトロぶらつきール……全力でやらなければ民に申し訳が立たないよ。さあ、一日に離宮を回る回数をもっと増やそうじゃないか」

彼はそう言うところに行くでもなく歩き始めた。ギャロップもそれに従って歩いきながら返す。

「馬鹿言うな。王太子妃の離宮がいつもドタバタしてるんじゃない、トランプばかり起こっているみたいで逆に外から文句を言われるだろう」

「ふうむ。だから君は、外からの評価をあげるために兵士たちには鎧と剣と槍の切っ先を磨くように言ってるんだね。全く頭のいいことだ。けれども、その工作もこの散歩の最中に考えついたものだろう？　ならば……ああ、頭がくらくらしてきた。人とはここまで矮小になれるものかい」

「まるでおれたちだけが悪いように言われるが、お前も十分に血税の無駄遣いをしているはずだと思うが？　駄馬ディファイ口の飯代とかな」

「駄馬ディファイ口……悪いが、ぼくはそんな名前の馬は飼っていい

ない」

「わからんのか、ルルディファイロのことを言ったんだぜ」

「わかってるよ」

「なんだ、ルルディファイロが駄馬だつてわかってたのか」

「わかつてる、つてのはそつちのことじゃない」

「ふうん」

シャンティとギャロップは、陽光が降り注ぐ離宮の中庭にある回廊に出ると、陰に隠れる様に柱にもたれかかった。柱と柱の間から光の一端が回廊内に差し込んでくる。サウルス地方の気温にならないギャロップは、マントを引き寄せて体をくるもうかと思つて、ちよいとマントに手を触れた。けれども止めた。それは、彼がまだ戦士の志を忘れておらず、こんな些細なことでも自分を律して自分を鍛えているのだ、とシャンティに思わせる仕草だった。

「この頃、不思議に思うことがある」ギャロップは無表情で切り出した。シャンティは真面目な話が来るのかと思つたが、そうではなかった。「お前はセンチリオンまでの帰路の間に、ユルシュのような貧乳が好きだと常々言っていたが、ところがどっこい、ふたを開けてみるとお前の妻は巨乳だった」

「ふん、君こそ馬やら牛やらと比較したりして、常々、女は巨乳がいいと言っているがね……ところがどっこい、君の好みは貧乳、スレンダータイプだ」

「お前はいつもそう言うけれど、おれはそんなことを言つた記憶はないぜ。大体、胸と言つのは母性の象徴であつて、それが少ない女というのは母性が少ないということだ」

「そんなことはない。昔、一時期ぼくの家庭教師をしてくれたいた嘶家の先生が胸は小さい方が知的な感じがして良い、と言つていたよ。まだ幼かつたばくもそれを聞いて、先生に対しての深い共感を覚えただ」

「つまりは……自分の妻は知的ではない、つて暗に言っているわけだけだな。おい、それはいつも自分を尻に敷く妻へのささやかな反

攻だ。お前風に言えば、そそそ、それは君の深層意識がそう言えと言ってるんだよお！」

「まさか、それはぼくの真似？ ……大体、彼女は十分に知的だよ。まあ、ぼくがプロポーズをした時の彼女は、もつと貧乳スレンダーだったがね」

筆まめ王子シャンティは多くの日記や書物を残している、と前述したが、彼に日記をつけることを勧めたのは家庭教師であり、侍従でもあるウイスカである。今でいう十年日記帳を二年ほどで埋め尽くすといわれる王子シャンティと、それに負けるとも劣らない侍従ウイスカの書いた書物があればこの年代のことは漏れなくわかるといわれたほど彼らの記述は膨大な量であり、また、日常で起こった数々の些細な出来事にもそれは及ぶ。

特に、ウイスカがシャンティ王子の教育の際に考えたこと、思ったことを書き記した「王育記」は近代でも教師諸君に読み継がれる名著であり、シャンティとエレの初期の性生活を密かに盗み見て書いたとされる「王子と魔女の逢瀬」も同様、近代でも紳士諸君に読み継がれる名著である。

さて、ここではこのような話は枝葉末節であるからして本題に戻る。

シャンティは日記を日課としているが、同時に多読家でもある。彼は、その作文のわかりやすさや読書によって得た多くの知識から王の直接の依頼をよく受けた。それには特定地域の文化の要約の時期もあり、この時代の女性の流行りの装飾品、はたまた過去の戦史のまとめ、などなど多様な依頼があった。そして、この時期のシャンティはカバルス戦役の克明な戦史を依頼されていた。

そのような資料は部下に頼めばいくらでも手に入るし、シユラク王は同様のことを書記官や従軍した武官・文官にも依頼していた。けれども彼らはどこまで言っても職業でそれをやっているわけだから、作成された資料の中には王への阿諛あいつ、つまり媚びやへつらいが散見され、ひどい時には、自分の印象を良くしたり、王の怒りを買

われないように「敵軍との遭遇戦、しかし自国軍は損害皆無」などと
言うありえない嘘を平気で書き記す。末端で起こった出来事がちゃ
んと通達されないようなことは、どこでも起こりうる。どんなに
規律正しい軍隊でも起こりうる。

シユラク王からしてみれば、そんな中でシャンティは王子の身分
であるおかげでそんな阿諛あゆをする心配はない安心できる存在で、元
来のオタク的な性質から緻密ちみつで詳細で真実味のある資料をも期待で
きた。

そのシャンティは今回の戦史を書くにあたって多くの資料を当た
り、カバルスの歴史の書をひっくり返し、戦役に参加したサウルス
兵、カバルス兵からの聞き取り調査をした。サウルス軍のたった作
戦は自国内の軍人に聞けば簡単にそれを知ることができるが、いか
せんカバルス軍のたった作戦は（戦場にいたシャンティですら）
それがどういふ作戦なのか不明瞭だった。元カバルス同盟国の王族、
貴族は「軍事に直接参加してはいないからわからない」の一点張り
であるし、戦役を生き延びたカバルス軍の末端の兵士もその作戦の
詳細は知らされておらず、西都ヒツパリオンにはその資料すら残さ
れていなかった。もともと、作戦などを紙に残す習慣はないようだ
った。作戦・戦術の全容を知っているはずの軍部上層部の人々は激
しい戦争の中で命を落としていて、調査は行き詰った。

シャンティは残された最後の望みと思って、ギャロップにそれを
聞くことにしていた。

「実は今」とシャンティはおずおずと切り出した。「カバルス戦役
の詳細な戦史を父上から依頼されているんだけど、カバルス軍のと
った作戦の詳細が分からない。君は……それを知らないだろうか？」
声に出して聞いてみると、シャンティはほっと胸のつかえが下り
たような気がした。ギャロップを見た。彼はいつもと全く変わらな
い無表情で、少し寒さに耐える様に身を強張らせる位の反応しかな
かった。彼は口を開いた。

「知ってる」そう言った彼の表情は暗く、沈んでいて、同時に何か

を決意している様にも見えた。シャンティは想定していなかった言葉にショックを受けた。否や、想定はしていた。いくらかある返答の一つとして待ち構えてはいた。けれども、彼は希望的観測として知らない、の言葉だけをずっと待っていたのだ。「知っているぜ」
シャンティは身を強張らせた。悪寒を感じながら、嫌だ、聞きたくない、と思った。秋風が彼の悪寒を強めた。寒さに耐えられず、彼は柱の陰から出て、ギャロップのいる柱の方へ数歩進んで日向に出た。

「あの戦術は トライゴン 三本の角戦術 と言う名前だ」ギャロップは穏やかな調子ですらすらといった。その最中もシャンティの心は止める、と叫んでいた。「不思議なことに、誰もなにも追求しなかったから言わなかったが、おれはあの戦争を指揮した將軍の一人だ。なあ、大体考えても見ろよ。おれの部族名は傭兵エウクス族として名高いエウクスなんだぜ。それにおれは部族の若き戦士にして、エウクス族長のトロットの嫡男だ。……戦争の真ん中にいないはずがない」
「けれども、君の名前の記録はない。どこにもないんだ」彼は調べ上げた事実を口にした。いまだ彼は、ギャロップは口から出まかせを言っているのだと信じていた。

「全軍総司令官たる大將軍の名はトロット。後方援護隊の將軍の名前もトロット。……ここまではあり得るがね、ところがどっこい、予備大隊の將軍名もトロットだ」ギャロップは丁寧な感じに説明を始める。「カバルスはこういうことを紙に残す習慣がないから、こちら辺は調べてもわからなかっただろうがね、後方援護主力隊と騎兵予備大隊は場所も役割も全く違う物だ。物理的に、この二つの指揮は同時にはできない」

「それで……」脳味噌と心臓が必死になって警告を発しているにもかかわらず、彼の勤勉な性質が彼に声を絞り出させた。それ以上言うな、まだ、引き返せるんだ。それ以上言うと、君は殺されてしまつかもしれない。「結局、君は何をしたんだ？」

「何をした？ 馬鹿な質問だ。何をしたも何も……第一、おれがあ

の作戦を立てた」

「この国は！」彼はついに叫んだ。眉を八の字にして、眉間にしわを作りながら説得するように叫んだ。「この国は人柱を求めている。兄の、ジャクナ三世の独断によってカバルスの王族や貴族たちは断罪されずに済んだ。軍人は殺されず、放逐ほうちやくされるだけで済んだ。戦役に従軍した我が友人のサウルス兵士たちは、大切な人を失った市民は、これに対して納得していない！汚物と腐葉土くちゆうどの入り混じる泥のような鬱憤の溜まった心をどうかして晴らしたいと、毎朝毎夜守護聖獣に願っている！」

「それがどうしたって？　はん、おれはカバルスの軍人だ。おれは、あの戦争に関して言えば、やることをやったまで、それだけだ。それは今だってそうだ。おれは今もカバルスの軍人としてカバルスの姫を守る職についている」

「……」ギャロップの言葉の深意を瞬時に理解したシャンティは、血の代わりにひやりとした液体が体中を駆け巡っているのを切に感じていた。この告白には愛すべき人を守る意味があると？「無神経で、無愛想で、不躰で、不真面目で……そのくせ態度呆れるほどの忠誠心。……じゃあ、君はユルシュ義姉様を守るために、義姉様への誹謗や中傷を止めるために、自分が人柱になろうつてのかい？　けれども、君が死んだってカバルス人へのそれは止まらないんじゃないのか？　いや、もっとひどいことになるかもしれない」「その時は……」ギャロップはすぐには次の言葉が継げなかった。それで、なんとかかんとか吐いた次の言葉も、いつも自信満々の彼からしてみればどこか頼りなさげで、弱々（よわよわ）しかった。

「まあ、後のことをお前に頼むとするか」

「ぼくに頼む？　ふん、本当は君が楽になりたいだけじゃないのか？　義姉おねえさま様の悲しむ姿を見たくないだけじゃないのか？　まあ、どうせこんなことをいっても、君はつまらなそうに笑うだけだろうね」「シャンティは首を振りながら答えた。「それにぼくの妻は義姉様のことを、珍しく気に入ってるんだ。君が死ぬと義姉様が悲しむ。義

姉様が悲しむとぼくの妻が不機嫌になる。それに……これが一番重要だがね………君が死ぬのはぼくも嫌だ」

「なに言ってる、お前は誰が死んでも嫌な感じを受けるんだろう？　なあお前、この離宮の現実が見えているか？　この国の現状が見えているか？　おいおい、知っているか、ここはどこもかしこも平和ばかりだぜ。こんなとこじゃあ、姫を守るのも遊びだ、軍人として戦争なんかは夢のまた夢。もう正直に言ってしまうおうか？　よし、言ってしまうおう、シャンティよ。おれはな、生きていても、どうせやることなんか無いのさ」戦争のできないつまらなさ………そこだけは彼の本当の心情をさらけ出しているようだった。「どうせなら、つまらないなりに、王都とそこに住む人々を守るカバルスの軍人として大功を立てて死にたい。まあ、つまりはそう言うことなんだ。ははは、おれは軍人だってことだ」

シャンティは言葉の通り、心底つまらなそうなギャロップを見て、一つのことを思いついた。

「ならば、軍人らしく振舞えばいい。軍人らしく生きればいい。軍人らしく行動を起こせばいい」シャンティは自分よりも一回り以上大きいギャロップに駆け寄って、彼の肩を掴みながら声を張り上げた。「軍人らしく馬に乗り、やりを突き、剣を振るい、血にまみれ、仲間と自分を叱咤し、鬨の声をあげ、傷つき、倒れ、立ち上がり……戦えばいい！　戦えばいい！　戦場はぼくが用意しよう！　君は、どう言うわけか、あの亡国の幻の將軍なんだろう？　ならばどんなひどい戦場でも、君が、君の言う通り、あの熾烈なカバルス軍の力を最大限にまで引き出す作戦を立てたというのなら、戦えるはずだ！　どんなに劣勢であろうとも勝利をもぎ取れるはずだ！」

「……」ギャロップの瞳に始めて、確かな光が宿った。それは名誉を得ようとする欲から来るものでもなく、愛する姫を助けることが出来る満足からのものでもなく、もつと原始的な、獣の本性から来る喜びにも似た感情だった。彼は子供のようにつずつずしながら聞いた。その声は純粹素朴そのものだ。「それで？」

どうすればいい？

その質問にシャンティは答えた。

「カバルス戦役、詳細を話してもらおう」

太陽はもう沈もうとしていた。離宮にさしこむ光の色合いは、赤みを増していた。段々と寒くなる気温の中で、彼らは心に熱を持ってこれから起こるであろう苦難の日々に奇妙な期待を抱いていた。

シャンティはこの日の日記にこう記している。

『思えば馬鹿な行動である。独裁的で独善的で利己的である。ぼくは、一人の友人と彼の愛する姫のために、ぼく自身が心底嫌った戦場を用意しようというのだ。彼が本当に亡国の策を立てた幻の將軍ならば、これから先、何人もの人々が虐殺にも見える方法で死ぬ。』

いや、間違えればギャロップすら死ぬかもしれない。ぼくすら……。それでも、それでも胸が高鳴るのだ。ぼくは間違っている。ぼくのこれは、戦士の心意気でもなければ、何でもない。では何なのだ？

これは、自分の思うまま、我が儘に周りを操れる、つまり王の感じる喜びかもしれない。いや、人知れずに世の中を操る宮廷官人の感じる喜びかもしれない。どちらにせよ、糞食らえだ。ぼくは、本当はどちらでもないのだ。王位も権力も。』

『……結局、これは何なんだろうか。この感情にはなんとという名があるのだろうか。』

『倒錯？ 惑乱？ それとも、もっと他の何か？』

4・戦争の真ん中の軍人（後書き）

画像はギャロプン。

岩明均さんが「ヘウレーカ」で書いたハンニバル＋若い時のカール・マルクスさん÷2な感じですよ。

それにしても、話はえー。

5・シャンティの近衛兵団

> i32071—4057<

王都センチュリオンから馬で三十分の所にサウルス軍の主な練兵場がある。シハルク前王がセンチュリオンの建設計画を立てたと同じ時にこの練兵場の場所を定めたので、名前はシハルク練兵場と言う。シハルク練兵場は緩やかな小高い丘がいくつかある平野の中にある。元々草原地帯だったけれども長年の度重なる訓練の結果、草はもう生えてはおらず、地面がむき出しになっていた。

二二六年の秋の昼頃、シハルク練兵場を使用しているのはシャンティを主とする近衛兵団だった。シャンティはその場にはおらず、隊長であるウイスカとその息子の髭なしシェイバスが兵団を取り仕切っていた。

近衛兵団は騎兵とも歩兵ともつかない軍団で、構成員は両方の訓練を受ける。左右方向転換、前方展開、即時密集隊形形成、密集のまま突撃、馬術の訓練をひとしきり練習した後によつと昼休みが訪れる。兵士たちはぐったりした感じで地面に腰を下ろした。地面の土埃もまだおさまらないうちに奴隷が兵士に昼ご飯を配りだす。二十五歳とまだ若く、働き盛りのシェイバスは固いパンを四つ五つ受け取ると、それを噛みちぎりながら父の下に歩み寄った。

「親父殿、少しいいか？」と彼が話しかけた時、ウイスカは古参の兵士とちよつとした打ち合わせをしていた。ウイスカはうん、と頷くと古参の兵士との会話を打ち切って相手に休むように言った。

「なんだ？ なにか問題点でも？」

「いや、近衛の方は……」大丈夫だよ、と彼は休む兵士たちを見た。「それよりも、王子のことだ。ここ最近例のカバルス人とずつと一緒にごしているそうじゃないか。親父殿も知つての通り、王都内ではカバルス人への不信感を高めている。いや、それと関わり合う人への不信感も、だ」

「それで？」 ウィスカは頬髯をさわさわしながら無関心な風に言った。

「おれは王子のことを考えていつてるんだ。一刻も早く王子を奴から引き離れた方が良い。いったいどんなことを吹き込まれるかわかったもんじゃない」

「何かと思えば……はつきり言おう。なんだかんだ言つて、お前が市民たち同様にカバルス人を恐れているだけじゃないか」

「……そうだ。そうですよ、親父殿。それでもそんなのは当たり前です」 シエイバスは大きく腕を左右に広げる、我慢できないというように振り回す。「おれたち、王子の近衛兵団はそれほど被害を受けていないがね、おれの友人はあのカバルスの戦争で大量に死んだ。友はカバルスの蛮人共に殺された。奴ら蛮人は劣勢になっても決して逃げなかつたし、それどころか逆におれたちの陣営に切り込んできた。奴らは何を考えているかわからない、何をするかわからない。そして、ひとたび何かを始めると、それは簡単に止めることはできない。何らかの事件が起こってしまったら、全ては後の祭りになってしまう。王子が奴の凶刃にかかって死んでしまったら取り戻すことはできない。親父殿は王子のことが大切じゃないのですか？」

「私は王子のことを誰よりも大切にしている！」 ウィスカは声を荒げた。「しかしギャロップ隊長を退けるのは、違う。シエイバス、それは王子のことを真に想っている者の発言ではないぞ」

「王子が現在納得するならば、近い未来に王子が死んでしまってもそれでいいのですか？ それこそ、違う。それは不忠だ、ただの甘やかしだ。我々は、王子のためならば、その王子にすら厳しくする必要がある！」 やがて、親子の争いに気がついた兵士たちが彼らを注視し始めた。それでも彼らはそれを止めようとはしなかった。シエイバスは続ける。「こんなことならば、あんな奴見つけなければよかつた。いや、見つけたとしても、そこで二人とも切つてしまえばよかつたんだ」

「シエイバス！ 私は」

「親父」シエイバスは父の言葉を遮って言った。目に熱を持った光を携えて、彼は真の忠臣の心意気で叫んだ。「おれは、愛すべきシヤンティ王子こそ次王にふさわしいと思っっている、王太子にふさわしいと思っっている。確かに、王子は侵略と征服を望むサウルス国には不要かもしれない。それでも、良いじゃないか、王子の代で侵略行為なんて止めればいい。これ以上何を望むのだ。我々は、元コミツセオ地方で現サウルス地方のこの大地の絶対的領主だ。もう一度言おう、これ以上何を望むのだ」

「お、お前は！ ……それは国に対しての」

「国とはなんだ、親父殿？ 親父殿、おれは王子と歳が近いから子供の頃よく話をした。王子は言ったんだ。国とはなんだ？ とね。

結局、我々はその質問に対する非の打ちどころのない答えなんて見つけられなかった。それでも、ある一つのそれに近い答えには辿り着いた。国富で、民貧し……そんなのは、糞食らえだつてな」シエイバスは幼い頃のことを思い出して、今にも泣きそうな様子で話を続ける。ウイスカはその勢いに押されて、何も返すことはできなかった。「今回のことなんて、まさにそれだ。国を豊かにするためにカバルスに進出して、多くの友を失った。愛する人を失った。それなのになんだ、手に入れたものはなんだ？ 馬と、姫だと？ おれたちはそんな者のために国に命を賭けたんじゃない！ 友はもう戻ってこない、カバルスの蛮人共に剣を突き立てられて絶命した愛する者は生き返らない！」

「なぜ……今こんな、こんなところで……」

「ずっと、思っていたんだ。そして、このことを言うのはどこでもよかったんだ。宮廷の賑やかな食事会でもよかったさ。守護聖獣の石像を飾った王都の大広場でもよかった。おれは、もう耐えられないんだ。王子と、底しれぬあの男が一緒にいるのが、見ていられないんだ。いつもひやひやしてるんだ。あの二人が一緒に廊下を渡っているのを居るたびに、心臓が冷たい血液を全身に送るんだ。……

……わかるだろ？ 大切なんだ……王子が、己の身以上に。あんだ

だって同じはずだ、だのに……」ついにシェイバスは歯ぎしりしながら、怒りの形相で泣きだした。この勇猛果敢な男が、カバルス戦役の最中でもずつと王子の側にいて、彼を守っていたこの男が、こんなに簡単に泣きだすなどと、父は思わなかった。「なぜ、何もしないんだ。親父」

はつとして気が付けば親子の周りに近衛兵団が集まっていて、みんなして神妙な顔をしていた。何百個もの瞳が、何かを懇願するような潤んだ目でウイスカを見ていた。彼らもシェイバスと同じ気持ちなのは一目で瞭然だった。

「……」それでもウイスカは何も返さなかった。彼は、シェイバスの言うこともちゃんと理解していた。何か対策を立てようとしたこともあったし、現にそれを実行しようと思ったこともある。けれど、あの冷徹な無表情を浮かべるだけのギャロップの横で、王子が今まで見たことのない種類の笑顔を浮かべるのを見て、彼はそれを二度、三度と諦めるのだ。

結局、その日の訓練は昼で終わりになった。

ウイスカは離宮に帰ると冷水で体を洗って、さっぱりした後、離宮内の王子の部屋に向かった。今の時間ならば本を読んでいるところだろう、と彼は考えながら、ギャロップのことを話す決心をつけながら歩いた。

王子の部屋の前で彼は、少し立ち止まって部屋の中の音に耳をすきました。中から、話し声が聞こえてきた。王子は独りではない。ウイスカの脳裏にギャロップの顔が浮かび上がった。ごくりと唾を呑んだ。

とんとん、と二回、木製のドアをノックすると、中から「ウイスカだね。どうぞ、入ってくれ」と王子の快活な声が聞こえてきた。ウイスカは顔に汗を浮かべながらそろりと中に入った。

「よくわかったな」

当たり前のように部屋の中にいたギャロップが言った。

「君は足音でどの馬が来たのかわかると言っていたじゃないか。ぼくはノックで誰なのかわかるのさ」と王子は書き物をしながら答えた。

二人は小さなテーブルを間にはさんで、向かい合うように座っていた。夕方と言う時刻のせいで窓からは太陽の光が少ししか差し込んでおらず、テーブルの真ん中には灯心が灯してあった。ウイスカは二人を見て、顔を強張らせた。

「何をしておられるのですか？」とウイスカが訊くと、シャンティは見てくれ、とばかりに書き物を指さした。ウイスカはギャロップに意識を集中しながら、シャンティがしきりに何かを書きこんでいる紙製の紙を覗いた。「……戦争の……」

「そう、カバルスの戦術。三本の角戦術トライコーンの全貌さ」そう言いながらもシャンティは書くことは止めなかった。紙の中には図や説明文がいっぱい書きこまれている。少し視線をはずしてみると、他にも注釈文を書きこんだ物があった。「ウイスカ、ぼくはもう大体覚えた。君にも説明してあげようか？ とはいっても、ギャロップに説明してもらった方が幾分手っ取り早いけどね」

ウイスカは、シャンティがシユラク王の依頼でカバルス戦役の詳細な戦史を作成しているのは知っていたが、ギャロップがその協力者だったとは知らなかった。

その男と手を切りなさい、と言えば、王子は何と言うだろうか。

「ウイスカ」ウイスカが考え事をしている所に、シャンティがいつもと変わらない穏やかさで話しかけた。ウイスカが改めてシャンティを見た時、彼はペンを置き、頬杖をついていた。「ぼくとギャロップはこれから先、君と近衛兵団に迷惑をかけるかもしれない。それは大体において、ギャロップのせいなんだけれども……」そこで彼は意地悪な笑顔をギャロップに向けた。相手はつまらなそうに半目で睨み返した。「ふふ、それでもどうか、ギャロップの奴を恨まないでほしい。ぼくはね、ウイスカ。ぼくは、自分でちゃんと考えてやってるんだよ？ 自分で選んだ道を歩んでいるんだ。ウイスカ

たちを巻き込むのだって、了承してやってるんだ。だからね、恨むならばどうか、ぼくを恨んでほしい」

「……王子は、なにをしようとしているのですか？」

「戦うのさ、カバルス人と。そして、彼らが、ぼくらと大して変わらなただの人間でしかないことを証明するんだ。怖がることはないんだと証明するんだ」

「それだけで……大丈夫でしょうか」

「なに」シャンティは今までにない退廃的な、けれどもどこか整った笑顔を見せた。頭を揺らして、サラサラの髪を揺らしながら優しげな目つきを彼に向ける。「恐怖を取り除けば後は大丈夫。だって、怖いから近づけないんだ」

ああ、恨みようがないじゃないか。と、ウイスカは脱力感に侵されながら思った。あなたの笑顔はどんな意味を持っていたとしても、いつもそうやって人々に底しれない穏やかさを振りまくのだ。安心感を振りまくのだ。

「恐怖を取り除いて、近づけるようになったら大丈夫なんだよ」ペンをいじりながらシャンティは続ける。「だって、嫌いな人とはついつい白熱した討論をして、いつの間にか仲良くなっちゃうなんてよくあることだから」

「なるほど」とギヤロップが唐突に言った。「そうになると、おれは今、お前のことが死ぬほど嫌いだけど、いつかは友人関係になるかもしれないわけか。残念だけど、ありえないなあ……もし、そんな風になるんなら、おれは駄馬ディファイロに蹴られて自害する方を選ぶね」

「それじゃあ、自害にはならないけどね……まあ、ぼくも、我が愛馬に亡国の幻将を討ちとったという戦功がつくことは嬉しいがね。

……ウイスカ？ どうかした？」

「いえ」ウイスカは静かに首を振った。「何でもありません」

ウイスカは結局、今回も彼を説得することを諦めた。で、伏せた眼でテーブルの上の紙を見た。それは王子らしい精緻な文章とわか

りやすい言葉でつづらられていて、どこに出しても恥ずかしくない出来の報告書だった。

ウイスカはその報告書と王子を交互に見て、なんだか感傷的になってしまった。この日の日記に、ウイスカは自分の心情を俯瞰して分析した文章を書き記している。

『その紙を見た時、私は思った。おお、これが私の育てた王子だ。私の息子にして、私の宝だ。そう、宝なのだ。私がせっせ、せっせと磨き上げた玉のような彼は、いつか、私の知らない世界を知って私の手の届かない所に行ってしまう。よくよく今までの自分の悩みを考えてみると、つまるところ、私はそれが恐ろしかったのだ。あの男に私の愛する王子が盗られてしまうのが怖かったのだ。』

この頃からウイスカの日記にはギャロップに関する記述が多くなっていく。それは、自分の息子の親友としてその人間が値するのかわを確認しようとする父親のそれであった。これは、後に少しの困惑を生む。

カバルスに関する詳細な戦史が完成するのはその一週間後である。これはシャンティとウイスカの日記にも書かれており、間違いはないことである。けれども、シャンティがそれを父に献上したのは冬の終わり頃である。

5・シャンティの近衛兵団（後書き）

画像はどこの隊長です。

絵は基本的に下手ですが、その中でも比較的につまみほづの絵は出戻くしたので、ここからは下がり調子です。

6・星を掴む

> i32118—4057<

二二六年冬。年末始までまだまだ時間があつた。その時期、センチユリオンの離宮がにわか慌ただしくなつていた。それを不思議そうに見ていたのはユルシュだった。彼女は、馬へのリスペクトのもりなのか、クリーム色の長髪を結んでポニーテールを作つていた。彼女が顔をふいと動かすと、滑らかな髪の毛がさらさらと揺れる。

「なんででしょうか？ 最近、侍女たちも忙しそうですけど」ユルシュはテーブルを挟んで目の前に座つてゐるエレに不思議そうに尋ねた。「知つていますか？」

肌触りの良い絹の服を着たエレはがぶがぶと葡萄酒を飲みながら言つた。

「たしか、有名な……八十歳にもなる哲学の先生が東部ヘドロケラス地域から来るとか何とか……私の良人も目をキラキラさせながら熱っぽくその先生の聡明さを私に語りかけてきますの。まったく……哲学なんて興味ないの、といくら私が言つても、良人はおっとしつこく哲学を話してくるんです。きつと私を洗脳しようとしてますのよ」
「ふふ」ユルシュはエレを羨ましく思つた。彼女は、エレほど自由で我が儘な女性はここにくるまで見たことがなく、少しの憧れを持つてエレと接してゐた。彼女はエレの性格を端的に表わしている二人の婚約の話しがとても好きで、直接本人の口からは聞いたことがないので、その話をするようにせがむのだがエレは決してしない。
その話はこんなである。

シャンティはご存じの通り、サウルス国の王の第三子である。対してエレは東部ヘドロケラス地域の有力貴族の娘であり、二人は同じ歳だった。つまり二人はある程度、政略結婚のための一組のカップルとして扱われる立場にあつた。だからシャンティは結婚相手の一人としてエレの名前を何度か聞いていた。

エレの方は昔から同年代の他の子供と比べ達観しているところがあり、自分がお家を保つための政略結婚の道具として使われる運命にあることを知っていて、同時に色々なことを諦めていた。

シャンティの少年時代の日記を見ると結婚に関する記述はほとんどない。彼はときどき『明日は許嫁とされる女性の一人と会うことになっている。』と書いていくくらいであり、そのことにはあまり興味がなかったのだろう。エレと会う前日の日記も同じ温度で書かれていて、彼女と会ったその日の日記と見比べてみると、同じ人間が書いたのかと思うくらい文体の勢いが違う。

二人が初めて会ったのは竜の聖獣を祈り奉る祝祭日だった。王都センチュリオンの広場では芸人たちが軽業や見世物を催したりしていた。屋台の数も通常日より何倍も多く、どここの店も競って自分の店を派手に飾り立てた。

エレは貴族である両親や兄弟と一緒に王都に訪れており、王宮内で行われる見世物大会の席でシャンティに出会った。エレは自分の婿となるかもしれない人としてシャンティとジャーニイを紹介された。

エレは二人にそれほど興味はなかった。もしかしたら、この人と結婚するかもしれないのかと思ったくらいである。と同時に、王族と結婚できたら贅沢のし放題だわ、などつまらないことを考えながら王宮広場で行われる剣闘大会を眺めていた。けれどもシャンティの方は一目見て彼女にぞっこんだったようで、鼻息を荒くしながら、剣闘大会に見入るジャーニイにしつこく彼女の美しさを論じていたそうである。彼はちらちらと彼女に視線を送りながら自分のこの想いに気が付いてくれないかと念じたりもしていた。

エレとその家族が一週間そこら王都に滞在する間にシャンティの淡い想いは彼女にばれていた。エレは自分のことを熱っぽく見る視線に気がついて、王族の身分でそうやって心の底から一人の女性を想ってくれる事実は彼女からしても嬉しいはずなのに、なんとなくツンとつれない態度を返してしまうのだった。

一週間後。彼女は東部ヘドロケラス地域の首都であるアナポリスに帰る時、見送りに来た彼の顔が呆れるくらいみつともないのを見て、この人と一緒にいたいと母性的な愛情を感じた。けれども、やっぱりその想いを表に出すことはできなかった。

その後二年間のシャンティの日記はことあるごとにエレのことを書いている。そして、エレが十四歳の誕生日を迎え、シャンティたちがそれを祝いに東都アナポリスに向かった時には、すでに二人の結婚は決まっていた。

シャンティは「王子の妻は部屋で待っているよ」と相手方の両親から聞かされていたので、できる限りの身支度を整えて、色鮮やかな花束を胸に抱き部屋に会いにいった。きつと、昔のようにツンとした態度でいるのだろうと彼は思った。彼は震える手でノックを二回し、中から返事が返ってくると二回深呼吸してから部屋に入った。

エレは果たしてツンとしていたが、その顔には明らかな怒気が含まれているのがわかった。シャンティはおろおろとして何が不満だったのかを尋ねてみたが、それはわからなかった。

その夜、二人のことを祝してパーティーが開かれた。速筆を得意とする画家が呼ばれ、二人は数十分並んで座っていたが、画家が「怖れ多くも申し上げますが……姫様、もつとにこやかにして頂けませんでしょうか」と言うとエレは顔を真っ赤にして立ちあがった。

大股の早歩きで、猛然とどこかに向かって行く新妻をシャンティは真っ青な顔で追いかけて、ついにその腕を捕まえると、エレはくると回転しながら開いている方の手でシャンティの頬を打った。

「あなたは卑怯よ」エレはすさまじい剣幕で叫んだ。「こつやつて、権力を使わなければ一人の女も手に入れることはできないの？」

「すまない」大勢の来賓客が見守る中、シャンティはおろおろして今にも泣き出しそうな顔をして、床に膝をつきながら彼女に震える声で謝った。おそらく、一番おろおろしていたのはエレの両親であろうことは、誰にも簡単にわかる。「すまない。ぼくのが嫌いなら、この婚約を今からでも破棄してもかまわない。ぼくは、君た

ちは何も悪くないことをちゃんとお父様に伝えるから……」

「そんなことを言つてない！ 私はこう言ったのです」とエレは床にうなだれるシャンティに言った。「私を愛し、私を欲しているならば、ちゃんと、私と面を突き合わせてそう言いなさい。私は、あなたの口からプロポーズの言葉を聞くまでは、あなたの妻になるつもりはありません。この、意気地無し！」

そこまで聞いてやっと彼はエレの怒りの原因を理解して、「ごしごしと腕で涙を拭くと、今度はさつきとは違う意味合いで震える声を出した。

「ヘドロケラス・アナポ……」

「長たらしい名前などいりません。どうせ変わるのだから」

「は、はい。……エレ」とシャンティは彼女の名前を口にしてすぐに顔を真っ赤にした。「ぼくと結婚してほしい」

彼が地面に片膝をついたまま片手を差し出すと、エレはやっと機嫌を直して、花嫁の浮かべる優しげで幸福に満ちた顔を浮かべながら、良人の手をとった。それを見た来賓客は面白い物が見れたと喝采し、指笛を鳴らし、結婚する兩人を祝福した。この話は瞬く間に広がり、男性が片膝をつけて女性にプロポーズするのも流行となった。

ユルシユはその話を思い出し、くすくすと笑いだした。エレはおかしなものでも見るような目で彼女を見て不機嫌そうに「どうしたんですか？」と尋ねた。

「いいえ、何でもありません」とユルシユは口元を覆った。「それよりも、今日こそは御二人の婚約の話をしてもらいます」

「ふん、またそれですか？」エレは蛇のような目でじろりとユルシユを睨みつけた。「そこまでしつこく聞いてくるということは、もうどこかで聞いているんですよ、絶対にしませんわ」

皺だらけの哲学者、アストロラーボンが王都にやってくる王都はまるで兵士たちが凱旋帰国した時のような壮大な歓迎式典を行っ

た。髭が胸元まで伸びたアストロラーボンの前を音楽隊が歩き、彼は王様然とみこしに担がれて王宮までやってきた。

八十歳を超えている彼は現サウルス王シユラクとその兄弟の家庭教師だった男であり、王太子ジャクナや双子王子も一時期彼から哲学を習っている。彼は今でも時々教壇に立つと、子供のようにはしやぎながら生徒たちと口論するらしい。

けれども十年以上前から何かを著すことは止めているようで、生徒たちが聞いてもその理由は答えなかった。

アストロラーボンを乗せたみこしが王宮の中に入ってくると、そこには彼から教えを受けたことのある人々がずらずらりと並んでいた。皆、シユラク王がアストロラーボンのために集めた人々であり、そのシユラク王は赤い毛氈の上に立って彼を待っていた。赤い毛氈は王宮の入り口からその奥まで続いている。アストロラーボンは従者に手伝ってもらって毛氈の上に足を下ろした。

「先生！」と堪え切れなくなったシユラク王は子供の頃のように恩師に抱きついた。アストロラーボンの老体は彼の知らない間に細っていたけれど、それでも彼は力いっぱい敬愛する哲学者を抱きしめた。「ああ、先生。こんなにお瘦せになつて」

「おいおい、先生が死んでしまつ」それを見ていた、燃えるような赤色の毛のジャクナ三世は隣で感動して泣いているシャンティに語りかけた。「久しぶりに会つたというのに、すぐにさよなら、なんてことになつてしまふ。なあ、シャンティ。しかし、こつ見てみると父上もまだまだ若いな」

「まるで、早く死んでほしいって風に聞こえる言葉ですね」シャンティの隣、ジャクナとは反対方向にいたジャーニイが喧嘩口調で言った。彼はジャクナの方を全く見ていない。「いや、あなたのことだ。もちろんそのつもりで言つたんでしょ？」

「あいも変わらず、無根拠・無意味な邪推が好きだな」ジャクナは余裕の表情でジャーニイを見つめている。「大体、こんな所でおれ

を貶めたつてしょうがないだろ？ おれは、お前が何のためにそんなことを言うのか全くわからないよ。なあ、シャンティ」

「はあ、まあ」間に挟まれていいるシャンティは、今日くらいは仲良くできないんだらうか、と辟易していた。

ジャクナ三世とジャーニイの兄弟仲はすこぶる悪かった。ジャーニイはほとんど直接的にジャクナに悪言を言っているが、ジャクナの方は仕返しとばかりにジャーニイにつまらない仕事を回したりすることで間接的にジャーニイをいじめている。シャンティも日記内で『どちらが始めにどちらを嫌いになったのかがわからないくらいずっと仲が悪い。』と書いており、これによつて派閥までできるほどだった。

王太子と言う地位を持つジャクナの派閥は強力なものだったが、それはほとんど「王太子」と言う地位によつて築かれているもので、その派閥内の誰もがジャクナの才能には無関心だった。ある意味では彼の基盤は固く、ある意味では脆い物とも言えた。

ジャーニイの派閥も少数ではない。ジャーニイは色々な事柄を革新することを好んでおり、その新進気鋭な感じに惹かれた者がジャーニイの派閥に入った。才覚のみの話をすればジャーニイは申し分なかったし、日々の精進も惜しまないストイックなところがあつたけれども生まれ持った高いプライドが庶民や下賤の者と付き合うことを認められないようで、また、彼は能力のない人間も嫌いで、自分の下につこうとする者は常に能力を確かめて取捨選択していた。

そして、そのジャーニイの派閥はシャンティの持つ派閥よりも少数のものだった。もつとも、シャンティは派閥などを作るつもりはなかった。彼は常々父にも「王位などいらぬ」と言っているくらいだから、彼を取り巻く人々は彼に王位を期待しているわけではない。もちろん、それを期待している者はいらぬ。けれどそれは他の派閥から漏れてしまつて仕方なくシャンティを取り巻いているだけにすぎず、彼の派閥内でもそんなものは少数しかない。大多数はただ純真な彼の心根に惹かれた者たちで、この時代この国で穏健派と

呼ばれる者の多くは彼を指示していた。

もともとジャーニイを指示するとシャンティを指示するのでは、根本的に身に降りかかる危機の大きさが違う。

ジャーニイとジャクナは仲が悪いと言ったわけだが、ジャーニイ派に属するとなると、当然ジャクナ派とは相容れぬことになる。その逆も然りである。もしジャクナが王位を継承したならば、ジャクナはジャーニイとその一派を排斥するであろう。これも、その逆も然りである。しかしシャンティはジャーニイともジャクナともうまく付き合っていて、シャンティ派に属するということは、どちらが王権をとっても排斥される危機は無いということである。とはいえ、リスクが少ない分、手に入れるリターンも少ない。もともと、シャンティ派はリターンを期待していない人々しかいないけれども……。ジャクナ、ジャーニイ、シャンティ「ジャクナとジャーニイが火花を散らし合っている」とシユラクが彼らを呼びよせる声があった。三人は各々歩み出てアストロラーボンに挨拶をした。「先生、私……いや、我らが息子たちです。大きくなったでしょう?」

「ん?」アストロラーボンは耳が遠いらしく、手を耳に当ててもう一度言ってくれと催促した。シユラク王が同じことを言うと、彼は三人を見渡して、うんうんと頷いた。「でかくなつた、でかくなつた。皆の話はよく聞いている。ジャクナはカバルス戦役では父と同等の戦力を良く操った。そうだ、カバルスの姫様を妃としたらしいな。おめでとう。ジニーはカバルス戦役初期に兵站で功を為したらしいな。お前の才は戦争には欠かせない。シャンティは……毎月長い手紙を送ってくる」

「え? ぼくもちゃんと働いたはずですが」シャンティは自分も褒められると思っていたので驚いたように、首を前に出した。アストロラーボンは今回も聞こえなかったのか、ん? と耳に手をやってので彼は「何でもありません」と返した。

「ははは、嘘じゃ、嘘じゃあ。カバルス戦役でジャクナと共に殿しんがり軍の最後尾)で行った防御のことも聞いてるし……」アストロラー

ボンはいたずらっぽく哄笑するとシャンティにウィンクした。「君の毎月の長い手紙はここ最近のつまらん生活の中で一番の楽しみじや。この前の新料理開発の失敗談などは、本当におかしかった！」
シャンティは頬を染めて恥ずかしそうに頭を掻いた。二人の兄は「思わぬ伏兵、シャンティの勝ちだな」とお互いに目配せをした。
それからアストロラーボンは昔の教え子に囲まれながらのろのろと王宮内に入った。王宮内ではすでに豪勢な料理が待機しており、まだ手もつけていないのに、続々と追加料理が運ばれてきた。教え子たちはそれぞれに好きな席につき、お互いの近況や学問の成果、新しく発売された本の批評をしあった。

宴もたけなわだった時はシユラク王が裸踊りを踊ったりもしたが、それから数時間後、夜の闇も大分深く濃くなつた頃には、葡萄酒などの飲み過ぎのせいで起きている者はほとんどいなかった。シャンティも例外ではなかったが、彼は肩を誰かに揺らされているのがついて目を覚ました。肩の方を見ると、寝ぼけ眼のアストロラーボンがいて、彼は「おしっこ」と一言だけ言った。
シャンティは気怠い体けだるにムチ打って彼を支えながら歩いた。その時に宴場を見渡してみたが、ほとんどの者はダウンしていた。父のシユラク王やジャクナの姿はなくおそらく自室に運ばれて言ったのだらうと思われた。

長い廊下をえっちらおっちら歩いて何とかアストロラーボンの膀胱爆発の前にトイレについた。この時代の小使用トイレは整備された壁のすぐ下に細い水道が流れているだけであり、その横に腰くらの高さの水溜があり、小便をすると水溜から柄杓で水を救って、壁の汚れた所を洗い落とす、と言うものだった。

アストロラーボンにつれだつて小便をしたシャンティは自分の壁と先生の壁を洗い落とす。アストロラーボンは先にトイレを出ようとすでに歩き出していたが、外から人が入ってきて彼らは鉢合わせした。

「巨軀、短髪みぢかみの黒髪くろかみに白髪しろかみ。ギャロップ……」アストロラーボンが

そんな言葉を言ったので、シャンティはトイレの入り口の方を見た。ギャロップがいた。

「誰だ？」ギャロップはアストロラーボンを前にして、暗闇で目を凝らしているようだった。「……おれは、あんたなんぞ知らんぞ。おそろくな」

「わしは知つとる。ほれ、あそこにいるわしの教え子が君のことをよく手紙に書いている」アストロラーボンは親指でシャンティを指さした。「君はとても面白い奴だと聞いた」

「そこにいるのはシャンティか？」ギャロップが鋭い目つきで（ただ目を凝らしていただけ）そう聞くので、シャンティは返事をした。すると彼はぶつぶつ言いながら小便を始めた。「まったく、いらんことをおれの知らん奴に書いて送つて。誰だこいつは？ ……」

ああ、シャンティ、おれの分も流しておいてくれ」

「……ああ、はいはい」シャンティは何か理不尽だ、と思いつながらも言われた通りにギャロップの小便を流した。「その人のことを話したことはあるはずだよ？ ぼくの先生で、哲学者のアストロラーボン先生さ。……ところで、なんで君はこんなところにいるんだい？」

「なんで、つて……排泄をせん人間がいるならここに連れて来てもらいたいもんだ」

「排泄をしない人間がもしいるならトイレの存在意義を訝しく思うだろうね。いやいや」そういうことじゃない、とシャンティは首を振る。「ぼくは、なぜトイレにいるんだってことを聞いたんじゃないってば。なんで王宮にいるんだ？ 君はユルシユ義姉様の近衛兵だろう？ なんで離宮を離れている？」

「ジャクナが姫をここに呼んだからさ」

「ああ……」シャンティはいらんことを聞いてしまった、と思つて自責の念にとらわれた。「……そうか」

トイレを出た所でアストロラーボンはギャロップに話しかけた。

「君はカバルスの軍人らしいね」

「ああ、そうだ」ギャロツプは仕方ない、相手をするかという感じに答えを返した。「あんたは何をどこまで知ってる？」

「ギャロツプは軍人である。と言うことは知っておる」アストロラーボンは中庭に二人を導いて、そこにあつた椅子の上に腰を下ろした。その時、彼の足元がすかに震えていたのを見たシャンティは羽織っていたマントを脱いでアストロラーボンの肩にかけた。「…

あ、そういえば。カバルスには奴隷と言うものが無いそうじゃな。シャンティはそのことで君に手ひどくやられたと手紙に書いていた」
「ああ、そのことか。そのことをコイツに言つと」とギャロツプはシャンティを見た。「コイツは……ででで、でも、サウルス国は法律により奴隷への給料を定められており、奴隷はそれを貯めてえ、売られた時と同額で自分を買つことができるんだい！ の一点張りだ」

「それ、誰のまね？ ねえ……」シャンティはムスツとしながらギャロツプを睨みつけた。アストロラーボンを見てみれば、彼は愉快そうに笑っていた。「先生、ぼくは彼の言ったようなことだけを言ってるわけじゃありません。あの言葉に辿り着くには紆余曲折がある……というよりも、彼はあの言葉に辿り着くように誘導するんです。そしてぼくがさっきのセリフを言つと彼は「シャンティはのどを抑えて、んん、と咳をした。次には奇妙に野太い声を出した。「またそれか、それは、聞き飽きたぜ！ ぬはは、ぬはは」

「おい、お前、喧嘩売つてんのか？」ギャロツプは肩を張ってシャンティに詰め寄つた。シャンティは「な、なんだよお」としか返せていない。

「ギャロツプ、奴隷は悪いことかね？」アストロラーボンは呟いた。「……」ギャロツプは少し表情を変えて、すぐに元の無表情に戻してから反論を開始した。「カバルスでは……人とはもともと自由を約束されているものだ。奴隷はその自由を全て奪われている者だ」

「しかし奴隷があるおかげでこの世はうまく回っている。主人は身の回りの雑多な小事をしなくて済み、仕事に励むことができる。学

者は学問について考える時間が増える。頭のいい者や能力のある者が多くの時間を使えばその分だけ国の利益になる」

「それは違います」ここでシャンティが入ってきた。「先生の言い草では、奴隷は能力が低いから、彼らの時間をもつと能力の高い人々に渡すべきだ、と言う風に取れます。しかし奴隷だって学問をすれば主人と同等の能力を得られるかもしれません」

「君は根本的なことを忘れていないか？ 奴隷と言うものはどのように調達される？ 戦争の敗北国の人々が連れ去られることもある。未発達村落の人々が連れ去られることもある。彼らはつまり、一様に能力がなかったから奴隷になったのだと思わないかい。え？

戦争に負けたのは軍人だ？ たしかにそうだ。でも、彼らの胃を満たすのは農民、武器の生産や発展を成し遂げるのは鍛冶屋、文化を育み知識を蓄えよるずに役立っているのは学者……戦争とは国と国との戦いだ。民の能力同士がぶつかり合っているのだ。負けた方はやはり……能力がなかったということになる」

「しかし……」ギャロップが言う。「能力がない奴は奴隷にした方が良い、といったが……戦争で負けた国から連れていかれる奴隷には能力が高い奴もいる。現にカバルスの技術者は能力が高いが奴隷にされた。あんたの理論を曲解すると、これら技術者カバルス人を奴隷にするよりも、そこいら辺の馬鹿な貴族を奴隷にした方がいくらかましじゃないか」

「たしかにそうだ。しまったな、論理が破られてしまった」

「……それで？ ふん、まさか、これで終わりってわけじゃないだろう、大先生。あんたのことはシャンティから聞いてるぜ。高名な先生らしいじゃないか。そんな奴がこんな問答で詰まるってんじや、この世はいまだ暗黒の世紀だ」

「うむ、しかし、さっきの論理は破られたが、あれも一概に間違いとは言えんことを覚えておいてほしいがねえ」アストローボンは顔にいつぱい皺を作って嬉しそうにしている。「実は能力の高い者を奴隷にする利益はある。例えば、技術者奴隷を買い、安値で剣を

作らせる。その剣の売値は利益が出る様に奴隷の経費よりも高くする。そうやって利益を溜めていくと、もう一人奴隷が買える。奴隷はどんどん増えていく。それと同時に、一度に作ることでできる剣の量も増えていくじゃろう？」

「いわゆるところの拡大再生産である。」

「それは、奴隷じゃなくてもやれることだ。普通に職人を雇ってもな」

「職人を雇うのでは駄目だ。金がかかり過ぎる。そうなると利益が少なくなり、新しい職人を雇う金を貯めるのにも長い時間がかかる。それとも……カバルスの職人は奴隷よりも安値で働いてくれるのね？」

「……しかし！」と、ギャロップは言いだしたものの、次の言葉が継げなかった。

「そう言えば」とシャンティが感慨深げに口を挟む。「ぼくは同じような会話を昔、先生としたことがある」

それを聞くと、ギャロップはきよとしたような顔つきになり、対してアストロラーポンは嬉しそうに髭を撫で始めた。

「じゃあ」ギャロップは苦虫を噛み潰したような顔つきをした。「奴隷は社会の発展のスピードを促進する。奴隷を使用したほうが良い……ってことが社会の真理なのか？」

「それは違うよ」シャンティは真面目な瞳をきらめかせる。「先生、ぼくも昔はギャロップと同じように思い至って、世の中の不公平さを呪ったりもした。しかし、あくまでもさっきのことは一つの真実に過ぎない。ぼくは考えたんだ。生産を増やす要素は人間の数だけだろうかと。違う、違うんだ。創作に使用する道具の発展も、新技術の誕生も、生産を画期的に増やす。先生、ギャロップ。ぼくは調べたんだ、数少ない資料をひっくり返して。道具発展や技術誕生の歴史を振り返れば、大体において道具の改良や技術の考案なんかは職人がもたらすものだ。いや、奴隷もその二つを発展させたことはある。けれど、職人と奴隷を比較すれば、職人の方が相対的にも絶

対的にも発展や発明の数は多い。奴隷に比べ、職人と言える人口の方が少ないにもかかわらず」

「そうじゃ！」アストロラーボンは人差し指を立てた。「それは、おそらく心の要素が大きく問題しているのだ。自分の望むことをすると人は最大限の力を発揮できる。なあ、シャンティよ。おい、ギャロップよ。導き出した真実はあくまで一つの真実に過ぎない。この世界はたった一つの視点では解明できない。単純な考えでは看破できない。目に見えるものや、目に見えないもの。数字に表わせるもの、表わせないもの。多種多様の複雑なモノが合わさって複雑な一つを作り、それを原料としてまた複雑な何かを作る。ああ、果てしなき問題の数。この世にはびこる無限の問題数の前では悠久の時間があっても足りはしない！」

アストロラーボンは両手を星の支配する夜天に突き出して、まるで何かを取り逃がして悔しがっている獵師の様に手を握り締めた。彼の体中には何かが増っていた。この八十歳の老人の、やせ細った体のどこに何かがあるというのか。何が、こんな、溢れんばかりのエネルギーを生み出しているのか。シャンティにはそれが不思議でたまらなかつた。

「ならばあなたは」ギャロップは無理につまらなそうな風を装っていたが、シャンティには彼の頬がほんのりと赤くなって、彼が高揚しているのが見えていた。「その限られた時間で、どう生きる？ 全てのものと相対する時間は無い。いや、時間があつてたとしても無理なことだつてある」

「そんなの」アストロラーボンはウィンクして、舌をべりりと出して、無邪気な子供のように笑った。「聞いてどうするんだい？ だつてそれは、わたただ一人の答えに過ぎないんだから。わたただ一人の真実でしかないんだから」

ギャロップは大きく目を見開いて、口角をあげて、肺の空気を鼻から全部出したんじゃないかというような息を吐いた。何かに深く納得した感じだつた。

シャンティは昔のことを思い出した。幼い頃、シャンティは彼の膝でゴロゴロしながら、彼の口走る考えを、目に煌めきを灯しながらおとぎ話を聞くように聞いていた。ふと思いついて「先生はそんなにすごいことを考えているのに、どうして本になさらないのですか？」と聞いただと、アストロラーボンはいたずらっぽい笑みを浮かべながら、彼の耳元で「書いてある暇があったら、新しいことを考えたいのさ」と教えてくれた。

先生はずっと考えているのだ。そしてそれは、先生が編み出した、無限の問題数に対抗する術の一つにすぎない。あの人の思う真実の一つに過ぎず、他の誰かにとってはとるに足らないものでもある。

吐く息が、闇の中で白く変わる。自分が興奮しているのが、目に見える形でわかった。

星は霊妙な光を灯し、その代わりに地上の全ての音を吸い取っている雰囲気を出していた。だから限りなく静かで、自分の心臓の音は当たり前のように聞こえ、隣の人の心臓の律動音までもが聞こえてきそうで、それら全ての、ささやかな命の律動の音すらも天の星が吸い取ってしまいそうで、なんだか自分の存在までもが……。

足元がなくなる感じがして、体がぐらりと揺れた。このまま倒れてしまえば宇宙に倒れこめるんじゃないかと思っただけで、世の中はそんなに甘くなかった。

シャンティは地面にゴツンと頭をぶつけてしまい、宇宙から地上に引き戻されてしまった。

6・星を掴む（後書き）

シャン太郎「そういえば、勤勉に働けば自由になれるという状況ならば奴隷もやる気を出すはずだよね」

ギャロポン「やめる。收拾がつかなくなる」

おじいちゃん「それについてはだね」

ギャロポン「だから、やめろって」

|||||

と言うわけで大二病がむくむくと頭をもたげてきました。正直、この回は読まんでいいんじゃないのだろうか。というか、読んでいて自分でも恥ずかしくなります。

画像はアストロのおじいちゃんデプラトン+インシュタインとかそんな感じです。

最後ら辺はなんか稲垣足穂的な感じ。

7・サウルス・センチュリオン・レジェム・シャンティ著「カバルス戦役史」

> i32184—4057<

シャンティがギャロップの協力を得て作った戦史「カバルス戦役史」をシュラク王に献上したのは、年が明けた二二七年の年明けの冬の終わり頃だった。

シャンティはシュラク王、ジャクナ三世、ジャーニイ、戦役にも参加した大將軍のエラルジス、そして緒將軍や王族の近衛兵団の將などの軍部関係者が集まる席でそれを父の前に差し出した。その席は和やかな会食の席で、いきなり戦史を差し出されたシュラク王は少しびっくりしているようだった。

シャンティは父の反応をある程度予測していた。父がその戦史をシャンティの手から受け取って懐に納めないうちに彼は次の言葉を言った。

「つい先日完成したのです。どうですか？ 私は父上がいいというならば、この戦史をここで読み上げようと思うのですが……」

シュラク王は少し訝しんだが、これと言って断る理由もなかった。逡巡しているうちにどこからか「是非ご聞かせ願いたい」の聲が聞こえ、それは次第に連鎖・拡大し始めた。シュラク王ははにかんだ後に許可を出した。

シャンティは声を張り上げて研究結果を発表し始めた。

レジェム・シャンティ著の「カバルス戦役史」は要約すれば下記のようなものである。なお、『我々・我ら』とはシャンティのことではなくサウルス軍全体のことである。

『サウルス地方のすぐ西隣のカバルス地方は馬族と呼ばれる民族が支配する土地である。馬族とは騎馬民族だけを言っているように誤解されるが、実はそうでない部族も多い。現に馬は乗るためだけに使われるわけではない例として、カバルスの山奥の険しい所に住む

ヒラコテリウム族では移動の際に馬には乗らず、馬には荷物を乗せ、人は馬の手綱を引いて歩いて進む。前述のような勘違いをされるのはカバルスの平地の多さに起因していると思われる。平地ではほぼすべての部族が騎馬での移動を行うのだ。』

『また、カバルス人は長距離の武器として主に長弓を基本としているせいか、それを馬上で使うことはほとんどない。馬上で使うには彼らの弓は長すぎる。弓を短くする工夫が考えられた記録もあるが、それはことごとく失敗している。なので、弓は馬から降りて使う物として認識されている。カバルス戦役で長距離攻撃をあまり受けなかったのにはこのような要因がある。』

騎乗射撃のことを言っているが、中世ウアズマでは騎乗射撃を主力攻撃とした民族がその版図を異常な速さで拡大した。彼らは合成弓や動物の骨を使うことによって弓の強さをそのままに、長さを短縮することに成功している。

『さて、本題に入る。話しは我々が二二四年の春にカバルス地方への侵略を開始した所からである。』

『我々はシュラク王をサウルス国遠征軍の総司令官・総大将とし、カバルス地方にはまず六万の兵士を送り込んだ。そのうち二万をレジエム・シュラク王が、二万をガイナ・エラルジス大將軍が、一万をレジエム・ジャクナ三世王太子が、五千をレジエム・ジャーニイ王子が、五千をレジエム・シャンティ王子が率いた。』

『カバルス地方に入ってすぐに現れたオロ族、エピ族、メソ族、メリキ族などの部族たちはカバルス同盟国に属していなかった。我らは容易くこれらを打ち破った。しかし、これらを打ち破っても得られた物は少なかった。なぜなら彼らはほとんど文明を持たない者たちだったからである。シュラク王は彼らが後々に反乱をおこさないように、兵士たちに食料や貴重品の略奪、部族民の虐殺や強姦を禁じた。』

『我々はいくつかの野戦用の要塞をいくつか築いた。この際に迅速な行動で堅固要塞を立てたとしてジャーニイ王子が恩賞を与えられ

る。』

『要塞が出来上がり後顧の憂いがなくなった我々はさらなる進撃を開始。進撃先では名もない野盗の襲撃が度重なり起こった。我々はこれらの蛮人を捕まえ、拷問にかけ、土地の情報を収集した。』

『大規模戦争などはほとんどないまま我々はカバルス同盟軍の領土内に入り込んだ。侵入してすぐにパラヒ族とミオ族の小規模連合隊が戦いを挑んできた。敵の奇襲戦法などもあったせいで我々は数百の敵騎兵相手に同等の損害を被った。シュラク王は念を入れるために本国に増援を要請する。同時にジャーニイ王子とシャンテイ王子を要塞に戻し、その防備を固めさせた。』

『一方、カバルス同盟国王都ヒツパリオンではサウルス軍に関しての会議が始まっていた。彼らは、我々が自国内で大規模移動を始めた時点で戦争をある程度予想していた模様である。そしてオ口族らと我々が交戦しているのを密かに観戦し、サウルス軍の情報を集めていた。』

『ではなぜ、すぐに迎え撃ってこなかったのか。それはカバルス同盟国の議会に原因があった。カバルス同盟国では大規模軍を結成するのは議会での了承が必要であった。そしてカバルス同盟国はそれを結成するかどうかという根本的なところでずつと足踏みを続けていたのだ。結成を指示する者たちは、もちろん自国の防衛手段の一つとしてそれを指示したわけであるが、結成を支持しない者たちは、その結成が決定打となってサウルス軍との交戦を避けられなくなる」と主張した。また、戦争を起こしても負けると予測していたものは後者の指示をし、いかに良い条件で降伏するかを議論するよう』

よくよく考えれば、サウルス国はほとんど何の通告もなくカバルス同盟国に侵略を開始した。現代では宣戦布告と言うものは当たり前であるのを考えると少し不思議かもしれないが、宣戦布告と言う風習はこの時代から後に出来たものであり、この時のサウルス軍の行為は侮蔑に値しない。と言うよりも、サウルス国の建国のことを

考えると、小都市サウルスは宣戦布告もなしに電撃的にグナトウス王国を打ち倒した末に建国を果たしたので、この時のサウルス国としてはこれが当たり前なのだろう。しかし、「あなたの所に戦争に行きますよ」と伝えるのは確かにおかしいかもしれない。

『カバルス同盟国議会が何の決定も下せずにいる間も我々は進撃を続行。ゲリラには気をつけていたが、敵がその作戦をとり始めるとそれにはなかなか対処ができず、我々の被害は増していった。それでも我々は密集隊形を崩さないように敵領地をじりじりと削り取って進んでいった。この頃になると都市らしきものが現れ始め、我々はそこに蓄えられた財宝や物資を大いに略奪した。』

『二二四年の夏の中頃、我々の下に増援六万を連れたジャーニイ王子とシャンティ王子が駆け付けると、我々は大規模な進撃を開始。合計十二万の軍隊は以下の通り配分される。なお、一軍団は一人である。シュラク王に三個軍団（三万）、ジャクナ三世王太子に三個軍団、エラルジス大將軍に三個軍団、ジャーニイ王子に二個軍団（二個軍団であるが一万五千）、シャンティ王子に二個軍団（ジャーニイと同様、二個軍団であるが一万五千）。』

このあたりで少しサウルス軍についての説明が必要である。しかしこの後にする説明は作中でもはや過去の話で、サウルス軍はカバルス戦役後に軍構造の改革を行っている。

サウルス軍には大きく分けて国軍と自警軍の二つがある。が、今回はそれらに共通した編成についての話をする。

サウルス軍は十人を小隊とし、率いるのは隊長。そして、十個小隊（百人）で中隊とし、率いるのは百人隊長（または百卒長）。十個中隊（千人）で大隊とし、率いるのは千人長（または千卒長）。その上に兵種ごとの隊長がいる。

例えば、軽装弓歩兵隊ならばそのまま弓兵種長となる。それらは軽装弓歩兵（攪乱）隊、槍歩兵（突撃）隊、軽装剣歩兵（追撃）隊、騎兵（殲滅）隊、司令部もとい近衛兵団などに別れ（厳密には工兵や輜重兵などの特殊兵種もある）、全てを統合すると一個軍団（一

万人)になる。軍団を指揮するのは將軍である。(槍歩兵・劍歩兵はサウルス国内での呼称で、一般的には槍歩兵は重装歩兵、劍歩兵は軽装歩兵と呼ばれている。)

ここで軍集団という独特の区分が現れる。これは連隊や師団というより細かい区分がないこの時代のみに使われた区分であり、軍団の一つ上の区分と言うことになる。集まるといふ意味の言葉が二つあるのはこの時代の適当さを表わしている。つまり、一個軍団をいくつか統合したのが軍集団であり、これは二個軍団の時もあれば、三個軍団、四個軍団の時もあり、その時々によって違う。軍集団を指揮するのは王、王子(王太子)、大將軍、である。これらを合わせてサウルス軍となり、それを指揮する総司令官は(今回の場合)王である。

こう見てみると軍集団は本当に必要なのかと思ってしまう。後世になると無くなるのだから無用と言えば無用である。けれど近代では、軍(あくまで全体の総称)、軍団、師団、連隊、大隊、中隊、分隊、の他にも兵種ごとの区分もあり、ちゃんと組織化した軍を作るには、このように細かく区分していくのは必要なことなのがかかる。シュラク王は古代において軍の構造を組織化し、それによって軍内部の効率を良くしようとした学者的な軍人の一人とも言える。

サウルス軍はまず軽装で軽やかに動く弓兵の弓矢で敵を攪乱し、盾と槍で堅固な密集隊形を作る槍歩兵の突撃で攪乱の隙をついた。敵軍に穴が開くと剣を主力武器とした身軽な歩兵が飛び込んで敵を薙ぎ払った。逃げる敵を追うのには少数の騎馬兵を送り、これらを殲滅した。

このように、この時代のサウルス軍「侵略王の歩兵隊」と呼ばれる彼らは、一人一人のやっていることは昔と変わらないが、その順番を厳密に取り決めることで、できるだけ効率的な戦闘を実践しようとしていた。

ここで、シャンティの著書に戻る。

『我々は拠点とも言える一つの都市を選び要塞化した。その都市、

ブランビーにシャンティ王子と軍集団を残した。ジャーニイ王子軍集団はブランビー要塞と後方を往復して兵站部として役割を果たすことになる。ジャクナ三世王太子軍集団は東に出向き海近くの漁村を占領することを目的とした。エラルジス大將軍はカバルス同盟国軍ヒツパリオンの周辺の村を荒らしまわり、敵軍が活発な動きを始めたならばそれを食い止める役目を負う。シユラク王はゲリラ兵殲滅と他都市占領を行う。」

『ジャクナ三世王太子軍集団が漁村を占領しサウルス本国からの船団を受け入れるための準備を始めたことを知ったカバルス同盟国はついに大規模軍結成を決定した。』

決断力の弱さ、スピード感のなさが民主主義の弱点であり、カバルスはまさにそれにより自らを追い込んでいく。

『カバルス同盟国軍団長となることがすでに決まっているエウクス族長トロットやその他部族長は我々の目を盗みヒツパリオンに集結した。各部族長が密かにヒツパリオンに集結していたのをサウルス軍が知るのはカバルス戦役後である。』

カバルス同盟国軍についても論じておく方が後々のためであるのでそれを挙げる。

カバルス同盟国の軍人と言うのは基本的に部族ごとに、その部族の族長を自分たちの将として行動するものである。だから、このような場合もそれを基本とする。

まず、同一部族内の十人前後で隊を組み、その長が隊長。隊長たちをまとめるのが部族長で、部族長は同時に隊長を務めているものである。次は部族同士を集めてちょうど良い数になればそれが大隊長は大隊長である。やはり、これはどこかの部族長が務める。そして、大隊をまとめると軍（軍団）。これがカバルス同盟国軍の最高区分であり、これの長が軍団長である。となると、軍団長は同時に大隊長で部族長で隊長である。

兵数については、まず部族ごとに兵士の数が違うので色々面倒なことになり、数えるのは大変だったそうである。大隊などは何個

作られるかもわからないので、そのつど定員数が変わっていた。

このように、有機的で効率的で合理的なサウルス軍と違ってカバルス同盟国軍は何もかもが適当で辻褃合わせな感じに軍を作っていた。

結局のところ、サウルス軍は集団での戦闘を重視したが、彼らは個人の戦闘力に重視したのである。

『王都ヒツパリオンに集まった部族長たちは議会から大規模軍の結成を頼まれるとすぐに軍事会議に入った。この会議は王族や貴族、職人議員、市民議員の存在を全て排除したものであり、本当に軍人しか参加できなかった。また、軍人の中でも参加できるのは部族長とその他、各部族内の有力な隊長のみである。』

『会議が始まるとまず、部族長たちがサウルス軍を侮る発言をし、自分たちの力ならば当たり前前に追いかえせる、とお互いを褒め合って気を良くしたところでちゃんとした会議が始まる。』

『まず部族長が一人ずつ招集可能な兵士数を言っていく。合計で四万弱と判明する。なお、全て騎兵である。それが終わると戦争の際に取られる戦術に関する議題に移り、一人の部族長が騎兵をそのまま横に並べた横陣での戦闘で包囲することを主張する。それに反対した者は縦陣で敵軍突破を主張した。』

包囲戦術は騎兵の機動力を生かしたものであり、突破戦術は騎兵の突破力を生かしたものと見える。常識的に考えれば、数で劣っている方は敵の包囲などを試みない。とはいえ、突破でさえも敵の二倍の兵力が必要などと言われることもあるくらいである。『会議は平行線を辿った。』

『そんな中、カバルス同盟国軍団長トロットの息子であり、エウクス族の隊長の一人であるエウクス・ギャロップが一つの案を出した。彼の考えた戦術の名を トライゴン 三本の角戦術 と言う。』

と、シャンティが読み上げたと同時に、騒がしかった宴場が静まり返って、次の瞬間には焦ったような感じでざわつき始めた。彼らはエウクス・ギャロップが誰なのかを知っているし、すぐ近くにい

るのを知っている。その彼が、この戦史を読み上げている王子と仲が良かったって、知っている。

いくらかの人は、シャンティがギャロップに騙されたのだと嘲あざわらするような笑みを浮かべたが、大体の人は顔を曇らせていた。ジャーニイなどは顔を真っ青にし、目を皿にしてシャンティを見つめていた。シャンティは心の中で彼に謝ってから戦史を続けた。

『三本の角戦術トライコーンは下記のような戦術である。』

『部族を基本とした兵数一万ずつの縦列縦隊の大隊を三つ置き、これを前方主力隊と呼ぶ。左右二つは突撃、側撃、背撃を行う自由さを持つが、真ん中は基本的に突撃のみであり、ここにはいつそう勇猛な軍人を置く。』

誰かが唾を呑んだ音が聞こえた。もはや誰もが気が付いている。これは本当に、おれたちが戦ったあの作戦だ、と。

『後方に兵数約七千の後方援護隊と呼ばれる隊を置く。これは、敵の穴や味方が押され始めた方面に向かう。戦況を冷静に見る能力が必要で、ここに軍団長エウクス・トロットを置いた。』

『残り約三千の騎兵をさらに後方に置き、これを予備大隊と呼ぶ。これは基本的に、戦況を見極め決勝点のみに向かって突き進む隊である。ここにはエウクス族の隊長の一人であるエウクス・ギャロップを大隊長置いた』

「それは嘘だ！」書記長として従軍していた男が叫んだ。「王子、それは嘘だ。あなたはあの野蛮なカバルス人、ギャロップに騙されている。私は王に戦史を依頼され、西都ヒツパリオンに残された名簿を調べた。あの男、ギャロップの名はそこにはなかった。いや、奴の名前はまず資料の中には一回たりとも表記されていない」

「お言葉ですが、二つ質問があります」シャンティは冷静に返した。「あなたはカバルス同盟国軍の軍人名簿の予備大隊の覧をお読みになったでしょうか？ では、予備大隊の將軍の名前は？」

「読んだかつて？ あ、当たり前です」書記長は周りの將軍に語りかけるようにしながら言った。「予備大隊の將軍の名前はエウクス・

トロットだ」

「ええ、そう。エウクス・トロットです。ぼくも読みました。しかし、エウクス・トロットは後方支援大隊の大隊長でもあります」シヤンティは注目を促すようにピンと人差し指を立てた。「さて……後方支援大隊と予備大隊……この二つの隊を、同一人物が同時に指揮することはできるでしょうか？」

「後方支援大隊と予備大隊はそれほど離れていなかった場合だつてあるさ」とジャーニイが誰よりも早く答えを返した。「シヤンティ、お前は後方支援大隊と予備大隊が離れていることを前提に話している。でも、その二つの隊が遠く離れあつていたと、どうやって知つたんだ？ いや、聞くまでもない。あのギャロップに聞いたのだろう」

「ジニー」赤髪の王子ジャクナが声を発した。彼は驚いてないよ
うな、常と変わらない様子だった。頬肘をついて、どこか余裕のあり
りそうな印象を受ける笑みを浮かべて、ブラウンの瞳を彼に向けて
いた。「もっと、ちゃんと聞こうじゃないか、シヤンティの話しを」
「……兄上の言う通りですよ」シヤンティは紙の束を指し示しなが
ら言った。「答えはこの中にあります」

一同は静まって、シヤンティの戦史の続きに耳を傾け始めた。

「軍人ギャロップが予備大隊になつたのは、彼がそれを希望したか
らである。ギャロップはカバルス同盟国の名門エウクス族の隊長の
一人であつたが、このような大隊を率いる資格はなかつた。カバル
スの大隊長は部族長と決まつているからだ。カバルス同盟国軍はこ
の規則を曲げることも、例外を作ること承知しようとはしなかつ
た。しかしギャロップの戦才は軍隊を有機的に使うことを意識した
トライコ
ン
三本の角戦術を見れば明らかであつた。」

「結局、予備大隊隊長にはギャロップが就任し、名簿のような形式
的なものの上では予備大隊の長をエウクス・トロットとし、なおか
つ全軍にもそれを通達した。規則を重んじる古参兵はこのような例
外を疎んじる傾向があり、軍事会議の中にいた人々もギャロップを

大隊長にすることには反対した。軍団長エウクス・トロットはそれを何とか説得し、この波紋がこれ以上広がらないように軍事会議に参加した各部族長と有力隊長の口を封じた。そして予備大隊の存在も軍内部でもあまりおっぴらにしないよう工作した。』

『予備大隊の兵員は全ての部族から集められた。彼らの年齢は比較的若く、部族長でもないギャロップが大隊長に就任し、自分たちを率いることにも不満を持たないようなカバルス軍人を集めた。もともと、カバルス軍人の社会は能力主義ではなく、年功序列的になっているのを彼ら若い軍人は嫌っていた。それを知っているギャロップは、若くとも功を為した者には軍隊内でのそれ相応の地位が与えられることを約束し彼らを鼓舞した。彼らの口ももちろん封じた。』

『二二四年冬、我々はカバルス地方の各都市、各要塞にて冬を越す。十二万ほどの兵士を養う糧秣は何か持つことが事前に分かっていたが、次の年の冬は越せないのもわかっていた。』

『年が明け、二二五年。カバルス同盟国軍が大規模軍隊を召集しようとしているのがわかった。サウルス軍の王族と緒將軍はブランビ―要塞に集まり開戦に向けた策を練り始めた。』

『我々は会戦により敵に大打撃を与え攻城戦前に敵の降伏させることを決める。すでに騎兵の恐ろしさを知っていた我々は兵士の士気・練度のみでなく、数を投入することで敵を圧倒することにした。兵数二万を各要塞に駐屯させ、十万を会戦に出すことが自動的に決まると、それをシュラク王、ジャクナ三世王太子、エラルジス大將軍、ジャーニイ王子、シャンティ王子の五人の指揮官に配分することを決める。』

『シュラク王に三個軍団（三万）、ジャクナ三世に二個軍団（二万）、エラルジス大將軍に二個軍団、ジャーニイ王子に二個軍団（二個軍団だが一万五千）、シャンティ王子に二個軍団（二個軍団だが一万五千）とした。』

『敵の騎兵の高い攻撃力に対し、我々は堅固な密集隊形により防御力を高め、敵の機動力の高さから生じる部隊ごとの連携の薄さをつくことにした。最初は守りを固め、敵の連携力がなくなってきたころに攻撃に転じ、敵主力を叩くことにより勝利をもぎ取るプランが出来上がる。突破、完全包囲、片翼包囲などの様々なパターンを作った。』

『前方中央に主力のシユラク王軍集団。前方左翼にジャクナ三世軍集団。前方右翼にエラルジス大將軍軍集団。後方中央左寄りにシャンテイ王子軍集団。後方中央右寄りにジャーニイ王子軍集団。』

前方中央に総司令官たるシユラク王がいる。この時代は陣頭指揮全盛期であり、戦史を調べれば「王が一番槍を成し遂げる」などの逸話がいくつも出てくる。が、そこまで総司令官が前にくるのは非合理的な話で、さすがに一番槍は嘘であろう。

『このように配置し、突破の場合は後方二人が主力のシユラク王軍集団を押し上げる様に前に出てくる。左翼を伸ばす場合は、連携を損なわないように、穴ができないようにしながら中央と左翼の間に潜り込むようにシャンテイ王子軍集団が入りこむ。右翼を伸ばす場合は中央と右翼の間にジャーニイ王子軍集団が潜り込む。これを柔軟に使うことにより、片翼包囲・完全包囲を実施する。』

『作戦が決まった王族、各將軍たちは各々の都市や要塞に帰り春の到来を待った。』

『やがて冬が明け、二二五年春。我々サウルス軍は進撃を再開。都市と要塞をいくつかが落としカバルス同盟国内深くに侵入。カバルス同盟国の大規模軍隊が移動しているのを知ると、会戦の地をヒジユメ大平原として行軍を続行。』

『一週間後、我々が王都ヒツパリオンへ向かう石畳で造られた街道を進んでいくと、ヒジユメ大平原にて兵数四万二千の騎馬軍団と遭遇する。ヒジユメ大平原は今まで見たことがないほど平らで、小高い丘すら見えなかった。いくらか農地もあったが、そこには農民の姿は見当たらなかった。』

「軍を事前に決めていた配置につかせる。カバルス同盟国軍は三本の角戦術を駆使する例の配置を敷いた。その日は空気の澄んだ晴天で、ヒジユメ大平原の向こうには王都ヒツパリオンが見えていた。」
「戦いが始まると我々はまず前に敷き詰めていた軽装弓兵を使用した。矢が雨のように敵陣に降り注ぐ。敵の翼は自由に動き回りこれを回避。敵中央主力は矢を恐れずに立ち向かってきた。我々の弓兵は矢を撃ちつくす前に後方に退避させ、槍歩兵隊を前に出した。後方にいた双子の王子の軍集団は、遠距離攻撃の回避と共に展開した敵両翼に対抗すべく、味方両翼に寄って行き翼を守る体制をとった。」

「騎兵の突撃が最前列の兵士たちを押しつぶす。槍歩兵は投げ槍を相手に投げて応戦。矢の残っている弓兵は軍中央部からそれを撃った。敵の突撃力はすさまじいもので、我々も必死に耐えた。そして槍投げや矢をそのまま喰らった敵陣に隙ができて始める。我々はシユラク王の掛け声と共に息を合わせて敵騎兵を押し返し、槍衾を作って突撃を開始する。」

「しかし敵騎兵の隙間は敵後方にいた後方支援軍の的確な増員投入のおかげでそれほど目立たなくなってくると、我々はじりじりと押され始めた。」

「気が付けば我々は完全包囲されていた。こちらよりも少数の軍隊にぎゅうぎゅうに押し込まれ、我々は大きな戦場で小さく押し潰されていた。もはや翼の展開は不可能だった。」

「このまま続けていても敗北しかない、とエラルジス大將軍は自軍劣勢を判断。同時に右翼にいた彼は敵左翼を突き破りシユラク王を逃がすことを一人で決断した。槍歩兵、剣歩兵、騎兵を集め熾烈な攻撃を開始。同時にシユラク王の下に走り、渋るシユラク王を説得し、週録軍団の退却を開始する。」

「それを知ったジャクナ三世は軍集団の一部を派遣しシユラク王の退却につかせた。さらにシャンティ王子と連絡を取り、共に主力退却の時間稼ぎをすることを決めた。」

ジャクナ三世軍集団とシャンティ王子軍集団は、退却路の反対にいたので必然的に殿をしんがり努めねばならなかった。しかしこの話はジャクナ三世の頭の回転の早さと勇敢さを表わしている話とも言える。

『シユラク王主力軍集団、ジャーニイ王子軍集団、エラルジス大將軍軍集団、ジャクナ三世軍集団、シャンティ王子軍集団の順番で退却を開始。退却を開始したことにより被害が拡大し始める。』

「戦争によるほとんどの被害は退却の時にやってくる」これは砲兵騎兵、銃歩兵が戦場の支配者だった頃、つまり三兵戦術主流時代の戦争学の名著「戦争論」に書かれている。また、この著書には「追撃軍の騎兵の数、退却軍の騎兵の数がその追撃の効果を決定する」とも書かれており、これに照らし合わせヒジユメ会戦を見ると、この原則は甚だ正しいように思える。サウルス軍はこの一回の会戦で二万の兵を失っている。カバルス同盟国軍は八百ちよつとの被害であった。

『サウルス軍主力がむき出しになって逃げ出すのを見た將軍ギャロツプの予備大隊はこれへの攻撃を開始。四千の元気な騎兵が戦場に來襲し、その全てがシユラク王めがけて突撃した。身を呈して王を守る忠義心高き兵は尽きることはなかった。ギャロツプはシユラク王を追撃したが深追いは危険と判断し、混乱のさなかの会戦場に戻りサウルス兵を掃討し始める。ここでいくつかの将を捕らえ、我々の情報を収集した。』

『ヒジユメ大平原の会戦場にはジャクナ三世とシャンティ王子の軍集団がまだ残っていた。二人は乱戦の中、王が無事退却を開始したのを知ると、両軍集団を合併してじりじりと後退。先に退却させていた隊が伏兵となり敵兵を襲いだすと、大々的な退却を開始した。最後まで残っていたこの両軍集団は、なぜだか損害を最小限にとどめた。』

『夜の訪れと共にカバルス同盟国軍の追撃隊は勢いを失くした。我々は野営をして、点呼などで損害を確かめた。その時の確認された残存兵数は六万強だった。おおよそ、三万の損害である。』

『それを知ったシユラク王は愕然とした。しかしシユラク王の決断は早かった。』

おそらく、小ウアズマの時に決断の遅さによって自軍をじりじりと苦境に追いやったことが関係している。

『シユラク王は再決戦を提案した。緒將軍はそれを止めようとしたが、ジャーニイ王子は他の二王子より先に逃げたことを恥じており、これに賛成。ジャクナ三世王太子も父王の意見に同調した。』

とはいえ、ジャーニイはあの時、退却路側にいたし、シユラク王を守るように退却したわけだから恥じることはないのだが、そこは彼の強いプライドが許さなかったのだろう。

『シユラク王は新しい戦闘隊形を提案。軍団を小さくわけ、それを余裕のある一定間隔で配置。そして、敵の行動を見て密度を変えて対応するというものだった。』

これは新たな区分の創出とも言える。区分を増やせば柔軟性は増す。しかし、増やせば増やすほど伝令などはややこしくなり、また各小単位の長の機転の能力が問われるようになる。これは賭けである。兵士たちが機転を利かせ、柔軟に軍を動かせることができれば戦力アップ。できなければダウン。つまりは軍の兵員の機転の能力の高さに依存している。

戦術をシンプルにした方が戦力アップできる場合だって大いにある。それでも、がけつぷちに追い込まれたシユラク王は自分たちの兵隊の能力を信じることにした。

『カバルスとの翌日再戦はすぐに全軍に伝えられた。要塞にこもって戦うことを予測していた兵士たちは驚愕と絶望を感じ、シユラク王に退却を懇願した。シユラク王は目をつぶり、静かに首を振った。そしてその瞳を開き、兵士たちを叱咤するように睥睨した。』

『彼は狂気に取りつかれ、全身を這いまわる血の灼熱に身を任せ、天を指し、守護聖獣たる竜に祈るように雄叫びをあげ、何度も何度も演説を繰り返した。その狂った熱にあてられた、心の折れた兵士たちは、やがて、逆襲の意思から生まれた光を眼に宿らせた。シユ

ラク王は兵士たちを見渡した、そしてこの西方の大地の上に、星々のように光る鋭い眼光を見た。シユラク王が腕を広げ、吠声をあげると、サウルスの勇者たちはウォークライをあげた。』

『次の日、逃げていた兵士が続々と集まりだすと兵数は合計で八万に戻った。カバルス同盟軍が我々に向けての進撃を開始したのを聞くと、我々はヒジユメ大平原より北に十キロほどのニー平原で待ち構えた。』

『ニー平原は小高い丘やちよつとした雑木林が散在しており、ヒジユメ大平原よりは奇襲を実施しやすい立地になっていた。我々もその障害物の中にくらかの部隊を隠しておいた。』

『我々の配置を見たカバルス同盟国軍軍団長トロットは軍議を開いた。各部族長は昨日と同じ完全包囲を主張した。』

完全包囲は実は成功率の少ない戦術である。これがなぜ好まれるかと言うと、包囲戦は成功すると敵に逃げ道を与えないせいか、敵兵大量撃破という大勝利が得られる。しかし、失敗するとそれをしかけた軍が大量撃破される危険性がある。

『トロットは我々の一単位ずつの少数さ、薄さから分析して突破を主張した。ギャロツプは様子見を進言したが、例外的大隊長就任の際に各部族長に疎まれていたので、これは簡単に退けられた。結局、包囲戦をもう一度試みることになった。』

『ニー平原会戦の日も快晴だった。我々は前日同様に弓兵を前に配置して敵兵を射った。敵兵は前日と同様な反応を見せる。我々は中央に弓兵を集め、敵中央主力を集中的に攻撃。ぎりぎりまで彼らは矢を放った。』

『敵中央の突撃を控えて我々の中央主力は防御を固め始める。我々の左右両翼は大隊単位の陣を作り防御を固めた。その真中からは絶えず弓兵が矢を放つ。』

『敵兵中央主力は勇猛だったが、最初の集中攻撃で疲弊していた。シユラク王は槍歩兵に突撃を命令。自らも五百の近衛兵団を指揮し突撃した。』

『各地でカバルス同盟国軍の被害は拡大した。それを補うための後方支援大隊はそのほとんどを中央に送っており両翼への援護は無理だった。』

『これを見た予備大隊は早々に行動を開始。エラルジス大將軍とジャーニー王子の指揮する右翼に突撃した。』

攻撃力の高さは同時に防御力の低さである。

サウルス軍は敵軍との会戦のために冬の間に立てていたプランでは「敵兵の機動力の高さを利用し、敵がばらばらになった反撃する」とあつたはずである。戦争の本ではよく、機動力イコール攻撃力と言われることがある。前に進むことが攻撃であり、攻撃力が高いということは敵軍内部にずんずんと進んで行けることと同意義である。そして敵軍内部に進んでいくと自然と隊がばらばらになる。つまり攻撃力が高い軍隊は分散しやすい。

その点を踏まえながらサウルス軍を見てみる。エラルジス大將軍とジャーニー王子は、左翼の王太子とシャンティに比べ攻撃的な性格をしていた。この二人を左右においてバランスをとった方がいいと思うかもしれないが、古代の戦争はその多くが軍を斜めに傾けたり、片方に戦力を集中する斜線陣である。その概念にまだ引きずられていたこの時代も、やはり根本的にそれを目指して軍隊を作っていた。

シユラク王は片翼に防御力が高く機動力の低いジャクナ三世とシャンティを置いて、逆翼に攻撃力が高く機動力の高いエラルジス大將軍とジャーニーを置き、真ん中の自分が柔軟に対処することで意識せずに斜線陣になるように調整していた。なるほど彼はなかなかの策士であった。

本題に入る。

ギャロップは決勝点への突撃を捨て、味方を逃がすための退却路を切り開くことに決めた。そして防御力の低い、兵が分散している所に狙いを定めた。それがエラルジス大將軍とジャーニーの配置された右翼だった。

『カバルス同盟国軍の包囲は失敗していた。我々は敵に包囲されないように幅広く広がって戦った。』

『両翼の戦いは制していた。一方、中央主力の戦いは熾烈を極めていた。そのほとんどを後方支援大隊と入れ替えた敵中央軍は強かった。シユラク王の騎兵隊は何度も危機に会いながら敵主力へ向かって進んでいった。』

『そんな頃、制していたはずの右翼に奇襲がかかった。体力のあり余った四千の予備隊である。疲れ果て、矢が残っていないかった右翼は容易く破られた。この報告を聞いた味方左翼軍は何とか兵を捻出して至急増援軍を送った。』

『しかし遅かった。敵兵は右翼からの退却を始めていた。我々はそれを追撃したが追い付くことはできなかった』

ここでも、騎兵差によって追撃の効果に差が出た。

『我々は大勝利に歓呼した。その夜の野営ではこちらの損害は二千ほどと出た。後に知ることであるが敵の損害は五千だった。』

『次の日、我々は進撃を再開した。やはり快晴だった。我々は昨日と同じ陣形のまま進み、ヒジユメ大平原でカバルス同盟国軍との遭遇。全体としては三度目の会戦、ヒジユメ大平原では二度目の会戦である。そして、誰もがこの戦闘で終わりであることを理解していた。我々はここで敵を撃ち破れば王都ヒツパリオンまでの妨害を受けずに済むことをわかっていたし、ここで負け、また数万もの損害を出せばカバルス地方に残ることもできず、それどころかサウルス地方に戻ることもできないかもしれないことも……わかっていた。』

『決戦はサウルス軍七万強対カバルス同盟国軍三万強の戦いだった。ここまでの両軍の損害は、サウルス軍二万弱、カバルス軍六千強である。』

『我々は昨日と同様の作戦をとるのに対し、カバルス軍は昨日の敗戦を反省し、トロットの主張していた突破戦術を選択。ギャロップはもはや何も言わなかった。』

『からからに乾いた強風が吹く中で決戦は始まった。カバルス同盟

国軍は迷わず直進突撃を開始した。我々はそのままの陣形で、やはり弓兵が長距離にて攻撃を開始した。強風のせいも成果は減少していた。」

「敵騎兵がすぐそこになった時、我々は中央に向かって走った。次の瞬間には堅固な、元の密集隊形が完成していた。」

「敵騎兵が最前線の槍歩兵隊に衝突した。我々はすぐに翼を広げた。ジャクナ三世軍集団の守る左翼を回ってシャンティ王子軍集団が、エラルジス大將軍軍集団の守る右翼を回ってジャーニイ王子軍集団が敵を包囲し始めた。近衛兵団の騎兵を使い迅速に、敵後方支援大隊までを囲っていくと、敵騎兵は遊兵が増大し始めた。」

遊兵、全く何の役にも立っていない兵士であり、弓兵などの長距離武器を持たないカバルス同盟国軍は包囲されて、真ん中で身動きが取れないようにされるとほとんどがそれになっってしまう。

「我々は敵兵撃滅を開始。囲い込んだ敵騎馬の海の中に剣を主力とする身軽な軽装剣歩兵を投入して馬を無力化していく。その間も絶えず弓矢投げ槍の遠距離攻撃が加えられた。」

「しかし、敵軍をどんどんと殺していく我々の隙をついて我々の後ろに回り込んだギャロップと予備大隊はシュラク王のいる主力に向かって背撃を開始。慌てふためいた味方兵をシュラク王が治め、一個軍団（この時の一個軍団は七、八千）による予備大隊（四千）の排除が始まる。」

「包囲されていた敵騎兵隊もまるで示し合わせていたかのように我々の中央主力へ反撃を開始する。中央主力は耐えきれなくなり決壊が、それを埋める様に左翼ジャクナ三世と右翼エラルジス大將軍が増援を送り、彼らを押し戻した。」

「攻撃特化の予備大隊は長い攻撃に耐えきれなくなり、被害を拡大していく。」

「將軍ギャロップは包囲されていたカバルス同盟国軍主力がすでに少ないのを見ると逃亡。指揮を失った予備大隊は烏合の衆となり、瞬時に全滅。それを見た中央主力の士気は激減した。そして自分た

ちの指揮官がことごとく死んでいる現実に直面したカバルスの下級兵は降伏を進言し、これが我々の王に認められた。」

『この決戦での両軍の被害状況は、サウルス軍合計一万四千。カバルス軍三万弱である。』

『我々は勝者にもかかわらず一万もの兵士を失っており、戦闘中はだれもその被害の多さには気が付かなかった。また、カバルス軍は残存兵力三万強から三万弱の兵を失ったわけだから、この戦争を生き延びた者は天運の持ち主とも言える。』

『我々は捕虜を連れてカバルス同盟国王都ヒツパリオンに向く。門はすぐに開けられ、解放が為された。』

『その講和会議の最中、逃亡を図っていたヒツパリオン王族のユルシユ姫と予備大隊隊長ギャロップがシャンティ王子の近衛兵団により保護される。』

『講和成立と同時にその二人を引き渡し……』

この後も記述は続くが、大体はこんなところである。

「さて……」ジャクナ三世は、シャンティが戦史を読み終えると拍手しながら立ちあがった。「どうだろうか？ 我々の真実との矛盾は？」

誰もが黙っていた。矛盾のあるなしではなく、あの戦争の悲惨さを思い出しているようだった。しかし戦史の途中で予備大隊と後方支援軍の同時指揮の不可能は証明された。

「大体はあっている」とジャーニイが額に汗を浮かべながら口を開いた。「なるほど、そう言えばおれは第二回会戦ニー平原会戦で、いきなり現れたやけに強い騎兵団に襲撃されたのを覚えている。……でもな、それが本当に予備大隊だったのか、そこにあのギャロップがいたかどうかは……」証明できない。

「予備大隊と後方支援大隊の指揮官が別なのは、最後の会戦でも証明されている。いきなりあそこに現れたのが予備大隊でなければなんなのだ。いや、大体、考えるのはそこじゃない」ジャクナ三世は

首を振る。「私は他の者の書いた戦史を見たがね、シャンティが書いた戦史はそれらとは一線を画する。それは、カバルス同盟国軍の軍事会議の内容を書いていることだ。軍事会議の内容をするくらい有力将校は死んでいるのに」

「いや」今まで何の反応もなかった老將軍のエラルジスがやや遠慮気味に発言した。「これはあの時の戦況から考えて、このような会議をしたに違いない、と言う風に創作することもできます。予備大隊と後方支援大隊のトロットという指揮官の名前の件、それと生き残ったカバルス兵からもあまり情報を得られなかった予備大隊の概要。この両方は予備大隊に関することで、ほとんど情報もなく、正誤の判定ができません。だからこそ、ここにギャロップという不明瞭な要素を詰め込むこともできます。いえ……王子を批判しているわけではありませんが」

彼はどちらかと言うと、シャンティがギャロップになんらかの肩入れしていることを批判しているようだった。なぜなら、彼は周知の通りカバルス戦役において常に最前線で戦っていて、カバルス人の恐ろしさを十分に理解している人物で、降伏したはずの村落がいきなり反旗を翻し、命の危険にさらされたことだつてある。彼もやはり、シャンティとギャロップが共に行動するのを厭う者の一人である。

誰かが言った。「敵将トロットは、予備大隊とは始めから打ち合わせしていたのかもしれない。私がこのように動くから、お前たちはこのように動いてくれ、と。そうすれば、一応、同時に指揮したことはならんか？」

違う誰かが反論した。「お前はそんなことができるか？ そんなことができるのは、予言者が魔法使いか……戦争の大天才だけだ。もし、そのような、そこまで先が読んでいる大天才が敵にいたのなら、おれたちは今、ここでこんな風に酒を飲んではいられない」

宴場がまた騒がしくなり始めた。シャンティはほとんど焦るようなくさも見せず、それを見ていた。ここまでは彼の予想通りとも

言えた。

「みなさん、ぼくの話聞いてください」シャンティがよく通る声で語りかける。「確かにみなさんの言うことはもっともです。ならば、確かめればいい」

「確かめる？ 何を？」

ジャーニーが疑い深そうに彼を見て、葡萄酒をすすった。嫌にのどが渴いた。

「彼……ギャロップにもし、比類なき軍才があれば、ぼくが言ったことは真実味を増しますよね」

「それをどうやって、証明する？」

「なに、簡単ですよ」シャンティはいっそう明朗に言った。「彼に戦わせればいい」

宴場のいたるところで怒号にも似た大声が発せられた。シャンティは構わず続ける。

「うすうす気づいているとは思いますが、ぼくはもう言っちゃいます。……ぼくは皆さんの知っての通り、ギャロップの友です。そして今回のこともギャロップのため、さらには、カバルス人のために行っているのです。王都の人々は何の理由もないのに、カバルスを迫害し、それはとどまるところを知りません」シャンティが生意気そうにいうと、宴場に集まった軍人たちは耐えられなくなつて怒りをあらわにし始めた。あたりまえだ、奴らはおれたちの友を奪つたのだから、どこからかこんな声が聞こえてきた。「それで、またぼくの都合の話ですけどね。我が兄上ジャクナ三世の妻はカバルス人です。何の罪のない、誰一人として人を殺していない、あの麗人への誹謗や中傷が王都内でも王宮内でも絶えません。そして私の妻、あなたたちにはよく魔女と呼ばれているエレはですね、ユルシユ義姉様の大変仲のいい友人なのです。我が麗しの魔女、エレは私に向かつて言いました。おい、ユルシユ義姉様を口撃する脳足りん共を早く黙らせて来い、と」

エレの名前と彼女のセリフを聞いた瞬間、宴場がしんとした。彼

女の完全なエゴの前には正論すらも通じないのはわかっている。シヤンティは静かになったのに気を良くして話を続ける。

「カバルス人は確かに信用がない。いや、失くしたんだ、あの熾烈な国防衛のための戦争で。勝手に売られた戦争で」これは父に対する悪口ともとれる発言だった。シヤンティは早く終わらせたい気持ちを抑え込んで、その後もゆっくりと話しを続けた。「今回の件全面的な非があちらにあるわけじゃない。(というよりも、ぼく達の非の方が多いと思いますが)それならば、ぼくたちは彼らに何らかのチャンスを与えるべきです」

「ははは、ならばカバルス人信用回復のために、戦犯者ギャロップを処刑にしようじゃないか」誰かが言った。

「それは良い……それは良い考えですね」とシヤンティが発言者を見つめた。その口調と瞳には相手を悲しむような雰囲気があった。

発言者は目を伏せて黙った。「そんなのは、つまらないですよ。さつきまでは、ギャロップは軍人のリストに載ってなかった、予備大隊の大隊長なんてやってなかった、って言ってたのに……今度は一転して、自分の都合の良い風にギャロップを大隊長と認めて、戦犯者だなんて……」

「シヤンティ」シユラク王は困ったような目で、そして優しげな顔でシヤンティを見た。「お前が、友のために……兄嫁や、妻のためにカバルス人の地位向上を望んでいるのはわかった。ならば、今すぐにもそのような法案を作ろう。それで良いだろう」

「そんな目で……そんな顔で……子供扱いはやめてください！」シヤンティは思わず声を荒げた。掌はいつの間にか大きく広げられていて、そして次に、勇気を振り絞るように、ギョツと手を握って立ち向かうように言った。「……ぼくは甘やかしてほしいなんて思わない。ぼくは、ぼくの力で、自分の欲しいものを入れる。大体、そんなんじゃないだめだ！ 何も変わらない。根本的な解決にはなっていない」

「それで！」ジャーニイが、彼なりの助け船のつもりで口を挟む。

「つまり、どうするって？」

「……うん。ぼくは、彼を戦わせる。相手はいまだに恭順しないカバルス諸部族や、元カバルス同盟国軍兵。カバルス鎮定によりカバルス地域全土の治安を良くする。カバルスが安定したら、人々はあそこへ訪れて、カバルス人が自分たちと変わらないんだって知るところもできる」シャンティはすらすらと、穏やかに言っていく。そんなに簡単にはいかないだろう、と緒將軍は思いながらも彼の想いに耳を傾けた。「これが成功すれば、カバルス人の軍人ギャロップは功を為したことになる。そうすれば、カバルス人がサウルス軍内でとりたてられたことになるから、他のカバルス人も、サウルス国の中で出世できるんだ、元からいた人のようにやっていけるんだ、って希望が持てる。みなさん、ぼくは、人種が違うことよって起こる色々な不安をなくしたいんだ。だって、グナトウス人だって、カンプトケファレ人だって、ヘドロケラス人だって今ではもうサウルス人だ」シャンティは緒將軍を見渡しながら言った。その中には、もちろんそれらの人種がいる。エラルジス大將軍も南部グナトウスの出身である。「カバルス人だってすぐにぼくたちに溶け込める。いや、ぼくたちが彼らを溶け込ませるんだ。知っているだろうか、このサウルス地方、昔はコミツセオ地方と呼ばれていた所は、文化が混じり合って発展してきた場所なんだ。ぼくたちは始めからその才能があるんだ。他の何かを認め、共存する才能があるんだ」

シャンティは静寂に包まれた宴場を見渡して、次の言葉を吐くために、息を吸った。静かに吸ったはずなのに、やけに大きく吸ったように聞こえた。彼は、感慨深そうに彼を見る父の方に向けて、言った。

「父上。ぼくとギャロップを、カバルス地方に派遣してほしい」

「……」父王はすぐには返事をしなかった。父も、静寂の中で静かに息を吸った。吐き出される彼の言葉は震えていた。「大丈夫なのかい？ 私は……お前の体が心配なんだ」

「大丈夫さ」達成感も、充実感も、怖れも、迷いも、何も無かった。

いや、そんな中で、切り開いた未来への高揚感だけはあつて、暗闇の中に、彼と共に歩いて行けることにシャンティは胸を躍らせていた。「大丈夫。なんたってギャロップは、恐ろしく強かったあの亡国の、幻の將軍だからね」彼は莞爾かんじと笑つて言つてのけた。「ぼくはそう信じてる」

7・サウルス・センチュリオン・レジェム・シャンティ著「カバルス戦役史」

やっと話が進みだした。

> i32253—4057<

シャンティとギャロップのカバルスへの親征は即日決まった。

しかし、軍内部では彼の演説を聞いてもなお、カバルス人を将として取り上げることに不安感を抱くものがいた。彼らがシャンティたちに出した条件は過酷ともとれるものだった。

サウルス国から派遣される軍団は半個軍団（五千）クラス。つまりはサウルス軍では大隊が千人だから、五大隊である。全軍五千人のうち歩兵が四千、騎兵は（シャンティの近衛兵団が五百、カバルス騎兵が三百、サウルス騎兵が二百なので）千である。なお、ギャロップは逃亡や反乱などの可能性があると言われ、カバルス兵を指揮してはいけないことになっている。軍需品はカバルス各都市で配給を受けることができ、戦闘により兵員が欠けた場合、本国から追加兵員を要請できる。現地でも補充できることになっているが、カバルス兵は千を越えてはいけないという規則がある。彼らはこの条件でカバルス各地を回る。

これに対してジャーニイは「弟を殺そうと画策しているように見える」と発言して、従軍することを決めた。彼は五百の近衛兵団を連れてシャンティと共にカバルスに派遣されることになる。兵員はこれで五千五百。さらに、この話を聞いたカバルス地域監督者であるヒツパリオンがカバルス騎兵の増援を申請、サウルス国により百人のみ受け入れられた。合計で五千六百である。

総司令官はあくまでもシャンティであり、その下に副司令官としてギャロップ、ジャーニイがつく。また、シャンティらが王都の將軍たちの与えた条件を守っているかを見張るための武官・文官もいくらかつけられた。シュラク王の侍従の一人、ラッドハッド。ジャクナ三世王太子の従者の一人、レフティス。エラルジス大將軍の部下、サスホス。そしてその他もろもろ有象無象がその従軍の監視官

である。

あの宴から十日後、カバルス鎮定軍は兵の徴募や物資の調達完了早々に西への行軍を開始した。二二六年のまだ肌寒い春のことである。

シャンティたちは王宮の儀式場で竜の加護を得るための儀式を受け、カバルス鎮定の任につくことを正式に認めたと証として、シユラク王から佩剣を賜った。この佩剣はジャクナ二世がグナトウス鎮定の際に父、ジャクナ一世から授かった名剣である。剣はこれを作った職人の出身都市から名前をとり、サイカニアと名付けられた。華美な装飾は一切施されていない代わりに、ただ純粹に刃のみの美しさを追求した作品であるとされるが、現存はしていない。

定められた儀式を終えた後、鎮定軍は王宮から王都の大通りに出て、王都市民への顔見せのためにゆつくりと歩いた。けれどもカバルス人のために働くシャンティ王子とその軍団を祝福するものはおらず、市民は一様に冷めた目で鎮定軍を見ていた。彼らはこれと言った言葉も投げかけられずに門から外に出た。

長い列がぞろぞろと王都から出て行った。鎮定のための行軍と言っても兵士だけを連れていくわけではない、兵士たちの食料に野営用のテントを乗せた荷馬車も必要になる。王子たちは外に出るとすぐに王族用の馬車に乗り、長旅の疲れがたまらないように努めた。

「お前もなかなかやるもんだな」と馬車の中でジャーニイは、少し誇らしげそうな顔をシャンティに向けた。「あれだけの者の間で悠然と演説をするとは……昔のお前なら考えられなかった」

「宴場のことかい？ そうだね、ぼくも不思議だよ」シャンティは馬車の窓から見える田園地帯の景色に目を移しながら言った。「それでも、少しやり過ぎたかなと思ってるんだ。彼らや、父上にも随分ひどいことを言った。傷つけてしまった」

「やりこめられた方が悪いのだ」ごんごん、と馬車が揺れた。

「ふん、道の改装をせにゃならんな。尻が痛い」

「やりこめたといつても……あれは、奇襲なんだよ。ぼくは前から準備していた。ある程度の反論への答えも考えていた。でも彼らは準備などできるはずもないし……」

「奇襲はされる方が悪い。……そうか、準備してたか、それはそうだろうな。春間近に、しかも緒將軍の集まる所で発表したのも策か？」

「……まあね」

「お前の？ それとも、ギャロップの？」

「両方さ」彼はジャーニイに目を移していった。「でも、ここからはギャロップの独擅場だよ？ ジニーはそれでいいのかい？」

「別にいいさ。失敗すれば、お前とギャロップのせい。成功すればおれの経歴に少し箔がつく。失敗したら……」ジャーニイは腕を組んで言う。その顔つきからは若干の不安が垣間見られた。「即、死につながるかもしれんが。まあ、こんなことで死んでしまうならば、それまでの男と言うことよ。それまでの男ならば、王位も得られん」「やっぱり王になりたいの？」シャンティは困ったように微笑んだ。ジャーニイの口から王位継承は度々出される。「兄上ではだめかい？ 彼は良い人だよ？ 君が王位への執着を見せなければおそらく君にも優しく接してくれる」

「奴はだめだ。王の才があるとは思えん。現に、奴は自分の好みの女を得るために国を揺るがしているんだ。国よりも自分の股についたモノを満足させる方が大事なのさ。それに……」ジャーニイは急に、険しい目つきになって、厭世的なまなざしで暗い虚空を見つめた。「奴の母親は、おれたちの母上を、殺した」

「……まだ、そんなことを信じているのか。あれは噂にすぎないんだ。信じたってしょうがないよ」

「馬鹿な、お前だつて覚えているだろう？ あの女の、おれたちを見る目つきを！ しかし、ははは、奴はその後すぐに、のどに飯を詰まらせて惨めな形で死んでしまったが。ははは、ははは、ははは」

シャンティは、むなしい高笑いを続ける兄の姿を居た堪れない気

持ちで見ている。

このことは前述しているが、もう一度説明しておく。ジャクナ三世とジャーニイ、シャンティ双子王子たちは異母兄弟である。それは彼らの髪の毛の色にも表れている。

実の所、シユラク王は十代後半に一回結婚していたのだけれど、その妻は流産してしまったシヨツクで死んでしまった。その後王位継承を果たしたシユラク王は東の小ウアズマに遠征し、失敗。失意と共に帰ったシユラク王を迎えたのは東部ヘドロケラス貴族カマラ家の娘であった。彼女は東方の人間の血を色濃く受け継いだグラマラスな女性で、貴族出身の女性らしい天真爛漫な性格だった。シユラク王は二度目の結婚を彼女とし、翌年にはジャクナ三世が生まれた。

三人目の妻は純然たるサウルス貴族、コンプス家の娘である。コンプスはサウルスがまだ小都市だった頃からの有力者の家系であり、サウルスが国になると共に貴族と呼ばれるようになった。シユラク王はこの貴族がサウルスの民から慕われるから打算的に結婚したわけだが、自分に似た金髪の双子の息子が生まれると大変喜んでこの母親まで可愛がるようになる。

その後もシユラク王は内部貴族との連携を深めるために二人の妻を迎える。しかしこれらの家系から生まれた子供は全く歴史に関係せず、緒地方の貴族官人として一生を終えるだけである。

カマラ家の娘は夫の関心が急に他の女に移ったのが面白くなかった。彼女は双子王子の母親に度々嫌がらせをするようになる。少し後になって、双子王子の母が体調を崩し、そのまま崩御すると彼女に疑惑の目が向けられた。彼女が実際に何かをしたのかは今でも謎に包まれているが、その後彼女は急に大食漢になり、ある日いきなり死んでしまった。

ジャーニイは母親の死をジャクナ三世の母親のせいだとずっと思っていた。シャンティの方は「兄上のお母様にはそんなことをする強い理由はない」と噂自体を信じていなかった。ともあれ、ジャー

二イが必要以上に兄のジャクナ三世を嫌うのにはこんなわけがある。

馬車の外では慌ただしく行軍が進んでいた。近衛騎兵の副隊長であるシエイバスは列の乱れを注意したりして奔走していた。

彼は、父ウイスカからの説得を受けて王子の動向を見守ることに決めていたし、今回の遠征も役目を全うすることを守護聖獣に向かって誓いもした。それでも心の片隅には一抹の不安が依然としてこびりついている。

彼は、ギャロップがあああの戦役のカバルス側の中心人物だったと聞いて、さらに彼への猜疑心さいぎしんや不安感を募らせた。

「もし、本当にギャロップがああのカバルス軍の戦術を編み出した男ならば、今回の遠征で王子が死ぬ危険性は……あまりないかもしれない」彼はそろそろと進んでいく歩兵たちを見ながら、馬上で誰にも聞こえないようにぶつぶつと独りごとを言った。「それでも、それが本当ならば……あの恐ろしい戦いを作り上げた男ならば、カバルスに帰ってすぐに少ないカバルス兵を操り我々を全滅させることができるかもしれない。そうやって、自由になったらカバルス地方の諸部族を束ね、サウルスに反撃に出る算段なのかもしれない。いや、反乱しないとしても……そうだ、そうなのだ。奴は切れ味鋭い剣なのだ、諸刃の剣なのだ。その刃は敵を傷つける時には非常に役立つが、少し使用方法を間違えればその威力を己に発揮する。だからそれを恐れた王都の人々が奴を、そしてそれを抱えこむ王子をも一緒に排除しようとするかもしれない。その時、おれはどうすればいいんだ？ 王子を守りきれぬのか？ 奴はどうだ？ 王都に目をかけられたなら、奴は王子を守るのか、守りきれぬのか？」

シエイバスは行軍中の軍を行ったり来たりしてギャロップを探した。ギャロップは荷馬車の中で寝ているところを彼に見つけた。彼はそれを覗き込む。

「……ああ、近衛兵団の副隊長か」ギャロップはあくび混じりの、起きたばかりのだみ声で言った。「どうした？ 異常事態か？」

戦闘か？ 戦争か？」

「いや……そうじゃない」シェイバスは何の理由もなく彼を探していたのに気がついた。いや、理由ならある。お前は、王子を守りきれぬのか、とこう聞きたいのだ。けれどそれを面と向かって相手に言う勇氣はなかった。「……いや」

「ならなんだ？ まさか、おれの顔を見に来たわけじゃあるまい？ どうやら、おれはサウルスの男に受けるらしい。しかし……シャンティから聞かなかったか？ おれは男色じゃないぜ」

「ふん、それはおれもだ」シェイバスは不快感を押し込めながら話しを始めた。「なに、これは戦争をするための遠征だろう？ だから、おれたちの王子が死ぬ場合だってある。つまり、おれはお前の策を聞きたい。王子の命を賭ける作戦がどれほどのものなのか、どれだけ練り込まれているのか」

「それならば簡単だ。策はそれほど練られていない。いや、こう言おう、ねりねりねると練る必要など、ない」ギャロップは起き上がりながら言う。瞳に鋭い光を灯しながら。「敵は軍隊ではない。そこら辺の野盗と同じ、武器と馬を持ったただの一般人の集まりだ。作戦もおろそかだし、連携も取れない。数は少数、士気練度共に低い。まあ、おれたちのほうもそれほどそれらが高いとは思えんが……」

ギャロップは荷馬車から顔を出して、自軍の兵士の歩く態度を見てせせら笑った。謝意部が顔を赤くして怒鳴る。

「お、お前……なにが亡国の幻将だ。とんだ行き当たりばったりやろうじゃないか」

「そつだ、行き当たりばったりだ。戦争とは行き当たりばったりなんだ。よく考えられた作戦も、打ち合わせも、計画も、戦いが始まれば全てごちゃごちゃになっちまう。お前、戦争をしたことがあるならわかるだろう？ 今まで一度たりとも全てが全て計画通りにいったことがあるか？ ないだろう？ 戦争とはそういうものだ。結局、勝敗を決するのは将軍が機転を利かせることができるかにかか

っている。脳のある将軍は敵の奇襲を事前に知り、それを無力化することができるだろう。本当の将軍とはそういうものである。しかし、本当に評価される将軍とは奇襲をされたとしても、それを難なく対処する者なのだ」

「しかし、奇襲を察知して、それを無力化できるならばそれは兵のためにもなる。だから評価に値する」

「戦場で手に入る情報を集めそれをもとに敵の奇襲をただの想定内の敵の攻撃と変じ、無力化する……ふんっ、はは。阿呆か、そんなもんはできて当たり前だ。それでも、過去の戦史を調べればそれができなかった状況は驚くほどある。英雄と言われた者だって何度も奇襲を受けたのだ」ギャロップは拳を強く握りしめる。シエイバスは彼の意気に圧倒されそうになった。この男にとつて戦争とはなんなのだ！ ギャロップは続ける。「戦場ではなかなか情報が手に入らない。手に入ったとしてもそれが正しいのかどうかはわからない。確かに、それを手に入れ、見極め、うまく使い、敵の奇襲を無力化できるならばそれは良いことだ。しかし、そんなのは長者が長生きする秘訣を聞かれて、息をすることと飯を食うことだ、などと言う様なもんだ。わかるか？ 情報収集なんぞ才能がなくともできる。そんなもんは将として当たり前前持っておくべき最低限度の必要能力にすぎない」

「……だから、お前は策を練らないのか……そんなものを練ったとしても、戦場は思い通りにいかないから」

「いや、最初に言ったが、それほど練っていないだけでちゃんと考えてはいる。しかし戦争に勝つにはそれだけではダメだ。策に頼り過ぎてはだめなんだ。時と場合により策を間髪いれずに捨て去って行動することも大事なのだ」

「……結局、どうするつもりなんだ。カバルスの諸部族との戦闘は「簡単なことよ」ギャロップは遠出する子供のような、わくわくした表情で言うのだ。「戦場において、全てはおれが決する。この、戦争の大天才が決する。それが作戦よ、それが最も美しく、柔軟に

富んだ作戦よ。ははは」

怠惰な感じで歩いていた兵士たちが笑い声を聞いて、驚いたような顔つきで集まってきた。シェイバスは馬を操って、呆れたような顔をつきで彼のいる荷馬車から離れ始めた。

つまりはそう言うことなのだ。と彼は思った。全ての趨勢は奴によつて握られている。つまり……おれたちは、祈り、願ひ、信じるしかないのだ。奴が本当に才ある將軍であると。

「そしておれも將の一人だ」彼は、ギャロップを覗きに行く兵士たちをかき分けながら呟いた。「もしものときは、お前の策など捨て去つて、己の意思で行動するまでだ」

8・西へ！（後書き）

画像はどこの副隊長。
もう……ポロポロや。

9 ・将軍、軍議をさせられる

> i32309 — 4057 <

一日に二十から三十キロずつ移動して、野営や都市での宿営を何度も繰り返して、シャンティたちは最初の目的地であるカバルス地域の要塞都市ブランビーにやっとのことで辿り着いた。

カバルス戦役の際、ブランビーは一時期シャンティにより治められていた。その時は全軍の拠点、糧秣や武器の倉庫として機能していた都市であり、シャンティは持ち前の快活さでこの都市の治安を維持し、その機能を最大限に引き出していた。

シャンティたちカバルス鎮定軍はブランビーにていくらかの休暇をとり、同時にカバルスの各地域の情勢を調べることにした。この頃、西都ヒツパリオンより百名のカバルス騎兵が届けられる。

休暇を告げられると約五千の兵士たちは喝采をあげながらブランビーの街に繰り出した。シャンティ王子がお忍びで少数の近衛兵を連れ立って歩くと、いたるところにサウルス兵の騒ぐ姿が見られたときどき、彼をハラハラさせるような事態が発生しており、彼は本気で禁酒令を出そうかと考えたりもした。

「そこまでやったら酷だろうよ」宿舎に帰った後にギャロップにそれを話すと彼はこんなことを言った。「兵士たちはいよいよカバルスなんぞに出向いてんだぜ。少しくらいの気晴らしもできないんじゃない、やる気なくすぜ？」

言いながらギャロップは市場で買った馬乳酒をイスに座ってがぶがぶ飲んでおり、シャンティは、自分の酒が取り上げられるのが嫌なだけじゃないのか、と邪推した。

「でも、あまり好き勝手やるな、くらいは言ってくぎを刺しておいた方が良くないじゃないだろうか。ぼくたちはカバルスとの友好を強めるために遠征を進めてきたわけだろうか？ それなのに問題を起こして関係がもつと悪化でもしたら……」

「お前ね、人間関係と言うのはそう言う風にぶつかり合って良くなくていくもんなんだよ」

「何を言ってるのやら、君はそのぶつかり合いを積極的に避けるタイプじゃないか」

「おれは鋼鉄のように固い男だからな。まともなぶつかり合ったら相手の心を砕いてしまつのだ」

「おやおや何か言ってるよ。ええ？　なんだって？　おれは鋼鉄のように固い男？　待っててくれ、今すぐ日記に書いてくるよ。君の恥ずかしいセリフをレジエム家の末代まで残すためにね」

「いやなに、それはおそらく無理だろう。なぜならお前はここでおれに殺されるんだから。残したいなら血の文字で残すんだな。しかし、それもこの馬乳酒で汚されるが」

「君は本当にそれが好きだね。そんなに美味しいかい？」

「ジュースに比べたらうまくないさ」ギャロップはヨーグルトのような馬乳酒をシャンティに差し出した。シャンティは受け取って、匂いを嗅いだ。シャンティは馬乳酒の匂いになれないようで、鼻をつまみながらそれを飲んだ。「それでも馬乳酒は栄養価も高いし、産婦に飲ませれば乳の出もよくなる。お前の魔女にでも飲ませてやれ。奴ならきつとドバドバ出るようになるぞ」

「彼女はきつと飲まないよ」シャンティは馬乳酒を入れていた器を返しながら言う。「彼女はおいしい物しか口にしない」

あいさつがわりの会話が一息つくるとシャンティは懐から羊皮紙で造られた本を出してギャロップのベッドに腰を下ろした。寝ころんでしおりの入れられたページを開ける。ギャロップは「なんだよ長期戦か」と冷やかしながらも馬乳酒を飲み続けた。

少しして、ドアがノックもなしに開いた。「シャンティ！」と怒鳴りながら入ってきたのはジャーニイである。シャンティは驚いて彼を見た。

「どうしたんだい？　何か？」異常事態でも？

と彼は首をかしげた。

「やはりここにいたか……連絡を取りやすいように出来るだけ自分の部屋にいろと言っただろう」とジャーニイはギャロップを意味もなく睨みつけた。ギャロップは、私は悪くありません、と言つようなおどけたようなポーズを作って見せた。「いや、それよりも……おい、軍議だ」

「軍議？」ギャロップが最後の酒をグイツと飲みほしてから言った。「昨日今日ここに着いたばかりなのになぜだ。各地の情報だつてまだ分かっていない」

「意味なく従軍してきた奴らがそれを望んだのさ」ジャーニイが言う。奴らとは今回の遠征に従軍してきた武官・文官ら監視官たちのことである。「反乱諸部族との戦闘に対してどんな策をとるのか聞いて、それを王都に送りたいらしい。なんでも……その作戦が認められない場合だつてあるらしいぞ」

「……はあ？」

シャンティとギャロップは顔をしかめながらお互いの顔を見た。そして、つまらないことが起こつたと二人して立ちあがる。

「こつちだ」

とジャーニイが案内人を買って出てくれるらしいので、二人は彼の後について歩いた。シャンティは嫌な予感を覚えながらも、ギャロップの顔を見た。しかし彼の顔はいつもの無表情で、何を考えているか、何を感じているのかは見通せなかった。

板の床をトントン歩いて、大部屋の前につくとジャーニイが「すでに皆揃っているからな」と部屋を指さした。ノックを二回して「入ります」と言った後に三人はぞろぞろと入った。

中には大きな机があり、その上にはカバルスの地図（精巧ではない）が敷かれていた。椅子に座っていた人々が一斉に立ち上がった。三人にお辞儀をする。ジャーニイが「座ってください」と言つような仕草をすると皆が一斉に座った。

今回の軍議に参加する者は総司令官シャンティ、ジャーニイ、將軍ギャロップ、侍従ウイスカ、近衛兵団副隊長シェイバス、ジャー

ニイの侍従ベアード、ジャーニイの近衛兵団副隊長、四人の千卒長たち、カバルス騎兵隊長、サウルス騎兵隊長、王の侍従ラッドハッド、王太子の従者レフティス、エラルジス大將軍の部下サスホスとその他監視官……と雑用である。

見張りのためについてきた監視官たちはどこか尊大な態度だった。対して、実際に戦争を行うはずの者たちは居心地が悪そうにしている。

後から来た三人は上座に置かれた三つの席に向かった。中央にシヤンティが、左にジャーニイが、右にギャロップが座る。ギャロップは座るや否や、紙と木炭を雑用に要求した。

「まず……」とギャロップが最初に声を発するとゴホン、とどこからか咳払いが聞こえた。見てみるとラッドハッドだった。彼は軍議の開始においての始めの言葉をシヤンティに求めたのである。ギャロップは無視した。「まずは、言っておかなきゃならないことがある。面白い話だ、心して聞いてくれ」

監視官たちは口をパクパクしながら、同時に目を丸くしてギャロップを見た。当事者のギャロップはつまらなそうにツンとして言葉を続けた。

「シヤンティの戦史で聞いたかもしれんが……カバルス同盟国軍はおれの言うことをきかなかったから負けた。おれが様子を見ておけというのに、奴らは包囲なんぞをするから、お前たちに負けた。おれの言う通りにしておけば負けなかったというのに………」と、これが面白い話だ「ギャロップがそう言うときとシヤンティは思わず、ふふっと笑ってしまった。監視官たちはじろりとシヤンティを見た。シヤンティは額に汗を浮かべながら目をそらす。ギャロップは続ける。「ここからはある教訓を得ることができる。さて、どんなだと思っ？ えー……君、その、髭の………」

ギャロップが無礼な態度でちょび髭のラッドハッドを指さしながら言うと、ラッドハッドはちょび髭を触りながら顔を真っ赤にしてそれを無視した。見かねた顎髭のベアードが声を出した。「私です

かな。ははは、参つたなあ」と起立した。

「いや、違う。お前じゃない。ラッドハッドだ」ギャロップは虚ろな目でベアードを見ながら言った。ベアードは汗一杯の顔でうすら笑いを浮かべながら、座った。ジャーニイは気まずそうに眼を伏せた。「まあ、いい。どうせわからんだろうからな。いいか、これから得られる教訓はこうだ……名将ギャロップの命令にはさからうな、だ」

「貴様」長身瘦躯なレフティスが静かな声で、しかし怒りをあらわにしながらか言った。彼はおかしなくらい背筋をただして座っている。「わかつているか？　ここは聖なる軍議の場だ。まずは主催者たる王子の言葉を聞くのが礼儀。それなのに貴様は……」

「シャンティがこの軍議の主催者？　馬鹿言うな、コイツはついさつきまでおれの部屋で本を広げながら、母乳の出を良くするといわれる馬乳酒をどうやって妻に飲ませようか、と策を練っていたんだ。こんなものの開催を画策する暇などなかった」シャンティは言い出したことがあったが、とりあえず彼に全てを任せることにした。「おれもコイツ同様暇ではない。なぜなら飲み切ってしまった馬乳酒を買いに行かねばならんからな。さて、お前たちをからかうのもここまでにして……では、本題に入ろうか？　まずは質問から入ろう。

質問があるものは？　………おや、いないようだ。では次に、閉会の言葉だが……これは、今もお、妻に馬乳酒を飲ませる方法を考えているシャンティ王子に依頼しよう。シャンティ？」

「もういいだろう」彼は困り果てたように言った。そしてギャロップに懇願するように、彼らしく穏やかに言った。「彼らはほくと違っていじめられるのには慣れていない。もう少し優しく接してくれ。戦闘時にとる隊形くらいでもしやべってあげれば、彼らもうまく報告書をまとめてくれるだろうさ」

「なるほど、シャンティは夜の生活でよほど妻にいじめられているようだ。君たち、これは報告に値する。今すぐ早馬を飛ばして、シユラク王に伝えるんだ。君の息子は大した男だ、とな」

「ギャロップ！」と、ついにシャンティは声を荒げながら立ちあがった。

「……はん、わかった」ギャロップは拗ねたように顔を背けた。で、雑用からさつき頼んでおいた紙と木炭を受け取ると紙の上に何かを書き始めた。皆がそれに注目する。「さつき、軍議の場を聖なる場と言ったがね……カバルスでは戦場が聖なる場所だ。覚えておいても損はないぜ」

ギャロップがそう言うのとカバルス騎兵隊の隊長は小さく「そうそう」と頷いた。数秒後、ギャロップは何らかの図を描いた紙を地図の上に差し出す。皆は身を乗り出しながらこれを見た。数個の四角が並べられている図だった。ギャロップが木炭で図を指し示しながら説明を始める。

「敵は騎兵が主体。こちらは、歩兵四千と騎兵千六百だから……歩兵が七割ほど、騎兵が三割ほど。で、主力はもちろん騎兵だ」

「しかし騎兵同士の戦いでは分が悪いだろう」「ジャーニーが口を挟んだ。

「どうだろうな。カバルス同盟国軍が力を使っても四万弱の騎兵しか集められなかったのを忘れたか？ 仲間意識の小さいカバルスの諸部族がただけ頑張っても集められるのは千もいかなだろう」「ギヤロップがそう言うとはとんの者がハツとして、次には安心したような顔つきになった。「こんなこともわからなかったわけか？

ふん、こんなのにかバルスは負けたわけか。……で、だな。敵の数は低いことが大体予想できるわけだが、けれどもおれたちは補充を受けられるといっても基本的に現在の兵員で戦っていかねばならぬ。だから敵騎兵の数が少ないからと言って、騎兵だけで戦うのは後々不利な状況を作る要因となる。防御力の高い歩兵で守りながら敵騎兵が分散し出したところを掃討する、と言うのが基本的な構想だ」「しかし」「シエイバスが口を開くと、ギャロップはつまらなそうに彼を見た。言いたいことはわかっている、と言うような目だ。」「……まあ、言わせてもらおう。しかし、お前は前に言っていたじゃない

いか。戦場は全てが行き当たりばったりだ、と。もし敵がこちらの思う通りにならなければ？」

「例えばこちらよりも騎兵が多い場合とかな」

とジャーニーが追撃するようにギャロップに質問した。

「はつきり言っておこう。例えば敵がまた四万の騎兵を集めた場合、我々五千では対抗できん。大体、敵兵四万ともなれば本格的な大規模反乱だからな、おれたちはどこかで籠城戦をしてサウルス軍を待つことになるだろう。まあ、これは極端な例だ。じゃあ、四万よりかは少なければ戦うのか……いいや、相手が三万でも逃げる。二万でも逃げる。一万ならば……やれるかもしれん」ギャロップがにやりと笑う。シャンティは本当に楽しそうだな、と呆れた。「一万が相手ならば、こちらに戦いやすい場所を選び、弓兵で遠距離攻撃をする。さらに地面に罠を仕掛ける。簡単な、転ぶだけの罠でいい。騎兵は先頭が転倒するとそれに巻き込まれて次々に転倒し始めるからなあ。こうやってじりじり敵兵を減らしていつて、良い頃合いになると全軍で掃討だ」

「平原でそれと戦わなければならない場合はどうする？」ジャーニーが言う。

「戦わない……というの駄目なんだろう？ 確かにそれを考えるのには価値がある。戦略上では戦わないという選択肢をとることができるだろうが、今回の戦闘は基本的に戦術単位の戦闘になることが多いだろうからな。それで、どう戦うか……まず、平原での戦いだから奇襲は難しい。つまりは側撃や背撃は容易には無理だな。これを踏まえて考える。つまりは残されたのは正面衝突のみ。こうなると……」ギャロップは手を顎にあてている。この場でこの問題について考えているようだった。「相手の弱点をつくしかない。敵の連携が弱い所、分散している所……ふむ、しかし、もしそれがなすとすれば？ 兵を片方に集めれば何とか。……それ以外の方法は？ そうだな、盾を持つ歩兵を、壁を作るように並べ、衝撃力を殺し、瞬時に軽装剣歩兵で敵機動力を潰す。次に騎兵を使いたい、包囲し

て……これは……大丈夫か？ こちらの士気と練度に左右されるが……」

一番付き合いの長いシャンティですらこのようなギャロップを見たことがなかった。彼は興味深そうな顔つきでギャロップの横顔を見つめていた。

「も、もういい」ジャーニーが引いた。あまりにも酷な状況をつきつけすぎていると、彼は思ったらしい。「さすがに、これは誰にも無理な状況だ」

「いや、主要戦力を片方に寄せて片翼が敵を圧迫、反対の片翼は守りに徹する。つまりは、これが進めば片翼包囲になるわけだ。これで戦えば、ある程度大丈夫なはずだが、問題は防御側が都合よく耐えられるかどうかだ。そうだな、ここには防御専門の兵種でも作って置いておくか？ 丈夫な鎧を着た者でも」ギャロップはそれでも考え続けていた。腕を組み、自分の描いた図を見つめて、息は静かに吸って、吐いていた。「これを発展させれば、士気練度共に高い三倍以上の敵にも勝てるだろうか？ ……いけるかもしれない」

ギャロップは軍議そっちのけでぶつぶつと独りごちている。ジャーニーは図を指差して言う。

「わかったわかった。その話はもう終わりだ……それで？ この図はなんだ」

「……それは、基本的な陣立てだ。こういうものは有機的に動けるように、柔軟に動けるようにせにやならんからな。まず前方に盾を持つてる槍歩兵を設ける。その後ろに剣を持つ軽装歩兵。すぐ両翼に王子と近衛兵団。剣歩兵の後ろにカバルス兵（はん、これをおれが指揮できんだけで戦力は半減だ）。そんで最後方でおれがサウルス騎兵二百を率いる」

「その位置ならば、ええ、カバルス騎兵に指揮を与えられるように思えますけれども？ ギャロップ将軍」とラッドハッドが初めて口を開いた。

「直接指揮しなければ大丈夫だと聞いたが？」ギャロップはむつつ

りしながら答える。「とはいえ……やつらは、おれの行く方向についてくることになる」

「それならば指揮しているのと同じでは、ええ、ないでしょうか？」
「つまりは、おれと奴らの間はいくらか離れていなければならんわけか？ それなら、おれが敵陣にいる間は、カバルス兵は敵陣に突っ込めなくなる」

「それは……そうですが。ええ」

「もともと、お前たちの主人の突きつけた条件が常軌を逸している。もしこの陣形がだめならばカバルス兵など返してしまった方が良く、その方が食料の節約になる」

「そ、それはだめだ、ギャロツプ」思いもよらずシャンティがそれを拒否する。「今回はカバルス人の地位向上のために行っている遠征だ。カバルス兵にも手柄を立ててもらわなければ困る」

「大体」ラッドハッドが心底納得しない様子で言った。「あなたがええ、敵陣に突入する必要があるのでしょうか？ あなたは後方で全体の指揮のみをしているほうが安心なのではないでしょうか？」

「……お前、戦闘に参加したことはあるのか？」彼の言葉を聞いたギャロツプは違和感を覚えた。「たぶん、ないだろう？」

「……従軍ならば、何度か、ええ」

「話しにならない」ギャロツプはカバルス同盟国軍の時のことを思い出しながら、頭を抱えた。「これはとある近衛兵団副隊長にも言ったことだがな。戦闘と言うのは行き当たりばったりなところが多く、現場での直感や機転と言うものが重要視されるわけだ。だからおれがいくら精密な作戦を支持しても、それを遂行するべく走って行った奴らが小事のハプニングにも対処できないようなボンクラだったら作戦もくそもない。おれが自ら隊を率いて敵主力や決勝点をつこうとするのは、おれが一番機転の効く将だし、その方が作戦成功の可能性が高いからだ！」

「……わかりました。ええ、カバルス騎兵の指揮については、少しは目をつぶることにいたしましょう」ラッドハッドは悩みながらも、

ギャロップの演説に納得した様子を示した。「戦闘中ならば、ええ、何が起こったかわかりませんかね」

「……」ギャロップは鼻から大きく息を吐いた。一息ついた感じだった。「それでだな、この陣形からどう動くかだ。さつきも少し言ったが、敵を倒したいならば弱点をつくのが一番だ。騎兵は防御力が弱点だからそこをつく……ってんじゃない。敵陣形の弱点をつくってことだ」

「敵陣形の弱点……兵力の薄い所ってことか。中央、左翼、右翼……それら兵力の差は顕著になるだろうな。なぜなら、敵は諸部族の寄せ集めにすぎないから」ジャーニイが図を見ながら言う。「大体はわかった。中央ではなく、左右にそれぞれ近衛兵団を設置したのはそのせいだな？ お前は後方からそれを見極めて、敵弱点のある方向の近衛兵団と共に敵陣に突っ込むわけだか。残った方は歩兵隊の所に残り、指揮を続ける」

「……けっ、正解だ」ギャロップは不機嫌な顔を隠しもしない。「もし全ての部位が均等な軍隊があるならばそれは統制のとれた奴らかもしれん。そして統制がとれているわけだから士気練度共に高いことも多いだろう」

「その場合は？」

ジャーニイは楽しそうな顔をしながら聞いた。シャンティはさながら兵学の授業を聞いている気分になっていた。子供の頃もジャーニイは兵学の授業だけはこうやって先生に食いつくように質問を繰り返していた。

「……お前の方から出る」ギャロップは頭を掻きながら言った。シャンティが見るに、やや照れている様子だった。「シャンティの戦史はおれも見た。そしてカバルス戦役時のこともできるだけ思い出して、二つを照らし合わせて考えたが……お前たち双子はその戦闘傾向もまるで違うじゃないか、本当に双子なのか？ シャンティは橋の下で拾われてきたとかじゃないだろうな」

「どつという意味さ」シャンティが思わず身を乗り出す。

「……シャンティ、お前の軍隊の密集隊形はかなり固い」とギャロップが言うと、近衛兵団に關係するウィスカとシェイバスのバルバム親子がどきりとして、顔を見合わせた。まさか、褒められるとは……という心境である。「しかしそれは兵士たちの意識が真ん中に行きすぎているということだ。お前はよほど兵士たちに好かれているらしいが……そのせいでお前の軍団は展開と移動が遅い。性質から考えて攻撃には適してないんだ」

バルバム親子は恥ずかしさに顔を赤らめた。確かに、シャンティの軍団はその密集の固さから守りは得意のだが、攻撃はうまくない。これはシャンティの人徳からの現象である。つまり、彼らは敵の首を刈って得る栄誉よりも、王子を守る名誉を重視しているということだ。対して……。

「対してジャーニー……いや、ジニーは」とギャロップが話しを続ける。

「最後に様か、王子をつける」とジャーニーが返す。

「テメーの軍隊は兵士の意識がうまいこと外に向いている。戦闘に勝つには攻撃せねばならんことをわかっている。しかしそれはやはり守りが手薄になるということだ。シャンティの資料で見たが、カバルス戦役時は弟に比べ兵士の消耗が早かったはずだ。それはつまりそう言うことだな」

「……なるほど」ジャーニーは何やら考えながら頷いた。「改善方法は？」

「んなこと知るかよ」ギャロップが対して間髪いれずに返す。

「おい」

「つーわけだ。敵兵力が均等な場合は兄王子側から出る。攻撃力はそちらの方が高く。残ったシャンティは防御が得意。これなら一挙両得だ」

「素晴らしい！ ええ！」

とラッドハッドは拍手を飛ばしながら言った。その表情と仕草には邪気は感じられず、心底感心したようだった。

ギャロップは周りを見渡した。それぞれ、最低限の納得はしたような表情を浮かべ、じつとギャロップを見つめていた。

「……ふん、軍議はもうこれでいいだろ？ おい、報告書を作るのにはどうだ？ 十分か？」とギャロップがラッドハッドを見た。ラッドハッドは十分、と言うようにうんと頷いた。するとギャロップは腕を広げていった。「それなら軍議は終了、即時解散だ。おれは好きに休ませてもらう」

「最後に」レフティスがやはり静かな声で、解散ムードにくぎを刺した。「聞いておかなければならないことがある。ギャロップ將軍、あなたはさつき、三万四万の敵ならば逃げると言ったが、もし……もし、その数の敵を相手に逃げられなくなった場合はどうするつもりかね？」

会議場がしんと静まり返った。皆は、今にも帰ろうとしていたギャロップの方を再度見た。彼は虚空をじつと見ていた。レフティスはもう一度「どのように対処なさるおつもりなのかね」と丁寧に訊き直した。

「……」ギャロップは床の方を見ながら言った。「最初に、その状況を考えなければならぬ。敵が三万四万で襲ってくるのならある程度事前に分かる。で、それからは逃げられない。……こうなった場合におれたちがとる行動は一つだ。たった一人の司令官を、逃がすことだ。その他五千の命を賭してな」

「ぼくを？」シャンティが苦痛に顔をゆがませる。「ぼくのために五千の兵の命を？」

「そうだ」ギャロップは顔をあげて言った。「まずは歩兵を二千ほどの歩兵を配置する。隠せる場所があるならば千ほどを伏撃要因として隠す。そいつらが敵を食い止めている間に他の者は逃げる。その時、カバルス、サウルスの近衛以外の騎兵に千の歩兵を乗せて行く。つまり六百人は騎兵に二人乗りだ。いくらか後、残っていた者たちが撃滅され、突破されたとなった段階でその歩兵たちを降ろして先の捨て駒と同様の配備につかせる。次に犠牲になるのはカバル

ス騎兵、サウルス騎兵、その指揮はおれがとる。次は兄王子。最後にシャンティの近衛騎兵……」

「戦いには勝てないと？」レフティスが嘲笑するように聞いた。「君は、常々自分のことを天才だと言っていると聞いたが？」

「なあに、おれが五千人いるか……」ギャロツプは右手をあげて、握り締めた。彼の顔はそれでも自身に満ち溢れている。「この利き腕のように、おれの意のままに動く五千の兵がいれば勝てるさ。どんな大軍にも！」

シャンティには、彼が嬉々としているのが声を通してわかった。なるほど、君は本当に戦争に狂っている、と彼は微笑ましく思った。シャンティはレフティスを見た。彼は嘲笑を止め、つまらなそうな顔を見せていた。

軍議が終わるとそれぞれが早々に自室へと戻って行った。ラッドハッドやレフティスなどの監視官たちは王都センチュリオンへの報告書を作成せねばならないと忙しそうにしていた。

シャンティは自室に戻って、少し固く、狭いベッドの上に寝転んで、天井を見つめていた。彼は軍議の最後にギャロツプが言ったことについて考え事をしていた。

彼は考えがまとめられない様子でゴロゴロと狭いベッドを転げ回り、心機一転と言うように立ちあがるとテーブルの上にある日記帳の前に向かった。

「ぼくは……」シャンティは呟いた。「本当に、彼らを見捨てて逃げることができるのだろうか。ぼくにそれほどの価値があるのだろうか。いや、あるはずがない。ぼくはおおよそ、そこいら中にいる人間と同じほどの価値しかない。……いや、彼ら以下の価値しかないかもしれない。ぼくは荒野を耕し農作物を作ったことなどない。鉄を打ち、剣や盾や鎧を作ったことなどない。家畜を慣らしたこともない。身にまとう服の原料を作ったこともない。木を組み合わせ、石を組み合わせ、住むところを作ったこともない。アストローパーン先生のように識者を育てたこともない。ぼくは生まれ持った位くらいや、

優しくしてくれる周りの人々に甘え、好き勝手に生きてきただけなのだ。死の危機にみまわれてなお、ぼくはぼく自身の無価値を知りながら、そんなぼくを救おうとする皆の愚挙を了承することができらるだろうか。そんな時こそ、ぼくは、最後の最後で自分に価値を生み出すために、皆のために自分を犠牲にするべきではないのか！たとえ、それによつて、後世の歴史家にぼくが愚かだと評価されたとしても、ぼくには五千の命を救った事実があり、ぼくはそれを、この無価値で愚かな王子の唯一の誇りとして胸に抱き、晴れ晴れと死んでいける！ そうだ、そうなのだ！」

彼は同じことをその日の日記帳に書いている。このような考えの末に彼は「自分は仲間のために犠牲になる」という決意を抱くに至ったが、けれども、それは自分がもしもの時にとるであろう行為に対し、特に何の価値もない「理由付け」をしたにすぎない。

なぜなら、人として価値だとか、王族としての誇りだとか……そんなものがなくても彼はきつと仲間の命を助けるために、容易く自分なんかを犠牲にするだろうから。

9・将軍、軍議をさせられる（後書き）

「画像はジャニ男です。」

岩明均さんの「ヒストリエ」に出てくるアレクサンドロス三世に似てしまった。全く関係ない人をモデルにしたのに……。

10・戦いに休息などなく

> i32337—4057<

「槍歩兵隊、何をしている！ 突破されるぞ、もつと密集しろ！」
ギヤロップの怒号が戦場に鳴り響く。

すでに戦いは始まっている。敵兵は歩兵二千、騎兵千の合計三千。それらが小さな平野で五千強の戦力のサウルス兵と激突している。

まずは密集隊形の敵歩兵がこちらの歩兵と衝突を繰り返して、敵歩兵の密集隊形が崩れ、退却するかと見えた瞬間、敵歩兵の隙間から電光石火の騎兵隊が突撃をかけてきた。それによりカバルス鎮定サウルス軍は防戦に立たされた。ギヤロップも防衛に残り、現状は反撃のタイミングを図っているところだった。

「ギヤロップ！」ジャーニーが数人のお伴と共に彼に向かって走ってきた。「シャンテイがいらない。おい、理由を知らないか？」

「馬鹿が、そんなことを聞くために持ち場を離れたのか？ 糞、お前の指揮している歩兵左翼を見る。押され始めている」

ギヤロップが怒鳴ると、ジャーニーがそちらを見て顔を青くする。「だから、シャンテイは？」急ぎながら彼は言った。

「説明している暇はない。持ち場に戻れ！」彼が押しつけるように命令すると、ジャーニーはしぶしぶ持ち場に戻った。ギヤロップは持ちこたえている歩兵たちに檄を飛ばす。「もう少し持ちこたえろ。すぐに反撃のチャンスがやってくる」

サウルス兵士たちが返事をするように、声を合わせて何事かを叫ぶ。断続的に突撃してくる敵兵の衝撃力に耐えきれなくなって地面に崩れる兵士が出ると、すぐにそこをカバーするように後ろの兵士が盾を構えて飛び出す。

オエアー、オアー、ゴラー、ハーンと獣のようなまったく意味のない雄叫びと、鉄と鉄が撃ち合う不愉快な金属音が響く。いつも乾いた空をしているカバルスにしては、この日は曇天だった。いや、

さつきまでは快晴だったにもかかわらず急速に暗雲が立ち込め始めた。

グン、グン、グンと敵兵は勢いを増しながらサウルス兵の作る盾の壁を押しってくる。サウルス兵は盾同士のわずかな隙間や、その上から敵兵を槍で突き刺す。敵兵の兜には槍の先端がいくつも埋まっている。

暗雲はごろごろと音を立てながら、やがては戦場に雨を降らせ始めた。その雨はすぐに大雨になり、「スコールだ！」誰かは叫んだ。一瞬にして周りの様子が分かりにくくなる。

「突撃い！」と良く通る声が雨音を切り裂いて戦場に響く。同時に敵軍に何らかの動きが見られた。

ギャロツプは舌舐めずりして戦場を睥んだ。みるみるうちに敵兵の統制が無くなっていく。ギャロツプは手を動かして、自分の指揮するサウルス騎兵団に突撃の準備をするように指示した。彼らは唇を真一文字に締め、槍を握り、それがなくなった時のための剣は腰についているかを確かめた。その中の誰かが言う。「のどが渴いた」「おい、水ならそこいら中にあるぜ」返事をした男は阿呆のように口を空に向かつて開け、空から落ちてくる痛いほどの雨を舌で受けた。何人かの兵士が苦笑しながらもそれをまねする。

「無駄だ」ギャロツプは戦場の様子を観察しながら言った。戦場の音楽の中で仲間の声はなぜかよく聞こえる不思議。「その渴きは、敵を殲滅せねばならん」

「ちげえねえや」兵士の一人が答える。「行って、殺して、血をすすらなきや」兵士たちの下卑た笑い声が響く。ギャロツプは右手に持っており槍を天に向けた。兵士は恐怖を噛み殺すように、歯を食いしばった。ギャロツプはふつと息を吐いた。

「まずは顔見せするだけだ。敵に、うぎゃー、おれたちを殺しまくってるサウルス騎兵がいる。うぎゃー、逃げるー。つてな感じに思わせるだけだ。それだけで、心理的打撃は大きい」敵兵を真似た將軍を見て、騎兵隊はうすら笑いをする。「ふん、この状況で笑う余

裕があるんなら、まあ、大丈夫だろう」

澄ました顔で目の前を見つめる彼の後ろで、兵隊たちはぶんぶん
と首を横に振った。

「……それでは、一同」ギャロップが気を取り直すように言った。
兵隊たちがびくりとする。「冷静に……速歩前進」

槍を敵方に向け、馬を速歩で駆けさせた。ギャロップを先頭にし
て、同じ速度でサウルス騎兵は続いた。ポクポクという音を戦
場に落としながら、彼らは前に進んだ。槍兵がさつと横に避けて彼
らの進撃路を作った。

前線はすでに混乱の渦にあつた。敵兵は、自分たちの陣営の後ろ
で何かが起こっているのを感じ取って、慌てていた。ギャロップは
混乱して前を走り抜けた敵兵をグチツと槍で突き殺した。

「前へ！ 前へ！」ギャロップは一声ごとに敵を突き殺しながらポ
クポクと進んでいく。後ろのサウルス騎兵も「はっ！ はっ！」と
返事をしながら錯乱した敵兵を殺していく。雨降る戦場で蹄の音が
リズムカルに闊歩する。その音はこの慌ただしい場所に、驚くくら
いに穏やかに恐怖を振りまいている。戦争の中心地で猛威を振るう
サウルス騎兵を見た敵兵はついに完全瓦解し、剣と槍と盾と兜を捨
てて四方に逃げ始めた。

「逃がすな、逃がすな」と遠くでジャーニーが命令を飛ばす。「逃
亡者、反抗者は殲滅、殲滅だ。降伏者は全ての持ち物をはぎ取り後
方に送れ」

ギャロップのいる中心地ではもう敵はほとんどいなかった。ギャ
ロップが後ろを向いて言う。

「これから敵主力に向かう。第一百人騎兵隊はおれと共に敵主力の
撃滅を目指し、第二百人騎兵隊は敵主力にいるはずのシャンティた
ちを探せ」

兵士たちは元気よく「はっ」と返事をする。

「では散開。生きて会おう」

兵士たちは嬉々として「はっ」と返事をした。

雨はまだ降り続けている。ギャロップたちは速歩のままですいすいすいと敵主力に侵入した。

「総司令官たるシャンティを少人数で敵陣に突撃させるとはなんだ！」

死体がそこいら中に残る戦場後地でジャーニイがギャロップに突っかった。

ギャロップはつまらなそうな顔で戦場を見渡している。傷ついたサウルス兵たちは仲間に手当てしてもらっている。元気な者は逃亡者の追撃や周囲の見回りをしている。雨は完全に止んでおり、空は嘘のように真っ青だった。しかし彼らは空のついたその嘘によって一瞬にして勝利をもぎ取ったのだ。

「戦時中に、雨が来る前兆をおれに教えたのはシャンティだ。さすがに本を読みまくっているだけあってそこら辺の知識はなかなかある。それでおれは奴に、雨にまぎれての敵主力背撃をするようにと返事をした」

とギャロップは血や雨でぬかるんでいる戦場を足でじゃばじゃばと歩きながら言う。

「なぜ、お前やおれじゃだめなのだ！」ジャーニイは彼と並びながら歩く。

「おれが行く場合、後のことをいちいち誰かに説明せにやならなくなるだろう。あの状況ではその時間すら惜しかった。そしてお前はあの雨にも気付いていなかったし、それを使用することも考えだせなかっただろうよ」

「なぜ？ おれだって、あれが来ることがわかっていれば」

「ここの雨は基本的にあんなスコールばかりだ。お前は雨を使用して敵背撃などと聞いても、瞬時に納得してくれんだろう？」

「……」ジャーニイは地面に目を伏せ、悔しそうに歯をカチカチさせ始めた。

「あー！」

突然、ギャロップが悲痛な叫びをあげた。

「どうした？」

ジャーニイは敵襲かと思って、腰の剣に手を伸ばしながら訊いた。「あれ……」ギャロップは遠くにいる二頭の馬を指さした。一頭は剣で造られた角のついた面甲シヤフロンを装備している白い馬で、もう一頭はすらりとした鹿毛の馬である。その二頭の馬は必死になって交尾しており、それを見ている兵士たちが「いけ、そこだ、やれえ」と歓声をあげていた。「あれは……おれの馬だ。」

ジャーニイは遠く過ぎてよく見えないので、目を凝らしながら聞いた。

「……お相手は？」

「ルルディファイロ……」

ギャロップの目からは生気が無くなり始めていた。

ブランビーを出発したカバルス鎮定軍は西都ヒツパリオンにつく前に野盗と二回ヤ鬪り合い。その両方をギャロップの戦術で打ち倒した。ヒツパリオンについた後はそこを拠点とし各地の紛争を治め始める。

中規模の、正面から戦おうとする敵兵に対してはギャロップの作戦も有効だったが、敵からの攻撃は基本的にゲリラ襲撃であり、ギャロップが最初に言った戦術だけでは対処できなかった。しかしギャロップはすでに対策法を考えており、軍の分割などで敵を大きく包囲して敵の地の利を打ち消した。土地勘についてもギャロップは元からここにいたのだからもちろん十分すぎるほどそれがあつた。

シャンティやジャーニイも（精巧でない）地図や斥候せつこうの集めた情報を駆使して敵兵を追い回した。この時、シャンティは元ヒツパリオン王族、現カバルス地域監督者にカバルス地方の精巧な地図を依頼しており、これは大分後になって完成する。

そして現在は二二七年の夏の真つ盛りである。ここまでに彼らは十回を超える中小規模戦闘を経験しており、敵を取り逃がすことは

あれど敗北はまだ無かった。

シャンティの侍従であり、近衛兵団の隊長であるウイスカは戦場に生えていたちようどいい大きさの石に腰下ろしながら今回の戦闘の記録を記録していた。その横では息子のシェイバスが剣についた人の脂を拭いていた。

シェイバスはそれが終わると戦場後地を見渡していた。死者がすぐ近くにもあるが、それは大体が敵兵である。

「すごいもんですね。うちの將軍様はよ」と彼はぶつきらぼうに言った。「しかも王子やおれたちを一番危険な所に突入させてよ……全く、怖れいますぜ」

「まだギャロップ將軍を認めていないのか」

ウイスカは紙の上でペンを滑らせながら聞いた。

「認める？」シェイバスはムツとしながら返す。「將軍としては認めてる。しかし……」

彼は以前にも考えていたことが、いよいよ考えすぎではないのではないかと思い始めていた。強すぎるギャロップ將軍を恐れた王都の官人たちが王子もろとも彼を排斥しようとするのではないか、というあの考えである。

「親父殿はどうですか？」シェイバスは自分の考えを言わずに尋ねた。「ギャロップをどのように評価しているのですか？」

「將軍としては……おそらく、何者にも比類なき才がある」

「比類ない？ ならば、我らが王よりも……ですか？」

「……」ウイスカは少し考えた後、小さく頷いた。「そしてまだ若い。彼がサウルス国で本当に軍人をしてくれるのならば……」

「くだらない」

とシェイバスは返すが、その後の言葉は続かなかった。彼もギャロップの軍才には舌を巻いている。勝てる者も思いつかない。彼への対抗者として、ジャクナー世、シハルク王、シユラク王……これらの名を挙げてみても、それは臍負にしかない気がしていた。

「お前は、彼に率いてもらいたいと思わないのか？ 彼の下で名を

はせたいと思わないのか？」

「なんだって？」シエイバスはおかしそうな顔をして父を見た。「親父殿、それはどういう意味ですかね？」

「お前は思ったことはないか？ 歴史に名を刻みたいと」ウイスカは書くのを止めて、それでも紙の上に視線を落としま息子に、自分の心根を語る。「しかし歴史に名を刻めるものはそういない。おそらく、偉大なる業績を残した王族くらい……それが、その下でそれに類する功を為した将軍か……。ここより北、サウルス国よりもさらにさらに北の国に、そのような者たちがいたのはお前も知っているだろう。わずか二十歳にしてモーキリニアの北に広がるあの広大な地を支配した偉大なる王。わずか三十二歳にして死んでしまった偉大なる王を。そして、その下につき従っていた伝説的な十数人の大將軍を」

「しかしおれがこれから先、忠誠を誓うであろう王はおそらくジャクナ三世王太子で、その下にいる将軍がギャロップだとしたら、おれは名前など………親父殿？ つまりは、あなたはギャロップを？」

「違う。そうではない、本当にそうではない」ウイスカは苦しそうに首を振った。「私は偉大なる大將軍の下の、独りの侍従でもいいんだ。ただ……私は憧れているんだ。戦争の覇者の歩く、偉大なる勝利の道を……」

シャンティに物を書く喜びを教えた多筆家の彼は、やはり自分の愛するその分野にて何らかの業績を残そうとしていたのだろう。シユラク王につかえ始めた初期の段階で彼が書いた書物からもそれが伺える。

彼の残した『シユラク王東方遠征記』は起こった出来事の詳細ではなく、どちらかといえば古代に見られるような豊かで雄々しい詩的な表現で書かれている。なお、『シユラク王東方遠征記』はシユラク王へ差し出した物ではなく、彼は別に簡素に事実のみを書いた報告書も著している。

「つまり」悲痛さを含んだ父の言葉を聞いたシェイバスは、胸糞悪そうに立ちあがり、剣を肩に掛けながら、蔑むような目でウイスカを見ながら低く怒鳴った。「親父はギャロップの戦史を描く、奴専属の歴史家になりたいわけか？ シャンティ王子の侍従ではなく？ …… それほどつまらないか、王子の歴史を書くのは」

「お前にはわからない。歴史とはいつも喧騒と狂気と異物感を主人公に書くものだ。そして戦場にはその三つが揃っており、將軍の前にはその戦場と、物語を一層引き立てる勝利がごろごろと転がっているのだ！」ウイスカは顔中に汗の玉を浮かび上げながら、自虐的な笑みを息子に向けた。「… 王子の静かで華やかで健やかな日々はきつと… 未来を生きる人々には、つまらないだろうよ」

「ならば、今からでも奴の侍従になればいい！」シェイバスは胸の奥がぶるぶると震えるのを感じながら言った。自分が誇りに思っていた父親が、愛しきっていた父親が見事に自分の目の前で崩れ去ったのを感じながら言った。「奴と共に生き、退廃的で嗜虐的（せきじやく）で…… そして…… ふん、まあ、せいぜい良い老後を送るがいいさ」

シェイバスは言い残すと、とぼとぼどこかに歩き始めた。ウイスカはその後ろ姿を目で追いながら、頭を抱えて守護聖獣に懺悔した。

この頃、ウイスカは王子への不忠と將軍への畏敬などから来る葛藤を日記に書き綴っている。

シェイバスは戦場後地を歩いて兵士たちに指示を出した。敵兵を追いかけていた騎兵たちも戻ってくると、シェイバスは戦場から出て行く準備をするように全軍に伝令した。そろそろ日が暮れようとしていたが、こんな不衛生なところでは野営できない。死肉を喰いに集まる野犬共に悩まされ、恐怖から夜寝られないなんてことはつまらない。

シェイバスは元気な近衛騎兵隊員に野営地を探してくるように命令すると、自分の分の準備を始めた。その最中、ギャロップが顔を

真つ赤にしてどこかに歩いて行くのを見たシェイバスは何事か、とそれについて行った。

ギャロップはシャンティの寝ている木陰へ猛然と歩いていき、疲れ切つてぐったりとしているシャンティの胸ぐらをいきなり掴みあげて無理やりに引き寄せた。

「おい、お前の愛馬がおれの馬を無理やりやってやがるぞ！ どうしてくれる！」

「なんだ、ギャロップかあ」彼は寝起きすぐのふんわりとした感じに返した。日々の疲れが蓄積しているらしく、このところシャンティはよく眠っている。「ルルディファイロはこのところの勝利の連続で興奮してるんだ。おれもやればできるんだ、って昨日も言つてたよあ」

「え、しゃべつたの？ いやいや、それどころじゃない。その馬鹿がだなねえ、いま何してると思う？ シャンティ君？」

「そうそう、ルルディファイロと言えば、君から貰つた角の面甲シヤンロン。あれをすごく気に入っていてね。戦闘が終わつても外そうとしない。ぼく、調べたんだよ。あの角の面甲シヤンロンはカバルスでは総司令官の馬がつけるものらしいねえ。君も粹だねえ。形から入るタイプとも言えるねえ」

「おい。おれの話を聞け。聞かんと、てめえ、ぶん殴るぞ」

「おいおい」シェイバスは王子に掴みかかっているギャロップの手を握る。「話しは聞いた。將軍、それを王子に八つ当たりするのはおかしいんじゃないですかね」

「何が八つ当たりだ」ギャロップはほとんど涙目になって叫んだ。

「コイツがちゃんと馬鹿馬を躡けておかないからこんなことになつたんじゃないかっ」

「ああ、それは、その、返す言葉ありませんがね。しかし……しかし……はい、返す言葉ありません」

「あ、ほら、ギャロップう。カラス飛んでるう」

シャンティはぼおつとしながらカラスを指さした。ギャロップの

こめかみに浮かんだ血管がぴくぴくと動きだした。

「隊長」今度は兵士がやってきた。「野営地を探しにいった騎兵隊が戻りました」

「わかったわかった」シェイバスはとりあえずギャロップの握りこぶしをほぐして、王子から引きはがした。「移動の準備をしてくれないませんか。こんなところで寝たくないでしょう?」

「……ふん」

ギャロップは涙目のままだどこかに去って行った。シェイバスは胸をなでおろす。

その後、シャンティを何とか正気に戻して（ジャーニーが平手を見まった）一同は野営地に移動を開始した。

近くに川や雑木林がある野営地ではすでにテントなどの骨組みが建てかけられており、後の作業は皆で平等に分担して野営を完成させた。完成した頃には辺りはもう暗くなっており、サウルス軍は篝火台をいくつか設置した。

見張り以外の皆が同時にとった食事は質素な物である。内容は固いパンやチーズ、葡萄酒、ドライフルーツ、燻製肉、酢漬けの魚、卵などが毎日適当に配られる。これは野営の時の食事であり、宿営つまり都市での宿泊の時は柔らかいパンやもつと新鮮な肉や野菜果物を食した。サウルス軍は特に乳製品が好きなようだった。それを聞いたギャロップはサウルス女性の胸を想像しながら「なるほど」と言った。

彼らは食事の時に今日の戦功を発表し合った。やはり主役はシャンティと彼の近衛兵団であり、彼らはヒツパリオンで流行していた歌を、肩を組んで歌った。カバルス人も同じ所において、歌う彼らを生やし立てたりした。ここだけ見ればサウルス国にはびこる人種差別は見られなかった。シャンティの目には、彼らは戦友以外の何物でもなく、すでに強い絆で結ばれているように見えていた。

こんな時、シャンティは賑やかな兵士たちにくまなく溶け込みユニケーシオンをとるが、ジャーニーは平民出身者たちとはどう接

すればいいかわからず自然と無口になった。だから彼の周りには比較的無口な兵士が集まった。けれども、そんなジャーニーも酔いに酔ってくると、「自分が王位についた時はお前たちを官人や將軍として引き立てよう」と愉快そうに演説し、喝采を浴びたりもした。

さて、食事の最中も見張りのためのいくらかの兵士が歩哨となって野営の外を歩くわけだが、これは交代制となっている。食事が終わった後、歩哨の任に当たっていない者はそれほどやることもないので、やや窮屈な大天幕テントの中で眠った。

外から聞こえる人の話し声や、獣の声、虫の声に耳を傾けながらシャンティは上級職の者のためのテントの中で、簡易ベッドに座り日記を記していた。中身はやはり今日の戦史のことだった。けれども昼間少し寝たにもかかわらず睡魔が襲ってきて、ついうとうとと始めると結局戦史を完成させる前に眠ってしまった。

やがて獣や虫も眠りにつき、聞こえる音は歩哨の足音だけになった。

夜の闇は人から視界を奪う。視界を奪われることは人にとって重大なことだ。古来、夜戦と言うものは基本的に好まれない。なぜなら視界が十分でない状況においては戦場の情報は集めにくく、そのため計算が成り立たない。つまりほとんどの出来事を天運に任せなければならなくなる。だから戦争や、追いかける方に圧倒的有利な追撃でさえも夜になると自然と止むのだ。

それでも、視界を奪われた不自由さを十分に承知のうえでの、計算したうえでの夜戦ならば？

始めに気がついたのは卓越した聴力と危機感知能力を持つ獣たちだった。鳥はすぐさま雑木林から飛び立った。野犬たちは群れを為し、雑木林に迫る者共を偵察した後に退散した。

風切り音がした次の瞬間にはサウルス人の歩哨が一人地面に伏した。近くにいた兵士の一人が驚いて、倒れた彼の状態を確認する。が、しゃがみこんだ瞬間後頭部に矢が撃ち込まれた。残りの兵士た

ちが絶句する。まぎれもない奇襲だった。

木々の上から矢が射こまれた。矢は次々に兵士たちに食いついたが、胸を食いつかれた兵士は最後の力を振り絞って叫んだ。

「敵襲！」

野営の中にいた兵士がそれを聞いた。感染拡大するように「敵襲！」の聲が野営内に伝わり、兵士たちは跳ね起きると同時に鎧をつけ、盾と武器を取った。「上」と誰かが叫ぶと、皆が一斉にテントの天井を見た。赤々とした火がぱちぱちと音を立てながらテントの布を喰っていた。兵士たちがテントの外に出ると野営中のテントが燃えており、昼間のように明るく、暑かった。

「自分たちの隊長を探すとともに、王子たちを守るんだ」と隊長格の男が命令するとサウルス兵は各々の方向に走った。火炎のせいで暑くて暑くてたまらないのに、齒はガチガチとなり、小便を垂れ流しながら走った。

世紀末的な感じにアーアーと狂ったように叫んだ男がいる。混乱して味方を切りつけた男もいる。その間も次々に火矢が野営内に打ち込まれている。サウルス兵は頭の良い兵隊だからこの矢が止んだ後のことを理解していた。敵兵の襲撃だ。それが始まる前に何とかして自分たちの態勢を整えなければならない。彼らは走った、走った。走るだけでは何も状況は変えられないのに。

「遅い、遅い」ギャロップが馬に乗って姿を表わす。「ちんたらするな。すぐにおれの下に集まって体勢を立て直せ。弓兵はいるか？ いるな。よし、ここからでもいい、すぐに反撃を開始しろ」ギャロップに言われると弓兵たちは外に向かって矢を射始めた。「奴らは自分たちが傷つくの異様なほど嫌う。だから、反撃と共に逃げる者も多い。槍兵はいるか？ いるな。よし、従来の際は捨てて近くの者と新しい隊を作れ。隊長は年長者がしろ」槍兵たちは言われた通りにした。盛んにお互いの歳を聞きあうのが、ギャロップは少しおかしかった。「剣歩兵はいるか？ いるな。よし、お前たちは入り口で待ち構えて少数で突撃してくる敵兵を攻撃しろ。敵兵が多

かったり、相手ができないほど強かつたらすぐに逃げる。後は弓兵と槍兵で相手をする」剣歩兵は返事をするに散っていった。

ギャロップは燃える野営の中を冷静に見回した。こんな状況下でさえ、死の恐怖も、負けるかもしれないという思いも、彼の心の中には浮かび上がってこなかった。彼は大した焦燥感も感じず、敵の策略の全貌と自軍の次の一手を考えていた。

「ギャロップ將軍」と言いながら騎兵がやってきた。ギャロップが、^{テント}天幕から出て一番初めに会ったので情報収集を命じた者である。「ジャーニイ王子とその近衛兵団がいません。一足早く隊を再編することができたらしく、先に外に迎撃に出たようです」

「そうか。サウルス騎兵は？ カバルス騎兵は？ シャンティは？」
「サウルス騎兵は数が少ないので編成が早いようですが、夜に酒を飲んでいたのでまともに馬に乗れるのは半数のみです。それはカバルス騎兵も同様で、彼らは百人ほどこしか集まれています」

「シャンティは？」
「近衛兵団をまとめ上げています。……いえ、きました」

ギャロップを見るとシャンティは近衛兵団と共に彼のもとにやってきていた。シャンティは「糞つたれ、すごいな！」と言ったが、彼の顔は恐怖を隠せずにいた。

「ギャロップ。ジャーニイが敵騎兵を外で見かけたらしくて、それで、それを追いかけて行ったらしいぞ」

「何を馬鹿な！ まだ攻撃に移る時じゃない」ギャロップは眉間にしわを寄せて言った。「あの馬鹿王子。攻撃ばかり考えやがって。おい、これは罠かもしれないぞ」

「わかってる。君が行くんذار？ いくら兵を持って行く？ ぼくはいくらでここを守らなきゃならん？」

「お前の近衛兵団以外の騎兵は全て持って行く、準備できている者に限るがな。歩兵もだ、剣歩兵半数、弓歩兵半数、槍歩兵半数。お前は残りの兵を束ねろ。まずくなったら構わず逃げろよ。逃げる方向は時間があるうちにちゃんと調べておけ！ いや、北だ、北に逃

げろよ。都市があるから」

「わかった、すぐに行ってくれ」

ギャロップは彼の言葉を聞くと馬を翻して、準備に向かった。

弓矢はまだ降り続いていった。シャンティは矢を防ぐために近衛騎兵たちに盾を被るように言った。「王子、正気ですか？ かなりダサくなりますよ。ははは、ははは」と近衛騎兵の一人が顔をひきつらせながら笑う。シャンティは彼の肩を叩いて言った。

「君は正気らしい、この期に及んでファクションを気にする余裕があるとは？」

「……ははは、は」近衛騎兵は一度大きく顔を歪ませてから、真面目な顔に戻る。「い、いえ、すみません。取り乱していたようです」「なに、それが普通の反応だ。それが常人だよ」

「な、ならば、我が將軍は？」

「あれは、彼は戦闘狂いだ。そうでなければ超人なのだ。古代の英雄よろしくね」

「王子、武官たちの保護の準備ができました」

シエイバスがやってきて、近衛騎兵たちが頭に盾をかぶっているのを見て驚いた。

「了解した。さて」シャンティは盾を前に差し出しながら言った。

「君にもかぶってもらおうか？」

「王子」シエイバスは訝しみながら質問した。「ちゃんと正気ですか？」

ギャロップはサウルス、カバルスの両騎兵と大量の歩兵を連れてジャーニイが向かったといわれる西の方角に向かった。歩兵たちはひいひい言いながら騎兵たちについて走った。

後ろを振り向けば野営がぼんやりと燃えていた。まだ矢が射られているようだった。ギャロップは違和感を覚えた。こちらを襲う敵騎兵隊をジャーニイが追い払ったのに、なぜ弓兵はまだ矢を射っているのか。

そうこう考えているうちにジャーニイの近衛騎兵隊が見えた。兵力四百ほどの彼らは千を越えるであろう軍隊と対峙していた。彼らは歩兵、騎兵入り混じっている。そこにギャロップが千八百を率いて到着した。

「馬鹿王子」とギャロップが叫んだ。「どうした？ 戦闘は起こっていないのか？」

「ああ」ジャーニイは敵軍を見ながら、彼の下に近づいてくるギャロップに状況を説明する。「おれが二百ほどの騎兵を追いかけて来た時には奴らはここに集合していた。おれたちを見ると一拳に押し寄せてくるかと思ったら……そうではなかった。よくわからないが見た所、敵騎兵の数はそれほどではないので、それを警戒したのかもしれない」

ギャロップはいまだに脳裏にこびりついている違和感がこの説明で強まるのを感じた。

サウルス軍殲滅のための騎兵突撃は失敗したのに、なぜまだ野営を攻撃しているのか？ 兵数劣勢のジャーニイに対してなぜ攻撃を仕掛けてこないのか？ いや、だいたいこれだけの数があるのになぜ二百の騎兵で襲ってきたのか？

最後の疑問はここにおびき出して攻撃するためというのが「答え」であろうが、結局それも実行していない。だいたい、なぜおびき出さなければならぬのか。答えは簡単、サウルス軍の分散が目的だ。そして、分散は成功。それなのに、攻撃していない……。

「……やられた」ギャロップは顔を真っ赤にして、激怒を表に出さないように歯を食いしばった。しかし、それは失敗している。彼はその漲る怒りの感情を誰にも見える形で表現している。「奴らの目的は、シャンティだ！」

シャンティは北に向かって逃げていた。それと共に自分の現状を把握し始めており、さらにはギャロップやジャーニイの現状にもあらかたの予想をつけていた。

彼はある言葉を頭に思い描く。

戦闘の基本は自軍の分散、それにつられた敵軍の分散、敵決勝点への自軍の集中である。

「それを、これでもか、と言う感じにやられたね。それにしても彼らはずいぶん知恵を絞っている。もしカバルス鎮定軍総司令官のぼくが少ない兵力であつちに行つていたらすぐにぼくを撃滅したでしょう。彼らがジャーニイへの攻撃を開始していないであろう理由は色々考えられるが……第一に、攻撃を開始してジャーニイに逃げられたら、ギャロップのおびき出しが失敗する可能性があること。第二に、もし敵兵がジャーニイ、ギャロップと言う風に連戦で戦えば、合計の戦闘時間が短くなる可能性があること。だって、ギャロップは戦闘途中の混乱した敵軍に冷静な兵隊を投入できるからね。例えばジャーニイを倒せるとしても、それ以上に敵軍は戦闘時間の短縮を避けなければならぬ。なぜなら彼らの目的はジャーニイじゃない。カバルス鎮定軍の総司令官であるぼくなのだから。わかりますか？ 目的のみの遂行、それが軍隊の基本です」

シャンティは自分の後ろにいるラッドハッドに言った。ラッドハッドはがたがた震えながら質問した。

「ででで、では、ええ、ええ、ギャロップ将軍がこちらに残っていませんか？」

「ジャーニイを撃滅。そして、それをこちらにいる兵士たちに伝え、ほぼ無傷で退却。しかし敵兵には、ぼくが野営に残り、ギャロップがジャーニイ救出に向かうとわかっていたでしょう」

「ならば、ええ、我々は逃げる事が出来ていますが、ええ、この後は一体全体どうなるのですか？」

ギャロップが出て行った後、シャンティたちの残る野営には数えきれないほどの敵兵が強襲した。皆、ゲリラ兵とは思えない訓練された屈強な兵だった。それには混乱したサウルス軍では太刀打ちできなかつた。

シャンティたち近衛兵団は監視官を自分たちの馬に乗せて野営を

飛び出した。残った歩兵はどうなったのかわからなかった。

「おそらく」シャンティは目の前の荒野を見た。まだ少し先も見えないほど暗かったが、遠くで蠢く影があるのが見えた。「敵主力が待ち構えています」

後ろからは野営を強襲した敵歩兵も迫っていた。

「しかし、大丈夫」シャンティは汗がべつとりの掌を握り締めていた。「ギャロップはすでに敵の思惑を看破しているでしょうから、すぐに何らかの対策をとります」

シャンティは言いながら騎兵隊を止めた。後ろについて来ていたサウルス歩兵隊は息を切らしながら立ち止った。

「では、ギャロップ將軍はすぐに？」「きますか？」

とラッドハッドはやや安堵の表情を見せた。

「いや、ギャロップが作戦を看破したのを知った敵は、ただの時間稼ぎであるにらみ合いを止めて行動に出るでしょうね」

「さつき、ギャロップ將軍が、ええ、言っていたのを聞いたのですが。ええ、ゲリラ兵は自分たちが傷つくのを恐れると。ええ、ならば、敵は一目散に逃げて行き、やはり將軍はすぐにこちらに来られるのでは」

「本当に、敵がゲリラならね……。おそらく、ギャロップはただ兵士を勇気づけるためにそれをいったに過ぎない」

「ええ？」

後方から追ってきていた敵歩兵が立ち止った。前方の敵主力（暗闇によりわからないが千から三千）は一步一步大きな足をたてながら近づいてきた。

「王子、逃げてください」ウィスカがシェイバスを含む数人の精鋭隊を即座に作った。「ここは我々が！」

「嫌だ」シャンティたちが会話をしていると後方の敵歩兵も彼らに向かって歩み始める。「こんな状況なら、逃げる方が危険だ……と、ぼくが残る理由はそういうことにしておこう」

「王子！」ラッドハッドがぶるぶる震えながら叫んだ。「逃げるべ

きです、ええ、逃げるべきなのです」

「嫌だと言ったら嫌だね。大体、ぼくには、君たちすべての命をかけてまで守る価値があるのか？ いや、そんなものは無い」シャンティが一人一人の顔見渡しながら、すねた少年のように唸る。「ぼく一人のために何百人やら千人やらの命が無駄になるなんて……ぼくには耐えられない」

「王子！」ラッドハッドが逃げることを懇願する。

「皆の者、馬から降りろ。そして何の因果か頭についている盾をとれ、ぼくたちはここで防衛戦を行う。我々の勝利条件はギャロップ、ジャーニイの率いる軍がここに到着することだ」シャンティは馬を下りた。が、誰も彼の言う通りにはしなかった。誰もが信じられないような顔つきで王子を見ていた。「どうした？ 聞こえなかったかい？」

誰かが言った。「王子、正気ですか？」

「まさか！ 正気なはずがない。ぼくはどうやら、知らぬ間にギャロップの狂気にあてられてしまったらしい。いや、それとも……」シャンティはいつそう快活に笑いながら言った。「英気の方だろうか？ ははは、もし、ぼくがあてられたのが英気ならば、ぼくもまた英雄だ。そして君たちは英雄を支える勇者の大軍だよ」

彼の近衛騎兵たちは観念したように馬を下り、頭の盾をとった。

シェイバスは王子に近づいて言っつて晴れ晴れした顔で言った。

「死ぬ時は一緒です」

「なにを！ 生きるのだよ、ぼくらは生きるために戦うのだ」シャンティは笑顔で返した。「大体、言っただろう？ 生存確率から考えて、こっちの方が合理的さ。考えてもみなよ。ぼくらの防御力の高さはギャロップのお墨付きだが、逃亡力なんてのはまだ評してもらってすらない」

彼らは慌ただしく盾を集め、陣形を作り始めた。敵軍の方も、サウルス軍の突然の反撃にいつでも対処できるようにそろそろと彼らを囲み始めた。

彼らは包囲された。突破して逃げることはもうできない、反撃はありえない、敵を滅ぼすなど夢のまた夢。しかし、彼らの死命は自分たちの手に握られていた。しっかと自分の手で握っていた。彼らの生き残る方法は、ギャロップたちが来るまで盾に守られた小さな円を守りきることだけだった。

それは歪な陣だった。どういった意味があつてそんな陣形をとつたのかは敵兵にはわからなかった。盾によって作られた円、それを支える人、槍だけを持った兵、少しの弓兵、役立たずの監視官たち、王子、そして鞭を打つてもこの場所から逃げなかった馬。まるで、馬を守るために彼らは戦っているかのような陣立てだった。

一角獣ユニコーンの面甲シヤフロンをつけたルルデイファイロにシャンティは手をついていた、その手はぶるぶると小刻みに震えており、やはり逃げればよかつた、と彼はついさつきまでの勇敢な自分を呪つた。

「行け！」と敵将が命令すると、敵歩兵たちはサウルス軍を圧殺するかのような勢いで突進してきた。

「耐える！」

シャンティが叫ぶ。盾だけを構えた兵士たちは踏ん張つて敵を押し返す。敵兵が円の中には矢がパラパラと降り始めた。ほとんど真上に撃つようにして放たれた矢が、地面に垂直に落ちてくる。シャンティが馬の様子を心配すると、ラッドハッドが盾を使ってそれを防いでいた。彼の足は恐怖で震えている。何度も足をからませて馬の間に倒れ込むが、彼は顔についた泥を拭くこともせず、落ちてくる矢をピンポイントに防ごうとしていた。それはほとんど成功していなかった。それどころか、死ぬ可能性を増やす愚挙とも言えた。それでも、震えるだけの他の監視官たちとは違い自分のできることを果たそうとする彼をシャンティは心の中で励ました。

勇敢な者だ。もう、ギャロップには君が戦場に出たことが無いなどとは言わせない。

「弓兵、隙を見て反撃を加えるんだ。この射的場、どこに撃つても

大当たり間違いなしだぞ」

弓兵は数本の矢をつがえて出鱈目に矢を放つたりした。それでも、そのほとんどは敵兵に命中したようで、遠くで何らかの反応が見られた。

シャンティは空を見た。星が燦々と輝いている。雨は無い、と彼は思った。ギャロップ達の救援を待つ自分たちにとっては、雨がないう方が都合だ、いや、いつそ雷でも落ちれば話しは違うが……。

大きな金属音が響いた。探しに探して音の方を見れば、敵兵の一人が大きな鉄のハンマーを用いて盾を打ち叩いている。「剣歩兵！」とウイスカが叫ぶ。剣しか持たない歩兵が押されている盾の方に走って行き、生じた隙間から外に飛び出した。敵兵が「おお！」と驚いたような声を上げると共に、歩兵は敵数人切り裂いた。敵兵が退くと、飛び込んだ歩兵を中心にして大きな空間ができた。けれど冷静な敵兵が彼を槍で突き刺すと彼は口から血を吐いて容易く絶命した。

死んでしまった友の後を追うかのようにサウルス歩兵たちが陣の外に出ようとしました。

「行くな！」シャンティが一喝して止める。兵士たちは突撃を懇願するようにシャンティを見た。死ぬことを焦っているようだった。この状況から解放されるなら、死ぬ方がましだとも言わんばかりだった。「行くな。必要な時以外でこの盾の壁の外に出ることは許さない。ここで君たちを一拳に失えば我々は耐えられなくなってしまう。わかるか？ 君たちの望む、敵陣に突撃した勇者の物語は、おおよそ一千もの戦友の死と引き換えでなければ手に入れられないんだ」

そんなことをやっている間にも敵兵は返しては寄せる波のように攻撃を続けている。ある時、敵兵は前の兵の肩を踏み台にしてサウルス兵の盾の壁を超える攻撃を試みる様になった。

それは中に一回の確率で盾の壁を越えた。しかしそれを成功させたものは中の兵士にすぐに殺された。だから盾の壁を超える攻撃よ

りも、ジャンプに失敗して斜めに向けられた盾の壁の上に降り立つ方がサウルス軍にダメージを与えた。敵兵はやがてそれに気付いた。続々と盾の壁の上に降り立ち始める。

敵の、一人の勇敢な弓兵が味方の背中を台にして盾の壁に乗り上げた。彼はすでに弓を引き絞っていた。彼とシャンティの目があった。彼は歓喜して叫び声を挙げると同時に矢を放つ。その矢はシャンティの右上腕を貫いてちょうど真ん中のあたりで止まった。彼は弓矢を投げ捨て、腰にかけていた短刀を抜いて突撃してきた。盾の壁内部に降り立つと共に巨体が自分の前に詰め寄つたのを見た。次の瞬間、喰らったこともない衝撃を腹に受けて、気が付いたらふわりと空を飛びながら、星々を眺めていた。

勇敢な弓兵は数メートルほど遠くにつき飛ばされ敵兵たちの頭上に落ちた。腹には刃で貫かれた後が残っていて、まだかすかに息はあったものの、もはや戦力にはならない。兵士たちは気持ち悪そうにその男を放り捨てた。

盾の壁の中で角のついたルルディファイロが勝利のいななきを挙げる。

「ふふつ。やっとこさ、ぼくに懐いてくれたのかな？」

シャンティは右手の痛みを堪えながらルルディファイロを撫でる。敵兵はサウルス軍の中で突如存在感を発揮したルルディファイロを見て、サウルス軍には聖獣使いがいると声を挙げた。サウルス軍はそれを聞いて「ははは」と笑い声を挙げる。ちよつとした余裕が生まれていたが、盾による防御は少しずつ精密さを失ってきた。

誰もが疲れ切っていた。すぐ隣で死んでいく仲間に、ふがない自分達のせいで腕を射ぬかれた王子に、そして馬にも頼らなければならぬ自分たちに、心を侵されていた。目をつぶってしまえばそれと同時に眠れそうで、眠ってしまえば死の恐怖も味わわなくてもいいと。

騎兵が突撃してきた。盾の壁が大きな衝撃を受ける。眠ろうと思っていた兵士たちが昼寝を邪魔された心境で騎兵に怒りを抱いた。

敵の騎兵突撃が繰り返される。一部の壁が突破される。弓兵が残された矢を馬に打ちこみ、シェイバスが槍で騎兵をつき殺す。比較的手の空いている者が死体を中に引きずり込んで、すぐさま盾の壁を修復する。

「突撃、殺害、吸収、再生。これを四回繰り返すだけで」シャンテイは四体の馬と二十人の人で築かれた山を眺めた。「これだけの山が……いや、違うな、混乱している。先に何人も中に侵入していた」その考えすらもどうでもいいことである、とは彼は思わなかった。彼はもう一度空を見た。そして、早く明ける、早く明ける、と守護聖獣に願った。

「ギャロップ將軍たちはいつ来るんだ！」と赤ん坊のように泣きじやくる監視官の一人が叫んだ。「来ないじゃないか。もはや、奴らは倒されたか、逃げたかしたのだ！ 王子、シャンテイ王子！ これはあなたの判断ミスだ。お前のせいで私たちは死ぬのだ」

「そうか！」シャンテイは戦場に似つかわしくない爽やかな笑顔で言葉を返す。「ははは、そうだった。ぼくたちはギャロップを待っていたのだった。思い出させてくれて、ありがとう！」

「王子！」ウイスカが叫んだ。「敵兵が！」

シャンテイはウイスカの方を見た。けれども敵の弓兵は彼の背後の盾の壁の上ののっていた。彼は狙いを定めて弦を引き絞り、一射必殺を狙ったが、中のサウルス軍に槍を突き刺された。彼の体から力がふつと抜け、矢が発射された。その矢がシャンテイの胸のあたり突き刺さると「あえ？」と言う声が漏れた。

シャンテイは倒れ込みもしなかった。ただ呆然と立って、次の瞬間には戦場に目を向けた。サウルス兵が敵に対して深い憎悪を抱いた。皆、手に持つ得物を強く握りしめた。

「行ってはならんぞ」シャンテイは強い光の灯った目でサウルス兵たちを見渡しながら命令した。言葉を考えるような余裕はなかった。熱と激痛が体中を支配して、神経がそこだけに集中していた。それでも彼は兵士を制しようと、真つ青な顔をしながら言った。「くだ

らない命だ、ぼくの命など……」

兵士たちは絶望している。この期に及んで自分たちに勇者らしい行動すらとらしてくれない、この愛しい主君に。敵陣への突入を認められない己たちの実力に。

「シャンティ様」

ウイスカは目頭を熱くしながら下唇を噛んだ。彼はある一つの決心をする。それは……。

ふと、誰かが気が付いた。敵の攻撃がやみ始めているのに。向こうで敵の叫び声が響いているのに。

近づいてくる微かに足音があった。この悪夢を散らす音。地響きのような音。足音。唸り声。金属音。

「……王子」やけに野太い声の誰かが感慨深そうな感じに言った。

「騎兵団の音です」

戦場の熱気を割いて闇と共に駆けてくる騎兵集団の、先頭を走っていたのは誰だろう。ギャロップその人だった。彼は暗闇の中で槍を掲げる。刃は月光の黄色い光を宿す。

「一同、襲歩ギャロップにて、全速前進！」ギャロップが、大口を開け、激怒を少しも隠しもせず、顔を真っ赤にして叫ぶ。「たとえ、愛馬の息が切れようとも、走れ走れ！ 我らが！」

「我らが！」將の命令通り襲歩で駆ける千の騎兵が將軍と同じように顔を真っ赤にして、槍を意気高らかに掲げながら雷のような雄叫びを挙げた。「我らが、主君のもとへ！」

全力突撃だった。

サウルス軍の千の騎兵たちは槍を前に構えて、反撃をもらともせずに突き進んだ。槍はすぐに折れた。腰の剣を抜く間も、彼らは一瞬も立ち止まらずに敵の固まりを駆け抜けた。

月光を反射する彼らの刃は地面を這う雷いかずちのよう。

「我らに竜の加護あり！」

サウルス兵らが一喝する様に叫ぶと、敵將はすぐに逃げ出した。

将を失った兵士たちは騎兵から逃げ惑う。

ギャロップたちは一直線に盾の壁の下に向かった。全速力のままたちまち盾の壁をすっぽりと覆い尽くすと、ギャロップは馬を下りた。

「將軍！」盾の壁を築いていた兵士がばらばらになり、その中の一人が涙目でギャロップに抱きついた。ギャロップは鬱陶しそうにそれを跳ね除けて、シャンティのもとに歩いた。

二人は対峙した。シャンティはもう立ってはいられないほど疲れ切っていたのに、ギャロップの顔を見たらすぐに疲れが吹っ飛んだように感じた。

「ふん」ギャロップは初めて心底優しそうな顔を彼に見せて言った。「思ったよりも元気そうじゃないか？ 新しいアクセサリーも手に入れたみたいだしな」

「ん？」シャンティは突き刺さる矢を眺めた。「残念ながらプレゼントの送り主は名も知らぬ男性だったけどね」

「……全く、お前は馬鹿だな」ギャロップは真ん中に集まっていた馬を見る。「逃げることもできただろうし、残るにしても馬を使って敵を攻撃するとかも考えられただろう」

「……」今度の言葉には、シャンティは潤んだ瞳を彼に返すだけだった。ギャロップは何も言わず彼を見返した。

「ギャロップ」シェイバスが前に歩み寄った。「それが王子なのだ」ギャロップはなんだか嬉しそうな顔をして、シャンティから離れた。入れ違うようにジャーニーがシャンティの元に走り寄って、彼の姿を見て腰を抜かしていた。

ギャロップは無言のまま歩き、馬に再度騎乗した。

「將軍、どこへ？」

とカバルス騎兵の隊長が訝しげに尋ねた。

「敵を追いかける」ギャロップはひやりとするような雰囲気です。た。「お前はすぐにカバルス兵を集める」

その後、ギャロップはカバルス騎兵を率いて敵追撃に向かい、十

数人の捕虜を得た。

そして、それによってある事実が判明することになる。

10・戦いに休息などなく (後書き)

読み返しているとすごく恥ずかしいです。もういやっ。

あと、画像のギャロプンがかぶっている兜は適当。別に作中でかぶってるとかでもない。

11. 敵は誰か？

> i32405—4057<

その戦いの後、カバルス鎮定軍は近くの村落で手当てを受け、カバルスに駐屯していたサウルス国（総督）軍を迎えに呼んで西都ヒツパリオンに帰還した。

シャンティの体を貫いた二本の矢のうち、胸に刺さった方は大したことはなかったのだが、上腕を貫いた矢は骨を砕いており、骨折は治るまで時間がかかるとのことだった。

そう言うわけでシャンティはヒツパリオンにて休養をとることになり、その間のカバルス鎮定軍の総司令官は事前の決定通りジャーニイということになった。この際、父王から賜った佩刀サイカニアをできればジャーニイに渡すべきだったが、それはあの夜襲の際に紛失してしまったようでそれは現在になっても見つかっていない。

シャンティは元王宮であった建物の一等景色の良いところを療養場所として充てられ、次の出兵が決まっていなかったカバルス鎮定軍の兵士はしきりにそこを訪れた。シャンティは誰もいない時には本を読むか、左手で器用に日記を書くかして過ごしていた。

シャンティの充てられた部屋から見える景色を、彼は日記にスケッチしている。色々な物を元から日記に描きこむ癖のあった彼のスケッチはそれなりに上手であったが、今回は左手だったせいでいまいちその時の風景はわかりにくい。

「そう言えばヒツパリオンには浴場がないんだ」シャンティは隣でリンゴを剥いているウィスカに言った。「たぶんカバルスの気候のせいだろうね。ここは空気が乾燥しているから、あまり汗をかかないだろう。それでも、たまのスコールの時には、外に出て体を洗っている人がいてちよっと面白いけどね」

「ははは、元気なもんですな」

とウイスカが笑い声を挙げながらリングゴにかぶりついた。

「それって、ウイスカが食べるために剥いていたんだ……」

そんな風にシャンティとウイスカが話しをしていると、ノックがして返事をする前にドアは開いた。外から入ってきたのはジャーニとギャロップで、二人は険しそうな顔をしていた。

「シャンティ」ジャーニがすぐに話し始める。「前回の夜襲で捕まえた敵将の一人が情報を吐いた。やはり敵兵はカバルスの諸部族だけじゃない」

「だろうねえ。特にあの夜襲は出来すぎていたよ。それで？ 敵はここより南の？」

「イハテリオ地方の国の二つ、サンジャヤだ」ジャーニが手に持っていた地図を広げてシャンティに見せた。シャンティと、リングゴをもう一個剥いているウイスカも地図を覗き込む。「ここ最近の規模戦闘にはほぼ全て関係しているだろうと捕虜は言っていた」

カバルス各地に出る反乱軍がどこから援助を受けているのはかなり前々から検討をつけていることだった。

ギャロップは最初の軍議にて「敵は少数が基本」と説明したが、それに反してシャンティたちの戦った賊や軍は中規模の割合が多かった。少数の騎兵だけで襲ってきたのは、おそらくただの諸部族でそれには特別な感覚を抱かなかつたが、歩兵などを混ぜて中規模の軍団が鎮定軍を襲ってくるのには外から軍事システムに手が加えられたような違和感を覚えていた。

しかし今までの捕虜からはそれを聞き出せなかつたのだ。

「なんでいきなり情報を？」

シャンティが地図を覗みながらシャンティが質問する。

「今回捕まえたのが、そのサンジャヤの将校なんだ。どうも……情報を隠すという義務よりは自分の命の方をとるらしい。忠義心は薄いみたいだな」

「サンジャヤ人は、手懐けたカバルス兵には自分たちの情報をあまり教えないように決められているんだとよ」ギャロップはいつも通

りつまらなそうに言った。「大体、カバルスは部族が多いからな。よくわからん奴がよくわからん部族名で自分を紹介しても、おれはカバルス人だ、ってカバルス語を使われたら信じるんだ」

「決められている？」シャンティが困ったような顔をする。「ってことは、やっぱりサンジャヤの国を挙げての作戦なのかい？ このカバルス人を使ったカバルスでの反乱は？」

二人は気まずそうに頷いた。

「ともかく」ジャーニイが地図を取り上げ、折りたたみながら言った。「このことは王都に通達しておいた。だから父上はすぐに何らかの反応を返してくるだろうさ」

「……もしサンジャヤと戦うとなったら、ぼくたちだけじゃ倒せないけれども……」シャンティが不安そうに二人を見つめた。「もしそうなった場合、父上は軍を率いてくるのだろうか」

「倒せないとは決まってるさ」ギャロップが微笑を浮かべながら言っただけだ。「おい、馬鹿王子。カバルスに駐屯している軍隊の総指揮をとっている男は現王の死後の派閥争いで誰の派閥に入っている？」

「各地域に駐屯する国軍……つまり総督軍の指揮は総督が執るから、カバルスの軍は現カバルス総督のスタコイス・リザドス殿が執ることになる。彼はジャクナ三世の派閥だ」ジャーニイが馬鹿王子を気にもせず返す。「だから、おそらくおれたちが勝手にサンジャヤを倒そうとしても総督軍の協力は得られないだろう。同時に、おれたちで勝手に戦うことはカバルスの軍人たちを使うこともできない」

「サンジャヤはたいして大きな国じゃない。一万五千あれば倒せるはずだ。それすらも集められねえか？」

「さすがにあと一万の兵力は……」

「……ふん」

ギャロップは腕を組んで不機嫌そうによそを向く。ジャーニイは大きなため息を吐いて地図を懐にしまった。

「それで、おれはこれから監視官たちと話し合ってくる。カバルスで頻発する反乱とサンジャヤの関係性が立証された以上、遅かれ早かれサンジャヤとの戦いは避けられんだろう。まあ、そんなに悪い風にはならないだろう。ラッドハッドは最近親切だし、サスホスはおれが懇意にしてもらっているエラルジス大將軍の部下だからな」
それではお大事にな。とジャーニーは部屋の外に出て行った。

「そう言えば」ギャロップがウイスカの向いていたリンゴを取り上げてかぶりつきながら言った。「嫁にはけがのことを書いた手紙を送ったのか？」

「送った送った」シャンティはよくぞ聞いてくれた、とばかりに笑顔で返す。「カバルスの市場で買った邪を払う土偶も同時に送ったんだ」

「馬乳酒は？」

「それを何とって送るのさ。ギャロップが送れと言いました、とても添えて送ろうか？」

「はん、前々から思っていたが、お前のその軽口は、英雄の物語でありがちな脇役の性質そのものだ。そして大体においてそんな脇役は物語中盤から後半の間に死んでしまう」

「なるほど、ぼくが英雄の親友役をすると、ぼくの死に怒りを覚え、逆襲するべく敵陣に突撃しそれを壊滅させる無双の英雄は誰だい？ やはり、君のことかな？」

「親友？ おれたちはまだ友達ですらないのだがね」ギャロップは心底つまらなそうな顔をして言った。「大体、お前のその思考の飛躍はおれの思い通りに行ったためしがないな。おれとしては、軽口は寿命を縮めるぞと忠告したにすぎんのだよ」

「これはこれは……友達でもないほくになんとも慈悲深いお言葉」
シャンティは手を合わせながらギャロップに向かう。「よし、今から……守護聖獣ギャロップに祈りをささげるとしようかな」

「お前の目の前にいるのは獣ではなくてカバルス史上最強の英傑だから、祈るのではなくて、褒め称えるのが正解だぜ」

「よく言うよ、敵の陽動に引つかかったくせに」

「お前だつてそうだろうが！」

「あれは仕方無かつたじゃないか。あんなに炎が燃え盛っている中で敵兵に突撃されたら逃げるしかないだろう」

「もつと早く消し止められなかったのか？」

「君には火を早く消し止める策略まであるらしいね。ぜひともここで御教授願いたい」

ウイスカは二人の口喧嘩をよそに三個目のリングを剥き終わっていた。それを六等分に切つて皿の上に並べると、二人の邪魔をしないように部屋を後にした。彼がドアを閉めた後も、部屋の中からは二人が罵り合う声が続いていた。

「全く……あれだけの屈強を、聖獣に特別守られているかのように次々に越えて行く二人の喧嘩とは、とても思えないな」

ウイスカはひひひと笑いながら立ち去った。

二六六年、夏の終わり。ジャーニイを総司令官としたカバルス鎮定軍がヒツパリオンから出発した。シャンティの近衛兵団はもちろんヒツパリオンに残り、その代わりに総督軍の騎兵五百が彼らと共に旅だった。

シャンティは療養中に「サウルス国カバルス地域」としてのカバルスを政治的に観察することにした。彼はまずカバルス同盟国が潰れてからの法律や税制の変化を調べた。

シャンティは、一応ベッドから立ち上がることはできるのだけど、肺のあたりの傷が痛むので基本的にベッドで過ごし、彼の求める資料はベッドの周りに集められた。

その日もシャンティはベッドの上で資料を読み込んでいた。そこに三回のノックの後に入ってきたのはキツネのように目の細い男だった。

「ええと」とシャンティは注文した資料を運んできた男を見つめた。

「私の名前はヒツパリオン・ハンスと申します」

彼ははきはきとしたサウルス語で自己紹介をした。

「ヒツパリオン……元王族……それが、貴族の方でしたか」

「いえ、カバルスがまだ国だった時代に私の父は王族の身分を捨てていまして、それより私の家系は貴族となっております」そう言う彼のキツネ目はシャンティに何となく優しげな印象を与えた。「理由は……正直、私にもよくわかりません。五、六年前にいきなりの王族を止めると言いだして。まあ、王族とはいっても末端でしたし、おそらく、議会で王族の力の及びうる範囲を拡大するために戦略的に貴族に落ちたのでしょう」

「へえ……」シャンティは興味深そうに話を聞いていた。するとハンスは彼が運んできた資料に目を移しながら、何をお読みにになりますか？ と聞いた。「ありがとうございます。じゃあ、税に関する資料をいただけませんか」

「……どうぞ」とハンスはすぐにそれを見つけて出して、シャンティに手渡した。

「どうも……」シャンティはその本の中身をじーと見ていき、ある所で小さく呟いた。「軽いな」

「軽い……税が、ですか？」

「いや、悪く言ってるんじゃないよ」シャンティは慌てて取り繕う。「サウルス国内の他の地域と比べてみると税が軽いと言ったんだ、それ以上の意味はない。それどころか……民のことを考えた良い税率だと思う。カバルスの民は基本的に自由を好むようだからねえ。それに見合った年貢やらを取り立てているよ。ほら、エピ族は獣の皮を中心に税を納めているね」

「ありがとうございます……とはいっても、それを考えたのは私ではありませんがね」

「税を考えるのは地域に派遣された総督のはずだね」総督は税を決めるだけではなく、法務なども取り締まるし、現地駐屯の総督軍の総司令官も務める職である。「しかし……そうになると、この総督はかなりのやり手だな」

「いえ……カバルスはサウルスの属州となつてまだ日が浅いので、リザドス総督はほとんどの決定をカバルス地域監督である元王族たちに任せています。そう考えるとサウルスの統治は寛大の一言に尽きますね」

「そうか……いや、そうかな？ リザドス総督の統治は怠慢の一言に尽きるとも捉えられるが……」シャンティがいたずらっぽいな顔を向けるとハンスはどうでしょうね、と言う顔を返した。「そういえば、君はその……監督者と言う役職の権限について何か知っているかい？ ぼくは総督などの役職は知っているが、この監督と言うのはよくわからないんだ。本国で色々な人に話しを聞いたんだけど、いつもあいまいな返事しかもらえなかった」

「すいません、私もよくは……」ハンスは首を横に振った。「ただ、総督よりは低い地位にあるらしいです。だからもし、総督が仕事熱心な方ならこの税法を敷けてはいませんでした」

監督者と言うのはサウルスが新しく領地を手に入れた時に現地にいた親サウルス派の貴族に与える職であり、それはカンプトケファレを征服した時にも使われた。サウルスはその時も今回同様、監督者の上に総督を置いている。実際、監督者には実質的な権限を全く与えていなかった。いわば監督者と言うのは名ばかりの管理職のことで、総督の傀儡かいらいとなり、あたかも元からその地方にいた貴族が政治を行っているかのように見せるための道具に過ぎなかった。それは紙上には記されることはない事実なので、シャンティたちがその実態を知ることができなかったのも無理はない。

「ふむ」シャンティは違う資料にも目を通し始めた。「法律も、裁判も……うん。悪くない、やはりややサウルスよりだけでも」

「それは戦勝国の唯一の特権……と言う物ですね」

「ははは、これのために四万の兵を失ったわけかい。それならば、なんと安い命なこと。でも……それではだめだ……ぼくたちは四万の兵が命を張っただけの意味を手に入れなければね」

「そのような、言葉を聞くと……」ハンスは悲しそうな顔をしながら

ら言った。「やはり、シャンティ殿もサウルス人なのだ、と思つて
しまいますね」

「ああ、ぼくはそつだ、サウルス人だ。なに……いずれは君も、だ
よ」

「……」ハンスは両方の眉を上げて、なんとも言えない顔をした。

「おつと、私はもう職務に戻らなければなりません。こんな私も一
応上級官人としてね、私がないと立ち行かない案件もいくつかあ
るのです」

「それならば、きつとぼくよりは偉い役職なんだろうね。なんてつ
たつて、カバルス鎮定軍はぼくがいなくても十分に機能しているん
だからね」

シャンティは、はははと笑いながら彼を送りだした。ハンスは渋
い顔を作つて、それを彼に見えないようにしながら部屋を出た。そ
して、ドアを閉めた後にぼそりと呟いた。

「ふん、なんとも……恨みにくい性格をしているな」

彼は石の廊下を歩いて自分の仕事部屋に向かった。

部屋の中には数人の同僚がいたが、全ての者は何もすることが無
く、ぼおつと天井を見上げたり、意思のこもつてない目を机の上に
向けているだけの腑抜けだった。ハンスは心の中で舌打ちをして、
自分の仕事机の前に座つた。

彼は机の紙に何事かを書きつけ始めた。それと同じ文章を他の紙
にも書いた。ハンスが何を書いているのかを気にするものは誰もい
ない。夕暮れ近くになり、カラスが鳴き始めると一様に帰宅する準
備を始めた。ハンスも例外ではなかった。

彼らは同時に仕事部屋を出た。先に帰る罪悪感を抱かないために、
一人で帰つて他科の同僚に冷やかされないように。そして彼らはそ
んなささやかな心的衝撃を食らうこともないであろう場所まで来る
と、誰一人別れのあいさつもしないのに、自然と各々の家に向か
い帰り始めた。

彼らは総督と監督の共同秘書ともとれる複雑な役職についている

ある意味エリートだった。しかし今はもうほとんど何の仕事はなかった。総督が判子を押すだけしかないので、監督や監督の部下から送られてくる書類の縦と横を綺麗に切りそろえたりして総督の部下に渡すだけが彼らの仕事である。

もともと彼ら 統合本部 は監督・総督間の摩擦を解消するためには作られた部署だった。だからハンスも上手にサウルス語をしゃべっているわけだが、その統合本部も彼らの高い能力を何の役にも立てることのできない部署となってしまうている。同僚たちの間では密かに「人気ナンバーワン部署」などとも言われて冷やかされたりもしていた。

彼らはもちろんそれを恥じていた。彼らも始めは立身出世を夢見る若き英才たちだった。けれども、そんな彼らは一年もたたないうちに腑抜けのようになってしまった。仕方がないのだ。総督と監督、片方だけが仕事をしていては、彼らは役立たずのままなのだ。もつと両方が意見をぶつかり合わせたり、書類を何度も訂正するように相手に注文しなければ彼らの仕事は一向に増えない。

ハンスは職務途中に作った十数枚を持って、汚い路地裏に入口がある地下の酒場に訪れた。そこにはすでに彼と思想を共にする者たちが集まっていた。

「おお、皆。今日は昨日徹夜で考えたことを書いてきたんだ。ははは、いつも通り複写は仕事にした、馬鹿野郎！ ははは、ほら、回すから読んでくれないか？」とハンスは職務中に書いた紙を手渡していく。同志たちは勤勉なハンスを冷やかしたりしながらハンスの考えを書いた紙を読み込んでいった。店主の女がハンスに冷えたビールを出した。ハンスはそれを呑みながら思い出したように言った。「ああ、そう言えば今日、カバルス鎮定軍の司令官様に会ってきたぜ」

「なに」一人の男が反応した。「あの優男風の奴か。それで、どうだった？ きつと頭の回りが悪い奴なんだろう？ 王族にはありがちなんだよ」

「結構普通の奴だったよ」ゲプツと彼はげつぷをする。「しかしおれに向かつて……いずれは君もサウルス人だよ……っていつてきた時は、さすがに張り倒してやるうかと思つたねっ」

いたるところで「張り倒せばよかつたんだよ!」「ハンスの意気地なし!」と声が飛んできた。

「馬鹿野郎! そんなことしたら、あんなに良い仕事を失くしちまうだろうがよ! ははは」

と彼は自虐的な高笑いを浮かべながらビールを飲み干した。

その後、ハンスの書いてきた物を皆で批評し合い、それが白熱してきたことに一人の客が息を切らしながら店に飛び込んできた。彼らは驚いたように飛び込んできた男を見た。男は言った。

「皆、捕まっていたサンジャヤ人が死んだぞ。ははは」

「おいおい、まさか毒とかで殺したんじゃないだろうな。そんなことしたら一発でばれちまうぞ」

ハンスが額に汗を浮かべて問いただす。

「まさか! ははは、けれどもさすがハンス。毒を使うつて所は正解だ」と男はカウンターに近寄つて行き、そこでビールを飲んだ。

「おれは上司を騙してな、うまいこと奴の専属の看守になることができたんだ。それで、始めて飯を与えるときに奴の耳元で、おれはお前の仲間だ、だから忠告するが、この飯には毒が入っている。そのうちに毒の入つてない飯を持ってきてやるから絶対に国の与える飯は食うな。っていつたんだ」

「それでお前が飯をやらなかつたから餓死しちまつたのか?」

「いや、商人の旦那に貰つた弱い下剤を毎回おれの与えた飯に入れてたんだ。ははは、ははは、あいつ、飯食うごとに下痢してて、牢屋が臭いのなんの! そのうちに衰弱して、病氣になって、まともにしゃべれなくなつた頃におれが毒を入れてたのに気が付いたらしい。死ぬ瞬間までおれの方をずっと睨んでたぜ!」

「かつこいいー!」「あつたまいいなあ」「我らが智将!」と同志たちがはやし立てる。

「それでハンス」男がハンスの方を熱く見ながら言った。「この後どうするんだ？」

「もうサンジャヤ人は無理だ。奴らに頼ってもあの裏切り糞野郎のギャロップには勝てない。だからサンジャヤとは手を切る。サンジャヤの商人たちにもその由を伝える手紙を送っている」

「ハンス」同志の一人が言った。「あの夜襲の時はシャンティを狙ってたんだよな？ よく考えてみたら、今ならすぐに殺せるんじゃないのか？」

「馬鹿野郎！ あの時は、カバルス鎮定の象徴になり始めていたシャンティを殺せて、戦場だから犯人が誰とも分からないってくらい有耶無耶に出来るからこそ、あの作戦を実行させただけだ」ハンスは心底悔しそうに拳を握りしめながら言った。「都市の中じゃあ、毒殺にしたって、刺殺にしたって、どうやったって足がつく。シャンティ一人殺しておれたち全滅なんてばからしいぜ。なんてったつてよお！」

「おれたちの目的は！」同志たちは声を合わせて怒鳴りを挙げた。

「カバルスの自由の再興！」

「そうだ。おれたちはこのままカバルスに反乱や暴動の種をまいて、カバルス人の軍事力が育つのを待つ。同時に、おれたちの反乱に疲れ切ったサウルス国がぼろを出すのを待つ」

「しかもサンジャヤは使えねえぜ」

「カバルスは広い。サンジャヤの他にも隣接国はいくらでもあるぜ」
「もう一つ質問がある。サンジャヤが暗躍したのはサウルスにはれた。ってことは、サウルス軍がサンジャヤに向かって攻撃を開始して、サンジャヤの軍人たちが奴らに捕まるとおれたちのことがばれちまうんじゃないのか？」

「それに関してはもう頭が手テマが打ってるらしい」ハンスは意地汚そうな笑みを浮かべながら言った。「ははは、なんでも……亡国の幻將こと糞ギャロップを反逆者に仕立て上げて、今回の事全部有耶無耶にしちまうらしいぜえ」

同志たちは笑い声を挙げた。

彼らは皆、カバルスの自由の再興という旗印を掲げて、カバルス周辺の裏社会を暗躍していた。

もう千年以上も前の話だから詳しい話はよくわからない。組織の名前すらも、組織の頭の名前すらもわからない。しかし彼らは実在していた。しかも、サウルスが侵攻してくる前から存在した（もつとも、その時の彼らはヒツパリオン王族とカバルス同盟国の存在を憎んでいた）。

組織は二百人の同志を集い、カバルスの理念とも言えた自由をサウルス国（あるいはヒツパリオン王族）から奪取するために、彼らは剣を打ちあう以外の方法で戦った。そう、彼らは「自由」という言葉を病的なまでに信奉した。最古のカバルス人のように、馬や風と共に草原を駆ける、そんな悠々自適な生活こそ人の生きる道だと考えた。

つまり彼らは無政府主義者アナキーなのである。

その謎めいた組織の若き幹部の一人であるハンスは地下の酒場を集会場としていた。彼は、現在にもその名前が残る数少ない組織の幹部である。

彼はこの日のシャンティの日記内で初めて歴史上に登場する。そして……。

サウルス軍の、盾を持った槍歩兵は一步一步地面を踏みしめながら前に進んでいた。戦場は雑木林の中にある小さな空き地であり、空はいつもと変わらぬ快晴だったけれど、雑木林の中は陽光に向かって伸びている木々の葉に覆い隠されて暗かった。ゆっくりと進んでいく兵士たちの瞳の中にはときどき光の一端が差し込む。

敵の数は目測中隊一個半（千五百）。あいたい相対するサウルス軍はその空き地の小ささのせいで半個軍団の数的有利を行使できずにいた。「隊列が乱れてきているぞ、密集隊形を維持しろ」ジャーニイが喝

を入れる。兵士たちは調子を取りながら返事を返す。両陣営を矢が飛び交う。「遅い」サウルス軍は決定打を撃てない。「遅すぎる」このままじりじりと戦っていたとしても万が一にも負けることはないだろうが、しかし負傷者数を減らす術があるならばすぐに使うべきである。「何をしているギャロップは！」

その時、近くの茂みからサウルス軍の軽装剣歩部隊が飛び出してきた。その指揮官はギャロップだった。彼は左右を通り過ぎていく兵士たちに最後の命令を発する。

「各自、敵陣に切り込んだら三人一組を保つように。もし、はぐれでもしたら近くの兵士の隊に勝手に入れ。以上！」

「ギャロップだ！」と敵兵の誰かが叫んだ。叫ぶと共に兵士に切り裂かれて地に伏した。命のなくなった体はゴムで造られた人形のようにだらんと地面に倒れ込んでいて、地面がそれからあふれる熱い血液をじゅるじゅると飲んでいった。彼らは明日には野獣の餌かウジ虫の肉家だ。^{すみか}

「やっと来たな」ジャーニイは敵兵が歩兵隊に気をとられたのを見てすぐに兵士を動かした。「槍歩兵隊突撃！」歩兵隊は両手でがっしりと槍を握り締めて、敵を貫いていく。四、五人貫通した槍を握る兵士はぼいっと死体ごと槍を捨てて、腰に帯びた剣を引き抜く。慣れていった。彼らサウルス兵は驚くほど慣れていった。それは彼らも感じていた。半年前に来た時とは明らかな別人。「騎兵突撃！」

趨勢は決した。騎兵は逃げ惑う敵兵を蹂躪し、その光景を見ていたギャロップは満足したような笑みを浮かべている。

「うむ……」ギャロップはこの戦闘で騎馬を捨てて歩兵として行動した。彼は自分のいるところが主力だといつも思っていた。主力は決勝点に投入しなければならぬ。だから、より決勝点に突入しやすい歩兵を選んだ。ギャロップはぬふふ、と笑いながら呟く。「一角獣の蹄……と言つのはどうだろうか？」

「なんですか？ それは」

ギャロップと隊を組んでいた男が訊いた。

「いや、敵はおれと言う天才がいつも騎兵を率いているのを知っているだろう。だから、あえて、騎兵を捨てておれは歩兵になった。普通ならば、こんな歩兵での奇襲は予期していなければならんが、やはりそこは突入してきたのがおれだからな。敵も対処できなかっただろう」

「はいはい、敵は將軍が率いているはずのサウルス騎兵に気をとられ過ぎていたから、こんなことも見落としていたっていいたいんでしょう」男は地面で苦しそうにしていた男にとどめをさす。「そんで……ツノに気をとられ過ぎていいるから、おれたちヒヅメにやられるんだ、つてことで一角獣ニコゴンの蹄ね」

「な、なんでわかるんだ？ おい……おい！ お前はなんだ？ どうかの幻将か？」

「將軍つて三本の角トライゴン戦術！ とか、そういう名前つけるの好きでツスよね」

「なんだこら！ 良いじゃねえか、カツコいいんだからよ。それとも、お前、おれの名付けた作戦名がダサいつてのか？」

男がふいと他方を向く。向こうではジャーニイが各隊を集め始めていた。どうやら戦争はもう終わっているらしい。騎兵も彼のもとに集まっている。今回の戦鬪が雑木林の中なので、逃げた敵を追撃できないから、まあ、当たり前である。

男は「ほら、將軍。行きましよう」と言うと、彼らの方に歩いて行ってしまった。ギャロップはそれを見送りながら腕を組んで違う作戦名を思索していた。

二六六年の冬の手前だった。ジャーニイはシャンティに代わってカバルス鎮定軍を率い、カバルス各地を平定し続けていた。この頃には頻繁に起っていた暴動も徐々に減少傾向になっていたが、それが冬に近づいたからなのか、彼らの軍事行為が功を為したのかは彼らにはわからなかった。

彼らは多くの捕虜を手に入れたが、サンジャヤの兵士はあの夜襲

以来、一度も捕虜になっていなかった。カバルス人の捕虜に聞いても、サンジャヤと言う国すら知らないものも少なくはなく、唯一のサンジャヤ人も夏の終わりにには死んでしまったらしかった。ジャーニイはそれをシャンティからの連絡で聞き及んでいた。

ともかく、捜査が進展する兆しもなく、王都からの通達も「にわかには信じがたい、再調査せよ」だったので、彼らはどうにもできなかった。ジャーニイたちはあまり必要以上に寒くはならないカバルスでの冬をどうやって過ごすか考えていた。兵士たちはほとんどが徴兵だから一度王都に返すのが普通である。……が、サウルスで冬を過ごすことも出来た。

ジャーニイたちはとりあえず西都ヒツパリオンに戻ってシャンティと話し合うことにして帰路を急いだ。急ぐといってもカバルス人の捕虜が何人もいるせいで対してスピードは上がらなかったが。

ほとんど寒くなく、雪も降らないので風情もないカバルスの冬が到来した。途中の村で見かけたカバルス人の子供は上半身裸で相撲をとったりして元気に遊んでいたが、サウルス軍にいるカバルス人の男たちも同様に上半身裸で相撲を取りだしたのは辟易へきえきした。カバルス人は冬の相撲が好きらしい。彼らの相撲では賭けが行われていた。主に金をかけていたのはサウルス人で、相撲をとっていたのはカバルス人である。ほとんど相撲をとらないサウルス人たちは土俵を作り、一試合ごとに小さな賭けをした。総当たり戦での賭けは大きなもので、優勝者には賞金も出されるらしかった。その年の優勝者はサウルス人の戯言で特別出場させた馬だったらしい。優勝賞金を馬が得たかは記録がない。

そうこうしている間に鎮定軍はヒツパリオンに到着し、ジャーニイは戦史や細々したことをシャンティに報告した。ジャーニイの記憶力は大了なもので、ほとんどの戦いの詳細を空で言うことができた。シャンティは相撲の勝敗も克明に記録している。

『その日の大一番は全勝負ぜんしょうぶけ無しの馬、星影（黒毛で額に真っ白な

星がある。体は大きく、いつもは馬車を曳いている」と亡国の幻將ことエウクス・ギャロップである。』

『まず、ギャロップは意表をつくように猫だましを放った。驚いた星影は土俵から土俵上で暴れ始め、ギャロップは後ろ足で蹴り飛ばされて「押し出し」となった。』

『観客は総立ちになって手に持っていたチーズやら燻製やらをギャロップに投げ始めると彼は怒りで我を忘れて暴れ始めた。負傷者は五名。』

これはシャンティが残した「カバルス鎮定軍相撲打ち明け話」という名で今も残っている。

もつとも、これらの話を聞くことができたのはカバルス鎮定軍がヒツパリオンに帰還した次の日の夕方前のことである。なぜなら、ジャーニイたちはヒツパリオンに帰還するとすぐに挨拶もなしにベツドに入り込み、その日の朝遅くまで目を覚まさなかつたからだ。シャンティの方も今の今まで激務に耐えていた彼らを自分の都合で起こすのも忍びないと思ったので、起こさずにいた。

それで鎮定軍のヒツパリオン機関の次の日、シャンティが外に出て街並みをスケッチし、それが終わって昼過ぎに部屋に戻ると、ジャーニイが彼のベツドを占領して昼寝をしていた。彼はすぐに叩き起こし、今回の旅の話聞き始め、数時間かけてやっと大体の戦史と、相撲の面白話を聞き終えたところだった。

「そうだ、この前手紙で聞いてきた話……兵士たちの王都帰還の話だけだね。普通に考えれば兵士たちは返さなきゃならない」シャンティはイスに座って、もうほとんど良くなった右腕で日記帳をつけながらジャーニイに答えを返した。「これはサウルス軍の掟だからね。兵士たちが残りたいたっても返さなきゃならない。ま、そんな兵はそうそういないと思うけども」

「そこらへんは兵士たちに直接聞いてはいないからわからないけど、普通の奴は残りたがらないふだだろうな」ジャーニイは窓枠に肘をつけて外を眺めながら言う。「特にお前が負傷した夜襲の件で神経を

すり減らした奴らは戦争になるときどき手がつけられない。なに、お前が気にすることはない。あの時にお前が指揮官として残っていないかったら、あいつらは死んでいたかもしれないんだからな」

「そう言ってもらえるとありがたいけど……」シャンティは筆記を終えると日記帳を机の上に開けたままで置いた。「それでぼくたちが王都に帰るかどうかな？ そうだね……どちらかが残るといふ考え方もあるけれど？」

「その場合はおれが残るべきだろうか？ あの魔女も、早く帰ってこい、と手紙に書いてあるんじゃないのか？」

「大丈夫さ、彼女は理解ある女性だからね。この前も、ぼくが送った邪を払う土偶を真つ二つに割って送り返してきたよ。そんなわけではなく、今年はこっちに残ってもいいよ」

ジャーニイは、妻は熟考して選ばねばならんな、と思いながら窓を閉じた。

「ならばそう言うことだな。おれは兵をサウルスの歩兵を連れて王都に帰る。お前はサウルス、カバルスの騎兵隊と共にこっちに残れ」シャンティは了解と頷いた。「さて、飯を食いに行くぞ。もうお前もそれくらいには元気なだろう」

「ああ、行こう！」シャンティは日記帳を閉じると、すぐに身支度し始めた。とはいっても、彼の準備は財布を懐に入れて、剣を腰に帯びると終わりである。さっとそれらを揃えるとシャンティはドアを開けて兄よりも早く廊下に飛び出た。

廊下に飛び出た瞬間、ラッドハッド、レフティス、サスホスなどの監視官たちに出会った。たまたま、という雰囲気を彼らの顔は醸し出してはいなかった。シャンティが、また面倒なことが起こりそうだと身を強張らせる。

「シャンティ様、あなた様にはそれほど関係ない話なので緊張なさらないでください」王太子の従者の一人であるレフティスは静かに言った。彼の視線はちゃんとシャンティを見ているはずなのに、どこか違う空間を見ているかのような印象を受ける。「用があるのは

兄王子様です」

「そうか、おれに用なのか」と部屋の中からジャーニーが歩いてきた。「その陰気な面から想像するに、碌でもない用なんだろうな？」彼が皮肉な感じにそう訊くと、彼らは何も答えなかった。「正解か……」

「ええ、いや、ジャーニー王子」とラッドハッドが、内容も聞く前に静かな怒気を発し始めた彼をなだめる様に口を開いた。「あくまでも、ええ、我々は質問をしなければならいだけなのです」

二人の王子が同時に眉をひそめる。

「質問？」

「ここででしょうか」レフティスが暗く沈んだ声で言う。「それとも、部屋の中で？」

「ここでしてもらおうか？」ジャーニーが挑発するように答えた。

「これから弟と飯を食いに出かけなければならいのでな」

シャンティはレフティスの口元がふつと微笑むのを見た。レフティスはすぐに顔を元に戻して言った。「よろしいでしょう」

監査官の一人が紙に何かを書き始める。大方その紙には質問の内容とジャーニーの答えが書かれるから、まずは質問者やら質問場所やら時間やらを書きこんでいるのだろう。シャンティは本格的だ、と思いつつ廊下の端に寄った。レフティスがラッドハッドの方を見る。ラッドハッドは汗を浮かべながら頷いた。

「ええ、簡単な質問を一つですよ。王子の答えによっては……の話ですが」ラッドハッドは出来る限りの笑みを作つて言う。そのぎこちない笑みが、事の重大さを示している。「ええ、ええ、ええ、王子……あなたは、いえ、あなたとギャロップ將軍は………カバルス兵を使つて、王都への反乱することを企てていますか？」

11・敵は誰か？（後書き）

ギャロプン「それにしても、ねえねえ、どこの幻将だったの？ 南のナランとか？ それとも北にある後継者の国で幻将とかしてたの？」

男「……………」

ギャロプン「ねえねえ。この亡国の幻将に教えておくれよ」

男「うるせえ……………」

12・しょづぐんとあにおうじのおそるべきけいかく

> i32474—4057<

王都センチュリオンのシユラク王や緒將軍への反乱を企てていると疑われたのはジャーニー王子だけではなかった。將軍ギャロップもまた、ジャーニーの前に同じ質問を受けていたのだ。

その質問を受けた時、汗が体中から湧きでてきたのをジャーニーは感じた。

彼の後ろではシャンティはわけもなく兄の名前を呼んでいる。ジャーニーは意味がわからないと感じながら、うなだれ、そして狼のような目つきでレフティスを見た。奴だ、と彼は思った。奴はジャクナの使いだ。だから、おれを嵌め^はようとしているんだ。糞、糞、糞。

「そ、そんな事実はない」

ジャーニーは震える声で返した。

「ええ、わかりました」ラッドハッドは頷いてからレフティスの方を見た。彼も頷いた。で、諭すようにジャーニーを見て言った。「王子、あなたはすぐに王都に行かなければならない。ええ、そうです。カバルス鎮定軍に参加したギャロップ將軍やカバルス騎兵と共に！」

結論から言ってしまうば、この事件を起こしたのはジャクナ三世やレフティスの一派ではない。前述している通り、例の組織の者がこの噂を流していた。いや、もしかしたらカバルス鎮定軍のカバルス騎兵の一人に彼らの同志がいたのかもしれない。もしかしたら、ジャクナ三世と組織が繋がっていたのかもしれない。しかし、これも前述した通り、この無政府主義者^{アナキ}たちの組織の資料は少ない。だから彼らがこの事件にどこまで関与していたのかは全く持ってわからない。

とはいえ、彼ら無政府主義者^{アナキ}はサンジャヤ人の件を一時的に有耶無耶にすることに成功した。そして同時に国の裏切り者であるギャロップを苦境に立たせることにも成功した。

ジャーニイは彼を守り奉る近衛兵団を取り上げられ、中からは開けることのできない罪人用の馬車に乗せられて強制的に王都へ帰還させられることになった。ギャロップも同様の馬車に乗って、しかし、ジャーニイとは分けられて王都に運ばれた。三百人弱のカバルス騎兵は馬と武器を取り上げられて、捕虜同様の扱いで王都に連れていかれた。

シャンティは黙っていなかった。じつとしてもいらなかった。彼は兄たちを乗せた馬車を守るという理由で近衛兵団と共に彼らのすぐそばに張り付いて王都まで帰還した。

彼らは石の街道を進みながら陰鬱な雰囲気^{ひんげん}で歩いた。シャンティは自分たちの食料などをカバルス人に分け与えて彼らを励ました。食事だけは完璧に保証されていたジャーニイは、けれどもほとんどなにも喉に通さず、大きなクマを目の下にこしらえて、じつと馬車の隅を睨みつけながら、何事かを考えているようだった。

シャンティはギャロップのもとにも訪れたが、彼はいつものようになつまらなそうな表情を浮かべて鉄格子の向こうの景色を眺めていた。

「来る時は荷馬車だったのに、帰りは（鼻^{ひそき}貞目で見れば）普通の馬車。これなら花吹雪舞う中を歩く凱旋帰国だつて期待できる」ギャロップは自虐的な笑みを浮かべながらシャンティの持ってきた葡萄酒を飲んだ。「おい、シャンティ」

「なんだい？」彼は馬車の中の、ギャロップの前の席に座っていた。「今回のことの概要を説明しろ」

「……なんでも、カバルス人の官人がある噂をしゃべっていて、それを監視官^{みびだち}が耳聴く聞きつけたつてことらしい。その噂って言うのは、君たち二人がカバルス騎兵と組んで王都を狙うとか、そんな信じるに及ばないものだよ。この噂はぼくが負傷した後に急速に西都

で広まったものなんだけど」シャンティは知っていることを全て話す。「ヒツパリオンにいたサウルス官人がその噂の出所を探っていたんだけど結局わからなかったらしい。その話をしていたカバルスの官人は酒場で聞いて、酒場の主人はカバルスの兵士たちが言っていたのを聞いたとか……」

「結局詳しいことはわかってないってことか」

ギャロップはくわー、とあくびをした。まるで、自分が助かるのがわかっていようだった。

シャンティの方は不安満々で、どうにかしたい、どうにかしたいと思っていたが、カバルスに戻って調査している時間はもはや無い。そうなるなら父の前で彼らの無実を、現状の情報量で証明せねばならない。しかし、どうやって？

対策が思いつかなかった。はっきり言ってしまえばギャロップが反逆を企てていた証拠など微塵もないのだ。しかしこんな曖昧な時に異様なほど効果を発揮する言葉がなぜかこの世に存在する。

「火のない所に煙は立たない」

その、たった一言で多くの人々が反逆者に仕立て上げられたことだ。疑惑は毒に似ている。そしてその毒に侵されるのはいつだって為政者の方である。

父上はどうだろうか。この疑惑と言う毒に侵されて簡単に人を殺してしまうだろうか。それとも……。

馬車がごとごとと揺れた。シャンティは街路の乱れのおかげで、外を見ずとも現在位置が分かった。もうすぐ王都だ。

白髪のシユラク王は荘厳な玉座に座って待っていた。シユラク王の左右には従軍した監視官やジャクナ三世、エラルジス大將軍などの有力者が起立していた。

ジャーニイとギャロップは玉座の前で片膝を立てて跪いた。シャンティは監視官に導かれ、ジャクナたちのように王の横に立つ。

ラッドハッドがシユラク王に今回の事件についての報告をする。

シユラク王はやや顔を歪ませもしたが、それほど目立った反応はしなかった。少なくともいきなり頭ごなしに死刑を宣告されるという危険性はこれで無くなった。

「証拠が足りんのじゃないか？」とシユラク王が当たり前のようなことを言うと、監視官の一人がシャンティの考えていたあの一言をいった。火のないところには煙は立ちません、と。「しかし王都を襲おうとする理由はなんだ？」

「父上」ジャクナ三世が余裕しゃくしゃくな感じで口を挟んだ。「そんな風に言えば理由などいくらでも思いつきますよ。ジニーは常日頃から王位を欲しています、しかし、王位には父上が、王太子には私がついていきますので、彼が王位を手に入れようと思えば何らかの行動を起こすしかない。そしてギャロップについてはですね……彼は大体、カバルス人ですし、我々の命を狙う理由などいくらでも考えられます」ジャクナ三世はジャーニイの顔が酷く醜く歪むのを横目で見ながら続けた。「しかし、私は彼らの無実を証明したい。まあ、証明するも何も、証拠が何一つないんじゃないや彼らを罰することなどできませんってことなんですけどね」

「そうだ、証拠がない」シユラク王は二人の容疑者の顔を交互に見ながら呟いた。「噂だけで人を裁けはしない」

シャンティはひやりとしながら彼らの会話を聞いていた。特にジャクナは本当にジャーニイたちの味方なのかを疑いたくなるような物言いだった。

「王」レフティスは怖れ多そうに言った。「その証拠ですが……と言つよりも証人ですが、一応連れてきております。数人おりますが……まずはカバルス人をここに呼ぼうかと」

「……呼べ」

そう言うシユラク王の顔はさつきよりも険しかった。

シャンティは証人だと？ と信じられない様子で向こうの扉からやってくるカバルス人を見ていた。彼はカバルス人らしい質素な服を着て、通訳付きでやってきた。彼がシユラク王の前につき、自己

紹介するとレフティスは質問を開始した。

「私が以前に質問したことを言っただけなんです……いいですね」とレフティスがたずねると、彼はこくりと頷いた。ジャーニイはその様子を充血した目で、食い入るように見ている。「君は誰に何の計画を話されたのかね？」

「私は……噂がいくらか広まった後、たまたま会った名も知らぬカバルス騎兵が言っていたのを聞きました。彼は本物の甲冑を持っていただけから本物の騎兵だと思います。だって、普通の人は武器を持つことなんて禁じられている。それで、彼は笑いながら言っていたんです。カバルス鎮定軍の偉い方がその戦力を使って王都に反攻を企てていると……」

「嘘だ！」ジャーニイがたまらず叫んだ。「お前は誰だ！ おれはお前など知らんぞ！ どうせ、金で買収されたのだろが、てめえ……糞野郎、覚えていろよ、覚えていろよ！」

「王子、自己紹介を聞いていませんでしたか？ 彼はカバルスの一般市民です。だからあなたが知らないのも無理は無い」レフティスは静かな感じで言った。その声にはいつもと違い、潤いがあるのをジャーニイは気がついた。ジャーニイは体を震わせながら彼を睨みつけた。彼は質問を続ける。「それで？ たしか、計画の内容を知っていたはずですが」

「はい、知っています」カバルス人はまるで人形のようにしゃべっている。シャンティは彼の上には人形師がいるのじゃないかと、ふと彼の頭上を見上げてみた。いない。いないが、その人形師は彼の目の前にいる。レフティスは先を促した。「鎮定軍の偉い方は、いま持っている五千の兵士とカバルス兵数千、カバルス駐屯の総督軍（一万）を加え、さらに各地にいるカバルス人やサンジャヤ人にも力を借り、王都を素早く奪い、王権を手に入れるつもりだと……」

「サンジャヤ？」王が呟いた。「たしか……レフティスの書簡にそんな名前が」

「父上」ジャーニイが言う。「サンジャヤ人はカバルス人の反乱の

手伝いをしていたそうです。考えても見てください。カバルスを鎮定しようとする我々が、逆にカバルスを乱そうとする奴らと手を組むはずがありません」

「いや」ギャロップが澄ました顔で王を見つめながら言う。「おおよそ二万でサウルス軍と戦おうとするよりは現実的だ。武器を集めるにしても、サンジャヤなどの国外ならば監視の目が届かないしな」

「お前、どっちの味方だっ」

ジャーニーがギャロップに掴みかかる。ギャロップはつまらなそうな目で虚空を見つめる。

そこでシャンティが口を挟んだ。

「すいません、父上。少し考えたことがあるんですが……言ってみてもいいでしょうか？」

「まあ、いいだろう」

「カバルスにいたサウルス官人たちはジャーニーたちが西都に帰る何日も前から噂の調査を開始していたわけですが……ということはカバルス騎兵団がヒツパリオンに帰還する前にその噂は広まったわけです。それでその男の人は、カバルス鎮定軍のカバルス騎兵から聞きました、って言いましたけど……ジャーニーたちは帰還した次の日には拘束されていたんです。じゃあ、彼はたった一夜しかないグッドタイミングで話しを聞いたことになるわけですね」

「つまり？」王が問うた。

「いえ……別に……都合がよすぎると思っただけで」

「いや、待て」監視官の一人が言った。「王子が負傷した際にも、いやそれ以前にも何回かヒツパリオンには訪れているだろう？ その時に聞くことだってできるし、その男が発信源であるとも考えられる」

「良いこと言うじゃないの？ 確かにそうだ」ギャロップは、はははと笑いながらカバルスの方を振り向いた。「で、いつ聞いたんだ？」

男は黙った。本当に男が話しを聞いていたならば、そんな簡単な質問はすぐに応えられるはずなのに。

「おれたちの最後の帰還した時か？」

とジャーニイがやや威圧的に質問した。

カバルス人は首を振った。

「……違います」

「そうか」ジャーニイはやや悔しそうな顔をして見せた。「もし、あの時だったのならば、外にいるカバルス騎兵の話しを一人一人聞いて回れば、コイツの正誤が判定できたかもしれんのだが」

以前に聞いていたならば、例えば遠征の最中に死んだ兵士に聞いたと言いつれできるのだが、最後の帰還の際に聞いたならば、何とか嘘か本当か確かめられると言う意味だ。

この流れを見てレフティスが汗を浮かばせる。ジャーニイに質問を続けさせるのは得策じゃない。

「ギャロップ殿」レフティスはやる気のないギャロップに一度質問をする。「君は言いたいことはないのかね？」

「え？ おれか？ 別に質問はないけど……ああ、でも監視官に質問なんだけどな」ギャロップはつまらなそうな目を向けて、そしてニヤニヤ笑いながら言った。レフティスはしまった、と感じる。「カバルス鎮定軍の偉い方って発言なのに、なんでジャンティは疑われてないんだ？」

「てめえ、何言ってるやがる！」

ジャーニイはギャロップの胸ぐらを掴みあげる。ギャロップは彼から目を逸らしてジャンティの方を見た。

楽しんでいるな、とジャンティは思った。余裕の理由はなんだい？ まあいい、助かる術を持っているのは事実なんだろうね。

「確かにそうですね」ジャンティがそう言つと監視官たちは驚いたような顔つきでジャンティを見た。ジャンティは泰然とした調子で、証人を指差した。「そこにいる彼だけを信じるならば、ぼくももちろん疑惑の輪の中に入っていなければならぬ」

「いいえ！」レフティスが声を荒げる。「シャンティ王子が容疑者でないのは、後に出てくる証人によって証明されております」

「おいしい」とギャロップが呟いた。

「貴様！」ジャーニイは掴んでいた胸ぐらをグイグイと上に引き上げてギャロップを締め上げる。「さつきから何をふざけていやがる」「何をしている、さつきと引き離せ」

ついには王も声を荒げてジャーニイとギャロップの二人を引き離す様に兵に命令した。兵士達は慌てて二人のもとに駆け寄る。

ギャロップ何をやっている。シャンティは眉をひそめる。まさか、勝算がないからって自棄になってるんじゃないだろうな。

羽交い絞めにされて引きはがされたジャーニイは額の欠陥を浮かび上がらせている。たいして、ギャロップの方はさつきと変わらぬ様子で頭を掻いていた。

「ふざけるなつて」ギャロップは苦笑しながら言う。「ふざけているのはおれじゃない。どっちかかっていうと、監視官の方だったの」「彼はつまらぬような瞳を王に向けた。

「ギャロップ。貴様、何かを掴んでいるのか？」シユラクは疲れたと言う感じに嘆息しながらギャロップに聞いた。「それならできるだけ早くに言ってもらいたいものだ。なにせ、老いた身なもので、心的衝撃を何度も受けるのはつらい」

「そうですね」ギャロップはジャーニイを見ながら言う。「馬鹿王子の額の血管も限界が近そうですね」

ジャーニイは羽交い絞めにしていた兵士を振りほどき、額に手を当てる。

「それじゃあ、話を始めよう」

ギャロップは腕を組みながらふん、と鼻を鳴らした。

「まず、お前」ギャロップは証人の方を見た。「お前はいつ噂を聞いた？」

「そ、それは」証人はレフティスの方を見る。レフティスは目を合わさないように顔を背けた。こっちを見るなど言っている。「シャ

ンテイ様が負傷してご帰還なされた時です」

通訳はそれを周りにも伝える。

「あ、あの……」証人はおどおどと言葉を続ける。「私、もう……何も知りません」

「ああ、別にいいぜ。次に、監視官に聞きたい。お前たちが噂を耳にしたのは確か……冬の、最後の帰還の際のことだったよな？」監視官たちは顔を見合せた後、一様に頷いた。「じゃあ、それまでに今回の謀反騒動にかんすることの兆候は見られたか？」

「ええ」レフティスは泰然として言った。「ギヤロップ將軍に関しては……カバルス騎兵を一度率いたことがありました。しかも、その際にサンジャヤヤ人を捕まえたのです」

「そう言えばそうだったな」

とギヤロップは笑いながらあつけらかんと言う。

「ラッドハッド」王が従者に尋ねた。「お前の報告書ではそんな事実は無かったが？」

「ええ……その……ええ」ラッドハッドは少しばかりカバルス鎮定軍を鼻^{ひいき}負したのを悔んでいた。「それは……その」

「もう良い」

王は舌打ちしながら話しを切る。

「しかし」ギヤロップがレフティスに、不思議そうに尋ねた。「なんでおれはサンジャヤヤ人を捕まえてそいつから、サンジャヤヤ人が実は黒幕でカバルス人を操っているんだ、ってことを白状させ、それを監視官^{おまえたち}に伝えたんだけ？ もし反乱するつもりなら、そっちに目を向けさせたくないはずだ」

「さあ、わかりません。もしかしたら、それを退治しに来たサウルス軍を攻撃するつもりだったか、それとも、もしかしたら味方にするつもりだったか……」

「なぜ、サンジャヤヤを選んだ。他の所でもよかったはずだ。カバルスの隣接国は多いからな」

「だから知りません」

「もしかしたら」ギャロップが嘲笑するように言った。「誰かがおれたちを嵌めようとしているのじゃないかね。まあ、もしかしたらだがね」

「あなたの言いたいことはそんなことですか」レフティスはどすを利かせて言う。「もし、そんなことですべてをはぐらかすことができるとお考えなら、その考えを改めるべきですよ。なぜなら、あなたの言葉は憶測の域を出ていない」

「ふん、自分が危なくなりそうになったからって、突然にキレるなよ」ギャロップはせせら笑う。「憶測と言う言葉は悪で、事実が善であると言うのなら、ちゃんと事実のみを証言するべきだ。いいや、証人が事実を言っていないとか、そういうことを言っているんじゃない。しかし、奴の事実を聞いたんだから、おれ達の持つ事実の話も聞いてくれてはいいいんじゃないのかね、って言いたいだけなのさ」

「お前の事実とは？」

王が問いかける。

「カバルス鎮定軍とカバルス民族との戦闘の事実ですよ」ギャロップはレフティスの肩をポンポンと叩く。「おれたちはカバルス鎮定軍としてカバルス各地にはびこる反乱民たちとの度重なる戦闘を行ってきたわけだけれど、もし、おれが本当に王都に攻め込むのならそんなことはしない。なぜって？ 簡単な話さ。王都を奪うために使う虎の子のサウルス兵たちを、そしてカバルスの民族たちを無意味な戦いで失うことになるから」

「私たちの目をだますためなのでしょう」

レフティスはシユラク王の方を見ながら言った。

「憶測は悪だぜ」ギャロップが顔を寄せて笑いかける。レフティスは恐怖を殺す様に下唇を噛む。「しかし、そうだな。謀反人ギャロップ大將軍としては監視官たちの目はウザったくしょうがない。よし、それならどうしようか、謀反人ジャーニイ王子？」

「あ？」ジャーニイは不意に質問されてうろたえる。それでも、彼はギャロップの質問の意味を理解した様だった。「……ああ、そう

だ。謀反人のおれなら監視官を殺す」

「げ、現に彼らは私たちを殺そうとした！」レフティスは叫んだ。

「シャンティ王子を亡き者にするための夜襲で、私たちも命の危機に瀕しました。なるほど！ あれは私たちだけではなくシャンティ王子をも亡き者にするための……」

「だからお前のは推測だつての」ギャロップがきつとレフティスをひと睨みすると、レフティスは黙りこくった。「もし本当に、おれたちが監視官やシャンティを殺すつもりだったなら、普通、助けに行くか？ あの時、夜襲された時、シャンティに逃げる方向を命じたのはおれだ。北に逃げると。それを聞いていた者は少ないはずだから、おれはやるうと思えばシャンティは西だ、とか、シャンティは東だ、とか言つて、いつまでもそこら辺をぐるぐる回り続けてシャンティや監視官が死ぬまで時間を潰すこともできたんだ。しかも王都への報告は手紙だけ。偽造は笑えるくらいに簡単。それにもう一つ」

「なんだ？」

青白い顔で黙りこくつたレフティスの代わりに王が訊いた。

「証人は例の噂はシャンティが負傷して西都に帰還した際に聞いたと言つたな？ それにサンジャヤ人を捕まえた例の夜襲のことなどを考慮すると、謀反の計画はシャンティが軍の中にいる間に立てられたということだ。結構早い段階から計画は立てられていたわけになるが……さて、いつだ？ 鎮定軍がカバルス地方に着いた後、すぐにか？ それとも着く前か？」

「着いた後と言つのは、ええ、無理でしょう」ラッドハッドが耐えかねた様に言った。「なぜなら、私たち……監視官が、ええ、あなたたちを見張っていたのだから」

「ならば」ジャクナ三世が無慈悲なように呟く。「前から計画されていたのでは？」

「それはいつ？」シャンティが返した。「ぼくがカバルスへの遠征を企図してから、それともする前から？」

ジャクナ三世は顔を背けた。

後からに決まっている。だがそうになると、カバルス遠征が決まっ
てから遠征に行くまでの間にすべての段取りを整えなければならな
い。そんな計画を本当に立てる奴がいるのか？

ギャロップがその質問に答える。

「カバルス遠征が決まっってから、遠征出発までに、計画からなにか
らのすべての用意を整え、しかも向こうに行つた後は監視官とシャ
ンティにばれないように本来味方であるはずの敵と本気で戦い、監
視官らを抹殺できるチャンスを用意に潰し、わざわざカバルス騎兵
を率いて、わざわざサンジャヤ人を捕まえてきて、連絡に使うなら
まだしも死ぬまで放っておいて、拳句の果てには謀反の計画がバレ
るって？」ギャロップはそこでレフティスを見た。レフティスはが
たがたと震えている。「なあ、お前もう気付いてんじゃねえのか？
これらのことは、ある一つの点の考えを改めればすつきりするつ
て」

ある一つの点とは？

レフティスは目にいっぱい涙を貯めた目でギャロップを見ながら
首を振る。左右に頭を揺らすごとに涙はどんどんこぼれ落ちる。ギ
ャロップは無視して頷いた。

「ああ、そうだ。シャンティとお前たち監視官が謀反人の仲間だと
するならば、色々都合がよくなる」

それにはシユラク王が異議を唱える。

「確かにそうかもしれないが、それでは監視官がこの謀反のことを報
告する理由が見いだせないではないか」

「危険が迫った監視官がトカゲのしっぽ切りよろしく、おれたちを
排除しようとしたというのがまっとうな意見かと思えますが」

「信じがたい」

「でも前述した馬鹿で阿呆で無鉄砲で、そのくせやけに遠大な計画
が本当に立案され、実行されていたのだとすれば……そっちの方が
自然ですぜ」

「とういふか、それしか考えられない」

とシャンティは口をはさむ。シユラク王はじろりと息子を見たが、シャンティは視線を虚空にそらしておどけたような顔をしている。

「それとも」ギャロツプが澄ました顔で問いかける。「それでもこの計画は立案され、実行されていたのだとお思いですか？」

シユラク王は唸つてから、シャンティと監視官を見渡す。

「たしかに、今回の話は常識的には考えられんな」シユラク王は息を吐く。「そう言うわけだ。今回の事は不問とする」

場が静まり返った。シャンティもほつと胸を撫で下ろす。ジャーニーは未だに何が起こったのかを理解できないかのようにギャロツプの方を見ていた。監視官たちも、もはや口を挟もうなどと思う者はいなかった。

シユラク王の先の発言はつまり形勢の逆転を意味する。ギャロツプとジャーニーは完全に優勢に立ったことを意味する。ということは、今度は……。

「それで」ギャロツプが証言をしたカバルス人をちらりと見た。「お前は一体何を聞いたって？」

今度はギャロツプたちが攻める番だった。

「そ、そうだ！ 奴の証言は嘘だとわかった」ジャーニーが高圧的な態度で彼に歩み寄る。「奴を連れて来た者も怪しい。これは憶測だが、おれたちを嵌めようとしていたのかもしれない！」

ジャーニーがレフティスを見ると、レフティスは一気に崩れ落ちた。シャンティはギャロツプたちのもとに歩み寄る。

その間にジャクナ三世や宮廷の有力者たちはシユラク王に目配せする。シユラク王は渋い顔をしながらあごを動かした。

兵士たちが足音を響かせて歩き始める。カバルス人は顔を青くしながら、自分をここに連れてきたレフティスを睨みつけていた。兵隊がレフティスやカバルス人を取り囲み始める。

「もしかしたら！」シャンティは声を上げた。「彼はジニーやギャロツプたちを陥れるために金で雇われた男かもしれない。もしかし

たら、それを主導したのはレフティス殿かもしれない。……それでもそれは全て、もしかしたらで、結局、推測の域を出ていない」「シヤンティ」「ジャーニイがいらいらしながら返す。「ならば奴はなんなのだ？」

「そんなことは知らないよ、ジニー。でも、もしかしたらで、誰かに不利な事柄だけを採用するのは駄目だ。それならば君たちはいまにに容疑者だ。それに……もしかしたら、彼は本当にその話を聞いたのかもしれない。彼はその男が本物の騎士だと信じていたが、実はその男が偽物だったのかもしれない」

「つまりは……」

とシユラク王が身を乗り出しながら問いただす。

「彼を責めるのはおかしいことです。そしてレフティス殿を責めるのも……。父上、だいたいさ、殺さないで済むのならばそれで良いじゃないか」

「そんなの、正気の沙汰とは思えんぞ」

ジャーニイは釈然としないのをはつきりと示す。

「ならば殺すのかい？」シヤンティは真面目な顔になって言う。「疑惑、憶測……ふん、ぼくはもう憶測で誰かが死ぬのなんて嫌だね」「あ？ 何の話を……」

シヤンティはジャクナ三世の方をちらりと見た。ジャクナ三世はふと見つめられて、驚いたような顔を少しする。その仕草でジャーニイはシヤンティの言わんとすることを理解した。

ジャクナの母親のことか。あいつもそうだ。憶測で死んだようなものだ。けれども。

「馬鹿言うな」ジャーニイが呆れながら嘆息する。「お前じゃなくて、おれが殺されそうになったんだぞ？」

「でも殺されなかったじゃないか」

「お前は……くそ、とんでもない馬鹿だ」

「馬鹿は君だ。一時の激情で罪を犯して、いつも後になってめそめそと泣いているくせに」

「はあ？」

なに言ってるんだ、こいつ？ とジャーニイははつきり顔を歪めてから、勝手にしると顔を逸らした。

シャンティの意見が愚かな考えであることは、ここにいる全ての者がわかっていた。レフティスがカバルス人を雇い、ジャーニイやギャロップを嵌めようとしたのは明瞭なことだった。そして、それを許すことは彼らにもう一度それをするチャンスを与えることも言えた。

敵は弱みを見せた瞬間に殺しておかなければならない。不用意に生かしてしまえば、さらなる恨みを抱かれていつか本当に殺されるかもしれない。

「まったく、馬鹿は手に負えねえやな」

ギャロップはそう言いながらジャーニイの肩を叩いた。ジャーニイは煩わしいと思いつながらギャロップを見た。見て彼は驚いた。將軍の顔には白い歯をのぞかせた快活な笑みが珍しく浮かべられていたからだ。

結局、レフティスも証人のカバルス人もお咎めなしと言うことになり、ジャーニイは近衛兵団を取り戻し、カバルス人たちは捕虜扱いされた慰謝料を「カバルス鎮定で見事功を為したことへの恩賞」という形で与えられ、解放された。彼らはこの冬の間、護送兵団と共にカバルスへ帰ることになった。

シユラク王はほとんどの事柄が自分の意を通さない形で決められていくのにおかしさを覚えた。同時に、自分がないがしろにされたことに対して抱くはずの怒りは無かった。それは、王の深層意識が彼らの支えるサウルスの新時代を望んでいるのを証明しているようだった。

時代の潮流は止めることができない。同時に、老いも止めることができず、死も避けることができない。それならば、自分が古代の遺物になり果てる前に、新時代を新時代の人々に任せるべきではな

いのか。彼はそう思った。

シユラク王は三人にある試験を課することにした。三人に一時的な領地を与え、その成果を試すのだ。それによって後継者を選ぶのだ。

一二二七年ももう終わろうとしていた頃に、それは王子たちに伝えられることになる。

シユラク王「ところでギャロポン」

ギャロポン「なんですか、王」

シユラク王「王じゃなくて、陛下って読んでね」

ギャロポン「サウルス国は王って呼ぶ体ていということをお願いいたします」

シユラク王「それ、君の意見じゃないのよね」

ギャロポン「はい」

嫡男三世ちやくなん「俺からもいいか？」

ギャロポン「どうぞ」

嫡男三世「こんなアホみたいな裁判どうなんだ？」

ギャロポン「今回はやや特別なので形式は通常とは違うという体で」

嫡男三世「それ將軍の意見じゃないよね」

ギャロポン「はい」

|||||

画像はシユラク王様なんですが、ライオンみたいな鬣たてがみという設定を忘れていたので……。どっちにせよ、六十代の肌ツヤではないな。

> i32520—4057<

二二七年冬。

シャンティの日課は隣で眠る妻を起こすことから始まる。

ふかふかの柔らかな布団に包まれた彼は、同様の布団で寝ている妻の肩を揺さぶって一旦目を覚まさせる。次に従者を呼んで朝の飲み物を用意するように言うと、彼はベッドから起きて、運ばれてきた水などで顔を洗ったり、繊維がちょうど良い柔らかさの木の棒で歯を磨き、すっきりしたところで妻をベッドから抱き起こす。妻は必ず二度寝している。

妻をベッドに座らせておはようのチューをしてから、侍女に彼女の世話をするように伝える。寝ぼけ眼の彼女は歯を磨いてもらったりしながらも三度目の睡眠を必死にむさぼろうとしている。

シャンティは離宮内の廊下を歩いて従者や奴隷たちに挨拶をして周り、ちょうど妻が完全に覚醒したところで共に朝食をとる。そのあと妻の小言（主にカバルス行きの際にほっておかれたことへの文句）を聞いた後、離宮の端にある馬小屋（シャンロン）にいるルルディファイロに挨拶に行く。彼がいまだにつけている角の面甲（シャンロン）に命を脅かされたりしながら何とか離宮内に帰るとまた妻の小言を聞く。

昼食をとるまでの間に読書か訓練かをして過ごし、昼食をとった後は妻をお姫様抱っこして中庭を歩いたり、彼女を兄嫁のユルシユの所に連れて行ったりする。移動最中はもちろん小言を聞かされる。夕食までの間に小腹がすいたら菓子を食べる。近衛兵団との訓練がある時はこれも出来ない。近衛兵団はカバルスでのことがあったせいで張り切っており、何かと言って訓練を行っている。

夕食が終わると外は暗くなっており、灯籠の明かりで日記をつけるか、妻を離宮の高い所まで連れて行って王都の夜景を見せるか…。

「じつやって王子の華やかな一日が終わる。」

「……と、まあ、最近のぼくはとても充実しているよ」
シャンティはウイスカにジューズを注いでもらったコップを揺らし、中の波紋を見つめながら、熱っぽい感じに言った。

その日、エレが「ユルシュに会いに行く」というので、彼は抱っこして彼女を連れて行き、その帰りにギャロップに出会った。実は、センチュリオンである裁判があつた後、彼ら二人は色々な職務のせいで会えていなかった。シャンティは彼に会うや否や、噴水のある中庭に誘って近況を話しあうことを提案した。

「嫁に振りまわされて疲れてるから、そう感じるんじゃないのか？」
ギャロップは彼を気の毒に思いながら言った。「お前それは、奴隷以下の扱いだぜ」

「む、つまりは愛の奴隷と言うことだね？ うまいこと言うね、君も」このセリフはシャンティの日記とウイスカの日記の二つに記録されている。「文学と言う物がわかってきたらしい」

「もう、お前、好きにしろよ」
「……王子」とウイスカがやや驚きながらシャンティを呼んだ。「王太子様です」

シャンティとギャロップがウイスカの示した方を見ると赤髪のジャクナ三世がいた。彼は微笑みながら三人に近寄ってきた。

「シャンティ、ギャロップ將軍。久しぶりだね」ジャクナは明るい表情で言い、彼らのすぐそばで立ち止まった。「さつき妻の所に言ったが、先客がいたのでね。邪魔しちや悪いと思って退散してきた」
「それは御賢明ですね」とギャロップは笑う。「なんせ、相手は魔女ですから」

「そういうこと。彼女は王である父よりも怖いからね」ジャクナが恐ろしい、と言うような仕草をする。シャンティはこの二人が冗談を交わし合っているのを始めて見た。二人はそれほど仲が悪いわけではないらしい。「それよりもシャンティ？」

シャンティが急に真面目な調子になったジャクナを見て、目を丸くする。

「はい？」

「父上から話しは聞いたか？」

「話……ですか？ いえ、何も……」

「コイツは最近」ギャロップがつまらなそうに答える。「嫁の世話か、訓練しかしてないはず」

「そうか……」ジャクナはシャンティの顔を見つめながら言う。「実はな、おれはさつきまで政務室に呼ばれててな……で、グナトウス総督として南部に派遣されることになった。父上にそう任じられたのだ。そして、この話を任じられた場で、お前たちにも同じような命が下ることも教えられた」

「……とはいっても、おそらく僕は西部カバルス地域の総督でしょう」シャンティが言うと、横にいたギャロップはもつともだ、と頷く。「なにせ、まだカバルス鎮定は完全に為されたわけではありませんし、サンジャヤのこともあります」

「そうかな？ カバルス鎮定に関してはすでにそれなりの成果が出ている。少なくとも、おれは報告書を見てそう感じたよ。それに関しては、冬になったから反乱や暴動が減ったという輩もいるが、カバルスの冬はそんなに寒くは無いし、雪が降って交通路が遮断されるわけでもない。だから野盗が冬を理由に仕事を休むことも考えにくい」

「まあ、そう言われてみると……そうですね。兄上？」シャンティは何かに気がついたように言った。「もしかして兄上は、ぼくが派遣されるのは西部ではないと御思いなのですか？」

「そうだ」ジャクナはよくぞ、気付いたという風に返す。「お前は西で一度負傷したからな。あの報告が来たときなど父上は顔を真っ青にして王宮を右往左往していた」

「じゃあカバルスは……ジニーが？」シャンティは焦るように言った。「そうになると、カバルス鎮定に欠かせないギャロップも彼と共

に、ですか？」

「どうだろうな。例の噂の件で二人一組にされていた奴らをも一度西へ送るとは思えないし、父上はお前とギャロップをコンビとして考えているだろうから」

「なぜですか？」

ギャロップが不満そうにいう。

「將軍の真価を見抜き、戦犯としての罪状を知ってもなお生かし、將軍として取り立て、功を為させたのはシャンティだぞ？」ジャクナはやや説得するような表情になって言った。「ともかく、ギャロップは今やサウルス王国の剣だ。自分の危険を顧みず引き立てたのはシャンティなのに、真価を發揮した途端に他人（ひと）に渡すように言われたんじゃあ、シャンティも不満だろう」

「ぼくはギャロップを物として扱うつもりはありませんよ。彼が」とシャンティはギャロップの方を向く。「彼がいいなら、カバルスにジャーニイと共に向かうのだって別に良い。その方が王国やカバルス人のためになるならね」

「まあしかし、おれが南部だからな。お前かジニーがまだ治まらぬ西部に派遣されるだろう」ジャクナは指を立てて、注意して聞くように喚起しながら言う。「その時は必ず將軍の誰かと共に派遣されるだろう。お前なら確実にギャロップ將軍とコンビ。ジニーならば……そうだな、まあ、順当に言ってエラルジス大將軍だろうな」

度々話題にでるエラルジス大將軍はカバルス戦役時にジニーと共に右翼に配備された男である。シャンティはいつからこの二人が周りに認められるほど懇意な間柄になったのか知らないが、おそらくエラルジス大將軍はいわゆるジャーニイ王子派閥なのだろうと思っ

た。
「兄上。もしぼくの派遣先が西でないとしたら、他にどこに派遣されると思いますか？　まあ、北か東しかありませんが……」

「お前はどこが良い？」

ジャクナは笑いを堪えるような感じで聞いてきた。

「……ぼくは」シャンティはあることに気がついて言った。「そうだ。東だ、東しかない。だって、東部ヘドロケラスはエレの実家のある地域だから……。なるほど、そう言うことか」彼は中庭から見える晴天を見つめながら、晴れ晴れとした表情で、守護聖獣に感謝するかのような心持で言うのだ。「妻への良いプレゼントにもなる！」

「お前には、北部カンプトケファレに行ってもらいたい」

「話が違う！」

「な、なにが？」

「い、いえ、こちらの話です」

ジャクナが父王シユラクに呼ばれた翌日、ジャーニイは兄同様シユラクに呼び出され西部カバルス地域へ総督として派遣される由を伝えられた。同伴する将軍はエラルジス大將軍であり、西部カバルス地域はまだ情勢が安定しないという理由で総督のジャーニイには総督軍としての一個軍団（一万）、エラルジス大將軍には鎮定軍としての一個軍団を与えられた。

そしてシャンティはそのことを昼前にジャーニイから聞いた。

昼過ぎ、待っていると父からの使者が来た。シャンティは離宮からすぐ近くの王宮に移動して、何度も通ったことのある長い廊下を案内されて政務室に向かった。

部屋についた時、シユラクは「すでに知っていると思うが、お前たちを各地に派遣しようと思うのだ」と言いながら、シャンティに椅子に座るようを勧めた。

シユラクの前には大きな机があり、机の上には書類の山とペンがあった。王宮での政務よりも侵略戦争を好むのもなんとなくわかる量である。大量の紙の山が築かれた机の前にはすが置いてありシャンティはそこに座った。

「兄上は南部グナトウス、ジニーは西部カバルスらしいですね」シャンティが訊くと、シユラクはうん、と頷いた。「二人とも言うて

ましたよ。これは王位継承のための試験だ、つて。けれども、ぼくは何度も言っています。王位を欲してはいませんか？」

「つまり地方への派遣は嫌だと？」

「そうではありません。地方への派遣は望むところです。ええ、本当に。それでも、あのカバルスにジニーだけを送るのは少し……」

「今回は総督としての一個軍団とカバルス鎮定軍としての一個軍団を送っている。前は総督が一個軍団、カバルス鎮定軍が半個軍団だから……それから考えると半個軍団が多い。それに、大丈夫、歴戦の将であるエラルジスも同伴してくれるのだしな」

「前は地理感のあるギャロップが敵の地の利を打ち消してくれました。しかし今回は……まあ、これ以上はぼくが口を出すことではないのかもしれませんが」

「大丈夫だよ」 シュラク王は彼を安心させるように、にっこりとほ笑みながら言葉をつないでいく。「今回はカバルス兵の制限など設けていないから、カバルスにつけば好きなだけ軍備の増強ができることになる」

それでやっとシャンティは安心した表情になった。

「それで……お前には、北部カンプトケファレに行ってもらいたい」とここで、シュラク王の最初のセリフが来て、東部ヘドロケラスへの派遣を期待していたシャンティは思わず「話が違う！」と叫んでしまった。シュラク王は「な、なにが？」と驚きながら聞き返して、「い、いえ、こちらの話です」とシャンティは大声を出してしまったのを恥じて顔を赤くした。

「シャンティ、北は嫌か？」

シュラクが不安そうに尋ねる。

「いや、ぼくははてつきり、妻の実家のある東部に派遣されるのかと思っていたので……」 シャンティは赤い顔のまま頭をぼりぼりと掻いた。「昨日も妻に、そのようなことを……」

「ああ……それはすまないことをした。本当にすまないことをした」 シュラクはわなわな震えて、蒼い顔をしながらエレのことを考え

る。

「いえ、大丈夫です……」

「そ、それで……北の情勢だが、北部カンプトケファレのさらに北、モーキリニア地方に大きな国があるのは知っているね？」

王は王子の持つ、北法に関する情報の提示を促す様に、掌を差し出す。

「ええ、もちろん」シャンティは人差し指を立てて知識をひけらかし始める。「国名はイムサで王都の名前はコルドスノア。十数年ほど前に出来た新興国ですね」

「そうだ」

「モーキリニア地方の北にあった例の大国……それは偉大なる王の死後に十数人の大將軍によって分割統治され、それぞれが後継者の国と呼ばれるようになるわけですが、その後継者の一国の領土内にモーキリニア地方の半分があつたんですよ。後継者の国の王はモーキリニアを統一しようとしていましたが、それが逆にモーキリア人の怒りを買ってしまった。もともとモーキリアの民は偉大なる大国でも勇猛果敢として恐れられており、偉大なる王もあの伝説的大遠征の際にはモーキリニア人の多くを兵や将として招き入れていたくらいなもので（そのため傭兵の出産地とも言われていたわけです）、まあ、モーキリア人はいとも簡単に後継者の国の侵略を跳ね除けて、逆に敵の領土を奪って豊かな文化をも手に入れたと」

「座学は完璧だね」

「ええ、座学は、ですがね。それで？」

「で、だな。国内情勢が安定してきたモーキリニアは北ではなくこちらへの侵攻を企てているらしい。ああ、そうだ。モーキリニアとサウルスの間には古代の人々が作った川がある」

「潮の川 ですね」

「それを度々越えてきているらしい」

「川を……船で海を渡ることではなく、川を渡って陸から侵略作戦

をしようとするわけですね」シャンティが記憶の中にある、北のことを書いた本を思い出しながら言う。「古代の、傭兵だったころのモークリニア人は、彼ら単体での海戦をしたことがない上、船を作ったことすらなかったらしいですからね。まあ、自分たちの得意な攻め手で勝負するということで、順当な方法を選んで来ていますね」

「もしもの時のために、北の港街には船を作らせてもいる。だが川を越えての侵攻の方が問題だ。今のところは少数のスパイを送り込んでこちらの地理の調査をしているにすぎんが、いつ大軍で襲ってくるともわからん。もしそうなれば……」

「それに対抗するためにギャロップを使おうと？」

「そういうことになる」シユラク王は間髪いれずに頷いた。「それだけではない。そのような重要地点に投入するということは、いわずもがな、我々があのカバルス軍人を重用しているということになる。この事実だけでもお前の望んでいるカバルス人の地位向上にも役立てることができる」

「ですがね、父上。ギャロップは私の持ち物ではありませんので、彼の北への派遣は彼の承諾を得なければなりません。まあ、国からの命令と言われれば行くしかありませんが」

「シャンティ……それで、お前はどうか？ まだ返事をしていないが、お前だって王からの命令ならば行かねばなるまいだろう？」

「……」シャンティは考え事をするように、目を伏せた。そして息をついた後に言った。「まずは妻に相談せねばなりません」

三王子の各地派遣は王位継承者を選ぶための試験であると官人たちは噂していたが、噂が本当なのかどうかは、それを実施したシユラク王にもよくわかっていなかった。

この派遣で良い成績を残したからといって王位を譲る相手にふさわしいかどうかもわかるわけではないし、ずっと王太子として役目を果たしてきたジャクナ三世のこともあった。もし、この派遣で誰か一人が他に類を見ないほどの成果を出したのならば、王太子を代

えることもありえたわけだが、そんなことはよほどないだろうと彼は考えていた。

彼は基本的に王太子をジャクナ三世から代えるつもりはなく、この派遣も本質的にはジャクナ三世の最終試験でしかない。だが、もしも、ジャーニイがカバルスを完全に鎮定した上に本国に何の害もない形でイハテリオ地方まで領土を拡大したらならば……シャンテイがモーキリニア地方のイムサ国を打倒し……それ以外にも彼らが評価に値する事業を成し遂げたならば……。

しかし、と言うよりもやはり、常識的に考えてそんなことはありえないだろう、とシユラク王は思っていた。思っていたからこそ、この派遣の本質はジャクナ三世の為政者としての最終試験なのである。

彼はそのことを誰にも言っていない。一度たりとも「次王を選ぶための試験の派遣である」とは言っていないし、「よほどのことがない限りジャクナが次王である」とも言っていない。そしてこれは考えようによつては「ジャクナを次王に選ぶことを完全に自分に納得させるためにこのようなことをした」とも捉えられた。

二二八年年明けの冬の終わり。シャンテイとジャーニイの二人はそれぞれの愛馬に乗って王都近くの草原まで来ていた。もちろん彼らを護衛する近衛兵団は彼らの周りにぞろぞろと突き従っている。

石畳によつて綺麗に整備された街道をそれて、草原の中心まで馬を歩かせる。冬独特の乾いた、強い風が吹くが、背の低い冬の草はしっかりと根を張って地面にしがみついている。

昔はここで競争したものだ。とジャーニイがオヤジ臭いことを言いながら二人はくつわを並べて草原を歩きまわった。少ししたら湖で休憩をとる。持ってきたパンと燻製を食べ、薪たきぎをして残り物を即席スープにしたりして腹を満たすと二人はまた馬に乗って辺りを歩き始めた。

二人は木漏れ日がなんとなく風情漂うような感じのする街道を歩

き、頂上に一本だけ木の生えている丘に登って、そこから王都センチュリオンを見降ろした。眼前に広がる王都は焼き煉瓦の赤色や青く染めた布などによって彩られ、生き生きとした息吹の様なものをまざまざと感じさせた。

ジャーニーが王都を見降ろしながら呟いた。

「そついえば……結局、魔女は許してくれたんだつて?」

「そつだよ。まあ、実家も近くなるし許してあげるわ、つてさ」シヤンティは眉を八の字にしながら困ったように言った。「そんなこと言うけど、彼女は両親に会うと途端に不機嫌そうな顔をし出すんだ。ははは、それが可愛いんだ。君にも見せてあげたいよ、彼女の照れている姿を」

「頼まれてもそれだけは遠慮しておこう。なにか、後で彼女に恨まれそうだからな」

ルルディファイロが突然丘を下り始める。小走りでポクポクポクと、ある程度下りると今度は草をついばみ始めた。ジャーニーは「次は水だな」と思いながら後を追う。ルルディファイロは彼の思った通り湖に戻って、水をごくごく飲み始めた。

「王子、お早いお帰りで!」とシェイバスが向こうから冷やかした。「なに、これからもうひとつ走り行ってくるさ」

シヤンティがそう返してルルディファイロの腹を蹴ると、ルルディファイロは地面に座り、次に寝そべった。カバルスの夜襲の際に愛馬との絆を強めたと思つてシヤンティは呆然として立ちつくした。「おい、シヤンティ。おれの馬に乗れ」

ジャーニーがそう言うとシヤンティは恥ずかしそうに頭を掻きながら、彼の馬の背に乗った。

彼らは再度丘を登った。もうすぐ、この王都から遠く離れ、各々の派遣された任地で為政者とならなければならぬ。期間は詳しくはわからないが、永遠にその場所にいななければならぬわけではないだろう。

「今回は二人別々の所に行くんだな」とジャーニーは弱きな感じで、

気持ち目を潤ませながら言った。「考えてみれば、初めてじゃないか？　こんな遠くに離れて長期間過ごすのは」

「ジニーは大丈夫かい？　ぼくがいなくてさ」

「どちらが兄か忘れたんじゃあるまいな？　ふん、大体、それはおれのセリフだ」ジヤーニイはちらりと後ろのシャンティを見る。「敵はモーキリニア人だろ？　おれはお前みたいに詳しいことは知らんが、やけに強い奴らしいじゃないか」

「より寒い地方に住む人々は体が屈強な場合が多いからね。体格や身体能力という点では完全に負けだね。それでも……」シャンティは力強く言った。「守りきれれると思うんだ」

「深い理由は？」

「もちろんない」

「やっぱりか」ジヤーニイは苦笑する。「余裕だな。おれはあのカバルスのじゃじゃ馬共とまた何度も戦わなきゃならんと言うのに」

「ジニーならば大丈夫さ」

「深い理由もなくそう思うんだろう？」とジヤーニイが言うとシャンティはその通りさ、と笑いだした。ジヤーニイもひとしきり笑った後、急に真面目な調子になった。「……なあ、ちよつと聞いていいか？」

「なんだい？」

「お前は父上に……王位を譲るといわれたら……受けるのか？　王位を」

ジヤーニイがそろりそろりとそれを口にした後、二人の間にわずかの沈黙が流れ、大きな雲が太陽を遮った。二人は空を見て、急な速さで進む雲の端から、また太陽の光が草原に向かって注ぎ込まれるのを見た。シャンティは言った。

「もしその場合は受けるよ」

「なぜ？」なんだと？「王位はあれほどいらなうと言っていたのに！」あれは嘘だったのか？

ジヤーニイは強い口調になって、まるで責める様にシャンティに

言った。

「少し考え違いをしているよ。ジニー？」シャンティは少しもおくびる様子もなく返した。「父上がぼくらに王位をあげるといつてもね、ぼくらが貰うのは、本当は王位じゃない。いや、貰う、と言う言葉もニュアンスが違う。ぼくらはね……国と民を託されるんだよ」「……」ジャーニイは胸の奥がざわざわとゆれるのを感じた。「託される」

ふざけるな。

「そう！ 託されるんだ。この国に、この者たちに、どうか更なる繁栄を……そんな風に託されるんだ。そう考えるとね……やはり、断れないじゃないか」シャンティは微笑を浮かべて、それでも困ったように言う。「国と民の立場に立って一番良いのは誰かと考え、三人の中で、もし自分を選んだのだとしたら、それは断ってはいけない。それを受け取るのは父上のためであり、国と民のためなんだ」ふざけるなよ。

ジャーニイはついさっきまでの自分に深い嫌悪感を抱きながら、今の自分にも深い嫌悪感を抱きながら弟の言葉を聞いていた。

丘の上を強い風が吹いていく。それは草原の葉を散らして、空中に巻き上げた。

ジャーニイは思った。

シャンティ、お前は変わったよ。と彼は王都を険しい目で見ながら考える。変わってしまった。あの男のせいで、ギャロップのせいで。昔はおとなしい、ただのおとぎ話の好きな弟にしか過ぎなかった。誰もお前に王位を期待しておらず、そしてお前もお前自身の王位継承を欲していなかった。今もお前は王位を欲しないままだ。けれども……お前のその底知れなさはいつの間にか王宮内の官人の人望を集め、カバルスでも功を為し、いまでは、お前が王位に立つとも誰も不審に思う者はいなくなるまでになった。おれは、ああそうだ、畜生め！ おれはお前が怖い！ お前はいつしか、王になって、おれの憧れる領土拡大の侵略戦争を全ておれの手から奪い去り、

馬鹿みたいなただっ広い知識と無意味に深い思慮によって温厚な賢王として今の領地を治めることに努め、その阿呆とも言える優しさで歴史に名を残し……おれをこの歴史から消し去ってしまうんじゃないのか？ そう考えると……おれはお前が怖い。なあ、お前にもしその時が来て、お前がいまのまままで歴史に名を残すことなど微塵も考えないのなら、その時は、おれに王位を譲ってくれ。おれは……そうでないと。おれはそうでないとお前を殺してしまう。……いや……いや違う。

かもしれない、じゃない。おれはお前を殺すのだ。もし、そうなる 때가きたならば、おれはお前を殺すのだ。殺すのだ……。

ジャーニイは決意を秘めた。そうやって決心をつけてしまうと、彼の心は悪くない感じだった。晴れやかだった。奇妙にさっぱりした感じだった。心の中に溜まっていたヘドロがまるで、綺麗な額縁がくがらに入れて、大事な家宝として自分の中で飾られているかのような……それはそんな存在感を放ち、それが彼に安心感を与えた。彼は自分の矮小さにはつきりとした高評価を与えた。起こりうるかもしれない事柄に物語の英雄性も添加した。彼はもう揺ぎ無かった。

「シャンティ」彼は言った。いつもと変わらない顔で。「帰るか？」
シャンティも同じようにいつもと変わらない様子で微笑み、うんと頷いた。

ジャーニイは馬の腹をけりながら、さっきのように空を見上げた。風は空の高いところでも強く吹いて、雲をどんどん押し流した。彼は思った。

この空は、いつしか雨になり、雷を降らし、嵐を作って、いつかはまた何もなかったかのように澄み切った空になるのだ。けれどもその中で、取り返しのつかないものを残すのだ。そして知らん顔で、また、いつもみたいな表情を見せているのだ。

ジャーニイは眩しそうに空を見上げながら丘を下っていった。

13・頼み（後書き）

展開、すごくいきなりな感じがするなあ。

画像は古代のスペインで使われてた剣だったと思います。『武器』
と言う名前の本で見た。たしか、岩明均さんの『ヘウレーカ』でも
イベリア人騎兵が使ってるはず。

で、カバルスの方の人はこんなのを使ってたという設定です。

14・シャンティ、偉大なる大国の偉大なる王に関する考察をするの巻

> i32608—4057<

二二八年の春。シャンティたちはサウルス国北部カンプトケファレ地域に向けて移動を開始していた。今回は総督として出向くから、家族や使用人を連れていくことも了承され、連れて行く兵士の数も一万にぼるので、長い長い行列が作られていた。

愛すべきシャンティ王子はカバルス鎮定での功などの影響で人気を急上昇させていた。特に、カバルス人の地位向上に努める姿勢から、王都センチュリオンに連れてこられていたカバルス人奴隷からはことさら人気があった。

ジャーニイたちは、西都が遠いという理由からシャンティよりも一週間も前に出発していたが、そのときよりもカバルス人たちの熱狂はすごかった。シャンティに亡国の幻将と呼ばれて冷やかされているギャロップの人気も高かった。彼はサウルス国民にとっては戦犯であり、カバルス人にとっては裏切り者であるにもかかわらず、その高い軍才からある程度の評価を得ていたようである。

この頃の王都では「ギャロップ少年の冒険」という本が出版されており、人気を博していた。それは彼の名前と風貌を使っているが、物語は全てが嘘っぱちだった。西方の一角獣ユニコーンを倒したただの、竜に乗って各地を旅したただの、万病に効く竜の鱗を病気の少年に与えたただの、最後に若い麗人と道ならぬ恋をしたただのと言っことを面白おかしく書いており、シャンティとジャーニイはそれをギャロップの前で読み聞かせして哄笑していた。ギャロップの方は真っ赤な顔を苦々しそうに歪めていた。

ともあれ、シャンティたちは北に向けて旅立った。

シャンティとエレは王族用の馬車に乗って優雅に旅し、兵隊たちは規律正しく歩いて歩いて歩きまくって旅を続けた。北に進むにつれて気温ではなく風が冷たくなってくる。サウルス人の兵士たちは

対して気にもとめていなかったようだが、去年の同じ頃合いには温暖なカバルス地域にいたシャンティはやや寒そうにしていた。馬車の中でがち震えるシャンティを見てエレは「軟弱」と高笑いし、それは周りの兵士たちにも聞こえたようだった。もともと東部と北部は緯度がほとんど同じで、と言うことは東部出身のエレは寒さになれていることになる。

「なるほど、寒い地方にいたからあんなに肌が白いのか」

とギャロップはことさら寒そうにしながら言った。ギャロップだけではない。温暖な地域に住んでいたカバルス人は皆が皆寒そうに震えていた。

カバルス人は今回も五百人ほどの従軍である。もつと連れて行くと思えば連れていけたが、北部で戦地になるであろう地域の資料を見たギャロップはすぐに騎馬の無用さを指摘した。次は基本的に森の中の戦いになるのだ。

行軍するだけの日々が何日も何日も続くと、何不自由なかった工しもさすがに我慢の限界が近くなって来たようで「目的地の北都ウチノホークにはいつ着くの？」としきりにシャンティに質問するようになった。でもシャンティは「もくてきち……」の言葉を聞くと同時に用意しておいた菓子をぱつと出すことで彼女の機嫌がより悪くなるのを防いだ。

列を為した一万人以上の人間は、大小色々な山をいくつも越え、深い森をいくつも越え、川に掛けられた芸術的な橋を渡り、やっとこさウチノホーク近辺まで辿り着いた。

シャンティは日記帳に『ウチノホークには何度か来たことがあるが……始めて気がついた、空の色が違う気がする。北の空は薄く、遠い色をしている』と書いている。エレはそのことを良人から話されると、彼の夏の晴れ空色の目と、今自分の見ている北の空の色を見比べて「そうね」と頬笑みを返した。彼の目の色の表現、つまり「夏の晴れ空色の、はつきりとした青色の目」という表現は、エレが侍女に一度だけ言った言葉を引用している（シャンティの自画像

を描いた絵師に、侍女がそれを伝えたことによつて今にその表現が残っている。彼女は夫の千分の一も書き物も残さなかつたが、それでもこの話を聞けば、彼女に夫同様の文才や表現力があつたのがわかる。

さて、サウルス国の特産品とも言われる石畳の街道を通り、丘を頂上まで登つたところで、シャンティたちは目視できる所に北都ウチノホークがあるのを知つた。

ウチノホークはどこことなく重厚な感じの都市だつた。寒いことに関係性があるのか、市城壁や建物の壁はセンチリオンのそれより厚いように見え、全体としてはぼつてりとした灰暗い色の町だつた。しかしそれらは近くにある木々やのどかな農地と見事に調和しており、町に漂う雰囲気は古風で落ち着いたものと言えた。

良い都市だ、とシャンティは嬉しそうに眼を見開きながら思つた。シャンティは兵士たちの元に行き、笑いながら「ここまでくればウチノホークまでは目と鼻の先だ。どうしようか？ このままウチノホークまで休みなしで行くかい？ それともウチノホークを見ながら昼食をとるとするかい？」と語りかけた。

「王子と共に！」カバルス人が片言ながらサウルス語をしゃべりながら言つた。「昼食を！」

すると兵士たちは一斉に「パキケファアの丘で昼食を！」と叫びながら、荷馬車から荷物を下ろし、昼食の準備をし始めた。シャンティはギャロップから「予定外のことを行われては困るなあ」と小言を言われながらも、うきうきしながら昼食の準備を手伝つた。

準備ができるとすぐに宴会が始まつた。酒は一人二杯までと決めていたが、將軍であるギャロップがそれを率先して破りながら大量の馬乳酒を飲んでた。カバルス人は相撲を始め、サウルス人はそれを取り囲んだ。近衛兵団は憲兵より騒ぎが大きくなり過ぎないようにパトロールをしていたが、行く先々で酒やつまみを勧められて腹がパンパンに膨れていた。

シャンティは丘の頂上で嬉しそうにその光景を見ていた。エレは

呆れたような顔つきで彼のすぐ横に立って「なぜ、こんなことをするのかわからないわ」と静かに言った。その声には怒気は宿っていない。

「明瞭なことさ」シャンティは彼女の好物の菓子を差し出しながら笑いかける。「彼らと共にここでこうやって過ごせるのは最後だから」

「仕方ないですわ。聞いてあげましょう、あなたの良き妻としてね」エレは溜息をつくような仕草をしながらお菓子をとった。「それは一体どういうことかしら？」

「北の……モークリニアよりも北にあった大国。偉大なる王の作った大国。小ウアズマの北半分を征服し、しかし、それすらも鮮やかなる地方ウアズマへの足がかりにすぎず……」シャンティははるか遠くを見つめるような眼つきをする。「偉大なる王はなぜ軍を率いてそこに向かったのだと思う？ ウアズマの文化に触れたいのなら、ただ一人の冒険者でも良かったはずだ。ましてや、多くの民から敬われないだけならば、ウアズマへは行かず、小ウアズマを征服するだけでも良かったはず……」

「さあ？」

「ぼくはね、思っただ。彼は、家族や友や將軍や兵士や、つまり愛する者たちと一緒に色鮮やかなる土地に臨みたかったんだ。もちろんウアズマの、きらびやかな黄金や宝石、肌触りの良い絹の衣服、食べたこともない味の食べ物、美しく官能的な女性……そういう物がほしかったのかもしれない。それでも彼は、例えばウアズマの一国の王の側近として取立てられ、それを享受できるとしてもそれを望まなかっただろう。だって……」

「これが出来ないからでしょう？」

とエレは馬鹿騒ぎする兵士たちの昼食会を馬鹿にするかのように指さしながら微笑んだ。

「長く広く大きな世界で、最愛なる者たちと共に享受する唯一の間。それは何ものにも勝るんだ」シャンティはいっそう瞳を輝かせ

ながら彼女に言うのだ。「友や、兵士や、君たちでなければならぬ。君たちとの一瞬でなければならぬのだ。たしかに、見ず知らずの者たちとの時間も代えがたいものだ。けれどもその時間も、艱難辛苦を共にして心一つに繋ぎあつた今のぼくたちの一瞬には敵わない！」

「その時間を愛するがために、あなたは何者も嫌えないのかしら？」

「それは……なるほど、初めて相対するタイプの質問だね。答えを考えておかなくちゃね。難しい質問だから、老後までかかるかもしれないけれど、君は待てるだろうか？」

「シャンティが私に尽くしてくれるのならね。いつまでも待つわ」

「善処します……と言っしかないね。それに関しては」

「あなたならきつと大丈夫よ。なに、私の機嫌をとるなんて、用兵術よりかは簡単なことよ」彼女はいたずらっぽい笑顔を浮かべて言う。「不機嫌になったら、お菓子を出せば良い。……違うかしら？」

シャンティは、もう通用しないなあ、と思いながら困ったようにお菓子を食べた。

「王子！」焦ったような声が遠くから聞こえてきた。シャンティは、騒ぎ過ぎたのだろうか、と思いつながら声の主を探した。声の主である近衛騎兵はウチノホーク側の丘の麓の方からやってきた。そしてシャンティのすぐ前に着くと、丘の麓を指さしながら言った。「カンプトケファレ自警軍です。王子を呼んできてほしい、と」

「自警軍……」シャンティが麓を見ると、数十人の屈強そうな男たちが彼を睨んでいた。「わかった。ぼくに任せてくれ」

シャンティは丘をおり始めた。宴会をしていた兵士たちは騒ぐのを止め、下りていく王子と麓で待つ体の大きなカンプトケファレ兵たちを交互に見た。近衛兵団の兵士たちは下りていく王子のすぐ側に集まり始める。

さて、自警軍についての説明を始めなければならない。

総督は一個軍団を引き連れて任地に赴くが、もちろんそれだけでは広い範囲をカバーできないし、侵略戦争にもなるとほとんどの兵士は侵略軍側に引き抜かれてしまう。そうなると手薄になった各地域を守るための個別の軍が必要になる。そのために自警軍と呼ばれる軍隊が作られたのだ。

自警軍はいわば警察であり軍隊である。地域内の野盗を退治したり、町の治安維持を行う。

軍（ここから少しの間、区別のために国軍と書く。侵略軍や総督の持つ軍も国軍である）と自警軍はほとんど同じであるが違ってくるもある。二つの軍の持つ権力の差を見れば、国軍の方が上である。国軍はサウルス国の各地域から兵士を集めるが、自警軍は各々の地域からしか兵士を集めない（カンプトケファレ自警軍はカンプトケファレ地域からしか集めないし、サウルス地域もサウルス地域のみから兵士を集めて、国軍とは違うサウルス自警軍を作る）。

国軍は侵略戦争を行えるが、自警軍は原則として防衛戦争しか行えない。

つまり国軍は地域間の境を越えることができるし、国境も超えられる。自警軍は地域間の境も越えられず、もしそれをしようとする と反乱とみなされる。

国軍は自警軍から精鋭兵を引きぬけるが、自警軍は国軍からそれを取り戻すこともできず、国軍からの返還を待つしかない。

国軍の兵員数には限度は無いが、自警軍は反乱を防止するという理由で一個軍団から二個軍団の間の兵員数しか認めない。

ここでサウルス国の徴兵制度的なものも説明しておかなければならない。

サウルス軍の兵士には貴族出身の兵士と平民出身の兵士がいる。そしてその両方共に志願兵と徴兵がいる。志願兵は軍人を生業とする者であり、徴兵は他に職があるが国の義務により兵になった者である。軍内部での権力はもちろん進んで兵士になった志願兵の方が高い。

次に軍隊内での貴族と平民の差である。言わずもがな、貴族の方が上級職につきやすく、貴族と平民が同級の場合でも、貴族の方が強い権力を持つ。

国軍において軍集団を率いるのは王族か大將軍のみである。軍団を率いるのが將軍。大隊を率いるのが大隊長（千卒長）。騎兵隊を率いるのが騎兵隊長。近衛兵団は近衛隊長。ここまでは基本的に貴族しかなることはできない。

中隊を率いる百人隊長（百卒長）を貴族がする場合はあるが、基本的には志願兵である。百卒長になるのは徴兵内でも今までの戦闘で戦功のある者、それと一般市民内での有力者（つまりはある都市で幅を効かせていた者など）、志願兵の有力者である。

小隊を率いるのは隊長。基本的に志願兵である。これも百卒長同様の理由で決定される。

さて、自警軍は最大二万人の兵員数の中で、百人が貴族であり、全員が上級職である。自警軍の長は自警軍長であり、これは各地域の最上級貴族（サウルス王族ではない）がなる。その下の自警軍団の長は自警軍団長であり、これは上級貴族がなる（厳密には上級貴族などと言つ身分はない。ただ単に家名の高い貴族の表現として上級貴族と言つ言葉を使う）。各兵種隊長は貴族がなる。千卒長は貴族と志願兵がなる。百卒長は貴族と志願兵がなる。隊長は志願兵と徴兵がなる。

次に志願兵の説明をつけたしておく。

志願兵はつまるところ、軍人を仕事にしている者たちのことであると前述した。国軍と自警軍の志願兵では少し質が違うが、彼らはおおむね公務員と同じであり、徴兵よりも多い給料を貰いながら暮らしている。しかし給料は下級官人より低く、志願兵用の寮なども与えられるが結婚すると追い出され、その後の住処探しの手助けを国はしない。

侵略戦争などの有事の際、各地域の自警軍の精鋭志願兵はすぐに国軍に引き抜かれていく。引き抜かれた彼らは国軍内で隊長職につ

き、隊を率いる。自警軍では千卒長をしていた者が、国軍では百卒長などと言うことも普通にあるし、給料も自警軍と比べてそれほど変わらない。それでも、国軍に引き抜かれると言うのは十分に名誉なこと、彼らは地元に戻った時には尊敬の眼差しで迎えられることになる。

「王子」シエイバスが馬の上から王子に声をかける。「地域の自警軍には粗暴な者が集まると聞きますが」

「粗暴と愚かは同じ意味ではない」シャンティが丘を下りながら泰然として返す。「もしぼくが王族であると彼らが知っているのなら、彼らは手荒なことはしないだろう。なぜなら、ぼくを殺せば彼らの数倍の戦力を持つ国軍が動くのだから」

「……」シエイバスは近くの兵に小声で何事かを話す。話しかけられた彼らは、すぐに馬を走らせて自警軍を取り囲んだ。「王子……とりあえずのことをさせてもらいましたよ」

シャンティは前を向いたまま、うんと頷く。それから数十歩前に進むと、待ち受けるカンプトケファレ兵の前についた。彼らは皆、体が大きく、一番前に立っている男はギャロツプと同じほどの背丈だったが、骨格は將軍よりも一回り大きいようだった。

シャンティは彼が腰に帯びる剣を見た。

「北の剣は他の地域よりも大きく分厚いと聞きました。見せてくれませんか？」

とシャンティが言うと、自警団の彼らは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした後、噴き出して笑いだした。近衛兵たちはムツとして腰の剣に手をかける。丘の兵士たちも王子を笑ったことに対して気分を害し、むつくりと立ちあがった。

一番前の大男がそれを見て、感心したように口角をあげる。彼は腰の剣をシャンティに差し出した。シャンティは興味深そうにそれを見て、鞘から剣を抜いた。

「確かに……少し違う」

「サウルス・センチユリオン・レジエム・シャンティ様」大男が片膝をついて跪くと、後ろの男たちも同様にした。「お迎えにまいりましたぜ」

「ありがとう。立ってくれ」シャンティがそういうと、彼らはすぐに立ち上がってシャンティの前で膝についた砂埃を払い始めた。「君たちの名は？」

「カンプトケファレ地域自警軍。第五歩兵千人隊……の第二軽装剣歩兵隊」

「君が隊長か？ 名前は？」

「おれですかい？ おれの名前はフートスですが……ははは、んでも、おれは副隊長ですぜ」とフートスが哄笑すると、後ろから老人がひよこひよここと現れた。老人は顔いっぱいに深い皺を刻ませており、髭は鎖骨の辺りまで伸びていて赤いリボンで結んでいる。身長はシャンティよりも少し下、けれども、体つきは若者のそれだった。そして、彼は隻腕だった。

「私わたくしめはこの歩兵隊の隊長をやとります、ジョージョー・ビグフトスと言います」老人は懐から本を取り出し、おずおずと差し出した。「恥ずかしながら、私の若いころの冒険を書いた本を出しとります。読んでいただければ光栄です」

「ジョージョー？」シャンティは眉に皺を寄せながら本を受け取る。本の題名は「ジョージョー脱獄記」であった。シャンティは題名を見た瞬間がくぐくと震えだした。「い、生きていたのですか？」

「おい、何をしてる？」とギャロップがつまらなそうな表情を浮かべてシャンティたちのもとにやってくる。隣まで来るとシャンティの持つ本を見て言った。「それはなんだ？」

「君は馬鹿か！」シャンティは獣の皮で表紙を作ったハードカバーの本をギャロップの顔にぶち込みながら演説し始めた。「この本『ジョージョー脱獄記』は、モーキリニアの若き戦士であったジョージョー・ビグフトスが村落内の権力闘争に巻き込まれ、そして紆余曲折の末に彼は投獄された。固く分厚い鉄格子の牢屋に繋がれた彼

はその鉄格子の欠片で針を作つて鍵を作つた。彼はしかし、逃げ出してすぐに発見され、森に逃げ込んだ。彼は考えた。モーキリニア人は、海は苦手だから船を盗んで海に出よう、と。そして彼は遭難したあ！彼は漂流した島で何とかその日の食料を手に入れていたが、それも徐々に限界に達し始め、そこからの脱出の図ることになった。そしてそして、彼はサウルスの北であるカンプトケファレに辿り着いた！その時はまだ、カンプトケファレが国として存在していた頃だ！そして彼は……」

「うるせえよ」ギャロップは大きな手でシャンティの口を塞いでから自警軍の方を見た。「それで、結局お前たちは本当にこの馬鹿を迎えに来てただけなんだな？」

「ああ」とフートスが答える。「それと、爺さん……ビグフトス爺さんはおれの本当の爺さんなんだが、爺さんが王子のサインを欲しいって」

ビグフトスはおずおずと紙を取り出してシャンティの前に差し出した。フートスの方がペンとインクを取り出す。

「……」ギャロップは紙に『亡国の幻将ギャロップ参上』と書いてそれを返した。「よし、じゃあ宴会は終わりにしてウチノホークに入ろうじゃあないの」

「その前に聞きたいことがある」

大男フートスは差し迫つたような、鋭い目つきで言った。

「なんだ？」

ギャロップが片方の眉を上げながら返す。

「あんだ、シャンティ王子のなんなの？」フートスは青白い顔をしながら小指を立てて言った。「これかい？」

ギャロップはシャンティを思い切りつき放して、猛烈な勢いで首を横に振つた。シャンティは「ギャンツ！」と言いながら地面にたたきつけられた。

「そうか、ならいいけど」彼は晴れ晴れした顔で、北の薄い空を見上げながら言った。「ほら、中央の人ってそう言う奴が多いって聞

くからさあ。そんなもおれはそういう文化だけは受け入れられないんよ」

彼の後ろで彼の部下たちがうんうん、と頷く。ギャロップは、そう言えばおれもカバルスにいる頃に同じようなことを聞いたな、と思いついた。

かくして宴会は終わり、シャンティたちはその日のうちにウチノホークに入った。次の日に総督職の引き継ぎ式を行い、前任の総督から書類やら冠やら剣やらを渡されてシャンティは難なく総督に就任した。

引き継ぎ式にはカンプトケファレの貴族たちが集まり、東部貴族であるはずのエレの家族も出席していた。また、自警軍も新しい総督のために行進などの見世物を行い、都市中に新総督就任のニュースを流した。

シャンティの人気は北でも大したものだった。大体、シャンティは顔が良いものだから女性には好かれやすい。その分、男性からはあんまりだったが、ここ最近の彼の行動、つまりカバルス人の地位向上のためにカバルス鎮定軍を出したことなどから、一本筋を通す男気がある奴として北の男たちには高く評価されていた。

そしてウチノホークに入って三日目。まだ肌寒い春の日に、モークリニア地方イムサ国対策会議が始まった。

14・シャンティ、偉大なる大国の偉大なる王に関する考察をするの巻

(後書

この小説は4月くらいに書き終えて、それからずっと文章の直しとか絵の描き貯めとかをしてました。

そうこうしているうちに『アイドルマスター』というアニメが始まって、そのキャラクターの四条貴音という娘がエレの設定とややかぶってた(ふわふわの髪に大食い)ので、僕の頭の中ではエレのビジュアルがこの娘に定着してしまった。

そういうわけで、エレのビジュアルはかなり(というか、ほとんど)その娘の容姿に似てる。パクリではありません。リスペクトです。パクリスペクトです。

もちろん「パクリやないかい!」と言われたら、ぐうの音もありません。

まあ、絵が下手なせいであんまり似てないからいいではないですか、ぬはは(完全な開き直り)。

15・モーキリニアの將軍

> i32666—4057<

二二八年、夏の真つ盛り頃。その夏はどこもかしこも猛暑で、比較的涼しいはずの北の大地もその例からは外れていなかった。そんな中、一人の男がのどの奥も干上がるような暑さを感じながら炎天下の農村を歩いていた。

彼の名前はエムノン。彼が歩くと村のいたるところから挨拶の聲が聞こえた。全てイムサ兵の声だった。「おはようございます！」
「今日もお元気そうで！」「出撃はいつでしょうか！」「いつでも出撃できます！」「戦いは？」「戦争は？」しかし彼はそんな声にはほとんど反応もせずに一軒の大きな木製の建物に入った。

ノックもせずに不躰に家の中に入ると、身長短足小太りの、やけに頬の赤い男が中にいた。相手の男はエムノンを見ると不機嫌そうな顔つきになった。

「ブシッタコス、何の用だ？」

エムノンは言いながら、部屋の中にある適当な椅子に荒々しく座った。

「我が王バテル・オルニス様からのことづけだ。いつになったらお前は敵国に攻め込むのか……とな」ブシッタコスはくるくると巻物を開きながら言った。「本当に、いつになったらお前はサウルスへの侵略を開始するんだ？ 情報収集からずつと話が進んでないじゃないか」

「つい最近カンプトケファレの総督が代わった」エムノンは足を組んで、高圧的な態度で答える。「調べて見たがそいつはカバルスの鎮定で功を為したらしい。少しの間は相手の様子を見なければならんと思っっている」

「だから早く攻撃を開始しろと言ったのだ！」ブシッタコスは頬をさらに赤くして叫んだ。「この臆病者！ モーキリニアの名折れ！」

「ブシッタコス？」 エムノンはイスから立ち上がると、腰に帯びていた剣に手をかけながら威圧するように彼に近づいた。ブシッタコスは身を後ろにそらす。「おいおい、ブシッタコス。ブシッタコスはブシッタコスらしく、王の言ったことだけをおれに伝えればいいんだ。おいおい、わかったか？ お前は自分の仕事を忘れているんじゃないのか？ おい、そしてなあ……お前はおれの言ったことを王に伝えるだけでいい。それ以上は、いらぬ。つまりは、おれの悪口をいちいちいち、王に言わなくてもいいのだよ」

エムノンは鞘から剣を抜くと、ブシッタコスの真つ赤な頬にあてて、すつと横に引いて見せた。すると彼の頬には一本の細い傷ができ、その傷から血が浮き上がり、端から血が流れ始めた。

「……」ブシッタコスは悔しそうに、さらに顔を赤くして言った。

「私はお前が嫌いだ、大嫌いだ。しかしお前の軍才は信用している。イムサで一番の軍才だと信じている。そしてこれまでのことは……」

……私なりの忠告をしたまで」

「気が合うな、おれもお前が大嫌いだよ。いや……」エムノンは剣を収めながら言う。「それどころか、お前以外の文官全員も大嫌いだ。なぜモーキリニアが、なぜイムサが、お前たちのような剣も扱えん無能共に牛耳られねばならぬのだ。領土はいつだってペンではなく、剣で手に入れてきたというのに。お前たちは土地を手に入れるとすぐにそれを文官の中だけで困い始める。それを手に入れるために命を賭したおれたち武人を差し置いてな」

「文官はお前たちが手に入れた土地を管理・維持しているだけだ。困い込んで……」

「しかし、その維持の最中でお前たちは享樂を享受している。權益を得ている。そしておれたちには……次の戦場に行け……だ」エムノンは吐き出すように言う。そのくせ笑顔である。「いや、いいのだ。いいのだよ。おれたちには戦場しかない。戦いしかないのだ。モーキリニアの恐ろしき女たちとは一週間だって一緒にはいられないのだ。だからおれたちの住処は戦場で良いのだ、そののみを望ん

でいるのだ。この、狂奔と喧騒が支配する場所を望んでいるのだ」
「ならば！」

「しかし！ お前たちは許せん、お前たちは許せん！ 歴史を紐解けば、奸臣と言つのはいつだって文官から出るといふじゃないか。お前たちだってそうだ。王を誑かし、享樂に誘い込み、墮落させ、家畜のように太らせ……」エムノンは顔を真っ赤にしている。「いや、それすらも別にいいのだ。お前たちが快樂を貪るのも、王が臍抜けになるのも。しかし……しかし……おれたちの美しい戦争を妨害しようとするのは許せん」

「私も勇猛なるモーキリニア人の端くれ……お前の気持ちは、わかるつもりだ」

「わかるはずがない。ならばなぜ、王を焦らせておれたちの戦争計画を潰そうとするのだ」

「私のせいではない。王が望むのだ。王は国の長期的な……」

「黙れよブシッタコス」エムノンは一転して静かに言った。が、続く言葉は激しく熱い。「長期的？ ふん、馬鹿らしい。どうせ、それを教え込んだのはお前たちだろう？ ふん、馬鹿らしい。長期的だと、ふん、ははっ、長期的だと！ 長期とはどれくらいだ？ 一年？ 十年？ 五十年？ 百年？ それよりもっと遠い、見果てぬ未来のことか？ 馬鹿らしいったらありやあしねえぜ！ 長期的にはおれもお前も王も、誰も彼もが死んじまつてるぜ！ そして戦争は！ 今起きている！ 戦争では！ 一瞬の気の緩みが、一瞬の判断ミスが、積み重ねてきた全てを終わらせる！」

「……エムノン」ブシッタコスは死の恐怖をひしひしと感じながら呟いた。

「伝える！ 王に伝える！ 腐ってしまったバテル・オルニスに伝える！ ブシッタコス！」エムノンは満面の笑みで、いや、見ようによっては憤怒の表情にも見えるような顔でブシッタコスに詰め寄った。「戦争の準備を一日早ませ、万が一にも戦争に負けたのならば、貴様の千年帝国も夢の話よ、とな」

エムノンは言い終わるとブシッタコスが部屋の中に残して、去った。ブシッタコスはぶるぶると体を震わせながら、下唇を噛み、定まらぬピントでさつきまでエムノンがいた所を睨んでいた。彼はエムノンを憎んでいた。絶対に彼の思い通りにはさせないと誓っていた。

「追い詰めてやる。いや、追い出してやる。エムノン、お前をお前の望まぬ戦争に追い出してやる。そして金も肉も酒も女も、何一つの快樂も希望も無い所で、戦士らしく重い防具をかぶって糞尿をかぶって切り裂かれ倒れ込み、名も知れぬ兵士の一人として、惨めに惨めに死ね」

ブシッタコスの下の床はアンモニア臭くい小便で汚れていた。彼は、糞を漏らしてなくて良かったと思いつながら立ちあがり、大きなため息を吐いた。

エムノンはブシッタコスがいた建物から出ると兵舎に向かって歩き始めた。

「各隊長を兵舎の会議室に集める！」エムノンは道の真ん中でそう怒鳴りながら歩いた。「これから軍議を行う。すぐに集まるように伝える」

イムサ兵たちが慌てながら四方に散る。

彼らがうまいこと隊長に命令を伝えたのか、エムノンが兵舎に着くまでにすでに彼の周りには数人の隊長が集まっていた。

平凡な見た目だが、やけに騒がしいアレクトール。軽装歩兵たちを束ねる小柄なケリーバーン。兵を思い通りに指揮することができ、色白の美男キュクノス。まだ隊長に昇格したばかりの若造、ひよっこネオツトス。

彼らは木造の兵舎の中に入り、奥のドアから会議室に入った。会議室の中は暗く、資料やら地図やらが雑然と置かれていた。中央には大きな机があって、各々は指定席についた。

雑用が彼らに飲み物を出しているうちに次々に隊長たちが入って

くる。

戦闘ごとに役割の違う独立部隊を束ねる浅黒い肌のコローネ。エムノンの右腕である壮年のストルーツス。体がでかい派手好きタオース。アレクトールの弟で情報収集が得意な優男アレクトリス。

彼らが全員着席したところでエムノンが口を開いた。

「アレクトリス、情報収集の方はどうだ。新総督の情報を言ってもらおう」

「それよりブシッタコスはどうでした？ また王からの伝言を持ってきたんですかい？ 毎回毎回ご苦労なこつて。んでも……はいはい、わかりましたよ。で、情報ですがね。もう少し時間があれば書類にできたんですが、今回はいきなりなもんで書類は用意できませんでした。だから口述ってことで」アレクトリスは長い前置きをしてから本題に入った。「新総督は王族、しかもシユラク王の実の三男坊のシャンティ王子。王位継承権第三位で、優しい性格で、書物を良く読む。例のカバルス戦役にもサウルスの軍集団（まあ、つまり三万人位の兵隊ですね）を率いて従軍。都市防衛や退却戦で功績をあげています。固い密集隊形から生まれる防御が得意らしいですね。その分移動の速度は遅い、非常に。しかしこれも過去の話。つてことで忘れてください」

「忘れちゃっていいんですか？」

とひよっこネオツトスがおどおどしながら尋ねる。

「いいよ、忘れちゃって」アレクトリスは手をひらひらさせる。「カバルス戦役後にシャンティはカバルス人の軍人を自分の臣下にとりたてているらしいですぜ。しかも、將軍たちの集まる宴会の席で、そいつの実力を試すためにカバルス鎮定に行かせてくれ、と言ったんだとよ。このカバルス軍人、よほどの軍才を持っていると見えます。事実、そうでした。カバルスの軍人の名前はエウクス・ギャロップ。カバルスで最強と言われた部族の男です。この男はカバルス人らしい勇猛な戦闘を好みます。それ以外にこいつの特徴と言えば、自分の率いる騎兵隊での決勝点攻撃ってやつですかね。事実、コイ

ツはカバルス戦役にてサウルス軍を四万撃破する戦術を編み出しているそうです。でも身内内の不和でそれも最後は役に立たなかつたとか……」

「けどもよ、潮の川攻略の際には騎兵なら役に立たんぜ」

と彼の兄のアレクトールが怒鳴るように言った。何度も出てきているが、潮の川とは二つの海をつなげて作った防衛線の川の名称である。潮の川の周りには深い森があり、そのため騎兵はその機動力を大きく奪われる形になっている。

「その森だけどね……奴らは自国側の森に手を加えているんだ」アレクトリスは頭を掻きながら言った。「木を切つて、根を掘り返して、まっ平らな道にしているらしい。まあ、何をやる気かわからんが、騎兵を役立てるために改良しているのは確かだろうね」

「それならうちもそれをすればいい。あのカバルス人と騎兵でやりあえるんなら兵士たちも気合が入るぜ」

とタオースがニヤニヤしながら言う。

「ま、馬鹿は置いといて、敵の情報を続けますが」アレクトリスが自分の作った資料に目を移す。「カバルス戦役の後、シャンティ王子とギャロップ、さらにはシャンティ王子の兄であるジャーニイ王子は六千の兵を率いてカバルスの暴徒たちを治めに行っています。この軍隊をカバルス鎮定軍といい、これはカバルス各地で連戦連勝を重ねています。負け無しですよ。逃げられた記録はあるらしいですが。中規模の戦闘はいずれもギャロップが作戦立案をしているそうです。そして……決勝点への打撃もギャロップが務める」

「つまりは」右腕ストルーツスが口を開く。「そのギャロップの騎兵に注意してればいいってことか」

「ええ、とはいえ、歩兵として戦ったこともあるらしいですよ。

まあ……実はよくわからないんですけど。それで、カバルス鎮定の途中でシャンティ王子は負傷。その後はジャーニイ王子を最高將軍（サウルス流に言えば総司令官とか大將軍とかですかね）にしてカバルス鎮定を続け、同様に負け無し。これってつまり、シャンティ

王子はカバルス鎮定軍では大きな影響力を持つてなかつたつてこと
ですよな？」アレクトリスがそういうと隊長たちは頷きあつた。「
それで……よくわからないけど、サウルス国内で内輪もめがあつて
カバルス鎮定軍は冬の間一時全員王都に出向いています。で、ジ
ヤクナ三世王太子、ジャーニー王子、シャンティ王子は各地に派遣
されて現在に至る、と。ついでに言つておきますが、ジャクナは比
較的に穏やかな南部に、ジャーニーは引き続き西部に、派遣された
模様です」

「そんなことはいいよ。それよりも、シャンティの持つ軍のことだ」
右腕ストールトスが急かすように言う。

「彼は総督なので、シャンティの持つ軍はサウルスの国軍一個軍団
です。北部の自警軍は彼の指揮下にはないので、彼に協力的です。
つまり有事の際には二個半の軍団が敵になることになります」

「えつと……こつちは一万五千だから」ひよつこネオットスが考え
る。「一万の差ですか？ それつてかなり……」

「森の中での戦闘じゃあ、軍は大きく広げられないから問題ない」
ストールトスが教える様な口調で言った。「おれたちの作戦は潮の
川を攻略して向こう側に軍隊を送ること。同時に森を支配し、王都
コルドスノアからの増強軍を待つ間にサウルス国の陸地の要塞都市
を一つ、港の要塞都市を一つ落とすことだ。その後は数万の屈強な
イムサ軍がどうかしてくれる」

できれば始めから屈強な兵士を数万単位で動かしてほしいものだ
が、と彼は心の中で苦笑する。

「敵が数的有利を駆使するために森で囲まれた潮の川を捨てるつて
ことは無いんですか？」

とネオットスが訊いた。

「あのねえ」アレクトリスが答える。「おれの話聞いてたか？
敵さんはすでに森の整備に乗り出してる。すでにそれはないの」

「それに」ストールトスが優しげに言う。「こつちはとにかく川を
攻略支配してしまえば、いつでも主力軍が渡せる状況を作り出せる

んだ。敵が森の外で待つていたとしても、こっちは森から出さず主力軍を待ち、到着したならば敵兵よりも大きな兵員数で奴らを叩けばいい」

「ああそうか……」

「もし」ストルーツスは続ける。「森の中にいるおれたちを攻撃してきたら、その時は数的有利を使えないことにもなるし、敵軍は得意の騎兵を使えない」

「火を放てばどうっすか？」

と派手好きタオースがニヤニヤしながら質問する。

「……逃げる、しかないか？」とストルーツスが不安げに返した。

「森におびき出してから一気に火で焼き殺す……案外それが相手の策かもしれないな」

「森の整備もそれと関係あるのかもしれないねえ」

これはアレクトリス。

「敵の」といきなりエムノンが口を開いた。隊長たちがエムノンに注目する。「敵の必勝パターンは決勝点の打撃なんだろう？」

「そうですね」

アレクトリスが資料を見ながら返事をする。

「おれたちが今とつている作戦は少数で川を渡って、森の中でゲリラ活動。まあ、森の情報収集のための行動だが……しかし、奴らもこのゲリラを叩くだけではどうにもならないのはわかっているはずだ。ならばどうする？」

「どうする？」とネオットスがオウム返しする。「敵は……おれたちの決勝点を叩きたいんですよね。おれたちの決勝点は、エムノン將軍だから……エムノン將軍をおびき出す？」

「そうだ。だが、おれは少数の兵を率いて向こう岸でゲリラ活動を行おうとは思わない。敵もそうは思っていないだろう。ならば？」

「こちらが大規模で攻められる状況を……作り出す」とストルーツスが答えを返す。「そうしたらエムノン將軍もあちらに渡ることを考える」

「おれが決勝点でなくとも」エムノンが続ける。「こちらの全ての兵力を決勝点と考えていても同じことが考えられる。敵は、おれたちイムサ軍を一気に撃滅できる状況を作るはずだ」

ネオツトスが引きつった顔で訊く。

「それがさっきの……火責めですか？」

「わからん」エムノンが首を振る。「しかし、アレクトリスの情報を聞く限りそうではない。ネオツトス？ 思い出せ。敵は決勝点に何を投入する？」

「そうか、ギャロップの率いる騎馬部隊だ」

「そうだ。おそらく奴らは火責めと言う不確実な攻めはしない。火責めなんてものは敵に逃げ場がない時に使うもんだし、あちら側の森を全て焼き尽くしておれたちを全て殺せたとしても、森と言う防壁を失うことを考えると……損益はどちらが大きいかわかるはずだ」

潮の川の攻略が両国ともに難しいのはその両方に深い森があるからである。

森の持つ防衛力と言うのはそれなりに高い。森があれば敵騎兵の機動力を削ぐことができるし、自分に地の利がある森ならば簡単に敵を翻弄することもできる。また、森の中に兵力を隠しておき、敵に戦力を見破られないように工作することも可能である。

後世の戦術書でも森の持つ地形効果を「見通しがきかないために深く進入する決心がつきにくくなるし、持っている兵力を全て投入することは困難になる」としている。また、「かといって、森は兵力を分散させるのには大きな力を持っていない」と言われており、防御のために兵力を投入しても、それを分散させて一隊あたりの防御力を低下させなくても済むのだ。

それならば川一つしか隔てていない敵の森を燃やしてしまえばいいのだが、そんなことをすると敵にも同様のことを実行されるので、両国は暗黙の了解としてそれはしないことになっている。

「それなら橋を建てよう」ストルートスは微笑みながら言う。「きつと簡単に立てられるぞ。だって、敵は兵と兵のぶつかり合い……」

決戦を望んでいるのだから」

「大丈夫なんですか？」ネオットスが心配そうに尋ねる。「橋なんて建てていたら、敵兵に攻撃されて積み積もって大きな損害を被ることになりますよ？」

「こちらとの決戦を望んでいるのに？ こっちは決戦のための準備をするんだぞ？ 敵はそれを邪魔するようなことはしないさ。まあ、少なからずの攻撃は加えてくると思うが、こっちが橋を建てるのを止めたくなくなるくらいの熾烈な攻撃はしてこないだろう」

「敵が望むのは決戦」タオースが鼻息を荒くしながら言った。「こっちが望むのも決戦だ」

ネオットスが立ちあがりながら質問する。

「ぼくたちが建てる必要はあるんですか？ 敵が橋を建てることは考えられないのですか？」

「ない」エムノンが言った。「理由は簡単。侵略しようとしているのは、おれたちだからだ」

そしてエムノンが立ちあがった。彼は声を張り上げて言う。

「決戦の場所はおそらく潮の川に建てられた橋。敵の目標はおれかこちらの全兵力。敵の目的はサウルスへの侵略行為は絶対に成功せんとという現実をイムサ国に突きつけることだ！ しかしおれたちの目標は？ ネオットス？」

「はい、潮の川攻略制圧。その後の二つの要塞の支配」

「おれたちの目的は？」

「……サウルスの……富ですか？」

「違う！」

「おれたちの目的は！」突然、隊長たちが立ちあがる。隊長たちは皆が皆、熱っぽい、ぎらぎらした目で自分たちの将軍を見つめていた。彼らは絶叫するように言った。「おれたちの目的は、戦争そのものと完全なる勝利！」

言つと小屋の外で大きな歓声が上がった。隊長たちは顔を見合わせた後、すぐに小屋を出て、外にいた兵士たちを散らした。

15・モーキリニアの將軍（後書き）

おっす！ おれ、ギャロブン。

いや、びっくりするぐらいに寒い所に来ちまったなあ。

おっと、そついや、北国一武道会が北都ウチノホークで開かれるんだってな。シャンティによると北部中から武士もののふたちが集まってくるんだってよ。

くっっ！ おれ、ワクワクしてきたぞ！

そついうわけで次回、亡国の幻将。

「なに、モーキリニアの武将が入り込んでるだつて？ 波乱の幕開け、北国一武道会」

絶対に見てくれよなつ。

16. ギャロップの手腕

> i32715—4057<

二二八年の夏の終わり頃。イムサ軍は活発化し始め、それはイムサ国に放たれていたスパイによつてすぐにシャンティたちの下に伝わった。イムサ軍が潮の川周辺の森の木を切り始め、材木の備蓄を始めたことによつて、敵のとるであろう作戦はある程度確定されてきた。

シャンティたちは会議の頻度を増やしたが、そこまで差し迫つた事態ではないと理解していた。それでも緊急事態になればすぐに潮の川に駆けつけられるように、軍の基本的な駐屯場所を北都ウチノホークから西の要塞都市ハドロンに移した。この頃にはシャンティたちもひと月のほどをハドロンにて過ごすようになる。

「近くににいるのに、エレに会えないのが寂しいよ」とシャンティはのろけをギャロップに語った。「いや、エレもぼくがいないので寂しがっているようだけれどもね、ぐふふ」

二人は百の護衛を連れて潮の川周辺の森に訪れていた。森の中には多くの樵きしりがあり、全ての者に数人の護衛がついていた。樵に護衛など……と思うかもしれないが、少数の敵が侵入してきて頻繁に樵を襲つような事件が多発していたので止む追えずとつた策である。

「おい、ウイスカ」ギャロップはエレがシャンティのことを思っている姿が浮かばないので、横にいる王子を無視して作業内容を確認する。「森の中に広場は完成したか？」

「はい、しております」侍従よろしく、ギャロップの横に位置付けているウイスカはうんと頷く。「騎兵が横に十人並べられる道もできております」

「よろしい。森中心部の木を間引くのもできているか？ これは敵のゲリラ作戦を防ぐのに重要なことで、これが完成しなけりゃ広場も道も何の意味もなくなるが……」

「続けています。ここ最近はいムサの妨害行為も少なくなっている
ので作業スピードも上がってきています」

「オーケー。それでシャンティ？」と言ったところで森の広場に入
った。ほぼ円形の広場で、中規模の戦闘ならばできそうで、向こう
側には潮の川にも続く道があったが、そちらの道はそれほど広くな
く、また整備されてもいなかった。「お前の方は？」

「まったく……ぼくの話は聞かないくせにね」シャンティは広場
を見ながら答える。彼は本に収められている範囲のモーキリアや
イムサ国の情報を収集している。「そうだね……これと言って戦闘
に使えるそうなのは無いけど」

「何が使えるかはわからないからな、とにかく何でも話せよ」

ギャロップは言いながら、確かめるように広場の中で馬を走りま
わらせる。

「モーキリアは戦士たちの住む地方だ。彼らは例の大国を作った
偉大なる王の遠征にも参加しており、モーキリア中央主力などと
言われていつも前線中央で主力を張っていた」とシャンティは思い
出すように、目を伏せながら話し始める。「モーキリアの男たち
はそれ以前から他部族・他国の者に雇われて戦うことによって色々
な報酬を貰っていたらしい。仕事がない時は基本的に狩猟か戦闘訓
練……聞いたらわかる通り、農業などはしない。いや、男はしない。
農業や山菜採集は女と老人の仕事。魚は自分たちでは取りに行かず、
他部族から買い付ける。でも魚は元来好かない^{がんらい}ようで、肉があれば
そつちを好んで食べるんだってさ」

「短期決戦を狙っているから食料の問題はあんまり関係ない」

「君がなんでも言えって言ったんだよ」

「いいから続けるよ」

「はいはい……それで、家事一般、幼少期の子供の教育、機織り、
部族内の政治などなど、つまり男たちは職業軍人と狩りと戦闘訓練
しかないから、女たちはそれ以外のことを全てやる。だから家庭
内では女の人の権力がとても強い。モーキリア人の夫婦はすべか

らく恐妻家らしいよ。それで、彼女たちが育てた子供たちは十一歳を超えると大人となり、戦闘訓練を受けたり、戦争について行ったりする」

「恐妻家か……何とか使えないもんかね」

とギヤロップが走るのを止めて返す。

「モーキリニア人の国、イムサ国がどうやって誕生したのかは前に君にも言ったね？ で、イムサ国に関する事なんだけどね。イムサ国の王はバテル・オルニスという名前で、屈強なモーキリニア人の中でも特に強かつたらしい。彼は諸部族をまとめ上げ、自分たちの土地を奪いに来た後継者の国を撃退した後は、その時発揮された団結力を維持するために国を創立した。国ができれば戦闘以外の雑務を行わなければならない者も必要になってくる。それまでの風習から見ると女性がそれをするわけなんだけど……なぜかその時に用いられたのは侵略してきた国から奪還した地域に住んでいたモーキリニア人の男だった。彼らはすでに例の大国などの文化に感化されており、文官が国の雑務を取り仕切る重要さを知っていた。文官の手際に感心した王は彼らを重用し始め、モーキリニアは文治を手に入れた」

「文治派と武断派で考えが分かれば簡単に倒せるんだがな。で、兵士たちは？」

「さあ、常備軍があるとは本で読んだけど……。なにぶん、できて間もない国だからねえ、それほどの資料はないんだよ。というよりも、すでに新興国イムサに関する本が作られていることのほうに感心してしまうよ」

「確かに……おい、ここはもういい。潮の川の方に行くぞ」ギヤロップたちは広場を過ぎて潮の川を目指す。「それでは他にはないのか？」

「うん、まだあるよ。モーキリニア人は偉大なる遠征軍で前線中央主力だったといったよね。その事なんだけど、偉大なる王の遠征を書いた歴史書『東方大遠征記』には彼らの戦闘スタイルを書いた

文章が残っていた」彼らが潮の川に続く道を歩くと辺りの木々に止まっていた鳥たちが一斉に飛び出した。「モーキリニア人はいくら言っても弓矢を使わない。彼らは槍と剣と盾でいつでも敵前線に突っ込んでいってしまう。それなのに、被害を確認する時、彼らの軍団が、最も被害が少ないときが多々ある。」とね……驚嘆すべきことだよ、これは。じゃあ、彼らはむやみやたらに突っ込んでいくだけか？ と訊かれたら、そうでもない。「隊伍をなして戦う彼らの盾の壁には一片の隙もない。敵兵の突撃を無効化すると彼らは一斉に敵を押し倒し、槍で刺殺する。最後にまた強固な盾の壁を形成する。」という言葉も残っているくらいなものだ」

「つまりは近接戦闘においては敵無しってことか？」

「うーん……でもこれは百年以上前の資料だからね。今も弓矢を使わないとは思えない。大体、弓兵も騎兵も使う後継者の国の軍隊とやり合つて領土を奪い取つたんだ、剣と槍と盾だけでそれができるとは思えない」

「今はもう弓矢を使っていると考えてもいいわけだな？ そうなる……同数での戦闘や劣勢での戦闘は出来るだけ避けた方が良い……か？」そういつた所で潮の川が見え始めた。人間が作った人工の川であり堀のような容貌をしていると思われていたが、川の流れが側面を削つていてほとんど自然の川と見た目はかわらなかつた。「しかし昔の本に書かれてあることだからな。物語を盛り上げるための誇張も十分あっただろうし、実際は大したことない、なんてこともあるわけだろう？」

「自警軍歩兵隊百卒長のビッグフツさんの本は読んだかい？ 彼はモーキリニアの民で、数々の困難を乗り越えたうえ、今もなお生きているんだよ。この事実から見ても、古代資料の記述はそれなりの信用度はあるんじゃないかな」

「ああ……あの歩兵隊か」ギャロップは川面を覗きながら言った。彼の乗っていた馬が水を飲もうと川に顔を近づけたが、塩気を感じたのかすぐに顔をそらした。「あの隊はなかなかだったな」

「ええ」ウイスカが答える。「何度か自警軍の訓練風景を視察しましたが、ビッグフトス殿の率いる隊の俊敏さや力強さは他のどの隊にも負けていませんでした」

シャンティが興味深そうに訊いた。

「近衛兵団よりも？ カバルス騎兵団よりも？」

「見た中でも随一です。ただの歩行訓練でも彼らの隊には一糸乱れぬ美しさがありました」歩兵が他の歩兵と同調し、リズムを合わせて歩くのは重要なことだ。戦争における太鼓は命令を素早く伝えるのが主目的であるが、一定のリズムで伝えられる音は歩兵たちにテンポを与え、という点で彼らの力を最大限に引き出すことに一役かっている。「ざっざっざつと、こう、テンポよく歩き。足を上げる高さも同じで、隊伍を組みかえるのも早い……北の自警軍にあればどの隊があるとは思ってもみませんでした」

「そうか、隊長がモーキリニア出身だから、もしかしたら彼の率いる隊はモーキリニア直伝の訓練を施されているのかもしれないね」シャンティが納得したように頷く。「ならばギャロップ、イムサとの戦いで彼らは欠かせないのじゃないか？」

「ふん、言われんでも使う予定だけ」ギャロップたちは側沿って移動を始める。「川の深さは少しずつ違うな。おい、ウイスカ、川の各地点の深さを記録した資料はあるか？ ないなら作れ」

「はっ」とウイスカが了承する。シャンティはそれを見ながら、誰の侍従かわからないなあと苦笑していた。

それから彼らは来た道に戻って、森を抜け、要塞都市ハドロンに帰った頃にはすでに夕方になっていた。彼らが兵舎に戻るとすぐに私服の男が現れて、ウイスカにそつと耳打ちした。他の二人はそれを注意深く見ていた。ウイスカは話しを聞き終わると男から紙を渡され、お返しに男の手に銀貨（竜の文様が刻まれた正八角形のコイン）を数枚握らせて帰した。

「敵の将たちの詳しい情報がいくつか掴めました」とウイスカは言った。

彼らは休む間もなく軍議室に向かった。そこで集められるだけの上級将校たちを集めてすぐに会議を開始した。

シャンティ、ギャロップ、ウイスカ、シエイバス、カバルス騎兵の隊長、サウルス騎兵の隊長、歩兵千卒長たち、自警軍のハドロン担当の皆が席に着くと、夕食時であるので雑用である下級の士官が飯と飲み物を持ってきた。柔らかいパンと魚介類のスープ、チーズ、牛乳だった。将校たちはごくごく牛乳を飲みながら話しが始まるのを待った。

「まあ、食いながらも聞いて下さい」とウイスカが手渡されていた紙を持って話を始める。「言わんでもわかっているとは思いますが、敵はモーキリニア地方のイムサ国。つまりは最強の人種とも恐れられるモーキリニア人です。敵将の名前はグラウクス・エムノン。通称フクロウと言われる男で、イムサ建国の前の戦争で軍団の一つを任されていた男です。彼の軍隊には優秀な将校（イムサは厳密な区分がないので隊長とだけ呼ばれています）が揃っているわけです」

「フクロウ？」

と軍議に参加していたシエイバスがパンをスープに突っ込みながら訊いた。ウイスカは頷く。

「エムノンの軍隊は隊ごとに特色が富んでいるようで、ケリーバーン隊長の軽装歩兵部隊はほとんど防具も身につけずに短刀だけで敵に突っ込み、タオース隊長の重装歩兵部隊は時には敵騎馬を奪って敵陣に突っ込んでいくとか……」ウイスカは信じられない、と言うように頭を振りながら説明を続ける。「それらを上手くまとめているのがエムノンですが、彼はまだ隊長だった若かりし頃には夜襲などの夜戦を得意としたようです。なんでもフクロウのように夜目が利くからそう名付けられたそうです」

「なんでフクロウ？」ギャロップが腕を組みながら尋ねる。「猫とかじゃなくて」

「モーキリニアのイムサ国は守護聖獣が鷹だから、同じ禽獣の中から選んでつけられたのじゃないかな」

とシャンティが答え、ギャロップは「なる」と言いながら笑う。
「彼は自分と同じように夜目の利く男たちを揃えて夜目部隊として動かし、先の戦争でも多くの戦勝を得たようです。その戦争間に現イムサ王バテル・オルニスは彼を見出し、彼を将軍に任命（彼らには基本的に、兵士、隊長、将軍、最高将軍の区別しかないらしいですな）。将軍として大部隊を指揮するようになって彼は夜目部隊を解体しています。夜目部隊に自分に次ぐ将才をもつ者がいなかったんでしょうな。それで……将軍になった彼はまず自分の任された軍の中から指揮の才能のある者を選び出し、彼らを隊長任命。さらに普通の隊長以上の大きな権限を与えることによって彼らの裁量の幅を拡充したようです。隊ごとに特色に富むのはこのような理由からですね」

「それを全てまとめ上げているんだから、敵将はすごい男だよ」
シャンティは困ったような顔をして将校たちを見渡す。将校たちははいまいちピンとこないような顔をしていた。

「そうですね……でもまあ、ピンとこんのもしようがないでしょう。これからも調査を続けて、敵将の采配の記録を集めますので、それを見てから敵の才を判断いたしましょう。さて、ここから先は敵軍隊長格の説明を始めます。それなりに情報は集められたようです」

ウイスカが雑用にめくればせすると、雑用は近くの机の上に置かれていた紙を将校たちに配りだした。その紙には敵将の人相書きと戦闘の特徴が書かれていた。将校たちが「よくここまで集められたもんだ」と情報収集班のスパイたちの能力に呆れたように言った。

「えー……まずはエムノンの右腕とも言われる男、ストルートス。彼はエムノンが夜目部隊を率いる前の隊の隊長、つまりは元上司ですな。エムノンからの信頼も厚いようで緒隊長からの人気も高い。エムノンの軍には彼の推薦で隊長になった者も多いようです。戦闘は至って普通。先の戦争では防御の要として働いていたようです」

ウイスカの説明が次に移る。

「次はキユクノス。指揮のうまい隊長だそうで、彼は他隊長と比較

して多くの兵員を率いています。……むう、彼の情報はそれくらいですな。次にタオース。豪快な戦闘を好み、特に屈強な男たちが集う隊のようです。巨人部隊とも言われており、前線で盾の壁を作ったり、さつきも言ったように敵騎馬兵を略奪したりして、その時々感性に従って行動しています。次にケリーバーン。彼の部隊は軽装歩兵隊であり、素早い身のこなしが特徴です。敵の背後を突いたりする敵の攪乱が得意。逃げる敵の処理も行おうようです。アレクトールは敵が攪乱したのを見ると飛び込んで行って、騒ぎをさらに大きくし、壊滅させるのが仕事のようにです。弟のアレクトリスは情報収集部隊で、戦闘中は各隊の伝令をしたり、戦闘にも参加したりします。いわば仲介役ですな。 कोरोネは戦闘ごとに違った役割を担う男です。小規模から中規模の兵士を率いて、やることも戦闘ごとに違う」

「これで、一通りか」ギャロップがつまらなそうにいう。「やけに情報が揃っているが、実は敵がわざと流している……なんて可能性はあつたりしないだろうな」

「ないとは言えませんが。しかし、こんな情報を手に入れたとしてもそうそう使いようがないのは事実です。戦闘の混乱の最中で敵将の顔を見分けて、この部隊はこのような性質だ、などと考えるのも……」

「いや、それに関しては少し違うな」ギャロップが言う。「タオースは前線に出てくるのがわかるし、そいつらとの交戦中にケリーバーンが素早くこちらを側撃・背撃するかもしれん。こちらが崩れたらアレクトールが来るが……まあ、この場合はどうしようもない。そのほかにも कोरोネとかいう奴の存在も気になる。最初は重兵と交戦しながら、回り込もうとする軽装歩兵に注意……みたいな感じだ……」

「將軍。少しいいですか？」シエイバスが質問する。「敵は絶対に橋を架けてくるんですか？ おれたちはそれが架けられるのを待って、決戦を実行……本当にそれでいいんですかい？」

「ああ、このままゲリラ戦でこちらもあちらも消耗……なんてのは面倒だろう？ 敵につまらんことをやめさせるには、一回でも大規模な戦いを行って敵兵を殲滅したうえで、侵略行動は無駄だ、ということをわからせるのが一番だ。基本的に……戦闘と言うものは敵の殲滅こそが重要なことなんだ」

「敵の将を討ちとることでなく？」

「将を討ちとるのは、敵の求心力を失わせ、ばらばらして弱体化させるためだ。弱体化したら、そこをいつてこちらが敵をいとも簡単に殲滅していく」

将の一人が質問をぶつける。

「常時こちらが潮の川と敵方の森を支配しておく、というのは駄目ですか？ そうすれば決戦を行わないで済むし、ゲリラ行動を起こさずに済みます」

「だめだ。あそこに橋を作って、敵方の森を占領したとして……それらを敵に奪われたらどうする。敵は一気にこちらに攻めてくる。敵は一勝を得て意気高らか、こちらは橋の攻防戦での敗残兵を抱えて意気消沈。今はセンチュリオンに軍がいるから良いが、それがカバルスなんぞにいつていて、その時に戦闘に負けたらどうなるか」

ギャロップは首を振りながら言う。「危険な敵地に守らねばならい所を増やすのは愚策。だから、あそこに橋を設置して敵方の森を占領するのはこちらがモーキリニアへの侵略戦争を決意してからだ」

ギャロップがそういうと、将は納得したように紙の上に視線を移して、何事かを考え始めていた。

「それで結局。敵は本当に橋をかけてくんですかい？」とシェイバスが改めて聞いた。

「ああ、くるさ」ギャロップが自信満々に言う。「あっちだってこちらの情報を掴んでいるのならな」

なんだよ、敵任せか。とシェイバスは不安そうなため息をつく。

こう思ったのはシェイバスだけではない。軍議に出ている者たちのほとんどは、敵が橋をかけてくることにすら懐疑的だった。彼ら

の中にはカバルス戦役でギャロップと共に戦闘を行って、彼の才能を間近に見た者もいたが、今回ばかりは信用ならないようだった。なぜなら今回のサウルス軍の計画のほとんどは敵の造橋の上で成り立っているのだから。

「シャンティ」しかしギャロップは全てが思い通りに行くかのようには振舞っていた。「明日の予定はなんだ？」

「明日は近衛兵団との訓練と資料の読み込み、報告書の作成、総督としては各地の税務状況の確認、報告書の読み込み……」

「もういい。残念だが明日からの予定は全部キャンセルだ」ギャロップはシャンティの仕事量に辟易しながら言った。「明日からはウチノホークに行ってもらおう。すぐに自警軍のあの奴らを連れてこい。奴らには防衛戦で働いてもらわなきゃならん。早くからこちら訓練に参加させておいて意図を伝えておきたいし、森の地理も覚えさせておきたい。近衛兵団を連れて言っていえば、ウイス力は置いて行け」

「了解。でも自警軍長に話を通さなきゃならないからね。もし拒否されたらそれまでだよ？」

「その場合は仕方ない。おれが説得に行くことになるな」
シャンティが眉をしかめながら笑う。

「強迫に行くのだろ？」

「おれの調子に慣れていないのなら、そうやって感じられるかもしれないな」

「これはこれは……気合を入れてほうが説得しなければ自警軍長の命が危ない」

その日の軍議はそれでお開きになった。結局わかったことは敵将たちの特徴だけであり、命令も今まで通り「訓練をしながら敵の行動を待て」である。

サウルス軍の将校たちは釈然としないながらも日々その指示に従っているが、どこかしらの不安があった。彼らは思っていた。カバルスのギャロップ将軍は戦術家としての軍才は当代随一だが、この

よような長期的な目線、つまり戦略家としては並の將軍と変わらないのではないかと。

次の日、朝早くにハドロンを出発したシャンティたちは騎馬のみの機動力を生かしてウチノホークに向かっていた。

「む、鱗雲。空はもう秋なのか」とシャンティが移動の途中に空にうつつを抜かしながら言った。

ウチノホークへは三日かけて着く予定であるが、強行軍をしけば二日でも何とかいける距離である。が、ルルディファイロに乗っているのでシャンティの頭の中には始めからそれをする気は無かった。大体、ルルディファイロは他の馬と比べて毛の艶が良かったり、体が大きかったりするが、本気で走ればどのくらいの速さなのか、一日でどれだけ移動できるのかはわかっていなかった。

シャンティもルルディファイロのことを書いた日記の中で「おそらく、ぼくが死ぬまで知ることは無いだろう」と書いており、それは現実となった。

ルルディファイロのことを描いた絵画もあり（一角獣の面甲をつけてシャンティに乗られている絵。題名は字が掠れて読めない）、彼に関する資料はそれなりにある。そのほとんどはシャンティの日記からの情報で、それにはシャンティの主観、つまりは贋画があるのでルルディファイロの情報が本当かは分からない。

それでも、ここでルルディファイロについて少し書いておこうと思う。

ルルディファイロはおそらく大型馬であり、どちらかと言えば農耕に使われていた種の馬らしい。生まれた時から白い毛で、足の毛、尻尾の毛がふさふさだったらしい。ここまで来るとある程度の種が割り出せる。しかし大型馬と言うものは基本的に優しくおとなしい性格をしているのだが彼は気性が激しい。よくわからないが、現存しない馬である可能性も高い。それでも特定しようとするならおそらくシャイアーであろうと思われる。

彼はセンチユリオン周辺の農村の村長が持っていた馬らしく、彼の毛の色の綺麗さが気に入ったシャンティがそれを譲ってもらったのだそうだ。

彼は栄養価の高いある花（特定はできない）好きで、シャンティは調教の時にそれを良く与えていたそうである。また、ギャロップに貰った角の面甲も（なぜか）気に入っているようで、それを得てからはほとんど外さなかったようだ。もともと古代の一角獣ユニコーンの想像画では毛の色が統一されていなかったが、ある時代から白一色に統一された。研究家の中にはこのルルディファイロがそれに一役買ったのではないかと言う人もいる。（一方で、ルルディファイロ自体おらず、後世付け足されたものだと言う学者ももちろんいる）。

このルルディファイロは物語の中でもあったように、非常に好色のようでギャロップの愛馬との間にはすでに子供がいる。シャンティの記録を見ると、他にも数頭の子供がいるとのことである。

さて、馬の話はここまでにする。

ハドロンを出発し、途中の農村で一泊したシャンティたちは二日目も快調に飛ばしていた。例の石畳の街道を走り、森の中を突き抜け、途中の泉で休憩したりしながら進んでいたが、昼食の際にシェイバスがシャンティにある不満を言った。

「おれは親父殿がギャロップ將軍の好きに使われているのがたまらなく嫌です」彼は固いパンを食いちぎりながら言った。二人は草の上に尻もちをつき、肩を並べて昼食をとっており、彼らの馬はそこいら辺でのんびりと草を啄ほじんでいる。

シャンティは首をかしげながら訊いた。

「よくわからないが……ウイスカに怒っているのかい？ ギャロップに怒っているのかい？」

「……ううむ、どうでしょうね。いや、親父殿に怒っているんですよ。親父殿は王子の侍従なのに、なんでギャロップのいうことばかり聞くのか……」

シェイバスはやや悲しそうに、パンについた歯型を見ていた。

「別にいいじゃないか。ぼくに使えようが、ギャロップに使えようが、それが国のためになるならさ」

「国……王子、そう言えば覚えていますか子供の頃のこと。おれたちは国とはなんだ？ とそんなことを考えたことを」

「国とは何か……民がなければ国ではないが、食料がなければ民は養えない、土地がなければ食料は作れないし、土地がなければ国ではない。軍隊も国には必要だ。ジャクナ二世がその考えを残しているし……」

「けれども、民が貧しい国など」

「そう、糞食らえだ」シャンティは思い出して笑う。「けれどもなぜ、今それを？」

「王子……」シェイバスは言いづらそうな顔をしていた。「王子はもし王になったらどうなさるおつもりですか？ どういう政治をするのかと言つのではない……侵略戦争のことに关するお考えだけを教えていただきたいのです」

「それならば簡単だ」シャンティは残っていたチーズの欠片を口に放りながら言つた。「ぼくは王にはならない。だから、王になった後のことを考えたことは無い」

「もしなつたなら？」

「おそらく、しないだろうね、侵略戦争なんて。そんなのは下らないよ。大体、サウルスはもう十分に大きい。敵国から侵略されようとも、各地域の力を結集すればどうにか対処できるさ」

「……そうですよね」

シェイバスはとりあえず一安心したような顔をした。けれども、まだ何事かを不安げに考え込んでいた。

「まだなにか？」あるのかい？

とシャンティは俯いている彼の顔を覗き込む。

「あります。……王子、ギャロップ將軍のことです」シェイバスはついに言ってしまった、と思いつながらシャンティの方を見た。「奴は恐るべき軍才を持つ男です。同時に、戦争を心から愛する狂人で

す。王子、おれにはこう思えるのです。戦争ある所に奴があり、奴がある所に戦争がある……と」

「どういう意味だろうか？」

「つまり、奴は無意識のうちに戦争を呼び込むのです。そう、魔法のように。奴がそうしようとも思ってもなくても……ふん、全く狂った論理でしょう？」

「いや、どうだろうね。戦争ある所にギャロップありか……そうだね、ぼくは彼を戦場に連れていくためにカバルス鎮定軍を起こしたし、今回の北への派遣も父が彼の軍才を認めたからだ。とはいえ、ギャロップがいる所に戦争があると言うのは、やや超自然的すぎると思うけれど。彼がいたから戦争が巻き起こったケースをぼくはまだ見ていないからね」

「わかっていますけれども……おれはどうもそれをも否定しきれない。もし、ギャロップを重用している王子が王位継承したならば、奴はあなたに侵略戦争を望むんじゃないでしょうか。自分を戦争に連れて行け、と」

「それは、否定はできないな。ぼくもギャロップのことは完全に把握しきっているわけじゃないからね。なるほど、今は彼を満足させられるだけの戦争が彼に与えられているけれども……もし、平和になっってしまったなら？」

と彼は言いながら、ユルシュのために建てられた離宮の回廊で話したことを思い出した。

そういえば彼は、戦争がないなら生きていても仕方がないと言っただな。けれども、あの時は自分の周りに誰も権力者がいなかった。もし、本当にぼくが王になり、いつでも好きに戦争を起こせるようになったのならば、彼はやはり戦争を望むだろうか。彼の愛する喧騒と狂奔を……彼の愛する血と鉄を……。そして、ぼくはどうだろうか。もし、本当に王になったら……彼にそれを与えてしまうのだろうか。どうだろうか……しかし、なぜ……ぼくにとって彼とは？ 彼にとってぼくとは？

「王子、あなたは変わった」シエイバスが改まった顔で言う。「あなたは強くなり、慣れてしまった。戦争と言うものに……。昔はあれほど戦いや死を嫌がっていたのに」

「ぼくは……。今だって戦争が嫌いだ」シャンティは少しばかりのシヨックを受けながら返した。「けれども……。そうか、慣れてしまったんだらうか」

慣れてしまったのだとしたら、これをぼくに慣れる様に強要したのは？ やはりギャロップだらうか。

彼は俯いて考え事を始めた。それでもそうやってずっと考えていることはできない。彼らはすぐに今日の宿営地に向かって走らなければならぬ。次の日にはウチノホークで自警軍長に会って、歩兵隊を引き抜いてこなければならぬ。

シャンティが王になることに比べて見ると、こちらの方が差し迫ったことであるし、現実的なことだった。

シャンティは休憩が終わると考えるのを止め、ルルディファイロにまたがって彼の腹を蹴った。

自警軍長への歩兵隊の貸し出し要請は思った以上に簡単に済んだ。シャンティたちは三日目の夕方にウチノホークについた。着くと同時にウチノホークにいる自警軍長のもとに訪ねて、その由を話した。自警軍長は一言だけで簡単にそれを了承して、証明書を発行し判子を押した。もともと、自警軍の兵士が国軍に入るのは名誉なことであり、今回の場合はほとんど引き抜き同様に一個中隊が要請されているのだから、その中隊を持つ自警軍の長も鼻高々であるう。各々その日は家で寝ることにし、シャンティも久しぶりにエレに会った。ウチノホークがまだカンプトケファレ国の王都であった頃の王宮をそのままここでの住処すまかとして使っていたシャンティたちはその寝室で侍女の持ってきた葡萄酒を飲んだ。

「……」エレは少しツンとしていた。で、片目だけを開けた状態でシャンティを睨みながら言った。「將軍様は元気かしら？」

「んん？ エレがギャロツプのことを聞くなんて珍しいね」

シャンティがやつと心を開いてくれたのかと思いなながら言つと、エレは少しムツとして返した。

「私はある男のことなんて興味ないんですの。それでも……」エレは横に立っていた侍女を睨んでから言う。「この娘が訊いてくださいと言つから。……この娘、フェミナと言つんですが、フェミナは將軍の愛人なのですつて」

「ええつ？」

驚きながらシャンティは侍女フェミナを見た。フェミナは顔を真っ赤にしながら顔を横にぶんぶんと振つた。

「そうよ、愛人ではないの。ただ遊ばれているだけなのよ。あの下半身野蛮人に」エレは正直な怒りを表情で表わしながら言う。「私もフェミナにはそのことを言ってるんだけど、この娘は全く話を聞かないの」

「はあ……そうだったのか」シャンティは絶賛赤面中のフェミナをしげしげと見つめながらため息をつく。ユルシュへの想いは区切りがついたのだろうかと彼は納得することにして葡萄酒をすすった。

「フェミナさん、君はこちらの……北の出身だよな？」

「は、はい」

フェミナは縦に首をぶんぶん振る。

「ぶーむ……」

「これ以上私の侍女に手を出さないように、あなたから將軍に言うておいて貰えないかしら？」

とエレが言つとフェミナが涙目になって彼女の肩を揺さぶつた。

「そこいら辺は、まあ、彼と話しあつとするよ。とはいつても、これはぼくらが立ち入つていい話じゃあないんじゃないのかね。当人たちの問題だと思つけど？」

「シャンティは変わってしまったようね、昔のあなたは悪人に騙される田舎娘を見たらほおつておけなかつたはずだけれども？」

「変わった？ そうかい？」シャンティはまたか、と思つた。「ぼ

く自身は、変わったつもりは無いのだがなあ」

シャンティは葡萄酒をちびちびと飲みながら、昏間に考えていたことをまた考えようとした。けれども酒がまわってしまったせいで通常通りに思考が回転しなかった。

やめよう……今はエレがいるんだ。とシャンティは妖艶ようえんな色香を纏まとう妻を見ながら思った。彼女は夫が自分を見つめているのに気付いて、少し頬を赤くして頬笑みを返した。

次の朝の遅く、シャンティと近衛兵団はすぐに自警軍第五歩兵千人隊第二軽装剣歩兵隊の彼らのもとに会いにいった。シャンティたちは兵の住処である寮を訪ねたが、そこには誰もいなかった。その寮の管理人に聞いてみると、彼らは朝から酒場に入り浸っているとのことだった。シャンティとシェイバスは目を丸くしながら顔を見合わせた。

十数人の近衛兵団と共に紹介された酒場は木製二階建てのありがちな建物だった。

「ウチノホークには木造の良い建物があるけれど、これもモーキリアの技術が入ってきているからなのだろうかねえ」

とシャンティは改めてウチノホークの街並みを見渡しながら言った。

「王子、いいから入りますよ」

シェイバスは無理にシャンティを引きずって酒場の中に入った。

太陽もまだ完全に頂上に登り切っていない時間であるにもかかわらず、店の中は酒臭い男たちの酒臭い息と喧騒で包まれていた。

シェイバスは中を見渡して、ほとほと呆れながら呟く。

「完全に出来上がってるぞ」

やがてシャンティと近衛兵団に気がついた一人の男がシャンティたちに声をかけて、席を勧めた。シェイバスは勤務中なのでと言う理由でそれを断ったが、シャンティはとりあえずお呼ばれしておくことにして、椅子の一つに座った。

「何飲みますかい」

と男は麦酒を出しながら言った。シャンティはいやいや、これを飲むしかないのだろう？と心の中で質問しながら男に言った。

「ビッグフトス隊の百卒長か副隊長を呼んでくれないか」

「へいへい、ちよつと待つててくださいよ」

言いながら千鳥足の男はどこかに去っていく。

シャンティが好物のカンプトケファレ製チーズと共に麦酒を飲んでいると、やがてビッグフトスとその孫のフトスがやってきた。彼らも他の者同様に酒を飲んでいよう、赤ら顔だった。

「どうも」とビッグフトスが丁寧にお辞儀をして椅子に腰かけた。後ろにいるフトスはうまく酔えたよう、無意味にニコニコしている。「なんのご用でしょうか」

「単刀直入に言います。ぼくたちは、モーキリニアのイムサ国が度々潮の川を渡り、こちら側に侵入してくるこの現状を打破するために決戦をしようと思っっているんです。その時にあなたたちの持つ力が戦いを左右すると考えています。だから、打ち合わせや連携などのために、できるだけ早く我ら国軍と行動を共にして頂きたいのです。自警軍長の了承はとっています。これを……」

シャンティは自警軍長の判子が押された書簡をテーブルの上に差し出した。ビッグフトスはふうん……と唸りながらそれを見た。

「……わかりました。軍長の許可と命令が出たならそれに反対する意思はありません」ビッグフトスは百歳近いにもかかわらずまだ一本も抜け落ちていない真っ白な歯を見せながらにやりと笑った。「私も元はモーキリニアの民。きつと、お役に立つて見せましょう」

「それは心強い」

とシャンティは手を差し出す。しかしそれを握ったのは彼の横に座っていたフトスの方だった。フトスは呂律のおかしくなった口調で王子の手をがっちり握りしめて言う。

「シャンティ王子、おれもいるのをお忘れじゃないかなあ？」

「いや、忘れていない。見落としてもいないよ」シャンティが屈託

ない笑顔を向けて、手を握り返す。「君も副隊長としてぼくたちを助けてくれ」

「よしきた、まーかせてくださいっよお！ 戦いなら大得意だ。ほれこの通り」と彼は空いている方の腕で大きな力瘤を作って見せた。彼の態度を訝しそうに見ていたのがシェイバスだった。シェイバスは酔った勢いで王子に無礼を働かないかと警戒を強めた。それに気がついたフートスがシェイバスを睨みかえす。「王子い、コイツぁなんですかい？」

「彼はバルバム・シェイバス。ぼくの近衛兵団の副隊長をしているんだ」

シャンティは空いている方の手で彼を指し示しながら紹介した。

「よろしくお願いします」

シェイバスがぎこちない笑顔を浮かべながら手を差し出す。

「……ふん、そんなヒョロヒョロで一国の王子を守れると思ってるのかよお！」

と言いながらフートスはシャンティの手を話してシェイバスの手を強く握った。

「痛っ！」

フートスの握力が強すぎたせいでシェイバスの手に激痛が走る。

フートスが白い歯を見せながらひひひ、と笑って手を放した。シェイバスは歯ぎしりしながらフートスを睨む。

「お前は黙つとれ！」ビグフートスがフートスに拳骨を打ち下ろす。

フートスはおふん、と言いながら床に突っ伏した。で、老隊長は今度こそシャンティの手を握りながら質問した。「シャンティ王子。我々はこういう風にあなたたちに協力すればいいのですかね？」

シャンティは「これからはひと月の半分を要塞都市ハドロンで過ごしてほしい」と言って話を始めた。もちろん、彼ら以外の自警軍も一定期間毎に国軍との合同訓練をしていくが、ビグフートス隊はその頻度と長さが他よりも大分多くなる。

シャンティは、潮の川で決戦が起こった場合、ビッグフトス隊に対してどのような役割が課せられるかを予想しており、一応彼らにそれを説明した。

もちろん彼の予想であり、彼はギャロップからほとんど何も計画を聞かされていなかった。しかし、彼の予想があながち的外れでないことが感じられたシェイバスはシャンティの読みの深さに感心した。

シャンティは徐々にギャロップの戦さに対する考え方を身につけているようだった。軍議の時に、ギャロップの少ない説明で彼の意図を全て理解したり、次に言うであろう言葉を当てて見せたり……そんなことをし出したのもこの時期からである。シャンティ自身はそのことを特別に思っていないので『今日は軍議でギャロップの考えを見抜いてやった。』くらいにしかな書いていないが、ウイスカの方ではいくらか驚いていたようで、少し長めの分を書いている。

『近頃のシャンティ王子はギャロップ將軍の次の発言を言い当てたり、將軍の命令の前に彼の望む行動を起こしたりするようになった（これではどっちが主君かわからないが……）。でも、これはシャンティ王子がギャロップ將軍から彼の戦術の知識をどんどん吸収している事実を表わしている。ギャロップ將軍もここ最近になって、シャンティ王子を「使える様になった」と少し嬉しそうに評しているが、そのことは王子には言っていないようだ。一見侮辱にも聞かえる言葉だが、王子が聞けばきつと先生に褒められた生徒のように目を輝かせながら喜ぶだろう。』

『私は昔から王子の教育係を務めてきたが、王子は戦争学や用兵術にはほとんど興味を示さなかった。いいや、王子は今もこの殺人の術策へはそれほどの興味を持ってはいないだろう。けれども、ギャロップ將軍との会話の中で出てくる戦争の話は、王子になぞなぞやクイズを解く時のようなわくわく感を与えているようだ。』

ともかく、シャンティたちはビッグフトス隊の協力をほぼ引き抜き同様の形でとりつけた。

ビッグトスたちはさつそく第一回合同練習をすべくハドロンに向けて旅だったが、シャンティは溜まりに溜まった総督としての仕事を北都ウチノホークで片づけなければならなくなり、北都にいくらか滞在することになった。

同時期、東部ヘドロケラス地域では今夏の早魃の影響のせいで穀物類の収穫量がとてもヘドロケラス民を養うほどにも達していないことが判明した。冬を越すことができないことを知ったヘドロケラス総督らはサウルスに今年限りの減税と食糧支援を頼んだ。

シャンティは王都センチュリオンにいるシユラク王の要請を聞く前に、エレの実家を通じて食料の救援を行った。

カンプトケファレ地域とヘドロケラス地域は緯度も同じで、それほど遠く離れているわけではないが、科学技術の発達した現在でも農作物の取れ高に違いがある。

地学家はこれを山の影響であると指摘している。カンプトケファレ地域は高い山が多く、そのため春には雪解け水が、夏には山に降った雨などが土地を潤してくれる。その証拠に、カンプトケファレ地方には山から始まる小川が毛細血管のように張り巡らされている。ヘドロケラス地域はどちらかと言うとまっ平らな土地柄で、サウルスが戦争を仕掛けた時にいと容易く攻め入られたのは山や川などの天然の障害が少なかったからであろう。

後の歴史家の中ではこの時を境にカンプトケファレ地域とヘドロケラス地域の密接な交遊関係が生まれたと言う人もいる。

後世、産業革命での蒸気機関の発達、その応用による蒸気機関車の発明の際に、平らであったヘドロケラスはすぐさま鉄道網が張り巡らされ、交通インフラを格段に伸ばした。これによって商業が栄え、カンプトケファレの民との富裕の差は逆転したが、この二つの地域間ではいさかいは無かった。ヘドロケラスの民は食糧難を幾度も助けてもらった恩を返すべく、険しい山を削り、長いトンネルを掘って、線路を配置し交通インフラの差を解消するように努めた。しかし全てはそううまくはいかず、カンプトケファレの民が職を求

めてヘドロケラスに集中するような事態も起こったが、ヘドロケラスの資産家たちはまだ残る美しい自然や自然で上品な食材をカンプトケファレに見出して、そこに多くの別荘を建てて親友とも、兄弟とも言える彼^かの地を賑わした。

さて、話しが急速に進み過ぎた。

二二八年のカンプトケファレの秋は、東の食糧難問題以外は何事もなく過ぎた。イムサ国との戦いも全くと言っていいほど進展しなかった。

ギャロップはスパイの集めてくる資料を見ながら、シャンティに「この調子でいけば、おそらく来年も何もないはずだ」と話している。そう思ったからこそ、彼の独断的な東への食糧援助も咎めなかった。

そして冬が来た。カンプトケファレの冬の寒さは、ギャロップらカバルス人には未体験のことだった。彼らはいつもの冬のように上半身裸になって相撲大会を開催したが、トーナメントの途中で風邪を引くものが続出して中止となった。

シャンティは日記に書いている。

『積もった雪の中で彼らのご機嫌な感じで上半身裸になり、相撲をとった。とある日なんかはさすがのサウルス人も観戦に行かないほどの豪雪の中、彼らは待ち時間も上半身裸のまま、競技の際にはがちがちで体が動かないにもかかわらずそれをやめなかった。』

この情報はイムサ国まで届いており、そのことが書かれた書物も現在まで残されている。

16・ギャロップの手腕（後書き）

画像は某ビッグフットの孫。盾がムチャクチャ適当でセンスがない。

次回「煌びやかな羽を望む猛禽はどこにもいない、猛禽が望むのは己の腹の飢えかつを満たすことのみ」と言う話。

17 英雄か化け物か

> i32783—4057<

「サウルス国王太子ジャクナ三世に御子息誕生」とエムノンは報告書を口に出しながら読んだ。「……おい、この前の相撲のこといい、こんなしょうもないことをいちいち送ってきてるのは誰だ?」「まだまだガキだな、將軍。そんな情報でも役に立つことがある」「ストールトスが報告書を手に取りながらなだめかすように言った。「これを祝うためにカンプトケファレ総督たちが南に向かうかもしれないぞ」

二二八年冬。二人は兵舎の会議室で温かいスープを飲みながら話していた。部屋の中には彼らの以外誰もいない。彼らの潜伏する村はカンプトケファレのほとんどの地域よりも緯度が高く、冬になると必ず雪が降った。もっとも、イムサ国の王都であるコルドスノアはもっと緯度の高い所にあるからいつそう冬は厳しくなるのだが。「本当にそうなってくれたら嬉しいんだがな」エムノンは苦い顔をしながら言った。エムノン率いるイムサ軍はここ最近の日程を訓練のみで過ごしている。迅速かつ安全に橋を造る練習も大体はすんでいる。そして隊伍を整える訓練や騎乗訓練などの戦闘に関する訓練も大体はすんでいると言ってもよかった。だがしかし。「タイミングがつかめん。サウルス本国で何らかの混乱でも起こらん限り手出しがしにくい。これならブシッタコスの言った通り、総督が変わった時に攻めればよかったかもしれないな」

「あのおときだってどうせ無理だったさ。いや、相手が決戦を望んでくれているだろう今の方がいくらか状況は良い。大体、そんな過ぎたことを悔やんだってしょうがない。どうせなら守護聖獣に祈ろうじゃないか? 潮の川が凍るように」

「ふん、そうなくても橋をかける手間が省けるだけだ。数的有利はあちらにあって、地の利もあちらにある……。それにこんなに南で

は海の水は凍らない。もつと北、もつと寒くないと」

塩分を含んでいる海水は普通の水よりも凍りにくいとされている。それはこの時代でも常識である。

「なるほど、まだちゃんと頭は動いているようだね。それは良かった」

ストルーツスは自分がまだエムノンの隊長であった時のように言った。

「ふん」エムノンは腕を組んで顔をしかめる。「とはいっても、本当にどうするか……。このままちんたらやってたんじゃあ、ただ飯食いだ。しかし、攻め手が無い。いや、あるにはあるが……」

「完璧ではない。それはわかっている。わかっているが、現状に何を足せば完璧になるのか」ストルーツスがため息をつく。「正直、今回は王の采配も悪かった。サウルスがカバルス遠征をしている時にでもすぐに攻撃を開始していればよかったのだ。よりもよって、征服完了後におれたちを送りださんでも」

「それも文官のせいさ。奴らは出来上がったばかりのこの国で権力を確立し始めたから、まだ戦争を開始したくなかったのさ。そうすると権力が一気におれたち武人に流れ込むからな。その証拠に、王が侵略すると言いだした後はあんなに反対していたのに、戦地での將軍の緒行動は文官の承諾をとらねばならない、って新軍法が出来上がると一転して賛成し始めた」

「本当にあの新軍法は憎いったらありゃしないな。あんなんじゃない、もしこの戦争で勝ったとしても……ふん、おれは今回のことで引退ってことにしようかね？」

「いつそ今すぐ辞めて宮中の文官を全員殺して自殺してくれや。その方が役に立つぜ」

「聞き捨てならんな。おれは今でこそ、お前の下についているが、軍才においてはお前に劣っているなどとは思っていないぞ」ストルーツスが眉に皺を寄せる。「おれは今だって、お前はただ単に運が良かっただけだと思っている」

「ふん、ははつ。馬鹿言つてんじゃねえ、運が良いだけで將軍に成れるわけねえけねえだろ」

エムノンが昇進し損ねた男の嫉妬には絡まれたくない、と思いいながらマントをはおつて会議室の窓から外へ出る。

「おい、待てよ。なら、兵士たちを使つて戦術勝負をしようじゃないか。おれが勝つたら指揮権を渡せ。どうだ？」

ストルーツスは窓から彼に叫んだ。

「そんなことで渡すかよ！」

エムノンは振り向きもせずにもそう叫んだ。マントで体をくるみながら地面の雪を踏みならしていく。どこへ行くでもなく飛び出したが、今は潮の川に偵察に行こうと思つていた。

馬小屋に行くと、十数人の見慣れぬ集団がいた。エムノンは彼らの服装をただで誰が来たのか理解した。

「王からの使いか」

エムノンは、見つかつてしまえばまた小言を言われると思いいながら馬小屋から遠ざかろうとした。

「ああ、あそこにいます」とひよっこネオットスの声が馬小屋からした。「ブシツタコス殿、ベリステラス殿、將軍は見つかりました」

このクソ馬鹿がつ！ と心中激怒しながらエムノンは雪の上で立ち止まり、馬小屋の方を見た。馬小屋からブシツタコスと近衛兵隊副隊長のベリステラスが彼目がけて歩いて来ていた。

ベリステラスはイムサ建国の際の戦争では將軍をやっていた男である。戦場では何度か共同作戦を実施したこともあったが、エムノンは夜襲などの奇襲作戦を好んで使用したのに対し、彼は正面衝突を好んだ。二人ともに才ある將軍であつたが戦闘スタイルの好みの違いからあまり仲は良くなかつた。

「將軍、王都からブシツタコス殿とベリステラス殿が来ています」

とネオットスは見ればすぐにわかることを、キリツと言つた。エムノンは殴りてえ、と思つた。

「將軍はどうやら、どこかにお出かけしようとしていたところですよ」

が「ブシッタコスが挨拶もなしに言った。「一体どこへ？」

「ふん、お前たちのいないところさ」エムノンが鬱陶しそうに返す。「それで、今回は何の用だ？　しかも、ええ？　前回のことで何やら学習したようで、王の近衛兵まで連れて来て」

「エムノン」ベリステラスはびしつと背筋を伸ばして、生真面目な感じで立っていた。「大事な話をしに来た。お前の名誉にもかかわることだ」

「……」エムノンは嫌な予感を胸一杯に覚えながら兵舎の方を見た。兵舎のドアの方からストルーツスがうかがっているのが見えた。「ここは寒いからな。兵舎に……」

エムノンとネオットス、それに王都からやってきた十数人の男たちは兵舎に向かった。ストルーツスは男たちがこちらに来るのを見て、会議室の中を片付け始めた。机の上の遊び道具と報告書を適当な所に隠したところで男たちは兵舎に入ってきた。

男たちはエムノンに導かれるまま汚い会議室に入った。文官のブシッタコスはここの独特の汚さと染みついた男臭さが嫌いだったが、ベリステラスら武官は対して気にもせず適当な椅子に座った。エムノンやストルーツスも席に着き、成り行きでネオットスがスーブを各自に配る。

「ブシッタコス殿。さ、席が空いてますのでお座りください」とネオットスが突っ立っている彼に椅子を勧めた。椅子にはぼつぼつと大きなシミがついていて、ブシッタコスは桃色の頬をぴくぴくと痙攣させたが、ネオットスの無邪気な顔を見て結局座った。それを見て、エムノンとストルーツスは内心ほくそ笑んだ。

「それでだがね」大きな咳の後にブシッタコスが話を始めた。「まあ、わかっていると思うが、今回も早々に戦闘を開始するように要請してきた。とはいっても今は冬だ。川を渡らねばならんのだからな、凍死者が出たら困る。そういうわけで、今冬の戦闘は出来なくても不問とすることにして……」

「今冬どころかこの調子じゃあ、来年も無理だ。相手方に何の動き

もないからな」

エムノンが不機嫌そうにいう。

「王は言い訳など求めていない」ブシッタコスが強気に返す。「私も今回はお前の言う通り、命令のみ持つてきたつもりだったが……お前がそうなのではしょうがないではないか」

「ふん……まあ、しかし、今回は武官も連れてきただけ話しやすいと言うものだな」エムノンはベリステラスの方を見ながら言った。

「ベリステラス殿よお、あんたならわかるだろう？ 今のサウルスと戦うのは無謀すぎる。敵は西の大国を滅ぼし、自分の血肉とした。戦争の中で生まれた新しく美しい戦術と馬や人材、その他諸々の財を手に入れ、今はその熟成を待つように眠っている」

「ならば、完全に熟す前に倒すのが上策だろう」ベリステラスが釈然としない感じで言う。「悪いが、私にはお前の気持ちなどわからん。私ならばすでに敵地に進入している」

「一万五千の兵で敵地に進入して、二万五千の兵を相手取り、都市を二つ落とし、増援が来るまで持ちこたえるって？」

エムノンが信じられないと言うように返した。

「エムノン、お前は將軍として十分なほどの才覚を持っていながら、なぜ戦場でそのようにこそごと立ち回るのだ。我らモーキリニアの屈強な兵士たちならば一万の差など大したことではない」

「そうか、あんたは正々堂々が信念だったな。そのせいであんたの軍は損害が大きかった。馬鹿が！ 今回は偉大なる王と父たちの栄光に酔い、自惚れていた後継者が相手ではないのだぞ。辛酸を嘗め、戦場で自分の才覚を叩き上げた本物の戦士が相手なのだぞ！」

「お前の軍は考え過ぎのせいで動き出しが遅かったではないか。おい、ふざけるなよ！ お前は、敵が自国の成熟を待っていると理解していた。それを理解しているのにお前は、それなのになぜか戦闘を開始せず、まるで敵国の成熟を待つかのように日々を費やしている」

「そうではない。サウルス国王シユラクは老いており、敵国は今ま

さに転換期を迎えている。おれはやつらの不意な混乱を待っているのだ。このまま敵国と戦っては勝敗をその時の運に任せることになつてしまうから」

「なぜだ！ 兵士たちの腹を満たし、雄弁により奮い立たせ、剣を握らせれば、それで！ 完全なるモーキリニアの戦士が出来上がると言つのに！ それさえあれば妙な策など弄さずとも敵国は落ちるといふのに！」

「そんなことをすれば多くの兵が死ぬだけだ！」

「死ぬことこそ戦士の望み！」

「ちがう、勝つことこそ戦士の望みだ！ だからこそ、将は策を弄さねばならない」

「お前の戦士たちはそれを望んでいるのか？」

「おれの戦士たちはただ愚かなる将の無策の犠牲になることなんて望んじやいない。奴らはおれと同じだ。いつだって、生きて、そして勝つことを望んでいる。あなたの戦士はどうなんだ？ あなたはどうなんだ？ もし、戦場で生き残る方法があるならば、戦場で親愛する戦士たちを生かす方法があるならばそれに……」

「頼らんさ。おれも、おれの戦士も！ エムノン、そんなに死にたくないのか？ そんなに生きたいのか？ モーキリニア戦士の誇りを捨てて夜しか動かぬことを信条とし、臆病者のフクロウと馬鹿にされて……」ベリステラスは齒をがちり噛みしめて、本当に理解できんと言つ様子で彼に説く。「どうして、そこまでして生に執着するのか？ いいではないか、モーキリニアの民は誰も、戦死することを馬鹿にはしない。むしろ……」

「無駄だ……」エムノンはついに折れた。彼は諦めたようにうなだれて、首を数度振った。「あなたとの話し合いなんぞ無駄だ。誇りと生命、おれたちはどちらに重きを置くのが全く持つて違つてい
る」

「お前の天秤が狂っているのだ」

「馬鹿が、死ぬために戦っている奴には一生わからん。おれの気持

ちなど……」

「ならば、お前は何のために戦っているのだ」

「戦うためだ」エムノンは顔を上げて、純粹素朴に言ったのけた。「戦うために戦うのだ。次にもう一度戦うためにその戦いの勝利を欲するのだ。それが戦士と言うものではないのか？ 心の底から戦いを愛し、望むのならば、おれはこのような結論に辿り着くと思うのだ。闘争でしか味わえない甘美をまた味わうために人生を続けるのだ」

「それではだめだ、それではだめなのだ。それでは一生完成しない」ベリステラスは過去の偉大なる戦士たちを脳裏に抱きながら震えるように言った。「死ななければ美しき戦士が完成しない。エムノン、英雄は死してこそ英雄ぞ！ 生き続ければそれはただの化け物だ。人から敬われることもなく、歴史からも取り残され……」

「英雄などという下らんモノを望むのか、あんたは。おれは英雄などと称されることを望まん」

「英雄を望む……そうだ、おれは英雄を望む。しかし、誰だっとうなのだ」一転、ベリステラスは静かな声で言う。「誰もが他の者からの尊敬を望む、自己の満足ではなくな。他人からの評価を気にせず、ただ自分の心を満たすことのみ執心すれば……辿る道は違えど、行く末は醜い文官と同じ」

ベリステラス以外の者が息を呑んだ。いや、エムノンだけは無反応だった。

醜い文官ブシッタコスはいきなり向けられた矛先にどう対処していいのかわからなかった。彼は結局どうすることもできずに、モークリニアの勇猛なる二戦士を、額に汗しながら見つめることしかできなかった。

將軍はどう返すのだろうか、とネオツトスが將軍を見た。

「それでもいい」エムノンは鮮やかな眼光を目の中で惑わかせながら、力強く言った。「例え、他人の目に醜く映ろうと、臆病者と指を差されようと、歴史に汚名が残ろうと……おれは思うがままに、

我が儘に、生きて生きて生きて、この世の享樂を味わいつくしてやるのだ。生きて、異形の化け物と呼ばれることを望むのだ」

「やはり無駄だな」ベリステラスは呟くように言った。「やはり、お前との話し合いなど無駄だ。お前は……結局、やっぱり死ぬことになる」

「どういうことだ？」

「来年、お前は戦わねばならない」ベリステラスはブシッタコスの方を見た。ブシッタコスは慌てて懐から書簡を出し、エムノンに渡した。「お前は戦わねば処刑される。お前がここでノロノロしているのが王都の文官たちには不自然に映ったのだ。だから、お前は来年の夏の終わりまでに敵地の二都市を落さねば、サウルスと共謀して反逆を企てているとして処刑される。言っただろう、名誉に関わることだと。ふん、処刑はモーキリニアの戦士には最大の屈辱だが……お前にとつては、そうでもないな。お前は名誉なんぞ気にしていないのだから」

「サ、サウルスとの共謀って」ネオットスが体をかくがくさせながら質問する。「おれたちが、なぜ？ いったいどんな？」

「知らん。金を貰って遅延を行っているとか、サウルス国で引き立ててもらったために交渉しているとか、サウルスを引き込もうとしているとか……文官どもは好き勝手いつていたが……」

ベリステラスがそう言うと、ブシッタコスは俯いて、頭の中で床に使われている板の数を数えだした。ネオットスは書簡を読むエムノンの方を見て、横にいるストルートの方を見た。ストルートの、事態が把握できないと首を振って返した。

「そんなの間違ってる」ネオットスが叫んだ。「エムノン將軍は、おれたちの命を出来るだけ守ろうとして考えてくれていたのに！」

「おい、お前。話を聞いていたか？ 奴は自分のために仲間を生かしていただけだぜ」ブシッタコスらについてきた近衛兵の一人が言った。「いや、兵士たちにも自分の狂った信条を強要してきたのかな？」

「……」ネオットスは顔を青くして黙りこくった。

「強要？ それは聞き捨てならねえな」ストルーツスが目を細くして、どすの利いた声で、近衛兵にいった。「美しい死だ？ お前ら本当に皆がそんなことを望んでると思ってるのかよ。十一歳の、まだ女の肌の柔らかさも知らねえ、女の匂いの狂おしさも知らねえ、女のナカの気持ち良さも知らねえ、十一歳のガキがそれを望んでいるとでも？ 百人いりゃあ、戦争に対して百通りの考え方があっては当たり前じゃねえか。おれはぶっちゃけ、戦争に美しい死なんて望んじやいねえ。ははん、おれはただ戦争というもんが遊びみてえで面白えからしてるだけなんだよ。戦術が楽しいからしてるだけなんだよ。將軍とはそういう意味で利害関係が一致してるから一緒にいるだけ……おれは、この人の考えに染まっちゃあいない。けどな、それでも今まで生きられて感謝している。誇り高き死体にならずに、今もなお戦争と言う遊びに興じられる道化であることに感謝してるんだよ」

「涙腺崩壊しそうな名演説、御苦労だね」エムノンが書簡を丸めながら言った。近衛兵たちは暗い怯えたような表情をしながらエムノンを見た。「そんな演説をする暇があるならブシツタコスのをどを切り裂いてほしかったが……まあ、今回は良しとしよう」

ベリステラスが深い意味を込めずに質問した。

「それで？」

「やるさ」エムノンが当たり前だ、と言う風に返す。「やって勝つ。亡国の幻将。ふん、たまにはこんな戦いも良い。勝敗の見えない戦争……それも一興だ」

エムノンは横目でネオットスを見た。ネオットスは体中に熱が灯ったような感覚を覚え、で、大きく頷いた。

「軍議ですね、將軍」

17・英雄か化け物か（後書き）

よくわからんこと言ってるなあ。

画像はあの隊長。

イムサ国の隊長とかの名前はラテン語だかギリシャ語だかの鳥の名前とかをそのまま使ってます。

名前を付けるのって本当に苦行です。

18・潮の川の戦い 前篇

> i32837—4057<

二二九年の春中頃。雪解けと共にイムサ軍の活動が活発化したことが要塞都市ハドロンに駐在していたギャロップのもとに伝えられた。ギャロップは北都ウチノホークにいるシャンティをすぐに呼びに行かせた。

早馬は二日もかからずにシャンティのもとに辿り着いた。ギャロップからの書簡を見たシャンティはギャロップの予想が外れたのに驚きながらルルディファイロ、近衛兵団、六千の自警軍を率いてハドロンに向かった。シャンティたちがハドロンに着いた時、都市はすでに混乱の渦中にあり、多くの市民が避難を始めていた。

「パン屋などは無理言つて残ってもらっています」と門を通る時に、門番が王子にそつと呟いた。シャンティは門の下から、逃げる市民たちの列を見つめた。いくらか保護のための兵士がつき添つてはいたが、なんだか頼りなかった。

シャンティたちはハドロンの市城壁近くにある兵舎に向かった。

シエイバスと共に兵舎の中に入るとウイスカが待ち構えていた。

「ウイスカ、ギャロップの所へ」シャンティが握手と共に言う。

「こちらです」

ウイスカの案内について、二階分の階段を上り、廊下の一番奥にある部屋の中に入った。ギャロップは顔の上に布を載せて、机の上にびしつと背筋を伸ばして寝転んでいた。

「……ウイスカ、何が起こつてギャロップがああなったのかを克明に説明してくれ」

「適当に寝ていると転げ落ちるからこう寝てるんだ」と寝ているはずのギャロップが言った。彼は顔の上の布をつまみあげ、起き上がる。「やつと来たか、こっちは不眠不休だったんだぞ」

「状況は？」

シャンティが机の上の地図を覗き込みながら言う。

「イムサ軍は潮の川のイムサ側の森に木材を運び始めた。おそらくすぐに橋を建て始めるぞ」

「去年の秋に君がした予想が見事に外れているじゃないか。どうしてだろうか？」

「わからん…… どう考えても今のタイミングで攻めてくるのは無謀…… というか、今攻め込むのならば、なぜ今まで攻めてこなかったのか」ギャロップが頭を掻いた。彼の目の下には薄い隈ができてくる。「いや、そんなことはいい。なんてったって、敵はもう攻めてきているんだからな。さて、連れてきた自警軍の数は？」

「六千だ」とシェイバスが答える。「まだ敵が本格的に攻めてきているとはわからんからな、これでも集めた方なんだぞ」

「別に何も言っていないぜ。ふむ、そうか…… 一万六千対一万五千ほどか」ギャロップが手を顎に添える。「敵は屈強なモーキリニアの男たち。対して、こちらは体格と心意気で劣るサウルス軍か」

「そのサウルス軍がカバルスを倒したのを忘れちゃだめだよ」とシャンティが釘をさす。

「肉体が弱い奴は頭を使って戦う。これはある意味で美点だぜ」ギャロップは机の上に乗っていたチーズをつまみながら言った。「さて、おれたちは森に軍を集結しなけりやならんわけだが…… シャンティ、前々から考えていた作戦をほとんどそのまま使うことにする」「となると、君の隊とビッグフトス隊が重要な隊となってくるね。いや、橋の攻防こそが一番重要だけれども」シャンティは潮の川の拡大されている地図を見た。この地図はシャンティたちが赴任ふにんしてきから作った地図で、川の深さなども書きこまれている。「兵の分配は？」

「主戦場、つまり潮の川の橋は一万五千。ビッグフトス百人隊は九百足して千。おれの隊は三百だ。森の外の隊が五百。森の中に待機するのが千から千五百」ギャロップでは最大合計で一万八千三百人である。「足りない分は掻き集める。森の中はこれでも足りないくら

いだ」

「夕方まで完成させるなよ」エムノンがひよっこネオットスに命令した。「完成した後はすぐに逃げかえって中央主力に加われ」

「はい」ネオットスはこの戦いで工兵（彼らは橋を立て終えれば普通の戦闘兵になる）を率いて橋を完成させる隊の隊長を任されていた。「この時のために訓練してきたんです。やり遂げて見せます」

エムノン率いるイムサ軍は森の近くに野営していた。その野営の中にひととき大きな天幕^{テント}があり、そこが彼らの軍議室だった。彼らは書き込みだらけの地図を中心にして地面に座っていた。

「だからと言って早く完成させすぎんなよ」と大男タオースがげらげら笑う。「ああっ、それと、おれからも頼みがあるぜ。おい、はは、丈夫に頼むぜ、うんと丈夫にな。何せ、おれの主戦場だからな」

「コローネも……わかつてるな」

エムノンが独立部隊を率いるコローネを見た。

「……」コローネは黙って手を上げた。彼は七百の独立部隊を率いて潮の川下流に向かう。イムサ軍は潮の川の中で一番浅い地点に橋を建てる予定であるが、コローネ隊の向かう下流もそれほど水深が深くない。彼はそこで第二の橋を建てる予定である。

「中央部隊……ストルーツ」將軍の右腕の彼はエムノンに笑みを返した。「アレクトール」彼は騒がしく返事をする。「ケリーバーン」彼は快活に返した。「タオース」彼は手をボキボキと鳴らしながら返す。「キユクノス」彼は良く通る声で返事をした。「アレクトリス」彼はうんと頷いた。「……お前たちは一万四千で中央の敵を撃破。……まあ、おれが行くまでは無理だろうがな。んでも、おれがもし中央軍に駆けつける前にお前たちが負けそうになったらとにかく敵の森の中に逃げる。で、決めておいた場所でおれと落ち合え」

「戦闘で負けたら敵地に突っ込めつてのも恐ろしい命令ですね」とアレクトリスが困ったように言った。「敵は森を改良してるんでし

よう？ それなら、森の中に突っ込めば敵の思いつばなんじゃないんですかね？」

「それでも、だ。負けて帰れば、おれは討ち首。お前たちだってどうなるかわからねえ。それでもいいのか？ ふん、それで話を戻すが……もし中央主力が負けた場合は、敵地でのゲリラ的行動にて敵将を狙う。生け捕りにすれば生きて帰ることもできるかもしれないぞ」
エムノンは一卑た笑みを浮かべた。「それも無理そうな場合は、ただ敵の森を燃やしてやるんだ。そんなことをすれば、こちら側の森も燃やされるかもしれないが……そんなのは知ったこっちゃない。その時あ、おれたちは死んでるんだからな」

「了解」と隊長たちも口角を上げる。

「作戦開始は明朝早く。おいおい、者共……戦争が始まるんだ」
エムノンが白い歯とピンク色の歯茎を見せて豪快に笑った。「もっと楽しそうに行こうぜ」

日も昇らないうちからそれは始まった。

空もまだ暗く、星影が唯一の明かりとして君臨する時刻。ネオットスは数人の兵士と共に潮の川へ船を浮かべた。潮の川はいつもと変わらない穏やかな流れをしていて、わずかに磯の香りがした。彼らは潮の川を渡り向こう岸に鉄の杭を打った。杭にはロープがくくりつけられていた。ネオットスは自陣側にも杭を打った。杭を打つ度に、近くの木々に止まっていた鳥たちが飛び立った。

ネオットスたちは用意してきたいかだを水に浮かべ、ぴんと張られたロープとそのいかだを結びつけ、川の中にも杭を打って行く。広くまっ平らないかだはこの時代の船に比べて揺れ難く、これからの作業に役に立つ。

二人が杭を持ち、ネオットスがハンマーを叩き下ろす。水上での工事は訓練していたが、それでもハンマーを打つ度にいかだが揺れ、何人か川に落ちてすぐに救いだしたりした。どンドン、かんかん、と言う音が森中に響く。すでに敵に知られているのだろうなと思

ながらもネオットスは汗水たらして杭を打ち続けた。

杭を前後等間隔、左右中央均等に打ち続け、全ての杭が打ち終わった頃、向こう岸に敵がずらりと並んでいるのに気がついた。ネオットスがひやりとした感覚を味わうと同時に、サウルス軍の一人がひゅつと矢を放った。それはネオットスらから大分遠くの川の中に落ちた。わざと外したのはわかりきっていた。

敵軍が自陣にかかる橋を建設しているのを凝視して待つ、というのは奇妙な光景だった。イムサ軍が矢を放つと、サウルス軍も矢を放ち、しょうもない小競り合いの中で二人が命を落とした。

ネオットスはここからの作業に役立たないかだを下流に流して、杭同士に補強のための木を打ちつけ始めた。それが完了すると、その杭の上に川の流れに平行な感じで木の板を張り始めた。

「太陽の位置は？」と思いながら船の上でネオットスは空を見上げた。その瞬間、船をこいでいた兵士が射ぬかれて死んだ。ネオットスは汗をたらりと流すとともに、サウルス軍を睨みつけた。サウルス兵は素知らぬ顔をしていた。ネオットスは言いしれぬ怒りを覚えながら作業を続けた。

敵軍が見守る中での造橋工事は工兵たちに緊張感と心的疲労を与えた。やがて兵士たちは何でもない風の音を、矢の風切り音と勘違いしてびくびくし始める。ネオットスは隊長として振舞うことに努め、兵を叱咤し、自分は風の音など何でもないように振舞った。

太陽は完全に昇っていた。兵士たちは、春の陽気の中で汗をだらだらと流しているか、それとも顔を青くして汗一つかいていないかのどちらかだった。ネオットスは前者だった。

板を敵陣まで張り終えると、サウルス軍が林から歩み寄ってきた。「まだまだ！」とネオットスは叫んだ。両軍ともにびくりとしてその場に固まった。ネオットスは自陣の方を指さした。その方向には丈夫そうな長く太い木の板が置かれてあった。「補強のためにもあれも使う」

ネオットスがさういうとサウルス軍は引き下がった。

「あんなに、待ち遠しそうにするなら手伝ってくればいいのだがな」と思いながらネオットスは補強材の方に向かった。向かいながら、ちらりと空を見た。まだ日は空高くにあった。

「おい」ネオットスは工兵に小声で言う。「このままでは予定より早く完成してしまふ。だから木の板が重くて動かせないというような仕草をするんだ。あと、中くらいの丸太をいくつか持つてきてくれ。それを地面に敷いて、転がすように運ぼう」

兵士たちは木の板の下に手を入れて、一斉に持ち上げようとしたが、持ちあがらない。と言うような仕草をして、何事かを話しあつた後に森の奥に引き返した。

さすがにサウルス軍が出てくる。ネオットスは持ちあがらないと言うような仕草をもう一度させた。向こうのサウルス軍は橋の上をとんとんと歩いて、自分たちの所に罠が仕掛けられていないのを確認するとともに、橋がまだ万全でないことを知ると帰つていった。

やがて丸太が来て、その上に木の板を乗せて運び始めた。橋の上まで転がし、運び終わると釘を打った。それを何度も繰り返して、敵陣の方にもそれを行った。敵陣からの矢の攻撃は無かった。

「よほど……お人よしの指揮官がいるのだな。シャンティ王子か？」ネオットスはそうひとりごちた。しかし、彼はそのことに気がついたのに、もつと重要なことには思いが至らなかった。彼は、ここを取り仕切っている人間が、冷酷なあゝのギャロップ將軍ではないことに思いを至らなければならなかったのだ。

ネオットスは最後の木の板を打ちつけながら「あのいかだを繋げて橋にしたら良かったかもしれない。いや、水上に密着した橋を架けたら揺れて戦いに杭に違いない。兵士一人の戦闘力はこちらの方が上なんだ。出来るだけ実力が出せる様に橋を組み立てないと」と思った。

どん、と最後の釘を打ち終わつたところで、ネオットスは工兵たちを見た。彼の目は「早く帰れ」と言っていた。工兵たちは頷きを返さず、けれど感謝の意を目で述べながらそろりそろりと帰った。

工兵たちが向こう側に渡り終えると、サウルス軍が茂みの中から一斉に現れた。ネオットスは橋の真ん中に立ち、少しずつ後ずさっていく。サウルス軍の兵士が顎で「早く帰れ」と合図した。

ネオットスはなぜか屈辱を感じながら、イムサ軍に振りかえって橋を渡り終えた。彼はそのままたオースが率いている再前線巨人部隊の横を通り、少し行った所で後ろを振り向いた。

丈夫な橋がたった一日で完成していた。ネオットスは息を切らしながら空を見上げた。鮮やかなオレンジ色の夕方だった。何もかも成功だ、じきに空は暗くなるぞ。そんなことを考えながらネオットスは達成感を覚えていた。先に帰っていた工兵がネオットスの防具と武器を持ってきていた。ネオットスはすぐにそれをつける。

「よくやった」と森の奥から走り寄ってきたアレクトリスが言った。「これはおれだけの言葉じゃないぜ」

ネオットスは顔を赤くしながら頷いた。

彼はそれを隠すように兜をつけると、敵陣に向けて槍を突きつけた。サウルス軍はイムサ軍の後ろにある夕日が眩しいようで、一樣に目を細めていた。ネオットスはまるで睨まれているかのような錯覚を覚えながら、もう一度槍を強く握った。

いつも通りだ。槍の握り方がわからなくなってきたぞ。と考えながらも、彼はすでに落ち着いていた。

全ての兵士たちの息が止まった。ネオットスにはわかった。そうだが、戦争が始まるうとしているのだ。戦争が……生まれようとしているのだ。

戦争と言うものに擬人法を使用した瞬間に、隣の男の口の中で爆ぜたような音が聞こえ、ネオットスは気がついたら橋の上にいた。彼はまず足を踏み鳴らして、橋が丈夫かを確かめた。

「橋上主力槍歩兵部隊、密集隊形を保て」シャンティはサウルス側の岸の上で叫んだ。サウルス軍は言われた通りに盾を並べ、イムサ兵を通さないようにする。「弓兵！」

弓兵が草むらから出てきて一斉に橋上のイムサ兵に矢を射つていく。敵兵はそれを予期していたかのように盾を持った兵を側面に並べていく。

それほど横幅が大きくもない橋の上でサウルス軍とイムサ軍が衝突している。両軍は一万の兵士たちを持っていながらそのほとんどを有機的に使えてはいない。弓兵の岸からの側面長距離攻撃も遊兵を少なくするためのものであったが、それは敵に読まれていたようだった。戦場ではただ両軍の声と声のみが戦いといえるぶつかり合いを続け、兵士たちは盾を使っておしくらまんじゅうで遊んでいる。「こちらの弓兵は読んでいた？ それじゃあ、敵だつて同じことを考えていたつてことじゃないのか？」シャンティがそう思った次の瞬間に、向こう岸にイムサの弓兵が並び始めた。「いかん、槍歩兵盾を側面に並べろ！ 弓兵は向こう岸の弓兵を狙え！」

橋上の戦闘が硬直状態になると同時に、両軍の弓兵同士の射撃合戦が始まった。弓を引く兵士たちの息遣い、弦が強い反動で戻る音、矢の風切り音、矢が肉を食い破っていく音、自分の中で骨が折れる音、矢を抜いた時の血の吹き出す音、自分の倒れる音、仲間の叫ぶ音、人が死ぬ時の名状しがたい音。

シェイバスたち近衛兵団はシャンティが射貫かれないように彼の前に並び立った。しかし両軍とも弓兵の威力は大したことは無かった。それもそのはずである。

「もう、日が暮れるぞ」

とシェイバスが空を見上げながら言った。空はもうオレンジ色ではなく、紅色に近くなってきていた。太陽が沈むのとは反対の方向ではもう星影が見えるくらい暗くなり始めている。

「隊伍を組め、隊伍を組め！」橋の上で焦ったような声が響いた。橋上のサウルス軍がタオ ス隊の猛烈な勢いに押され始めていた。さらに両軍共に潮の川に落ちる者が続出し始める。「落ちたら泳いで戻れ」鎧が重くて泳げない。「鎧だつて捨てて良い」鎧を着てない者、鎧を脱ぐことに成功した者も、どちらに泳げばいいのか判断

できず、むやみやたらに泳いだ。敵の支配する向こう岸に辿り着いたものは、すぐさま槍で貫かれ、腹や胸に穴が開いたまま血を流しながら潮の川を戻っていく。生きて自陣に辿り着くものはほんの一握りもない。「泳いでいる者を射貫け！」

潮の川がどんどん赤く染まり始め、暗くなってしまうばそれもわからず、わからない間に流されていく。

徐々にサウルス軍は押され始め、あんなに楽しそうだったおしくらまんじゅうもだんだんと怖気立つ戦争の態を為し始めてきた。一人の勇者が騎兵での単騎突撃を試みて、巨大な鉄棒を持った大男にいと也容易く潮の川に叩き飛ばされた。

「あれが、タオースだ」シャンティは大男のタオースを指さす。弓兵が暗いなかで目を凝らし、タオースに標準を定めた。「撃て！」

十数本の矢がタオース目がけて飛ぶ。その中でタオースに届いたのは数本で、彼の肉に達したのは一本だけだった。タオースは蚊に刺されたような感じで「しゃらくせえ、おれを倒すなら肉弾戦しかありゃあしねえのよ！」それを雑に抜き出して、投げ捨てた。そのあと彼は、ついでと言う感じに鉄棒を目の前にいるサウルス槍歩兵に叩きつけた。

「タオース隊。前に進め！」タオースが叩きつけた鉄棒はサウルス兵の盾に防がれていた。タオースは構わず鉄棒を叩きつける。「前に前に！」タオース隊の巨人たちがその大きな体から来るパワーを最大限に発揮し始めた。彼らは息を合わせてサウルス兵をどんどんと押しこんでいく。

サウルス兵も後ろから味方を押して援護するが、前後の圧に耐えきれなくなったサウルス兵は自ら進んで潮の川に落ちた。

「押しつぶせ！」巨人隊の誰かが言うと、合言葉のように「押しつぶせ！押しつぶせ！サウルスの軟弱者を押しつぶせ！」連呼され始めた。橋がぎしぎしと音をたてる。ギシギシギシと音をたてる！

サウルス軍は歯を食いしばって、青い顔をして、それでも耐える。

持っていた槍はどこかに落とすたよう、両手で盾だけを持って敵兵のプッシュを抑え込む。「密集するのだ！」シャンティがルルディファイアの歩を進ませ、彼を守る近衛兵団を押し分け、橋のすぐ側まで来て吠える。「肩を合わせ、盾を合わせて、密集するのだ！それがサウルスの流儀、サウルスの伝統、サウルスの戦い方だ！どうした！そんなものか、否や、そんなものではない！我らには竜の加護がある！息を合わせる！いくぞ！攻勢に転じるぞ！」

「押せ！」サウルス兵が「押し返せ！」声を合わせて「押しまくれ！」息を合わせて「押しをける！」イムサの巨人たちを「押し倒せ！」じりじりと「押し破れ！」後退させていく。

「おお、あああ！」タオースも手近な者と隊伍を組んでサウルス兵の反攻を食い止めようとする。「糞ガキ！ははは、良いぞ。なかなか！」タオースたちは敵の圧迫を何とか殺し始める。

「タオース」伝令役のアレクトリスが見方をスルスル掻き分けて、彼のすぐ脇にやってきて耳打ちした。「ケリーバーンが泳いで川を渡った」

それを聞くとタオースはにやりと笑った。

シエイバスは百騎と二百人の歩兵を率いて森の中に入った。火は完全に落ちているので、森の中は少し先も見えないほど暗かった。

「火は使うな」シエイバスが近くの者に命令する。彼らは森の中に進入したケリーバーン隊を探している。ケリーバーンたちが泳いで川を渡ったのを偵察隊から聞いたサンティが彼らを派遣したのだ。

「もっとも、こっちは騎兵に乗っているのだからあちらにはバレバレかもしれないがな」

サウルス側の森は間引かれており、騎兵たちでも襲歩以下ならばそれなりスムーズに進めるほどだった。シエイバス隊は彼を中心にして騎兵十数人、歩兵、偵察の騎兵と言う風に広がっていた。

潮の川の喧騒は微かだが、彼らの耳にも届いていた。シエイバス

は一刻も早くシャンテイのもとに戻りたいと考えながら森の中を静かに散策した。

「それにしても驚くほどに静かだな」シェイバスたちはひやりとした感覚を味わいながら森の中を見渡す。「大体……夜の戦いはフクロウと言われていたエムノンの夜目部隊だけがするんじゃないのか？」

「近衛副隊長」とカバルス騎兵がなかなか慣れたサウルス語で言った。「つまりは、ケリーバーン隊はその夜目部隊の一部を率いているか……全く夜目が利かないのにそれを敢行しているかのどちらかですってことですね」

「君はどっちが良い？」

「どっちもどっちでしょ？」

「そういうことだな」シェイバスが嘆息しながらそういうと、歩兵の一人が彼の名を呼んだ。見てみると向こうから騎兵が走ってきていた。騎兵は馬の背にもう一人小さな兵士を乗せている。「どうした？」

「はい」騎兵がすぐ近くまで馬を寄せると、後ろの小さな兵士が報告する。「サウルスの森中部隊がケリーバーン隊らしき者たちと交戦しています。敵の数は二百」

「たった二百？ ……サウルス軍を側撃、背撃するのにそれだけで足りるはずがないぞ」シェイバスは怪しんだ後、近衛兵の一人にシャンテイへの伝言を託して王子の所へ向かわせた。それを見た小さな兵士は少し顔を強張らせていた。「ん、どうした？」

「い、いえ」小さな兵士は首を振った。「何でもありません」

「それならいい。まずは君の言った所へ行こう、案内を頼む」

小さな兵士は馬から降りて、彼らを先導し始めた。が、暗い森の中なので元いた場所がよく分からず、案内役の小さな兵士は空やら木々やらを確かめながら進んでいた。十分が過ぎた頃、小さな兵士がそわそわとし始めた。

「君、わからないのか？ わからないなら……早いうちにそう言っ

てもらった方がおれたたちにも都合がいいのだが……」とシェイバスはイライラしているのか、顔をひくひくさせながら質問した。すると彼は困ったような顔をしながら、すいませんと謝った。シェイバスは顔を曇らせる。「……それで、ここはどこかな？」

気がつけばよくわからない所に来ていた。歩兵の一人が光の道を見つけて、その方向指さした。「隊長、あっち道路があります。一旦道路に入りましょう」と彼は言う。サウルス軍が事前に作っていた森の入り口から潮の川までの道路には篝火が焚かれており、兵士が迷ってもすぐに元の場所に戻れるようになっていた。シェイバスはその意見を採用して、隊を率いて道路に戻った。

彼らがこれからどうするか途方にくれながら、シェイバスの次の命令を待っていると、潮の川の方面から一人の騎兵がやってきた。

「副隊長！」騎兵は走りながら大声で言う。声の調子には嬉々とした者が混じっているのが、遠くからでもわかった。「シェイバス副隊長！ ケリーバーン隊は撃破されました。副隊長の伝令を聞いた王子がもう一隊分兵士を割いてそれを送ったのです。ですから、副隊長はすぐに前線に戻ってください」

「そうか、それは良かった！」

シェイバスはほつと胸をなでおろす。シェイバスは交戦中のケリーバーン隊が二百人と聞いておそらくその隊は^{おとこ}困であり、前線を叩くために十分な戦力を持った別働隊がいると考えた。そして、その考えをシャンティに伝えさせておいたのだが、それが役に立ったようだった。

「副隊長？ 案内兵が！」カバルス兵が叫ぶのを聞いたシェイバスは驚いて振り向いた。見れば、さっきまで案内役を務めていた小さな兵士が叫び声をあげながら森の中に逃げている。「あれは、おい！ 追いかけましょう！ イムサ兵です」

「……！ 舐めやがって。いや、しかし、奴の処理は君に任せる。カバルス騎兵二十と歩兵三十で追ってくれ」

そういうとカバルス兵は短く返事をしてすぐに兵を率いて森の中

に入った。シエイバスは顔を真っ赤にし、自分を落ち着けるために水を少し飲んでから潮の川に走った。

シエイバスたちが前線へ向かった時刻、潮の川の下流ではイムサ軍隊長の कोरोネたちが橋を半分ほど完成させていた。

「隊長」とイムサ兵が、橋の造営を見守っていた कोरोネにしゃべりかけた。「向こう岸……釣れたようですよ」

イムサ兵が指さした方向、潮の川下流のサウルス方面には数百人の人影が集まっていた。その中でひとときわ体の大きい男、フートスが北国の分厚い剣を肩に乗せて川のすぐそばまで歩いた。

「モーキリニア地方のイムサ国の隊長とお見受けしますが、名前を教えてくださいませんか？」

「……」 कोरोネは蔑むような目を彼に向けたが、深夜の森の中でフートスにそれを確認することはできない。

反応なしかよ、とフートスはしかめっ面をしたあとに振り向いて背後のサウルス兵士を見た。兵士は弓矢を構え、橋造営の作業をしている兵士に向かった何本か矢を撃った。そのうちの一本が敵兵に直撃して、彼は潮の川の中に沈んでいった。

「向こう岸にもくれてやれ」とフートスが言うと、百人近い弓兵が向こう岸の कोरोネたちに矢を撃ち始めた。「とはいっても、当たらねえな。まあ、夜だしな」

कोरोネたちはすぐに森の中に引き返し、茂みの中から弓矢で応戦し始めた。お互いに数人単位の負傷者を出しながら、無意味な遠距離戦を繰り返したが、ついにはフートスがしびれを切らしたように、奥から船を持ちだした。

「……」 कोरोネがちよい、と手を振ると、イムサ兵は矢に火をつけて相手の方に撃ち始めた。

「あ、こら！ 火矢での攻撃はしないんじゃないのかよ。おい、皆、潮の川から水汲んでこい。そこいら辺の火を全部消し止めるんだ」フートスが慌てながら命令すると、兵士たちは兜を脱いでそれに潮

の川の水を汲んで消火に当たり始めた。それをしている間にも火矢はほとんど射込まれている。

暗い森の中で、そこだけ仄明りがともる。サウルス兵は水を入れた兜をバケツリレーで運んだり、射込まれたばかりの火矢を足で踏み潰したり、木に燃え移った火に土を被せたりして消した。

「おい、まだか？」

フートスが近くの兵士に訊いた。近くの兵士は首を横にぶんぶんと振った。わかりませんよ、と言う感じだった。

「……」コローネは彼のそのセリフに言いしれぬ違和感を抱いた。まだ？ まだ……なにかを待っているのか？ 火を消すための水か？ いや、しかし……。

コローネは向こう岸に向かって飛んでいく火矢の明るさに目をやりながら、会議でアレクトールが伝えていた情報のことを思い出した。

早い段階からサウルス国軍と共に共同訓練をしていたカンプトケファレ自警軍があった。その隊の名前は第五千人歩兵の第二軽装剣歩兵百人隊……ビッグフトス隊。それを率いるのが元モーキリニア人の老人ビッグフトスで副隊長はその孫の大男フートス。

エムノンは彼ら存在を知ってすぐに、ギャロップが彼らをコローネにぶつけてくるであろうことを予測していた。コローネも大男が目の前に現れたのを見て、それが的中したのを確信した。

だが、老人がその隊を率いているはずなのに、さつきから副隊長の大男が出ずっぱりである。それともビッグフトスは後ろに控えているのか。いや、しかし、ビッグフトスは完全なるモーキリニアの男だぞ。

「……！」コローネは何かに思い至ったように後ろを振り向いた。そしてイムサ兵たちに向かって叫ぶ。「気を付ける！ サウルスの伏兵はすでに、こちらに潜んでいるぞ！」

イムサ兵はいきなりの忠告に体を強張らせ、よく見えない闇の中できよるきよると首を振った。

「……たいちよ」う、と言い切る前に兵士の声が途切れた。イムサの兵士たちは声のした方を一斉に見た。見れば隻腕の老人がごんぶとの剣で兜ごとイムサ兵の頭をたたき割っていた。彼らはその老人の冴えた眼光を見ると同時に、後ろから切りつけられた感覚を味わって、そして絶命する。

「集合の合図があるまで」隻腕の老人、ビッグフスがやけに楽しそうに声を上げた。「好きに暴れる！」

奇襲を受けたイムサ軍 कोरोネ隊は総崩れになった。彼らの後ろは潮の川であり、それを渡っても向こう岸にはサウルス軍が待ち構えていた。そのサウルス軍の一部も船に乗ってこちら側に向かって来ている。

火矢を撃っていたイムサの弓兵はすぐにそれを捨てて腰の短剣を抜き出す。ビッグフスは根こそぎ首を切り払った。別のサウルス兵が短剣を奪って、それを適当な敵兵に投げつける。投げた短剣は見当違いの方に飛んでいったが、イムサ兵がそれに気をとられている隙にビッグフスがイムサ兵を撫で切りにした。

下流の各地ではすでに虐殺ともとれる一方的なサウルスの攻撃が始まっていた。イムサ兵の中には隊伍を組んで戦う者たちもいたが、木の上からのサウルス兵の奇襲に驚いて一瞬で隊伍を崩し、その隙を突かれて切り払われた。

कोरोネは潮の川を見た。フートスたちはすでに半分ほど渡り終えている。絶体絶命、という言葉が彼の脳裏に浮かぶ。

「否や」彼は怒っているとも笑っているとも捉えられる顔で思っていた。「始めからおれは、死ぬ運命」

彼は腰の剣を抜くと、敵将のビッグフス目がけて駆けだした。ビッグフスはあと大股六歩の所で彼の存在に気がつき、敵に向き直った。 कोरोネは構わず、剣を振り上げ、振り落とす。ビッグフスが老人に似合わぬ身のこなしでそれを避けると、彼の剣は空を切るだけに終わる。だが攻撃は終わらない。 कोरोネは無理やりに腰を捻じり、その体制から横に剣を振る。思わぬ連続攻撃に不意をつかれ

たビッグフトスは、それでも、靴でその斬撃を受け取った。

金属同志の衝突音の後、彼はにやりと笑う。彼の靴には分厚い金属板が仕込まれていた。ビッグフトスは片足立ちの不安定な体勢のまま自分のごんぶとの剣をコローネの兜目がけて振り落とす。

コローネは頭だけを反らしてそれを避けようとするが、ビッグフトスの斬撃を避けきれず、片目を切り裂かれ、後ろにのけ反る様な形で後ずさった。二人の間に再び大股三步の距離ができる。

「器用なことをする」ビッグフトスは好々爺じじいのような笑みを浮かべてコローネを見る。その目は明らかに殺意で漲っている。彼は剣先をコローネに向けながら言った。「しかし、経験値が足りん。足りん足りん。あと十年練磨せねば……わしには勝てん。ふん、ははん、けれども……もはや、その機会もない」

ビッグフトスは剣先で彼の後ろを指示した。コローネはフトスら渡河班を思い出しながら、後ろを振り向く。そこには木と暗闇以外に何も無かった。

「ガキが」

耳の後ろでビッグフトスの声が聞こえ、次に背中に激痛が走った。

彼は地面に倒れ込んだ。背中は何れもない熱を感じていた。もう痛みは無かった。このまま死に行く運命なのだと、この死は最後に自軍に完全なる勝利を導くために必要なものだったのだと、彼は独りで勝手に納得して、目を閉じた。

「残念だったな」今にも安らかに死に落ちようとする彼の頭の上で老人は言った。「わしはお前たちがただの囷で、しかも、ただ時間を稼いでいただけにすぎないのはわかつとる。お前たちの將軍、エムノンが向かうであろう場所にはすでにわしらの將軍が向かっておる」

「……うそだ」コローネは目を開けて、力を振り絞って頭を持ちあげ、老人を見つめていった。「それは嘘だ」

「嘘じゃない」老人は言った。「確かめてみるか？」

「……」簡単に返事ができなかった。確かめてみる……それは、つ

まり。「捕虜になれと？」

「……そうだ」老人はつまらなそうにいった。「生かせる者は出来るだけ生かせ、それが我らが主君の言葉で……敵将は敵国との交渉に使えるから出来るだけ捕まえろ、それが我らが將軍の言葉だ」

「殺してやる」 कोरोネは言った。屈辱感を噛みしめながら彼は呻くように言った。「おれを生かしたら、おれはお前たちを殺す。

殺してやるのだ。お前も、お前の主君も、お前の將軍も……」

「爺さん？ どうした？」

といつの間にか川を渡っていたフートスが言った。

ビッグフトスが周りを見渡してみると、すでに大体のことは済んでいた。出来るならば、すぐに集合して、逃げ出したイムサ兵たちが彼らの存在を中央に伝える前に奴らを叩かねばならない。

「よし……皆を集める」ビッグフトスは孫を睨んだ。「すぐに中央へ行くぞ」

フートスが剣で瀕死の कोरोネを指し示す。

「そいつは？」

「ふん、ははん。フートス……このわしに、石ころをどうしろと？」

ビッグフトスが澄んだ瞳で孫を見つめながら、心底質問の意味がわからないと言っ風と言った。ビッグフトスはふん、と鼻で笑った後にビッグフトス隊集合の合図をかけた。

18・潮の川の戦い 前篇 (後書き)

イムサの將軍「次回は僕たち歌を歌っちゃいます」

|||||

絵はおじちゃん。

展開はえー。

19・潮の川の戦い 後篇

> i32838—4057<

コロネ隊が駆逐されたその少し前。潮の川の上流付近ではエムノンが五百人の兵士たちを率いて潮の川を渡ろうとしていた。彼と彼らの兵士は夜目が人の何倍も利く特異な性質を持っていた。

イムサ建国の際の戦いでは彼らは負けを知らず、正々堂々を信条とする基本的なモーキリニア人たちには臆病者の奇襲戦法と馬鹿にされながらも、彼らの挙げた戦果は無視できないものであった。

エムノンが將軍になるにあたって一時的に解散していた夜目部隊は一夜限りの復活を果たした。もともと彼らは千人の部隊だったが、多くの者は他所に散っている間に戦士したようで、再結成するにあたって元の兵員の半分しか集めることはできなかった。

夜の森は暗かった。明かりと言えるものは星のみ。そして、それを反射する川の水面と男たちの眼光だけだった。

それでもエムノンには見えていた。闇の世界のすべての闇と言う闇が……くつきりはつきり包み隠さず、見えていた。エムノンだけではない。彼の後ろに控える千軍万馬の男たちは全員が夜の降ろす闇の帳に包まれた鬱蒼とした森のでこぼこの獣道を、まるで、雲一つない夏の蒼穹の下のならかな草原をスキップするかのよう、歩けるのだ。

スキップする……そう、彼らはそれが出来る状況ならば、おそらくそうやって歩くだけの事柄にもリズムを刻むようにして、この体に満ち溢れてくる喜びを表現しただろう。なぜなら、彼らは彼らの待ち望んだ戦場に立っているからだ。

中央では、下流では、すでに戦闘が始まっている。彼らも早く始めたくてうずうずしていた。けれどもそれは、地面の上で足をバタバタさせたって始まらないのだ。待っていても始まらないのだ。川を渡り、息を殺し、目を光らせ、敵の背後に立ち、そして、エムノ

ンの掛け声と共に草むらから飛び出して敵の体に無数の傷を刻みつけるまでは始まらないのだ。

「行くぞ」

とエムノンが手を食い食い動かして下知する。夜目部隊の百人ほどは船に乗って川を渡り、それ以外は泳いで渡り始める。

川の水はまだ冷たかった。けれどもいいのだ。このくらいでは彼らの体の火照りはおさまらない。戦争が始まればすぐに熱いくらいになる。

彼らが川を半分ほど渡った頃合いに、不意にそれは起こった。

「そこまでだ」向こう岸には四百人の歩兵や騎兵がいた。彼らはエムノンたちの船に向かってたいまつを投げつけてきた。その中のいくつかは船の中に入り込み、兵士たちはすぐにそれを川に投げ捨てる。「フクロウこと、イムサの將軍エムノン。あんたの作戦はどうやら、おれの上を行けなかったらしい」

「撃て！」船に座ったままエムノンが叫んだ。その声を聞いた途端、船の上にいる兵下たちが向こう岸のサウルス兵たちに向かって矢を射始めた。サウルス兵はどよめき、やや隊伍を崩したがすぐに盾を持った兵士を前に並べて対処してきた。エムノンは舌打ちしながら、練度の高い兵士だ、と思った。「そこにいるのは噂のギャロップ將軍か？」

馬上にいるギャロップは苦笑いしながら答える。

「おいおい、普通なら名前を聞く前に矢を撃ち始めんだろうが」

「なぜ、わかったのだろうか？」とエムノンは彼の抗議をまるつきり無視して言った。その間も彼らはぐぐくと向こう岸に進んでいく。

「おれたちはそちら側に到着するまでの間に御教授願いたい」

「……スパイの得ていた情報から、あんたの特徴はわかっていて。あんたは奇襲が好きだ。だから、潮の川を攻略する際もそれをしてくるとも思っていたのさ」ギャロップは楽しそうに説明を始める。

「しかし、將軍の特徴という点ならば、あんただっておれのそれを掴んでいたんだろう？ だからこそ、橋を建てるなんて暴拳を実行

した」

「説明が足りないな」エムノンは立ち上がりながら言う。「なぜ、おれがここにくると?」

「ここに来る前に情報を掴んだ。下流には独立部隊（ कोरोネ隊か? ）が、いるつてな。なら、常識的に言つて敵はもう下流では何もしないだろう? 下流に कोरोネ隊がいることで偵察の度合いが強くなるんだから。大体、下流の水深の浅い所であからさまに第二の橋を建てるなんてばかかしい。普通なら、船とか泳ぎとかで川を渡ればそれで事足りるんだ。……これでおれは、下流の橋は困だとわかった。そんなもつて、そうなる、奇襲を行うためにこちら側に上陸するためには……上流からの川越え」ギャロップは弓兵たちに矢を射らせながらも話しを続ける。両將軍の間には独特の時間が流れているようだった。「夜戦と奇襲が得意なフクロウ。独立部隊の कोरोネ。橋の完成は夕方。浅い下流での कोरोネでの第二の橋。時刻はすでに夜……ここまでのヒントを貰つてここに辿り着かない方がおかしいぜ。いや、おれは、ここにお前が現れるまでまだ一段上の策がお前にあることも警戒して策をたてていたんだ。それなのに……」

「がっかりか?」

もうすぐでエムノンの乗る船が向こう岸に着く。両軍ともにすぐにも白兵戦を開始できるような体勢になった。

「いや……不得手な船を使わず慣れた陸路で戦争を開始することといい、今回得意な夜戦と奇襲を使つてきたことといい……戦争となるや、自分の能力を最大限に発揮できる戦術をとることをその姿勢は……何というか」ギャロップは呆れ果てたように、それでも少し、賞賛するように言った。「あんたは戦争に対して正直すぎる、正々堂々すぎるぜ。將軍」

「ふん……ははは」そういう考え方もあるか。イムサでは、モーキリア人の間では邪道と言われたこのおれが……お前の目を通せば正々堂々の正直者だと? 「ははは! ならば、亡国の幻將殿! 君

のそれは？」

「……なるほど、よくよく考えて見れば、おれもあんた同様みただな。まあ、戦争に対しては嘘をついたとしても、どうなると言うわけでもないからな。諦めて純情可憐一直線を貫き通すさ」

「そうだ。誰もが、運の要素を極小にして戦おうとすれば、結局は自分の得意の戦法をとるしかない」

「それで死んだとしても？」

ギャロツプは手に持った槍と手綱を強く握りしめながら言った。

「おれは死なないさ」エムノンは腰の剣を抜いた。後ろを振り向いて言う。「船に乗っている者は陸に着いたら群がる敵兵をなぎ倒し、全ての者が陸にあがったらそのまま森の中に入れ！ もはや、中央への奇襲は無理。コロネ隊が機転を利かせて敵主力背後を突くことを、鷹たかだか鷺わしだかに祈っている！ では以上！ 皆の者、声を！」

百人のイムサ夜目部隊が船から飛び、陸に足をつける。エムノンのマントはひらりと翻った。彼には戦士としてのまぎれようもない風格があった。百人の男たちは弓を船の上に捨てて、片手で剣を持ち、片手で小さな盾を持っている

「弓兵、斉射」ギャロツプが槍を振りかざしながら言う。弓兵が一齐に矢を放つと、彼らは盾や剣でそれを防いだ。エムノンも簡単に矢をなぎ払って身を守る。「おいおい、そんなのありかよ」

「我ら！」エムノンがゆっくりと歩きながら叫ぶ。「飢えし五百の禽獣！」百の男たちは声を揃えて叫ぶ。「我らが望むは！」エムノンに飛びかかったサウルス兵は二度ほど彼と手を合わせた後に他の男に切り殺された。「血と肉と、喧騒と狂奔！」サウルス兵は寒気を感じる。「ここに！」次々に夜目部隊が地上に着く。「ここに我らの全てがある！」サウルス兵は遠くから槍と矢でチクチクと攻撃するが彼らは意にも介さない。「空腹と、汚物と、泥と、怒りと、憎しみと、不安と、恐怖と」彼らは意にも介さない。「そして」彼らは穏やかに叫んだ。「至福が！」そう、そこには彼らの考えうる限りの最上級の幸福があった。

「狂つてやがるなあ！ コイツら！」

ギャロツプは敵に囲まれながらも悠然と、傑物たらんと勇み歩く猛禽たちを見て、思わず苦笑いした。常軌を逸している、と彼をしても思わせるほどの光景だった。

「目の前ぞ！ 我らが至福は目の前ぞ！ それ、と・つ・げ・きい！」

エムノンが剣を振り下ろして、森の中を指し示しながら叫ぶと、男たちは恐怖心を紛らわせ、高揚感を呼び起こすためのウォークライを挙げた。彼らは隊伍を組むギャロツプたちに突撃する。

「迎え撃て！ 森には逃がすな！」ギャロツプは四百の兵士たちに声をかける。サウルス兵士たちは縦横無尽に駆け回るモーキリニア人たちになかなか向かつて行けずにいた。ギャロツプは面倒になつて、ついに自分から始めに突っ込んでいった。彼は愛馬の腹に蹴りを入れる。「撃滅しろ！」

ギャロツプは馬上から何人ものイムサ兵を突き殺した。が、エムノンがすつと馬の懐の入ったかと思うと、彼の愛馬の首を軽々と切断して、そのままギャロツプの太ももに剣を向けた。

「畜生が！ コイツは愛馬だぞ！」ギャロツプはそういいながらも、エムノンとは反対側に飛び降りて、愛馬を盾にして隠れた。死んでしまつては愛馬も物よ。思いながら愛馬を向こう側に倒して、エムノンを下敷きにしようとしたが、あちらからも同様のことをしようとしているようで一向に倒れなかった。ギャロツプがそれに気付くと同時に、あちらからのプッシュが急激に強くなった。「この野郎！ 卑怯者が！ 複数で押してやがるな！」と、彼はわけのわからない所に文句をつけながらその場から離れる。豪快に血を噴き出している首無し馬がどすと音を立てて地面に倒れ込む。向こう側にはもはや誰もいなかった。ギャロツプは近くにいたイムサ兵を突き殺すことでやり場のない怒りを一旦解放する。

ギャロツプは戦況を見た。将軍が率先して敵に突撃したことで、サウルス兵たちも動き出していた。いたるところでサウルス兵とイ

ムサ兵の戦いが繰り広げられている。同時に、大量のイムサ兵が森の中に逃げ込んでいる。

「エムノンは何？ エムノンはどこだ？」彼は血眼になって、イムサ兵の中に彼の姿を探すが一向に見つからない。「はん、モーキリニア人ね……こりゃあ、すごい」

彼の言う通り、モーキリニア人たちの戦闘はすさまじかった。一対一ではほとんどサウルス人、カバルス人が負けていた。彼らは軽業師のように木々の間を跳ねたり、くねくねと体をくねらせたり、ありえない軌道で剣を払ったり、兜ごと頭をかち割ったりしている。ギャロップは主人を失った騎馬に乗り、そこから戦況を見渡しなからサウルス兵と交戦するイムサ兵を殺害していく。それも簡単な作業ではなかった。

ギャロップはあらかたのイムサ兵を倒していき、彼らが川縁から姿を消したのを了解するとサウルス兵たちを集めた。血飛沫ちしぶきがまだまだ霞のように空気中に残っている。その血の臭いに不快感を抱きながら、彼らは素早く点呼した。四百人のうち残ったのは三百ちよつとである。

もちろん、敵兵はそれよりは少ないだろうな。ギャロップはそう思いながら兵士たちを見渡し、まだ彼らの顔に戦意があるのを見止めると次の作戦を開始した。

潮の川の橋上での戦いは「まとめ」に入っていた。

ずいぶん長い間均衡状態だった両軍であったが、イムサ軍の背後に千人のビッグフトス隊が迅速に突入したことによって彼らに動揺が走り、一瞬の隙ができた。シャンティたちサウルス軍はその一瞬の隙を逃さなかった。

押したり押されたりを繰り返していた最前線の槍歩兵隊はそのままに、そのすぐ後ろ一列の兵士たちを敵とは反対側に向き直させ、彼らに盾を斜めに構える様に指示した。

サウルスの軽装剣歩兵たちはそれを階段のようにして駆け上がり、

両軍の最前線の盾の壁を作った兵たちを飛び越して敵陣に切り込んだ。たちまち敵陣は混乱し始めた。

大男のタオースは飛び込んでくる最中のサウルス兵を鉄棒で川に叩き飛ばしていたが、上に気をとられている隙に腹を刺された。タオースは鉄棒を離して、その剣歩兵と取っ組み合いを続けたが、しかし続けて飛び込んできたサウルス兵に首をはねられ絶命した。

最前線を支えていた猛将が死んだことによつてイムサ軍は一瞬間裂したが、エムノンの右腕であるストルーツスが兵士たちを奮い立たせて、何とかイムサ軍完全崩壊を食い止めることに成功する。

シャンティは敵陣後方にあるビッグフトス隊を助けるために五百人の迂回班を派遣して彼らはビッグフトスを救援した。イムサ軍の前線はサウルスの軽装歩兵に荒らされているせいで盾を持った兵が隊伍を組めなくなってくる。サウルス軍の陣地にいる弓兵はそれを見て矢を猛烈に射込み始める。これによつてイムサ兵に多大な被害を与えるが、サウルス軽装歩兵も多少の被害を受けることになった。

流れを完全に引き寄せたいと思つたシャンティは近衛騎兵を従えて突撃することを決意し、散っていた騎兵を集めて準備を整え始めた。

イムサ軍の隊長ストルーツスはエムノンの背撃が失敗に終わったと判断し、前もつた命令の通りすぐさま敵方の森へ突撃することを指示した。ひよつこネオットス隊、まとまりのあるキュクノス隊、騒がしいアレクトール隊、ストルーツス隊の順番で敵陣に突撃することが決まる。アレクトリスは本国への伝令として退却を指示され、これを渋々受けた。

シャンティが騎兵突撃を繰り出そうとした瞬間に、イムサ軍はサウルス軍の使つた戦法と同じ戦法で両軍の壁を越えてきた。

ネオットス隊は境界線を越えるとすぐにサウルス軍の盾を持った兵士たちを切りつけた。サウルス軍の盾の壁に隙ができた瞬間に、イムサ軍の盾の壁が開き敵兵がドドドと進入してきた。

シャンティは騎兵突撃を指示。「我らに竜の加護あり！」近衛騎

兵たちはシャンティを中心にして、向かってくるイムサ軍へ突撃した。これを受け止めたのはキュクノス隊であった。キュクノス隊は騎馬の足を狙って剣戟けんげきを加えた。多くの騎馬兵がつんのめることになったが、キュクノス隊の被害も尋常ではなかった。彼らはここでサウルス軍の騎兵たちにとどめを刺される。

ストルーツス隊、アレクトール隊、ネオットス隊は敵陣に切り裂いて突き進み、サウルス側の森の中に入ることに成功した。

「追い詰められてから森の中に突撃？」

シャンティは彼らの行動に納得がいかないようだったが、思考と命令を停止することは許されていなかった。彼は騎兵の一人に森の外への伝言を与えて向かわせた。

「王子、我々は」とシェイバスが息を切らしながら訊いた。「どうしますか？」

「とりあえずはここをおさめなくちゃならない」

シャンティは橋上の戦闘を見ながら言った。橋上の戦闘はもはや多勢に無勢だった。イムサ軍の兵士はほとんど潮の川に落とされるか、シャンティたちを突っ切って行ったか、自陣後方からの奇襲にやられたかであった。彼らの死体は遠目にはそれほど多くは無かった。橋の上で死んだものは潮の川の中に捨てられて流れていったし、後方から攻撃された者のそれは木の陰などで隠れているからだ。

潮の川の下流を見つめるシャンティにシェイバスが一言呟いた。

「下流は恐ろしいことになってるかもしれませんね」

シャンティは無言で相槌を打った。事実、この時の潮の川下流は両軍の死体により幅を狭められており、流れは著しく滞っていた。

シャンティは困ったように、悲しむように、眉を八の字にしながら戦場を改めて見渡した。戦場で立っている者はほとんどサウルス兵しかいなかった。さっきまでの喧騒もどこかに姿を消し、夜の静寂があたりに満ちていた。ときどき聞こえる鳥の声や獣の声が、いつそ無音を引き立てているような感覚を覚えさせながら、徐々に森の中に獣たちの日常が戻りつつあることを証明していた。

やがて、月明かりに照らされながら、ぼおつと戦場の真ん中に立っている王子をサウルス兵は見つけた。彼らは手持無沙汰てもちぶさたな様子で王子のもとに駆け寄ってきた。

「王子」駆け寄ってきた兵士たちの中にいたビッグフトスがイムサ側の森を指さしながら言う。「数百の兵を率いた隊長格の男が逃げて行きましたが……」

「逃げた敵への追撃は構わない」シャンティは首を振る。「まずはこのイムサ兵を捕縛、もしくは掃討し、その後に歩兵騎兵入り混じった三千人をここに残して後はサウルス側の森の中に入る。ギャロップが提案していた作戦を思い出してくれ……ふむ、まあ、あれだ……ゲリラを探しての山狩りだ。いや、森狩りかな？」

シャンティたちは森の中を見た。あの中には二千以上のイムサ兵が潜り込んでいる。通常、二千でゲリラ戦などは考えられない。数が多いと迅速な行動も取れない上に敵に見つかりやすくなってしまうからだ。

ではなぜ、森に？ とシャンティは疲れ切ったような顔で考える。「森へ逃げたことに大した理由は無いでしょう」王子の顔を見たビッグフトスが言う。彼の隊の兵員たちはそうだそうだと頷く。「最後っ屁をかましたいだけ……王子、あまり気になさらないようにしてください。今は戦闘中、事実や起こってしまったことのみを見るべきです。不要なことを考えていると頭が鈍りますぞ」

「そうだろうか？」シャンティは優しげな目でビッグフトスたちを見かえす。そうこうしている間にも兵士たちは続々と集まってくる。

「たしかに、死の間際に敵地に潜入して出来るだけ敵戦力を減じようと工作するのは猛々しきモーキリニア人にはうってつけの行動かもしれない。けれども……彼らはぼくたちの目的が、敵戦力の壊滅によってイムサ国の侵攻を止めさせることだと知っている。もし、イムサ兵がイムサ国側に逃げた場合、ぼくたちはそれを追いかけていかなければならない」

「……つまりは」フトスが納得いかないように口を出す。「その

過程でサウルス軍がイムサ国の領土の侵犯することがあるから、それをさせないために主力はおれたちの国の方に逃げたと？……王子、奴らはそんなに義理やら人情やら……愛国心やらに厚くないですぜ」

「……ぼくはやはり、相手をそんな野蛮な風には見られない。彼らは優れた教育制度を持っているんだ。だから……だから……いや、すまない、まだ考えはまとまらないが……これは、その……」

「王子」フートスが言う。「おれたちとあなたはまだ短い付き合いだが、もうあなたが馬鹿みたいに優しい人間だつてことは理解している。だから、あなたがどういふ結論を目指して考えを巡らせているのかだつてわかつてんだ。王子、シャンティ王子。あなたは敵をどうにかして生かしてやりたいんだ。敵にも崇高な理由があるから殺してはいけないと、おれたちを納得させる命令を発したいんだ。けれどな、敵に素晴らしい知識があるうと、見習うべき愛国心があるうと、守るべき家族があるうと……それはおれたちにも同様なことが言えるんだ！これは絶対に忘れちゃいけないことだ！なあ王子。おれたちはここで、奴らを掃討して、イムサに脅迫まがいな事実を突きつけてやらないと、次はサウルス国が、おれたちの愛する者たちが殺されるかもしれないんだぞ！」

「……」シャンティは目を伏せて、下唇を噛んだ。一瞬間の後、彼の唇から真っ赤な血が滴り落ちた。兵士たちはそんなシャンティを見て、聖獣たちが蔓延はびこっていた超古代の、伝説的で超越的な出来事でも見たかのような錯覚を覚えながら、呆然として立ちすくんでいた。シャンティは心の中の葛藤に決着をつけたかのように顔をあげ、何かを決心したのであるう、潤んだ瞳を前に向けて言った。「わかった、行こう。ぼくらは……この国を守らなければならないのだから」

兵士たちは口いっぱい溜まっていた唾を飲み込んだ後に、腹に残っていた空気を全部出したかのような返事をした。

「よし、命令を発す」シャンティが背筋をただしながら大声で言う。

「自警軍のメンバーを中心にここに兵士たちを残す。もし、敵軍が自国から反撃を開始してきた時、君たちはこの橋で戦い、もしも時は橋を落としても我々の国を守り抜かなければならない。なお、戦争中であるが、自警軍の敵地への侵攻は許されていない。例外は無いということだ。忘れないでくれ。さらに、敵軍が襲ってきた場合は騎兵をばくたちの所によこしてくれ。ばくたちも手を貸すことができるのならそうしよう」

「おれたちについては行かして貰いますぜ」

とフートスが前に進みでる。シャンティは頷いた。

「次にぼくと近衛騎兵とカバルス騎兵、そして君たちビッグフートス隊は隊伍を組んで道路を行き来する。まずはいつでも方向転換できるように中央に騎兵四列、両翼に歩兵二列ずつで進む。敵が森中央の広場に誘い出された場合はそれをすぐさま広げ、中央騎兵六列、両翼歩兵三列ずつで進み道路を完全に塞ぐ」

「王子」名も知らぬ歩兵が前にでる。「私たちは打ち合わせ通りでしようか？」

「そうだ。ギャロップたちとの訓練を思い出して尽力してくれ。おそらく君たちの仕事が一番危険で一番疲れるものとなるだろう。何度もあの森の中を走り回らなきゃならないからね」とシャンティが言うと、歩兵は微笑みながら後ろに下がる。シャンティは、さて、と兵士たちの顔を見つめていく。誰もが意気軒昂いきげんきょうの様を表わしている。彼らには誇りがある、自国を守っていると誇りが。そして、そこには葛藤などは無い。シャンティはそれを少し羨ましく思った。いや、こんなことを思うことは不届きだろうか？ と彼は自嘲気味に微笑んだ。「……さあ、もつぼくの言うことは無い。では、この糞つたれの戦争を終わらせに行こうじゃあないか」

彼がそう言うと兵士たちは大きな声で返事をして隊伍を作り各々の行くべき方に散って行った。シャンティはルルデイファイロがぼくぼくと歩く音を聞きながら考えた。

『よくよく考えれば、因果なものだ。一番争いを望まないぼくが、

この「潮の川防衛戦」の最高責任者だなんて。いや、もしかしたら太祖ジャクナー一世もそうだったのかもしれない。彼自身は戦争を望まなかったが、民のことを考えれば、グナトウス征服しか民を守る方法は無かったのかもしれない。」

「結局はそういうことなのだろうか、戦争は何かを守るために起こるのだろうか。」

「では、ギャロップはどうだ？ 彼は戦争を愛し、望み……いや、いやいや。彼は、そうだ。彼は……守るべきものがあるのだ。」

「カバルス同盟国の傭兵時代でも、カバルス戦役でも、カバルス鎮定でも、今回の潮の川防衛戦でも……彼は一貫してある一つのものを守っている。彼はいつだってヒツパリオン・ユルシュを守るために戦っているのだ。」

「ならば、この理論は正しいのかもしれない。」

彼は上記の事柄をこの日の日記に残している。

「ならば、イムサ国のエムノン將軍はどうだっただろうか？」

「このまま行ってもじり貧です」ひよつこネオットスがエムノンにそう意見具申した。サウルス側の森の奥深く、エムノンたちとストルートスらは何とか合流に成功していた。そして二千五百ほどの軍勢を百個に分けて敵地での行動を開始しようとする戦を開始した直後にネオットスは言った。「我々は將軍を逃がすべきではないのでし
ようか？」

「ネオットス」ストルートスが若い隊長を見つめながら言う。「お前はそのつもりでこっちに突撃してきたのか？」

「……おれは、そのつもりでした。將軍が作戦を失敗したのなら、敵地につっこむだろうから、おれたちはそれを助けるべきだと」ネオットスがエムノンの方を向く。「おれみたいな凡才はコルドスノアで見渡せばいくらでも見つかります。それでも、將軍は違う。エムノン將軍には代えがないんだ。おれたちは絶対に將軍を守らなきゃならない。だってそうだ、おれたちの国を守るのは……」

「くだらねえ」エムノンが夜空を見上げながら言う。「いまさら、あんな所に帰ってなにがあるっていうんだ。あそこに何があるっていうんだ。おれはここを離れねえ、逃げたりなんぞしねえ。ここには、腹を満たすものも性欲を満たすものも何も無いけれど……唯一心を満たすものがあるじゃねえか」

「將軍は言いました」ネオツトスはベリステラスが書簡を持ってきた時のことを思い出しながら言った。「この戦争を次も味わうために人生を続けるのだと。生き続けたいのならば、ここであなたは一旦引くべきです。退路はおれが開きます。だから、將軍……あなたは逃げてください」

「嫌だね。作戦に失敗したとあっちゃあおれの鬼嫁も黙っちゃいなさい。ふん、もうあんな鬼嫁の所に帰ることができるか。だから、おれはここにいます」エムノンはわけのわからないことをいって子供のように駄々をこねる。「大体、あんな会話だけで、お前におれのことかわかってたまるか」

「將軍！」

「うるさい」

「二人が何をいつてるのかわからねえけどね」と騒がしいアレクトールが口を挟む。「將軍は引かないぜ。いつだってそうだ。都市防衛戦の時だって、メタイツ山脈の時だって、最後の決戦の時だって……いつだってこの人は逃げたためしがない」

「そうだな」ストルーツスは思い出しながら笑う。「おれの下で働いているときも同じような感じだった。それに、イムサに逃げ帰ったとしても処刑されるだけだし……それならば、將軍もここで死んだ方がましだろう」

「処刑のことは何とかありません！」ネオツトスが涙目になりながら訴える。

「どうせ根拠は無いのだろう」ストルーツスがニヤニヤ笑う。「お前が馬鹿みたいに將軍を崇拜しているのはわかった……しかし、將軍は……フクロウは逃げないぜ。おれのフクロウはそうだった。夜

にしか動かぬ臆病者と馬鹿にされようとも、それでもコイツは逃げなかった。お前のフクロウはどうだ？ ひよっこ」

「おれの……將軍は……」

ネオットスは熱い涙を流しながら小さく弱く答えを返した。彼がエムノンの下に着いたのはもう大分前に話だ。

彼はイムサ建国の際にはまだ物心もつかない稚児だった。そして十一歳になり、モーキリニアの戦士として扱われるようになった時彼は夜目部隊であった父の勧めによってエムノンの部下となった。

エムノンは厳しく、そして陰険で、口汚く、不衛生で、わがままで、不躰で……欠点を数え上げればそれこそ数えきれないほどあったが、唯一一点だけ、誰が見ても美点であると思える性質があった。これは陳腐な言葉である。しかし、彼を表わすのにこれ以上の言葉は無い。

「おれの將軍は逃げなかった。だって……誰よりも強く固く激しい……戦士の心を持っていたから」

「そうだ」ストールトスがエムノンを見た。「コイツは誰よりも戦士たらんと振舞っていた。敵兵を殺すのも、戦友を助けるのも、勝利を望むのも、敗北を厭うのも、自国を守るのも、敵国を滅ぼすのも……全ては戦士の所作さ。結局コイツはそういうことさ」

ネオットスは涙を拭いて、彼の將軍を見た。彼の將軍はしかめっ面をしながら鬱陶しそうに彼を睨んでいたが、それでもネオットスは微笑みを返して言った。

「將軍、取り乱してすいませんでした。戦いましょう。おれらは戦いましょう。なぜって、おれらは戦士なのだから。モーキリニアの戦士なのだから」

「……そうだ、隊長であるお前がつまらん妄執に取りつかれていたままではことも為らんからな。まあ、おれたちが為らせようとすることというものも……大層つまらんことだがな」エムノンは腕を組んで言った。「やばくなったら森に火をつけるなどと言っていたが、あれはなしだ。これから先どんなに追い詰められてもな。それで、

おれたちの目標は一つ、否や、一人。敵将ギヤロツプだ」

「お前の策を破ったカバルス人の将軍か」ストルートスが言った。

「一体どういう理由で？」

「戦果をあげようと思えば、おそらくこいつの首をとることが他の何よりも重要だ。コイツを叩けばシャンティなんぞどうにでもなるだろう。まあ、最後の最後に戦士たらんと奮闘しようじゃないかってことだが……」

「顔はどうでした？」アレクトールが訊いた。「スパイの人相書き通りでしたか？」

「まさに……だな。生きて帰れたらスパイを宮廷画家にでも推薦してやれ」

「やはり隊を百個に分けるんですか？」

とネオットスが質問する。

「それに関しては、それ以外あるまい。一隊あたりの兵員数が多ければ敵に見つかりやすくなるからな。それでだな……まあ、他の将校の首をとることができればそれでいい。しかも、敵に見つかっていない状態で、さらに目の前にいる敵がギヤロツプ隊でないならば出来るだけ相手にするな。言ったように、目標はギヤロツプだ」

生き残った隊長たちは頷きあつた。

二千五百を一隊二十五人で百個に分けると、各隊は最後のあいさつもなしに各々の行きたい方向に歩きだした。

払暁、夜の明け始めた頃。二十三人のネオットス隊は追いつがるサウルス軍から逃げ、森の中を疾走していた。サウルス軍は百人規模の隊を作り、それを森の中にくつも放つことで敵のゲリラ作戦に対抗する手段をとつた。

ネオットス隊は必死になって逃げ、ある地点に着いた時に追いつがる敵軍の方を振り返つた。サウルス兵は彼らが逃げるのを諦め臨戦態勢に入つたと思ひ、自分たちも剣を抜く。しかし、剣を抜いた

と同時に頭上からの奇襲があった。サウルス兵は瞬く間に蹴散らされ、数十人の死体を残して逃げ去った。

「ネオットス」ストールトスは血の付いた剣を握り締め、息を切らしながら言った。「ギャロツプの居場所は掴んだか？」

「いいえ」とネオットスも息を切らしながら首を振る。「でも、ギャロツプは本営などには帰っておらず、数百人ほどの兵士を連れておれたちを追いかけているようです。こっちには都合のいいことに」「エムノン將軍の居場所は？」ストールトスがまた木に登りながら尋ねる。ネオットスは首を横に振る。「そうかわかった。おれはまたここにいるから、お前は敵兵に見つかったらここに来い」

ネオットスは頷いてまた歩き出す。空は徐々に明け始めていた。エムノンたちにとって有利な時間帯はもう終わる。明かりの關係以外でも、時間が経過するほどにイムサ軍は不利になって行く。サウルス軍は多くの兵隊を有し、一隊を送り出している間にもう一隊を休憩させることができるが、敵陣のど真ん中にいるイムサ軍にはそれができない。

そんなイムサ軍の中でもネオットス隊は最も過酷だった。戦争初日の昼間は造橋作業を行い日が暮れてからは戦争を行っていた。簡単な話、丸一日寝ていない上に働きづくめだったことになる。

ネオットスたちは空っぽの腹をさすりながら森の中を歩いた。「潮の川の水で良いから飲みたい」と誰かが言くと、次々にあれが欲しい、これがしたいの談話が始まった。

「ちよつと待て」ネオットスが何かの気配に気がついて兵士たちを制した。兵士たちはおどおどしながら辺りをきよるきよるし、耳をすませる。ざざざ、ざざざという草をかき分ける音が聞こえてきた。皆は腰の剣に手をあてる。息を止めて、次いかなることが起こっても対処できるように神経を張り巡らせる。すぐ横の草むらがガサリとなった。

「おれだ」草むらから飛び出しながら男は言った。「おれはイムサ兵だ」男は素晴らしいながらネオットスの前に倒れ込んだ。それを皮

切りに次々に兵士が駆けこんでくる。ネオットスは隊員を見た。彼の目は仲間に、知っている者はいるか？ と訊いている。

「コイツは」と隊員の一人が駆けこんできた兵士の肩に手をかけていった。「おれの知り合いです」

「わかった……」ネオットスたちはほつと胸をなでおろし、ぜえぜえ言っている兵士たちに声をかけた。「サウルス兵に襲われたか？

お前たちは誰の隊だ？ サウルス兵はどこにいる？」

「アレクトール隊長が死んだ！」と兵士は叫んだ。「敵はだんだんに増えてきてる。こっちはだんだん、減ってきている。奴らはおれたちを広場に誘い出して、そこに配置している騎兵でイムサ兵を殺している」

「……死んだ、アレクトール隊長が。……いや、いや、もういい。

それよりもお前たち、サウルスのギャロップ將軍を見なかったか？」ネオットスは心臓を掴まれたかのような衝撃を受けながら、いつそう敵将を憎悪しながら質問した。「いや、シャンティ王子でもいい。どっちでもいい、見かけなかったか？」

「シャンティ王子なら……そんなことを聞いてどうするつもりだ」「殺してやる。サウルスの野郎共をぶち殺してやる。さあ」ネオットスは勢い余って兵士の胸倉をつかみあげながら叫んだ。「シャンティの居場所をいうんだ！」

「……広場だ」兵士は洪々と言った。「奴は広場の騎兵隊を率いている。……おい、あんた、隊長のネオットスだろ？ 行くのか？ 広場に」

「行くのさ」ネオットスは立ち上がりながら兵士を見た。「お前たちはどうする？ ふん、まあ、ついてこないにしてもいずれは死ぬことになるがな」

隊員たちはしょうがない、というように首を縦に振った。けれども彼らの眼光には、そんな諦めに似た感情は宿っていなかった。誰もが、命を賭して敵に一矢報いることに心底納得しているような奇妙な感情を抱いていた。

「おれたちも……行く」と逃げてきた男たちはがくがくの足で立ち上がる。彼らは恐怖におびえることを恥じる様に震える足をバンバン叩きまくって、何とか震えを抑え込んだ。

彼らは三十一人になった。ネオットスたちは逃げてきた兵士を先導させて広場に向かって歩き出した。兵士の一人が歩いている最中に空を見上げて「明けていく」と悲観的な感じに呟いた。

「本当だ、明けていく」ネオットスは感慨深げに言う。「フクロウの支配する時間が……」

夜が明けた。やや雲の多い空が広がっていた。けれども、雲の間隙間から日の光は世界に流れ込み、行きわたる。世界に流れ込んだ陽光は、空も大地も森の中も彼の顔も照らし出す。彼はその光に言いしれぬ不安を抱いた。

「いたぞ」の声がどこからか響いた。ネオットスたちは顔を見合わせ、誰もがおれは言っていない、と首を振った。

「敵襲だ、走れ」ネオットスは訳も分からず怒鳴った。「広場だ、広場に走れ。シャンティの首をとるんだ！」

先頭に行く兵士はその命令を了解して、そちらに向かって走り出した。ネオットスたちも彼について走る。最後尾を走っていた無精ひげの兵士が後ろを振り返り、自分たちの三十歩ほど後ろから騎兵歩兵入り混じった三十人ほどのサウルス兵が追いかけてくるのを見た。

無精ひげはすぐ前のいかり肩兵士の肩に手をかけた。いかり肩は振り返り、彼を見た。彼は親指で後ろを指示していた。いかり肩は彼の意図を理解し、無精ひげと共に立ち止ってサウルス兵を迎え撃つ準備をした。

彼らは逃げていくネオットスたちをちらりと見てみた。彼らの、後ろから二番目の男がちらりと二人の方を見て、すぐにネオットスに彼らのことを報告した。ネオットスも後ろ振り返り向いて何事かを叫んだ。

「何をいつてるのかわからん」

いかり肩は剣をヒュンヒュン振るいながら苦笑した。

「なあ、王子襲撃は成功すると思うか？」無精ひげが訊く。

「さあな、きつと失敗だろう」いかり肩は目前まで迫ったサウルス兵たちを相手取るために剣を構えた。「それでも、別にいいんじゃないのか。なんてったって、それがモーキリニアの戦士らしい選択さ」

無精ひげといかり肩はサウルス兵の中から騎兵が突出してくるのを見て、その顔がどこかで見たことがあるのに気がついて呟いた。

「ギャロップ」二人はほとんど同時に言った。

「そつだ」愛馬とは違う馬に乗るギャロップは怒りの形相で声を返した。「おれだ」

ギャロップは槍を投げていかり肩の肩を貫き、腰から剣を拭いて無精ひげの首を刈った。次の瞬間、馬を操って、倒れ込んだいかり肩の頭を踏み砕かせた。頭蓋骨の割れるバキバキという音が聞こえ、馬は頭を踏んだ感触を気持ち悪がって暴れ出したがギャロップはすぐにそれを抑え込んで、嘆息した。

「三十人ほど逃げたが……」ギャロップはにやっとしながら逃げるネオットスたちを見ていた。「あちらは広場か」

全てが終わった頃になってギャロップの率いていた隊が彼のもとに駆け付けた。

「將軍、奴ら、逃げましたが」

カバルス兵が訊いた。

「お前たちのせいだな」ギャロップは相手の無能を蔑むかのように言った。「それでも、あつちは広場側だ。となると、奴らもあと少しの命だ。相手にしなくてもいい。それよりもおれたちは森の中で敵将エムノンを探す」

隊員たちは短く返事をすると踵を返して、森の奥深くに歩きだした。

エムノンはいつの間にか五十人に膨らんだ隊員と共に森の中を歩

いていた。彼は仲間とはぐれたり、逃げ出してきた兵士たちを加えながら隊員を増やしていた。それで今はどこかの木の上に陣取っているストルーツス隊を探していた。

「將軍」とエムノンが歩いていると、木の上から声が聞こえた。エムノンが上を見上げて見るとそこにはストルーツスがいた。「どうしてそんなに兵士を連れてくる？」

「広場に向かうぞ」エムノンは間髪いれずに返した。「ネオットスがシャンティを狙って広場に向かった」

「ネオットスを助けるのか？」ストルーツスが木から降りはじめると、他の隊員も同様に木から降りはじめた。「手伝うぞ」

「助けると言うか……そう、加勢だ。奴は三十人連れているそうだが、それでは広場の騎兵は倒せないだろう。まあ、見てないから詳しくはわからないが」

「よし、行こう」ストルーツスが隊員たちの方を見ると、隊員は皆うんと頷いた。「ネオットスを逃がすんだ」

エムノンは元上司の言葉に呆れながら返した。

「逃がす？ 馬鹿なことを……逃げ道なんかもうないぜ」

「ならば、生かすだ。將軍、おれたちは奴を生かさなきゃならないストルーツスがエムノンを見つめると、エムノンは先を急ぐように歩きだした。「奴は悪くない戦士だ。今回のことであるんな経験も積めた。得難い経験をな……だからこそ、生かさなきゃならん。そうだろう、エムノン」

「知るか、さつさと歩け」エムノンは彼の顔も見ずに返す。ストルーツスたちは彼に続いて歩き始めた。「それと」エムノンはやはり、彼の顔を見ずに言う。「奴を生かすのなら、お前も生きる。隊長」

「おいおいおい、なんでだ？ おれのようなおっさんと共に死ぬのは嫌ってか？ 長年の戦友にひどいことを言うじゃないか」

ストルーツスは彼のすぐ横を目指しながら歩調を早めた。

「違う」エムノンのその時の顔は、ストルーツスからは見えなかった。だから、彼がどんな顔で、どんな心情で続く言葉を言ったのか

はストルーツスにはわからなかった。「奴はまだ不足だ、将として……。だから、教師が必要になる」

「……それなら」ストルーツスは彼の言葉の意味を理解して、静かに言った。「お前がその役を引き受ければ良い。大体、お前は昔から彼を従えて、彼にいろいろ教えていたんだらう？」

「そうさ」エムノンは音を全く立てずに歩く。「夜目術以外のおれの全てはもう、奴に教え切っている。だからこそだ」

ふん、なんともまあ、不器用な男だ。ストルーツスは心中で腹を抱えて笑いながら思った。頼んでいる、コイツはあんな言葉づかいをしているが、おれに頼んでいるぞ。コイツから頼み事をされるなんて思いもしなかった。ふん、しかも、己に關すること以外のことを頼まれるなんてな。コイツは……本当に、最後の最後で面白い一面を見せてくれる。そんな風に言われたら断りようがないじゃないか。ああ、糞。あのひよっこはコイツも認めた男か、育ててみてえが……それはおれの采配じゃあどうにもならない。でも、もしそれができるなら……。糞、ネオットスよ、ひよっこよ。生きているよ、必ず生き抜いているんだぞ。

「前方」エムノンが囁いた。七十人ほどの小部隊が全員前方を見ている。五十人のサウルス兵が遠くを歩いていた。おそらく、エムノンたちはすぐに発見される。ならば先手をとらねばならない。兵士たちは剣を抜いた。「広がりながら走れ、一人も逃がすなよ、殲滅しろよ」

エムノンは剣を挙げ、ピタリと止め、ふつと下げた。七十人のイムサ兵が一齐に走り出した。エムノンもストルーツスも走りだしている。

一番早い男はスタートから十秒ほどで敵陣に突入すると同時にそれを駆け抜けた。彼は逃げるサウルス兵たちを殲滅するつもりのもうだ。

奇襲に混乱したサウルス兵は、しかし、すぐさま隊伍を整えたが、単体の武芸で勝り、数でも勝っているモーキリニアの戦士たちはた

ちまちサウルス兵の密集隊形を押し崩し、隙間から彼らの中に進入して彼らを蹴散らした。

三分後、サウルス兵は殲滅されていた。エムノンたちは、逃げた者はいないと思っていたし、もしいたとしても、もうどうでもよかった。「行くぞ」と短くエムノンは言った。誰が死んだかの確認も取らずに彼らは歩行を再開した。

彼らはその後も小部隊との戦闘を一回だけして、やがて広場の騒ぎが聞こえる所まで来ていた。エムノンは軍同士が争いあっている時の怒鳴り合いを耳にすると同時にイムサ兵を見て、彼らに「突っ切るぞ、気合入れる」といった。

イムサ兵は口を真一文字に締めて、眉間にしわを寄せて、それを彼の言葉への返事とした。エムノンはうんと頷いた。

「走れ！」エムノンは剣を頭上高く掲げながら、すでにもう何歩も走っている状態でそう叫んだ。イムサ兵たちは將軍に続けとどんどんと駆けだす。マラソンの集団スタートのようなやけに綺麗なフォームのイムサ兵たちが、広場を囲むサウルス兵たちの間を切り裂いて広場の中に入り込み、中で未完成な半球状の盾の壁を作っているネオットスたちに走り寄った。

「ネオットス」

エムノンが声をかけると盾の壁に隙間ができ、そこからぎよろりとした目が彼を見つめた。

「將軍？　なんでここに？」

ネオットスの声だった。すぐに盾の壁は開き、中からネオットスたちが出てきた。彼は状況が理解できない、と思いながらも將軍たちを引き入れて、新しく盾の壁を構築し始める。シャンティたちはいきなり起こったその光景を不思議そうに見ていた。

「ネオットス」薄暗い半球状の盾の壁の中でエムノンが言った。「今回はここまでだ」

「……では、退却するのでしょうか」ネオットスは率直に訊いた。「作戦は？」

「作戦なんてない……しかも、逃げるのはお前だ、ネオットス」エムノンがそういうと、ネオットスは信じられないと言う風に身を前に突き出した。「おれは最後にシャンティと刺し違える。つまりはまあ……ギャロップはお前のために取っておいてやるってことだ」

「反対です、將軍」ネオットスが姿勢をただして言う。「おれもモークリニアの戦士です。ならば戦さからは逃げません」

「ネオットス、戦さは終わったも同じだ。もう、どうやったっておれたちの負けだ。だから、逃げろっつってんだ」ネオットスは尊敬する將軍の口からその言葉を聞いた瞬間、ハツとしたような表情になって彼を睨んだ。エムノンが優しい眼差しで、愛する弟子を見つめた。「なに？ さっきと言っていることが違うだって？ おいおい、凝り固まった考えに支配されて合理性を失っては良い戦士とは言えないな。こう言おうか？ ネオットス、逃げるのもありだ。おれは今まで逃げる必要性がなかったから逃げなかつただけだ。逃げる必要がない状況だったから、おれは逃げないでいられたんだ。しかし……今回は違うようだ」

「ならばやはり、逃げるのはあなたです」

「合理的に考えてそれは無いさ。だって、おれは敵將ギャロップとの知恵比べに負けたんだからな。ならば……次はお前の番ということにならないか」

「將軍が勝てなかつた相手におれが勝てるとは思えません」ネオットスはまた泣き出しそうになりながら反論する。「將軍！ 生きてください！」

「馬鹿野郎！」エムノンは、まるで聞分けの悪い息子に起こるように怒鳴り散らした。「おれが勝てなかつた相手に、お前みたいなひよっこが勝てるわけねえだろうが！ 当たり前だ、そりゃそうだ！ それでも、それは今現在の實力での話にすぎない。お前はこれくらいいくらでも時間があるじゃねえか。イムサに戻り、軍に戻り、戦いを重ね、経験を積み、戦いの方法を学び……ネオットス、お前はまだ伸びるぜ。きつと、おれなんかよりも、臆病者なんて言わ

れているおれなんかよりももっと、正統派の、良い將軍になれる。ふん、そうなつたら奴を殺せ。亡国の幻將ギャロップを討ちとれ、そしてサウルス王もな」

「なんであなたはいつもそうやって……」勝手なんだ、と彼は涙を流しながら思った。

「ストルーツス」エムノンはネオットスから目をそらしながら、盾の壁の兵士たちを指揮していた彼に話しかける。「話をついた。後は頼むぜ」

「了解、將軍」ストルーツスが頷く。

「それじゃあ、野郎共。これから作戦を発表しよう」

エムノンが盾の壁を形成するモーキリニアの戦士たちに話しかける。彼らは待つてました、と言うような表情を將軍に向けながら次の言葉を待つていた。

半球状の盾の壁を形成するイムサ軍にどう対処しようかとシャンティはそれを睨みながら思った。先にいたネオットス隊にエムノン隊が合流してから、すでに三分たっている。

広場には道路が二つあり、森の外に続く道にはウイスカが率いる騎兵隊がいる。潮の川に通じる道にはシャンティとシェイバスの率いる騎兵隊がいた。さらに、多くの歩兵たちが広場を囲うようにパトロールしており、ときどき中央のイムサ兵に矢がいられたりした。

「王子」シェイバスが悩むシャンティに声をかけた。「このまま親父殿たちと息を合わせて騎兵突撃すればすぐに蹴散らせるとは思いますが？」

「かもね。でも、あのように堅固な壁にぶつかって行くとなると、こちらの損害も被ることになる。今の状況で降伏勧告を出したら、彼らも応じるかもしれないし」シャンティはやはり、相手を生かすことに諦めがついていないようだった。「いや、早く決着をつけなければならぬのはわかっているが……」

「王子、おれたちが行きましようか？」近くにいたビッグフトス隊のフートスが言った。「相手は百ほどでしょう？ おれらビッグフトス百人隊にいくらかの味方をつけてくれたら、きつと騎兵突撃よりは損害も受けなくて済むと思いますぜ」

「……一つ条件がある。攻撃を開始する前に降伏勧告と説得を行ってくれ」

「まったく……お優しいね、戦争中だと言っに。しかし、オーケイ。爺さん、そういうことだ。どれくらい必要になる」

フートスがビッグフトスの方を見た。

「その必要はない」ビッグフトスは隻腕に持ったごんぶとの剣で敵方を指示した。「動き出したぞ」

サウルス兵たちがざわめきだす。広場中央のイムサ兵たちを見てみれば、彼らはシャンティたちの騎兵隊を正面にして隊伍を組み始めていた。

三十二人を正面に八列で配置。両翼に十人を二列ずつで配置、彼らは軽装である。残りを正面後ろの右翼よりに配置、そこにエムノンはいた。

「戦力を片側に偏らせた陣形、斜線陣」シャンティが言った。この時代の基本的な陣形はこれであるとカバルス戦役の説明の時に説明しているが、この斜線陣は兵力劣勢の時に使う陣形であるともされている。この陣形を敷けば基本的に片翼包囲をとることが多いが。

「この兵力差ではまず無駄だ」

「王子、きますよ」とシエイバスが言った。彼は近衛兵団に声をかける。「迎え撃つ準備をしろ、こちらから見て左翼に敵主力がいる。それを倒せば我々の勝ちだ」

「何が目的だ？」とシャンティは怪しがる。シエイバスがまた彼に声をかける。「シエイバス、わかっている。わかっているが……糞、迎撃態勢！ 騎兵は向かってくる者をそのまま突き破れ。両翼の歩兵は敵が逃げないように囲め。それ、突撃！」

両軍が一斉に突撃を開始する。向こう側の、ウイス力率いる騎兵

隊も敵へ背撃するべく突撃を開始した。

交戦開始直後に敵の左翼にいた二十人が森の中に向かってそれる。広場の周りにいた兵士たちはそれを逃がさないように密集隊形をとって彼らを迎え撃とうとしたが、彼らは密集隊形が完成する前に敵を突き破って森の中に逃走する。「早ええ」兵士の一人がそれを驚嘆の様子で見る。「何している、早く追え」と隊長格の男がすぐさま追いかけていく。兵士たちもそれに続く。

「敵の一隊が森の中に逃走したようです」シェイバスがシャンティに報告する。シャンティの率いる騎兵隊は、盾を構えたイムサ兵にぶつかつた後、すぐに槍を捨て、彼らと剣を討ち交わしている。意外にも歩兵だけしかいないのにイムサ兵はわずかに騎兵隊を押し込んでいる。「糞、親父め。背撃はまだか？」

「無理だ」シャンティは、衝突力と突撃力を失った騎兵隊の間に入り込んでいるイムサ歩兵たちを見ながら言った。これでは新たに騎兵が来ても彼らに近づけもしない。「シェイバス！ 気を付ける。彼らはすぐに来るぞ！」

イムサ兵は騎兵の間をすすると分け入りながら、同時に手短な兵士や馬を傷つけながら一斉にシャンティに向かって走って行く。シェイバスはぞぞぞと冷気が頭に這い上がってくるのを感じながら「王子を守れ、王子を守れ」と叫んだ。

「ビッグトス歩兵隊、王子を守れ」

敵右翼をほとんど殲滅したビッグトスが味方の騎兵隊の中に入つてイムサ兵と剣を打ち合わせる。騎兵たちも馬の上から剣を振り下ろしたり、馬を下りて迎撃したりした。

「皆、彼らの目的はぼく一人だ」圧倒的兵力差から、イムサ兵の目的がサウルス兵の殲滅でもなく、逃げることもないことはシャンティにもすでにわかつていた。だから、敵兵がサウルスの騎兵の攻撃力を打ち消すと己の身の危険も顧みずに瞬時に攻撃へ移つたのもたいして驚かなかつた。しかし、そうなると……。森の中に逃げた隊が気になる」

森の中に逃げたイムサの左翼は森の中を駆けていた。もはや、足は棒のようになっていたが、それでも彼らは生き延びることだけを考えて逃げた。そう、彼らはシャンティを襲うために迂回した兵でもなく、ただ自国を目指して退却する敗残兵にしか過ぎない。

「ストルーツ隊長」ネオットスが後ろをちらりと見てから言った。「まだ敵は追ってきています。どうするんですか？」

「このまま逃げろ、逃げろ逃げろ」ストルーツは策なんてないことを暗に言いながら走った。「いいか、誰も捨て肝になんぞせんからな。進んでそうなるうともするなよ」

サウルス兵は何かを後ろで叫んでいる。ストルーツが何だろうか、と思ったと同時に木の上から人間が落ちてきた。イムサ兵は急ブレーキをかけて立ち止る。目の前では次々にサウルス兵が着地している。ストルーツがとっていた戦法をサウルスもとっていたのだ。

「行くぞ」

ストルーツは剣を抜くと同時に敵に斬りかかり、足を払い、次の敵に突進し、逃げ道を作る。ネオットスたちも敵と数回打ち合った後は、もう彼らには目もくれずに逃げだした。

急に風が吹いて来て、潮の川の磯の臭いが逃亡兵の鼻についた。彼らはそろそろ潮の川だろうか、と思いながら走り続けた。途端、ネオットスが倒れ込んだ。

「ネオットス」ストルーツが逃げるのを止めて、ネオットスに駆けよる。ストルーツはネオットスのふくらはぎに矢が突き刺さっているのを見た。突き抜けているのだからおそらく、矢は骨を砕いているはずである。他の兵士たちも立ち止まる。「お前たちは逃げる」

ストルーツがすごい剣幕でそういうと、彼らはうんと頷いて逃げるのを再開した。その間もネオットスは苦しそうに呻いていた。ネオットスは手を傷の方にやって、生熱いぬるりとした血を手にはべ

つとりと付けて、それを自分の顔の前に持って行った。

「隊長……ストルーツ隊長。どうやらおれはここまでのようです」
ネオットスが痛みに耐えるようにぎりぎり歯を噛みしめながら言った。「おれにはやはり、將軍のようになる運命は無かったようです。だから、隊長、あなたは逃げてください」

ストルーツは向こうから数十人のサウルス兵が向かってくるのを見た。次に汗と血をたらたら流すネオットスを見た。最後に、エムノンの頼みごとを思い出す。

「ええい、ままよ」

彼は決断したように剣を遠くに放り去り、続いてネオットスの刀剣も遠くに放った。ネオットスは驚いたようにストルーツスを見る。「降伏だ」ストルーツスは何も武器は持っていないと言うように手をひらひらさせ、走ってくるサウルス兵にそう言った。「おれたちはお前たちの捕虜になる」

「なにが捕虜だ！」

と兵士の一人が剣を振り上げながら向かってくる。二人は死を覚悟したが、結局その剣は振り下ろされることは無かった。剣を振り上げた兵士は数人のサウルス兵によって羽交い絞めにされていた。「すまない、捕虜か。わかった」隊長のような佇まいの男が縄を取り出しながら言った。「負傷者の治療もしますので……」

「ありがとう」

とストルーツスは手を後ろで組まされ、縛られているときに言った。

「いえ、命令ですので」男は泰然として言った。

「シャンティ王子のか？」とストルーツスが思っていると、向こうで怒鳴り声がしていた。ストルーツスと男が何事かと見てみると、地面に寝転ばされたネオットスが叫んでいた。兵士の応急処置を彼が嫌がっているようだった。

「ネオットス！」

ストルーツスが叱責するように怒鳴った。するとネオットスはす

ぐに叫ぶのを止めて、地面に全身を預ける様にしたあと、動かなくなつた。やがて、小さな鳴き声が聞こえてきた。

よく泣く男だ、とストルーツスは呆れていたが、同時に彼の心情が痛いほどわかつた。自分たちの姿と戦場で戦っている將軍たちの姿を比べてみると、自分たちのなんともみすばらしいことだろうか。そして、この深い嫌悪と憎悪は、誰へのそれだろうか。サウルスの將軍への？ それともシャンティ王子への？ イムサの文官への？ バテル・オルニスへの？ 相手の上を行けなかつた將軍への？ それとも、何も果たせなかつた自分への？

彼は潤んだ目で見上げた。陽光の一端が葉と葉の間から注ぎ込んできて、目の中を刺激した。周りからは、全てが終わつたかのような、サウルス兵たちの和やかな会話が聞こえてきた。

「しかし……ああ、これで……」ストルーツスは首を何度もふつて泣き出したいのを堪える様に唇をかんだ。そうだ、この戦争は終わったのだ。「おれたちは、負けたのだ」

「恐ろしい相手だつた」シャンティはルルディファイロから降りて、血みどろで地に伏したエムノンを見下げながら言つた。「本当に……しかし、なぜ、彼はここまでしなればならなかつたんだろうか、ギャロップ？」

「さあな」ギャロップも馬から降りて、彼を見下げながら言つた。「皆目見当もつかん」

「そうかな」シャンティはギャロップの方を見ながら言つた。「同じ状況ならば、きっと君も同じことをしたんじゃないだろうか」

「同じ状況？」ギャロップは点呼をとっている兵隊たちを、つまらなそうに見ながら言う。「同じ状況なんてありはしない。おれはイムサに生まれなかつたし、奴は馬に乗っていない」

「よくわからないけれども……そう言われたらそうだ」

と彼はユルシュのことを思い出しながら言い、そして近くにいた歩兵に手伝ってもらつてルルディファイロに乗り上げる。

騎兵隊が無力化されたあの後、エムノンたちは少数の歩兵でシャンティに迫った。シャンティやシェイバスはしまったと思いつつも、彼らの勢いを止めることは何もできなかった。エムノンは、しかし、シャンティが目前に迫ったのに、ギャロツプが広場に現れたのを見るや否や、方向転換してギャロツプの方に駆けだした。それを見たサウルス兵たちが槍でぶすぶすと彼の体突き刺したが彼は止まらなかった。

彼はギャロツプの十歩ほど前で思い切り振りかぶって、剣を投げた。その剣はギャロツプに向かって一直線に飛んで行ったが、ギャロツプはさっとそれをかわし、逆に自分の手に持っている突撃用の槍を彼に投げた。それは敵将の体を貫いて、地面に深々と突き刺さった。

イムサ軍の將軍エムノンはにやにやと笑いながら絶命したが、ギャロツプが最後に投げた槍の影響で倒れ込むことはできず、地面に膝をついた形で固まっていた。

ギャロツプは馬を歩かせて、その槍を抜いた。彼の体は音を立てて地面に伏した。同時に、イムサ兵たちは諸手をあげながら降伏を請い、森の中でゲリラと交戦していた兵士たちが敵兵を見かけなくなったことを伝えると、戦争はひとまず終結した。

そして今に至る。

兵数を数えるための点呼はすぐに終わった。戦争に参加したのは国軍一万、自警軍八千であり、今回の戦闘の死者は国軍八百、自警軍千七百であった。損害のほとんどは戦争後半のゲリラ掃討戦でのものとされ、橋の上での戦闘は戦闘時間が長かったわりに実際に戦っている人数が少なかったためそれほど死者はでなかった。

「シャンティ」ギャロツプが整然と居並ぶサウルス兵たちの前に立ちながら言う。「自警軍はどんなことがあってもその地域から出すことはできないのか？」

「それはつまり、敵地へ攻め込みたいんだけど自警軍も使えないかな、ということだね？」シャンティは苦笑いしながら答える。「残

念だけどそれは無理だよ。もともとぼくたちにも侵略戦争は許されていない」

「違うな、これは防衛のために必要なことだ」

「それでもだ。自警軍は地域から出せない」シャンティは戒める様に言う。「まあ、ぼくたちだけなら何とか言い訳も立つだろうけれど……」

「ふむ……九千弱か」ギャロップは顎を撫でながら国軍の方を見る。彼らはまだ戦えそうに見える。「よし、行こう。とりあえず、敵の森を支配して敵要塞の一つでも手に入れたいものだ」

「それでどうするんだい？」シャンティはシエイバスとウイスカを呼び寄せるように近くの者にいいながら返した。「やはり、それを持って交渉かい？」

「当たり前だ」ギャロップは嫌な笑みをしながら言った。「おれの愛馬の値段くらいは、ふんだくってやらにゃあ、気が済まん」

19・潮の川の戦い 後篇 (後書き)

絵も文章もボロボロだ。

20・敗北者、勝利者

サウルス軍は食事と休憩をとった後に橋を渡ってイムサ領に侵攻した。敵地の森を素通りし、近くの村落を襲撃すると糧秣をいくらか得た。次の日の夕方から近くの要塞都市の攻城戦を始め二日後に陥落せしめる。

彼らはそこに居座ることに決めた。ギャロツプはイムサ国の使節が来るまでの間に、潮の川周辺のイムサ側の森に手を加え始めた。とはいっても、戦争が終わってすぐは潮の川に溜まった死体の処理で全く森には手を加えられなかったが。

春の終わり。イムサの文官ブシッタコスがサウルス軍のいる要塞都市にやってきた。シャンティはすぐに講和の意があることを伝え、さらにイムサ国からの賠償金の話や土地・捕虜の返還の話をした。

「講和がならない場合、私たちは今回得た領地を維持するために追加の軍を王都へ要請せねばなりません。けれども、それはこちらとしても費用がかかるので避けたいところなのです」

「それでは」桃色の頬のブシッタコスが柔和な感じで返す。「御引きいただきたいところです。実は私たちもあなたたちとの戦いに備えて軍を整えているところなのです。が……つい最近一万もの兵を失ったばかりですから」

「大使殿、もしもの話ですよ？ ええ、例え話です。もし、この講和がならない場合、しかもあなたたちが追加の軍を差し向けてきた場合、私たちはもちろんその迎撃行動に出なければなりません」シャンティもいつものように、温和な風に返す。「だけど、それだけじゃない。その末にこれ以上の侵攻をする可能性だってあるんです。どうせならイムサ国を落としてしまった方がいいのではないかと考える者が思った以上にいますゆえ」

「……」ブシッタコスは自分の末路の可能性を頭に浮かべる。もし、戦えば負けるかもしれない。しかし戦わずに賠償金を払えば、イム

サ国の金は減るが自分が甘い蜜を吸っている王宮がなくなるわけではない。むしろ、金は平民の血税から出ており、自分たちにはそれほど影響は無いのだ。彼は国の確実な存続と自分の享楽の延長を望んだ。「わかりました。王を説得してみましよう」

「ああ、それと」シャンティは最後におかしなことをつけたした。「賠償金の一つとして大量の木材を貰いたいのです。なに、その切り出しは私たちが引き受けますので」

一週間ほど後、講和がなつたとブシツタコスから報告があつた。

サウルス軍はさつそく木材の調達を始めた。木材は先より手を加えていた潮の川のイムサ側の森の木々である。彼らは森を外側からちよつとずつ刈りとつていき、根を掘り起こした。そうやって森全体を浅くすることで、次に侵攻する時に敵に長時間のゲリラ戦略をとられないようにした。でも全てを切りとつたり、過剰に切りとつたりしてしまつたら、「イムサに失うものはねえ！」という感じにサウルス側の森を燃やされる可能性もあつたので、そこは注意しながら計画的に木を切りだしていった。計画を立てる際には敵の残した餅の地図を使用した。

イムサ国は次々に金属類や工芸品、食料や家畜、奴隷や女を持ってきた。サウルス軍はそれを潮の川に駐屯している自警軍に渡して、バケツリレーのような感じで自国に運んだ。

支払いと同時にサウルス軍は捕虜の返還を行った。捕虜はサウルス国に捉えられていたのだが、返還の時にシャンティたちのいる要塞都市に運ばれてきてそこでイムサ軍に渡された。

実はこの時、シャンティは捕虜のうちの数人と会っている。上級の兵士、つまりは隊長格、それとその逆の最下級の兵士の数人と話しをした。

最下級の兵士との会話に得るものはなかった。彼らはどんな理由でイムサがサウルスを襲つたのかも知らないし、自分たちがどんな作戦の上で動いていたのかも知らなかったらしい。話を聞いた数人の者は皆、口を揃えて「モーキリニアの戦士として戦つた」と言

った。

『それだけで戦える人間もいるのだ。いや、彼らにはそれこそが重要なのだ。』と彼は日記に書いている。

隊長格の者、基本的にはストルーツとネオツトスしかいなかったが、それ以外にも兵士たちのまとめ役をしたことのある者にも話しを聞いた。まとめ役はそれなりに自分たちのしていたことを理解しているようだった。彼らも下級の兵士同様、疑問や不安などほとんど抱かず、ただ黙々と戦争それをこなしていたと言う。

ストルーツとの会話は奇妙なものだった。

「あなたは優しい方ですね」

とストルーツは両手両足を椅子に縛り付けられている状態であった。彼は大体シャンティを褒めるようなことしか言わなかった。その言葉には感情はこもっておらず、シャンティは彼の褒め言葉を聞いても嬉しいとは思わなかった。

ストルーツは最初から空虚な感じを醸かもしている男だった。他の捕虜に聞いたところによると、エムノンが死んだのを聞いた際になりがっくりきていたとのことだった。シャンティは一度エムノンの話を切り出してみた。

「あなたの將軍は私の目視できる所で死にました」

「將軍の剣はどこまであなたに切迫しましたか？」

ストルーツは少し声色を変えながら、感情をこめて問う。

「彼の剣はきつと私に届いていた。でも、広場にギャロップが現れたのを見ると、彼は私のことなど眼中になかったかのようにギャロップの所へ去ってしまった」

「……」ストルーツはあんぐりとして、その後、呆れたように嘆息し、最後に涙をあふれさせながら笑いだした。「なんだあいつ。ネオツトスに、お前が倒せと言いなから、結局自分で倒しに言ってるじゃないか。なんだ、ははは、ははは。お前は最後までそんなのだな、ははは、ははは」

いきなり彼が笑いだしたのを見て、近くにいたシェイバスたちは

すぐに彼を取り押さえようとしたが、シャンティが止めた。するとストルトスは笑うのを止め、虚ろな目で、しかし、感情的に「やはり、優しいのですね」と言った。

ネオットスは彼に比べて非常に感情的だった。

ネオットスは小声でぶつぶつと、恨み事でも呟くかのように話した。その上、しきりにギャロップのことについて尋ねた。

「なぜ、そんなに我らの將軍のことを気にするのかね？」

「お前たちの將軍はおれたちの將軍を出し抜いた。つまりは、將軍の上をいったということだ。聞いたぜ、基本的な作戦のほかにも色々和小賢しい策も講じてたらしいじゃないか」ネオットスは生命の根源から出ているような、そんな光を目に宿しながら、シャンティの質問に答えた。「例えばあれだ……敵を完全には囲み切らない作戦」

「黄金の橋作戦か……」

黄金の橋。ウアズマの古い兵学書で言えば 囲師は欠く である。包囲戦は、完全に完璧な包囲を敵に施すのではなく、包囲の中に隙を作っておく方が良いといわれている。

例えば、包囲に隙を作っておくと、敵はそこに向かって逃げることに必死になる。その際には逃げるのに邪魔な武器などは投げ捨てることが多いので、包囲軍はそこを突くことによって自軍の損害を少なくすることができるのである。

「ふん……ともかく、今回は完全な負けだ」ネオットスはニヤニヤする。「しかし、おれは將軍の仇をとる。暗殺やそんなもので殺すんじゃない。戦争で、奴に勝って……」

「……戦争とは君たちにとってなんだい？」

「なに、お前にとっての戦争と同じさ」ネオットスは言った。「何かを得るためにすることさ」

「何かを得る……」戦争の最中、シャンティは何かを守るために戦争が起こるのだと考えた。だが、今日の前にいる同じ年頃の青年は、何かを得るために戦争をするのだと言った。「では、君たちは何を

得たかったのですか？」そして、ぼくたちは何を得たかったのか。

「おれたち？ とは、誰のことさ」ネオットスはふい、とそっぽを向きながら言う。「イムサ王か、エムノン將軍か、隊長たちか、下っ端の兵士か、おれか……それとも、戦争に来ていないイムサ国民全員をも含めているのか？」

「君の思う、君たち、さ」

「ふん……それならば、お前の質問は、そりゃ、愚問だぜ」ネオットスは空っぽの笑顔を見せた。「おれたちは戦争それ自体と、そこから生まれる無二の享樂が欲しかっただけなのさ」

シャンティは、ネオットスの瞳に猛禽と同じ鋭い光が宿っているのを見た。シャンティは唾を呑もうとしたが、彼の口の中はいつの間にかからからに乾いていた。その後のネオットスは厭世感や世紀末感を全身に漂わせながら小さくぶつぶつと唸るように質問に答えるだけだった。

一番負傷の度合いがひどかった彼との会話を最後にシャンティと捕虜の会話は終わる。

捕虜の返還が終わる頃合いには森の整備も終了していた。シャンティたちはイムサ国が背撃してこないかと注意しつつ敵地要塞都市から引き揚げた。

潮の川の森を通り、潮の川を通った時にイムサ軍が建てた橋を粉々に破壊して、要塞都市ハドロンまで引き上げ、そこでやっと一息ついた。

ハドロンはすでに以前の活気を取り戻していた。残っていた兵士から聞いた話によると、潮の川の戦争で勝利したのが都市に届いたと同時に市民たちが戻り始めたのだそうだ。

兵士たちはそこで数日間休んだ。彼らは住民にほとんど英雄のように扱われて、戦闘に参加していない、従軍していただけの書記官でさえも、酒場での食い放題飲み放題はざらだった。

彼らは十分に休んだ所で北都ウチノホークへ向けて旅立った。野

営や宿営を繰り返し、一週間かけてウチノホークに帰還した。もちろん花吹雪で迎えられた。お金のない市民たちも初夏の瑞々しい葉っぱをばらばらと二階や三階から振りまいていた。

兵士たちは満面の笑みで彼らに手を振って、凱旋の行進に駆けつけた家族たちと共にしゃぎまわった。

シャンティたちは兵舎にて一時的に軍を開放して、休養をとるように命じた。二千人ほどは緊急時の時のために残しておいたので、そちらからは不満が出た。シャンティが焼き立てパンやらグナトウス産葡萄酒やら雉きじやら……などなどの格段にうまい飯を振舞うと、ぶーたれていた兵士はころりと表情を変え、飯を食って兵役についた。

シャンティはすぐにでもエレと過ごしたかったが、戦後の処理が山のように残っていた。なので彼は政務室にこもってせつせと書類の山に向かっていた。

夜更けになるとシャンティは灯籠とうろうを友にしてまだ書類を読んだり、字を書いたりしていた。するとドアをトントンとノックする音が聞こえてきた。夏なのでドアは開けているのに、とシャンティは思いながら書類からドアの方に目を移した。

「暇そうじゃないか」

ギャロップは飲み物を入れる容器を持ちながら、開いているドアをもう一度叩いた。

「暇だつて？ 君の目は夜には弱いらしい」シャンティが椅子を差し出しながら言った。「大体、君こそこんなところで油を売っているのかい？ フェミナの所へは行かなくても？」

「いいわけだよ、シャンティ君。なぜなら、おれは結婚していないからな。だから他の女と寝ても文句を言われる筋合いはないのさ」ギャロップはイスに座って、シャンティの机の上にコップを置きながら言った。彼はその中に何やら注ぎ込む。「ジューズだ。政務に差し支えない」

「ジューズという名の酒じゃないだろうね」シャンティは書類にこ

ぼしてしまわないように気をつけながらジュースを飲んだ。口の中に甘味と酸味が広がる。頭を熱くするアルコールは。「ない。うん、本当にジュースのようだね」

「書類の整理はどれくらい終わった？」ギャロップが手近にあった報告書を勝手に見る。「ふん、これはシユラク王に出す書簡か。：

…へえ、賠償金は思ったよりも大したことないな」

「イムサに入ってから私の私的な略奪を禁じたからね」シャンティは紙の上にペンを走らせる。「手に入った物資なんかは出来るだけ兵士たちに分けてあげたいんだ」

「今回は防衛戦争だったから手に入ったものを分け与えることもないだろう？ いや、いい。お前のことだからどうせ……自国防衛の目的から来る行動でもお、敵地に侵攻したらあ、侵略戦争みたいなもんだよお、ふははー……とか言うんだろう？」

「前々から思っていたけれども、それはぼくじゃないよ。君の邪念で歪められたレジエム・シャンティだよ」シャンティが不機嫌そうな顔つきをする。「でもまあ、あの侵攻は兵士にとっては予想外のことだからね。彼らはあれをやることで命を削ったんだ。いや、死んだ者もいる。それ相応の対価を与えないと不満もでるさ」

「しかし、これからつまらなくなる」ギャロップは灯籠の火を見つめながら嘆息する。その息が火を消してしまいそうだった。「イムサもあの調子では次攻めてくるのはいつになることやらわからんし……やっぱり、あのまま敵地要塞都市に残っておいて敵国に攻めていった方が良かったんじゃないのかねーえ？」

「あの勢いに乗じてイムサ国を倒しても、その北には例の後継者の国があるんだ。そこから狙われた場合、モーキリニア地方は王都からも遠いし、それほど得るものがあるとも思えない」

「ならば、サウルス本国が行うであろう次の侵略戦争まで戦争はお預けか。もし、東や西への侵略戦争が起こればお前もそれに参加するんだろう？ その時はお前が軍集団（二万から三万）を率い、なおかつ將軍であるおれがそのうちの一個軍団（一万）を率いてもい

いわけだ」ギヤロツプはニヤニヤしながら目をつぶった。「次はどこになる？」

「次って、侵略戦争のこと？」

「それ以外に何がある」

「うーん……そうだねえ。さつきも言ったように、北はほとんど得るものがないからないだろうね。西への侵攻はあるかもしれない。でもそれは侵略戦争というよりも、サンジャヤへの報復戦争という意味合いで行われるだろう。というよりも、現時点ではこれが一番可能性が高いね。それでも、父上が最も望んでいるのは東、小ウアズマだろうねえ」

シャンティが壁に張りつけてあった地図を見た。

この時代の地図は東の国々の地図よりも大分発達している。それは、紀元前三百年から紀元百年の間にモーキリニア人の男たちが天体観測や歩幅での計算から精度の高い地図を作りだしたからだ。

モーキリニア人というのは戦士として名高いと共に、冒険者（もしくは放浪者）としても有名な人種である。各地の地図や遠くの国の見聞録は彼らによって著された物も多く、シャンティも子供の頃はそれらの本を読んで想いを馳せたものである。

で、そのモーキリニアの冒険者はモーキリニア地方や北の大国だけでなく、サウルス地方にもやってきて文化を伝えたり、各地を放浪したりした。

サウルス地方（当時はコミッセオ地方であるが）の地図は数人のモーキリニア人が完成させた。もつとも、ほぼ沿岸部分だけを歩いてサウルス地方の形を完成させただけである。それは本屋などで売られ、サウルスの民はその白地図を買って各地を回り、自分たちでそれに色々と書きこんでいって自分だけの地図を作り上げた。

シャンティはその地図を収集しており、十五歳の時に「異見異聞地図集」という本を書いている。これは彼が、古今の人々が作った独自の地図がそれぞれ全く異なる様相であることに興味を抱いたことから作られた。彼は色々な人の地図を集めて、それぞれにどうい

う違いがあるのか、どうしてこんな風な違いが生まれたのか、現実ではここには何があるのかを考え、書き、^{へんさん}編纂し、そして知り合いの本屋に頼んで出版した。

百年前にこの地方（まだコミツセオ地方）の人が書いた地図などでは、竜の鼻の穴の南西に竜が書かれており、彼はここで本当に竜を見たともを残している。

また、六十年前の人間はカンプトケファレでもじゃもじゃの体毛を生やした大男がいたと書いている。オカルトが好きな現代の学者はこの記事を女々しく見つけて、カンプトケファレ地方にビッグフツドがいるという仮説を立てている。

さて、また話しが横道にそれてしまった。

シャンティがペンの尻で頭をポリポリしながら次の戦場の話を続ける。

「小ウアズマの半分は偉大なる王に支配されていたからね。その分モーキリニア人も行き来しており、地図も十分にある。ぼくもそれを集めているんだけど……残念ながら王都ヒツパリオンの離宮に置いて来ているんだよね。君の暇つぶしのために取り寄せてみようか？」

「いやいや」ギャロップは首を振る。「百聞は一見に如かずってやつさ。いくら地図で見たとしても、実際に見れば違っていたりするし、情報量も違う。まあ、帰った際にはお前のコレクションを拝見させてもらうかもしれんがな」

「地図を信じていないならば君に見せてもしょうがないなあ。なぜって、小ウアズマの地図には伝説の怪物がずらずら居並んでいるからね。ぼくとしては、君にそっちへの対策も是非考えてもらいたいもんなんだけれども」シャンティが陽気にひひひと笑う。「はたして、ギャロップが一つ目の巨人に対してどんな作戦をとるのか……虎の体ほどのある大蟻の大群とどうやって戦うのか」

「おいおい、もしそれが本当なら、お前の親父は小ウアズマの部族じゃなくて、そいつらに負けたんじゃないのか」ギャロップも肩を

ゆすつて小さく笑う。「でも……そうか、東方の地図はそれなりにあるのか。ならば西の地図は？ サンジャヤの地図のことだが」

「そっちは君の方が詳しいんじゃないのかい。とはいっても、あの地方にはモーキリニア人はそれほど行っていないから良い地図はあまりないようだね」シャンティは机の上の山のような資料をガサガサと音をさせながら言う。「カバルス戦役の時には地図通りにならないことが多くて辟易したもんだよ。しかも、王都ヒツパリオンで売られている地図も同じようなもんだときたからね」

「カバルス人は山や森や星とかで自分の現在地を図るからな。よくよく考えてみると、おれも子供のころは地図というものをあんまり使用しなかった」この時代にはまだ方位磁針もなかった。「地図に触れ出したのは、各地の戦争に関する本を読み始めた時からだ」

「西と言えばジニーだけだね」シャンティが資料に目を落としながら言う。「向こうで悪戦苦戦しているらしいよ。いやなに、サンジャヤの介入は止まったらしいし、各地の反乱も少なくなってきたいるけれども……どうも、軍内部の具合が悪いらしい」

「軍内部？ エラルジスと馬鹿兄の仲が悪くなったってことか？」

「いや、そうじゃないんだ」シャンティが首を横に振る。「どうにも兵站部門がうまくいっていないらしい。ジニーが軍を率いて各地に遠征するんだけど、西都ヒツパリオンに要請した糧秣がなかなか到着しないらしい。それでもカバルス地域内での略奪はすることもできないし……。少量の飲食物で一週間歩き続けたこともあるらしいよ」

「それなら、犯人のあぶり出しをすればいい」

「それもそう簡単にはいかないらしい」

シャンティは悲しそうに首を振った。

現在は二二九年、夏。王子たちが各地に派遣されてすでに一年と数カ月が経っている。

南部グナトウスに派遣されたジャクナ三世は無難な統治を行っており、可もなく不可もなく、と言う感じである。けれどもジャクナ

自身はそのことを不安に思っており、心中では何とかして功績を挙げたいと考えていた。

西部カバルスに派遣されたジャーニイはカバルス鎮定にて軍功をあげることができはらずであったが、それはシャンテイがギャロツプに説明したような理由でうまくいっていなかった。彼の評価を可か不可かで訊かれたら、おそらく不可の部類になる出来である。

そんな二人のもとに届いたのが、北部総督として派遣されたシャンテイの戦勝と多額の賠償金獲得であった。

二人ともシャンテイが王位継承を望んでいないことを知っているが、これを聞いて焦らないはずがなかった。手っ取り早く何らかの功績を得ようと思えば、それはもう軍功しかない。農業や商業の活発化ではその効果が出るのは数年後になってしまうからだ。

だが、ジャクナ三世の派遣された南部は比較的穏和な地域だったせいで、それも望めない。

もちろん、ジャーニイはジャクナ三世が派遣先の性質の問題で軍功挙げられないことをよく知っていたし、自分はそれを挙げることのできる立場にあることもわかっていた。自分の方が有利なのはあきらかであった。でも、このままの状態では功績など上げられない。

ジャーニイは現在の軍への待遇が甘すぎるのだと考えた。そして、自国の平和のためならばもっと冷酷に兵を扱ってもいいのではないか……と、彼はそう思い至った。

彼は軍に過酷を強いるのを止むなしとした。

20・敗北者、勝利者（後書き）

絵はないです。

ここからどんどん絵が少なくなっていく……。

21・最高峰の英雄の条件

> i32932—4057<

二二九年冬。ジャーニイ率いるサウルス軍は冬であるにもかかわらず遠征を続けていた。

春夏秋は遠征に次ぐ遠征だった。兵士もジャーニイも疲れ切り、歩けなくなる者が日に日に増え始めたと言うのに、王子は行軍と戦闘の日々を止めようとはしなかった。

彼らは同じように傷つき、疲れ果て、倒れ……そこにはある一つの希望を除いてプラス思考でいられる要素などなかった。皆は冬の到来と共にこの死への行軍が終わることを確信していた。普通はそうだから。だが、行軍は終わらなかった。

冬になっても行軍と戦闘の日々は続けられた。何度も何度も同じような戦闘を繰り返して、そろそろカバルスは平和になっただろうと兵士たちは話し合うのに、ジャーニイはどこからか争いの情報を得てきて兵士たちをそっちに引っ張って行くのだ。

ジャーニイは明らかに焦っていた。その焦りは兵士たちにも伝わっていたし、それが彼の王位継承の志から来る焦りだと言うことも知っていた。しかし彼らはそんな王子の自分勝手によって自分たちがこんな苦しまなければならぬのはおかしいと感じていた。

ある日、野営の日。夜番のない兵士たちは大きな天幕テントの中で真っ暗な天井を見上げながらため息を繰り返していた。この時期になると賭けごとをしたり、カバルス人の相撲を見たりする元気も無くなっていた。

「なあ」ある兵士が隣に寝転ぶ男に話しかけた。「おれはよお、今年で二年の兵役は一応終わりなだけだよ……帰ることができるのかなあ」

「なんだって？」遠くで寝ていた男が跳ね起きる。「そ、そんなの当たり前だろう！ おれも今年で終わりなんだがよ、帰れねえと困

るぜ。去年の暮れにヘドロケラスで孫が生まれたんだ。おれは、早くそいつの顔が見てえのに……」

「おれも今年で終わりだ」違う兵士が言った。「おれは残してきた彼女が他の男になびいてないか心配なんだよ」

「へ、良いじゃねえか。今年で終わりで……」ある男が寝転んだままで言う。「おれなんかこの苦しい日々が後一年も続くんだぜ。それに比べたらまだ夢のある話だ」

兵士たちは嘆息して、寝転んだ。結局、その日はそれだけだった。でも、彼らが抱いたような心配は、寝る前の同じような会話を通して兵士たちに広がっていった。

それを聞きつけたのはジャーニイの侍従ベアードだった。ベアードは夜になつても自分の天幕テントの中で政務を続けているジャーニイにそのことを話した。

「なに？ 兵士たちが郷里に帰れるかどうかを心配している？」ジャーニイは大きな隈の出来た目でぎよろりとベアードを見た。「もちろんだ。兵役の終了と共に帰るのが軍の規定だからな」

「そうですね」

ベアードはほつとしたように言った。

「だが、年が明けても、次の兵役者がヒツパリオンに到着するまでは遠征をやめない」

「そ、それはさすがにやり過ぎではないでしょうか……兵士たちは疲れ切っています。いえ、王子もです。ここらで一度長期の休暇を取ってはいかがでしょうか。後々のことを考えても、その方が良くかと思いますが」

「ベアード」ジャーニイがクククと笑いながら言う。「休む暇があると思うか？ いや、いやいやいや。休む必要すらない。大体……おれは奴らよりも働いているのに、この通り、元気に働いている。奴らだってまだまだ働けるはずだ。もつともつと歩かせたって、戦わせたって大丈夫なはずだ」

「王子……王子は本当に元気なのですか？」ベアードは恐る恐る言

う。長年連れ添った彼にも、ここ最近のジャーニイの心の動きはよくわからなかった。「目の下に大きな隈も作って、ぶるぶると震える手で紙に字を書いて」

「……」ジャーニイは肘をつき、手を組んで、その手の上に額を乗せ、煩わしそくに俯うつむいて、唸るように言った。「もういい、失せろ」ベアードは動かなかった。兵士たちのために、そして王子のために何としても休息をしなければならぬと彼は思っていた。

テントの中に重苦しい沈黙が流れる。ベアードは目を見開いて、王子の一挙手一投足に注意しながら、自分の心音に耳を傾けていた。十数分後、そろそろウィスカの足が痺れはじめた頃合いになって、王子は上を向いて、ふーと長いため息を吐いた。

「わかった」彼は何となく恥ずかしそうに顔を赤らめた。「わかった。ヒツパリオンに帰ろう。エラルジスの軍にもそれを許可しろ」
「は、はい」

ベアードはぱつと明るくなると、王子にお辞儀をしてすぐに天幕を出て行った。そして、近くにいた兵士に「次の戦闘の後にヒツパリオンに帰還する」と伝えて、それを他の兵士にも話すように命じた。

それはすぐに兵士たちの間に広まった。兵士たちは久しぶりに博打に興じてガヤガヤと深夜まで騒いだ。

ヒツパリオンへの帰還は宣言通り次の戦闘の後に始められた。ジャーニイは戦闘終了と共に高熱を出して寝込み、それはヒツパリオン到着の間近になってやっと回復の兆しに転じた。精神力で押しとどめていた疲労感が解放され、それが身体に何らかの異常を引き起こしたようだった。

ヒツパリオンに帰った兵士たちは何日も食って寝るだけの日々を過ごした。彼らも心底疲れ切っていた。いつもは騒がしい兵隊たちがおとなしいので、酒場の主人たちも「悪酔いした兵隊に皿やらが壊されなくて、その割にいっぱい食うから売り上げだけ伸びて大助

かり」と快活に笑った。

やがてエラルジスも西都に帰還し、ここで一旦壮大な宴が催されることになった。

将校や兵たちは元王宮の宴会場に集まって久しぶりに会う戦友たちとドンチャンドンチャンと騒ぎ出した。ジャーニイと老将エラルジスも上座で肩を並べて座っていた。

「いや、しかし」エラルジスが奴隷の女に葡萄酒を注いでもらいながらジャーニイに言った。「今回はなかなか骨が折れましたぞ」

「ははは、老骨に鞭打つようなことをしてすまない」ジャーニイは素直に謝る。「でも、今回の遠征で大分カバルスもよくなってきた。各地の部族を平定して領土も少し広がった」

「ベアード殿に聞きましたぞ。なんでも、最後の戦闘が終わったと同時に死んだように眠り始めたとか……結局、西都に着くまで寝ていたと聞きましたが、それでもおそろく十分ではないでしょう」

「おれはこのヒッパリオンでもやることがあるからな。将軍が何と言っても休みはしないよ」

「ほお、西都で一体何を？」

とエラルジスが首をかしげる。ジャーニイは苦々しそうに返す。

「もう一度兵站部門の不具合の原因の調べてみようと思う。今回もそれで何度かひどい目にあったからな」

「ですが、去年も同じことを調べました」

「そうだ。だが前回は、何が原因か、誰が犯人かは分からなかった」ジャーニイは柔らかい背もたれに体重をかけながら嘆息した。「それでも調査それ自体のおかげで相手の行動を少し弱められたわけだけれど……」

「相手はまだ潜伏している」

「そういうことだな。それをこのままにしておくこともできん。まあ、去年のことがあったもんで西都にはいくらかスパイを潜り込ませておいたからな、前回よりは情報は多いはずだ」

「王子、体には気を付けてください。私もできることなら兵站部門

の不具合について調査をしたいものですが、いかんせん戦争しか知らないものですから……」

「いや、いい。將軍は是非お休みになってください。来年も働いても貰わなければならぬのですから」

「ええ、おかせください。しかし」エラルジスは銭の形を手で作った。「年金はたんまりと貰いますがね」

ジャーニイは宴が盛り上がってきて、騒がしくなってくる前に宴会場を引き上げた。彼は元王宮の政務室に戻ると、書類の山との格闘を始めた。

冬のカバルスの夜は涼やかで作業には最適だった。宴会場から依然として聞こえてくる兵士たちの陽気な声を聞きながら、ジャーニイは筆を走らせる。疲れてきたら彼に寄せられた手紙を見た。

彼に手紙を送ってくる者の中で、一番量が多いのはシャンティだった。シャンティの手紙は、しかし、ほとんど内容がない。今回の手紙も、日常で起こった面白いことを書いた後は、「このようにぼくは元気です。親愛なるジニーの方はどうでしょうか。どうか、ご返事をいただけますように」といつも通りの言葉で結ばれていた。

父シユラク王からの手紙はシャンティ同様、彼の体に関する気遣いと早く嫁をとらないかという進言だった。

「妻か」とジャーニイは手紙を見ながら思った。彼はなぜか妻を娶る気にはならなかった。とはいっても彼が男色であるというわけではない。女性と夜を共にしたこともあるし、言いよってくる女もいる。でも、彼はそんな彼女たちに魅力を感じなかった。

彼はどちらかという亭主関白なタイプで、お淑とやかで夫をたててくれる女、つまりは淑女を好んだ。それはおそらく、彼の母がそうであったからであろうと思われる。

物心つく前に母を失くした人はそうではないが、幼い時に母を亡くした人というのはマザコンになる場合が多い。彼もやはりマザコンであり、愛するものには母の面影を追いかけていた。大体、彼からしてみれば、シャンティがなんでエレのような気の強い女と結婚

したのが全く持つて理解できなかった。

「シャンティは日記のうちで『ジャーニイは多分ユルシユのことが好きなのだろう。』という言葉を書き記している。それは、ヒジュメ大平原でユルシユを始めてみた時のジャーニイの反応や、その後には彼女が兄に娶られることが決まった時のいらつき方から推測していたことであろう。この推測は正しい。

ではなぜ、ジャーニイはユルシユのことを好きになったのか。彼の母は生粋のサウルス人貴族であり、ユルシユはカバルス人の王族である。ここから導き出せることは、両者が高貴な身分であったことと、政略結婚によって自分を犠牲にしたとしても他人の利益を優先するその精神の気高さである。

「妻を娶って王になれるのなら、そうするさ」

ジャーニイは手紙を置いて、また雑務に取りかかる。

戦友たちの作る愉快な空間がすぐ近くにあるのに、彼はそこから離れて雑務を行い、独りの時間に浸る。彼の心には寂^{せき}寞^{ぼく}感が漂っている。彼はいつもそうやって独りになるうとする。彼はいつもそうやって最終的には独りであることをすませようとする。

結局彼は自分以外の何も信用してないのだ。

兄の王としての器量も、弟の王としての器量も。彼は自分が王になる方がましだと確信している。彼は誰も信じていない。兄が王になって自分よりもよく国を回していくことも信じていない。弟が王になって自分よりも平和に国を保って行くことを信じていない。父すらも先祖に比べれば……などと思っている。そして未来の妻にも、子供にも、何の期待もしてはいない。

しかし独りで生きるのは空虚ではないか。手を取り合って生きた方が効率もいいのではないか？

いや！ 歴史上の覇者たちだって、英雄たちだってそうじゃないか。彼らには色々なタイプがいるが、彼らの中で一番名高いのはいつだって孤独と共に生きる者だ。たった一人で、敵軍勢を蹴散らす策を考え出す者だ。

そうやって彼は孤独に最上級の賛美を送るのだ。

彼が歴史に名を残すことを望むのは、彼の孤独賛美から来るのかもしれない。

思えば、歴史の教科書を見ると、いつだって英雄たちの孤独さが目に付いてくる。彼らは多くの友と手を取り合って事を為したのに、彼らの行動や肖像画からはなぜか孤独さが奇妙に映える。それは、彼らの中に他の人間とは違う、やはり「孤独」とも言えるものがあったからであろうと思える。

歴史に名を残す者は偉大だ。つまりは普通の人間とは違うのだ。彼らから見れば自分の行動は当たり前のことだが、我々から見れば彼らは異常に映る。彼らは我々のまなざしに心細さを抱き、孤独を感じる。

ただ、英雄は孤独に終わるわけだが、ジャーニイは孤独から始まっているように思える。つまりは、英雄は当たり前にする行動が常人に奇妙に見られ孤独に行きつくのだが、ジャーニイは孤独を賛美しそこから出発して、他人とは違う行動をとろうとしている。

ともあれ、彼は「孤独」を賛美する。

彼が王に憧れるのは、やはりその座が、何よりも強く「孤独」のオーラを発しているからではないのだろうか。彼がユルシュに惹かれるのも彼女から「孤独」を感じるからではないのだろうか（ならば、ジャーニイはユルシュの女としての切なる力強さに、心の高貴さに惚れたことになる）。彼がギャロップを畏怖するのも彼から「孤独」を感じるからではないのだろうか。

愛する母の忘れ形見である自分たち双子の片割れ……シャンティを大事にするとともに、その呆れるほどの朗らかさに嫌悪するのも、彼が孤独を好まず、最後にどこかで自分自身以外の誰かの力を頼っている弱さを持っているからではないだろうか。

こう考えていくと、ジャーニイとシャンティは逆なのである。シャンティは全ての者の可能性をちょっと驚くぐらいに信じ切り、他人の可能性を失くしてしまわないようにと思っている。だからこそ、

全ての者が愛しくて、目の前で自分を殺そうとする敵でさえも殺すことをためらってしまう。

ジャーニイは逆である。彼は自分以外の誰の能力も忠誠心も信じ切らず、誰かの可能性を潰しても自分を優先する。そして、自分の邪魔をする可能性のある者は、弟であろうと殺す事を厭いとわない。

後世のある本では「自分の大いなる利益や世界の大きい利益のためならば誰かをいくら殺したとしても悪ではない」というような論理を振りまわす男がいて、その本の中で男は「しかし、それを為す者は誰かを殺す事への恐怖を感じ、自分を責めて偉大なる計画をやめてはいけない。それを最後まで遂行せねばならない。そうしなければ、ただの殺人者で終わってしまう」と言っている。

では、彼はどうだろうか。彼は自分や国の大いなる利益のためならば家族すら殺し、兄や弟を殺すときには恐怖を感じないのだろうか。自責の念を感じないのだろうか。自分を嫌悪しないのだろうか。肉親の首をはねた剣を手にとって、肉親の心臓を刺した短刀を手にとって、ケロリとした様子でそれに付いた血を拭ぬぐうのだろうか。

それはまだ分からない。

けれども、この時点でわかっていることがある。

彼は……ジャーニイは、自分に「自分の愛する者を殺してしまうかもしれない可能性があること」を、ほとんど恐れてはいない。

21・最高峰の英雄の条件 (後書き)

ジャーニ男の顔は安定しません。

22・閑話休題、王子と將軍

> i333025—4057<

二二九年の年明けすぐの冬。北国カンプトケファレではこの年もしんしんと雪が降り、積り、ウチノホーク周辺の豊かな自然味溢れる大地はぼつりした感じの白色で侵食されていた。

シャンティは頬を赤くしながらウチノホークの王宮の廊下を走っていた。別に運動しているわけではなく、緒事情で急いでいるのだ。彼の手には兄のジャーニイから久しぶり来た手紙が優しく握られている。

妻のいる部屋に着くと、彼女の方へ歩きながら手紙を開け始めた。「なんですか？ その手紙は」エレは興味のなさそうに尋ねた。「どうせ、お義父様からお義兄様からでしょうけれども」

「ふむむ、わかつているじゃないか」
シャンティは彼女の近くの椅子に座りながら唸る。で、手紙を熱心に黙読し始めた。

「フェミナ、飲み物を出してあげて」エレは近くの侍女にそう命令する。彼女は言われた通り、シャンティに飲み物を出した。「それでお義兄様はどうなさいましたの？」

「どうも、カバルスの兵站部門での不具合はまだ原因がわからないらしいね。ジニーもほとほと困っているようだよ」

「それにしても」エレは何とも言えない、けれども捉えようによっては妖艶ともとれる顔をしながら言った。「兄弟への手紙にそんなことを書くのってどうなのかしら。もっと楽しい話を書くべきじゃないのかしら？」

「ええー？ これだって、楽しい話じゃないか。ジニーの近況が包み隠さずわかるんだから」

「……まあ、そういう考えもあるかもしれないわね」エレは呆れながらごくごく飲み物を飲んだ。「そう言えば私のお父様から手紙

が来たのですけど、東がまた食糧難なのですって」

「東は不作が続くね。どうしてだろうか？」シャンティが腕を組んで頭をかしげる。エレは見慣れた光景だこと、と思いながらそれを見る。「そう言えば、良い作物を育てるには水や陽光だけではなくて、土も重要な要素だって本で読んだことがある。あれは……農耕書だったよなあ。うーむ、いや、農耕書なんて数は少ないはずだけど……。全部王都から送ってもらおうかな」

「それよりも食料を東に送ってあげなさいな」

「それはそうなんだけどね。それでは根本的な改革にならないよ、エレ」

「それじゃあ、どうするの？ 農民でも送り込みますか？ それとも土を送りますか？ それとも農耕書を送りますか？ それともギヤロップを送り込みますか？」

「こらこら、ギヤロップを送って何をするんだよ。なんだか、ギヤロップがかわいそうだよ！」シャンティは荒れ果てた農地を独りで耕作するギヤロップを思い浮かべながらエレを睨む。でも、エレに睨み返され、すぐに目をそらした。「いやあ、ははは、そうだなあ……。そうだ、そうだね！ 農耕書をこっちに送ってもらって、農耕に関する多種多様な知識を持った老人の農民を雇って、それでウチノホークの近くに研究場を作ろうじゃないか」

「また始まった。今も新料理開発と言って料理人を雇っていますけど、大したものも作れてないじゃない」

彼女が言ったシャンティの新料理開発は（アストロラーボンも言うっていたが）シャンティの行っていた事業の一つである。

彼は宮廷の料理人と手を組んで色々な料理を開発している。けれども、その大半は失敗しており、サウルス独自の料理文化を作るには至ってはいない。ただの「ぼくの考えた新料理」のテイで終わっている。とはいっても、完全に無駄にはなっておらずサウルス人の好きなチーズの料理やスープの料理などは今でもいくらか残っている。

なお、彼はやはりその研究成果に関することを本の形でまとめ上げている。

さて、こんな感じでシャンティの新事業が始まった。シャンティは国軍のカンプトケファレ農民出身者や自警軍の農民出身者から聞き取り調査をして高齢で博識な農民を探した。彼の侍従ウイスカの日記には『王子がまた何やら始めたようだ。』と愉快そうに書いており、王子の新事業開始は多くの人に伝わっていたようである。

そうこうしている間に王都から東へ物資を送るように御達しがあり、シャンティはその通りにしている。同時にいくらかの農民を送り込み、彼らには向こうの地勢の調査をするように頼んだ。それで、その使節の長となったのが暇を持て余していたギャロップだった。

もつとも、これは彼が進んで引き受けた仕事である。シャンティは『小ウアズマとの戦争に備えて竜の鼻の穴を見るつもりであろう。』と推測しており、後の日記には『やっぱり思った通りだった。』と書かれている。

つまりはそういうことである。

ギャロップたちは春になる前に出発し、夏の初めにカンプトケファレ首都のウチノホークに帰還した。

農民たちの中の字が書ける者が他の者と相談しながらある程度の報告書を作り、シャンティも一人一人から詳しいことを聞いた。とはいえ、東における不作の理由がそうそう簡単にわかるはずもない。この後シャンティはエレの実家に手紙を送り、貴族たちが不正をしてないか調査するように頼んだ。だが、それも不発。

彼らからの返信には「貴族たちが穀物を買占めたり、わざと収穫量を減らしたりする不正はしてない」と書かれていた。しかし、この報告は親類からのモノであるとしても完全に信じきれぬものでもない。普通に考えれば、エレの実家も何らかの不正を行っていたと考えるのがふつうである。なぜそう思うかと訊かれたら、この時代においてそんなことは当たり前だったから、としか言いようがない。

シャンティたちは結局、ヘドロケラスの不作は水が足りないためと一応の結論を付けることにした。彼はそう結論付けるとともに、ヘドロケラスの総督へ大規模用水路を造るための工事をするように頼んだ書簡を送っている。が、それは実現されていない。

シャンティはこの夏から水が少なくても育つ植物を探し始めた。とはいえ、この時代で食用とされていた植物はそれほど多くはなかったし、水が少ない環境を無理に作り、そこに種を植えたりするの
で時間もかかった。しかも、乾燥地帯でも育つ植物は見つからず、この年の事業は失敗とも言えた。

実の所、シャンティの考えた新事業は大体がこんな感じで失敗に終わっている。後世のとある歴史家は彼のことを『行動力あふれる男だが、大体のことにおいては才能がなかった。』とも評している。彼は王族としての実務をそつなくこなしているし、軍事に関しても人並みの才はあり、多くの有名な書物も著している。しかし、彼が色々な新事業に失敗しているのも事実で……つまるところ、彼は元からあった知識や技術を使用・応用したり、編纂へんさんしたりする才能は富んでいたが、新しい知識を作り出すことは不得手だったのだらう。

ギヤロップがいつか来るであろう小ウアズマとの戦争のためにヘドロケラスを訪れたのはついさつき言ったばかりである。

シャンティが帰国したギヤロップから聞いた話によると、彼はヘドロケラスの地勢調査の使節長として派遣されたはずなのに、ほとんどの時間を竜の鼻の穴やその少し先の地域の視察に費やしていて、農民たちはほったらかしていたらしい。

「まったく……それなら、別に使節の長なんて受けなかつたらよかつたのに」

とシャンティはウチノホーク練兵場で彼に言った。二二〇年の暑い暑い真夏日のことである。

シャンティは定期的（というよりも頻繁）に軍の訓練に参加して

おり、基本的にそこではギャロップがシャンティの教師役をやっている。その際に見せるギャロップの指揮ぶりはやはり鮮やかで、芸術的とも言えるものだった。

『彼は自分の馬の歩調だけで、指揮する兵士たちの心模様も操作できるような男である。』とシャンティは彼を絶賛している。指揮能力、判断能力、地理の判断能力、個人的な戦闘力、馬術、槍術、剣術、想像力、適応力……。彼は戦争に必要とも思われるほとんどの能力においてずば抜けた才能を持っていた。

改めてシャンティは「ギャロップがカバルス戦役で他部族長と同じレベルで重用されていたらサウルスは勝てなかったかもしれない」と背筋を凍らせながら思った。

「それで、ギャロップ」シャンティは昼食の時間、彼の背持たれている木の、その陰に寝転びながら質問した。「小ウアズマの視察に行った成果はあったのかい？」

「そりゃ、んが……おい、中になんか入ってるぞ」ギャロップが食べていたパンを口から離して中身を覗き込む。「チーズか？ いや、他にも何かはいつてる」

「チーズと野菜を少々入れているんだよ」シャンティはパンにかぶりついて、さらにパンを向こうに引つ張ってニョーンとチーズを伸ばして見せた。「こうやって食べるのだ」

「サウルス人はよっぽどチーズとパンが好きだぜ。一緒にしちまうくらいだからな」といいながらもギャロップは大口を開けてパンにかぶりつき、リスのように頬を膨らませながら、彼の質問に答えた。「んで、小ウアズマのことだけどな……結構、成果はあったと思ってもいいぜ。あっちの海岸線が険しいせいでまずは陸路で行かないりゃならんわけだが、あっちで工事をして港街の一つでも作っちゃえば補給に関してはだいぶ状況がよくなる」

「いや、父上もそれは考えたらしい。でも、サウルスと小ウアズマの間で補給船が行き来するようになったら、港街や海に賊が出るようになったらしい」

「港街を要塞都市にして、補給船に護送のための船団をつけられ
い」

「ただでさえ船やらそう言う物は金がかかるのに、そんなことは簡
単にはできないよ」

「しかし、いちいち竜の鼻の穴を通ることと水上輸送を比べると、
明らかに後者の方が有利だ。大量に、なおかつスピーディーに物資を
運ぶことができる。だいたい、船の材料に関しては、不足はないだ
ろ？」

「シャンティはハツとしてイムサ国から持ってきた木のことを思い
出した。」

「もしかして、このことを睨んでの行動でもあったわけかい？」

「まさか、そんなわけないだろ」

「あっけらかんと返すギャロップを半目で見ながら、どうだか、と
シャンティは思う。ギャロップはパンの残りをゴクリンと飲み込ん
でから続きを言う。」

「さっき言ったこと以外にも、まだまだやらなきゃならんことがあ
る。前回の東方遠征の際、シユラク王は小ウアズマの諸部族のとる
ゲリラ作戦に苦しめられたらしいな？」

「だね」

「となると、やはり交通線も整備しておいていつでも反乱鎮圧に駆
けつけられるようにしておいた方がよい。後から物資を運んでくる
補給班もその方が楽だしな」

「なんとも長大な計画になってきたね。君はもつと迅速を尊んでい
るものだと、ぼくは思っていたけれど」シャンティはギャロップの
思わぬ一面を見て、少し驚きながら言った。「君、実は為政者とし
ても大分良い線いくのじゃないのか？」

「まあ、お前に比べたら誰でも良い線いくことになるだろうな」ギ
ャロップがシャンティの手から水筒を取り上げながら言う。「小ウ
アズマでの戦争は、もともとまとまっていた国を攻め盗るのとは違
うものになる。カバルスもそうだったが、小さい範囲に多くの部族

がいる地域つてのはなかなか統治が難しいもんだ。だから、これは長期的な視点で見ざるを得ない」

「急がば回れという奴だね。それで？ 次のビジョンは？」

「正直、戦闘力で見れば小ウアズマの部族なんぞ敵にならない。一番の問題はそいつらを倒した後だ。んでもそれは、現地にいる部族を慎重に扱ったり、族長の息子なんかの次の世代の頭目たちをサウルスの色に染め上げることができればそのうち統治安全に統治できるようになるさ」ギャロップは水筒を返す。「それはおれの仕事じゃないけどな」

「ま、そりゃそうだろうね」

もしかして、ぼくの仕事になったりするのかな。とシャンティは自分の教師姿を思い浮かべた。ふむ、なかなか良いかもしれない。

と、にやけているシャンティにギャロップがほとんど唐突に尋ねた。

「小ウアズマを手に入れた後はどこと戦争するんだ？」

「ん？ んん……そこまではわからないな。さらに東の大地、鮮やかなる大地ウアズマか、それとも小ウアズマの北部からは陸地続きの後継者の国々か」

「強いのは？」

「さあ」シャンティは本当にわからないと言う風に首を振った。「でも、ぼくたちが生きている間にそんな段階まで進むことができるのかね」

「お前はどうか？ お前が王になったら、小ウアズマに……いや、他の国を手に入れたと思うか？」

「ぼくは王にはならないし、他の国も手に入れたとは思わない。ふん、ぼくの才能は、この北国の統治だけでもいっぱいいいんだ。そんな大王国を作ってもしょうがないよ」

「しかし」侵略に成功すれば、他の国の財宝や美しい女たちが手に入るかもしれないのだぞ……と彼はいおうとしたが、止めた。「そうだな……他国を……手に入れば、東の食糧問題も何とかなると

したら？」

「それに関しては大丈夫さ。今回の新事業は絶対に成功させてみせるよ。別に他国を犠牲にしなくても、東の食糧問題はよくが解決して見せる」

シャンティは男らしい笑顔を浮かべながら、力瘤を作って見せる。彼の新事業はほとんど成果を上げていないと言うのに。

ギャロップはつまらなそうな顔をして、しかし、やや口角を上げた後に指笛を吹いた。すると、向こうにいた彼の新しい愛馬がぼくぼくと歩いて彼のもとにやってきた。シャンティも真似をして指笛を吹いてみる。そこから数十歩のあたりに一角獣ユニコーンの面甲シヤフロを付けたルルディファイロは立っていたが、彼は草原の草をはむのに夢中で主人の指笛など全く聞こえていないようだった。

「ルルディファイロ！」と叫んでからシャンティはもう一度指笛を吹く。ギャロップはそんな彼を無視しながら新しい愛馬に乗り上げる。シャンティはその後二回同じことをして、結局愛馬は来なかった。ので、彼が愛馬のもとに馳せ参じて乗り上げた。

「ギャロップ」シャンティはルルディファイロを操りながら彼に話しかける。「午後の教練はどんな内容？」

「山岳に配置する敵小部隊との戦いだ」

ギャロップが悠然と馬を操りながら言った。

なるほど、午後からは小ウアズマ対策の小部族に対する訓練か。

じゃあ……あーあ、この調子だと、水軍の訓練も取り入れ出すようになるんじゃないのか？ まったく、我らが將軍はいろいろと考えていらつしやるねえ。

シャンティはそう思いながら、ギャロップの横に位置付け、訓練の詳しい内容を聞き始めた。

二三〇年は、サウルス国にとって比較的は何も問題のない穏やかな年だった。この年の夏は雨が定期的にやってきて、東部へドロケラスの早魃の問題も起こらなかつたし、ジャーニイのいるカバルス

での兵站部門の方も徐々に改善され始めていた。

二二八年の冬に生まれた王太子ジャクナ三世とユルシユの息子もすくすくと成長し、ユルシユからエレに於てられた手紙によると英才教育はすでに始まっているらしかった。

二二三年の年明けの冬にシャンティたちはシュラク王の呼びかけで、一同王都センチュリオンに勢ぞろいすることになった。これはシュラク王が、息子たちが一同に会する姿を久しぶりに見たかったからのことであり、あくまでも一時的なものであるから、三王子たちは春になると各地に戻って行かなければならない。

久しぶりに兄弟と会う三王子は何となく不安感を抱いていた。相手はどれだけ変わってしまったのか、自分はどれだけ変わったと思われるのか。そんな思いにとらわれながら、二三〇年の冬、三王子は王の呼びかけに応えるべく、緊張の面持ちで王都に向かって出発した。

22・閑話休題、王子と將軍（後書き）

太ス「突然ですがね。將軍を亡国の幻將と呼ぶのもそろそろ無理があるんじゃないですかね。ほとんどこの国の將軍でしょ」

シヤン太郎「ううむ」

ギャロプン「大丈夫だ」

太ス・シヤン太郎「なぜ？」

ギャロプン「この国はそのうち滅ぶことになっているからな、そうしたら 亡国の って部分は問題ない」

シヤン太郎「失礼なこと言うな」

ギャロプン「それにおれを歴史の上で抹殺すれば 幻將 という部分も……」

シヤン太郎「続けるな」

太ス「結構、気に入ってるんスね。その呼び名」

|||||

と言うわけで、画像はシヤン太郎とギャロップ。

二人とも若すぎる！

実際はこれに十歳くらい足した感じかしら。

それにしてもこの小説、誰にも発見されないので、発見された方にはなんとか続けて読んでもらおうと第1話にタイトル（タイトルロゴ？）を付けました。

おっさん、グラデーション覚えた。

23・日々是好日

> i333083 — 4057 <

三王子の王都センチュリオン到着の順番は北部総督シャンティ、南部総督ジャクナ三世、西部総督ジャーニイとなった。

各都の距離からして一番早く着くのはジャクナになるはずだったが、一番早く王都に帰るのはまるで南都での仕事がないように思われて恥ずかしいから、という理由でジャクナは意図的に帰還を遅れさせた。

シャンティはエレヤギャロップたちと共にセンチュリオンに帰還しシユラク王に謁見。その数日後に市城壁の門でジャクナを出迎え、さらに一週間後に同じところでジャーニイとエラルジス大將軍を出迎えた。

ジャーニイを出迎えたシャンティは、兄の体が以前に増してたくましく、しかし不健康そうな肌の色になっているのに驚いた。シャンティはその驚きを隠しながら訊いてみた。

「ジニー、なんだか不健康そうな肌をしているけど……ああ、もしかして、日に焼けたのかな？」

「なに、大丈夫だ。これからいくらかの間はゆっくりと休ませてもらうさ」ジャーニイは生気のコもった声で返す。彼は市城壁の外にいる兵士たちを一旦解散させ、シャンティや近衛兵団と共に王宮に向かった。王宮の城門に着くと、彼はシャンティに父の居場所を尋ねた。「それより父上はどこだ？ 挨拶に行かねばならん。政務室か？ それとも自室で休んでおられるのか？」

「父上なら食事をとられているよ。ぼくもさっきまで食べていたんだけど、君が帰ってくると聞いたんで急いで食べて駆けつけた」

シャンティは王族のために作られた食堂への案内を始めた。

「おいおい、どれだけ長い間住んでいたと思ってるんだ？ 別に案内なんていらんぞ。それよりもその食事にジャクナ三世もいるのか

？」

「そりゃあいるさ。だからと言って、来ないという選択肢は君にはないよ」シャンティがジャーニイの手を引っ張って無理やりに連れに行く。「挨拶だけでもいいけれど、今日は魚料理が主な食材だ。君は魚が好きだろう？」

「別に」

「またまたー」

シャンティたちは長い回廊を歩き、折れ曲がり、歩く官人たちに挨拶されると返事をし、食堂の大きな扉の前でつまらなそうに警備しているギャロップに挨拶をしてから部屋の中に入った。中ではシユラク王やジャクナやエレやユルシュががふかふかのクツションに座って料理を食べていた。

「父上、ジニーが帰ってきましたよ。ほら、こんなに肌の色が悪い。きつと夜更かしのしすぎだ！」

シャンティはそのままずるとジャーニイを引っ張ってシユラク王の方に連れて行った。

ジャーニイはやはり嬉しそうな笑みをこぼしながら父に挨拶をした。そして儀礼的に兄にも挨拶をし、エレとユルシュにもした。ジャーニイが来る前から、エレとユルシュは二人で妙に盛り上がっていた。その理由はユルシュのすぐ横には二歳程度の少年である。名前はジャクナ四世であり、つまりは彼がジャクナとユルシュの子供である。ジャーニイはその子を苦々しい顔で見た。多様な感情を抱いた皺いっぱいの顔を、シャンティはそつと見た。

この顔は一度見ている。彼はそう思う。ギャロップが初めてジャクナ四世を見た時も同じような顔をしていた。いや、彼はもっと無表情だったが、しかし、彼の目は……。

と、シャンティがそんなことを感じている間にシユラク王が話を始める。

「カバルスの鎮定は少しずつうまく行き出したようだな」

王は父親らしい優しそうな眼つきで息子を見ていた。

「はい。ま、シャンティの武功には敵いませんが」ジャーニイはその場に腰をおろしながら言った。シャンティは横でいえいえ、と首を数回振る。ジャーニイは続ける。「しかし、父上。あの件、サンジャヤ攻めの件はやはり了承してくださいさらないように」

「まあな。今はまだカバルスの鎮定に力を注ぐべきだ。サンジャヤを攻め滅ぼしても、どうせ次の敵国がいるわけだしな」

「隣国は全て敵国ということですね」

とエレが向こうで皮肉を言った。王にこうやってズバズバと言えるのは彼女くらいのものである。シユラク王とジャーニイは困ったような顔を見合わせて、苦笑いした。

「ジニー」赤髪の王太子ジャクナが声をかける。「今回のカバルスでは兵站がうまくいかなかったらしいじゃないか。お前はカバルス戦役ではうまくやっていたのに……いったいどうしたんだ？ 原因はわかったのか？」

「いいえ」なんで知ってるんだ、と思いながらジャーニイは首を振る。「が、内部の者が手を回しているのはわかっています。そこで私はそいつの目に見える形でスパイを置いて、相手が容易に行動できないようにしましたゆえ、それから不具合は起こらなくなりました」

「へえ、そりゃあ、けっこうだが……結局犯人は分からずじまいかい？」

ジャクナがブドウの粒を口に放り込みながら、にやにや訊く。

「おや？ その笑顔を見ますと、兄上は犯人が分からずじまいなのが嬉しいようですが……どういうことでしょうか」

「お前も嬉しそうな顔をしているが？ おれを貶めるチャンスが回ってきたからかな？」

「はてはて、その質問の意味はよくはわかりませんね」

「ははは、ともかく」シャンティが額に汗を浮かべながら険悪な二人に割り込む。「事態が收拾し始めたのは良いことだよ。もともとカバルス鎮定をやりだしたのはぼくだからね。ふむ、カバルスがサ

ウルス国の領土となったのが、いや、ユルシュお義姉様がぼくたちの家族になったのが二二五年だから……もうかれこれ五年強が経っているわけだ。それで、ぼくとジニーがカバルス鎮定軍としてカバルスへ向かったのは二二七年だから、こちらは三年強くらいか。思えばぼくも歳をとったものだ」

「本当に……シャンティは歳だけとってますの」エレがほほ、と笑いながらユルシュに言う。「中身は何も変わってないんですの」「それは、ぼくの心が若々しいままでという褒め言葉かな？」

シャンティが気にせず笑い返す。

「まあ、ともかく」シュラク王が困ったように言う。「皆久しぶりに会したんだ。まあ、気がすむまで王都でゆつくりと過ごしてくれ」シュラク王がパンパンと手を叩くと、追加の料理が運ばれてきた。単純に魚を焼いて塩をまぶしただけのものや、身をほぐして野菜と絡めたもの、魚の骨でスープをとったもの……。エレは魚料理が好きなようで少しずつではあるが、途切れなく食べ続けた。その日の食事は昼過ぎから始まって夕食が終わる時間まで続けられたのだが、エレは絶えず口を動かし続けていた。

思えば、シャンティの日記上ではエレはよく飲みよく食べる女として書かれている。

『今日のエレはすごかった。樽一杯ぶんの葡萄酒を夕食の時に飲みほした。』『チーズを食べさせればエレに敵うものは無いだろう。』
『後で料理人に聞いてみると、彼女は牛一頭を二日でぺろりと食べつくした計算になるらしい。』『彼女の口にご飯を運ぶのが面白くなって、ついつい夢中になっていたら、ぼくの分の食事まで無くなってしまった。』
「ありゃ、もうなくなっちゃたよ」というと、彼女は物足りなさそうにぼくを見つめていた。『思い返してみれば、初めて会った時のご飯をいっぱい食べていた気がする。』

さらに、彼女が巨乳だったことを考えると、ここで「彼女が肥満だったのでは？」という疑惑が浮かび上がる。けれども彼女を描いた絵を見ると、胸は大きく書かれている一方でそれ以外の所は

シユツと締まっている。もつとも、この時代の人物絵画は為政者や権力者が金を積んで綺麗に描いてもらった物だから、あまり参考にはならないかもしれない。

しかし、シャンティ、ウイスカ、その他諸々の人間の覚書おぼえがきなど、どの資料を見ても彼女が太っていたという記述は出てこない。これを見るとやはり彼女は肥満体形などではなく、ただのグラマー体形だったと言える。また、後世のある歴史家は『彼女は胃下垂だった』と推測している。

で、食堂を一番早く出たのはシャンティとエレだった。その時、エレはしれつとジャクナ四世を連れて帰ろうとしてユルシユに止められている。シャンティはこの日の日記に『エレはジャクナ四世が気に入ったみたいだった。』と書いている。

次にジャクナ三世たちが部屋に戻り、シユラク王とジャーニイと一緒に食堂を出た。

家族が一堂に会したこの日からのことはシャンティの日記に克明に記されている。

次の日、シャンティとジャクナは馬に乗って練兵場を見学している。

その次の日、カバルス人の相撲トーナメント大会が開かれる。

その次の日、シャンティとエレがジャクナ四世の所を訪れる。

その次の日、ギャロップとジャーニイが模擬的な軍議をし、剣を抜きあうまでの喧嘩に発展する。

その次の日、大雨が降り、やけに寒かったのでシャンティは部屋の中で農書を読みあさる。

その次の日、三王子とギャロップは狩りに出て、ギャロップがウサギ二羽を、ジャクナ三世が猪一頭を捕まえ、夜に食べる。

その次の日、ギャロップとジャーニイが模擬的な軍議をして、前回の喧嘩の決着を相撲で付けギャロップが勝つ。

その次の日、エレがものすごく優しかった。

その次の日、緒將軍たちと宴会を催す。

その次の日、ビッグトスやフートスから手紙が届く。

その次の日、シャンティとエレが御忍びで城下町を散策して北の自警軍への御土産を見繕う。

その次の日、ギャロップ落馬。けがなどは無いが、シャンティは驚愕しながらこの事実を書き記している。

その次の日、シュラク王が風邪をひく。

その次の日、シャンティは農耕の技術や発展をテーマにして新たな著作に取りかかる。

その次の日、練兵場で兵士たちによる競馬が開かれる。ギャロップ優勝ならず。

その次の日、シュラク王が全快する。

その次の日、アストロラーボンからの手紙が届く。

その次の日、ルルディファイロの子供を、ルルディファイロと共に見に行く。白い毛だった模様。シャンティとジャーニーで草原に出かける。帰りに雨が降る。

その次の日、サウルス官人たちの間でなぜか相撲大会が行われジャーニーの侍従ベアードが骨折。

その次の日、シュラク王が急死する。

23・日々是好日（後書き）

おっす、おれ、シユラク王。

いやー、死んじまったあ。死んじまったのは良いんだけど、どうやら、おれ、邪悪な獣たちが跋扈する地獄はっこに来ちまったらしい。なんか悪い事しちまったかなあ〜。

それで、そこでも王様を任されることになっちまったから、これから一合戦行ってこなきゃならないんだ。

つーことで、次回からは「亡国の幻将〜地獄編〜」が始まっから、よろしく頼むな。

|||||

画像は愛馬とシャン太郎。シャン太郎、幼すぎる。

それにしても展開速い。

24 次之王は？ そんなことより

> i333127—4057<

シユラク王急死の報は驚愕をもって迎えられた。「シユラク王が自室にて、おそらく昨夜のうちに急死なされました」。三王子はそれぞれの自室でその報告を聞き、すぐにシユラク王の死に場所である彼の部屋に走った。

シャンティは寝間着姿のままシユラク王の部屋に向かう。三王子の中では彼が最後の到着だった。ジャクナ三世とジャーニイはすでに着替えており、彼らは二人揃ってこの世の終わりを憂うような真つ青な顔をしていた。中では王の侍従たちが主の死体のある部屋の中を右往左往している。

「と、とにかく」ドアの所で固まっている二人にシャンティが言う。「父上の御遺体をどうにかしよう」

「どうにか？」ジャーニイが言う。頭が回っていないようだった。「どうにかって……どう？」

「どうすれば？ どうすればだって？ それは……聖獣信仰にとるならば、火葬だよ」シャンティが腕をがりがり掻きむしりながら、必死になって冷静を演じる。「それとも……違う地方では、香料をまいて数日間このままにしておくことも。いや、何をぼくは……」

「すぐに火葬だ」ジャクナが言う。「父上が日に日に腐っていくのなど見ていられるか。大体、香料をまくなど……」

「ま、まて……」ジャーニイが歯でがちがちと音をたてながら、さつきとは違う紫色の顔して言う。「なんせ、そうも早く燃やしたがる？」

「なに？」ジャクナが顔をしかめる。「どういうことだ？」

「どうもこうもないさ。お前……まさか、父上を殺したんじゃあるまいな？」ジャーニイが紫色の顔でジャクナに詰め寄る。ジャクナ

はその不気味さに押されて後ずさった。「お前……父上の体に、何か外傷があるのでそれを隠すために父上の体を燃やそうとしているんじゃないな！」

ジャーニイが大声で言うと、部屋の中にいた王の侍従たちがジャクナとジャーニイの方に注目し始めた。ジャクナはいきなりだったので弟の言っていることが理解できない様子だった。

「馬鹿野郎！　どこの世に父親を殺す者がいる！」
シャンティがジャーニイに怒鳴りつける。そうやって兄を叱りつけるシャンティすらもいまだに青い顔のままである。

ジャーニイは顔中に汗を浮かべながらシャンティを見て、気まずそうに目をそらした。ジャクナはシャンティの方を見て、ありがとう、と言うように小さく頷く。シャンティは首を横に振って返す。部屋の中の侍従たちは汚い、そして見てはいけけないものでも見てしまったかのような顔をしていた。

ジャクナが目を目を床に移しながらジャーニイに言う。
「それならば……お前が先に入って父上の体を調べれば良いだろう」
ジャーニイは身を強張らせた後、部屋の中に入り父親の死体を見つめた。二十秒後、衣を脱がせて外傷がないかを確認した。彼は涙目で、苦しそうな顔をして、嗚咽交じりに父親の死体を調べた。

「なんで」
シャンティは心底嫌悪するように言った。シャンティは彼がなぜそこまでしてそんなことをするのか理解できなかった。

侍従たちも震えていた。ジャーニイが変な物を見つけて何か宮廷に面倒を起こさないと良いが、と思いつつながら。

ジャーニイにしてみれば、この後のことに禍根を残さないよう行動したまでのことだ。いや、彼はもちろんジャクナが何かしたのでは、と疑ってもちたし、自分が王位を継承するためにもそうであってほしいとも思っていただろう。

彼は父親の死体を調べ終えた。立ち上がり、納得したように、しかし落胆したようにジャクナたちを見た。

「何も異常は無かった」彼は父の侍従たちを見ながら言った。「父上を棺桶の中に……」

侍従たちは急いで棺桶を用意し始めた。棺桶はシユラク王が生前から用意して置いたものである。サウルス国の王は王位継承と共に棺桶を作るしきたりがある。そこには、死体を棺桶に納められるような形で……つまりは、この王国内で穏やかに死ねることを祈願する意味合いがあった。

侍従たちの運んできたシユラク王の棺桶は荘厳な感じだった。重苦しい色合いの木材で、ところどころに金や銀や漆の装飾が施されている。侍従ラッドハッドが棺桶のふたを開け、その中にまずは花を入れていく（もちろん燃えやすい物である。故人と一緒に送ると言う意味合いがある）。

次に王子たちが、洗われて綺麗な死装束を着せられた父を持って棺桶に入れるわけだが……。シャンティはいつの間にか父のベッドに腰かけていて、そこからは梃子こてでも動く気配は無かった。

「シャンティ。父上を棺桶に運ぶぞ」ジャクナがシャンティの肩に手を置く。しかし、シャンティはほんのちよつとの反応も返さなかった。まるで人形のような、押せば倒れて、一生起き上がらないのじゃないのか、とジャクナは思った。「おれたちだけで入れるぞ。いいんだな？ おい、シャンティ」

結局シャンティの返事は無く、王は二人だけで棺桶に入れることになった。

「ふん」

とジャーニイが不機嫌そうに鼻を鳴らす。

ジャクナが頭を、ジャーニイが足を持って父を棺桶に入れた。次に王が生前に大事にしていた物や入れてほしいと言っていた物を入れる。最後にふたを閉める。

父の体が棺桶に収まった。そう思いながらジャクナとジャーニイは棺桶を見ていた。侍従たちは物悲しそうに棺桶に集まり始め、死体にごによごによ話しかけている。

「所で……侍従長ファトス」ジャクナがやや息を切らしながら、近くにいた侍従長を呼んだ。「父は遺言を残していなかっただろうか？」

「そうだ！」ジャーニイは王の入った棺桶を大事そうにさする侍従長ファトスの方を強く掴んだ。「父上は誰に王位を継承させると言っただ？」

「ああ……生前は……その、ジャクナ三世王太子様に王位を譲ると言いましたが」ファトスは小刻みに震えながらぼつぼつという。言うごとにジャーニイが彼の肩を強く握りしめる。「けれども、遺言を残しているとも言っていました」

ジャーニイがすごい剣幕で怒鳴る。

「それはどこだ？」

「おい、やめろ」ジャクナがジャーニイを止めに入る。ジャーニイは煩わしそうに彼を睨みつけた。ジャクナは手に負えないと思つて、さつきから父の布団に座り込んでいるシャンティに助けを求めようとした。「シャン……」

シャンティはさつきから何も変わってはいない。一ミリですらも動いてはいないようだった。

シャンティは一人だけ、他人事のようにぼおつとしていた。彼は、つい先日まで元気そうにしていた父の姿を脳味噌の中で何回も再生しながら閉じこもっていた。無気力感を漲らせた彼の姿を外から見れば、すでに幽鬼のそれだった。

「それで、ファトス」ジャクナは彼に声をかけるのを止めて、ファトスに遺言状のありかを聞いた。「遺言状はどこに？」

「遺言状は、よくわからない方法で保管されているのです。私の知りうる限りで協力はしますが……」とファトスは言いながら侍従たちを見た。侍従たちはうんと頷いた。「わかりました。まあ、大丈夫でしょう。ついて来てください。まずは王の政務室です」

ファトスとジャクナ、ジャーニイ、ラッドハッドを含む侍従数人はシユラク王の棺桶をほつたらかして王の政務室に赴いた。おつフ

アトスはそこで机の中から一つの箱を取り出した。それを開け、中から鍵を取り出す。

彼らはそれを持ってもう一度シユラク王の自室に戻り、王の床の下から二つの箱を取り出す。黒色と白色の箱である。

「白色です」と侍従の一人が言った。生前にこのことだけを教えられていた侍従らしい。一人の侍従に全てを教えてしまうと遺言状が書き換えられる恐れがあるからそれ言う相手を分けていたのだそうだ。

彼らは鍵で白い箱を開ける。ここでジャーニイが気になって試したが、鍵は同時に黒い箱も開けられるようだった。さて、白い箱の中には高級な感じのつるつるのろうそくが数本入っていた。

「バラが入っている物です」とラッドハッドが言う。

ジャーニイはばらの入っている白いろうそくをボキボキと砕いた。中からはまた鍵が出てきた。ざわざわざわざわ、と彼らは蟻がしゃべる様な調子で小さく言葉を交わしている。その光景をシャンティは呪うような目で見ていた。彼は歯を打ち合わせ、肩を大きく震わせ、拳を握り、下唇の中の肉をブチブチと噛み裂きながら、怒りを蓄えていた。

侍従の一人が机の中から金属製の箱をもう一つ取り出してくる。ジャーニイは震える手でその鍵穴に鍵を入れ、回してみた。鍵が開き、ジャーニイは箱を開けた。

中には書簡が入っていた。誰もそれに手をつけようとする者はいなかった。

「ジャクナ」ジャーニイが言う。「あんたが王太子なんだ、あんたが開けるよ」

「後で文句を言うなよ」と前置きしてからジャクナは書簡を持つ。彼の手もやはり震えている。

「ええと……………ここだ。私が王位継承を宣言せずに死んだ時のために書き記しておく。王位は……………」ジャクナが父の遺言状を読み上

げる。「ジャクナに譲る」

侍従たちが、ふわぁーと嘆息する。その中にはジャーニー派の侍従もいて、彼らは明らかに落胆した様子だった。いや、落胆だけでいえばジャーニーの方がひどかった。彼は信じられないと言ったように目を見開き、床にへたりこんでしまった。

侍従たちが何やら口々に言い始め、ジャーニーを気にかけたり、ジャクナに取り入ろうとして阿諛あゆしたり、ジャクナはやや口角を拳げてひそかな喜びに酔いしれたり……。王の自室は騒がしくなり始めた。

「冒流ぼうりゅうだ！」シャンティは堪え切れなくなつて叫んだ。王子や侍従たちがハツとしたようにシャンティを見た。シャンティは立ちあがつて、彼らと父の入った棺桶を指さしながら叫んだ。「死者への冒流だ！ 父上への冒流だ！ 貴様らは、父上が死んだばかりなのに！ 畜生の糞めが、何なんだお前たちは！ 王位継承だと？ それがどうした！ それがどうしたと言っただ！ それは父上の死よりも重要なことなのか！ そんな下らないことよりも、父上は下らないと言っただ！」

彼らは言葉を失った。あれほど聡明で穏やかだったシャンティがこれほど乱れるとはだれも予想していなかった。不意を突かれた彼らは完全に委縮していた。誰も何も言い返せず、鼓動の奇妙な加速を感じた。

「シャンティ」ジャクナが勇気を振り絞つて強く言い返す。「何を錯乱している。父上が死んだからと言つて……」

「見よ、棺桶はここにある！ あるんだ！」シャンティは拳を固く握り締めながら、彼らににじり寄った。王子たちはなぜシャンティがそこまで今は亡き王にこだわるのかわからない様子で王子を眺めていた。「冒流は許さない！ まだ父上はここにいます！ 父上の魂はこの国にある！ それならば、ここはまだ父上の御前ごぜんぞ！ お前たち！ 父上の前での無礼だ！ 早く跪ひざまずけ！ 跪ひざまずいて無礼を詫わびるんだ！」

しかし、ここに至って彼らは理解する。シャンティは発狂していた。父の死んだショックで、物事が正しく考えられなくなっていた。彼はわけのわからないことを言っていた。いや、言っていることはある程度理解も納得もできることもかもしれないが、彼の口調や息継ぎの仕方、見定まらぬ瞳、震えの止まらない体を見ると、やはり発狂しているとしか言いようがなかった。

シャンティは怒り方がわからないようで、意味のないことを何度も言っただけを叱り、物に当たり、最後には獣のような叫び声を上げていた。侍従たちは始めてみる王子の癡癪かんしゃくに怯えていた。

「何をいつてる」ジャクナがいらいらしながら言う。「お前はおかしいぞ」

「貴様らの方がおかしいんだ！」

「シャンティ！」ジャクナが青筋を立てながら怒鳴る。「おれは、次王ぞ！」

「なにが！」

「騒がしいと思って来て見れば」不意に声がした。王子や侍従たちはまた驚いてドアの方を見た。そこには激昂するシャンティ王子の妻がいた。「なんですか、あなたが怒鳴っていたんですか」

「エレ……エレ！ 聞いてくれ、聞いてくれ！ コイツらは」ぶるぶる震えるシャンティはまた王子や侍従らを指さして叫ぶ。「父上が死んだばかりだと言うのに、王位継承などと下らないことで！」

「ええ、確かに下らない」エレは王の入った棺桶に近寄って、ガンツと一発蹴りをみまっした。その場にいた彼女以外の全員が息を呑む。「下らないことですね。これに入っているのは死体にすぎません。

死体にすぎないのです、シャンティ！ 王は死んだ！ そしてあなたや私は生きています！ そんなに死体が大事ですか？ そんなに死体が尊いのですか？ 生きています者よりも大事なのですか？ 生きている者よりも尊いのですか？」

「……と、尊いさ」

シャンティは苦しそうに言った。

「そう、尊いのですか。ならば、あなたは今すぐ首を吊って尊い存在になりなさいな。お義父上と一緒に存在になりなさいな。彼らからしてみれば」エレは王子や侍従たちを睨む。「その方がいいかもしれないわ。錯乱した男がこの場から消えるんですからね」

「エレ……君といえども、そのようなことを言うのは許さないぞ」
「シャンティは尊いという言葉の意味を御存じかしら？ いいえ、きつと知らないのでしょうか。本ばかり読んでいくせに。知っているかしら？ 尊いとは立派ということ、優すぐれているということ、価値があると言うこと」エレがもう一発棺桶を蹴る。「あなたは本当に馬鹿なこと言うのね！ 動きもせず、しゃべりもしない死体が、今の生きているあなたより尊いつて？ 愚かだわ、心底愚か、愚かの極み、愚かの至り。けれど、愚かなあなたは……その手で、その言葉で、その博識で誰かを救うことができるじゃない。死体と違つてね」

「しかし」

「確かに、故人を敬うのは大事よ。故人の前ではしたなく騒ぐのも馬鹿者のそれよ。けれども、その馬鹿も死体に比べたら値千金なのよ」エレが彼に歩み寄る。「何をとりみだしているの？ 何を騒いでいるの？ 王宮に住む人々が馬鹿で、心汚く、子供の頃からせつせと体とプライドばかり大きく成長させてきたどうしようもない人間だつてことはわかつていたことじゃない。いまさら失望する必要もないものじゃないの」

シャンティがへたりこんで頭を抱える。

「ぼくは……」

「いつものことね。どうしていいかわからないでしょう？ それでも死人にすぎるのは愚よ、シャンティ。死人が口を開くのを待つて思考を停止して、怒りに身を任せるのは愚の骨頂よ、シャンティ。あなただつて知ってるはずよ、死人はしゃべることができないの。つまりは、あなたの父はもうあなたに何も教えてくれない。けれども」エレが彼を抱きよせる。「あなたはすでに、必要どころか十分

どころか思いだせないくらいたくさんのお義父様から頂いているじゃないの。ならば、それを使ってやっていくしかないわ。それで足りないなら、いつもみたいに誰かを頼りなさい。あの憎たらしいギャロップや、むつつりスケベなウイスカ、堅苦しいシエイバス、お馬鹿な兄王子たち、薄汚い官人たちや……それこそ一番頼りになる私を、頼りなさいな」

「……」シャンティは息をとめた後に、彼女の体を強く抱きしめた。「糞、頭が……よくわからない」

シャンティが大粒の涙を流しながら静かにエレの胸の中で泣き出すと、王子や侍従たちはほっと胸をなでおろした。

「それで」エレは彼らを睨む。「あなたたちはどうするのかしら？ 私の良人おとこの前で、偉大なる故人の前で、このままワーワー騒ぐ馬鹿者を演じるのかしら？」

ジャクナと侍従たちは首を振って、すぐに王の棺桶を運ぶように官人や兵士たちに命令した。やがて王の棺桶は運び出され、ジャクナたちはそれについて行った。

部屋の中にはシャンティとエレ、それとへたりこんだジャーニイだけが残された。そのジャーニイも一時間後、ゆっくりと立ちあがった。エレは眠りこんでしまったシャンティを抱えながら彼を見ていた。

彼は言った。

「やはり、シャンティは弱く脆い」ジャーニイは厭世的な風に言った。「孤独を嫌うからだ。独りを恐れるからだ。他人に依存するからだ。」

「私の良人を馬鹿にしているのかしら」とエレは不躰につばやいた。

「父上を喪っただけでその取り乱しようだ。馬鹿でなければなんだ」ジャーニイは言った。「ふん、糞。おれはやってやる。これから先、あのジャクナのせいでおれは独りになってしまうだろうが、おれは独りだってやってやる。それが強い証だ。証なのだ。英雄の証な

のだ」

エレが吐き出すように言った。

「英雄とは下らないものなのね」

「常人にはわからないことだ」

「そう、ならば心底思いますわ。常人でよかつたって」

「ふん」

彼は鼻を鳴らしてから、ゆっくりと歩きだした。彼には全く生気も宿っていなかった。けれども、彼には確固たる意志と圧倒的な逆恨みによる復讐心があった。

彼の道は一本に定まっただけで、もはや迷いようがなかった。

彼は兄も弟も全てを殺すことを決意した。

彼はその異常をもって孤独への賛美とした。

二二二一年の年明けの冬。シユラク王が夜の間に急死してしまうと国民たちは悲しみに暮れた。シユラク王の遺体は次の日に火葬され、残った骨は代々サウルス王を祀っている墓の下に埋められた。そして、ジャクナ三世は前王シユラクの遺言状通り王位を継承する。

各地方から貴族や有力者、もしくは彼らの使者が集まり、王宮内の大極殿で王冠授与の儀式は行われた。本来は王が次王にそれを手渡すはずなのだが、今回はそれを行うことができないので、彫刻師に竜の彫刻を作らせて、その彫刻の頭に王冠をのせ、ジャクナが竜の頭から王冠をとり自分の頭にのせる。というような授与の仕方をとった。シャンティは大分あとになってこれについて調べたが、もちろん前例もないし、こんなことは規定されていなかったらしい。これについては、王権が聖獣から譲られたものと考えられていたか、前王シユラクが聖獣となったと言う風に考えられていたかのどちらかであろうと思われる。

さて、ジャクナ王は王位継承と共にこれから二年間、つまりは二三年までは国内の安定を心がけ、その後にはサンジャヤへの侵攻を開始すると宣言した。このサンジャヤへの侵攻はジャーニイの意向

を受けたものとされるが、ジャーニイ自身がそれをいった可能性は低い。なぜなら、ジャクナ三世が即位してから二週間に行われた人事異動の中で、ジャーニイ派に属していた官人たちは次々に要職から遠ざけられたからである。

つまり、ジャーニイから力を奪う代わりに、彼の望んでいることを自分が実行することで、弟が危険な反乱分子となるのを避けたのである。

ジャクナ三世はジャーニイを心底嫌っていたが、ジャーニイは王族として多種多様な英才教育を受けた有能な人物である。自分の野望のことを考えた時に、ここで有能な人材を退けるのは得策ではないと新たな王は思ったのだらう、そのためジャクナはジャーニイに一定の待遇を与えた。

ジャクナは、ジャーニイの任地先はジャーニイ自身に決めさせたいし、五百の近衛兵以外に王から与えられた三百の私兵を持つことも許した（王から私兵を与えられるのは名誉なこととされている）。それでジャーニイは自分の任地先として西部カバルス地方を指定して、そこでのカバルス鎮定を続けることを新王に了承させた。

ではジャクナ王はシャンティに対してはどういう待遇を与えたのか。

シャンティ派と言われている者たちは今回のジャクナ即位でほとんど被害を受けなかった。そして、やはり利益を被ることもなかった。彼らは今まで通りの役職を与えられたのだ。

シャンティ自身は北部カンプトケファレにて引き続き総督をするように命じられ同時に東部ヘドロケラスへもある程度の権力が及ぶようになった。これではシャンティの権力の及ぶ範囲が異常に大きいような気もするが、ジャクナ王がそれだけ彼を信用していた証明でもある。もちろん、それだけではない。ヘドロケラスの不作続きに関する問題のほとんどをシャンティとカンプトケファレに処理させようという魂胆もあつての処遇だった。

今回の王権交代における短期改革の最後の一手として、ジャクナ

王は亡き母の実家であるカマラ家の数人を王宮中枢の官人として取り立てた。

彼らはいきなりのごとで驚いていたようだったし、東部の片田舎の貴族だったもので、王都センチュリオンにいる都会の官人たちに苛められやしないかと怖がっていたようだった。普通なら彼らの思った通りに、田舎者のカマラ家は都会の官人の中では邪険にされるはずだが、そこは権謀術策の腹の中で生きてきた王宮の官人たちである。彼らはカマラ家を、これから王の最大の庇護を受ける者たちとして考え、逆にカマラ家に取り入ろうと阿諛し始める。

カマラ家の人々も自分たちの立場を徐々にわかまえるようになってくると、まるで王族のように振舞うようになり始めた。

とはいえ、こんなことは代替わりの度に起こるようなことである。そう、彼らただ、この先いくらかの年月、思わぬ幸運を享受する権利を得ただけにすぎない。

これから二年後、ジャクナ王は先代から引き継いだ領土拡大事業の第一歩としてサンジャヤを攻める準備を始める。

その遠征が始まるまで、サウルス国民はしばしの平穏を得ることになった。

24・次の王は？ そんなことより (後書き)

画像はお兄ちゃん。頭が……。

毎回中身を読み返すたびに思うのは、ノリで書いてんなあってこと
とです。

あと、エレが出てくる会話は本当に恥ずかしくて、読み返す気力
さえなくなってくる。

25・出発準備

> i333181—4057<

二二三年の年明けの冬。その終わり頃。

サウルス国内はサンジャヤに向けての準備でんやわんやだった。今回の遠征の総司令官はもちろんジャクナ王である。その次の副司令官はジャーニイである。エラルジス大將軍は最後の従軍としてこの遠征について行くはずだったが、ジャーニイ派の司令官が二人もいるのはまずいと言うことが軍議で騒がれたので、彼の代わりにギャロップを副司令官・大將軍に任命し、連れて行くことになった。

エラルジス大將軍は引退試合も無しに引退することになり、やや不機嫌そうにしていた。

それでシャンティは今回どうするのか。彼は王都センチュリオンで御留守番である。

ジャーニイとギャロップは遠征出発の前日にシャンティとエレの住む王都の離宮を訪れた。サンジャヤ成敗の遠征の間の王都の留守番のためにシャンティたちははるばる北都ウチノホークから一時帰還しているのだ。

ジャーニイが昼間に彼の離宮を訪れると、シャンティがすたこら入口までやってきて出迎えた。二人は彼の案内のもと、中庭に赴き、そこに置いた白い丸テーブルの近くの椅子に座ることを強制させられる。ギャロップはなぜか蒼い顔をしている。

「おい、どうした？ 大將軍」ジャーニイが不躰な感じに質問する。ギャロップは首を振りながら、ある方向を指さした。ジャーニイが訝しみながらそちらの方向を見ると、エレが赤ん坊を抱っこしながら歩いて来ていた。「……親馬鹿め」

「あ、エレ」

シャンティが近づいてくるエレに気がついて駆け寄る。エレは何となく誇らしげにしながらジャーニーの方に寄って行って赤ん坊を差し出した。

「大きくなったと思いませんか？」とエレは満面の笑みで言う。

「抱きたいなら抱かせてあげないこともないのですが……」

「……ああ、抱っこさせてもらおうか」ジャーニーは嘆息しながら赤ん坊を受け取って、腕の中であやし始めた。赤ん坊はリュキウスという名前で、昨年後半にシャンティとエレの間に生まれた男の子である。「あばばば」

シャンティはもちろんのこと、エレはジャクナ四世の時も彼をしれつと連れて帰ろうとしたことがあるくらいなもので、どうやら子供好きであるようだった。

少し話はそれてしまうが、考えてみるとシャンティとエレは十四歳で婚約し、十七歳で結婚して、子供ができたのは二十六歳だから、つまりは結婚から九年かかってやっと子供ができたことになる。

シャンティとエレのどちらかに子供の出来にくい要素があったのかと調べてみれば、そうではないらしい。北国の自警軍の百人隊長ビッグフットの覚書は彼の死後（作中の現時点では死んでいない）シャンティによって保管されており、その覚書によると、シャンティは宴会場で酔っぱらって「エレが、まずはできるだけ二人でいたい、と言ったのさ。ははは」と発言したとことがあるらしい。

エレの「できるだけ」と言うのがいつまでかは分からないが、この時期に子供ができたのを考えるとジャクナ四世のことがあって彼女が子供を欲しいと望んだのだと考えるのが妥当である。

それはさておき、離宮の中庭の丸テーブルを囲むようにシャンティ、エレ、ジャーニー、ギャロップが座って、エレが息子を見せびらかすのに満足して部屋に戻ってからやっと話しが始まった。

「おれは明日出発だぞ、無駄な労力使わせるな……」ジャーニーが疲れ切ったように背もたれに体重を乗せた。その拍子に空を見てみれば、その日は曇り空だった。「曇り空なのに、中庭ってのは……」

「いやはや、ジニー。さつきはなかなかだったよ」シャンティが上出来、と言う感じに親指をたてる。「大体、君にだって子供ができるんだ。良い予行演習だと思って……」

「ふん」とジャーニーは鼻息を鳴らす。実は彼も前年に結婚している。相手はサウルスの貴族の娘である。彼にとつてこの結婚は、国内での地位を安定させるものにすぎない。サウルスの貴族と結婚することで、サウルス国には刃向わないぞ、と暗にジャクナに言っているのだ。「しかし、子供一人であの女がこんなにも変わるとはな……いや、前の方がまだよかつた気がするが……」

「お前なんかまだいい方だ」ギャロップが泣き出しそんな顔で言う。彼の顔は徐々に血の気を取り戻している。「おれなんかは魔女に、大將軍は馬が好きだから、馬の真似ができますか？ ああ、できませんか……それでもやってみてはいかが？ つてな感じで一時間お馬さんごっこだ。おれは馬に乗るのが仕事なのに！」

「あれはよかつたよ。リュキウスも喜んでいた。喜びすぎて後半は寝ていたくらいだ」シャンティが上出来だった、と言う感じに親指をたてる。「でも、君も父親になったんだからさ……まあ、あれくらいは慣れたもんだらう？」

「お、おれはだな」

ギャロップはまた顔を青くさせながら言った。ギャロップの息子、マスタングは去年の前半に生まれた。相手はもちろんかねてから話にも上がっていたエレの侍女フェミナである。とはいえ、彼らはまだ結婚していない。

「大將軍はなんとも複雑なようだが、結局どうなっているんだ」

とジャーニーがシャンティに訊いた。

「子供がいるのに二人はまだ結婚もしていないんだ。本来ならばフェミナを彼女の実家に返すか、ギャロップの家に置いておくかした方が良いんだけどね」シャンティが困ったような顔で説明する。「彼女は実家に帰りたいがらないし、ギャロップは兵舎で寝るか、間借りしている部屋で寝るか、ぼくの家で勝手に寝るかだし……。それ

で、フェミナはエレの侍女を続けながら、エレの計らいで離宮に部屋を借りて子供を育てているというわけさ」

「なにそれ、サイテー」

ジャーニーがギャロップを睨みながら言う。

「い、言っておくが、金はちゃんと払っているからな、養育費は」
ギャロップは苦々しそうに顔をそらす。

「お前、本当に最低だな」ジャーニーは心底呆れながら言う。「ふん、まあ、そんなことは前々からわかっていたことだ。それよりも今回の遠征の人事のことだな」

「うん？」

シャンティが首をかしげる。ギャロップもジャーニーを見た。

「おれとギャロップを連れていくところなんぞ……あからさまだとは思わないか？」

「なにがさ」シャンティが訊き返す。「ジニーとギャロップ。二人はすでに名の知れた將軍だ。軍事行動を起こそうと思えば、君たち二人を加えないわけにはいかないだろう？ ……もしかして、エラルジス大將軍のことを言っているのかい？ 確かに、エラルジス大將軍を連れて行かないのは少し不安だけど……ウイスカやシエイバスの推測によると、兄上はサンジャヤ成敗の次の遠征を見越して軍全体を若くしようとしてらっしゃると……」

「サンジャヤの次の遠征……」ギャロップが呟く。「東か？」

「おそらくね」シャンティが微笑みながら頷いた。「ぼくも兄上から何度か東への遠征の話しを聞いたことがあるよ。まあ、父上が失敗した地でもあるしねえ」

「話しがそれてるぜ。おれが言っているのは、おれとギャロップを遠征に連れて行くことだ」ジャーニーが二人の会話を払いのけるように手をひらひらさせた。「シャンティ、わかっているのか？ お前はギャロップを奪われることによって弱体化させられんだぞ」

「とはいっても」シャンティがギャロップを見る。「ギャロップはもともとぼくの子飼いの將軍と言うわけではないしねえ」

「ふん、お前ならそう思うと思ってたさ。それでも話しは続けさせてもらっぜ。今回、奴がおれとギャロップを連れていくのは単純に、危険分子を手元に置いておきたかったからなんだよ」

「ジニーは兄上と仲が悪かったから敵視されるのもわかるけど」シヤンティが言う。「ギャロップはそうでもないよ。いや、むしろ仲は良いよ。ねえ？」

「さあな」

ギャロップはにやにやと意地悪そうに返す。

「あいつはお前がギャロップと共に王都でクーデターを起こして、自分を排斥しようとしやしないか恐れてるんだよ」ジャーニーが言う。「いや、お前がそれを望んでいなくても、ギャロップがお前をたぶらかしてそれをさせるかもしれない。そう言う風に恐れてるんだ」

「おれがいる前で言うかね、それを」

ギャロップが辟易しながら言う。シヤンティも呆れながら質問する。

「でも、それならば、そんな危険分子を二人揃って自分の側に置いておくなんてあり得るのかな？」

「おれとギャロップは別段仲が良いというわけではないからな」

ジャーニーが言うと、ギャロップはうんうんと頷いた。

「それで？」シヤンティが改めて質問する。「兄上がジニーやギャロップを手元に置いて、もしものことが起こらないようにするからどうしたっていうんだい？ まさか、ぼくにクーデターを起こさせていうんじゃないだろうね？」

「そんなことはいっていない」ジャーニーは腕を組みながら言う。

「ただ……力を徐々に奪われて、気がつけば自分が何もできないようになっていた、なんてことにならないように忠告しに来ただけだ」

「……兄上がぼくたちを殺すと？」

「さあな、生殺しにするのかもしれないな」シヤンティが首を振る。

「どつちにしても憶測にすぎないよ」

「しかし手は打っておいた方がよい」ジャーニーが冷ややかな感じに言う。「奴の侍従にレフティスと言う奴がいるだろう？ お前と奴は仲が良いらしいじゃないか。あいつにジャクナの周辺を探るように依頼しておいたらどうだ？」

レフティスはカバルス鎮定軍に関する裁判の時に、シャンティたちを陥れようとしていたジャクナの侍従である。彼は裁判の最後にジャーニーたちに嘘の証人を連れて来たとして責められていたが、シャンティがそれを有耶無耶にして事なきを得た。それから彼はたまにシャンティと食事会をしたり、手紙を送ったりして懇意にしているわけだが。

「けど……彼は現状、あんまり兄上から信用されていないらしいよ。手紙にそう書いてあった」と言うわけで、彼は裁判の失敗以来ジャクナからはあまり重用ユキヨウされていない。つまり、ジャクナの派閥の末席になんとかしがみついているくらいでしかない。「それに、そういうのは気が引けるなあ」

「それなら、やらなければいい！」ジャーニーは急に立ちあがって怒りっぽく言う。「おれはお前のためを思って言ったまでだ！」

そういうと彼は向こうに歩きだしてしまった。シャンティも立ちあがって追いかける。

「もう帰る、ついてくるな！」

とジャーニーが怒鳴ると、シャンティはしゅんとなってその場に立ち止まった。

「ああ、バイバイ、ジニー」シャンティは小さく手を振ると、またテーブルに戻って、ギャロップに言った。「よくわからないけど、ジニーは最近怒りっぽいんだよ。変なことは言うし……君は何か原因を知らないかい？」

「知るわけがねー」ギャロップは興味なさそうに言った。「結婚してナイーブになってんじゃないかねえのか？ 思っていた結婚生活と違ってた」

「君はそう思ったのかい？」

「おれは結婚していない。はん、お前の次の質問はわかってるぜ。なんでえ、質問しないのお？ だろ。ふん、おれには妻だとかそんなのは必要ないからだ」

「フェミナは君を必要としているよ？ ううん、彼女は、自身と子供を養えるだけの金や金づるを必要としてるだけじゃない。君自身を必要としているんだ」シャンティは頬杖を突きながら横目でギャロップを睨む。「ギャロップ、彼女は君を愛しているんだよ」

「……」ギャロップは何かを言おうとして、止めて、固く口を結んだ後に、震える唇で言った。「それがどうしたって？」

「……別に」シャンティは白々しいと言つような目を彼に向けながら、微笑みで返した。「ぼくは真実を伝えただけさ」

「ふん、お前はいつからそんな、依頼人の恋文を誰かに読んで聞かせるような、ロマンチックな仕事を始めたのかね？」

「なに、御留守番組は暇だから、この暇を期に手広くやっていこうと思いつてね。それじゃあ、そろそろ恋文読み上げの代金を貰おうかな？ ギャロップ大將軍」

シャンティは掌を差し出す。

「おれが出すのかよ」

「銀貨にしてこれくらいは貰わないとね」

とシャンティは手を広げて見せる。

「養育費かよ」

ギャロップが財布をひらひらさせて持ち合わせがないと薄ら笑いを浮かべる。

二人して笑っているそばつぼつと雨が降り出した。二人はそう言えば曇り空だったなどと思ひながら部屋の中に入る。奴隷たちは雨に濡れながらテーブルや椅子を部屋の中に入れていく。

「明日は雨でも出発なのかな？」

シャンティが灰色の空と無色の雨を純真無垢な目で見つめながら誰に問うでもなく訊いた。それにはギャロップが答えた。

「雨でもいくさ。歩いていようが寝ていようが兵士は飯を食うんだ。それならば歩かせた方が得だ」

シャンティは柔らかい笑みを彼に投げかけながら言う。

「ギャロップ、死ぬなよ」

「誰に言っている？」ギャロップが腰に手をあてて、彼を見返した。

「まさか、俺に言ってるんじゃないあるまいな」

「そうさ、王国の大將軍ギャロップに言ったさ」

雨は、その夜に雷を伴った大雨になり、曙の頃合いには少し治まってきたが依然として降り続いていた。

その日の朝、ギャロップの言った通り行軍は始められた。ギャロップの軍集団を先頭にして、次にジャクナ王、最後にジャーニイの軍集団が続いた。合計で五万人の兵士が従軍しており、ギャロップとジャーニイには一万五千ずつが、ジャクナ王には二万の兵が配分されている。兵種に関しては重装騎兵と言う新兵種が新設され、そのせいで騎兵の数が目に見えるほどに増えた。

王と五万人の兵隊たちは王宮からセンチュリオンの大通りを通って市城壁の門から市内へ意気揚々と出ていく。雨だと言うのに町の人々は大通りに出て花を降らせたり、歓声を上げたりした。自分の息子が従軍することを誇らしげに宣伝する初老の女性もいれば、悲しみから来る涙を止めることができない男性もいた。ジャクナ王燃える様な赤髪を雨に打たせながら嬉々とした様子でその中を歩いた。シャンティたちは門の外まで最後尾にっていた。シャンティたちは門の外で横に広がって遠征軍を見送る。

五万の兵隊がぞろぞろと大きな蛇のように石畳の街道を歩いて行く。

シャンティは空を見た。依然として黒い雨空で、彼らの進む方向も同じような黒色の空だった。

「物語でいうと、こう言うのは前途の多難さを表わしているものだよな」

とシャンティは彼らを見つめながら呟いた。

「確かに」

シエイバスが隣で不機嫌そうな顔を浮かべている。

「まだ怒っているのかい？ ウィスカがギャロップの下に配されたことを」シャンティが彼を慰めるように言う。ウィスカはギャロップが大將軍に任命されると同時に、彼の侍従として仕えることを志願してそれが受け入れられた。シャンティはその相談を受けており、了承もしている。けれど実の息子のシエイバスだけは納得がいかないようだった。「君もいつまでも拗ねてちゃいけないよ。なんてっ たって、君はもう近衛兵団の隊長で、ぼくの第一の侍従なんだから」シエイバスはふっ、と息を吐いてから「そうですね」と頭を掻いた。いまだに納得はしていないようだが、何とかしてふっきれようと努力しているようだった。

「ともかく、ぼくたちにできることは食料や追加の兵を送ること、王都を守ること、それに彼らの帰還を想って祈ることだけだ」

やがて、大きな蛇のような遠征軍は見えなくなった。シャンティたちはその後十数分はそこに立っていたが、雨脚が激しくなり始めたので王宮に戻ることにした。

その帰り、激しい雨が降っているにもかかわらず広場中央の守護聖獣像の周りに人々が集まっているのをシャンティは見た。

祈るしかないのだ。シャンティはさっきの自分の言葉を思い出しながら見ていた。そして、目をつぶり、彼らの安全を祈った。

しかし、彼が目を開けた時も空は雨を止める気配すら見せず、シャンティは「祈りは通じていないのじゃないか」と思った。

25・出発準備（後書き）

画像はフェミナさん。なぜかバイキング風な服を着ている。理由はない。

名前はギリシャ語からラテン語で「女」という意味です。安直すぎるにもほどがある。

たしか、この娘は女性陣の中で一番最初に描いた娘で、その時はまだ出てくる女性のビジュアルをつかめてなかったんでしょうなあ。

26・サンジャヤ征伐

> i33229—4057<

二三年春、サンジャヤ成敗のための行軍が始まった。

それは初日からして雨だった。雨は数日間降り続いたが、石畳の街道を通っていたために足場が悪くなるようなことは無かった。それでも服が濡れて重くなるのが煩わしく、また冷たい初春の風に吹かれ、出発すぐに風邪をひく者もちらほらいた。

それでも何とかカバルス地方に到着し、だんだん暖かくなってくと兵士たちも元気を取り戻し始めた。また、サウルスの特産品である石畳の街道がカバルスの広範囲に張り巡らされていることにはサウルス兵も驚いていた。

いくつかの草原地帯や乾燥地帯を越えてニー平原を通過し、ヒジユメ大平原に入るともう西都ヒツパリオンだった。ここに至るまでサウルス軍は一度も交戦しておらず、その事実にはジャーニイの長年の努力が垣間見えるようだった。

ジャクナ王たちはヒツパリオンで兵士を休ませるとともに、カバルス地方南部やサンジャヤのあるイハテリオ地方の情報を集め始めた。が、情報はなかなか集まらなかった。重要な情報は例の組織によっていたところで握り潰されていたのである。

情報を集められなくとも、大軍を一つ所にずつと押し留めておくとかかと不都合が起こる。ジャクナ王たちは仕方なく西都を出発することにした。

このあたりから徐々にカバルス諸部族の抵抗を受けるようになる。しかし彼らは少数の精鋭部隊を率いたギャロップの前には歯が立たなかった。ギャロップはそこで自分と同じカバルス人を蹴散らして回った。

味方だと思っていた暖かさは南に行くに従ってどんどん暑さに変わっていった。まだ春であるにもかかわらず兵士たちは真昼間の行

軍を極端にいやがるようになる。それでもゲリラが多発する地域を夜に行軍するのは危険である。ジャクナ王は兵士たちを鼓舞した。

「今回の遠征は征服するためのそれではない。カバルスの安定を裏で脅かしているサンジャヤ人共を黙らせ、屈服させ奴隷とすることが目的なのだ。つまりは奴ら自身も、奴らの持ち物も、全て我らの物だ」ジャクナ王は陽光漲る真昼間の食事時に兵士たちの前に立つて演説した。「サンジャヤの諸都市を落とした時は毎回君たちに略奪を許そう。食料も女も財宝も君たちの物だ。サンジャヤの富は全ては君たちの物だ」

それに魅せられた兵士たちは数多くの山や谷を越えて国境線とも言えるコロナ山脈に着いた。強い山背風が吹き、煩わしい砂塵が飛び交う中を彼らは進んだ。そして、頂上に着くと共に、サンジャヤに広がる平原に大勢の人間が蠢うごめいているのが見えた。「サンジャヤ兵だ」と誰かが言った。それは正解だった。

山を完全に下り切る前に軍議が始まった。王と大將軍、將軍、上級隊長たちは簡易天幕テントの中に集まった。

ジャーニイが開口一番に言う。

「山で戦うか？」

ジャクナが答える。

「いや、出来るだけ平原で戦いたい。山で戦うと馬が有効活用できない」その答えにはジャーニイもギャロップも頷いた。「敵は歩兵が基本だから、こつちとしては出来るだけ騎兵の力を使いたい。大分前から言っているが、この戦争では重装騎兵を主力としたいのだ」

重装騎兵。ジャクナの考えた戦法では以下のように考えられていた。『彼らの大型馬には鎧を付けて、騎乗者にも鎧を付ける。彼らは一同に長い槍を装備し、突撃力・衝突力を最大限に生かした攻撃をする。敵の防御を破るのから壊滅に追い込むまで、全てを担うことのできる汎用性の高い兵種である。』と。

ところが、ギャロップだけはこれに懐疑的だった。ギャロップは新兵種重装騎兵の創案の際にこんなことをいつている。

「騎兵の特徴は突撃量や衝突力だけじゃない。その機動力の高さもそうだ。だが、馬も騎乗者も重装備に身を包むとなると、やはりそれは減耗げんこうしてしまうはずだ。おれとしては納得いかない」

これにはジャクナ王がこう返す。

「確かに機動力は落ちる。だが良く考えてくれ。一方で、騎兵に足りなかった防御力を上げることができ、育てるのが難しい騎兵の命を守ることはできるはずだ」

鎧のなかったこの時代では、馬に乗れることだけでもステータスである。

「ああ、騎兵の防御力を上げることに賛成だ。ですがね、その代替としてなにかを犠牲にするのは駄目だ。大体、騎兵の防御力をあげたとしても、人員の命を守る以外の利点がないだろう。騎兵などどこまで突き詰めても歩兵の盾の壁のような堅固な守りの陣をひけるわけじゃあないんだから」

「將軍、君の意見はもつともだ。けれども、どうだ？ 一度やってみようじゃないか」

一度やってみる……これで全てが決まった。

即刻新しい兵種が作られ、それを育成するための訓練が始まった。試してみると悪くなかったのだが、長い長い旅をするにつれてその欠点が見え始めていた。

重装騎兵は荷物が多すぎた。馬の分と人の分の鎧を運ばないと駄目な上に、大型馬は大量に糧秣を消費した。

これで役に立たなかったらこの兵種は即刻廃止になるはずだった。

だが、コロナ山脈の奥に会ったポミネス平原でのサウルス軍とサンジャヤ軍の戦いはサウルス軍の圧勝で終わった。

サウルス軍は弓兵を使い、敵を乱した後は重装騎兵の集団をぶつけることで敵を容易たやすく突破した。後はもう敵が逃げるのを軽装騎兵や歩兵が惨殺していくだけだった。

正直な話、騎兵突撃の際は落馬などで多くの損害も受けていたの
で、お世辞にもスマートな作戦とは言えなかった。しかしその戦闘

の派手さが、サウルス兵士たちを意気軒昂にした。彼らはそのままサンジャヤの奥地に進んでいった。サンジャヤの大地は荒涼としていた。そのおかげでゲリラ的な攻撃を被ることはなかったが、その代わりに食糧難が降りかかってきた。どうもカバルスからの支援が途絶えているらしかつた。

それでもサウルス軍は現地で手に入る食料で何とかやっていけたわけだが、サンジャヤ軍が焦土作戦を開始するとサウルス軍は一気に困窮に陥った。さらには、地図もほとんどなく、目星となる物もない大地で彼らはしばしば迷子になってしまう事態が起こった。

その時、ジャクナ王のもとに一枚の手紙が届いた。それはシャンティからの物であり、彼はヒツパリオンにいるレフティスにそれを送り、レフティスは私的にそれをジャクナ王のもとに届けた。

その手紙によると、カバルスのどこかで輜重隊や連絡隊が攻撃を食らったり、そもそも物資補給を要請する連絡が入っていないかったりしているのだそうだ。シャンティはあまりにも物資補給の要請の頻度が少ないのに気がついて、私的にレフティスに手紙を送って、誰にも邪魔されないように連絡したのだった。

ジャクナ王はジャーニイをカバルス地方に返すことにした。ジャーニイは何度も拒否したが、結局最後にはカバルスに戻り兵站部門を担当することになった。帰る際、彼の兵のうち五千がギャロップに譲渡された。

これによりサンジャヤに遠征しているサウルス軍の兵站事情は改善された。十分な糧秣によって腹を満たしたサウルス軍はサンジャヤにズンズン攻め込んでいくが、サンジャヤの王都に迫るほどに要塞の守備は堅固になり始めた。騎兵が中心だったサウルス軍は攻城戦ではほとんど騎兵の利点を生かせない。そこで、平原に誘い出そうと逃げ出すふりをしたりもしたが、敵は全く誘いには乗らなかつた。

二つの要塞を落とした所で兵站事情がまた悪くなり始めた。ジャクナはレフティスを通してシャンティに不備は無いかを問いただした。

だが、シャンティの答えは「今のところない。追加の兵と糧秣を送っている」とのことだった。ジャクナもシャンティが嘘をいつているとは思わなかった。そうなると思いの怪しいのはジャーニーである。

ジャクナが次の都市を攻めるために行軍していたある夜、天幕テントの中を行ったり来たりしながらジャーニーのことを考えていた。

あいつは昔から王位を望んでいた。おれの存在をそんな理由だけで恨んでいた。いや、それだけではない。奴は、おれの母上が奴の母を殺したと思っていやがるんだ。糞、そんなはずは無いのに。大體、殺したと言えば、奴らの母親がおれの母上を殺したようなものだ。いきなり妙なタイミングで死ぬから、毒殺の嫌疑がおれの母上に向けられて、それがストレスになって……。

ジャクナ王は齒ぎしりをしながら近くの物を蹴り飛ばしたが、彼の怒りはまだ治まらなかった。ジャクナ王は地面を何度も蹴った後に、天幕を出て侍従に捕虜になっていたサンジャヤ人の女を天幕に呼ぶように命令した。

やがて、女はおどおどしながら王のもとにやってきた。彼の妻のユルシュほどではないが、西南諸国の女にありがちなスレンダーな体つきとしつとりとした肉感、熱く黒い瞳を持った良い女だった。

ジャクナ王はその夜、ひとしきり女を弄んだ後すつきりした様子で眠りこんだ。

王などの高級な身分の者が妻以外の女と交わるのも、複数の女も娶るのも悪いことではない。現に、ジャーニーはこの遠征が終わると共にエラルジスの孫娘を第二の妻に迎えることが決まっている。そして捕虜の女を犯すのもこの時代ではよくあることだった。

「はあ？ ジャクナ王が女なしでは寝られなくなった？」ギヤロツプが、それを知らせてきたカバルス騎兵隊長の言葉をオウム返しした。彼らは今もサンジャヤの炎天下を行軍している。「それがどうした？ 別におれたちだって捕虜の女を相手にすることもあるだろっ」

「いや、それがですね。度を越しているんですよ」とカバルス語で彼は言った。「一夜に何人も女を連れ込んだり……しかも、金を払わないし」

あまりにも毎日淫行にふけっていると兵の士気が落ちると言う理由で、サウルスの軍では行軍中に女を抱くには結構な金がいる。それは貴族も同じで、貴族の場合は平民よりも多くの金をとられることになる。その金は軍の物となり、軍費の足しにされる。金を払わず、なおかつそれが他の者に見つかり、その兵士の食料や装備に罰則が与えられる。

つまりは、軍律上は行軍中に女を抱くのは禁止であるが、なんだからだといってそれは完全には取り締まることはできないので、それならば金を払ったら良いことにしよう、と言う感じである。

この制度はジャクナ二世の時代までではない。都市サウルスの兵を恐るべき練度にまで鍛えあげたジャクナ一世は軍紀が乱れるようなことは認めず、ジャクナ二世も同様の考えだったようだ。で、この制度はシハルク王の時代からできたものである。英雄色を好む、というようにシハルク王も多くの女と床を共にしており、その猟色癖は戦争の最中ほどひどかったそうだ。とはいえ、隠し子は数人いるとされているが、彼はそれほど多くの子供を為してはいない。

というわけで、サウルス軍においては行軍中の淫行もきちんとした所を通せば悪いわけではない。

「けれども、王のあれはやり過ぎだ」カバルス騎兵隊長が苦々しそうにいう。「大体、おれたちのユルシュ姫という絶世の美女を妻に持っていながら……将軍、将軍が王になんとか言ってくれませんか?」

「おれが? 無理だろ。別にそこまで悪いというわけではないし。王がそれだけやってるんなら、他の男たちもおおっぴらに出来るってもんじゃないのか?」

ギヤロップはつまらなそうに返し、その話終わった。

ギヤロップの樂觀をよそに、やがてそのことへの不満は充満して

くる。さらには、食料がうまい具合に手に入らず、腹が減って苛々している男たちには、まさに好き放題のジャクナ王の行いは耐えられないものだった。

「ジャクナ王は毎日腹いっぱい食ってんだよな?」「そんだけ」「日がな一日馬に乗ってるのになんで腹が減るのか」「そんなのわかってんだろ? 夜のためだよ」「戦争になったら声出せば良いだけ」「そんで夜はたらふく食って女を抱く」「女もたらふく食ってんだ」「おれたちには金を払わせるのに、王は払ってないらしいじゃないか」「糞つたれ」「なあ、本当に糧秣は少ないのかな」「どういうことだよ」「もしかすると、糧秣はいっぱいあるけど、おれたちに配られてないだけじゃないのか?」「ジャクナ王たちが蓄えてるってことか」「ありえる」「ありえるありえる」「なあ、カバルスのあんちゃん。ギャロップ大將軍はどうなんだ?」「……わからん。馬の乳を飲んでいるのを見ると、食料は十分じゃないようだけど」「演技かな?」「一概に否定はできない」「問いただした方が良いんじゃないか?」「やめとけ、殺されるぞ」「んでもさ」「ああ、どうにかして確かめるだけ確かめておかないと気が済まないぜ」「わかった、やるう」「どうする?」「……ああ」「……おお」

数日後、兵士たちの糧秣を乗せた荷馬車がサウルス兵たちに襲撃された。その中から少量の糧秣しか出てこなかったため、兵士たちは疑念を晴らしたが、実行犯たちは厳しく罰せられた。

軍の雰囲気悪さはジャクナにもわかっていた。だから女遊びは止めたが、カバルスからの糧秣輸送の問題は一向に解決しない。ジャクナはジャーニーに対する不信感を徐々に募らせていくことになる。

一方、ジャーニーの方もサンジャヤ遠征軍からの連絡や要請がうまく伝わっていないことは承知していた。その原因がカバルスにあることにも気がついていたが、やはり前回のカバルス鎮定の際の兵站部門の不具合同様、今回も詳しい原因はわからなかった。ジャー

ニイは前回と同じく、スパイを目に見える形で配置することで犯人たちの動きを封じた。だがそれも不具合を完璧に正せるものではなかった。

前線の情報の伝達がうまくいかないだけでなく、輸送途中の輜重部隊がカバルスの諸部族やサンジャヤの少数部隊に襲われることもあった。護送兵団を付けることでこれに対処するが、その兵団の分の糧秣なども運ばなければならぬので一回の輸送で運ぶ糧秣の量は増え、しかしサンジャヤに遠征している兵隊たちの分は増えなかった。

サウルスから送られてくる兵士を輸送部隊の護送兵団としてつけ、向こうに着いたら護送兵団はそのまま残るといふ策もとったが、帰りの輸送部隊は護送兵団がないので格好の的になった。それならば、と輸送部隊も追加兵として全部部隊がそのまま残るようにしたが、それではいちいち新しい馬車や馬を用意しなければならぬ限り、戦費がかさむ一方だった。

ジャーニイは自分の作戦がうまくいかないことに苛々していたが、サンジャヤからジャクナ王の叱責の手紙が届けられると、彼はついに堪忍袋の緒が切れたようにカバルスを出発しサンジャヤに向かい始めた。

そのことはレフティスによってすぐにシャンティに伝えられた。シャンティはジャーニイをなだめかす書簡を送って、ジャーニイは何とかコロナ山脈越えをとどまった。しかし、このことはジャクナ王にも届いており、ジャクナ王はこれをジャーニイの反乱と考えてサンジャヤそつちのけでジャーニイ軍を撃滅する準備を始めた。

同じ頃、ギャロップのもとにシャンティからの手紙が届き、ギャロップにジャクナ王をなだめかすように頼んだ。手紙はジャクナ王の方にも届いており、これとギャロップの説得により何とか事なきを得た。

その後もサンジャヤ攻めは続き、ジャクナたちはいくつもの都市を攻め落とした。けれど、彼らが都市を攻め落とした時にはどの都

市の食糧庫もサンジャヤ人によつて燃やしつくされており、やはりジャクナたちは食料を手に入れることはできない。

それでも進軍は続き、ジャクナたちはサンジャヤ国王都であるヒワンの周りの都市を全て手中に収め、ついに王都ヒワンへの攻城戦を開始した。

ヒワンはサンジャヤの平野の真ん中に栄えており、王都を囲む市城壁（羅城）は今までになく大きい。ということは、城壁内に大きな土地をもつということである。もちろん、その分兵士たちが守らねばならない所が多く、また攻城軍は一点に兵力を集中できるので攻める方が有利である。

食料の観点で見れば、市城壁内に多くの土地を持つヒワンは中で農作物を栽培することができるが、それは中期的に見ても長期的に見ても対した有利を^{アドバンテージ}与えるものではない。食料の調達に関しては、市城壁内で作るよりも他所から市内に糧秣を輸送できる確実な通路があつた方が効率も良いし、確実性も高いとされる。

真夏の炎天下でサウルス軍はヒワンをぐるりと囲んだ。ジャクナ王はこの時冷静だつた。攻城戦開始の前にこの要塞都市の周りをくまなく調べさせた。兵士はヒワンの周りに狼狽^{ろうたい}（落とし穴の底に尖つた木の棒などのスパイクが埋められている）を見つけた。王は兵士たちに命令してそれを埋めさせる。罌を埋めつくすと、徐々に距離を詰め始める。堀を埋め、^{ろくさい}鹿砦などの障害物を燃やしつくして、ヒワンからは障害物が取り除かれた。

ジャクナたちは要塞の周りにはね式投石機やカタパルト式投石機、巨大なバリスタ、手の形をした鉄の塊を先につけた破城槌^{はしよつち}などを用意して、敵に降伏を申し入れた。しかし、サンジャヤ人は降伏しなかつた。

攻城戦は開始された。連日昼も夜もなく矢玉が行きかつて多くの者が傷つき、死んだ。ヒワンの長大な市城壁は破城槌や石玉のせいでどんどんボロボロになつていき、ことあるごとにサンジャヤ人がそれを治した。破城槌は羅城門も攻撃したが、ヒワンの鉄の門は破

ることができない。サウルス軍の度重なる降伏勧告にも、サンジャヤ人は合意しなかった。

攻城開始から三日目、攻めているはずのサウルス軍は逆に追い詰められる。食べるものがないのだ。いや、この時はまだ余裕があった。なぜなら、サンジャヤ人の商人が「ここが商売時」と考えたのか、野営の周りに集まって高額で糧秣を売買していたからだ。

今回の攻城戦において重装騎兵は物の役に立たなかった。それなのに、彼らは多くの飯を食った。ギャロップはジャクナ王に大飯喰らいで無能な大型馬を食料にすることを進言したが、ジャクナ王はせっかく育てた軍馬を喰うことを了承しなかった。

攻城開始五日目、サウルス軍は遠出して糧秣を調達する隊を作ったがうまくはいかなかった。糧秣を調達する方も腹が減っているし、本軍から離れ過ぎれば暴徒と化したサンジャヤ人に取り囲まれ殺される可能性があったからだ。

七日目になってもカバルスからの輸送部隊はつかず、なおかつ、ギャロップの派遣していた偵察騎兵たちが、周辺都市に反乱兵が集まり始めたと言う情報をつかんだ。ギャロップは「サンジャヤの国民がサウルス軍への反撃に出るために集まり始めたのだ」と考え、それをジャクナ王に進言した。この頃から商人は出脱しないようになっていいる。

二日後。ジャクナ王は、近くの都市にどんどんサンジャヤ人が集まるのと、サウルス兵士たちが炎天下と空腹の侵されて全く動けなくなったのを見て撤退を決断した。彼は歯を食いしばりながら、赤い髪を逆立てながらそれを全軍に伝えた。

地獄の撤退戦が始まった。前にも言ったように、戦争において損害のほとんどは撤退・退却の時に被るものである。

ジャクナ王と騎兵たちはいち早く逃げ出し、次に重装騎兵隊、次に歩兵たち、しんがりにはギャロップ率いるカバルス騎兵隊が任された。サウルス軍が夜と共に逃げるのを見たヒワンのサンジャヤ人は歓喜をあげながら逃げ惑うサウルス兵を追いかけた。逃げる最中に

近くを通つた都市からも次々にサンジャヤ人が飛び出してきた。彼らは狂つたように斧や槍や剣を振りまわし、サウルス兵は叫び声をあげながら逃げ続けた。

サンジャヤに残つていた四万のサウルス兵のうち、四千人が退却の時に死んだと思われる。彼らの死体はほとんど見つかつていないが、逃げ延びた地に辿り着かなかつた者たちは戦死扱いとなつた。

サウルス軍は逃げ延びたポミネス平原で、コロナ山脈を越えてきた輸送部隊と出会つた。で、彼らは一時的に軍を立て直すことができた。

一方でジャクナは將軍達を集めて軍議を開いた。軍議では、もう一度ヒワン攻城戦を開始するかどうかが議題に上がった。

ギャロツプは成敗続行を進言した。ジャクナ王もそれを考えており、一も二もなくヒワン再攻城戦を開始することを決断。それを即日兵士たちに伝えたが、兵士たちは嘆きながらそれを反対した。ジャクナは顔いっぱいに汗を浮かべながら、弁舌をふるつて彼らを説得したが、ついに兵士の了承は得られなかつた。呆れ果てた様に深い息を吐いたギャロツプは、それからずつとつまらなそうな顔を浮かべていた。結局、サウルス軍は今回のサンジャヤ成敗を諦め、カバルスに一時帰還することになつた。

26・サンジャヤ征伐（後書き）

画像は破城槌なんです、中に人は入れなさそう。欠陥品……。

二三年の夏の終わり。西都ヒツパリオンに戻ってきたサウルス軍は一同に暗い顔をして、恥じるように俯きながら西都の大通りをとぼとぼと歩いた。住民たちも彼らには冷ややかな目を向けていた。なぜなら、多くの物資をカバルスの商人たちから安値で買い取り、物価を上げ、民衆の生活を困窮させたと言うのに、彼らは何も持ち帰ってこなかったからだ。そう、彼らはサンジャヤで手に入れた富を全て失っている。手に入れた財宝は、ヒワン攻城戦でサンジャヤ商人から食料を買う時に使われたし、残った財方は逃亡の途中で道端に投げ捨ててしまった。財宝と誇り……いや、彼らは命以外の全てをサンジャヤに忘れてきてしまったかのような表情で石畳の地面を見つめていた。

民衆たちの向ける無数の冷ややかな目の中に、熱っぽい、嬉々とした目を彼らに向けている集団があった。例の無政府主義者たち^{アナーキ}だ。彼らはサウルス軍の消沈した姿を満足するほど見たら、アジトである酒場に向かって歩き始めた。

「あの顔、見たかよ」人通りが少なく薄暗い裏通りに出るとハンスは笑いながら同志に語りかけた。「今回の作戦は成功だったな。いや、大成功だ。これでうまくいけばイハテリオ地方の諸国が団結してカバルスから奴らを追い出してくれるかもしれない」

「けどよ」隣を歩く男がハンスに言う。「そうだったら、サウルス軍を追い出した奴らがカバルスを占領するんじゃないのか？」

「馬鹿っ」ハンスは酒場のドアをあげながら言う。「そうなりそうだったら、イハテリオの諸国を仲間割れさせてやればいいんだよ」

酒場にはもう何人かの人間が集まっていた。サウルス軍の敗退がすでにそこいら中に伝わっているから、皆は一樣にやにやと笑っていた。

「ハンス」とターバンを巻いた色黒い商人がハンスのもとにやって

きて彼の手を握った。商人はサンジャヤ人である。「うまくいったな。おれたちサンジャヤ人は奴らから奪った糧秣で奴らから大量の金をふんだくってやった」

「おい」ハンスが後ろを向いて同志たちに笑いかける。「今日はおごりだつてよ！」

先に来ていた同志たちは、それを聞くとでたらめな言葉で感謝の意を述べた。彼らはひとしきり商人を褒め称えたあと、自分たちの会話に戻った。商人は「おいおい、儲けを全部吸い取るつもりか？」などと笑いながら彼らに葡萄酒や麦酒ビールや馬乳酒をおごった。

「それよりも」商人はハンスと共にカウンターに座りながら言った。「ハンス、大丈夫なのか？　今回は少し派手にやり過ぎたんじゃないのか？　おれたちの存在がばれやしないだろうか……いや、危険なのはお前だ。なんせ、お前は敵の腹の中にいるんだからな」

「なに、ジャーニイやシャンティ、ジャクナ王……ふん、サウルス王族を相手取るならば、こんなことは簡単さ。あの無能な野郎どもならば、いくらだつて出しぬける」ハンスは馬乳酒を飲みながら言った。「ま、出来ればあの戦争でギャロップかジャクナ王くらいは死んでいてほしかったが」

「それに関してはどうがでないだろう」近くのテーブルに座っている同志が言う。「なにせ、撤退が決まるや王は、いの一に逃げ出したっていいじゃないか。ははは」

「それに」商人が葡萄酒をがぶがぶ飲みながら言う。「今回のことでジャクナ王とジャーニイの仲は一段と悪くなった。もしかしたら……というよりも、うまくいけば、サウルスで内乱が起こるかもしれない。そうなったら、その際にイハテリオの諸国を誘い込もう」
「……それだがね、内乱になった時のキーパーソンはシャンティだと思うんだ」ハンスが言う。「奴がどつちに味方するかでギャロップがどつちにつくかは決まるからな。内乱が起こっても大体の場合、正当性は王位を持つジャクナにある。つまりは民衆と軍の大半はジャクナにつくと言うことだ。つまりはシャンティとギャロップがジャ

クナ側に味方したら、ジャーニイはすぐに負けてしまうだろう。そうなるなら南の諸国を誘い込む時間は無い。でも、あの二人がジャーニイ側に味方したら……」

「戦いは長引くか……」

商人がにやりと笑う。

ハンスたちはサウルス軍のサンジャヤ侵攻の機会について種をまいた。そして彼らのまいた種はすでに芽が出始めていた。ハンスたちは、息吹いた芽を美しい大輪の花へと育むために水や肥料をまかねばならない。

ハンスたちはすぐに次の作戦のことを話し始めた。するとさつきまでの騒ぎは嘘のように、同志たちは彼らの会話に聴き入った。ハンスが「こうならば？」と言うと、商人や誰かが「こうなるだろう」と答え、それが何回も繰り返され、作戦は練られて言った。こうして練られた作戦はハンスが書類として書き残し、幹部会の際に持って行くことになる。で、幹部会でも同じことが行われ、作戦はどんどん練り込まれていく。

今なお闇に包まれたままの組織によって、少しずつ、サウルス国の歯車は狂い始めていた。

サウルス軍が帰還してから二日後の西都ヒツパリオン。夏の暑さもピークを越えて、西都の気温も徐々に下がり始めていた。そんな日の真昼、昼食をとってすぐに軍議が始められた。

とはいえ、軍議と言うには物々しすぎる雰囲気のものだった。

ギヤロップは昼食をとった後、自室の布団で（わざと）ゆっくりと休んだ後に、王宮の一階にある軍議室に向かった。横には侍従ウイスカがいて「また、どやされますな」と意地悪そうな笑みを浮かべていた。

「ふん、どやされたって、いいぜ」

ギヤロップはつまらなそうに頭を掻いた。

軍議室の周りには数人の警備兵が立っており、遅れてきた二人は

謝りのあいさつもせずに入室した。軍議室のドアは開け広げられており、二人はちらつと中をうかがう。ジャクナ王は上座に座って腕を組み、眉間にしわを寄せている。ジャーニイは口を真一文字に結んでいる。他の誰もが無言無語にこくつており、険悪なムードであるのはすぐにわかった。

「遅れた」

とぶつきらぼつに言ってからギャロップは軍議室の中に入った。

彼はジャクナのすぐ近くの空いている席に腰を下ろす。

ジャクナ王はいらつきながら大將軍を叱った。

「遅いぞ、皆はお前を待っていた」

「いつもはおれが来る前から軍議なんぞ、始めてるじゃないですか」
ギャロップは訝いぶかりながら言う。「まあ、こうして無事におれが来たわけだから、軍議をさっさと始めましょうや」

ジャクナ王はふん、と鼻を鳴らした後に軍議の開始を宣言した。

軍議が始まると武官の一人が厳かに立ちあがって「始めの議題は、今回の敗走の責任追及ですが……」と言った。すぐに將軍の一人が声を張り上げた。

「そんなものは兵站部門の不具合のせいに決まっている」

一人が言うと、それを皮切りに兵站部門を罵倒する声が次々と上がった。彼らは兵站部門のせいと言っているが、その文句はもろろん暗にジャーニイに向けられて言われている。

ギャロップは軍議をつまらなそうに見ながら、またこのパターンか……と思った。これは軍議と言うよりも、そして裁判と言うよりも、演劇と言った方が遙かに適切だぜ。

さて、罵倒の的であるジャーニイは、けれども涼しい顔で、まるで他人事のように緒將軍たちの罵声を聞いていた。緒將軍は全く意に介していないジャーニイを見て、やや困ったように顔を見合わせた。

「お前たちの言いたいことはわかった」とジャクナ王が白々しく言った。「おれも今回の件は兵站部門、つまりは輸送部隊などを統括

していた者の不手際のせいだと思っている。……ふん、すでに当人は自分が叱責されていることに気がついていると思うが、さて、言い訳を聞こうか？ ジニー」

「今回の件は確かに、私の力不足だったと存じ上げます」ジャーニイは滔々（とうとう）と語る。「伝令もスムーズに行われず、輸送部隊も満足に兄上のもとに送ることができなかったことは誠に遺憾であり、ここに陳謝の意を表します。私はこの屈辱を胸に刻み、より一層精進することに励もうと思っております。それで、ですが……出来れば、私はどのような対処を採ればよかったのかを、私を叱責していた方々に御教授願いたいのです」ジャーニイはすぐ後ろにいるベアードに紙とペンを要求する。ベアードは困ったような顔をしながらすぐにそれを用意して、手渡した。「準備はできました。では……まずは誰が意見を下さるのでしょうか」

ジャーニイが自分を罵倒した者たちを一人一人眺めていく。彼らは顔を青くしながら、彼から目をそらした。彼らもジャーニイは手を尽くしたのは知っている。そして、自分には最善の策など思いつかないこともわかっている。ジャーニイは彼らの愚かさに嘆息しながら、最後に兄王を見た。

「兄上はどうでしょうか？ 私の採るべき策はどのようなものだったのでしょうか？」

ジャクナ王はしばし黙りこくって、ジャーニイと睨み合っていた。ジャーニイの顔は能面のように無表情だった。ジャクナは大きく、静かに息を吸った後に口を開いた。

「まるで、お前に次のチャンスがあるような言い方だな？」

「……」ジャーニイはわずかに眉根を動かして、不安げな表情をのぞかせた。「どういう意味でしょうか？ まさか、兄上はたった一回の失敗で私を殺すと？ いや、今回のことは失敗ですらない。作戦の失敗は攻城軍にも……と言うよりも、兄上は……私の質問に答えていないのですが？ まさか、兄上は、今回のことは不可避であったにも関わらず私を罰しようと言うのですか？ あなたですらも

解決できなかったであろうと言うのに、私を罰するのですか？」

「今回のことは避けることができなかつただと？ それは笑える冗談だ。ははは」ジャクナは大きく口を開けて、笑つたような顔を作る。誰が見ても歪な笑顔だつた。「お前は二二七年から……かれこれ六年弱もカバルスの鎮定に努めているではないか。それなのに、いまだに各地に反乱部族が出るとはどういうことだ？ 本当にこれが避けられないことだつたのか？」

「ならば」ジャーニイは目をそらしながら言う。彼の形勢は悪い。

「兄上ならば出来たと？ ふん、兄上など……父上からも軍才のなさを認められており、三王子派遣の際も一人だけ戦争と縁のない平和な南部に送られたと言うのに……」

「戦うことだけで土地を収めようとするのが愚かだと言うのだ！」ジャクナ王は声を張り上げる。「土地に根差した政策をとつてこそ、民は安んじられると言うもの。大体、諸部族がいまだにお前に反抗するのはお前の統治の仕方に納得がいけないからであるう」

諸部族の反乱には例の組織が深く関与しているが、それを知らないこの場の彼らにしてみればジャクナの言い分は尤ももつとのことであつた。形勢は完全にジャクナのものだ。

「それでも私は攻城軍がうまくやれていれば今回のことは失敗しなかつたと思えますがね。兄上、そんなに言うならば、次は私とギャロップでヒワンを攻めさせてくれませんか？」

とジャーニイはひるまずに言い返した。

「だから、お前に次のチャンスがあると思つているのか？」ジャクナが彼を睨みつける。「私は、父の生前からお前が王位を狙つてい
るのを知つていた。それでも聡明なお前が私に反旗を翻すひるがえなどとは、
どうしても思えなかつた。しかし！ 今回のことではつきりした。

お前は、私を亡き者にして王位を篡奪さんだつするつもりなのだ」と

軍議上の緒將軍が騒ぎ始めた。雑用たちも近くの者と耳打ちしながら話しをしている。ギャロップはやや驚いたように、目を見開きながらジャクナを見た。ジャクナはすでに全てを決心しているかの

ような顔つきだった。

「……」ジャーニーが白けたようにジャクナを見た。彼は誰にも聞こえないように、小さく呟いた。「くだらねえ」

「お前に軍を与えたならば何が起こるかわからん」ジャクナが嫌な面でいう。「だが私もそこまで冷酷に徹しきることはできない。わかるか？ つまりは、お前は生き延びたのだよ」

ジャーニーは思った。両手両足を切り取られた状態で生き延びたって何の意味がある、と。彼は冷静だった。けれども、自分の胸の内が少しづつ冷えていくのが感じられた。ああ、それでも、やはり……自分はまだ諦めたくは無い。英雄になることを……。

「ジー、お前はこれから軍を率いることは出来ない。遠征に出ることもできない。以前に授けた私兵も返してもらっし、近衛兵団も二百人に減ずる」ジャクナが獲物を追い詰めた狩人のような、溢れんばかりの笑顔で言う。「そして、お前には南部に言ってもらっ。良いところだぞ、地味は豊かで、民は穏やかで……何と言っても、あそこには軍など必要ないからな。それでお前の役職だが、南部グナトウス監督、ということにしておく。総督ではない、監督だ。さて、あの職はいつたい何ができるのだろうな？」

何ができるかだつて？ とジャーニーは苦笑する。あれは総督の傀儡職だぞ。ふん、なんともまあ、意地の汚い。

軍議室は騒然となっていた。緒將軍たちはきよるきよると軍議室を見渡す。ジャクナはこのことをまったく誰にも話してはいなかった。まるで、ここで思いついたかのような感じも見受けられたが、彼はちゃんと前々からこのことを考えていた。それこそ父が生きていた頃から。

ギャロップは顔に汗を浮かべていた。別にジャーニーのことを心配していたわけではない。彼が心配したのは、ジャーニーという將軍を欠いたこれからの軍のことと、ジャーニーが国の中枢部から排斥された事実を知ったシャンティのことである。

やがて、軍議場の騒ぎが静まり、自然とジャーニーに視線が集ま

るようになった。彼は死人のような表情をしており、彼の後ろのベアードなどは滑稽なくらいに狼狽していた。

「ジニー」ジャクナが何かを催促するように言った。「いいね？」

ジャーニイはジャクナを力なく見つめた。そして。

「殺してやる」

彼は心の中でこう呟いた。

ジャクナは彼の力ない目を見て、嬉しそうに頷いた後に、進行役の武官の方を見て、軍議を勧めるように促した。武官はジャーニイの方を見た後に、おずおずと立ちあがって次の議題を読み始めた。

軍議はどんどん進んでいくが、王以外はみんな上の空で、この後の議題についてまともな判断ができるものなどいなかった。

ギャロップも、念願していた戦争の中心に来ていると言うのに、どこか満たされぬ思いを抱いていた。彼は軍議場の椅子の上で、つまらなそうに肩を潜め、つまらなそうに目をつぶり、つまらなそうに、シャンティやエレヤフェミナやマスタングや、ユルシュのいる王都のことを考えていた。

ここはつまらないな。

と彼は思った。

27・茶番（後書き）

画像はないです。こっから激減していく予定。

アクセス解析を見て知ったんですが、一日に数十人ほどこのページに迷い込んでいるらしい。

この物語を読み切る人はおそらく両手の指で事足りることになるだろう。

読み切れた人の明日にハッピーがありますよ〜にっ！

> i 3 3 4 1 2 — 4 0 5 7 <

二二三年の冬を前にしてサウルス軍は一旦王都センチュリオンに帰還している。王宮に帰る際も、兵士たちは下をうつむきながら大通りを歩いていき、ジャクナ王の宣言によって国軍の大半は一時解散し、徴兵たちは自分たちの実家に帰って行った。

ジャーニイの左遷の話はシャンティに届いていた。シャンティは国軍が解散した三日後、ジャクナ王が落ち着いた頃を見計らって彼のもとに訪れた。

朝食をとってから一時間ほどしか経っていない朝方、シャンティは王宮の中にある王の政務室の前に立ち、中から声がかかるのを待っていた。やがて侍従長が政務室の中から出てきて「どうぞ、お入りください」とドアを開けた。

「兄上、入ります」と言って彼は中に入った。政務室の中でジャクナ王は書類を読みながら赤い頭を抱えていた。シャンティはさっと寄って行って、書類を覗き込んだ。「戦費の報告書ですか……」

「そうなのだ。今回は戦費がかさんだ割には得たはずの物は全く持ち帰れなかったからな、まったくもって大損害だ」ジャクナは苦笑しながらシャンティに報告書を手渡した。「シャンティ、お前たちの方は……王都はどうだった？ 変わったことは無かったか？」

「たいしてありませんね。問題と言えば、王宮が手強い母親三人組によって乗っ取られたことくらいでしょうが。彼女たちには本当に頭が上がリません。そうだ、兄上の御子息ジャクナ四世と我が息子リュキウスは大分仲良くなりましたよ。この前は四世とリュキウスがお馬さんごっこをやっていました」

「馬はどつちだ？」

「もちろんお兄ちゃんの方です」

「なに、おれの子が馬を？ ふむ、不敬罪でリュキウスには厳しい

罰を与えるとするかな？」ジャクナ王が思わず顔をほころばせる。

「いやはや、しかし、子供の成長は早いもんだ。少し目を離れたすきにどんどん大きくなる。そうだ、將軍の息子の方はどうだ？」

「マスタングはかわいそうなことに、父親に似て無愛想です。フェミナは赤ん坊が全く泣かないのを心配しています。ははは、そう言えば彼も四世をお馬さんにしていました」

「おいおい、おれの息子を立派な馬にするために英才教育を施したわけじゃないぞ。ふん、マスタングには即刻馬でも買い与えてやるうか。將軍の息子で、カバルスの血を引いているんだし、その方が良いかもしれないな。しかし……ふふ、父親に似て無愛想か。本当にかわいそうだな」

「兄上、これを」とシャンティはさつき受け取った書類を返し、近くの椅子に腰を下ろす。「さて……まあ、兄上もわかつているとは思いますが……ぼくはジャーニイの左遷に関するのをいいに来たわけです」

「そんなところだろうと思っていた」ジャクナ王は微笑みながら頷く。「お前が何と言おうとも、おれはあの宣告を覆くつがえさん。大体、送り込むのは豊かなで平和な南部グナトウスだ。別に奴に責め苦を味わわせているというでもなし」

「南部は豊かで安全な土地。確かにそうですが」シャンティは懇願するような顔つきをする。「ジャーニイは人一倍外聞を気にする性格です。だから、彼にとつて今回のことは辱め同然なのです。だから、どうか彼にも最後のチャンスを与えてもらえないでしょうか」

「シャンティ、それは間違いだ。サンジャヤでの一件が奴の最後のチャンスだったのだ」ジャクナがピンと人差し指をたてる。「シャンティも知っているだろう？ ジニーは父に向かって、王位を継承させてくれとよく言っていた。しかも、おれが目の前にいると言うのに奴はそれを平然と言つてのけた。あれは侮辱だ、侮辱なのだ。

奴への辱めがなんだ。私は今までずっと辱められてきた。つまりは、奴のそんな態度が私の奴への不信感を強めたと言つても良い。奴は

自業自得だ」

「はあ……」

シャンティはよくわからないと言った感じに頷く。

「奴はおれの受け継ぐ王位を小賢しくも狙っている危険分子だ。おれは王位を継承すると同時に奴を排斥しようとしたが、それは良心が痛んだし、お前への気遣いもあったので……まあ、止めにした」というよりも、奴に最後のチャンスを与えることにした」

「それがサンジャヤでのことですか？」シャンティは理解できないという感じに言った。「しかし、あれは不可抗力とも言えるものだったと連絡を受けています。それに、ただ輸送に失敗したからと言って、彼を排斥しようとするのは……」

「回りくどい」

「わかりました、単刀直入に言います。兄上はあの糧秣輸送をジニ―がわざとしたものだとお思いになつておられるようですが……」

「ああ、そうだ」ジャクナ王は当たり前のように頷いた。「それ以外にも奴は私に向けて兵を起こしている。これだけの証拠があれば、奴が謀反計画をたてているのは疑いようもない。正直、今回の処置は生ぬるいくらいだ」

「兵と共にコロナ山脈麓に向かったあれですがね、あれは兄上への救援に行くために兵を移動させただけなのです」シャンティは首を振る。「糧秣輸送もわざとではありません。大体、ジャーニイはカバルス鎮定のための総督とし派遣された時もずっと兵站には悩まされていたではないですか」

「あれも作戦だったのかもしれないだろう、今回に向けての」
シャンティは険しい顔つきになる。

「……サンジャヤ行きは兄上がお決めになりましたことですよ。まあ、ジニ―の意を汲んでのことではありませんが」

「ならば、もし、本当にわざとでないとしたら、だからどうだというんだ。奴が国に不利益になることを何もしないと決まったわけではない。奴は今も虎視眈々と爪をときながら、私の王位を狙っている」

るかもしれないか。危険な者は早いうちに排斥する方が良い」
「ジニーの……兄上、ジニーの軍才などは国の不利益どころか、大きな利益になります。兄上はジニーほどの男を南部に押しとどめておく気ですか？」

ジャクナ王はいらいしながら返した。

「王のおれがおり、將軍のギャロップがいれば全ては揃ったも同然、後は何もいらん。そうではないか？」

「国が二人で動かせるのですか？」

「それは違う。おれが国を動かし、ギャロップが戦争を動かす」

「毎日毎日書類を読んで、印を押して、名前を書いて、訓練をして……」シャンティはあからさまに不機嫌になりながら声を張り上げる。「ぼくは、ぼくが国の利益になっていいると思っていたからこそ、こんなつまらないことをやってきたんだ。もし兄上が、ぼくを全く全然ちつとも必要ないと思うながら、ぼくもどこかに左遷なさつてください。その方がぼくも楽で嬉しいやい。後の三十年か四十年はのどかな田舎に籠ってエレヤリユキウスとのんびり本でも読みながら暮らすとします。ふん、ぼくなどいなくても兄上一人でも国は動かせるのでしよう」

「それは困る。お前がいないとギャロップは思い通り動かせないからな」ジャクナ王は冷静な感じに言う。「お前はそうは思っていないようだが、將軍はお前のことを強く意識している。彼はお前がいなくなると、隠遁する危険性だつてでてくる」

「心配しなくてもそんな危険性はありませんよ」シャンティはもう話すことは無い、というように立ち上がった。「彼は心底からの軍人だ。戦争は彼の友で、彼の恋人だ。彼は戦争を愛しているし、愛しているからこそ戦争を強く望む。彼は戦争ある所ならばどこへでも喜んで駆けつけるでしょうよ」

「シャンティ、一番近くにいくくせに何も分かっていないのだな」ジャクナ王が去っていくシャンティを見ながら言う。「奴はそんなに単純な男ではないぞ」

「ええ、彼は単純な男じゃない」シャンティはドアの前で、振り向いて、ジャクナ王を睨んで叱責した。「それから兄上、遠征先での茶々は度を越さないようになさった方がよろしいかと思えますよ！」

シャンティはそういつてバタンと大きな音を立てながらドアを閉めた。外でシャンティと侍従の二言ほど話す声が聞こえた後に、シャンティが遠ざかる足音が聞こえてきた。

「どいつもこいつも」とジャクナ王はため息をついて、背もたれに体重をかけた。「……くそ、ふん、何がおれとギャロップで大丈夫だ。馬鹿らしいことをいつてしまった。くそ、どうにかならぬだろうか……レフティスの奴にことづけでも頼むか？」

彼は指で目の周りを揉んだ。冷静になつてくるとさっきの失言が急に恨めしくなってくる。彼は目のマツサージを止めると、また大きなため息を吐いた。

「どうにか？」ジャクナは呟く。「どうにかなるのだろうか……なにが？ いや、全てがだ。シャンティのことも、妻のことも、ギャロップのことも、ジニーのことも……ふん、無理だな。無理だ」

彼は首を数回振った後に机の上の書類に向かった。目のくらむような数字の羅列が、意識を遠のかせるような事実を示しだしている。彼はまた、どうにかならぬものだろうかと思つた。

ジャクナ王は夕食を政務室に運ばせて、そこで書類を読みながら夕食をとつた。夕食後も戦後処理を続け、最後の書類に印と署名を書き記すと、その日の分の仕事はやつと終わった。最後の書類と言つても、「今日の分の最後の書類」というだけで、机の上にはまだ山のように書類が築かれている。

政務室の窓から外を眺めてみると、すでに夜が訪れていた。その日は曇りだったせい、星ひとつ見えない真つ暗な夜空だった。

ジャクナは窓を開けて、寒い空気を部屋の中に取り入れながら、城下に広がる王都の街並みを眺めた。篝火台や松明を持った歩哨のせいで、所々ぼつと明るい光が灯っていた。町はまだ寝静まつては

いないようで、大通りにはいくら人が見えた。妙に人が集まっているのは酒場だろうか？ などと考えながらジャクナ王は街を見下ろしていた。彼はこの光景が、この時間が好きだった。

静かな黒い空の下、目視できない遠いところから人や獣の音が聞こえる。城下町の闇の中に住む、彼らの息吹の音が聞こえるような感覚がする。それはまるで、真夜中の森林の中で鈴虫や蛙の煩わしい音を聞く時のような、情緒ある瞬間だった。

空から急に強い風が吹いてきて、ジャクナと部屋の中の書類の山を襲った。書類の山はぱつと部屋中に舞い、頂点まで達するとひらりと落ち始めた。ジャクナはそれを拾おうともしなかった。彼は灯籠をふつと息で消してから部屋を出た。

部屋の外には警備の兵が四人立っており、一様に挨拶をしてきた。彼は小さく頷いて廊下を歩きだした。始めは彼の自室に向かって歩いていたが、やはり風呂に入るのかなと思って、結局ユルシュとジャクナ四世の様子を見に行くことにした。

「でも、魔女がいたならばすぐに退散しよう」

と彼は微笑してから階段を下り、一階の侍従用の政務室で仕事をしていた侍従のもとに向かった。そこで、一番近くにいた侍従に馬車を呼ぶように命令した後、王は誰かを探すようにきよろきよろし始めた。

「どうしましたか？」と侍従が尋ねる。

「いや、レフティスはいないのか」

「レフティス殿はもう帰りました」レフティスと仲の良い侍従が言った。「何か用があるならば、私が伝えますが」

「別にいいさ」

ジャクナ王は政務室を出た。それから薄暗い廊下をとことこ歩いて、王宮から出るとすでに馬車の用意ができていた。ジャクナ王が馬車に乗り込むと、運転手はすでに聞き及んでいた王の目的地に向けて出発した。

ジャクナは灯籠の明かりしかない馬車の中で目をつぶって、何も

考えないでいた。

離宮に到着するまでにはそれほど時間はかからなかった。彼は運転手や侍従侍女などの手を借りて大仰に馬車を下りて離宮の中に入った。

「ユルシユとジャクナは？」と、松明たいまつを持ってついでくる侍従に彼が尋ねると、相手は、部屋におりますと答えた。「仲良しの魔女はきているか？」

「ははは。いいえ、今日は来ておりません」

ジャクナ王はほっと一安心して、足が軽くなったような感覚を覚えながら彼女の待つ部屋に急いだ。

部屋の前には侍女が立っており、彼女たちは「中におります」と小さく言った。ジャクナ王はノックをして入ることを伝えてから中に入った。

入室してからまず目に入ったのは、ジャクナ四世の聡明そうな瞳が彼を見ていたことだった。

ジャクナ四世は今年で五歳になる聡明な少年である。彼の頭の回転は速く、すでに自分の置かれている立場などを理解している。人に言われれば言われた通りにするような正直者でもある。それでも自分から何かをしようとすることはほとんどない……つまり彼は精神遅滞にも似た特性を備えていた。

彼の乳母からそのことを伝えられたジャクナ王は、確かに失望はしたが、それでも愛する妻との間に生まれた子である、王位継承は無理だとしても安定した暮らしや妻などの世話はすることができると考えていた。

ジャクナ四世は、ぼおっと自分を見ている父親から目をそらし、目の前にあるおもちゃの木馬に目をやった。

「ジャクナ様」と部屋の奥からユルシユがやってきた。彼女は椅子に座って本を読んでいたようで手に何かの本を持っていた。「どうかしましたか？ あの子ばかり見て」

「……いや、別に。うん、何でもない」ジャクナ王はそう言いなが

ら息子の傍に寄って行って、彼を抱え上げ、木馬の上に乗せてやった。「木馬は乗るためのものだ」

ジャクナ四世は木馬に乗ると、ただ黙ってそれにまたがり続けた。ジャクナ王は少し不安そうな顔をしながらそれを見ていた。彼には子供のことはほとんどわからないが、街を走り回る子供たちや自分の子供の頃、ジャーニーやシャンティの子供の頃のイメージと比べれば、ジャクナ四世は驚くほど静かで、何を考えているかわからない。ジャクナ四世は気がつけば虚空を飽きもせずに見つめている少年だった。

やはり魯鈍なのだろうか。ジャクナ王は目頭が熱くなる思いで無気力な息子を見つめていた。

「ユルシュ。おれがいない間はシャンティの妻やギャロップの妻たちがよく訪れたそうだな」ジャクナ王は出来るだけ爽やかそうな笑みを浮かべてユルシュを見た。「どうだ？」

「ふふ……どう、とは？ いったいどういう意味でしょうか？」ユルシュは鮮やかで形の良い目を細めて夫を見返した。「私たちのジャクナならば大丈夫です。体の方も、心の方も……そう言えば、シャンティ様がジャクナの英才教育のためにアストローボン様を東から呼ぶと言っていましたわ。私はほとんどあつたことがない人なのですが、シユラクお義父様は昔、アストローボン様に師事していらつしやつたんでしょう」

「あの人は偏屈な人でね」ジャクナ王は頭を恥ずかしそうに掻きながら言った。「おれはほとんど先生の言っていたことを理解できなかったよ。もつとも、共に習った者も大体がそうであつた。彼は激しく体全体を使いながら授業をする人でね。とはいっても、暴力を振るうというのではない。本当にばたばた動きながら激しく授業をするんだ。先生の授業になると、部屋が静かになつて皆ポカーンとしながら先生の激しい動きや説明を聞くんだ。集中して聞いているはずなのに、授業が終わつた後は何も覚えていない。そんな中で唯一シャンティだけは毎回熱っぽい瞳を向けながら先生に質問を繰り返す」

返すんだ」

「シャンティ様はいつもそうなんです。あの人は、子供たちのすることだつて興味深そうに楽しそうに見つめているんですよ」

「シャンティも変なのだよ、先生と同じでな」そのシャンティと無意味な喧嘩をしてみました、と彼は考えた。「君は彼の妻のイレと仲が良いみたいだけど……」

「あの人も変だと言おうとしています？」

ユルシュがジャクナ王を覗き込むように見る。何となく愛らしい仕草だつた。ジャクナは微笑みながら返す。

「ああ、変な人だ。でも、おれが言いたいのはそういうことじゃない。その……今日、ちよつとシャンティと喧嘩をしてみました」

「ああ、ジャーニイ様のこと……」ユルシュは真剣な顔になる。

「それで、あなたはシャンティ様と喧嘩しましたので、エレ様を通じて彼と仲直りしたいわけですね。それでも、無理ですわ。エレ様が誰かのお使いをするなんてことはありえませんが。あの人は私の頼みでもなかなか聞いてくれないのに、ましてや、あなたの言うことなんてちつとも聞いてくれませんよ」

「君はなんで彼女と懇意なのだ？」とジャクナ王はため息を吐きながら言う。「まあ、それなら仕方がない」

「それで……今日はそれをいいに來ただけですか？」

ユルシュがジャクナ四世を抱えあげながら言う。ジャクナ四世は父親の顔が無表情で見ている。ジャクナ王は自分の息子の無表情に気押されるように、余所を向いた。

「そういうわけではないが……」

ジャクナ王はなんとなく重苦しい、気後れするような感じを受けていた。ユルシュに対しても、ジャクナ四世に対してもだ。

ユルシュに対して気後れするのは、遠征先での淫蕩な生活のせいである。このことはほんの十時間も前にシャンティにも責められた。彼はそつとユルシュの方を見た。彼女はジャクナ四世を天蓋付きのベッドに連れて行って、彼を寝かしつけようとし始めている。

彼女はあのことを知っているのだろうか。もし知っているのなら、今彼女の腹のうちにはどんな感情で満たされているのだろうか。もし知っていないのなら、知った瞬間、おれにどんな感情を抱くのだろうか。

ジャクナ王がそんなことを考えていると、向こうでユルシユが彼を手招いているのが見えた。彼はなんだろう、と不思議に思いながらベッドの方に近寄った。

「これを」ユルシユはやけに嬉しそうな微笑みを作って、ジャクナ四世を指さした。「この子はベッドに入るとすぐ眠ってしまうんです。ふふ、リユキウス様とは大違いです。あの子は寝るのが嫌いで、ベッドに横にさせられると大きな声で泣きだすんですよ」

「ははは」ジャクナ王は安らかそうに眠る自分の息子を見ながら、妙に晴れ晴れした気持ちになった。「シャンティもそうだったよ。

あいつはおれの部屋に遠征してきて、今日は一緒に寝ましょう、なんて言うくせに、夜遅くまで本を読んでいておれの方が先に眠ってしまう。おれはある日、訊いたんだ。なんで、そんなに夜遅くまで起きているのか、と。そしたらあいつは、眠ったら本が読めませんから、ってあっけらかんと言っただ」

「けれどリユキウス様はまだ本の魅力を知るところか、文字も読めませんよ」

「それもシャンティと同じさ。目に見える全てが面白いってことだろう」

「親と子は似るものですね」

ユルシユがジャクナ四世のさらさらの髪の毛を手で梳きながら微笑んだ。

それならば、おれとジャクナ四世も似ているところがあるのだろうか。と彼は考える。リユキウスはまだ一歳そこらでシャンティに似てきているが、おれの子は？ ジャクナ四世はどうだ？ 四歳にもなつて、無気力そうな目を父に向けることしかできないこの子とおれに共通点などあるのだろうか。

ジャクナ王は息子のクリーム色の髪の毛を撫で、そして、安らかに
そんな寝顔を撫でた。

この髪の毛の色は、この顔は……。

ジャクナ王は自分の中で何か恐怖にも似たものが沈殿していくの
を感じた。ぐっすりと眠る息子とそれを嬉しそうに眺める妻の姿が、
彼に考えてはいけないことを考えさせる。

ジャクナ王は首を横に振った。考えてはいけない、振り払わなく
てはならない。彼は下唇を噛みながら、目の前の愛する二人の顔を見
やった。胃の底からせり上がってくる気持ちの悪さが、喉と口を
突きぬけて脳味噌に届く。

この子供は本当におれの子供なのか。

そう考えた瞬間、悔しさがこみあげてきた。何に対する悔しさか。
そんなことを考えてしまった自分の心の弱さに対する悔しさか。そ
れとも、自分を裏切った妻や、妻を寝とった男に対する悔しさだろ
うか。それとも、悩みを知らぬこの子供への悔しさだろうか。

顔いっぱい汗を浮かべながら、ちらりとユルシユの方を見てみ
ると、彼女はベッドに倒れ込んでまどろんでいた。

ジャクナ王は無表情で寝入る息子を見つめていた。今なら殺せる。
と思いながら、息子の頭を掴んだ。すると近くで雷鳴がした。地鳴
りのような大きな音と共に、眩しい光が部屋の中にさしこんできた。
ジャクナ王はハツとして手を退けた。退けた手をコネコネと触りな
がら、さっきまでの自分のことが信じられないといったように手を
見ていた。

ユルシユは驚いて起き上がり、窓の外を見た。気がつけば雨が激
しく降っていて、その中の大粒が地面や木の葉を打って騒がしい音
をたてている。

外から侍女の「大丈夫ですか？」の声が聞こえて、ユルシユはあ
くびをしながらドアの方に近づいてから小さい声で「大丈夫」と答
えた。

「ふふ、あの子が寝ているの。雷で起きないようです」

やがて、雨はさらに激しく降り始めた。さらには強い風も吹き始め、雨は窓の雨戸を打ち叩くようになる。ユルシユは雷の度に体を強張らせていたが、ジャクナ四世はそれら全てを子守唄にして、気持ちよさそうに眠っている。ジャクナ王はそんな息子を直立不動で見ている。「どうしました？」とさつきまで侍女と話していたユルシユが彼の後ろに立って尋ねた。「ジャクナが何か？」

「……いや」

ジャクナ王は驚いた顔のまま首を横に振る。部屋の中央に置いてあった椅子に移動して、そこに腰を下ろすと窓を叩く雨に耳を傾けた。

「この子は嵐の音が怖くないんですね」とユルシユは優しげに言った。「こんなにぐっすり寝て」

「……あ」ジャクナ王は急に穏やかな顔になって、言葉を返した。

「おれも、そうだな」

彼も、嵐の音が好きだった。この、自然が作り出す優しげな喧騒が彼の耳には心地よく響いた。雨のぼちと木の葉の太鼓の作りだす不安定な拍子が好きだった。己の激しさを彼の体に伝えてくる、あの雷が好きだった。涼しげな気持ちにさせてくれる強風の音が好きだった。

「おれも、ジャクナ四世と同じく、嵐の音が好きだ」

その時の不安定な彼にはそんなことですら十分だった。

彼は胸一杯に喜びを抱きながら、安らかなる音に耳を澄ましていた。

28・若き王の苦悩（後書き）

ジャクナさん、それでいいのよ。

画像はユルシュ。

金髪ポニーテールは昔からちよろちよろ描いてたので、思いのほか簡単に描けたような気がします。まあ、金髪ポニーテールってのは一度は通る道ですよ（この人はクリーム色だけ）。

というか、この人は本当にキャラが立たん。出番が少なすぎるせいなんだろうけど……。

ギャロプン「ところで……ユルシュ姫を美しいと思うかどうかは、あなたしだいです！」
ユルシュ「おい」

29・屈折している不屈の心

> i33525—4057<

ジャーニイの南部左遷は二三四年の年明けと共に決行された。役職はジャクナ王がヒツパリオンの軍議室で言っていた通り南部グナトウス監督である。その上の総督にはジャクナに忠誠を誓ったカマラ家の男が着任した。

ジャーニイは二百の近衛兵と千ちよつとの国軍兵を率いて南部グナトウスの首都であるザザンに向かった。この時、身ごもっていた妻は王都センチュリオンに残っているが、これは身重の体を気遣つてのことではない。彼女は、有力者の座から滑り落ちた夫に愛想を尽かして実家に出戻っているのだ。この年に生まれることになった彼の息子は、すぐに乳母と共に南部に届けられ、ジャーニイによつてシユラク二世と名付けられることになる。

話を戻して。南部に着いたジャーニイは、そこで南部の出であるエラルジス元大將軍に出迎えられた。その一週間後には彼の孫娘と結婚している。

エラルジスの孫娘は一人しかおらず、名前をタイスという。彼女はずんぐりとした体をした女で、顔も美しいとは御世辞にも言えなかった。自分の容姿の悪さを自覚していた彼女は、その分、がまん強くて、誰にでも分け隔てなく接することのできるおらかな心を持っていた。

実の所、エラルジスはこの孫娘の嫁ぎ先をなかなか決められずにいた。それは、唯一の孫娘が可愛いという理由だけでなく、彼女の容姿の劣等さをわかつていたからこそ、高貴な身分の人々には怖れ多くて婚姻を申し込めなかつたのだ。ジャーニイとタイスの婚約は、彼女のいない宴の場かわされた。つまり、ジャーニイとエラルジスは酔っぱらつてその約束をしたのだ。

けれども、エラルジスは自分が懇意にしているジャーニイならば

孫娘を預けても大丈夫だろうとも思っていた。さらに、ジャーニイはその時にはすでに第一妻がいたので、タイスが妻になれば彼女は第二妻ということになる。それならばタイスにもちようどいい、と彼は感じた。

ところがどーした、第一妻とジャーニイは別居しており、ほぼ離婚状態。すると事実上タイスが第一妻ということになる。

エラルジスはジャーニイが南部に着いた直後に、まず他の女性と結婚するべきと進言したが、ジャーニイはそれを拒否した。彼は結婚というものに辟易しているようだった。「ならば、タイスとの結婚も」とエラルジスは言ったが、それもジャーニイは拒否した。一度決めたことは覆すつもりは無いのだそうだ。

ジャーニイにも確かにそんな男気から来る決心があっただろうが、まともを考えれば、これは南部の有力者であるエラルジスとの結束を固めるための政略結婚である。

もともと、南部には彼と懇意なエラルジス元大將軍がいるのだから、ジャクナ王が下したジャーニイの南部左遷はやや危ういものだったともいえる。しかし、謀反の観点からしてジャーニイに西は任せられないし、東もある理由で危険である。北はほとんどシャンテイの物であるから、残るは中央と南部しかない。中央はジャクナ王自身が取り仕切るのでジャーニイには南部しか残っていないことになる。

さて、ジャーニイは南部グナトウスに言っただけでエラルジスの孫娘タイスと結婚した。では、シャンテイはどうか。

シャンテイは総督として一時的に北に戻った。この時に、ギャロップ、エレ、リュキウス、フェミナ、マスタングは王都に残っている。この時には、ジャクナ王はギャロップ將軍をほとんど自分の配下として重用し始めていた。エレは次の子供を妊娠しており大事をとった。リュキウスは、エレが遠くにやりたくないと言ったので残った。フェミナとマスタングはギャロップが中央に残ったから彼女たちも同様にしたのである。ついでに、ギャロップの従者であるウ

イスカはもちろん残っている。

ジャクナ王はサンジャヤをもう一度叩くために準備を始めた。遠征軍がサンジャヤに行ってから、こちらで新たに糧秣を集めていたのでは遅すぎると考えた彼は、戦争が始まる前に蓄えられるだけ蓄えておき、ヒツパリオンに移動するときにそれを全て持って行く計画をたてた。

そのせいで各地に課せられた税はやや重くなった。これに不満を抱いたのはここ最近不作続きの東部ヘドロケラスである。ヘドロケラスの各都市では住民が運動を起こして減税を求めた。今の時期に大きな反乱が起こってほしくなかったジャクナ王は不作の年に限りヘドロケラスでは減税を実施することを約束した。

この年、モーキリニア地方のイムサ国の動きが活発化し始めた。しかしイムサ国の今回の標的はサウルス国ではなく、彼らの国のさらに北にある後継者の国々である。さらに、シャンティが掴んだ情報によると將軍名はネオットスとなっていた。

その名前に見覚えのあったシャンティは過去の日記などをひっくり返して彼の名前を探した。それは捕虜名簿の中とイムサ返還前の聞き取りの中で見つかった。その時のネオットスは隊長だった。けれども、イムサ国と繰り広げられた潮の川の戦いは二二九年のことであるから、すでに五年は立っていることになる。階級の区分のないイムサでは隊長は將軍のすぐ下の階級であるから、ありえないことでもないのかもしれない。

シャンティは何となく、ネオットスはそのうちにサウルスに攻めてくるんじゃないのか、という懸念を抱いていた。彼はその懸念を書簡にしてギャロップに送っている。ギャロップの頭の中にネオットスの名前は既になく、明瞭な返事を書くことはできなかった。

そうこうしているうちにこの年もやはり東部は不作に陥った。シャンティは例の如く東部への食糧支援を行っているが、東部では少しずつ耕作地を捨てる農民も出始めた。

耕作地などの人間の手が一旦加えられた土地は、放っておくとす

ぐに荒地地になってしまふ。十分に雨が降り、十分に陽光が注ぐ大地ならばまた自然が育つかもれないが、ヘドロケラスではそれはありえない。

二三五年の年明けの冬。シャンティは元耕作地であつた荒地地を耕して、そこから収穫した分については減税を実施することを宣言した。と同時に、王都に帰還して再度留守番をすることになった。ジャクナ王がまたサンジャヤに遠征するのである。

シャンティは王都にて自分の新しい子供（今回は女の子である）と対面した。彼女の名前はレオネラである。シャンティは始めてみる娘の美しさに感嘆して十ページ分の詩を書いているが、それを書き記すことはしない。もつともこれはシャンティの親馬鹿が爆発しただけではなく、レオネラは確かに子供のころから美しさでは秀でていたそうである。また、エレ同様に自我が強く、他に流されない性格を持つていたとも記されている。

二三五年の春になると、ジャクナ王とギャロップの率いる四万の軍団がまたサンジャヤに向かった。今回の行列は前回よりも長い。それは食料を積んだ部隊が前回よりも多く同伴するからである。

一カ月後、シャンティは彼らが無事に西都ヒツパリオンに着いたことを手紙で知らされている。シャンティは手紙を読み上げると、ちよつと南へ行き、ジャーニイの様子を窺うに決めた。

「ついでに、リュキウスやレオネラを連れて行って、ジニーの愛児シユラク二世と顔合わせをしようじゃないか」離宮の王族用の食堂で家族そろつて豪勢な夕食を食べているとき、シャンティはエレに向かつてそう提案してみた。エレはふかふかのクツシヨンに体重をかけて、レオネラに乳を与えながらシャンティを訝いぶかるような顔で見ている。「ど、どうしてそんな顔するのさ？」

「生まれたばかりの我が子に長旅をさせるわけですね」エレはレオネラを揺さぶつてげつぷを出させながら言う。それを、二歳と少しになるリュキウスが乳母と共に見ている。「いいえ、シャンティ。可愛い子にはなんとやらつてセリフはいりませんこと。でも、あち

らをこつちに呼ぶことはできませんの？ 大体、私たちは不用意に王都から出ない方が良いのじゃなくて？」

「ジニーは兄上に南を出ないように釘を刺されているからね。これ以上彼の待遇を悪くしたくないんだ。その分、ぼくたちが移動するならまだ大丈夫。今はまだサンジャヤへの侵攻が始まっていないからね。というよりも、暇は今しかないんだよ」

「それならあなた一人で言うてくればいいじゃないですか。リュキウスやレオネラは別に連れていかなくてもよろしいでしょ」

「リュキウス、君は南部グナトウスを見たいと思わないか？ あつちには温かい地域でここより過ごしやすいし、色鮮やかな花もいっぱいあるし、珍しい物も同様だ。それに、君が乗りたいというなら、ルルディファイロに乗せてやっても良いぞ」シャンティが交渉相手をエレからリュキウスに代える。リュキウスは指をしゃぶるのを止めて、目をきらめかせながら首を縦にぶんぶん振った。「よし、わかった。行こう行こう！」

「リュ、リュキウス。騙されてはだめです。南部グナトウスは無法地帯なのですよ。一つの村では一日に百件誘拐は起こるし、千人規模で徒党を組んだ山賊は一つの山毎にいるの。それにルルディファイロみたいな駄馬が毎日角を研ぎながら、あなたみたいな純粋な穢けがれない子供が来るのを舌舐めずりで待っているの。極め付けには、山賊も寄りつかない無数の火山があつて、それは悪意ある獣が支配する地獄につながっているのです。そこからは真つ黒な煙が出ていて……」

「息子を少しでも手放したくないからと言ってそんな嘘をついちや駄目だよ！」シャンティはがくがく震えるリュキウスを胸に抱きながらエレに言う。「ともかく、リュキウスはぼくと共に行くようだよ」

彼はぬはは、と笑う。

「わかりました、その旅には私もレオネラもついて行きます」エレはシャンティを恨めしそうに睨みながらそれを了承した。「その代

わり、移動の際の護衛には一個軍団を着けてくださいますね」

「南に行くのに、一個軍団も動かせないよ……」

ともあれ、西に遠征した軍団があまり活発に行動していないこの絶好の機会にシャンティたちは家族でジャーニイの所に訪れることになった。シャンティたちは近衛兵団と三千ほどの軍団を率いて南に向かった。

中央と南の境界線とも言える川を越えると、グナトウスの総督軍とエラルジスの私兵団が彼らを迎えて護衛を買って出た。彼らはいくつかの都市で寝泊まりし、たいして苦労することもなく南都ザザンに辿り着いた。

とはいえ、目的はザザン観光ではない。シャンティたちはザザンにいる南部総督をしているカマラ某に挨拶をするとすぐにザザンを出て、近くの離宮に向かった。そこがジャーニイの住んでいる所である。そこではエラルジスの孫娘であるタイスが侍女たちと共に出迎えた。

シャンティやエレたちはタイスを始めて見た。確かに、シャンティたちはタイスの巨体を見て驚きはしたが、それでもたいして気にはとめてなかった。ところが、タイス自身は自分を見上げるエレの整った顔つきや体つきを見てコンプレックスを感じ始めたようだった。彼女は自分たちの離宮内を案内する時、エレの横にそっと立って小声で話しかけた。

「エレ様はあ、本当にお綺麗でうんらやましいですわあ」と彼女はやや南部訛りの、でこぼこした感じの言葉を使った。「私なんかはこんな体だし、こんな顔だし……」

「ええ、あなたは些ちかか劣った容姿をしていますね」エレは彼女を改めて見ながら言った。それを聞いていたエラルジスと侍女たちは仰天しながら、エレのしれつとした顔を見た。彼女は綺麗な黒髪をかきあげた。「あなたは努力が足りないのじゃないかしら。私なんかは夫のために体を綺麗に維持しようと、たまに中庭を歩いて運動をしていますのよ」

「本当に、たまにだけだね」

とシャンティが言う。抱っこされていたリユキウスが意味を分かっているのかいないのか、とにかく頷く。エレが横目で睨みつけると二人はしょんぼりしたように俯いた。

「それに、太り過ぎは出産にも悪影響が出ると聞きましたわ」

エレがタイスの体肉をつつきながら言う。

「ええ、それは本当ですか？」タイスはそう言いながら驚いた後、ハツとしたように目を見開いて、頭を掻きながら言った。「でも、私はこんなだから、今までジャーニイ様に御相手してもらったことないんです……」

シャンティの横のエラルジスは顔を真っ赤にしながら、恥ずかしそうにその言葉を聞いていた。シャンティは何とも言えない居心地の悪い気持ちになりながら天井を見ていた。

「だから、綺麗になる努力をしなさいと言ったのです」エレが声を張り上げて言う。「あなたはきつと一度も綺麗になる努力をしたことがないんじゃないか？」

「いいえ、あります。けんども……」

「それならば、なぜそんなに肥え太っているのですか。どうせ、途中で諦めてしまったのでしょ。楽な方に逃げてしまったのでしょ」エレは歩きながら、彼女の目を睨みつけて厳しく叱咤する。

「負け犬ね。あなたは手放したくない物、諦めたくない物を得た時だって、そうやって自分の限界を勝手に決めて逃げてしまっただわ」「でも、どうしたらいいか……」

「私もそんなことは知りませんわ。だって、私は占い師でも、予言者ではないから。だから、こうすればあなたは絶対に痩せられる、なんてことは口が裂けても言えませんの」エレはそう言った後に、タイスに向かって微笑みかけた。「それでも体を美しくするなんて簡単なことよ。すぐに解決策なんて見つかるわ。問題はそこじゃないの。問題は心なのよ。この部分の清廉さは簡単には身につけられないの。まあ、私は生来身につけていましたけど……。でも、聞く

所によると……あなたはなかなか上等な心根を御持ちらしいじゃないの」

「そ、そうでしょうか」

タイスは何となく嬉し恥ずかしくなつて彼女から顔をそらした。

「さあ、実際のところは知りませんわ。私は王宮の噂で聞いただけだから。それであなたは結局どうするの？ 御答えが聞きたいわ」

「どうするって……それは、もちろん。やってみますわ。エレ様のように美しくなる努力をしてみます」

「あ、そう。やることを選択するの」エレはにやりと笑う。「ならばこの先は簡単よ。この先、何度も諦めるかどうかの選択にさらされるわ。そんな時は決まつて、諦めない、を選ぶの。それで気がつけば痩せている」

「諦めない……私に出来るでしょうか？」

「それも私の知ったことではないですわ。でも、あなたは美しい心根を持つてらっしゃるのでしょうか？ 私、美しい心根とは強い心のことだと思っていますの。だからあなたが本当にそれならば……まあ、大丈夫でしょう。私は知りませんが」

「エレ様。頑張ってみます、私」

話しが一段落したようだった。タイスの侍女たちはほつと胸を撫で下ろして、好奇に満ちた目でエレを観察し始めた。シャンティとエラルジスは嘆息しながらお互いの顔を見つめ合つて、お互いに軽い会釈をした。

ジャーニイがいる部屋の前に着くと、息のつまるような案内は終わった。エレと子供たち、それにタイスと侍女たちはシャンティとエラルジスをそこに残して、シユラク二世のいる部屋に向かった。エラルジスは皆が廊下を曲がって見えなくなつてから、シャンティに耳打ちした。

「ジャーニイ様は思ったよりも荒れてはおりません。ですが、どんな言葉が心の琴線に触れるのかは分かりませんから……なにとぞ、御了承を」

シャンティは頷いてから、ドアをノックして、返事を待ちもせず
に中に入った。

部屋の中はそれほど大きくは無かった。天蓋付きのベッド、丸テーブルと椅子、二つの大きな本棚の中にはみっちりの本、テラスに
続くドア、ガラス窓、窓からの陽光。その陽光が作る日向でジャー
ニイはクッションに座って本を読んでいた。

シャンティはさっさと歩いて行って、ジャーニイの近くに積ん
であつた数冊の本の一番上を取り上げた。

「英雄伝か……ジニーは昔からこれらの伝記物が好きだったね」と
シャンティは爽やかに語りかけた。「こちらではこうやって本を読
んで過ごしているのかい？」

「やることなんてないからな」とジャーニイはシャンティを見もせ
ずにいった。「お前は忙しいみたいだな」

「ぼくが忙しいのは妻子の世話のせいさ。君もシユラク二世の教育
に参加してみてもどうだい？ 子供にモノを教えるのはなかなか面
白い。最近はウィスカやベアードたちに気持ちが悪くにもわかるよ
うになってきたよ」シャンティは床に腰をおろしながら話しを続け
る。「この前、ぼくの息子リュキウスに日記帳を渡してみたんだ。
まだ、字は書けないけれども、彼は何やらよくわからない絵を描い
ていたよ。訊いてみれば、ぼくとルルディファイロだったそうだ。
ふふふ、彼は将来良い画家になるかもしれない。もつとも、革新派
の画家だろっけれども」

「例え才ある者に育つたとしても、重用されないんじゃ意味がない」
ジャーニイは本をめくりながらいう。彼の顔は以前よりも太ってい
るように見えた。「シユラク二世は、所詮、おれの息子だからな。
ジャクナの治世じゃあ重用されないし、重用されないなら才を活用
することもできない。それならば教育など時間の無駄だ。けれども
お前の子供は違つたろう。お前の子供はちゃんと育てるよ、重用さ
れる可能性があるんだから。リュキウスがジャクナや次のジャクナ
四世に気にいられて宮廷につかえることになつた時、絵しか描けな

い無能だった……なんて、馬鹿らし過ぎるからな」

「それがだね、どうもジャクナ四世は大人すぎるらしくてね」

「どうにも魯鈍らしいな」

「いや……そこまではわからないけれど。というよりも、ぼくは彼が魯鈍だなんて信じられない。彼は物凄く聡明な子供だよ。それこそ、ぼくの子供よりもずっと……」シャンティは不思議そうに首をかしげる。「でも、なぜか彼には生気が感じられない。奇妙に透明な印象を受ける。彼は物静かで、何を考えているかわからなくて、それでも……。まあ、そうだね。彼が本当に魯鈍ならばリユキウスやシユラク二世、マスタングなどの多くの人の助けを必要とするだろうし、聡明ならば誰をも分け隔てなく評価して本当に能のある者を身近に侍らすだろう」

ジャーニイは厭世的な感じに首を振った。

「ふん、どちらにせよ。おれはおれの息子があの馬鹿野郎の息子にこき使われるなんぞ真つ平御免だね」

「ふむ………」シャンティはジャーニイをまじまじと見つめる。

「所で君、太ったね」

「な」んだと、と言いながらジャーニイは自分の顔をべたべた触った。「そう……だろうか。ふん、まあ、そうだろうな。訓練なども全くしてないし、する必要もないしな。何せここは、穏やかな南部グナトウスだからな」

「それでも、思ったより元気そうで安心したよ」シャンティは目を細めながら言う。「兄上が帰ってきたら、ぼくはもう一度君のことを兄上に進言しようと思うんだ」

「別にそんなことをしなくてもいい」

ジャーニイが窓の外を見ながら言う。

「でも………」

「実は今、例の兵站部門の不具合のことを調べているんだ」ジャーニイが立ちあがり、本棚に寄って行く。そして、シャンティたちから見て右の本棚のちょうど真ん中の段にから紙の束を取り出す。ジ

ヤーニイはそれをシャンティに渡した。「カバルスの官人たちのリストだ。役職や部屋の場所、任官期間など事細かに書いてある」

「どうやって手に入れたんだ？」シャンティはの渡された資料を見ながら言った。「君はこんなことができるのかい？ 立場的にさ」

「来る時に持ってきたんだ。さすがに、そのままあちらにあった物を持つてくることはできなかったから、おれが手書きで写した。さらには、あちらにもまだおれ子飼いのスパイがいて、追加の情報を伝えてくる。あと」ジャーニイが紙の束から一枚取り出す。「これはおれがまとめた紙だ」

「犯人のリスト」シャンティは口に出して読んだ。ジャーニイから差し出された紙の中には何人かの名前が載ってあった。それは糧秣輸送の要求を握りつぶした可能性のある人間だという。そのリストの中にはあのハンスの名前もあった。「……知った名前が、いくつがあるな」

「本当か？」ジャーニイは弟の記憶力に感嘆しながら訊いた。「少し言ってみる」

「まずは」とシャンティが話し始める。「ブーケパラは気弱な男だ。彼は元王宮の雑務をしていた。アリシドンは粘り強く、彼はずつと計算をしていた。正しい答えがでるまで何度も同じ計算をしていたなあ。エクリプス！ 彼は天才だ、何でも出来た。雑務もこなせたし、絵も描けた。面白い発明の図案も見せてもらったことがある。リウキウスの家庭教師として彼を呼ぼうかな。ああ、インキタトスか彼はいつも王宮を走りまわっていたな。スミルス、彼は武官じゃないのかと思うほど腕っ節が強いんだ。彼は結構流暢にサウルス語を使うから、書簡の翻訳の仕事をしていた。机の上で書類を作っている姿を見ると面白いのなんの。ハンス……彼は……たしかヒツパリオン族名を持っている男だ。彼もスミルスと同じ部署だったろうか。確か、総督と監督の間の……」

「ああ、この部署が怪しい。だから重点的に調べているんだけどもな、犯人はなかなか足を出さん」

「犯人を見つけたら？ どうするつもりさ。兄上に報告するのかい？」

「……一応そのつもりだ」ジャーニイは笑みを浮かべながらシャンティを見た。「ふん、おれはまだ全てを諦めちゃいない」

「それはよかった！」シャンティは手を広げて喜びを表現する。「そうかそうか、ジニーは世捨て人にはなつてなかつたんだね。それはよかった。それならば、ジニー。君はやはり子供の教育に尽力せねばならないよ。さあ、行こう。よお、行こう。エレやタイスたちはシユラク二世の所に行っているんだ。ぼくたちも行こうじゃないか」

シャンティは彼の手を引いて、立ちあがった。ジャーニイは強引に立たされる。シャンティはそのまま廊下の方に彼を引っ張っていく。ジャーニイは嬉しそうに頬を赤くする弟を見て、げんなりしたように眉を八の字にした。

コイツは何にもわかっていない。彼はシャンティに引っ張られるままにしながら、そう考えていた。

コイツは何も分かっていない。おれは、息子など、シユラク二世などどうとも思っていないのだ。あんな女との子供などどうとも思っていないのだ。もちろんタイスのこともどうも思っちゃないし、子供を作ろうとも思っていない。おれはな、もし自分の後継者に値する人物が生まれたならば、そいつにはおれと同じ名前を与える。

そして、おれはその子供をユルシュと作るのだ。ふん、はは。シャンティ、おれはどうやっても力を取り戻す。取り戻して、ジャクナを殺し、国と王位と妻を奪い取る。そのためならば、お前の無条件の好意も利用してやる。お前が破滅したとしても、おれは歩むのを止めはしない。シャンティ、それでもお前には本望なんだろう。誰かのために自分を犠牲にするのがお前の望みなんだろう。それならば死んでくれるよな。おれに使われて歴史に愚者として名が残ることになったとしても、おれのためならば死んでくれるよな。

「シャンティ」エレたちのもとに向かう廊下の真ん中で、彼は弟を

呼びとめた。弟は立ち止って兄の方を振り向いた。兄は手を差し出していた。「これからも、手伝ってくれよな？　いろいろと……」

シャンティは喜びをにじませながら差し出された手を握った。

「ああ、もちろんだよ」

その返事を聞いたジャーニイはシャンティと横並びになって歩き始めた。窓から差し込んでくる陽光がジャーニイの目を照らす。

彼は思った。つまらない奴らと共につまらない時間を過ごさなければならぬ。しかし、それも計画のための準備であると思えば彼には我慢ができた。計画のために、彼は陰鬱そうな顔を朗らかで純粹そうな顔に変えた。

まるで、敵の都市を落とすために策を講ずる英雄のような心境だった。

29・屈折している不屈の心（後書き）

画像はタイス。実際はもっと太いのじゃないかな。

エレの会話はホントに……もう……。

これを張り付けている現在、この小説を見た人の数（ユニークユーザー数）は700人くらいです。

重複を考えたり、中身を読もうと思ったりした人の事を考えると10人に1人くらいしかこの小説を読んでないでしょう。そして、ここまで読んでいる人も10人に1人でしよう。

と言うことは、7人と言うことになりませんか。

この7人はきつと選ばれし者かなんかでしょう。

たぶんそろそろ異世界に召喚されて、戦争に巻き込まれたりなんかします。重装歩兵に身をやつし、重い盾と長い槍を手にとって、絆で結ばれた仲間とともに、密集陣形「ファランクス」を築かねばならんでしよう。で、戦闘に突入した末には、戦列の先頭に立って「アラララーイッツ！」とか叫ばならん状況に陥ります。

もし危なくなったら、この言葉を思い出そう。

「敵決勝点への主戦力の投入」

これを覚えていれば何とかかなります。ギャロプン的には。

> i 3 3 5 6 6 — 4 0 5 7 <

二三五年の夏。西都ヒツパリオンにて一時休息をとっていたサウルス軍のもとにサンジャヤなど、イハテリオ諸国の同盟軍がコロナ山脈を越えてきていると連絡があった。

ジャクナ王、ギャロツプが国軍四万、総督軍一万、自警軍七千を率いて現地（この強行軍には糧秣を随伴していない）に急遽出発（この強行軍には糧秣を随伴していない）。国軍のうち、一万が騎兵であり、西部カバルス自警軍も全てが騎兵なので、騎兵の割合はかなり多く、軍全体の移動の速度は速かった。イハテリオ同盟軍は八万の兵を揃えており、それらをコロナ山脈のすぐ北にあるテール高原に配置していた。そこはカバルスの両地である。

二日後、サウルス軍がテール高原に到着し、野営にて一泊した。

一夜明け、イハテリオ同盟軍はサウルス軍の兵士が体力を完全に回復させる前に戦争を仕掛けた。すぐに両軍は激突。イハテリオ同盟軍の主力は歩兵であり、サウルス軍の主力は重装騎兵だった。

弓矢での遠距離戦で火ぶたは切って落とされる。イハテリオ軍は弓兵を一旦引き揚げさせ、密集隊形の歩兵たちの中に隠した。彼らはそのまま軍を進ませる。それを見たサウルス軍も弓兵を退避させ、重装騎兵の突撃を準備。整然と横並びになった重騎兵は息を合わせ、突撃する。イハテリオの兵士たちは槍歩兵の向こう側から矢玉を撃って猛烈な攻撃を開始した。密集して猪突猛進するサウルスの重装騎兵に投石機や弓矢の攻撃が加えられる。いくらかの小隊は瓦解し、それがドミノ倒しのように伝わり、重装騎兵隊は半分以上が行動不能になった。

それでも、残った者たちで突撃は続行され、それが敵の密集隊形に穴を開けた。その穴を広げるためにカバルス騎兵が突撃を開始。イハテリオ軍はどんどん混乱の渦に巻き込まれていった。こうなる

と、同盟軍のような多種多様の人間たちが作った連合軍は弱い。彼らは武器と防具をかなぐり捨てて我先にと逃げ始めた。

ギャロップは敵主力の殲滅に乗り出していった。各国の將軍たちのいる所に目星を付け、そこに一糸乱れぬ動きの軽装騎兵隊で突撃した。彼を先頭にした騎兵隊は敵の大軍を鮮やかに切り裂いて行く。

ギャロップの隊はこの戦いで敵將軍格の首を二つ手に入れていたが、それはあくまでも「將軍格」であり、敵国の国王などの最高司令官の首ではない。

同時に、ギャロップはウイスカに軽装騎兵隊を指揮させて敵の包囲にあたらせていた。ウイスカは自分たちから見て右方向に散らばって行く兵士たちの進行方向に先回りし、彼らをぐるりと包囲した。これで片翼包囲は完成する。ギャロップとしてはもう片翼も包囲したかったが、機動力のあるカバルス騎兵は中央突破し、敵の腹の中心に容易に動かせない。彼は完全包囲を諦めた。

それでもサウルス軍は戦いに完勝した。

五万七千のサウルス軍はテール高原の戦闘において千ほどの死者を出した。もちろん、そのほかにも負傷者はいた。戦闘序盤の敵の攻撃によって発生した集団落馬での骨折者などは数千に昇っている。対して、イハテリオ同盟軍は二万の戦死者を出した。やはり彼らの主力が歩兵だったのが要因となっている。もし、作戦を突破ではなく包囲にしておけば敵の殲滅はもっと大きな成果を上げていたはずである。

とは言つものの、重装騎兵を主力にした場合、機動力はそれほどないので包囲に向いていないのだ。つまり、重装騎兵は柔軟性に欠けている（と言うよりも、機動力に欠けるイコール柔軟性に欠けると言っても良い）。この柔軟性の低さや突撃時に的にされやすいことを考えると、やはり、重装騎兵での突撃作戦はスマートな作戦とは言えなかった。

「敵地占領を主目的にするならば突破戦法でも良い。だが、敵の殲滅が目的ならば包囲の方が良い」とギャロップはウイスカに漏らし

ている。ウイスカは將軍のこの言葉をシャンティに送る手紙の中に書いている。

さて、サウルス軍はこうして首尾よく敵同盟軍を追い払ったわけである。普通ならばこの後は当初の目的通りサンジャヤへ攻め込むわけなのだが、ジャクナ王はそれを止めにして王都に帰ることに決めた。この決断にはほとんどの者が驚いた。

ジャーニイはこの話を聞いて、ジャクナ王の今回の目的が後顧の憂いを絶つことであるのに気がついた。

彼はエラルジスにこう話している。

「奴の目的はサンジャヤの富ではなかった。もともと、サンジャヤ成敗はおれの意を汲んだものにすぎなかった。奴は、おれを排斥したのだからもう一度サンジャヤへ行く義理は無い。しかし一方で、前回の勝利で調子に乗ったサンジャヤがサウルス国に攻めてこないように釘を刺しておかねばならない」

エラルジスが緊張した面持ちで尋ねた。

「では新王の本当の標的は、やはり……」

「ああ、奴は東に遠征するつもりだ。父上が失敗した、小ウアズマに侵出するつもりなのだ。その間にイハテリオの奴らが攻めてこないように、一度徹底的に潰しておこうと今回軍を出したわけだが、それは思っていたよりも簡単にそれができたようだ。ふん、あれだけ大勝すればイハテリオの奴らがいくら馬鹿でも、サウルス国をもう一度襲おうとは思わんだろう」

「重装騎兵軍団、先の戦闘では驚くほどの威力でしたな。しかし、次は東で……」エラルジスが葡萄酒を飲みながら感嘆したように言う。「重量のある彼らが成功しますでしょうか？」

「小ウアズマにおける父上の敗北の主要因は兵站面の不備だった。で、ジャクナの主力の重装騎兵は糧秣を馬鹿食いする軍団だ。つまり相性はすこぶる悪いことになる」ジャーニイは手に顎を寄せながら、冷静に分析する。「とはいえ、ジャクナのもとにはギャロップがいる。あいつは戦えば戦うほど強くなるような……まるで底が知

れん奴だ。奴がいれば小ウアズマなど、どうにでもなるのかもしれん」

と言いながら、彼は何とかしてギャロップを手に入れる方法は無いかと考えていた。少し前ならば、シャンティを味方に引き入れれば簡単にギャロップを手に入れることができるはずだった。ところが、今はそのラインは完全に切り離されており、ギャロップはまるでジャクナ子飼いの將軍のようになっていて。さて、どうやってギャロップをシャンティのもとに返させるか……。

二二五年の秋。イハテリオ同盟軍を撃破したサウルス軍は持つて行った糧秣をカバルスにて売り捌いて帰ってきた。凱旋帰国であり、兵士は凱旋門を通り、市民たちも花などを降らせて歓迎したが、自分たちから取り上げた糧秣を向こうで売って軍費にしたことには呆れたような感想を漏らしていた。

ジャクナが王都に帰還して一週間後、シャンティとエレ、リュキウス、レオナラは北部カンプトケファレの首都であるウチノホークに帰って行った。ギャロップとフェミナ、マスタングは王都に残っている。

シャンティは北都に着くと総督として溜まっていた仕事をすぐに片付け始めた。署名などの事務的な手続きに関する仕事はさっさと終わらせることができるが、各地で現実に起こっている問題はなかなか片付けられない。賊が出る地区には軍を派遣したり、去年の春から活発化しているモーキリニアのイムサ国に備えた軍備増強などを推進したり、北部とは直接関係のない東部の食糧難の問題があった。

東部の食糧難と言えば、サンジャヤ成敗のための食料備蓄から来る重税はいまだに続いており、そのせいで東部の疲弊は急速に深刻化し始めていた。農地を捨てて放浪者・賊に落ちた者たちを捕まえるのために東部ヘドロケラスは総督軍・自警軍をしきりに派遣したが、浮浪者問題は非常に広範囲で発生しており、すでに一地方の

総督の許容量をオーバーしていた。手に負えなくなつた東部の総督はシャンティの総督軍に助けを求めた。シャンティはこの要求を受け、近衛騎兵五百と兵六千を率いて東部に向かっている。

そんなシャンティは、東部と北部の境界線の近くに出没する賊を相手取る際、自警軍のビグフトス百人隊をこっそりと引き連れて戦つた。この時には、ビグフトス隊はシャンティの軍団の主力とも言える存在になっていたのだろう。

シャンティがビグフトスを信用していたことを示すエピソードがある。

シャンティが息子リユキウスの武術の家庭教師としてビグフトスを迎えたいと申し出たのだ。各隊の隊長が集まってとつたある日の夕食の時に、それは切り出された。

「ビグフトス殿、どうですか？ ぼくの息子のリユキウスが剣を振れるくらいに大きくなつたら、彼の剣の先生をしてくれないでしようか？」とシャンティは塩と胡椒のみで味付けした丸焼の鶏肉にかぶりつきながら言った。ビグフトスはいきなりのことと驚いたような顔をしていた。彼らは、ぱちぱち音をたてる火を中心にし、丸太を椅子代わりに円陣で座っている。シャンティの隣にはパンに火の熱でとろけさせたチーズと鶏肉のほぐしたものを詰め込んでいるシエイバス。もう片方の隣には片手に鶏肉、片手に魚を持って、口いっぱいに頬張っている大男フートス。その横に焼き魚を食べているカバルス騎兵隊長。その横に隻腕で兎の丸焼を食べるビグフトス。「だめだめ、だめですよ」フートスが口の中の食い物をこぼしながらシャンティに注意する。「爺さんのしごきはとてもじゃないけど、王子の御子息には耐えられませんぜ。そこですがね……」

「お前こそ駄目だ」

とシエイバスは彼が次の言葉を発す前に制す。

「はい？ まだ何も言っていないじゃねえかよ。何を言うかわかっているのか？」

「どうせ、自分が指南役をやりたいと言うんだらう。だが、お前で

はだめだ。大体お前は人に何かを教えたことがあるのか。ないだろう！ お前がそれをすると言うのなら、おれがした方がずいぶんマシだ」シェイバスは付け足している。「それにシャンティ様はもう王子ではない」

フートスは隠す気もないくらいに大きく顔をしかめながらシェイバスを睨む。

「フートスはビッグフトス殿に剣術を教えてもらったのかい？」

シャンティが助け舟よろしく訊くと、彼はしぶそな顔をしながら頷いた。

「爺さんはおれの母方の爺さんで、親父は大工だから、教える人と言ったら爺さんくらいしかないんですよ。んでも、爺さんのしごきと言ったらそりゃあもう……おれが十歳のころに兵士になると言った時はまだよかつたんですがね、ほら、モーキリニアのしきたりで十一歳になると戦士の訓練をせにやらんでしよう。それがきつくて、きつくて」

「いやはは、親族の中で戦士になるといった男がコイツだけだったので、少し舞いあがっただけです」ビッグフトスがフートスを睨みつけながらシャンティに言う。「しかれど、わしなんかがシャンティ様の御息の先生になるなど……剣術のうまい方と言えばシェイバス殿もいることですし」

「いいえ、さつきも言ったように、おれの剣術はビッグフトス殿には及びませんので」

辞退させていただきませう、とシェイバスが首を振る。

「おれにも敵わないしな」

とフートスが鶏肉を噛みつきながら言う。

「負けていない。いや、負けたことはあるが、トータルすれば同じくらいの勝敗数だろう！」「おれはサウルスの貴族様のプライドを守ってやるために、時々手を抜いてやってんだよ」

「なんだ！ 馬に乗れないから教えてくれ、と言うから教えてやったのに、結局乗れなかつたくせに。もし騎馬で勝負をすればそんな

言い訳も……」

「そうやって自分の得意分野で勝負しようってのが間違いないんだよ。そうだな……ここは間をとって、船で勝負しようじゃないか？」

「お前が密かに船を漕ぐ練習してるのをおれは知ってるんだぞ！」

「変態！ どこで見てた！」

「変態はお前だ！ おれはお前がこのまえ色町に行くのを……」

「前に誘ってやらなかったのをまだ根に持ってるのか！」

「そそそ、そういうことは！」

「ともかく」シャンティが二人を無視しながらビッグフトスに懇願するように言った。「ぼくの依頼を引き受けてくれるでしょうか？」

「……ふーむ」ビッグフトスは鶏肉をぶつ刺していた木の枝をがりがり齧りながら考える。「ですが、わしももう年ですので。いつ死ぬとも分からん身空、そのような約束をしてシャンティ様やリュキウス様をがっかりさせるのも気が引けますし」

「なに、リュキウスが剣を振るう頃にあなたがまだ生きていればラツキー、と言う感じに御気楽に待っていますよ」

「ううむ……シャンティ様、御息は何歳でしたかな？」

「三歳だよ。もう座学にて英才教育を始めている。ふふふ、彼はなかなか筋が良い。この前にも日記を見せてもらったことがあってね、どうやら毎日ちゃんと書いてるんだそうだ」それを聞いていたカバルス騎兵隊長が、御息もシャンティ様のように筆まめになるのか、まったく……と肉を喰いながら思った。「彼はもしかしたら、高名な戯曲家になるかもしれないね」

「ふむ、結局、リュキウス様は現在三歳と言うことですね」

「うん、まあ、そうだけだね。いや、でも三歳にしては頭の回転も……」

「三歳なら」ビッグフトスがシャンティの話しを遮って、齧っていた木の枝をひゅっつと払いながら言った。「もう、剣を振るえる年齢でございます」

「あーあ」とフトスが頭を抱えながら言う。「もうやる気になっ

てらあ。王子、御子息に嫌われたって知りませんぜ」
こうしてリュキウスの武術の英才教育の手筈は整った。

ただ単に討伐するだけでは東部の賊は治まらない。そんなことは
シャンティにも重々承知のことだった。

まずは賊による騒ぎが頻発する状況を何とかしなければならぬ
のだ。では、なぜ農民が農耕地を捨てて賊に落ちるかと言うと、そ
れはあまりにも働き甲斐がないからであろう。

そう言うわけでシャンティはジャクナ王に減税を頼み込んだ。が、
了承されなかった。了承されなかったけれども、それに類する策を
とる許可を貰うことは出来た。

東部の元耕作地を復興させて収穫した場合、その土地で二年間に
とれる物を無税にすることをシャンティは決めた。これはうまくい
くはずであった。しかし、すでに大規模農場を持っている大地主が
荒れた元耕作地を囲いこむと、貧富の差が今以上に広がるかもしれ
ないことが分かると、「無税になるのは農地を持っているいなかった者
に限る」との追加条件を出した。

シャンティの考えた農耕政策の欠点を彼に教えたのは、西部カバ
ルス地域から呼び寄せたエクリップスだった。もともとシャンティは
リュキウスの家庭教師として彼を呼び寄せたつもりだったが、エク
リップスは思わぬ形で新政策創案の役職にもつくことになる。

彼は以前にシャンティが言っていた通り、絵画を描くこともでき、
よくわからない新しい機械の図案を描くこともでき、カバルス人ら
しく騎馬もでき、官人の細々とした事務をこなせ、子供の教育もで
きた。なかなかオールラウンドな人間であるが、これと言って大成
した記録がない。一つのこと集中してれば、きつとその道の第一
人者として名を残していただろうとも言われる。

この頃のシャンティは人材マニアだった。

天才エクリップス以外にも、哲学者アストロラーボン、王の侍従つ
まりはエリートのレフティス、戦士ビグフトス、語学の学者、大工

などなど……色々な人間を彼は自分の元に集めようとしていた。じやあ、集めてどうするのかと言うと、公務を任せるとかではなく、リュキウスの家庭教師になって貰おうと思っていたのだ。最も、この時点ではほとんど集まっていない。

また、彼はリュキウスの同世代の友達も作ることに熱心になっていたようだ。特に、同じ年に生まれたギャロップの息子マスタングはしきりに北都モーキリニアに呼びたがった。ジャーニイの息子シユラク二世も同様である。

すでに三歳児リュキウスと交友関係である者もいる。エクリップスの持つ八歳の息子もそうである。息子の名前はコルトであり、父に似ず生意気で、よく歳下のリュキウスをいじめていたとのことである。

この二二五年の東部遠征の際に、シェイバスは東部の貴族の娘と結婚しているが、後の歴史家はこのことを『リュキウスの友達を作る意図があった。』と言う風に考える者もいる。そんな意図はないと思われるが、シェイバスの息子は次の年、つまりは二二六六年の年の暮れに生まれている。名前はボルドである。

その二二六六年にはジャーニイとシャンティ（とエレ）は三十歳になる。また、エレもこの年の暮にもう一人子供を出産しており、今回も娘であった。この年子の彼女はバルシネという名前を付けられる。

さて、二二六六年を始めから見えていく。

まず、領土拡大をしていたイムサ国で内乱が起こる。それは、エムノン軍にいたネオットス、ストルートス、アレクトール、コローネの派閥と、それ以外の武官の派閥の争いだった。この戦いをネオットスたちは勝ち抜いたが、ストルートスとアレクトールが戦死している。自分以外の武力派閥を掃討した彼は、文官をも掃討しようとした。が、王宮の事情をよく知らない国民たちが反発して運動を起こし、文官の排斥には失敗する。この運動は文官の世論操作によるものであるとされる。ネオットスは冬の間に起こった内乱を夏に

治めると、すぐに領土拡大の遠征に乗り出している。

春。サウルス国では中央サウルス地方にて大規模合同訓練が行われ、シャンティも招集された。他方、ジャーニイは呼ばれなかった。この時、シャンティは久しぶりにギャロップと共に馬を並べて訓練した。また、各地で小ウアズマ遠征のための色々な準備がはじめられた。特に東部では船が次々に作られ始めた。

夏の中盤頃には東部の農作物が今年はずまく育っているのがわかった。同じころ、ビッグトスが三歳とちよつとのリキウスに木の棒を持たせて武芸を施し始める。

夏の終わりには各地の推定収穫量が政務室に集まってきた、シャンティたちは財務官と共に推定税収を計算した。この時期、ギャロップやフェミナたちがウチノホークを訪れており、ギャロップはフェミナとマスタングをウチノホークに残して王都に帰還している。

秋になるとシャンティは「燻製大全」と言う本を出している。これは、東部の食糧難への対処法の一つであった、食料の長期保存の研究成果とも言える。シャンティはさまざまな肉やさまざまな木の屑で燻製を作り、それを克明に記録している。ところがアストロラーボンには「過去の燻製に関するレシピ本の焼き直し」として酷評されている。これに対してシャンティは、数十メートルの巻物にびっしりと字を詰めた抗議文を送っている。

冬になると今年の税収は去年と大して変わらないことが判明する。しかし、市場の穀物類の物価を見てみると安くなっており、これは市場に出回る穀物量が増えたことを証明している。つまりは元耕作地に関する政策が功を奏したのである。

また、この年の冬には前述の通り、シェイバスの息子ボルドとシャンティの娘バルシネが生まれている。

大晦日の夜、もしくは元旦の夜。ジャクナ赤髪王は大通りの広場の守護聖獣像の前にステージを設けて、星影が燦々と輝く真冬の夜天の下で、白い息を散らせながら、春の訪れを待って小ウアズマへ進出することを宣言した。王都の市民たちや兵士たちは歓声をあげ

ながら東方蛮族成敗の祝詞をあげた。
父の代から続く大事業が再開されようとしていた。

30・東への準備（後書き）

うまく描けんすな。

この世界は本という形が普及しているのか、巻物式なのか。どっちなのかハッキリせいと言っ感じです。

そこら辺の描写を直せばいいんですけど、それは面倒なので……。

31 王都の日々

ジャクナとギャロップ率いる小ウアズマ地方遠征軍が出発する一週間前、シャンティたちは例の如く王都に出向いて、留守番を任せられた。

シャンティたちはジャクナ王や国軍の將軍たちに挨拶をすませたら、離宮のユルシユの所に向かった。その案内役はなぜかギャロップが買って出た。

「フェミナとマスタングとおれの三人きりになっても困るからな」とギャロップは離宮までの馬車の中でシャンティに言った。馬車は四人乗りで、シャンティの馬車には彼とギャロップ、マスタング、リュキウスが乗り込んだ。すぐ後ろの馬車にエレとレオネラ、バルシネとフェミナが乗り込み、少しすると馬車がごとごとと動き出した。

「そつえば……」リュキウスが腕を組んで、首をかしげながら質問した。「母上は南部に行く時は、レオネラが生まれたばかりだから無理させたくない、と言っていたのに、今回はごねたりせず普通についてきてますよね。なぜですか？ 父上。今回だってバルシネが生まれたばかりなのに」

「そりゃ、今回は色々と安全だからだろ。ふん、はは。お前の母ちゃんは思った以上に憶病なんだよ」

とギャロップが返す。その横に座っている、マスタングがつまらなそうな目で父親を見ている。

「あの母上が臆病だというのなら、父上は一体どうなるんですか」「意気地なしだろ」

とマスタングが返す。

「おしいな、ミーンー腰抜け野郎が正解だ」

とギャロップが返す。リュキウスはハッと目を見開きながら父の姿を見る。シャンティは呆れたように、汗を額に浮かばせている。

「それにしても、君たちは驚くほどに似たもんだね」シャンティはもういいや、と言う風に首を振る。「マスタングを見てみると、ギャロップの子供の頃はこんな風だったのだから、って思ってしまったよ。今回はそれをユルシユお義姉様に訊くために帰還したと言ってもいいね」

「大將軍殿がマスタングと似ているのですか？」リュキウスはまた眼を皿のようにしてから親子を交互に見る。二人は気まずそうにながら比べられている相手と顔を合わせないようにしている。「ということ、大將軍殿もマスタングのように心がねじ曲がっているということなのです。なるほど」

「おれをコイツと一緒にするなよ」とマスタングが不機嫌になって窓の外の風景を見ながら言う。「こんなのと一緒にされちゃあ、困るね。困る困る。おれが、お前だったなら、この『困る』という言葉葉の所を、ちよつと吃驚するくらいの言葉で表現するが……まあ、今回は無理なので、よしておこう」

「ふん、十年後が楽しみだ。いんや、お前は十年たつても今のリュキウスの知識量にも及ばんだろうな」ギャロップがムツとしながら言いかえす。「お前、最近やつと馬に乗れるようになったんだって？　しかも子供馬だつて言うじゃないか。おれがお前くらいの頃なんてもう大型馬を自分の右手のように巧みに操作してたもんだ」
「馬に乗るか、女に乗るかしか能がない男は、あーあ、嫌だ嫌だ」とマスタングが五歳児らしくない言葉で言い返す。「五歳児相手に何をムキになつているんだか。おい、リュキウス、こんな奴とおれが似てるってのか？　ふん、お前の目は節穴だぜ」
「ふうむ」

リュキウスは目の前の親子に感嘆しながらシャンティの方に珠のような黒色の瞳を向ける。シャンティは何か言いたそうな微笑みを浮かべていた。リュキウスは眉を上下に動かす。

「大体……似ていると言えば、お前たちの方が似ている」ギャロップは顎に手を当てて、シャンティ親子を見ながら言う。優しげな表

情、柔らかそうな金髪。似てない所と言えば。「目の色くらいだな。それ以外はそっくり、くりそつ。親子だからと言ってそこまで似るものかね」

シャンティは君が言うなよ、と思いつながらギャロップを見返した。「それでもあの魔女まはおやに似なくて良かったぜ」マスタングが言う。

「それは同感」ギャロップが答える。

「それならばご安心を」リュキウスが微笑みながら返す。「母上の特性はきつとぼくの妹であるレオネラが受け継いでいることでしょう。そして、多分バルシネも」

「どういうことだ？」

ギャロップが顔を青ざめさせる。魔女が三人に増えているだと？

「コイツの妹はどっちも我が儘」マスタングが頭を抱えながら、父に話す様に呟く。「まだ二歳と零歳だから良いけれどしゃべり出したらどうなることか……。シャンティのおっさんなんてどっちか一人だけだならおれにやろう、とか言っただけでもね。おれは女の尻に敷かれるのなんて御免だよ」

「おれもそれは御免こうむる」ギャロップが虚ろな目で虚空を見つめながら言う。「魔女が親類になるなんてありえん」

「そんなこと言って」リュキウスがにやにやと嫌な笑みを浮かべながら言う。「妹たちが美しく育った時に、泣きついて来ても知らないぞっ」

「美しく育っても嫁には不要だ」

マスタングがノーサンキューと言う感じに掌をリュキウスに向ける。

「もしかして、もう契った相手がいるのか!」

シャンティが顔を真っ赤にし、身を乗り出しながら訊いた。

「五歳の身空で、んなもんいるか! お前たちは何かと生き急ぎ過ぎてんだよ!」

「おい」ギャロップが窓の外を見ながら呟く。「着いたみたいだぞ」
シャンティとリュキウスは窓に身を乗り出して、外に見える離宮

の壁を見た。薄茶色の煉瓦が均等に半分ずつずらされながら組みあげられている。煉瓦の色は真新しい感じだが、下の方に絡みついて
いるツタがその逆の印象を覚えさせる。離宮は午後のひと時の中で、
見事に風景と交じり合い、穏やかな雰囲気を発している。

「ふん、一年くらい前に何回も見ただろう」

とマスタングが頭の所で手を組んで、子供に似合わない、つまら
なそうな顔をしている。ギャロップは息子を見ながら、まるでおっ
さんだ、と思いつつも心の中で息子の意見に首肯した。

馬車は離宮の壁に沿った道をぐるりと回り、城門で手続きして門
を開けてもらう。シャンティたちは離宮の中に入ると馬車を下りて、
宮殿の中に入った。

離宮のカバルス人兵士たちや侍女たちが入口の所で彼ら出迎え、
先導して案内を始める。

「おい、シャンティ」ギャロップが回廊の途中で彼に話しかける。

「おれたちも女たちについて行くわけか？ どうせ、つまらん女の
会話が繰り広げられるだけだぞ」

「とはいっても……ご懐妊の祝辞くらいは述べなければ」シャンテ
イがそう言つと、ギャロップはやや苦々しそうな顔をした。「……」

まあ、祝辞はぼくが個人的に言いたいただけだから、君はマスタング
やリユキウスを連れてそこいら辺でも散策していてくれてもいいけ
れど」

「ああ。それならば、そうさせてもらう」

とギャロップは踵を返して、独りで回廊を戻って行ってしまふ。

マスタングは父親の方を見て嘆息してから、彼の後に着いて行った。
「ふうむ、ぼくはどうしようかな」リユキウスが顎に手を当てなが
ら考え、次にシャンティの顔を見て言った。「父上はどうやら、ぼ
くに大將軍殿の所に行ってもらいたいらしいですね」

「正解、ぬはは」

シャンティが彼の大人のようない草に笑う。

「それでは」

頷くと、リユキウスはギャロップとマスタングを追って駆け出した。三人が角を曲がって姿が見えなくなると、シャンティはエレたちの後を追って歩き出した。

王妃ユルシユは二人目の子供を身籠っていた。出産予定はこの年の夏であるから、ジャクナ王が王都ヒツパリオンに滞在している間にはおそらく生まれないだろう。ジャクナ王の、父親としての心情を考えれば少しでも妻と共に居てやりたいと思っていただろうが、ジャクナは遠征を延期などしなかった。

「今しかないのだ」とジャクナ王は離宮のテラスから見える星空を見上げながら、横の椅子に腰かけて、大きくなったおなかをさするユルシユを見た。彼はもう一度言う。「西イハテリオ地方と北モーキリニア地方の情勢を考慮したならば、今しかないのだ」

「大丈夫ですわ」ユルシユは夫の顔を見ながら、慈愛に満ちた表情で言った。「なぜって、またエレ様やフェミナさんが来てくださいましたから。それに、私たちの子ももうずいぶん大きくなりました」
「ああ……そうだな」

ジャクナ王は息子のことを考える。ここ最近、ジャクナ四世は父であるジャクナ三世にだんだんと似通ってきた。髪の色はクリーム色から赤みの強い橙色に変色し、凜とした表情は王のそれと瓜二つだった。そんな彼はもう一人で眠るようになっており、時々夜更かしては本を読んでいるとのことだった。

彼はおそらく魯鈍ではない。そのことを彼の家庭教師兼侍従から言われた時、ジャクナは肩の荷が下りたような気がした。それはまた、今回の遠征を後押しする要因の一つにもなった。

ジャクナ王は妻に続ける。

「遠征は多分長くなるだろう。ははは、遠征から帰ってきたら四世がどれだけ大きく、また賢くなっているかが楽しみだ」

「ええ、だから生きて帰ってきてくださいますね」

「もちろん。生まれてくる子も見ねばならんしな。まあ、その時は

東方の宝物をたくさん持って帰ってくるさ」

「……そうですか。ああ、それで、この子の名前を」と言いながらユルシユはおなかをさする。「決めてくれましたか？」

「男ならばバツテリアス。女ならばクラティラ」とジャクナ王が言った瞬間、春の強い風が吹いた。まだ寒い日の、身も凍りそうな風だった。「これは駄目だ。早く中に入ろうか」

ジャクナ王はユルシユを気遣って彼女を中に導いた。

薄暗い部屋の中には、そこかしこに侍女たちが控えている。ユルシユがいついかなる時に不調を訴えてもすぐに対処できるようにしているのだ。

ジャクナ王は彼女を天幕付きのベッドの側にある椅子に連れて行って、彼女をその椅子に座らせ、自分はベッドに座った。

「ジャクナ様」とユルシユが言った。ベッドに腰を降ろしてすぐのジャクナ王は布団を少し調整しながらどうした、と返す。「東方に行ったら、やはり新しい女性を娶るのでしょうか？」

「……それは」ジャクナ王は身を強張らせながら、サンジャヤでの淫行にふける日々を思い出した。「それはそうだ。諸部族との連携をとるために、部族長の娘を娶らねばならないことだってある」

「別に、本当のことを言うてくださっても大丈夫ですわ。美しい人が現れたから娶ることもある……と」ユルシユは穏やかな調子で言葉を紡ぐ。「あなたの心が他の人に移るのは確かに悲しいけれども、それよりもっと悲しいのは、新しい妻の子共と私の子が世継争いをして無益に命を落としてしまうことです」

「わかった。ジャクナ四世を王太子に指名してから出発しよう」

ジャクナ王は険しい顔で、真面目に言った。

「そうではありません。私は別に王の妻であることも、次王の母であることも望んではいないのです」ユルシユは夫の顔をじつと見ながら小さく顔を振る。「ただ、愛する者に長く、幸せに生きてほしい。それだけを想っているのです。そして、それはあなたも同じ」

「……お前の言いたいことはわかる。だが、おれは東方遠征を止め

はしない。これは……ふむ、なんだろうな。これは父の事業だ。それと同時に、私の夢であり……」

「東に何があるのです?」

「夢、そして希望……これは、北の国の偉大なる王の言葉だ。

そうだ、東にはそれらがある。馬鹿みたいだろう? 男はそんな者のために命を賭けられるんだ」ジャクナ王はにっこりと微笑む。「君には言ったはずだが、おれの母は東方寄りの顔をしていたんだ。しっとりとした肌の、それは美しい女の人だった。おれは(こう言う)と君にマザコンだと笑われるかもしれないが)おれは母親のような人と結婚したいと思っていたんだ。そうなると東に憧れるのは必然のことだろう?」

「まあ、それじゃあ、今回のことは始めから新しい妻を探す遠征ですの?」

「そうじゃない。いや、向こうで妻を娶ることはあるかもしれないが……けれども、おれの正妻は君だ。心底人を愛したのも君が初めてで、おそらく、この先こんな人を愛することなんてないだろう。だから今はどうだっていいんだ。母の幻影を追い求めるために東へ向かんじやない。それはもう消え去っていて、今はただ東への強い憧れの想いだけが残っているんだ」

「……意外と普通の理由ですわ」とユルシュがくすくす笑った。「シャンティ様も、同じようなことを言いそうです」

「そうかもしれないな。あいつならばきつと、おれなんかよりももっと目をキラキラさせながら、情熱的に話すだろうが」

「ええ、本当にその通りでしょう。ふふっ……」

ユルシュが笑うのをやめないで、ジャクナ王はなんだか嬉しくなって目を細めて微笑んだ。

「ジャクナ様、目の横に皺ができています。昔はなかったのに」

とユルシュは細い指先でジャクナ王の目の横のしわをそっと撫でた。

「君にあってもう十年経ってるんだ。これくらいできるさ」ジャク

ナ王は恥ずかしそうに頭を掻きながら言った。で、話したいことを話したらすつきりしたのか、ベッドから立ち上がって彼女に今宵の別れの言葉をいった。「では、おれは、シャンティに業務を引き渡すために色々とまとめねばならんことがあるから……。ユルシュ、お休み」

「ええ、お休みなさいませ」

二人は軽く抱きしめあつた。抱擁が終わるとジャクナはできるだけ音をたてないように部屋の中を歩いた。数人の椅子に座つたまま侍女が眠っていた。困つたものだ、と思いながらも隣の者を起こさうとする侍女を制して、静かに部屋を出た。

それから外に待つていた自分の侍従に王宮への馬車を用意するように言つて、回廊をゆっくり歩き出した。先のユルシュとの会話の中で、彼には言つてないことがあつた。

彼が東へ向かう理由は、ただの憧れだけではないということ。違う理由も含まれているということ。

彼は確かに、母の幻影を東方の女に求めるのはやめに行っている。けれど、彼が王になつた時に彼の母の実家であるカマラ家を重用し始めたように、母への執着心は未だとして衰えていながつた。

彼女の母はジャーニイとシャンティの母親を毒殺したと疑われ、多くの人々から陰口をたたかれ、その果てにぶくぶく太つて最後には飯をのどに詰まらせて死んでしまつた。それなのに、二十年ほどたった今ではほとんどの者がそれを覚えていないし、当時母親を疑つていた者もその事件すら覚えていない。彼らは昔のことなど忘れ、ジャクナ王に取り入ってくる。ジャクナ王は彼らからの阿諛あゆを反吐が出るような思いで聞いていた。

ジャクナ王は、彼らがケロリと母親のことを忘れていることが許せなかつた。彼らの脳裏に母親の存在を、真っ白な絹に残る歪なシミのような形で残しておきたかつた。

ジャクナ王は過去に母親の陰口を叩いた者を厳しく肅清するようなことをしようとは思わず、完全に陰湿と言える形で復讐すること

に決めていた。彼らが母の心を少しずつ蝕んで最後には死にまで追いやったように、ジャクナ自身の心を外から徐々に削り取るように侵したように、彼らを苛^こませてやるのだと、そう心に決めていた。

復讐はどんな些細なことでもよかった。それこそ、当てつけのようにかマラ家を重用しだしたのだった。その一環だったし、時々わけのない癩癩を起してある官人を困らせているのだった。そうだ。

そしてこの時期、彼の陰湿な復讐はだんだん効果を表し始めていた。なぜなら、とある女官が、ジャクナ王が八つ当たりする官人たちの共通点を見つけ出し、それを官人仲間に噂として流したからだ。その共通点というのは、もちろん彼の母親を馬鹿にしていた、ということである。

ジャクナ王に苛^{いじ}められていたとある官人なんかは、その噂を聞いた日からずっと病氣と称して職務を休んでいる。自分の中に苛められる確固たる理由があつたので身の危険を感じたのだろう。それ以外の者だって、ほんの少しだけでも心当たりのある者は常に顔色が優れない。

ある歴史家はこの噂を流した張本人はジャクナ王だと言うが、それが正しいかはわからない。けれど、彼の復讐はこの噂によりいつそう完成に近づいたと言つてもいい。

そう、完成ではない。この復讐は彼の権力が大きくなるほど、その効果を高める。この理由については深い説明もいらないう。が、権力を高めるとはいつても、彼はすでに最高権力者の王である。ではどうやってこれ以上力を手に入れるのか……。

簡単なことである。領土拡大だ。それも、一等価値のある領土を手に入れることだ。

つまり、権力を高めることを目的とするならば、東への遠征はもつとも効果のある手段といえる。

東への遠征と母親を侮蔑^{ぶへつ}した者への復讐。彼のことを知っている者でも、「相容れぬことだ」と思うかもしれないが、この二つは彼の中では驚くほどびたりと一致していたのだ。

ジャクナ王は王宮に向かう馬車の中で東の星空を眺めていた。東への遠征はもうすぐ開始される。そう思うと、彼の胸は甘い痺れによって支配された。その胸の甘さを緩和するために彼は手元にあつた水をくつと飲み干した。その一部が気管のほうに行つて、むせてしまう。けれども彼は満足したような表情でまた星空を見上げた。東への遠征はもうすぐ開始される。そう思うと、また胸が甘く痺れ始めた。彼はそんな堂々巡りを飽きもせず繰り返していた。

31・王都の日々（後書き）

リュキウスたちは精神が発達しすぎだなあ……。

ジャクナ王とユルシュの会話は、なんか息切れしてる感じだなあ

……。

まあ、でも、これはキャラが立たんユルシュが悪い。悪いったら悪い。

3.2. ダイヤモンドの傷作戦

> i33651—4057<

二三七年春。ついに、東への行軍が始まった。七万人がこの遠征のために集まり、そのうちの三個軍団（三万人）を総司令官ジャクナ王が、二個軍団（二万人）を副司令官ギャロップ大將軍が、次の二個軍団をスタコイス・リザドス大將軍が率いることになった（彼はジャーニイの前の南部カバルス総督）。最後の二個軍団はリザドスとカマラ家の嫡子のどちらが率いるかで意見が分かれたが、副司令官でもあるギャロップが「できるだけ実戦経験が多い方」と進言したので、リザドスが大將軍の位を授けられた。

また、騎兵種が多かったせい、そのほとんどが貴族出身者や志願兵によって占められた。各地方の自警軍からも徴募されていたが、歩兵科だったビッグフトス隊はリストにも上がらなかった。が、多くの精銳が引き抜かれたことにより、多くの地方で新たに自警兵を集めねばならない事態に陥りもした。

今回東方に遠征するサウルス軍の特徴は上記のことだけではない。ジャクナたちは今回の遠征先で大規模な道路工事を計画しており、なので軍には工兵に類する者たちも多く集められていた。

さて、シャンティは王都センチリオンに残ることになっている。東への遠征であるから北都ウチノホークや東都アナポリスに控えていてもいいのだが、王都を空けるとジャーニイが王都を奪う危険性がある、とジャクナ王の意見があったから、シャンティは王都に駐屯することに決まった。王は、シャンティが王位を篡奪する危険性については全く考えなかったようだ。

小ウアズマ遠征軍は騎兵が中心だったせい、行軍スピードは速かった。一方で、歩兵はその分を自分の足でカバーせねばならないので、彼らの疲労感はそのすごい勢いで蓄積されていった。

ジャクナ王もそれがわかっていなかったわけではない。行軍中の

食料は騎兵よりも、歩兵に多く与え、休息地東都アナポリスでは歩兵たちに特別な恩賞も与えた。彼らはその多くを東都の娼婦たちに貢いだ。

東都で二日間の休息をとっていた間に、「小ウアズマ地方で諸部族が集まってすでに同盟を組み始めている」との情報が入った。ジヤクナ王やギャロップたちはこのことを議題に軍議をするが、これといって情報のないこの状況では大した議論はできなかった。

行軍が再開されるとサウルスの大軍は小ウアズマへの数少ない陸路である 竜の鼻の穴 を通って敵国に侵入した。小ウアズマは鬱蒼とした森に守られている。道といえる道もほとんどなく、サウルス兵士たちは細長い縦列になって森の中を進んだ。

ジヤクナ王、ギャロップの予想では、小ウアズマの諸部族は決戦するべく平野にて待機しているはずだった。しかし、どの平野を見てもその気配はなく、しかも彼らは夜を狙ってサウルス軍に少数での攻撃を仕掛けてきた。

「自軍が劣勢なのを敵が理解しているってことだ」ギャロップが軍議の際にそう説明した。「こちらの計画では一度決戦をしてから、小ウアズマ地方の道路工事を始めるはずだったが……どうもそれは無理なようだ。敵はシュラク王の時のことをよく覚えていているらしい」「それならばもう道路工事を始めますか？」

トリザドス大將軍が彼のすぐ隣の席で、頭をかきながら、のんびりした感じで言う。ギャロップが首を振る。

「今のままやっても、大工たちがただただ恰好的にされるだけだろう。やはり決戦で一撃与えてから、敵の反抗意識を削いでからでない」と

「つまりは、敵が決戦を望むように仕向けるわけですかね」

リザドスがあごひげをさすりながら言った。

「そうだ」意外と頭の回転は速いな、とギャロップが感心する。「問題は、それをどうするかだが……」

「集落を見つげ次第襲い、駆逐するというのはどうだ？」上座に座

ついていたジャクナ王がギャロップを見ながら言った。「民衆を痛めつけることによって、敵の対抗意識を燃やさせるんだ」

「アリカナシでいえば、アリだ」ギャロップが返す。「ですがね、おれたちは民衆を懐柔しながら進むんでしょう？ シュラク王は民衆を蹴散らしながら進み、結局はそいつらの力によって退却に追い込まれた。だからおれたちは民衆を懐柔しながら進んでいくんだって……」

「私もギャロップ殿の意見には賛成です。同じ轍は踏まないに限る」リザドスが眠そうな目を王に向ける。「サウルス軍の主力である重装騎兵が得意とする突破は、敵を数多く倒すのには向いていないでしょうが、敵を追い払い、その土地を占領するのにはいい作戦だと思います。我々はまず、村落を占領し、逃げた諸部族の戦士たちに代わって、彼らの家族を友のように大事に扱うべきです」

ギャロップはますます感心しながらリザドスの話を聞いていた。

彼は、シャンティやギャロップたちがカバルス鎮定軍としてカバルスに出向いていた時の総督だったが、そこでの彼の統治もシャンティ曰く「悪くない」ものだったらしい。もしかしたら、おっとりした容姿に似合わずできるやつなのかもしれない。と彼は思った。

「では、どうすればいいんだ？」と軍議に参加していたカマラ・アレックスが不機嫌な顔で質問する。彼はカマラ家の嫡子で、つまるところ次期当主である。プラス、大將軍の座を手に入れることのできなかった男だ。「大將軍方には妙案があるんでしょうな？」

「……それは」リザドスは困ったように頭を掻いた。「私にはまだ……なんとも」

「あることにはあるが……」ギャロップがつまらなそうに言う。ジャクナ王を含める諸將軍は一斉に副司令官の顔を見た。「我々は決戦をしたい、つまりは敵を一か所に集めたい。では敵を集めるにはどうすればいいか？ さて、ジャクナ王？」

「ああ……そうだな。うーむ」

ジャクナ王は腕を組んで考え始めた。ギャロップの後ろに立って

いたウイスカは、王のその姿を見て、ギャロップがシャンティにも同じようなことをしていのを思い出した。

「策があるならば、できるだけ早くお話になってください」

アレックスが刺々しく言う。明らかに敵対視している口調。

「はいはい」ギャロップは心中で舌打ちしながら言った。「敵を集めるためにはどうすればいいか……集まらなければならぬ状況を作るか、集まりたい状況を作るか……この二つは言葉的には似ているけれど、中身は全く違う。わかるか？ 集まらなければならない状況ってのは、いわば何らかの状況に追い込まれたから集まって戦おうってところだろう。しかし、集まりたいってのは違う。奴らは自分たちの意思で集まることを選択するんだ。つまりはこの分積極的だな。それで……」

「もう少し、手短には言えないのですか？」

アレックスが言う。ギャロップは眼を鋭く細めながら立ち上がり、アレックスのほうに近づいて行こうとする。

「……おい、お前何様のつもりだ」

「ただだ、大將軍殿」とリザドスがそれを止めに入る。「とにかくここは話を続けて」

「ふん」とギャロップは鼻を鳴らしてアレックスを睨みつけた。アレックスは顔をやや恐怖に歪めながらも副司令官を睨み返した。「つまりは困だ。弱点をわざと敵に見せて、集まりたくなる状況を作ればいいんだ」

「なるほど」ジャクナ王が頷く。「例えば、そうだな……大工は戦闘力が低く、道路工事の作業をしていて丸腰だから、我々の弱点と言える」

「ですが、奴らは道路工事の大工を襲うのに大部隊を率いてくるでしょうか？」とアレックスが言う。「例えば大規模工事をして、大工を大勢森の中に派遣しても一か所で作業をできるのは数人。それ以上は無駄です。もちろん、困なのですから工事の作業効率を追求しても意味はないのですけれど、それでも、大工たちを無意味に集

中させても、そのおかしな密度を訝いぶかった敵兵たちが攻撃を中止する
と言つ場合も……」

「正解だ、糞野郎」とギャロップが忌々しそうに言った。「だが、
よく考えてみる。弱点を見せるといったが、わざわざ本物の弱点を
並べてやる筋は、おれたちにはないんだ」

「何かを弱点であるように見せるのか」

ジャクナ王が言う。ギャロップはうんと頷いた。

「重装騎兵」とリザドスが呟く。「しかし……敵もこちらの情報を
ある程度分かっているだろうし……重装騎兵を弱点に見せるのは……
……」

「確かに」ギャロップが地図の上に並べられた重装騎兵の形の人形
を手に持つ。「平原地帯では重装騎兵はなかなかの働きを見せる。
そのことを小ウアズマの諸部族たちも知っているだろう。じゃあ、
森林地帯ではどうだろうか？ 奴らは森林地帯での重装騎兵の効果
を見たことがあるか？」

「森林では弱いと思わせる？」アレックスが眉間にしわを寄せる。

「重装騎兵は突撃力が重要なんだ。森の中ではそれも……大体、騎
兵が森の中では弱いのは圧倒的な事実だ。これでは、弱点であるよ
うに見せる、なんて無理だ。弱点であるのは事実なんだからな」

「それに関しては、森の中に森でないところを作ればいいのさ。そ
うすりゃ、そこにいる限り重装騎兵は弱点とは言えない。で、おれ
たちはそこに敵兵をおびき寄せせる」ギャロップが言った。ウイスカ
は、今回の作戦がおおよそ 潮の川 の時のような作戦になるであ
ろうことは、すでに見当がついていた。「作戦はこうだ。おれたち
は森林戦闘を何度か行い、わざと負けて、敵さんに、サウルス軍恐
るるに足らず、と思わせる。そして、敵が決戦を仕掛けてきたらそ
れを潰す。その際、森のいたるところに、重装騎兵を活用できる短
い道路を作っておき、そこに歩兵たちが敵を連れて逃げ込んできて、
敵を逃げられないように槍歩兵で蓋をする。最後は重装騎兵で圧殺
だ」

「ちょっと待って」アレックスが言う。「なぜ敵が決戦を？ 森林での少数同士の戦いで勝てるんだから、決戦に移行しなくてもいいはずだ」

「アレックス、簡単なことだ」ジャクナ王が言う。「森林での少数同士の戦いは、おのずと長引くことになる。それを我々は望んでいないが、同時に敵も消耗戦を望んでいない。おれたちを長い間自分たちの土地に釘づけにしても、奴らに良いことはないからな。奴らもできることならば、決戦を行って短期で決着をつけたいんだ」

「そう。森林での戦いを見て、もし決戦での早期決着が実現できると分かったなら？」

ギャロップが歯を見せて笑う。アレックスはぞつとしながらそれを見ていた。

作戦は決まった。作戦名は「ダイヤモンドの傷作戦」である。

作戦決行のための準備は、即日始まった。むろん、情報の漏えいを防ぐために、その意図は伏せられたままである。

『サウルス軍、ゲンエン森林地帯において、小ウアズマ諸部族に勝利』

そのような内容の書簡がシャンティのいる王都に届いたのは、まだ春も抜けきらない夏の初めのことだった。手紙の主はウイスカであり、彼らしい、克明な描写でゲンエン森林での戦史をつづっていた。

まず、サウルス軍は各地で道路を作り始め、それを少数で襲いに来た小ウアズマの諸部族と交戦を繰り返した。その戦闘で重装、軽装の両騎兵は森林では思うように有効活用されず、サウルスの歩兵も集団での練度は高いけれども、単体ではそれほど強いことを敵に見せた。

とはいっても、サウルス軍の損害はそれほど多くはなかった。それはなぜか。第一要因は、それ相応の訓練と経験を積んだ熟練兵が、敵と戦い、そして逃げるといふ任務に就いたことである。第二要因

は、そのような単調な作業を何度も繰り返すことによって、彼らの逃げに関する練度が高くなったせいである。ウィスカは手紙の中で『今のサウルス軍ならば、逃げることに關しては世界中のどの軍隊にも負けません』とも書いてある。それくらい、サウルス軍の逃げは実に手際が良かったのだ。

そういうわけで、敵諸部族は戦いの度にいと容易く勝利を手にした。さらに、数的に劣勢の場合でもサウルス軍を追い払うことができるのを理解し始め、彼らは徐々に行動の際の人数を増やし始め、ついには数百人規模でサウルス軍を襲うようになり始めた。

敵諸部族がその兵員数を駆使して、せっかく作った石畳の道路を破壊したり、土の中に埋めたりしたのはサウルス軍からしても予想外だったが、それでもそれ以外は順調といえた。

その後、敵諸部族は決戦の準備をし始め、それはすぐにギャロツブたちの耳に届いた。

春の終わり。サウルス地方から小ウアズマ地方への玄関口でもあるゲンエン森林地帯にて決戦が始まった。平野での決戦ではなく森の中での決戦である。サウルス軍は剣歩兵を森の中に並べた（森の中では長い槍を持つてうまく行動できない）。彼らは何度も逃げることを繰り返した熟練兵である。

リザドス大將軍率いるサウルスの剣歩兵が決戦の地をずんずん歩いていくと、百歩ほど先におおよそ数千の敵諸部族がいるのが見え（しかし、数千では戦いを挑んでこないだろうから、奥にも多くの兵士がおり、全部で一万人はいたと思われる）。お互いがお互いを発見すると、これといった挨拶もなく戦闘は開始された。

叫び声ウオークライを森中に響かせながら両軍の歩兵はぶつかり合った。サウルス軍の鋼鉄を張った盾と敵諸部族の分厚い木の盾がぶつかり合った。装備品の差からか少しずつサウルス軍が押し始めてきた。とはいえ、今回は逃げることによって敵を自陣奥に引き込むことが任務である。だから、リザドス大將軍は自軍優勢であるにもかかわらず、後退を下知した。

サウルス剣歩兵は命令通りに後退をはじめ、リザドス大將軍が「これはいかん、退却」と大根役者っぽく叫んだと同時に、サウルス兵は自陣後方に散開し始めた。敵諸部族は血気盛んにそれを追いかけた。彼らはすでに勝利の美酒に酔っていた。

敵諸部族は頭に血を昇らせてサウルス軍を追いに追った。その途中で鬱蒼うつそうと茂る草木の林がなくなっているのに気が付いていながら、彼らは気にせずそこに突っ込んだ。行き着いた先が小さな道路であつたとき、彼らはやっとこれが畏だと理解した。気づいた時には、時すでに遅しである。

彼らの逃げ場は盾と槍を構えた槍歩兵で塞がれていた。道の向こう側に、重苦しい鎧に身を包ませた重装騎兵がいるのを見て、彼らは死を覚悟した。サウルス軍主力の重装騎兵はそのまま敵を刺殺、圧殺した。各地でも同様の戦闘が起こっていた。

夕方、戦いは完全にサウルス軍の勝利に終わった。

もともと虐殺をするつもりはなかったサウルス軍は敵の半分ほどを捕虜とし、各地の諸部族の村落との交渉に役立てることにした。

ウィスカが詳しく書いてあるのはここまでだ。この戦闘の後のことは、ゲンエン森林地帯の諸部族と交渉したこと、敵諸部族の襲撃が減ったこと、戦闘に使った短い道路をつなげて大規模な道路を作ったこと、ゲンエン森林地帯の南西部にある岬にて港町を建設する要諦であること、などなどを手短かに書いてあるに過ぎない。おそろしく忙しくなり始めたのだろう、とシャンティは思った。

「たしか、東部ヘドロケラスの港町ノドドンには……えーと」

とシャンティは呟く。彼は王宮内にある官人用の政務室の上座にある机の前に座っている。彼の目の前には十人ほどの官人たちがせせせせと職務に励んでいた。多才のカバルス人、エクリプスが言った。

「海上輸送の準備のことでしょうか？ ノドドンの町長や官人に頼むのよりも、東都アナポリスに行っているレフティス殿に頼んだほうがいいと思いますよ」

彼も机の前に座り、書類を片付けている。

「うん、そうだね。彼に頼むとなると、ぼくが手紙を書いたほうが早いな」

とシャンティは近くの引き出しの中から上等な紙を取り出す。

レフティスへの書簡には、小ウアズマへの海路開通が迫っているから、港町ノドドンでもその準備を進めるようにと書いた。本題はそれだけである。だから、手紙自体も短くなるはずなのだが……：：：：：シャンティの手紙はそうはいかない。シャンティの手紙は本題以外のことやけに多く、レフティスはシャンティからの手紙を読むと、毎回苦笑しながら、なんだか嬉しそうに鼻の頭を搔いている。

シャンティは仕事を昼前に終わらせると、残りの仕事を自分の直属の官人たちに任せて、ユルシユの離宮に向かった。ジャクナ王とユルシユの第二子はこの夏の到来とともに生まれている。生まれた子は女の子だったので、ジャクナ王が出発前に言っていた通りクラティラと名付けられた。母子ともに産後の調子は良く、エレヤフェミナは子供を連れて毎日彼女のところへ訪れている。

「シャンティ様着きましたよ」とシェイバスが離宮到着を告げる。

彼は馬を下りて、シャンティの馬車のドアを開ける。「それにしても、やけに良い天気ですね」

「ああ、本当だねえ」とシャンティは自分の瞳の色と同じ色の空を見上げながら馬車を降りた。その日は本当に陽気で、離宮の石畳の上を歩いていると体の中からポカポカと温まってくるような暖かさだった。「夏の太陽もこれくらいだったら丁度いいのにねえ」

「確かに。東方遠征の者たちもこの時期が一番過ごしやすいでしょうね。あっちは夏になると湿気がひどいらしいから」

シェイバスは馬を奴隷に任せ、シャンティと共に離宮内部に向かった。

「でも、熱帯雨林があるのは海や川の周りだけで、あれを超えると砂漠があるらしいんだ。砂漠は湿気が少ないというし……：：：：：その二つを行き来できるところで夏を過ごせれば丁度いいんじゃないかな？」

「ははは、湿気を煩わしく思っただけで砂漠に逃げ込んだところで、砂漠の太陽と砂に焼かれるだけですがね」

二人がしばらく談笑しながら離宮の庭を歩いていると、離宮の玄関口でリュキウスが槍を持って立っているのが見えた。二人はリュキウスに近づいて話しかける。

「今日は警備兵ごっこかい？」とシャンティが訊いた。リュキウスはうむ、と無言で頷く。「ふむ、これはなかなか……頼りない警備兵だね。ところで、エレたちはどこにいるんだい？」

「はい！ 奥様方は一階の食堂にあります！」
とリュキウスが小さい体で声を張り上げる。

「よしわかった、ご苦労ご苦労」と二人がその場を後にして離宮の中に入る。

大きな離宮をトコトコ歩いて、食堂についたところでリュキウスの言ったことが嘘であることがわかり、彼らはまたトコトコ歩いて二階に向かう。シャンティはこのことを「リュキウスが初めて嘘をついた日」として記録しており、シェイバスにも、やや感激しながら熱っぽくそのことを語った。

それで、シャンティは二階のユルシュの寝室についたらすぐに、その場にいる彼女たちにサウルス軍がゲンエン森林地帯での戦闘で勝利したこと、その詳細を伝えた。

彼女たちは、二階のテラスに並べられた円卓の周りに配置された真っ白な椅子に座っていた。エレはつまらなそうにジューズをがぶがぶ飲みながら聞いていたが、夫を戦地に送り出しているユルシュとフェミナはじつと耳を澄ませながらシャンティの話を聞いていた。「大丈夫。今のところは、兄上とギャロップがけがをしたという報告はないのでね」とシャンティが言うと、二人の女性は嘆息してから、お互いに嬉しそうな顔を見合わせた。「それと、ウイスカが東方の料理のレシピを送ってくれたんだ。サウルスに近い地域だから、そんなものがあれば全部サウルスに入ってきているだろうと思っただけだけれども……まあ、まだまだ見たことも聞いたことも味わった

こともない料理がいつぱいあるってことだね。ぼくは王宮に帰ったからこの料理を試してみることにするよ。東方の料理がおいしくて、なおかつ危険もなければ、これを中心にした食事会を開こうと思うんだ。みんな、その時は是非来てください」

「あら、もう帰るのですか？」とユルシュが腕の中の赤ん坊をあやしなから言う。「もう少しゆっくりしていつて下さっても構いませんよ」

「いいえ、いいえ」シャンティは自分の妻エレ、愛娘レオネラとバルシネ、王の妃ユルシュ、王女クラティラ、大將軍の妻フェミナを見渡しながら首を振る。「ぼくにはどうもここは華やかすぎるようですので……どうも頭がくらくなります」

「女ばつかりのところは居心地が悪い、と素直におっしゃってもよろしいですけど」

エレが意地悪な笑顔を浮かべながら言う。

「これはこれは、心の代弁ありがとう。僕の思いよりも、やや直接的で大分棘のある言い方だけれどもね。けれど、多種多様な女の人に慣れているような軟派な良人おとこを君はご所望じゃないだろう？」

「軟派？ ふふ、私たちの中に入ってくる条件は軟派であることじやなくて、勇猛であることですわ」

「ふむ」シャンティは改めて目の前の乙女たちを見渡しながら言った。丸テーブルの周りに陣取る彼女たちは、彼にはさながら、本で聞き及んでいた雌ライオンたちの狩獵陣形に見えた。「それは、そうかもしれないね」

シャンティはさつさと逃げ去ることにした。

彼はさつきの宣言通り、ウイスカの書簡の中に書いてあった新料理をこれから試そうと思っていた。回廊であった侍女に馬車の用意を頼むと、シャンティはシェイバスと共に離宮の回廊をゆっくり歩き始めた。シャンティが子供のように、壁の荘厳な装飾に指を這わせながら歩いているとギャロップの息子のマスタングが彼の前に走ってきた。マスタングは息を切らしながら「戦史を詳しく聞かせて

くれ」と不躰ぶじつけに聞いた。

「お前なあ」

とシェイバスが頭を抱えながら言う。

「いいよ、この子は大將軍の息子だ。ふむ……どうしようか。ぼくはこれから王宮に行くのだけれども、一緒に馬車に乗るかい？」シヤンテイがやさしく尋ねる。「フェミナの許可ならばぼくが取るけれど？」

「母さんの許可なんていらぬ」とマスタングは少し不機嫌になる。「戦史を聞かせてくれるだろうか？　なら、あんたについていくよ」「シェイバス、近くの侍女にこの由を伝えてきてくれ」とシヤンテイが言うと、シェイバスは短く返事をして小走りで回廊を戻った。シヤンテイたちは並んで回廊を進み始める。「さて、まず聞きたいんだけど……君は戦史なんか聞いてどうするつもりだい？」

「さあね。ただ興味があるだけさ」

「なるほど、君は、自分から父親を奪った戦争なる物の全貌が知りたいと？」

「別にそんなことは言っていない」

マスタングはますます不機嫌になる。

「じゃあ、君は軍人になりたいのかい？　だから、戦史を勉強しようと思うのかい？」シヤンテイは呟くように言う。「少し、ぼくをつまらない話を聞いてくれるかい？」

マスタングは訝るような表情でじつと彼を見た。

「ぼくはその表情を了承と受け取ったよ」シヤンテイは微笑んだ後に話を始める。「ぼくはね、生まれ持ったの王族なんだ。これは自慢じゃない。いや、不幸自慢ではあるかな。……いや、不幸自慢の意味が違うような」

「さつさと話を始めろよ」

「ええ、ああ、うん。ぼくは王族だ。だから、戦争が始まれば、当たり前のように駆り出され、従軍させられ、戦わされ、命を狙われ、命を奪い、自分のために多くの命が失われるのを見なくちゃならぬ

い。マスタング、戦争はつまらないものだよ。心底つまらない。もし、戦争をしないということを選べるならば、ぼくは諸手を挙げてそれを選んでいた。けれどもぼくには、戦争をしない、なんて選択肢はなかったんだ。ぼくは王族だからね」シャンティたちは玄関についた。馬車はまだ用意されていない。槍を持ったリキウスの姿もなく、警備兵が十人程度いるくらいだった。シャンティは話を続ける。「ギャロップもカバルスでは軍人の家系だった。彼も選ぶことはできなかった。まあ、彼は戦争を楽しんでいるけれどね。つまるところ、ぼくが言いたいのは、君はそれを選べる立場にあるということさ」

「戦争を選べる立場？ でも、おれの糞親父はここサウルスでも軍人だ。それならば……」

「サウルスには軍人の息子は軍人に、という規則などないよ。ほとんどの貴族はただ、親が軍人だから軍部に属すると親の威光が受けられるって理由から軍人になるだけさ。別に地主をしてもいいし、貴族を捨てて職人になってもいい。君は選ぶ立場にあるからね」

「あんたはおれに軍人になってほしくないのか？」

「ぼくはすべての人間に軍人になどなってほしくないさ。それに、君はぼくの想いよりも、ギャロップの想いの方を聞きたいんじゃないんだろうか」シャンティは向こうから馬車がやってくるのを見た。なぜカリユキウスが窓から身を乗り出して手を振っている。「馬車の中ではちゃんと戦史の話しよう。けれども君は、軍人になりたくないならばならなくてもいい。君が軍人にならなかつたからといって、今日この日のレクチャーを無駄だったなんてぼくは思わないだから、つまらないことに引け目を感じて軍人を志さないように」

「……なあ」マスタングはすぐ目の前に到着した馬車を見ながら、シャンティに質問した。「あんたは戦争が嫌いだ、けれども糞親父は戦争が好きだ。それなのに……なんで、あんたたちは仲がいいんだ？ あんたは、糞親父のことをどう思ってるんだ？」

「さてね、なんで仲がいいのか……これに関しては、よくわからない

いし、ギャロップの方は未だにぼくを疎むような態度をとるからね。けれども、ぼくが彼のことをどう思っているかは明瞭なことさ」「シヤンティは馬車に向かって歩きながら言う。「友達だよ。そして、同時にこの国の守護者さ」

「……この国の守護者は竜じゃないのか？」

「ははは、君の父上が武功を重ねるならば、いつか竜にとって代わるかもしれないね」

シヤンティは笑い声をあげながら馬車に乗り込む。それを不思議そうにリュキウスが見ていた。リュキウスがマスタングに訊いた。

「何があつたんだい？」

「別に、あるのはこれからさ」とマスタングが返しながら馬車に乗り込む。リュキウスの横の席に着くと彼はふてぶてしく言った。「さて、約束通り戦史について話してくれよな」

32. ダイヤモンドの傷作戦 (後書き)

画像は将軍。兜についているのは羽のつもりだったんですけども、葉っぱみたいになってしまった。あと、ミスでヒゲがない。

33・春の終わりの宴

> i333899—4057<

二三七年冬。ゲンエン地域を併呑したサウルス軍は森林を切り開き、石畳の道路を作って、各集落で反乱が起こってもすぐに駆けつけられるようにした。さらに、ゲンエン地域の南部にある海岸地帯の村の一つを港町に作り替えた。港町はもとの村の名前をとって港町モンモと名付けられ、この年の冬には船をつけるための港は完成していた。

二三八年になるとその海路を使って増援兵や食料が次々に運ばれ始め、逆に小ウアズマ地方で手に入れた珍しい物はサウルス地方に送られた。

二三八年の春を待ってサウルス軍は小ウアズマの奥に進み、小ウアズマの覇者の一つであるランウータと決戦することを決めていた。ランウータは公式には国ではなく、一つの部族である。族長も王を名乗ってはいないが、権力は王のそれである。彼らはどういうわけか、数十万の民、十数万の兵士を持つにもかかわらず、集団としての体裁が「部族」のままなのだ。

闘争を繰り返して自分たちの部族を大きくしてきたのにもかかわらず、武器は西方のサウルスや東方のウアズマから買った鋼鉄の剣を使っている。防具は自分たち特製の分厚く重い木の盾と木の板を何枚も繋ぎ合せた胸甲を身に纏うくらいである。

この時代のランウータのことをいくら熱心に調べても資料は集まらず、この部族の有力者の抱いていた思想に関する記述も全くと言っていいほど見つかっていない。なぜ、こんなにも大きな部族に、独自の文化が発達しなかったのであろうか。東からの文化や北からの文化のせいで独自の文化が開く暇がなかったのだろうか。

ともかく、ランウータは強大な土地と人口を持つにもかかわらず、大した敵ではなかった。

二二八年の春の中頃。六万のサウルス軍はシヨウジヨウ平野にて十万のランウータ軍と交戦し、重装騎兵の突撃戦法で敵を打ち破っている。最初、ランウータ軍は熾烈に攻撃してきたにもかかわらず、一旦戦況が自分たちの不利に傾くと、その強靱な集中力を全部逃げることに注ぎ込み始めた。サウルス国の主力である騎兵は森の中に逃げ込んだランウータ兵を追いかけることはできなかったが、大量の捕虜と彼らの一番大きな村落を手に入れた。

占領が終わると、すぐに両国間で条約が結ばれることになった。簡単に説明すれば、サウルスは自分たちの文化を提供するから、ランウータは東方への足掛かりとなる協力をしてくれということである。もちろん、戦勝国としてランウータの物資を格安で使えるような取り決めをしたが、小ウアズマ人からは税金を取らなかつたし、女も奪わなかつた。

とはいえ、サウルスは侵略戦争をしているのであるから、そこで終わるはずもない。そう、彼らは交通網の整備を完全にし、なおかつ小ウアズマ内の親サウルス派が育ってくるなりすれば……つまりは、小ウアズマが自分たちの思う通りに御しきれようになつたなら、この地方を完全にサウルスの属州の一つとする計画を立てていた。

その計画はともかく、この時のサウルス軍の問題は、進行先をどうするかだった。

二二八年の春の終わり。ランウータの最大都市であるランウータポリスに新設されたサウルス軍兵舎の食堂でギャロップ大將軍とリザドス大將軍が飯を食っているときに、そのことが議題に上がった。「この先、おれたちがどこに行くか？」ギャロップは隣に座つたりザドスの質問をおうむ返しする。その質問の答えを考えながら、彼は豚骨スープのごつた煮を口の中に掻き込む。それを口の中でもぐもぐした後、飲み込んで、やっとしゃべり始めた。「南だろうな」「やはり南ですか」とリザドスが呟く。食堂の喧騒の中では彼の声小さすぎて、ギャロップには聞こえづらく、ギャロップは耳に手

を当てて、もう一度言うように催促した。「いえね、やはり南ですか、と言っただけですよ」

ウアズマに行くには東に行くしかない。それは自明のことである。しかし、今のように小ウアズマ地方の諸部族との絆が弱い状態ではそれも難しい。東へ行つて、もし敵に戦争で負けたならば、その瞬間に小ウアズマの諸部族が手のひらを反して自分たちを挟み撃ちにするかもしれない……そんな後顧の憂いがあるままでは、東へ行く決断も付きにくいのだ。

けれど、小ウアズマの情勢が収まるまで待つていたのでは兵士たちが無駄になるし、一旦本国に返してしまうと言つのも不安である。「まあ……北には後継者の国の一つがあり、南は依然未開の地」とリザドスがカリカリのパンをかじりながら言う。「後継者の国には喧嘩を吹っかけたくはないですから、そりゃあ、南に進みますわな」「ジャクナ王は南の情報を集めているらしいぜ」とギャロップがパンをスープの中に落としながら言う。「ついでに、南に行く小ウアズマ人も探している。まあ、南の土地を手に入れると同時に、そこで手に入るだろう南の財宝でこの人間たちの心を鷲掴みにすることだな」

「うまくいくんですかね」リザドスはいつものように呑気そうな顔で、しかし不安そうな声で言う。「南に行つて戦闘をすれば、それだけ不満や恨みを買うことになるんじゃないでしょうかね。それにその土地を落ち着けるための時間だつてかかるし……」

「知らねえよ。んでも、何とかなるんじゃないのか」ギャロップがスープからパンを取り出して口の中に放り込む。「大体、重要なのは兵站なんだぜ。シユラク王だつてそれでやられたんだ。サウルスからの食料輸送だつて金がかかるし、時間もかかるし、苦労もかかるし、奥地行けばもっときつくなる。その時のためにこつち……小ウアズマ地方での食料調達方法や調達場所をできるだけ多く手に入れておくべきなんだ。南に行くのは間違つた判断じゃない」

「ふむ、そうですね」リザドスは納得して掌を拳で打った。で、カ

リカリのパンを二つ三つ口の中に詰め込んで席を立つた。「ではギヤロップ殿、私はこれで」

「ほいほい」

とギヤロップは口の中にスープを含んだまま返事をする。

それから五日して、両大將軍の予見していた通り南への行軍は始まった。二万を制圧した各地に配置しているので、五万での旅となった。この五万も行軍中に各地に配置する計画でもある。

さて、彼らはぞろぞろと細長い列をなして南に進むわけだが、南の気候はやはりランウータよりはむしむししていて、見たこともない固い葉っぱの植物や、毒々しいほどカラフルな花がそこいら中に生えていた。木の上からは長い蛇がによると降りてきて、舌をちろちろ出し入れする。兵士たち心を疲れさせるのはそれだけではない。昼も夜もなく飛び回る蠅や蚊もサウルス兵たちを不機嫌にさせた。

ある兵がカバルス出身者に「お前は暑い地方出身だから慣れてるんだろ？ いいなあ」と言うと、カバルス人は汗をたらたら流しながら「カバルスはもつと乾いた気候だったよ。それよりも、お前の方が慣れたような顔じゃないか」とたどたどしいサウルス語で言った。こんな話があったように、カバルス人たちは小ウアズマの気候に辟易していたようだった。

もちろん、悪いことばかりではない。

サウルス軍の戦闘力の高さがすでに知れ渡っているようで、南の諸部族の抵抗はそれほど強くはなかった。行く先々の有力者は自分の娘たちをサウルスの兵士とくっつけようと必死になることさえあった。こういう場合一番モテるのは一番位の高い王ではなく、その一つから三つ下の位の者である。どうやら、王には自分娘を差し出すのは、無礼になるかもしれないと思われているようだった。

小ウアズマの諸部族の女たちは有力者の娘などを除いてそれほど美しくはなかった。化粧つ気もなく、しなやかな体つきをしている

わけでもない。彼女たちを見たサウルス兵たちはガツカリした様に、肩を落として行軍を続けた。

諸部族との交戦を何度か繰り返していくと海岸に着いた。海岸は森の中に比べるとまだ涼やかで、粘りつく潮風もこの時だけは心地よかった。

「この海岸線を辿って北に行くと港町モンモにたどり着くのか」

とジャクナ王は海に両足をつけて、暑さを紛らわしながら隣の力マラ・アレックスに言った。アレックスは砂浜に腰を下ろしたり、海に潜ったりする兵士たちを見ながら言う。

「このまま海岸線に沿って移動しますか？ 兵士たちもその方がいいのかもしれませんが……」

彼も海の中に足をつけて暑さを紛らわしている。寄せては返す波が足元でジャバジャバと音を立てる。見ればきれいな貝殻がいくつも砂の表面に浮き出ている。

「海沿いに行けば食料は手に入るだろうか？」ジャクナ王が書類を見ながら言う。書類は糧秣のリストである。「海の近くならば、魚を取ることもできるだろうが、森での狩猟に比べたらやはり……それに、森の中には部族もいて、そこで食料を手に入れることもできるしな」

「食料を提供してくれる部族ならば海沿いにもいると思いますが」アレックスがある部族の長にもらった近隣部族のリストを見ながら言った。

「二手に分かれてみるか」ぽつりとジャクナ王は言う。そして、あとごに手を当てて今の思い付きをよく考えたうえで、その案を採用することに決めた。「おれのグループには、念を入れて大將軍を一人入れるとして……では、別働隊を誰に任せべきだろうか？」

「別働隊の長官にはギャロップ將軍が妥当と思います。副司令官ですし」アレックスが言う。彼としては、ギャロップに大軍を任せるのは恐ろしかった。けれど、軍議での一件からギャロップはアレックスを厭いとわしく思い始めたようで、二人は時々些ち細さいなことで衝突す

るようになっていた。それを止めるのは階級からしてリザドスなわけだが……つまり、そのリザドスを別働隊の長官に任命すると、喧嘩の時にギャロップを止めてくれる人物がいなくなるから、アレックスはギャロップを別働隊にするように言ったのである。「彼ならば戦闘で負けることもありませんでしょうし」

「そうだな、そうしよう」

とジャクナ王は即決すると、海から出て、兵士たちに集まるように命令した。

兵士たちは十分後になってやっと全員が集まった。彼らは列をなして、整然と浜辺に並んだ。つい最近仲間になったばかりのランウータ人もサウルス語やサウルス軍の習慣に少しずつ慣れ始めたようだったが、彼らの中には上半身裸の者もいくらか散見された。ジャクナ王はそれを許すことにして、そのまま話を始めた。

「私たちはこれから二手に分かれようと思う。一方はこの海岸線を南に行く隊だ。もう一方は森の中を進む。どちらも険しく困難な旅路となるだろう」ジャクナ王が声を張り上げて言う。サウルスの言葉がよくわからない小ウアズマ人には言語に通じた学者がついて、ごによごによと王の言葉の意味を伝える。「森を通って旅を続けるのは私とリザドス大將軍の軍集団。そして、海岸線沿いに行くのはギャロップ大將軍の軍集団だ」

「王よ」とサウルス人が声を上げる。「それでは、ギャロップ大將軍の軍は……」

「ははは、それなら大丈夫だ。海沿いに行けば部族からの攻撃もそれほど受けなくて済むからな。海岸沿いの開けた土地なら奇襲も受けにくくなるし……さっきはどちらも困難な旅路になるといったが、海岸線沿いの方がいくらか楽になるかもしれない」

「王」ギャロップが腕を組んだままで質問する。「合流地点は？」

その日にちは？」

「今年の冬の初め、ここから南にあるというオナガという都市で会おう」ジャクナ王が返す。「もし彼らが都市の宿舎や食料を貸して

くれないならもちろん攻める。別働隊が揃うのを待ってもいいし、別に待たなくてもいい」

ギャロツプが自分の兵士たちを見ながら言う。

「単純だな。まあ、そっち方が何かと楽でいいや」

ほとんど軽装騎兵で構成される兵士たちはうんと頷いた。

「それでは、みんな」ジャクナ王が両手を天に突き上げて叫ぶ。「今冬、オナガで会おう！」

兵士たちも怒鳴り声で「オナガで会おう！」と返し、槍や剣を天に突き上げる。その後、わあわあ騒ぎながら別働隊にいる戦友と抱き合ったりしながら、お互いの無事を守護聖獣に祈ったりした。

その日の夜は砂浜で宴が催された。王都などと比べると、人工的な明りが全くと言っていいほどないこの無人の海辺の夜空や、虫の奏でる聞いたこともない音色や、新古の戦友たちの笑い声が兵士たちをうつとりさせた。「この夜を味わえただけでも、ここに来た甲斐があらあ」と兵士の一人が言うと、周りの男たちは真つ赤な顔で酒を掲げながら「そーだ、そーだ」と笑いあった。

ギャロツプは火を中心にして円陣で座る兵士たちの中に混じりながら、今日のような感覚を前にどこかで味わったことがあるなど思った。思いながら、なんとなしに焚火から昇る煙を目で追った。小ウアズマの空は、ギャロツプの故郷の夜空とも少し違っていた。

そうだ、前にこの感覚を覚えたときは……青空だったはずだ、昼だったはずだ。

「ああ、そうか……ふん」とギャロツプはにやにやしながら独りごちた。「あの馬鹿とパキケファアの丘でやった宴会か。いや、ランチパーティーだったかな？」

「そうだ、そうだ。そうですね、大將軍」と円陣内の一人の兵士が晴々した顔で言った。ギャロツプは驚いたように目を丸くする。「おれも、どこかでこんなことをしたなあ、とと思ってたんですけど……そうだ、そうだ。王子とパキケファアの丘でこんなことをしたんだ」

「おいおい、何の話だ？」とほかの兵士が問いただす。「詳しく聞かせろよ」

兵士はほかの兵士たちに、サウルス国北部カンプトケファレの丘でシャンティと一緒にやった昼食会のことを話し始めた。兵士が話し始めると、その行軍でシャンティの総督軍に入っていた者は「あー、あー」と思い出し様な声を上げ、カンプトケファレで自警軍をやっていたものは「噂で聞いたことある」と感心しながら聞いていた。

ギャロップは彼らの作る輪には加わらず、近くの木に寄りかかるようにして座った。そして、蒸し暑いにもかかわらずマントで自分の体を包み、目を閉じた。

だんだん夜も更けてきて、兵士たちの騒ぐ声も少なくて小さくなり、逆に歩哨の歩く音が際立ち始めた。

朝が来れば、行軍だ。とギャロップは深い意味もなく思った。

33・春の終わりの宴 (後書き)

展開よくわからんなあ。

34・疑惑

『カマラ・アレックスはジャクナ王の男娼である。』とウイスカの書簡の中に書いてあった。その書簡は、小ウアズマ地方でサウルス軍が二手に分かれることをシャンティに知らせるための物だったが、ウイスカは最後に短く上記の言葉を書き記していた。

そのことに関して、シャンティは別段どうとも思わなかった。ジャクナ王はサンジャヤ成敗の時に女性問題で兵士たちから不評を買ったから、今回の遠征ではその女癖を自制する意味合いで男娼をそばに置いたのだろうと思った。

この時代において、男色とは高貴な身分の者がよく手を伸ばすものだった。とはいえ、それらは大体、大人の持つ少年愛的な感情の上で行われており、大人と大人が交わるのはやや受け取られ方が違ったようである。

さて、王族や貴族はこのような感じであったが、対して平民や下級の身分の者はあまりその文化を受け入れられなかったようだ。その理由はほとんどわからないが、おそらく、農民や職人の少年は、その仕事柄のせいか大体が男らしい骨格、肉付きをしているので、そのオトコオトコした感じが受け入れられなかったのだろうと思われる。事実、貴族たちも、女性みたいになしなやかさを少年に求めていたようである。

それで、話を戻すが……。

ウイスカが、アレックスがジャクナ王の男娼であることを書簡に書いたのは、ある危惧を持っていたからである。それは、アレックスが男娼の立場を利用して王を籠絡し、軍上層部を掌握するのではないかという恐れであり、そうなった場合、彼と敵対しているギャロップの身が危険であるということであった。

しかし、現状ではまだそのような兆候……アレックスがジャクナ王を操って軍を動かそうとする様子は見えなかったので、むやみに

シャンティにその危険性を伝えて、不安がらせることは忍びなしと思つた。だから、彼は自分の懸念を書簡には書かず、ただ事実だけを書いたのだ。けれど、あわよくば、シャンティが自分の想いを読み取ってくれないかと期待していたが、その期待は外れてしまった。ウイスカからのその手紙を、届いた時のように戻した後、シャンティはさつきまでやっていた王代理の業務に戻つた。

この年の春にサウルス・小ウアズマ間の安全な海路が開通したことによつて二地方間での交易が活発になり始めていた。東の独特の文化が今まで以上にサウルスに入ってくると、その珍しい品々に商人たちは驚いた。商人たちはサウルスの品を持って小ウアズマで売り払い、その金を使って小ウアズマの品を買い、その品をサウルスで売る。という風に、どんどん商売を繰り返し、富を増やすようになった。

船の中にたくさんの商品が乗っていると、当然それを狙う者たちも出てくる。海賊である。小ウアズマ出身の海賊は程度の低い造船技術しか持っていなかつたのでそれほど相手にならなかつたが、サウルス出身の海賊は違つた。彼らは丈夫で大きな船を使い、さらにコルブスと言われる兵器を船の上に設置した。

コルブスは標的の船に棧橋を架ける兵器である。先つばに相手の船の甲板に噛みつくための鉤爪がつけられており、そこから自分の船に通路が伸びていて、通常時は帆柱に固定されている。海賊たちはそれを振り下ろして相手の船と強制的にドッキングし、通路を渡つて白兵戦を仕掛けるのである。

サウルス本国に残つたシャンティも、小ウアズマに行くジャクナ王もこの海賊たちにはほとほと困らされた。輸送用の船に強力なサウルス兵たちを配置したとしても、相手は年がら年中海の上にいる。いわば海戦のスペシャリストである。突破口はなかなか開けなかつた。

シャンティたちはしょうがなく海戦用の兵士たちを育て始める。また、東への物資は運ばない、海賊を倒すだけの船団を作つた。彼

らは船に海賊同様コルブスを取りつけ、サウルス・小ウアズマ海路間に出る海賊の討伐を行った。

シャンティも何度か東部ヘドロケラスの港町であるノドドンに向いて、現場が何をどの程度欲しているのかを調査した。

二三年の秋の終わり。シャンティは調査の帰り、東都アナポリスにあるアストローラーボン邸へ寄った。アストローラーボンはシユラク王とその息子……王族二代の家庭教師やっているような高名な教師であるだけに、資産家であり、その家は大商人の豪邸と比べてみても引けを取らなかった。

シャンティとリュキウスは東都の北側にある彼の豪邸の前で馬車を降りた。すると玄関先に立っていた警備員が慌てたようにシャンティたちのもとに駆け寄ってきて「シャンティ様ですね、ど、どうぞこちらへ」と彼らを家の中に導いた。

シャンティが感心する。

「へえ、よくわかったねえ」

「いえ、その……」

警備兵はシャンティたちの後ろにある馬車と、その周りに付き従う数百の近衛兵たちを見ながら顔に汗を浮かべていた。

「ああ、そうか」シャンティも自分の背後を振り返って、納得したように言った。「そうだね、これならすぐにぼくだってわかつちゃうねえ」

シャンティとリュキウス、それとシエイバスをはじめとする三十人の近衛兵が、警備兵の案内のもと、アストローラーボン邸に入った。アストローラーボン邸の草やら蔓つるやらが巻き付いた門をくぐると、まずは小さな庭があつて、そこを過ぎると相撲の稽古場があつた。その稽古場ではリュキウスよりも二つ三つ年上の子供たちが汗だくになりながら相撲をやっていた。休憩中の子供たちも屋敷の柱にもたれかかつて喘ぎながら水を飲んでる。

「すごい」

とリュキウスがきよろきよろしながら歓喜の声を上げた。

「先生は相撲が好きだからなあ」とシャンティも息子同様きよるきよるする。子供たちを熱心に指導するアストロラーボンの姿を階段の所で見つけると、腕を振りながら彼を呼んだ。「先生、来ました！ シャンティです」

アストロラーボンは驚いたような顔をして、次には顔をほころばせてシャンティたちを招きよせた。シャンティたちは相撲をしている子供たちの邪魔にならないように端っこを通ってアストロラーボンのもとに行った。途中で、子供たちがシャンティはいつたい誰なのかと話し合っていたが、やがて誰かが「王族のお方だ」と教えるのと、一気にざわつきは収まった。

「お久しぶりです」シャンティが手を差し出すと、アストロラーボンは老人に似合わない握力で彼の手を握った。「痛てて、先生はまだまだ元気そうですね」

「はあ？」とアストロラーボンは耳に手を当てる。「もう一回言ってくれんか？」

「はいはい、そのうち言いますよ……さあ、リュキウス。君も挨拶をして」

とシャンティはアストロラーボンの聞こえないふりを流して、リュキウスに挨拶を促す。

「は、はい。よろしくお願いします。このサウルス国が王族のレジエム・シャンティの子、リュキウスと言います」緊張気味のリュキウスはアストロラーボンの手を握った後、顔を赤くしながら質問した。「あ、あの……アストロラーボン先生はぼくの御爺様の代から家庭教師をしていたそうですが、御年はいつたいいくつなんでしょうか？」

「はて……八十からは数えてないからよくわからんなあ」とアストロラーボンは、彼の後ろでフルーツの入った器を持って立っていた女奴隷の方を向く。彼女もわかりませんよ、という風に首を振った。「まあ、八十歳でいいじゃろう。なんせ、それから歳を数えてないからな」

「ははは、なにやら乙女のような言い方ですね」

とシャンティが笑う。

「はあ？」とアストロラーボンは耳に手を当てる。シャンティはそんな老人を半目になって睨む。アストロラーボンはゴホン、と咳をしてからリユキウスの方を見て言う。「ところでシャンティ。この子は相撲を嗜む^{たしな}かね？」

「少しなら」とシャンティが答える。「まあ、子供の遊びのようなものですが」

「いかん、いかなあ。王族の子供がそんなことでどうする。君なんて四歳の時からわしの相撲の英才教育を受けていたじゃないか」アストロラーボンは、まったく最近の教育者は……やれやれ、といった感じで首を振る。「失ってしまった時間は戻ってこん。じゃが、今からの努力で補うことはできる。よし、わしが見ていてあげるから。リユキウス、奴らと相撲を取ってきなさい」

とアストロラーボンは少年たちを指差しながら言った。指名された少年たちはびくつとしながらリユキウスを見た。

「はい、わかりました。ご教授御願ひします」

とアストロラーボンにお辞儀をしてからリユキウスは少年たちの輪の中に入っていった。

シャンティたちはリユキウスが少年たちと相撲を始めたのを見ると、階段に腰を下ろして雑談を始めた。

「サウルス軍は本格的な海軍を作った様じゃが？」

と、話はアストロラーボンが切り出した。

「ええ、まあ。それにしても、海軍はやっぱりお金がかかりますね」シャンティが困った顔をする。「サウルス国に残る者としては、遠征軍に輸送する物資などのこともありますので、あまりほかのことにお金を使いたくないのですが……そこで、考えたことがあるのです。海軍による海賊討伐は、あの海路を使う商人たちにも有益なものですので、商人たちには受益者としてある程度の使い税を負担してもらおう。という考えですが、さて、この計画はうまくいくでし

「ようか？」

「どうじゃろうな、ふーむ……」アストロラーボンが髭をさすりながら考える。「どこでそれを徴収するかじゃないじゃろうか。商人たちがどれくらいの頻度で海路を使い、どれくらい儲けているかはわからないので、定期的に一定料金徴収するのじゃあ、不公平になるだろう。そうなることやはり、ノドドン出発前か、あつちで商売してから帰ってきた時、つまりはノドドン到着後じゃろうな。けども、出発前に徴収するのじゃあ、出発後に海賊に襲われて積み荷がなくなり、税金の払い損ということもあるだろうし」

「ならば到着後ですね」

「それでも、不正を行う輩もいるじゃろうし、金を払うのを嫌がる者もいるじゃろう？ その時はどうする？」

「その時は積み荷を徴収するしかありませんが……」シャンティは嘆息してから言った。「そうなると、だれが海賊やらわかりませんか」

「しかし、税金は不公平であってはいけない。取ると決めたら、すべての者から公平に税金を取らねばならない。例外を設けてはいけない」

「はい、そのことは先生から教えていただきました。その公平という言葉も、なかなか曲者ですがね」シャンティは指をピンと立てる。「海軍を作る費用をすべての国民に増税という形で配分する方が一見して公平に見えますが、実際は海軍の利益を受けているのはほんの少数の人々で、その海軍の費用を内地にいる人々に求めるのは不公平だ。公平と言うものの考え方を間違えてはいけない」

これは経済学的にいえば受益者負担の法則であり、この法則にこのような名前が付けられたのは一五〇〇年代になってからである。しかし、歴史書を読み、その時代時代の税制を調べてみれば、比較的古い世紀の王族や官人たちが当たり前のようにこの法則を使っていたのがわかる。

「ああ、そうじゃ、そうじゃが……いかん、いかんぞ」アストロラ

「ボンは声をリュキウスたちのとっている相撲を見ながら苦々しい顔をしている。さつきから見ていると、リュキウスは年上の子供たちにはちよくちよく勝っている。「ああ、もう。誰が接待相撲なんてしろと言ったんじゃ」

「どつちもどつちですね」とシヤンティが相撲を見ながら言う。「先生、リュキウスは相撲の稽古を多くは積んでいませんが、乗馬や剣術は大したもので、おそらく根本的な運動神経はぼくよりもいいですよ」

「ええ……？」アストロラーボンが目を細めてリュキウスたちの相撲を見る。今度はリュキウスがうつちやりをかまされる。「ああ、なんじゃ……ふん。君の子供はどうやらおかしな性格をしているらしい。年上相手にわざと負けている。まさか、子供相手に気を使っているのではあるまいな？」

「どうでしょうか。気を使っているところもあるでしょうが……」シヤンティは首をかしげながら言う。「それでも、全部が全部わざとじゃないと思います。リュキウスは生まれた時から周りにいる面々が突飛でしたからねえ……少し引込み思案で、自分を目立たせようなどとも思わないでしょう」

「リュキウスは、あのギャロップというカバルス人とも知り合いなのかね？」

「ギャロップと知り合いどころか、リュキウスは彼の息子と同じ歳ですよ」

「ははは、そりゃあいい。生まれて、物心つく頃には自分は王族だと気が付くわけだが、ところが、周りの面々に比べて自分は無個性ときた。周りにはジャクナ王に、連戦無敗のギャロップ大將軍に、東西南北の豪華な面々……極めつけの両親がああ筆まめシヤンティと魔女エレ殿ときている。これならば、自分が前に出ようという気構えなど育たんわなあ」

「最後のあたりはどういう意味でしょうか？」

「ははは、ははは……え？」とアストロラーボンはとぼけた様に聞

こえないふりをした。「もう一回言ってくれんかね」
シャンティはむっつりした顔で嘆息しながらそっぽを向いた。

シャンティたちが海賊退治に明け暮れている二三年の冬の中頃、小ウアズマ地方にいるギャロップの別働隊はジャクナ軍集団、リザドス軍集団に遅れて都市オナガに到着した。オナガはやはりサウルス軍には協力的でなく、先んじて到着していたジャクナトリザドスたちはオナガにて諸部族と交戦し、勝利した。しかし、要塞都市化されていたオナガでの戦闘は今までのように容易くはなかった。

ジャクナトリザドスの率いる三万人のサウルス兵たちは攻城兵器を作ることから始めたが、その間にも数々の困難が待ち受けていた。まず、オナガの諸部族のゲリラ攻撃が朝昼晩とめどなく繰り返されたせいで、兵士たちには眠る暇もなかった。また、せつかく作った攻城兵器も一晩で燃やし尽くされてしまい、全てが振出しに戻ってしまったこともあった。いや、振出しですらなかった。サウルス軍に蓄えられていた食料は徐々に少なくなっていた。王たちは自分たちの分の飯も節約して苦しい戦いを続けた。

いくつかの攻城兵器が完成し、攻城戦を開始することのできる状況になると、サウルス軍は一気にオナガを攻め立てた。この戦闘でサウルス軍は二千に上る死者を出している。その二千の犠牲をもつてオナガの門をぶち破ったサウルス軍は都市の中にわれ先に駆け込んで、まずは食料を奪った。

十分に腹を満たした後は、近くの民家の女たちを襲い始めた。

ジャクナ王やりザドスはその鎮静に努めたが、なかなか兵士たちは収まらなかった。特にひどかったのは、ランウータで仲間に加わった小ウアズマ人たちだった。彼らは欲しい物を手に入れるためだったら仲間すら切り裂いて奪い去った。ジャクナ王はこの時に仲間を殺したランウータ人を処刑している。

このような混乱があった都市オナガも、ギャロップたちの到着した頃にはすでに鎮静化しており、攻城戦の際に死んだサウルス兵の

体もそのほとんどが本国に返還されていた。

そう言うわけでオナガの町は穏やかだった。修復された門はすでに役割を果たしており、木々をうまく組み立てて作られた民家や店には矢傷などのささやかな名残しかない。街行く人は、人種を問わず笑顔に満ちていた。それは、オナガ攻城戦でのサウルス軍の多大な損害の話を聞いていたギャロップが、あの話は自分を急がせるための嘘だったのだろうかと疑うほどだった。

「しかし、本当なのだよ」

とジャクナ王は、兵舎として借り上げた旅館の特に広い一部屋で言った。

「はあ、それはまた……まあ、詳しい話はあとで聞きますが」ギャロップはまだ汚れたままの服装でジャクナ王に謁見していた。「しかし、恭順させる計画は順調なんでしょう?」

「なぜ、そう思う?」

「この都市の落ち着きを見る限りは、誰だってそう思いますよ」ギャロップは頭を掻きながら言った。「それともうまくいかないんですかい?」

「うまくいっていない。つい二週間前までは殺人強盗強姦放火となんでもござれだったわけだからな。逆に、たった二週間でこの恨みを忘れられるのなら、この人間たちはよほどの脳足りん共だ」

「ま、この冬はここを本拠地にしてちょっとずつ人心を掴んでいくしかないでしょうな。丁度暖かい地域なことだし」

ギャロップがそう言うのとジャクナ王は不機嫌そうに頷いた。「それじゃあ、おれはこれで戻りますんで」とギャロップが振り返ってドアに手をかけた瞬間、ジャクナ王は彼を呼び止めた。

「ちょっと待て、大將軍、聞きたいことがある」

「は? なんでしょうか?」

ギャロップはドアから手を放して再びジャクナ王の方を向く。ジャクナ王は鈍い光を携えた目を彼に向けていた。ギャロップはその目に嫌な予感を覚えた。

「……」ジャクナ王は、しばしギャロップの顔を見つめていた。二人の間に沈黙が流れる。やがて、ジャクナ王はふつと溜息を吐いた後に、首を振った。「いや、なんでもない」

「そうですか、それならいいんですがね」

ギャロップはそう言いながら部屋の外に出た。

ギャロップは兵舎として使われている旅館の廊下を歩きながら、さっきのことを考えた。彼にはジャクナ王がなぜ、あんな猜疑心に満ちた目を自分に向けたのかを何となく理解していた。

「どうせ、あのカマラの男娼のせいだろう」とギャロップは独りごちた。今回の別働隊の到着の遅れを見てアレックスが、大將軍の陰謀です、などと言ってジャクナ王を唆したのだろう。とギャロップはそう決め込んでいた。「で、つまらんことに……あの王はそういうことを奇妙に信じちまう性格だからな。これは、おれの身も危ういぜ」

旅館の外に出ると、ウイスカが彼を待っていた。ウイスカは市場でフルーツを買い込んできたようで、手にフルーツ籠を持っていた。ギャロップはその中から一つバナナを取り出して皮をむき、食べ始める。

「ウイスカ、王の悪い癖が出始めたみたいだぜ。何かあつたら困る。シャンティにこのことを伝えておいてくれんか」ギャロップは旅館の玄関できよろきよろしながら言った。「それより、ここにも風呂はないのか？」

「ないみたいですな。もともとカバルス人は風呂に入らない人種でしょう？ ははは、大將軍もいつのまにか風呂好きになられたようですな」ウイスカもマンガーに齧り付きながら言う。「話を戻しますが、シャンティ様に手紙を書くと言いますが、どのような内容でお送りいたしましょうか。直接的な内容でお伝えするか、それとも……」

「王の猜疑心が芽を出した。とでも書いておけばそれで何となく気が付くだろう。もっとも、気が付いたとて、手が出せるかどうかは

わからんけれど」

ギャロップは嘆息してから歩き始めた。ウイスカも彼について歩
きながら質問する。

「どこに？」いくのですが？

「リザドスのところだ。今回の戦闘の詳細を聞かにはあならんから
な。それで、そこらにいた貴族に聞いたんだが、あいつは都市の近
くで大工を率いて工事をしているらしい」

言いながらギャロップが往来を歩いていると、昼まで人は多いと
いうのに、彼の前を通る人々はまるで彼のための道を作るかのよう
に彼を避けた。ギャロップは彼らの目が自分の鎧に集まっているの
を見て、居心地の悪さを感じた。

「あの人は勤勉な方ですな。カバルス鎮定の際にはあまり接点はあ
りませんでした」

すでに鎧を脱いでいたウイスカも居心地の悪さを感じながら歩い
た。

「カバルス戦役の時に、ジャーニーがジャクナ派だと言ったから避
けていたが、あの時だって頼んでいればカバルス鎮定に協力してく
れていたんだらうな。くそ、そうなればサンジャヤだって……いや、
あの夜襲だって……」

「まあ、過去のこととはどうしようもありませんから」

ウイスカがそう言うと、数人のサウルス兵がギャロップたちの方
に駆け寄ってきた。彼らは目に包帯をつけていたり、腕を吊り上げ
たりしており、彼らの前にもやはり道ができた。彼らは二人に「大
将軍、どちらに？」と聞いた。

ギャロップが質問を質問で返した。

「お前はどこの所属だ？」

「はっ！ リザドス軍集団の者です」と腕を骨折した男が言った。

続けて、「兵種は槍歩兵です」と目に傷を負った男が言った。

「ちょうどいい。おれたちはリザドス大將軍のところに行く予定だ。
なに、今回の攻城戦の詳しい話を聞きたいだけだ。案内してくれる

か？」

「はい、わかりました」

と兵士たちは頷き、彼らを先導し始めた。やはり、ここでも彼らの前には道が開けた。兵士たちは困ったような顔を二人に向けながら案内を続ける。

ウイスカが訊いた。

「ところで、君たちのその傷は今回の攻城戦で負ったものかな？」

「はっ。今回の攻城戦はなかなか……なんというか、やりにくい相手でして」目に傷を負った男が言う。「燃やされたりするから高い攻城塔も作れず……。最終的には破城槌で無理やり敵の門や壁を破壊して内部に侵入しました」

「燃やされるつてのは、はつきり言えば燃やされる方が悪い」とギヤロップが叱責する。「火矢を撃ち込まれても、攻城器の近くにいたんならいくらでも消す手段があつただろうに」

「そうなんですがね」と先導する兵士たちは顔を見合わせる。「それはリザドス大將軍の管轄だったんですが、リザドス大將軍が軍議に赴いている間に襲撃されて……」

「指揮者がいなかったから火を消せなかったつてののか？ それならば、リザドスの教育不足だぜ」

「はあ」兵士たちは眉を八の字にして困ったように笑う。「いやはや……もう、返す言葉がありませんぜ、大將軍」

それからギヤロップは、修復された門の近くで待機させていた愛馬に乗り上げ、門を出てリザドスのところに向かった。兵士たちはリザドスの前に案内して、ギヤロップから駄賃を貰うとオナガの中に帰って行った。

案内されたところは小ウアズマにはありがちな森林地帯だった。そこには馬車がぎりぎり一台くらい通れるほどの道があり、リザドスたちはそれを改良して道路にするつもりだった。道はすでにいくらか手が施されており、拡張される分だけの木々が切り倒されていた。ここから木の根っこを丹念に引き抜いていき、地面を馴ら

して石を並べて、砂と水と石灰で作ったモルタルで間を埋め、モルタルと石を混ぜたものを敷き詰め、また石を並べる。そして、その間をモルタルで補修する。これでやっとサウルス原産の石畳の道路が完成するが、それはいくらか後の話だ。

ギャロツプは近くにいた大工にリザドスの場所を聞いて、彼に会いに行った。リザドスはオナガから一キロほど離れたところで工事の監督をしていた。ギャロツプは彼の姿を認めると、馬を降りて彼のもとに歩いた。リザドスは大工に教えられて、ギャロツプたちが近づいてきているのに気が付く。

「これはこれは、どうも。副司令官殿、いったいどんな用件で？」
とリザドスが布で汗を拭きながら言った。

「今回の攻城戦における、あなたの失敗の話を聞きに来たのさ」とギャロツプは不躰に返した。「攻城兵器を燃やされたらしいじゃないか。それも作ってあった分をほとんど」

「あれはやられましたね。だから今はこうして点数稼ぎをせつせつせつせつとしています」リザドスのはのんびりした調子でいう。「ですが……まあ、ここからは、私にはそう見えた、って話に過ぎないんですがね。ええ、つまり私には、攻城兵器に向けて火矢が射込まれ始めた時にはすでに攻城兵器は燃えていたように見えたんですよ」

「はあ？　つまりは内部犯行ってことか？」ギャロツプは眉間にしわを寄せながら言った。「犯人は？　わかってるのか？」

「まあ、こういつたら差別的かもしれないませんが……小ウアズマ人じゃないかと思つています。あれですよ、その事件で一番利益を受けるのは誰か……利益を受けている者が犯人である、ってやつです」

「確かに、小ウアズマ人はサウルス軍が攻城戦に失敗すると、一応利益を受ける。おれたちがこの土地から退却してくれるかもしれないからな」しかし、もしかしたら、それもアレックスが犯人である可能性はないか？　とギャロツプは考えた。利益という点を考えるならば……現に、今こうしてジャクナ王におれへの猜疑心を抱かせていることは、奴にとって利益だ。猜疑心と言う物は、順風満帆の

時には抱かんからな。今回のことでジャクナ王の神経を衰弱させ、同時に、王の心におれへの猜疑心を埋めつける。「とはいえ……実際の所は、あんたの言う通り、小ウアズマ人の線が濃いだろうな。犯人は」

ギャロップはアレックスへの猜疑心を自分の中に押しやりながら、その後もリザドス大將軍の詳細な説明を聞いていた。

ウイスカはこの攻城戦のことを、調べられる限りにおいて全て調べ、さらに全て書いてシャンティのもとに送った。もちろん、ジャクナ王がギャロップに猜疑心を抱いているかもしれないこともきちんと書いてある。

34・疑惑（後書き）

ジャクナ王のモデルは『背教者ユリアヌス』と言う本のキャラであるコンスタンティウス2世なんですわな。

というか、シャンティもユリアヌスというキャラの影響を受けてるし、さらには、この小説自体がそれからムチャクチャ影響を受けてて、見ようによってはほとんどそのプロットをなぞっている感じにも見える。

構想の段階ではそんなに影響は受けていなかったのになあ。

ああ、あとスクウェアのゲーム『サガ・フロンティア2』からも秀囲気面で影響を受けたし、王欣太さんの『蒼天航路』からも影響を受けたし、岩明均さんの『ヒストリエ』『ヘウレーカ』からも影響を受けたし、安彦良和さんの『アレクサンドロス』『我が名はネロ』からもビジュアル的だったり直接的だったりする影響を受けたし、マンフレディさんの『アレクサンドロス大戦記』にも影響を受けたし、塩野七生さんの『ハンニバル戦記』からはハンニバルの詳しい戦術を学んだし……あと、ええと……あと何があるっけ。

まあ、この小説を見て「まあまあだな」と思った人は、上記の作品とかにも手を伸ばしてみてはいかがでしょうか。この小説が「まあまあ良い」なら、上記の作品は絶対に面白いはず！

特に安彦良和さんの『アレクサンドロス』はマンガだし、全1巻だし、迫力もあるしでかなり良い作品。

さあ、諸君、フアランクスを組んで書店に向かうのだ。アラララライー！（アレスの加護があらんことを！）。

35・齒車が狂って

二二九九年の年明けの冬にシャンティがジャクナ王に送った書簡の中には、ジャクナ王がギャロップに抱いているであろう猜疑心を直接解凍させるような言葉は含まれていない。シャンティにしても、ジャクナ王があればほど重用してきたギャロップをここにきていきなり不審がっているのはあまり信用できる話ではなかったし、それに自分が藪から棒なことを言って、もし、それが原因となってジャクナ王がギャロップを疑い出すかもしれないこと考えると、どうにも対処の方法が浮かばなかった。

結局彼は、『ギャロップは逆境に強い將軍だから小ウアズマの諸部族との抗争には絶対に彼の力が必要です。』と書いて、ジャクナ王のギャロップへの信頼感を高めることに努めるしかなにもできなかった。

二二九九年は年明けからあまり良くない出来事が頻発した。まず、去年は東部へドロケラスが不作だったせいで、税収は落ち込んでいたし、サウルス軍への物資を満載した海運輸送団は海の気まぐれな天候のせいで二回ほど沈没していた。また、不作の年にはお決まりのように出る東部の野盗たちを駆逐せねばならなかったし、西部力バルスの様子も（例の組織のせいで）不穏になり始めていた。

シャンティが春を前にしてジャクナに送った書簡の中には、ジャーニイを総督として取り立てることを要請している。シャンティは、『……とにかく、猫の手も借りたいところであるわけですが、その猫も見つからない状況なのです。それで国中に猫を探すように命令したところ……なんと、南部グナトウスには猫どころか虎が眠っているではないですか。ここは、国勢を安定させるためにこの南部の眠れる虎の手を思う存分借りてみようではありませんか、兄上。』と、そんなことを書き記している。当たり前だが、ジャーニイの総督任官の許可はおりなかった。

遠征軍としては本国から物資が送られてこないならば、自分たちで補給するほかない。となると、小ウアズマの現地で集めるしかないわけだが、今いるところよりさらに東へ進軍することを望んでいるジャクナ王としては、こんなところで不用意に軍費を使いたくないかった。

ジャクナ王は悩みに悩んだ末、小ウアズマの諸都市から糧秣を超安値で買い叩いた。これは、もちろん戦勝国としての権利を使ったわけで、小ウアズマの諸部族たちはサウルス軍が買ったような値段で食料を手に入れることはできない。それどころか、サウルス軍が大量に穀物やフルーツなどの食料を買ったせいで、小ウアズマ地方にある物資が少なくなり、物資自体の値上がり……つまりは、インフレを引き起こし始めた。

小ウアズマの諸都市でサウルス軍への不満は高まり始めた。小ウアズマの民の不満を知ったジャクナ王は、この土地を安定させておく分だけの兵士以外をすべて本国に返せばよかったと悔やんだが、後の祭りである。

とは言うものの、この時点ではまだ取り返しがついたはずである。サウルス兵士を本国に送り返し、その上で彼らが買い漁った糧秣をほぼ同じ値段で問屋に売り、市場の物価を元に戻せば、商人も諸部族も収まりがついたはずであった。が、ジャクナ王はそれができなかった。いや、しなかったのである。

「この前やったことは間違いでした。すいません……なんてことをおれにやれと言うのか？」ランウータのサウルス軍兵舎にある王ための大きな部屋で、ジャクナ王は、自分をあやす様に説得するアレックスに器を投げつけながらこう言った。器が彼の体にあたると、中から葡萄酒が飛び散り、彼の体を汚した。「……そんな屈辱的なことを、おれにしると？」

「ですが、そうしなければ小ウアズマにおける王の覇道は閉ざされることになりました」アレックスは唇を青くして、ぶるぶる震えながら言った。「少しの恥を忍べば、いずれ、目の前には多大なる誉れ

と栄光が広がるのですよ？ 王、ここはなにとぞ……」ご思慮願います」

「おれの思慮を願う？ つまりは、お前は、おれの考えが浅いとでも言いたいのか？」

ジャクナ王が座っていたベッドから、ゆらりと立ち上がる。

「い、いえ。違います、そうではありません」馬鹿め、そういうことだ。「私はそういう意味で言ったではありません」

「……」震えながらも自分をまつすぐ見つめる少年の瞳を、ジャクナ王は見つめる。そして自分の中で少しだけ怒りが収まったのを感じ取ると、彼はまたベッドの方に歩きだして呟いた。「もういい、今日は帰れ」

「……はい」

アレックスは小さく返事をして彼の部屋を出た。

アレックスは凡庸な男だった。東方の人間の血を色濃く残すカマラ家はサウルス国東部ヘドロケラスの田舎貴族だ。田舎貴族なもので、彼は当然東部ののほほんとした田舎の中で育ったが、その育ちに似合わぬ野心を持っていた。

彼の野心は純粹に権力への欲のみに向けられており、歴史に名を残すなどの英雄願望は持っていない。また、彼は彼個人の栄達にしか興味はなく、カマラ家の方は繁栄するならする、しないならしない、でどちらでもよかったのだ。

とにかく彼は自分自身のことだけを考えた。だからこの時ジャクナ王を諭した。なぜなら、ジャクナ王がこの遠征に失敗して宮廷内での大きな権力を失ってしまえば、彼に重用されている自分の立場が危つくなるからである。

できれば、このまま東方遠征は辞めてもらいたいものだがなあ。と彼は廊下を歩きながら思った。ぼく的には、王は今以上の権力を手に入れようとしないで別にもいいんだ。正直なところ、なんで東方にあんなにこだわるのかもいまわからない。

そんなことを思いながら彼は自分の部屋に戻った。

一か月後、春中旬。ジャクナ王の考えていた予定からすれば、この年の春には更なる東方遠征が開始されているはずだった。が、予定の東方遠征は春の中旬になっても準備すら整っていないかった。理由は傘下に収めたはずであった各地諸部族の反乱である。

先に起こった食料関係の物価高騰は小ウアズマ人たちの不満を高め、ついに反サウルス軍を組織させるまでになった。サウルス軍はランウータに腰を下ろし、それらを押さえつける姿勢を取る。反乱の起こった地方に半個軍団（五千名）を派遣し、それらを迎え撃つた。それでも反乱は次々に、しかも四方八方にて起こるせいで、サウルス軍は東方に進軍する分の兵員数が確保できずにいたのだ。

できるならば本国に追加の兵を頼みたかったが、それでは食料がますます足りなくなってしまう。

「そして、ぼくの言った作戦も、実行するにはもう遅い」とアレックスは独りごちた。

アレックスは小ウアズマの港町であるモンモの近くで起こった反乱を治め、ランウータに帰還したばかりだった。彼は鎮圧完了の報告をするためにジャクナ王の兵舎に急いでいた。

彼は、兵舎の一番奥の部屋の前に立つと二回ノックをして、返事が来るのを待った。アレックスが衣服を直しながら待っていると、やがて「入れ」との返事が来た。

「はい、小ウアズマ反乱諸部族鎮定軍將軍カマラ・アレックス、入ります」

アレックスは言い終わった後にドアに手をかけて、ゆっくりと部屋の中に入った。部屋の中で、ジャクナ王は窓の外を見ながら立っていた。

「よく来たな」と言いながらアレックスを見るジャクナ王の顔は状況に合わぬほど晴々としていた。何か解決策が見つかったか、とアレックスは直感する。「その顔は、何かに気が付いた顔だな。ああ、そうだ。解決策は見つかった。やあ……強引だがな」

「それはよかった。して、どんな作戦でしようか？」

アレックスは心中で、王が愚策を考えたのでは？ と緊張しながらも、顔は嬉々とした表情を作った。

「アレックスよ、サウルス軍がここにいるから食糧難が起こるのだよな？」ジャクナ王はにやにやしながら彼に質問した。アレックスは頷くしかない。それが正解なのだから。「ならば、ここからサウルス軍を動かせばいいのだ」

でも、今から本国に帰っても遅いよ。とアレックスは苦々しく思った。なんてったって、もう反乱は起こっているんだから。いまサウルス軍を本国に送ったら、今度は小ウアズマ地方に残った駐屯軍が奴らに押しつぶされるかもしれない。だって、ぼくたちに食われた分の食料はどうやっても彼らの空っぽの腹の中には移動できないんだからな。

「どちらに動かすと思う、アレックス」

とジャクナ王が言った瞬間、アレックスはこの先彼が取る行動を理解した。

「東」アレックスは思わずつぶやいた。「さらに東に行くのですか」「そうだ、そうなのだ。まだこの地方が収まっていない状況で、さらに小ウアズマの奥地に進むのは危険かもしれない。しかし、いま本国に戻ってしまったら、ここ数年の苦勞がすべて水の泡だ。ならば進むしかないだろう。東に行けば大量の食料を持つ者たちにてあるかもしれない。それらを分けてもらい、こちらの者たちに分け与えれば、反乱は収まるだろう」

「東の者たちが都合よく食料をため込んでいるなどということは……」

「帰れば今までのことが確実に無に帰す。だが、進めばゼロよりも高い確率で今手に入れている小ウアズマの土地を維持できるかもしれない。……アレックス、簡単な選択だと思うけれど？」

「ええ、ですが……」アレックスはごくりと唾を飲んで言った。死刑を宣告されたかのような恐怖に気圧されて、顔がびくびくと痙攣

急速に冷えていくのを感じながら、窓の外を見つめていた。窓の外には青い空が見えた。ああ、これならばまだこの人の相手を務めなくて済むな。などと思いながら、彼は目をつぶって目の前の現実すべてを遮断し、現実逃避を開始した。

二日後、ギャロップのランウータ帰還と共に東方遠征の準備が始まった。ギャロップは更なる東方への遠征の話は聞いていなかったようで、どういう意図があつてそれを画策するのかとジャクナ王に聞いたのだが、王はアレックスと話していた時のようなことを言うばかりだった。

それからまた二日で準備は整った。町から忌むべきサウルス軍が出ていくのを知ったランウータの人々は歓喜しながらそれを見送った。彼らはサウルス軍が目の前を通るときは、今までの恨みをすべて忘れたかのような態度で彼らの頭の上に花を散らしたり、投げキッスを放つたりした。

ジャクナ王と騎兵を主力とするサウルス軍はこれまで以上に隙間なく茂る木々を通りながら、時には切り開きながら東に進んだ。

使節を出していた村に到着すると、村人たちは話し合いもなしに攻撃を仕掛けてきた。使節はおそらく殺されたのだろう、と思いつながらジャクナ王は応戦を開始し、村を簡単に落すと、数百人ほどの村人たちを漏れなく殺した。

ジャクナ王は殺しまわった後、近くの侍従に命令した。

「代表の者を読んでまいれ」

「代表……ですか？」

兵士は顔いっぱい汗を浮かべながら、訊き返した。

「そうだ、読んできてくれ」

そう言うジャクナ王は疲れ切ったような顔をしていた。

「王……そんなものはいません」

兵士が蒼い顔で言う。苦笑の時に見えたピカピカの歯茎が嫌に汚らしく見えた。

「なぜ？」

ジャクナ王はぼんやりした頭で訊く。正直早く寝たかった。

「村人はすべて死にました」兵士が村人たちの死体で築かれた山を指差しながら言った。「殺しました」

ジャクナ王は、胸の近くにある「何か」が凍てつき、壊れたのを感じた。

ジャクナ王はすべての村人を殺すつもりはなかった。ただ、見せしめとしていくらかの人々を殺したら、それを材料にして交渉に移ろうと思ったただけだった。けれど、交渉などはできなくなってしまった。

「交渉か……」ジャクナ王は誰も近づかなくなった原住民の死体の山を見上げて、呟いた。「今、彼らと交渉するならば、どんな交渉になるだろうか。頼むから生き返ってくれ、だろうか。それとも、許してくれ、だろうか」

ジャクナ、許されるとても？ 彼の心の中で、そんな声が響いた。彼は積み上げられた原住民の死体の山に近づき、無表情で「燃やせ」と命令した。そして、彼らの家にあつた食料を最低限取り出すと、ランウータなどのすでに征服している小ウアズマの諸部族のもとに送り届けた。

サウルス軍が次の部族の村に着く頃には、先の虐殺のことは伝わっており、やはり彼らは抵抗の意思を見せた。ジャクナ王はもはや止められなくなっていた。

「殺せ、殺せ、殺しつくせ！ そうなのだ！ 初めからこうすればよかったのだ！ 初めから奴らなど殺しつくせば、食料のことなど、反乱のことなど気にしなくてもよかったのだ！ さあ、さあ、將軍、大將軍、殺せ、殺せ。女も子供も老人も、残らず、全て！」彼は最後に思い出したかのように言った。爽やかな笑みで言った。「ああ、良い女は置いておけ。いや、おれが取るのじゃあない。君たちの物だ」

サウルス兵も初めは遠慮しながら、王の顔を窺うように剣を振る

つていたが、仲間の小ウアズマ人たちがわれ先に美しい女を襲い始めたのを見るとタガが外れたのか、狂ったように諸部族を殺し、剣と盾と鎧と衣服と顔を血の色に染め、好き勝手に女や子供を弄んだ。「まずいですな」

と大將軍の侍従ウイスカは呟いた。彼の目前には血にまみれた顔を、しわいっぱいにして高笑いするサウルス兵たちがいた。彼らは子供に剣を持たせて、自分たちと決闘させている。小ウアズマの子供はがたがた剣先を震わせながらも、サウルス兵に剣を向けた。

「ウイスカ」隣にいたギャロップが疲れきったように言う。「おれ、少し飯を取ってくるわ。貯めこんでおかないと、何が起こるかかわらんからなあ」

「將軍。この状況を見て、どうしてそのようなことが言えるのですか」ウイスカは叱咤するように言った。「早く彼らを止めなければ、そうしないと取り返しのつかないことになる」

「取り返しのつかないこと？」ギャロップは近くの民家に向かって歩きながら言う。「ならば、今ここですべてをやめれば、取り返しがつくって？ おれたちが殺した原住民は生き返るって？」

「……將軍」

ウイスカはそのあとの言葉を継げず、彼のわびしい後姿を茫然と見送っていた。

やがて、夕焼けによって一面がオレンジ色に染まる頃、兵士たちは自分の体が乾いた血でべたべたなのに気が付いた。次は自分の体が異常に臭いの気が付いた。体を洗うところを探して村を歩く。何となくうつむきながら。ふと、目の端に移った何かに注目してみれば、地面には子供の首が落ちていた。兵士ははっとして顔を上げた。見てはいけないというように。見てみれば、誰もが地面を見ないようにしていた。彼らは一様に、あの莊嚴な夕焼けを見ている。

目を下に向ければ自分たちの壘行が目に移ってしまい、目を上に向ければ美しい夕日を拝むことができる。この二者で択一しなければならぬなら、選ぶのは簡単だ。誰もが、齒をがちがちさせなが

ら、サウルスではちよつとお目にかかれぬ美しい夕焼けを見ていた。

間もなく夜が来た。風が、まるで村人たちの亡霊であるかのよう
に呻き声をあげていた。その夜の内に、村の空井戸へ身を投げた者
が七人いた。七人目と六人目は、先に飛び降りていた兵士がクツシ
ヨンになつていたせいで死ねなかつた。彼らは朝焼けと共に起きる
兵士たちに何とか助け起こしてもらつてことなきを得た。ジャクナ
王はその井戸を見て、「中の兵士たちの持ち物をはぎ取れ」と命令し
た。

ウイスカはこの蛮行を克明に描写し、シャンティに送り届けた。
同じ頃、ジャクナ王たちもシャンティに『東方遠征の成果』という
書簡を送り続けていたが、こつちには虐殺のことは一字たりとも書
かれていなかった。

シャンティは対処に困つていた。実際のところ、ジャクナ王への
諫言を綴つた書簡を書きはしたが、それを送る勇気が持てなかつた。
その書簡を送つてしまえば、兄がどう出るかわからないからだ。憤
怒して自分を殺しに来るだろうか、いや、そんなことならばまだ良
い。このことをシャンティに伝えたウイスカを殺すかもしれない。
ギヤロップまでも殺す可能性もある。虐殺をやめることもなく、そ
れどころかそれは激しさを増すかもしれない。

彼には、兄が全く異質な別物に変わつてしまつたように思われた。
それをユルシユや妻に話すことにも勇気が持てなかつた。そこでシ
ヤンティは職務の合間を縫つてジャーニイのところへ向かうことに
した。

夏の中旬。シャンティはルルディファイロに乗り上げ、近衛兵団
と共に南部グナトウスに走つた。この日が来るまでの間にも、ジャ
クナ王とサウルス軍の小ウアズマでの蛮行の記録は次々に送られて
きた。今日の早朝に届いたウイスカの書簡の中には『サウルス兵は
夜が来るたびに自分たちの行いの恐ろしさ、愚かさに後悔を抱いて

いるくせに、昼が来て、血を浴びるとそれを忘れてまた頭が変になつてしまうのです。』と書かれていた。シャンティはそれを読む自分の手が小さく震えているのに気が付いた。彼は片手で片手をギュッと握りしめて、震えが止まるまで待った。手の血の気がなくなつてきて、少しずつ青白くなり始めるのが見えていた。手がびりびり痺れてくるのを感じた彼ははっとして手を放した。彼はすぐに南都ザザンに向かう準備を始め、空が真っ青になった頃にはもう王都セリオンから飛び出していた。

朝風、夕風、夜風を突き抜けながら数日かけてザザンに辿り着くと、南部総督のカマラ某に挨拶もせず、ジャーニイのいる離宮に向かった。彼に付き従うシェイバスは袋を担いでおり、その中にはウイスカの手紙がいつぱいに詰め込まれていた。

シャンティは離宮に入ると、ジャーニイの部屋まで走っていき、無断で部屋の中に入る。

「なんだ？ どうした」

と尋ねるジャーニイの質問にも答えを返さず、手紙を詰めた袋を机の上に無言で置いた。クッションの上で本を読んでいたジャーニイは訝りながらシャンティの方に近寄ってきた。

「……これを見てくれ」

シャンティは青い顔をしながら書簡を入れた袋を指差す。

ジャーニイは嘆息した後に、言う通りその袋を開けた。中から出てきた書簡を見ると、東方遠征に行っているウイスカからの手紙であることがすぐにわかった。ジャーニイはとりあえず、袋の中から書簡を全部出して日付が一番古い物から読み始めることにした。

東方遠征に行っているサウルス軍が初めて虐殺を行った時の書簡を読むと、ジャーニイもさすがにびっくりしたように体を震わせ、何度も同じところを読み返していた。彼は衝撃的な一通目を読み終えるとすぐに次の書簡を手にとって広げ始めた。

ジャーニイが書簡を読んでいる間、シャンティは黙って足元を見ていた。するとドアが三回ノックされた。シャンティが見てみると

エラルジス元大將軍が開け広げられているドアを手の甲で叩いていた。その後ろにシェイバスが立っている。

そうか、ここには彼の孫娘のタイスが住んでいるから、彼が会いに来ていてもおかしくないな。とシャンティは無意味に思った。

「どうなさいました？」と言いながらエラルジスは二人の方に歩いてくる。で、机の上の書簡を当たり前のように手に取る。「これは手紙ですな。ふむ、ウイスカ殿から……」

「読むな」

ジャーニイがどすを聞かせた声で、彼を睨みつけながら言った。

「……」エラルジスはどきりとして、ウイスカの書簡を机の上に置き、両手を頭の高さまで上げた。「失礼。私が立ち入っていい状況ではないようですな」

「……いや、悪かった」ジャーニイは首を振って謝る。「だが、手紙は読まないでくれ。これはおれたたちのことなんだ」

「ははは、おれたちですか」おれたちとは？ 王族のこと？ 兄弟のこと？「わかりました。ええ……と、やはり退散した方がいいのでしょうか」

「ああ、すまないがそうしてくれ」

ジャーニイがそういうと、エラルジスはかしまったように頷いてから部屋の外に出て行った。元大將軍は部屋の外で待つシェイバスの耳に何事かを囁いてから、ドアを閉めた。

部屋の外でエラルジスが老人特有のしわいっぱい顔をしめながら訊いた。

「ジャーニイ様たちはいったい何をしているんだ？」

「……ああ」言っているのだろうか、と思いつつもシェイバスは書簡の内容を手短に話した。「私の親父殿の書簡には、東方遠征軍が現地にて住民の虐殺を行っていると書いてあるのです」

「なんだと？」エラルジスはさらに顔をしかめ、さらに真っ赤にし始めた。「ジャクナ王はなぜそんなことを？ いや、王だけではない、ほかの家臣たちだって」

「私にもいまいちわかりません。ですが、止められぬ……というのもあるのではないでしょうか？ 一度だけのつもりだったが、それがどうにも歯止めが付けられなくなったとか……」

「なぜ一度だけ？」

「いえ、それは、あまりにも強く反抗してくるので……とか」

「なんで、おれが遠征軍の肩を持って大將軍に怒られにやならんだ。」

「……いや、いい。君に怒るのも筋違いだ。しかし、本当になんて」

「この場合、理由など考えたってしょうがないさ」ジャーニイはにべもなくいった。「考えるべきは、これからどうするか、じゃないのか？」

ジャーニイは言いながら机の前に椅子に腰を下ろし、向こうにある椅子を指差す。シャンティはそれを持ってきて、ジャーニイの近くに置き、それに座った。

「まあ……そうだけれど。いや、兄上たちがあんなことをする原因がわかれば、そしてそれを駆逐しさえすれば……」

「ジャクナたちは元通りになると？」ジャーニイはにやりと、嫌な感じに笑う。「馬鹿言つなよシャンティ。それができるんなら、お前がとづくにしているはずだろ？ なぜって？ だって、奴らがあんなにキレてるのは……腹が減ってたからだろう？」

「……いや……」シャンティは手で顔を覆う。「でも、兄上たちは一応食料を……そうだ。腹が減っているのは兄上たちじゃない。そうだ、そうだ。食料輸送がうまく……。いや、農作物がちゃんと作れていれば、小ウアズマの食料を奪わずに済んだんだ。そうすれば、兄上たちだってあんなに。ならばこれは「ぼくのせい？」

「気にするなよ。農作物の収穫量なんて天候のせいだし、馬鹿王たちの蛮行など奴らの腐った心根によるところが大きいだろう？」ジャーニイは兄らしく、シャンティを励ますように言った。「だから、東方での遠征軍の蛮行など気にするな。こんなことをし出したんだ」

……この遠征はじきに破綻する」

「ならばすぐに止めなければ！」シャンティが立ち上がる。「破綻した瞬間に兄上たちは死の危機に瀕することになる」

「放っておけ。死をもつて償わせればいいだけだ」

「……死ぬのは兄上だけじゃない。兄上について行ったサウルスの兵士たちもだ」シャンティは静かに、しかし、怒気を込めていった。「彼らは確かにもはや、無辜むしことは言えないかもしれない。けれど、小ウアズマに行っていないければ、兄上が連れて行かねば、あんなことをしなかつたはずだ」

「それは一理ある。でも、現実が違う。奴らは現に東方に行っているし、残虐な行いだつてしている。行かなかつた場合のことなんて考えてどうする。お前は裁判の時に、もしかしたら犯人は別の場合では人を殺していなかつたかもしれない、で犯罪者を救うのか？」

「いま言っていることは、そういうことじゃないだろう！」シャンティが顔を真っ赤にする。「彼らは人をむやみやたらに殺してしまつたが、だからと言って、まるで彼ら自身への見せしめの様にその罪の重さを死でもつて償わせるのは違つたんだ」

「それに、人が死ぬと年貢も減るし、兵力も弱くなるしな」

「ジニー！」

「うるさいぞ！ ガキみたいにがたがた言うな！」ジャーニイがシャンティをきつとにらんで怒鳴る。「大体、いくら考えてもやれることなんてほとんどない。言い返しようのない論理的な手紙を送ろうが、口の達者な奴を使者として送ろうが、大量の軍を送ろうが、奴らがそれをやめないならおれたちにできることはない」

「ならばぼくが説得に行く」

「……おれの話聞いていなかったのか」ジャーニイは頭を抱える。「誰が言つても意味はない。たとえ、それがお前でもだ」

「それなら……」シャンティは無気力に椅子に座る。「どうすればいいんだ」

「さあな、気休めでもいいから手紙でも使者でも送つて、後は祈る

しかないだろう。人事を尽くして天命を待つってやつだ。まあ、今回の場合は完全に無駄な人事だけだな」

「無力だ……また、ぼくは無力だ」シャンティは頭を抱えながらつぶやいた。「いつだってぼくはそうだ。何も助けられやしない」

「なに、馬鹿が力を持つものよりかは、いくらかましだ」

ジャーニイの言葉は、シャンティの耳には届かなかった。シャンティはそれからずっと、日が暮れるまでそこでそうやって頭を抱えていた。その横で、ジャーニイは本を読むのを再開していた。

夜になるとシャンティはジャーニイの机の上の物を勝手に使いだして、一枚の手紙を書きだした。それはジャクナ王へあてた手紙で、小ウアズマの現地住民の虐殺をやめるように懇願する手紙だった。

35・歯車が狂って（後書き）

絵を貼らなくていいから投稿作業がとても楽です。

というか、東方遠征は文章とか展開から自分自身の疲れが見えるなあ。

36・平穩フレーザー

『ウイスカの頭髮は抜け落ちてしまいました。』

その文章を書いているウイスカの頭は、確かにつるつるの禿げ頭だった。それなのに、彼の頬髯は未だに健在だった。手紙には『寝ている間に、この頬髯が頭の方に歩いて行かないでしょうか。』とも書かれていた。

ウイスカは寢床用ねとこに奪い取った民家を出て、手紙や軽い小物などを運ぶ伝令兵のもとに向かった。伝令兵はいわば郵便屋さんで、馬に乗るのが得意なカバルス兵が担当した。伝令兵は馬に乗って近くの村に行き、それをその伝令兵に渡す。伝令兵はそうやってバトンの様に荷物を渡しながら、荷物を最終目的地に運んだ。もちろん、緊急の用事ならば、一人の者が馬を乗り換えながら物を運んだりもする。

ウイスカは手紙を渡し終えると、乾いた秋空を見上げながら村を徘徊した。彼の今いる村は小ウアズマのランウータからかなり東南東に行ったところにある小さな村だった。村のいたるところには村人たちが震えながら固まっていた。サウルス兵はそれをも言えない気持ちで見ている。救いの手を差し向けたいが、自分たちが彼らをそんな状況に追い込んだのだ。彼らを助けるなど……そんなことは彼らのおつていい行動ではなかった。

初めて虐殺をしてから、すでに四か月過ぎていた。サウルス軍の中では、もう虐殺と言える虐殺は行われておらず、戦闘が起こっても抵抗の意思のない者は生かされた。

原住民のご機嫌をとりながら進撃していた時よりも彼らは疲れていた。

それはジャクナ王も同じだった。彼は夜毎にアレックスを抱いて気を紛らわせた。そして行為が終わると、彼の胸に抱きつきながら涙を流して虐殺のことを懺悔するのだ。三十五歳の彼の顔の肌はボ

口ポロで、掻けばばらばらと固くなった皮膚が剥がれた。いや、形も若干変わっていた。東方の蚊に刺されすぎたせいだとも、肌の衛生環境が悪かったから皮膚病になったのだとも言われている。

さて、村の中を歩き回るウイスカのこと話を戻す。

彼は村を歩き回ってギャロツプを探した。近くの木々の下に寝転んでいる兵士たちに訊いたりしているうちに、ギャロツプが井戸の近くに行ったのを知った。それほど大きくない村の中に井戸は二つあり、彼は適当に選んでそちらに向かった。そちらには、はたしてギャロツプがいた。ギャロツプは愛馬に水をやっているところだった。

ウイスカは彼に近づきながら呼びかける。

「將軍」

「おう。どうした？」ギャロツプが水を飲む愛馬をブラッシングしながら快活に言った。「もう出発か？」

「いえ、この調子なら」とウイスカは周りを見渡す。兵士たちは出発の準備などしておらず、一様にだらけている。「まだ先になるでしょう。それよりも先ほどシャンティ様に手紙を出してきましたね」「禿げになったことを正直に告白したのか？」ギャロツプは吹き出しながら言った。「大切に守っていた前髪が頭を洗っているときに抜け落ちたことも書いたか？」

「それは後の著作のためにとっておきましたよ。新著の名前は、そうですね……『髪なんて嫌い』とか『髪など要らぬ』とかにしましょうかね。そういう將軍の髪の毛もどんどん白くなってきていますよ」

「はん、白髪は禿げになりにくい」

「禿げるなら白髪の方がましだと？」

「そういうこと」

と言いながら、彼はどんどん白くなる髪の毛を触った。その時、兵士の一人が出発準備の合図である角笛を駈らした。その笛の音を聞いた瞬間、村人たちは震え始めた。ギャロツプはウイスカに目配

せして、村人に今の笛の意味を説明するように命令した。

ウイスカは集まっている村人たちの方に歩いて行って、小ウアズマ語で「出ていく準備をしているだけだ」と伝えた。

この時の遠征軍の中で暗黙の了解とされていたことがいくつかわかる。

まず一つ目は、抵抗しない人間を殺さないことである。これは説明する必要もないだろう。彼らはもう飽き飽きしているのだ。

二つ目は、一つの村に一夜以上寝泊まりしない、ということだ。

これは、住民たちの寢床を必要以上に奪わないためであるが、そんな配慮をするならば元々住処を取らなければいい、とも思える。しかし、遠征軍に従軍していた書記官の記録によると、小ウアズマの森林のせいでサウルス軍は馬車を連れて行くことができず、テントの材料などをほとんど持ち運びできなかつたらしい。だから、寝るときは高貴な身分以外の者は野晒のびしで寝ていたのだ。そういうわけで彼らは、建物があるときは屋根の下で眠りたいと思ったのだろう。暗黙の了解三つ目は、村から三日分以上の食料を奪わない、ということである。これも村人たちに遠慮してそうしたのである。

これらの暗黙の了解が出来上がるのには、シャンティの例の書簡が一役買っているのかもしれない。シャンティは、サウルス兵の蛮行を激しく攻める手紙をジャクナ王に向けて、送っており、王はそれに心を動かされたのか、その書簡を全軍の前で読み上げた。

この時、シャンティがジャクナ王に宛てた書簡は現存していない。理由はあとで述べることにするが、ともかく、シャンティのこの手紙の内容を聞いたサウルス兵たちはサウルス人、カバルス人、小ウアズマ人区別なく自分たちの行いを悔やんでむせび泣いたと言われている。ウイスカはこの日の日記に「王子が二歳でペンを握ってから書いた物の中で一番の書き物。これこそ、後世に残すべき文学ともいえる。」と絶賛している。だが残ってはいない。

やがてサウルス軍出発の準備ができた。村人たちは去っていくサウルス軍に向かって何度も頭を下げた。サウルス兵たちは気まずそ

うに顔をしかめながら、森の中に入った。

春から夏に、夏から秋に、進軍は季節など関係なく続いていた。この調子では冬も続くかもしれないと彼らは思っていた。もう任期通りに帰ることを彼らは諦めていた。それならせめて、冬は暖かい南で過ごしたいものだ、とそんなさやかな願いを抱いていた。

東に行くことに知らない文化、知らない言語、知らない肌の色、知らない文字、知らない武器、知らない動物、知らない食べ物、知らない飲み物、知らない着物、知らない建物、知らない自然に出会った。

王のために建てられた、お城と見間違えほどの巨大な墓を兵士たちは感嘆しながら見ていたが、それでも心に染み入ってくるほどの感動はなかった。一人の兵士は「この墓を王が作るなんて言い出しやしないかね」と呟いた。

この三週間前、サウルス軍は小ウアズマの覇者の一つであるゴライアを撃破していた。ゴライアはランウータとは違い国である。ゴライア族が戦争により各地諸部族を統一し、自分たちを支配者とする国を作ったのである。

彼らは、ランウータ同様木の板を重ねた鎧をまとい、左手には木の盾、右手には東や西からくる鉄の剣を持った。一応、彼らも自分たちで剣を打ったりしたが、それはあまり出来の良い物ではなかった。

ゴライア軍は無謀にもサウルス軍相手に平野での開戦を行った。サウルス軍四万、ゴライア軍二万の戦いは、小雨が降り始めると同時に始まった。両軍の戦闘はまずは弓矢での遠距離戦から入った。両軍の弓兵が相手側に一斉に矢を放ったがこの時点で、木の盾を使用していたゴライア軍は押され始めていた。ギャロップは片翼に弓兵を集めるように進言し、ジャクナ王はそれを下知した。徐々にサウルス軍の左翼に弓兵が集まり始める。同時に、敵軍右翼降りかかる矢の数が急増する。そして、ゴライアの右翼前線の一部が崩れると、そこに重装騎兵隊が突撃を開始した。

ゴライア軍はあっけなく瓦解した。ゴライア軍の左翼は市城壁の中に逃げ込んだが、中央にいたゴライア王が捕まえられていた。籠城をしようとしていた彼らの前に、赤ん坊のように泣きじゃくる王を突き出すと城門は開口。サウルス軍は厳かにゴライアの都に入った。

ゴライアを撃破した頃にはシャンティの手紙は届いていたので、その後、彼らはランウータの時と同じように穏和にゴライアを傘下に収めた。

そこでリザドス將軍に書簡を送り、そのまま六日間休養した。リザドス大將軍の別働隊からの返事が来ると、同時にサウルス軍は出発の準備を始め、即日出発した。この時のサウル打軍の兵員数は四万二千である。つまり、ゴライア兵の小ウアズマ人が二千人ほど加わったのだ。

小ウアズマの名の知れない王の墓を後にしたサウルス軍は冬に備えるために南に移動し始めた。日に日に秋から冬になっていくというのに、南に行くほど気候は蒸し暑くなった。サウルス兵士たちは金属製の鎧を着こんでいるから中が蒸れ、皮膚病になり始める者が増えた。

「石鹼を作ってみんなに配るんだ」

ジャクナ王はギャロップと昼食をとっていた時に言った。昼食をとっていたのが河原だったので、飲食用の水を汲んだ後、兵士たちはわれ先に川の中に飛び込んで垢を落としていた。

「石鹼……」ギャロップは白湯ゆを飲みながらあからさまに嫌な顔をする。それもそのはずである。この時代の石鹼は獣の油と木灰で作られており、汚れを落とす効果はあったが、かなり臭かったのだ。「嫌ですね。体が臭くならあ」

「けど、皮膚の健康を維持するには石鹼を使って丹念に汚れを落とした方がいい。ギャロップ將軍だって、戦いの時に体中が痛痒くなって戦いに集中できず、痒みに気を取られた隙に死んでしまった……なんて嫌だろっ？」

ギャロップは嘆息してから、彼の命令を了承した。その日から石罅を作る各隊に班が作られ、水浴びなどの際に獣脂と木灰で作られた柔らかくて臭い石罅が配られるようになった。といっても、半分ほどの兵士はそれを使わなかったようである。ウイスカの日記によると、ギャロップもそれを使ってはいなかったとのことだ。

そんなことがありながらも、南進はさらに続いた。暦の上で冬が始まった頃には、サウルス軍は小ウアズマ地方の南の海岸線にたどり着いており、その海岸線沿いにあったパンジーという部族の村に寝泊まりしながらも、冬の間に住処となる木造の兵舎を建て始めた。一か月すると、三十人ほどが寝泊まりできる兵舎がいくつも作られた。その建物はその地域の部族の建物よりもかなり立派なもので、サウルス兵たちは、自分たちが立ち退く際にこの建物を譲るから、その代わりに食料を融通してくれと頼みこんだ。それは二つ返事で了承された。

建物などを見る限り、パンジー族の文化はそれほど高くはなかったらしい。彼らはサウルス兵たちの装飾品などを物珍しそうに目を輝かせながら見ていた。また、文字を持っていなかったせい、本などはなく、昔に起こったこともほとんどが口承で伝えられていた。ウイスカは彼らが王の墓を建てたのではないかと質問してみたが、彼らは墓の存在自体知らなかった。とはいえ、それらしい口承があった。けれども年老いた伝承者にボケが始まっていたせいで、内容はあやふやな感じであり、確たる証拠は得られなかった。ウイスカは年が明ける前にこの調査を中止している。

パンジー族の住む村には名前がなかったので、サウルス兵はそのままパンジー村と呼んでいた。パンジー村において、サウルス兵は精力的に原住民たちと交遊し、自分たちの文化を伝えた。料理、鉄を打つ技術、インフラ整備の方法、自分たちの伝承、船を作る技術。サウルス兵たちは、まるで今までの罪を償うかのように、自分たちの持つ知識、技術を彼らに教授した。

後年、パンジーが小ウアズマ、ウアズマにおいて異様なほど造船

技術を発達させ、海運国家となった理由はこの冬のサウルス軍との交友にあるという学者が多い。この百年後、建築技術の革新や石蝨などのおかげで衛生環境が向上し、人口が著しく増大したパンジー族はその進路を内陸ではなく外海にとった。

十一年でパンジーの南にあるロワーナー諸島を征服した彼らは、その勢いでもってウアズマの大地に攻め上がっている。最初は順調だったが、逃げた敵兵を追いかけて内陸に攻め込んで行くほど、その歴史のなさからくる我慢弱さが露呈し始める。そして、平野での決戦で大敗北を喫すると、彼らはまた海に戻っていった。

本筋とは関係のないパンジー族の話はここまでにしておく。それで、冬の間中をパンジー村で過ごしたサウルス軍は安らかな日々を送り、疲労も抜け切った二四〇年の年明けの冬の終わりにパンジー村を出発した。

サウルス軍がパンジー村を出発してから一週間後。別働隊のリザドス大將軍はランウーラとゴライア間の道路を整備していた。

木を伐り、根っこを抜き、きれいに馴らされた地面には石が敷き詰められていた。あとはモルタルを流し込んで、また石を敷き詰め、隙間をモルタルで埋める作業が残っているが。

「ここまで来たら、終わったようなものだな」と、リザドスは作業員である大工を見回りながら呟いた。小ウアズマの春は、サウルスともカバルスとも違った春だった。「とにかく、木々が生命力全開という感じに青々としている。雨が降った後の青臭い香りもいい。色とりどりの花が咲きだすと、蝶々やミツバチが舞い始め、そしてら蜂蜜もたらふくとれる」

大工たちは「また始まった」とお互いに顔を見合わせ、苦笑いしながら作業を続ける。

ジャクナ王とギャロップ大將軍率いるサウルス軍が東方遠征を進めていたわけだが、一方、混乱真っ只中の（西よりの）小ウアズマ地方を任されたりザドスはどうか。一言でいえば、文

句なし。つまり、彼はその役目を十分に果たしていた。

彼は一万ほどの兵士兼大工を器用に配分しながら道路整備と反乱部族鎮定を行った。最初はなかなかうまくはいかなかったが、東へ進んだサウルス軍やサウルス本国から物資が届き、それを市場に開放するうちに反乱は収まるようになってきていた。

しかし、食料がほぼいきわたるようになったのに完全な平和はやってこなかった。これは「食料面以外でもサウルス国に不満を持つ分子がいる」ということの証明である。リザドスはこれを警戒し、それらの集団の捜査を小ウアズマ人に依頼した。スパイは短い間にどんどん情報を集め、経過は良好とも言えたが、その調査で分かったことはリザドスを悩ませるようなことだった。

リザドスがスパイから受け取った書簡にはこう書かれている。

『彼らがサウルス国への反乱を繰り返す理由は、サウルス国の統治方法云々ではなく、やはり、残虐だったり粗暴だったりしたサウルス軍に対して純粋な怨恨を持っているからです。』

リザドスはその書簡を読んだとき、思わず兵舎の中で叫んでいた。「過去のことの原因で積っている恨みを、どうやって晴らせばいいんだ」

さて夕方、その日の分の道路工事が終了すると大工たちは近くの村の中に設置された天幕^{テント}の兵舎に集まっていた。その日の食料が配布されるからだ。この日のメニューは小麦粉や野菜を溶かし込んだどろどろのスープと薄く焼いたパン、近くで取れる新鮮なフルーツ、そして牛乳だった。兵士たちは友達と地べたに座って夕食を食べた。「この後どうするよ」と大工がスープをパンに乗せながら、隣の男に質問した。「なにせ、ここには何もいからなあ。なんとなく女の子には手を出せないし……」

そう言つと隣の男はうんうんと頷く。彼らが今の工事している所はランウータにもゴライアにも近くない田舎だったので、娯楽施設がなく大工たちは夜の暇な時間を持て余し気味だった。

「まあ、相撲とか、賭けとか……追いかけることか……隠れんぼと

か……はあ、ここにやあ、何にもねえからなあ」

大工はどんどんしょぼくれながら暇つぶしの案をあげていく。

「疲れ切って帰ってきてから追いかけてこつて、お前そりや自殺行為よ」

と隣の男が言うと、二人は、はははと笑いあつてから「あーあ」と大きな溜息を吐いた。

大工たちは夕食を食^{ゆけ}べ終わると、食器を元の場所に返して、そこから辺をぶらぶらし始めた。外をぶらぶら散歩できるのも日が暮れるまでだ。日が暮れてからは基本的に外出禁止で、天幕の中で適当に酒を飲んだり、賭け事をしたりするしかない。

二人は村の女たちを遠目に見ながら、少し目が合うと手を振って気を引こうとしたりした。女たちは怯えたような顔をして二人を怪しんでいた。

「なあ、行つちまうか？」

と大工が言った。それは禁止されているが、隣の男はうーむ、と悩むような仕草をしながら、にやにやと顔をほころばせる。

「おい」後ろから不意にかかった声に大工二人はびくりとした。二人が振り向くとそこにはリザドスがいた。「何しようとしているのかね。その顔を見る限り、楽しそうなことをしようと思っっているようだけれども……」

「いいえ、なんでもありません」一人が首と手をぶんぶん振りながらリザドスから離れると、もう一人も同じようにリザドスから離れていく。「ちよつと、あつちに忘れ物してなかったかなあ……」つて思つてですね」

「ふうむ、本当だろうか？」リザドスはやつきながら返す。「まあ、いい。でも、何度も言うが絶対に手を出すなよ。今は大事な時期なんだからな」

「ははは、わかっていますよお」と言いながら、彼らはリザドスから離れていった。

「はあ、びつくりした」

と男は振り向いて、徐々に遠くなっていくリザドスを見ながら言う。

「はあ、興が削がれたな。適当にしょんべんでもして帰るか」

「それしかないな」

大工たちは森の中に入って、村からは絶対見えないくらいに進んだ所で小便を始めた。一応兵士用のトイレは作られているのだが、清掃員がサボっているせいで汚くて強烈に臭い。そこでトイレをするとその匂いが移りそうだから、よっぽど真面目な者以外はトイレなど使っておらず、そこら辺の茂みの中で済ましている。

じよぼじよぼと木を目がけて小便を始めた二人は、それが流れ出る間、何となく辺りを見渡していた。すると、森の奥に四、五人ほどの集団がいるのが見えた。見つけた男は隣の友達を小声で呼んだ。「なあ、おい。あれ」男は片手で集団の方を指差しながら言った。

「あれ、なんだ？」

「え？」男は体を揺らして残尿を出した後、相手の指差した方を見た。おそらく小ウアズマ人の集団であろう者たちはこそそと何事かを話していた。彼は目を閉じて耳を澄ましてみたが、何も聞こえない。「なんだろうなあ？」

二人は小便が終わった後も、なんとなくその場に隠れてその密会を見ていた。けれども、やがて点呼を開始する笛が鳴ったので二人はその場から離れなければならなくなった。

結局、その集団が何をしていたのかはわからなかったが、森の中で話し合うことなど自分たちの間でもしよっちゅうあることだったので、それ以上は考えなかった。

二人は点呼を取って、その日の歩哨としての仕事があたっていないのを確認すると天幕の中に入った。で、隠していたパンを食べながら他人のギャンブルを見物して、夜遅くなったら寢床に入っって眠りに落ちた。

それから二日後。リザドス大將軍は小ウアズマ人と思われる男たちに殺された。

37. いつかのお返し

> i33897—4057<

リザドス大將軍死亡の由を書いた書簡は西のサウルス本国と東の遠征軍、両方に同時に出された。比較的に届きやすかったサウルス遠征軍にそれが届いた時には、リザドス大將軍が統治していた小ウアズマの西寄りの地域はすでに反乱諸部族が制圧していた。

リザドス配下にいた兵士たちは西と東、各々の思う方向に逃げた。引き返してきたサウルス遠征軍と再開することのできた者は助かった。西に逃げた方は竜の鼻の穴か港町モンモに逃げた。竜の鼻の穴に逃げた者たちは半分ほどが生還したという。モンモに逃げた者は、ほぼ要塞都市化されていたモンモに立てこもってサウルス本国からの迎えを待った。

遠くの東にいたサウルス遠征軍は諸部族によって補給をシャットアウトされ、一斉に発起したゲリラ兵と戦わねばならなくなった。いや、敵はゲリラ兵だけではなかった。昨日まで仲間だったサウルス軍内の小ウアズマ人も彼らの寝首を掻いた。その事件が起きた次の日には軍内の小ウアズマ人は「肅清」された。もはや、誰にかける情けも持てる状況ではなかった。

「ここから先、出会う小ウアズマ人は全て敵とみなす」森中が朝焼けに染まる頃、ジャクナ王は野営地の真ん中で紫色の顔をしながら言った。彼の横には無数の小ウアズマ人たちの死体が転がっている。「アレックス」

呼ばれたアレックスは手に火の灯った松明を持っていた。彼はジャクナ王にそれを渡し、ジャクナ王は懐からシャンティからの例の書簡を取り出し、そして、それに火をつけた。書簡はみるみるうちに焼け付き、やがてコゲとなって空に飛んで行った。

「これで、私たちは蛮族にも劣るのだ」

とウイスカはギャロップの横で呻いた。

「思えば！」ジャクナ王が兵士たちの前で叫んだ。彼は松明をぶんぶん振りながら叫ぶ。「やはり、初めからこうすればよかつたのかもしれない。我々がどれだけ筆舌を尽くしても、奴らには我々の伝えようとしていることの意味など全く理解できなかったのだ。奴らは蛮族……否や、それにも劣る。これから我々は奴らに対して、非情に徹する。しかし、肩を並べるサウルス人に対してはそうあつてはならない。そうだ！ サウルス人・カバルス人には友人と触れ合う時の様に優しく！ それ以外の小ウアズマ人には、まるで草木や畜生と触れ合う時の様に無情に！ 我々は帰るのだ。生きて帰るのだ。サウルスに、そして、また力を貯めて必ずここに戻ってくる。今度は十万の兵と十万の馬を連れて！」

「王よ！」ある兵士の集団が叫んだ。するとそれは連鎖し、どんどん彼を呼ぶ声が高まった。「王よ、その時はお供します！」

「そうだ、その意気だ！ 我々には守護聖獣の加護がある！ 必ずや、この仇はとるのだ。我々自身の手で！ だから今は、サウルスに帰るのだ。さあ、いざや、サウルスへ！」

「いざや、サウルスへ！」

地響きのような声の連鎖が小ウアズマの森を揺らした。木々で休んでいた鳥たちが一斉に飛び出す。それらが全て木から飛び去った後も、サウルス兵たちの雄叫びは止んでいなかった。

三万五千人のサウルス兵は西進……サウルスへの帰還を開始した。彼らは相手を殺し、殺して、殺しまくったが、以前と違うのは、敵を殺す刃を振り下ろす彼らの体の中を支配しているのが、あの時のような狂気ではなく、漲る死への恐れであることだった。

食料が遮断されていたせいで、何も食う物はなかった。馬はそこから辺の草を食べていたが、それでも東方に生えている草が消化に悪いのか、少しずつ体調を崩し歩くのを渋るようになり始めた。多くの兵が「馬が邪魔だ、馬を食うべきだ」とジャクナ王に訴えた。ジヤクナ王は苦々しい顔をし、地団駄を踏み、頭を掻きむしって、口から泡を吹きながら馬を食べることを許した。

それからも彼らは、馬を、蛇を、虫を、骨と皮だけの魚を、木の根を、葉っぱを、糞を、髪の毛を、指先を、手を、人を……。

兵士たちは剣を抱いて木に寄り添って目をつぶった。眠ってはいなかった。四方八方、其処^{そこ}彼処^{かしこ}、四六時中、のべつ幕なく……ありとあらゆる場所と時間に敵の攻撃があつた。昼も夜もなく死と隣り合わせだつた。彼らは疲れ切り、目に大きな隈を作り、腹は常に減つていて、それなのに下痢に悩まされた。一日に五十キロも移動した。そのせいで足はずるずるに剥けていた。圧倒的すぎる絶望の中で、なぜか彼らは生きる望みを抱いていた。

理由などなかつた。理由を探しても見つかりつこなかつた。理由を探して本当に絶望するのが怖かつた。希望を探さないことで、「いやいや、まだ希望があるんだ」と自分を偽る。彼らはそうやって希望を掴んだ。虚空を空振るはずだつた彼らの手の五本の指は、絶望の中からもありもしない希望を掴んだ。

彼らは何度も弱音を吐いた。けれども、歩みを止めなかつた。サウルス軍がゴライア近辺の平野に辿り着いたとき、おおよそ二万の小ウアズマ人は横に長い列をなして彼らを待ち構えていた。小ウアズマ人の手には鉄の剣と、鉄板を張り付けた盾が握られていた。小ウアズマ人の目は白く輝いていた。それを見た瞬間、百人のサウルス兵が自ら喉を切り裂いた。

「ウイスカ、使える騎兵は？」そのことを報告しに来たウイスカに對して、ギャロップが言つたのはそんな言葉だつた。「何体くらいになる？」

「……今の所、千ほどだと……」ウイスカは息を詰めた後に言つた。「行くのですか？」

ギャロップは無言で、ただ茫然と立ちすくんでいる兵士たちを掻き分けながら歩いて行く。ウイスカもそれについて歩いた。ギャロップが向かつた先はジャクナ王の所だつた。ジャクナ王は憔悴しきつた顔で木にもたれ掛りながら座り込んでいた。

「ジャクナ王」ギャロップが声をかけると、ジャクナ王は俯いてい

た首を上げ、大將軍を見た。「戦いましょう。奴らの、ゴライアの食料はおれたちの物だ」

彼の言葉を聞いた瞬間、ジャクナ王の瞳に生気が宿った。彼だけではない、近くにいてその言葉を聞いていた者はすべて、同じようになけなしの活力を心の中から絞り出した。

ジャクナ王はごくりと唾を呑んで叫んだ。

「皆の者、絶望するのはまだ早い。奴らと戦うのだ。奴らに勝てば、その向こうにあるゴライアは全てわれらの者になったも同じ。皆の者、戦うのだ！ゴライアの食料を手に入れるのだ！」

三万三千のサウルス軍対二万の小ウアズマ人の戦いだった。

戦いは空を覆い尽くす大量の雲の下で行われた。まず、小ウアズマ人たちは一斉に矢を放ってきたが、サウルス軍には打ち返す矢がなかった。彼らは盾を構えながら、慎重に前に進んだ。

五分間、サウルス軍の陣には絶え間なく矢が降り注いだ。その間に森の中を移動していた迂回班が小ウアズマ人への側撃を開始した。「馬を！」

とジャクナ王が叫んだ。小ウアズマ人が混乱する間に、サウルス軍は前面に誰も乗っていない馬を並べ、その馬に鞭を打った。一列に並んだ馬がまっすぐに小ウアズマ人の陣に突き進んでいく。

小ウアズマ人は側撃してきたサウルス兵を撃退すると、前から突っ込んできた突撃馬に対処し始めた。彼らは馬に矢を浴びせかける頭を打ち抜かれた馬は即死し、首や足などを射貫かれた馬は痛みに驚いてちくはぐな方向に走り始めた。

馬の突撃を回避した小ウアズマ人がほっと胸を撫で下ろすと同時に、馬の背後にいた剣歩兵が彼らの中に切り込んだ。さらに、サウルス軍の別働隊の側撃が再開される。

小ウアズマ人が自陣に入り込んできたサウルス兵を排除しようと躍起になっている間に、ギャロップ率いるカバルス騎兵隊が突撃を敢行。やや遅れて、全軍が速歩での前進を開始した。

「目標は……」ギャロップは一等混乱しているところを見極めて、

そこに突撃した。「敵左翼の中央よりの所だ。あそこの敵はすでに逃げ始めているぞ」

敵陣に入り込んだカバルス騎兵隊は長い槍と短い槍を使い分けながら敵を次々に刺殺した。

「突撃！ 突撃！」

混乱が拡大する小ウアズマ人の軍勢にアレックスの率いる部隊が突撃する。続いてジャクナたちも突撃。兵士たちは恐怖を紛らわせるために、わあわあ叫びながら敵陣に切り込んだ。

左翼が瓦解すると小ウアズマ人たちは自分たちの敗北を理解し、散り散りになって逃げ始めた。「逃げる者は放っておけ、我々はこのままゴライアに進撃する」とジャクナ王が、兵士たちを注意する。兵士たちは再び隊伍を組んで、それが完成するとサウルス軍はゴライアへの進撃を開始した。

平野からゴライアへはすでに平らに馴らされた道路が敷かれていた。これは、今は亡きリザドスが整備したものである。それを知っているジャクナ王やギャロップは、一步一步踏みしめながら道を歩いた。

ゴライアはその門を固く閉じていた。彼らにはすでに平野での決戦の意思はない。サウルス軍はこの都市を避けて通ることはできない。この都市を落とさずに通り過ぎれば、行く先の諸部族と戦っている時にゴライアの兵士たちに背撃される可能性が出てくるし、何よりも、食料をここで手に入れなければならぬ。サウルス軍は攻城戦を開始せねばならなかった。

兵士たちは木を切り倒しただけの破城槌を何本も作り、そのみで攻城戦を開始した。彼らはゴライアをぐるりと囲み、破城槌で城壁や門を何度も打ったが、敵からの反撃は少なかった。「王よ、あれを見てください」と兵士たちが空を指差しながら叫んだ。兵士たちの視線の先には、もくもくと立ち昇る煙があった。「あの馬鹿野郎ども、中の糧秣を焼いてやがるんだ」とジャクナ王が怒鳴ると、サウルス軍は焦ったように攻撃をさらに激しくして続けた。

瞬く間に城壁や城門を打ち壊すと、サウルス軍は雪崩を打つてゴライアの中に駆け込んだ。だが、最初に入った兵士は都市の中で膝をついて、ごうごうと燃え盛る街並みを見ながら放心していた。

ゴライアの都市は炎に包まれていた。特に火事の様子が酷かったのが、食料を集めておくための倉庫だった。ぱちぱちだか、ぴぴぴだか、とにかく、耳を澄ましてみれば、雨の降る音に似ているような音がそこら中から鳴っていた。兵士たちは、切り傷や火ぶくれの痛みも、熱さも、眩しさも全て忘れてただただ火炎を眺めていた。

雨は降らなかつた。だから、この炎に包まれた都市を鎮火することはできなかつた。その後、サウルス兵たちは都市の中に残る敵兵を探したが、ほとんど人はいなくなつた。都市の中に残っていた者たちはゴライアの糧秣を焼き尽くすために残されたりしかつた。彼らは皆、殺された。

サウルス軍は食料を手に入れることはできなかつた。

やがて、サウルス軍がゴライアを出発し始めたころになって、やっと雨が降り始めた。

気持ちの良い晴天の下、八十隻の船がサウルス国の港町ノドドンと小ウアズマ地方の港町モンモを行き来するための海路を渡航していた。行先はもちろんモンモであり、それらの船団を指揮するのはシャンティだつた。シャンティはその船団の中でも大きい方である五段櫂船に乗っていた。

櫂船というのはガレー船……つまり、櫂で漕いで進む船ということとで、この時代には五段櫂船から一段櫂船まであつた。一段櫂船は漕ぎ手を左右に普通に並べただけで、二段櫂船は上下二段に分けて並べた物。三段、四段、五段となるほどに漕ぎ手の数は増え、普通は二段以上の櫂船を使っていた。これらの違いは何か。まず、漕ぎ手の数が増えるほど、船に乗せることのできる物の量が増えるのは自明のことだ。同時に、漕ぎ手の数は増えるということは船が進むスピードも変わるといふことだ。二段櫂船と三段櫂船では三段櫂船

の方が早い、二段權船と五段權船では重さの関係から言っても必ずしも五段權船が一番早いとは言えない。

ついでに、漕ぎ手の数が増えるたびに、お金がかかるわけだから金持ちの商人ほど大きな船を使っていた。また、船の大きさはその商人の資産の多さの証明ともいえた。

さて、シャンティは小ウアズマ地方でリザドスが殺されたのを知るとすぐに王都センチュリオンを出発して港町ノドドンに向かった。そこで小ウアズマの兵士たちを帰還させるために船を集めた。サウルス軍が持つ軍船だけでは足りないことはわかっていたので、商人や、はたまた海賊から一時的に船を借りたりして集めることができたのが八十隻だった。内訳は五段式十隻、四段式十七隻、三段式三十三隻席、二段式二十隻であった。

シャンティは五段權船の上の小屋の中で椅子に座って、貧乏揺すりをしながら早く到着しないだろうか、と焦っていた。

「シェイバス、あとどれくらいで着くのだろうか？」

とシャンティが質問すると、隣で立っていたシェイバスは小屋から出て、二分後、答えを持って帰ってきた。

「シャンティ様、そろそろだそうですね。あと少しでモンモの港が見えるはずだ、と船長は言っていました。外に出ていますか？」

「そうですね」

シャンティは、居ても立ってもいられないように甲板へ走った。

二人は甲板に出た。船が大きく揺れているので、シャンティの海への落下を防ぐために近衛兵たちが彼の周りに集まった。

「シェイバス、船酔いの者はどれくらいいるだろうか？ 町に着いたらすぐに戦わねばならないかもしれないから把握しておきたいんだ」

「漕ぎ手はあまり船酔いをしていないようですが、近衛兵は半分ほどが船酔いをしています。とはいっても、軽い症状の者もいるので三百人中二百三十人は戦える状況となっています」

「漕ぎ手も半分は戦闘員として徴用できると考えると、この船だけでも三百八十か」シャンティはあごに手を当てて考え始めた。「五段櫂船は漕ぎ手が三百、戦闘員が三百……三段櫂船は百と百……でも、これらはモンモのサウルス兵たちを載せて帰るための船だから全部の船に戦闘員を積んでいるわけじゃない」

この八十の船団は一回につき、六千から八千ほどしか運ぶことはできない。だから、合計で五万のサウルス兵が小ウアズマにいたら、最低でもこの海路を七回は往復しなければならない。だが、今はそんなことはどうでもいい。

「今のところ考えなくちゃならないのは、モンモが占領されていた時のことだ」

と、シャンティが呟いた瞬間、周りの近衛兵たちが騒ぎ始めた。

「シャンティ様、モンモが見えました。港町にはすでに人が集まっています」近衛兵はぎりぎりのところまで行つて目を細め、集まっている人間たちが何者であるのかを確認しようとした。「わかりました！ あれは、サウルス兵です！ どうやらモンモは占領されていないようです」

「いや、小ウアズマ人が偽装しているのかもしれない」とシャンティが言つと、近衛兵ははつとした顔をした。「船は沖の方で止めさせて、小舟を出そう。相手が本当にサウルス人だと確認できてから港に入るんだ」

モンモにある程度近づいた船団はそこで漕ぐのをやめて、確認のための偵察兵を出した。シャンティたちは甲板の上から緊張の面持ちでモンモの町の人ばかりを見ていた。いくらか後、偵察に出した兵士が無事に帰ってきて、モンモにるのが正真正銘サウルス兵なのだ。シャンティに伝えると、船の上のサウルス兵たちは歓声を上げた。

「よし、すぐに船を港につけよう！」

シャンティが言つと、船団は一斉にモンモに向かって漕ぎ始めた。

本国に帰還するために西進を続けていたサウルス遠征軍はゴライアを抜けると、將軍たちの間で次にどちらに進路をとるかで議論が交わされるようになった。

その日の夜も略奪した村の中で一番大きな家を軍議室にして議論が交わされていた。彼らがとれる進路は、ほとんどまっすぐ西に行つてモンモに入り、そこから海路でサウルス国に帰るルートと、北西に行つて竜の鼻の穴を通つてサウルス国に帰るルートである。そのどちらのルートを通つてもおそらくランウータ族とは戦わねばならないので、どちらが危険かと聞かれたら決めようがなかった。

「だから」がたいの良い將軍が机を叩きながら怒鳴り声をあげる。

「モンモに行くルートでは、モンモが占領されていた際にどうにもできなくなつてしまつてはいないか。貴様ら聞いていたか？ モンモに向けて出した兵士も全く帰つてきていないのだぞ」

カバルス人の將軍が言い返す。

「それでもまだモンモが占領されたとは限らない。兵士は途中で捕まつたのかもしれない。大体、あなたが言うようなルートは……竜の鼻の穴を通るルートは誰でも考えられることのできるルートだから小ウアズマ人だつてそこに待ち構えているに決まっています」

「結局は」ジャクナ王が首を振りながら二人を制した。「両方とも、敵に待ち構えられている可能性が高いつてことだろう。それで？

絶対に戦わねばならないと考えたならば、どちらのルートを通つた方が得か……。ギャロップ將軍、どう思う？」

「ここでおれですか」とギャロップは馬乳を飲みながら言う。「もし、モンモが占領されているならば、攻城戦をせにやなりません。もし、竜の鼻の穴のルートを通るなら、攻城戦はないけれども会戦にはなるでしょうな」

「その二つならば、会戦の方がいい気がするが？」

とジャクナ王が訊くと、ギャロップは頷く。

「ええ、おれもそう思います。ですが、モンモには城壁がありますから、その分敵の手に落ちている可能性は低い」

「竜の鼻の穴を通るルートなら？」

「まず考えなければならぬのは、竜の鼻の穴が敵の手に落ちてい
る可能性ですが、これはほぼありえないでしょう。となると、敵と
は絶対的に平野やら道やらで戦うことになる」

「モンモ行きは、モンモが落とされてい
る可能性は低い
が、落とさ
れていたら攻城戦で苦勞をする。竜の鼻の穴行きは、必ず敵に待ち
構えられているが、会戦だから倒すのは容易い。……ということか
「大將軍」と、がたいの良いの將軍が言った。「モンモ行きなので
すが……もしモンモが占領されていなかったとしたら、小ウアズマ
人はモンモを落とすのを諦めて、私たちとの会戦を選ぶのではない
でしょうか。つまりは、モンモルートを選んでもし敵が港町を占領
していれば、攻城戦。占領していなければ会戦……最低限会戦以上
の戦いをせねばなりません。ならば、竜の鼻の穴を行くべきです」
「いいや、話はそう簡単じゃない」とジャクナ王がいう。「もし小
ウアズマ人がモンモルートにて会戦を望むならば、モンモからの背
撃を期待できるからな」
「でも」

とギャロップが言うと、ジャクナ王は言いたいことはわかってい
ると、言う風に頷く。

「ああ。トータルで見れば……運の要素を除外できるのは、絶対に
会戦と決まっている竜の鼻の穴ルートかもしれない」

それで、彼らの進むルートは決まった。現地点から北西に進路を
とり、竜の鼻の穴を目指すルートである。

季節はすでに夏になっていた。やけにじめじめする炎天下で三万
人に減った兵士たちは、剣を杖代わりにして歩く者も少なくはな
かった。剣を杖にすることで歩くことができるならば、それはまだい
い方だった。中には完全に歩くことができなくなった者もあり、そ
う言った者は馬車に乗せて運んだ。

馬車と言えば、ゴライアからの道のりは、すでに馴らされていた
り、石畳で舗装されていたりしたので馬車が通ることのできる道に

なっていた。サウルス兵たちは元気な者が率先して木を切り、加工して馬車を作った。とはいっても、その中に収容できる糧秣はなく、基本的には重い鎧や病人怪我人などを積み込んだ。

そうやってポロポロになりながら、彼らは三年かけて進んだ道を数か月で戻っていた。進む時、この道は鬱蒼とした森だったし、敵諸部族と戦って、その後も色々と交渉をせねばならなかったから、かなり時間がかかった。しかし、今回は道路の整備、一日の行軍速度などの影響もあってこの速さで戻ることができているのだ。

「そういえば、残っている馬は？」行軍中、徒歩のギャロップが隣を歩いているウイスカに質問した。ウイスカの禿げ頭が真夏の陽光を反射してギャロップの目を眩ませた。「うわ、なんだ、眩しっ。

おい、ウイスカ。禿げ頭に泥を塗っておいてくれんか」

「絶対に嫌ですな」とウイスカは布で禿げ頭をこすって、さらに光が反射しやすいように磨き上げる。「ええと、それで……馬のことですか？」

ウイスカは近くを歩いていた馬車に乗り込んで、中から書類を探し出し、それを見ながらギャロップの質問に答える。

「現在生きている馬は……」

「オスとメス……どっちの割合の方が多い？」

「オスです。馬乳のことですか？確かに、今度から馬を殺すときはそういうこともちゃんと考えてから処分せねばなりませんな」

「おそらく、ランウータでも食料の補給はないだろうからな。これから先、乳の出る馬は少し弱っているくらいでは殺さないように王に言っておこう。なんせ、そこら辺の草を食うだけで栄養のある乳を出してくれるんだからな。重宝せにやらんぞ、ただの馬をよ」二人が話していると、後方で叫び声が出た。

「奇襲か」とギャロップは呟くけれど、それをどうしようという意思はなかった。「おい、ウイスカ。被害を聞いてこい」

「はっ」

ウイスカが命令の通り、被害状況を探るために後方に下がる。

このような奇襲はしょっちゅう起こっている。敵は一人か二人という超少数での奇襲をかけてきて、矢でサウルス兵を攻撃する。その時に彼らが狙うのは、馬に乗っていたり、高価そうな鎧を着ていたり、はたまたがたいがよい男である。つまりは、彼らなりに上級の兵士を狙っているのだ。ギャロップたちが馬から降りているのは、馬を休ませる意図もあるし、その標的にならない意図もある。

ギャロップが馬乳を飲んでいると、後ろからウイスカが戻ってきて、ギャロップに被害状況を説明した。下級兵の一人が腕を射貫かれただけだった。

「なんで下級兵士なんかを狙ったんだ？」

とギャロップが訝りながら尋ねた。

「さあ？ この炎天下で鎧を着けていましたから……きっと、上級兵と勘違いされたのでしよう」

「あーあ。……ちよつと待てよ、それならウイスカ。やっぱりお前、頭に泥を塗らないか？ お前の頭が光を反射して、敵には兜を被っているように思われるかもしれないからな」

「將軍の白髪も光を反射していますが、將軍は髪の毛に泥を塗らないのでしょうか？」

「塗りませぬが？」

「なら私も塗りませぬが？」

「ぬが？」

「ぬがぬが？」

二人はしばしじつと見つめあつた後、溜息をついて空を見上げた。二人の顔には汗がいつぱい浮いていた。それは少し動いたびに流れ、あごから地面に流れ落ちる。ギャロップは馬乳を飲んで喉を潤す。近くにいた兵士はそれを見て、彼に馬乳を懇願した。

「なんだ、お前は水筒を持ってないのか？」とギャロップが訊くと、兵士は水筒を取り出して、逆さにして見せた。中からは何も出てこなかった。ギャロップは仕方なさそうに馬乳の入った皮袋を投げ渡した。「ついさっき、給水休憩を取っただろう。なんでその時に入

れておかなかった？」

「いえ、この前、川の水を飲んで下痢になった奴らがいたでしょう？　それが怖くて……奴らが川に毒を流しているということは考えられないでしょうか？」

「さあな。んでも、おれはあの時に水を飲んでも何ともならなかったぞ。ただ単にあいつらの腹が弱かっただけはないのか？」

「そうだといいんですがね」と言いながら兵士は皮袋を返した。「いやはや、ありがとうございます。これで何とかやっていけます」兵士が遠ざかって行くと、ギャロツプは腕を組み、考え事を始めた。

「まあ、川に毒を投げるのは常套手段だけだな」とギャロツプは呟く。

「でも、將軍はそんなときのために、いつも馬から水を飲ませているじゃないですか」

「そうだけだな……でも、今は馬が足りないからな。だからと言って、自分で飲んで毒で死んじまうんじゃあ笑い話にもならない」

「ではどのように？　まさか、兵士に試し飲みさせると？」

「まさか……元気な兵士をそんなことで失うわけにはいかん」ギャロツプは首を振る。「が、病気や怪我の兵士ならば」

「いけません、そんなことは！」

ウイスカが声を張り上げる。

「じゃあ、病人たちがそれを了承したら？　……いや、まあ、いい。

それよりも、小ウアズマ人を生かしておいて、そいつらに飲ませる方が合理的だ」

「……」

ウイスカは納得できなかった。けれど、確かに大將軍のいうことは軍人的には合理的だった。

このことは二日後の軍議で提案され、すぐに取り入れられた。サウルス軍は常に二、三人の小ウアズマ人捕虜を確保しておき、その者たちに毒味をさせた。この西進の間中それは続き、一度だけ下痢

になった小ウアズマ人はいたが、それ以外は何事も起きなかった。おそらく、その下痢も衰弱から来たものに過ぎないだろう。

死の行軍は続き、彼らはやっとのことでランウータ近辺にたどり着いた。彼らの予想ではこのあたりに敵兵が立ち並んでいるはずだったので、ジャクナ王は全軍を停止させて四方に偵察兵を送った。そのうちの二隊が西方すぐの所に小ウアズマ人の軍団がいることを掴んだ。

サウルス軍は石畳の道路で陣形を整え、隊伍を組んで槍衾を作りながら敵方に向かった。

シヨウジヨウ平野に着くと、遠くには都市ランウータが見えた。けれども、その前、おおよそ一キロの所にはランウータ兵がびっしりと立ち並んでいた。サウルス軍は道路の中で一旦停止する。「数はおおよそ一万五千」と兵士の一人がジャクナ王に伝えた。

「こっちの戦闘可能な兵の数は？」とジャクナ王が問うと、兵士は二万九千と答えた。「わかった、大將軍を呼んでくれ」
「はっ」

と兵士は返事をして前方に向かった。二分、両軍はにらみ合ったまま動かなかった。彼はギャロップを連れて王の所に戻ってきた。

「なんででしょうか？ いまさら作戦会議するのは、やや遅いように思いますが？」

とギャロップは首をかしげた。

「すまない、だが……どうだろうか？ 大將軍、この戦いで包囲戦はできないだろうか」

「包囲戦？ いったいなぜ？」ギャロップは顔をしかめた。「この状況では敵を殲滅することよりもまずは敵を追い払………ああ、なるほど。そういうことですか」

「わかつてくれたか？」とジャクナ王は微笑みを返す。「そうだ、この戦いで大量の敵を生け捕りにしてランウータを無血開城する。それで、奴らの命と引き換えに都市の中の糧秣を全て手に入れる」

「やってみる価値がありますね。ここは平野なので騎兵をうまく使

ええそれも可能でしょう」そこでギャロップは前の方を見た。そこ彼では敵陣の全貌を見渡すことはできないが、彼は頭の中で足りない部分を補い、シミュレーションを行う。「おれは騎兵七百を率いて右翼に回ります。カバルス人の將校に騎兵七百を預けて左翼に回らせてください」

「わかった。それでは、直ちに開始しよう」
「それでは」

ギャロップはお辞儀をしてから前方に向かった。ギャロップは自分の軍団に帰り、ウイスカに今回の作戦のことを伝えた。

「包囲戦ですか」とウイスカも驚きながら返した。「ギャンブルですな」

前にも書いたが、包囲戦は勝ったときは大きな戦果を得ることができるが、負けたときは大きな損失を被ることになる。

「だが、やってみる価値はある。ふん、奴ら相手の会戦ならば、おれは万が一にも負ける気はしないがな」

ギャロップは愛馬に乗り上げて、近くの者に今回の作戦の趣旨を説明した。兵士たちは今回の作戦が成功すると自分たちの糧秣が手に入ることを知って、思わず歓声を漏らした。

作戦が全軍に伝わるとサウルス軍は道路の中から出て、横に長く陣を敷いた。左翼はカバルス騎兵が中心に組まれており、中央はジヤクナ王とアレックスがおり、右翼はギャロップが指揮を執った。

ぶあつい雲に太陽が遮られていく。徐々に広がっていく影が戦場を覆いつくと同時に戦いが始まった。

両軍はじりじり間合いを詰め始めた。ある程度まで近づくと小ウアズマ人の弓兵はきりきりと弓を引き絞り始めた。サウルス軍がそれに対応するために馬を降りたり、盾を構えたりする。その時だった。

「將軍、我らが背後に敵兵が現れました！」

後ろからその言葉が聞こえると共に、自陣の後方が騒がしくなり始めた。ギャロップは驚きながら後ろを振り向く。すると今度は横

のウイスカが「將軍、前から矢が来ます」と注意した。

「糞が！」ギャロップが激怒する。「ウイスカ、お前は後方に言って指揮を執り、敵兵の背撃班を蹴散らせ。おれはこのまま前線の指揮を執る」

「了解しました」

ウイスカは馬を操って、踵きびすをめぐらせた。後方の混乱はさらに広がり、兵士たちはぎゃあぎゃあ言って右往左往している。

それでもギャロップは眉間にしわを寄せながら、前方を見つめていた。前からはどんどん矢が飛んでくる。矢が降り続く間は騎兵を進ませることができない。ギャロップは近くの兵士に、他の軍団の情報を集めるように命令した。兵士は震えながらも頷き、盾を被ったまま中央・左翼側に走って行った。

一瞬矢の雨が止んだ。ギャロップたちは盾から顔を出して、そろそろ敵陣を見た。小ウアズマ人たちの陣営にはいつの間にか何台もの投石機カタパルトが用意されており、発射台にはすでに石が乗せられていた。

「おいおい」ギャロップは背筋がひやりとするのを感じながら兵士たちに向けて叫んだ。「敵はカタパルトを撃ってくるぞ。密集するな、標的にされる」

彼が言い終わる前に石は発射された。投げられた石はひゅつと音を立てながら空に舞い上がる。ギャロップはこの軌道では自分の所には降らないかと考えながら、馬を盾替わりにして次の策を考えていた。

派手に動けば矢の餌食、固まってじりじり進めばカタパルトの餌食……が、このままカタパルトの石弾が尽きるのを待っているわけにもいかない。ならば、やはり少々強引であろうと突撃をせねばならないか？

「將軍、大將軍」次々に矢玉が落ちてくる戦場を駆けながら、さつき情報収集に出した兵士が返ってきた。「中央はそれほど被害を受けていませんが、どうにかしろ、と將軍の攻撃を催促しています。」

左翼は最初の矢の攻撃で甚大なダメージを受けたようで……」

「両翼包囲は無理そうか？」

「おそらく無理だと思います。包囲はできるかもしれませんが、たとえ包囲が完成しても左翼は簡単に破られるでしょう」

「わかった」ギャロップは歯噛みしながら敵陣を見た。そして、突撃する決心をつける。「お前は、右翼の兵士たちに突撃準備を整えるように言え」ギャロップがそう命令すると、自陣後方からまたしても叫び声が上がった。

「敵襲、敵襲！」それは分かっている、とギャロップは後方を見る。だがしかし、そこにはギャロップが想像していたよりもさらに多くの小ウアズマ人がいた。ギャロップはあることを考える。「まさか……とは思うが、逆に包囲されているんじゃないか」

ギャロップの予想は当たっていた。ランウータ軍には平野に並ぶ大軍団以外にも別働隊がいて、彼らは小ウアズマの鬱蒼とした森の中に隠れていた。その後、戦闘が始まりサウルス軍の情報収集能力が激減すると同時に森を通り大きく迂回して敵後方に忍び寄ったのだ。

そういうわけで、サウルス軍はいつの間にか三万の小ウアズマ人によってすっぽりと囲まれていた。ランウータ兵は包囲が完成するとむやみやたらに矢玉を打つことは止め、槍と盾を手にとって徐々にサウルス兵を追い詰め、身動きが取れないようにし始めた。

「將軍、どうしますか？」と後方に行っていたウイスカが彼の所に戻ってきた。「王の退却を開始するのですか？ それとも、このまま全軍での突破を？ それともそれとも、敵を殲滅する策が？」

「敵兵力の殲滅などできるわけがねえ」ギャロップは時々飛んでくる矢にびくつとしながら、ウイスカに返した。兵士たちが中心に向かって少しずつ後ずさりしている。中心にいるジャクナ王の所はぎゅうぎゅう詰めだろうな、と思いつながらギャロップは敵陣を見渡していた。「ならば突破して逃げるしかねえ。おい、敵陣の兵力が薄い所を探せ。そこから突破を講ずる」

二人は自分たちの所から見える敵陣を隈なく見渡し、何度も見返した。けれども、どう控えめに見ても、敵陣に突破できそうな所はなかった。どこもかしこも、目をきらきら光らせたランウータ兵が何重にも敷き詰められ、それは二人にしたら、一つの生きた大きな壁の様に見えていた。

「あの堅固さ、騎兵の突撃力だけではどうにもならんだろう。できれば矢を集中的に浴びせかけ、少しでも怯ませておいてから突撃を開始したいが……こっちは」ギャロップは自陣を見た。「どいつもこいつも、てんでバラバラ。そんなことはできやしない」

「ですが、このままではやられます。黙ってじっとしているわけにはいきません。とにかく、やれることをやりましょう」ウイスカが言い、近くの兵士にジャクナ王の所に行くように命令した。「まずは王を逃がさなければならぬ。この由を王に伝えてきれくれ」

命令された若い兵士は、ほぼ円陣になったサウルス軍の中央にいるジャクナ王の所に向かった。

トン・ガチャ・トン・ガチャ・トン・ガチャ・トン・ガチャ……。ランウータ兵が一定のリズムを刻みながら、サウルス兵を追い詰める。数年前まで集団戦闘の妙をほとんど知らなかったような彼らは、今になって驚くほど精巧な歩兵团を作り上げていた。いつの間にか、これほどになるまでに兵士たちを鍛え上げていたのか……とギャロップは感嘆した。感嘆している間にもサウルス兵たちは刺殺されていく。

矢もよく狙いを定めて撃たれていた。と言っても、今のサウルス軍の状況は、敵からしてみればどこに撃っても必ず当たるようなものだが。

やがてジャクナ王が数人の近衛兵を連れて、ギャロップのところに来てきた。彼は青白い顔で、息を切らしながらギャロップを見ている。彼の顔はこの世の終わりの日のそれだった。

「王、これはあんたが包囲作戦をしようと言ったから、こうなったわけじゃない」とギャロップは彼の心情を読む。「実力の上での敗

北でもない。ふん、悔しいが………糞、慢心というやつだな。もつとちゃんと土地や敵を調べ上げていれば、こんなことにはならなかった」

「それで」ジャクナ王はやや血の気を取り戻した顔で、しかし困窮を表す顔で訊いた。「策はあるのか？」

「絶対に成功する策ではないですよ。しかも、大きな危険も伴う。

これはどう考えても割に合わない賭けだ。ですがね、ここでこの賭けをしないと今までのすべてはパーだ」ギャロップがそう言うところ、ジャクナ王は素直に頷く。「まずは歩兵たちをある所にぶつける。そうすると、敵兵はそいつらを逃がさないように、その場所に兵士を集める。兵を集めるということは、ほかの部分の兵が削られるということだ。おれたちはそこを突く」

「ははは、なるほど………ちょっと聞いても、確かに成功の確率は低そうだな」

ジャクナ王が思わず笑った。

「現状、統率力が及ぶのはおおよそ、將軍格の近辺の兵のみ。だから、全軍で一斉に矢で攻撃して敵を怯ませるなんてことはできない。少数の兵力の組み合わせで敵を突破しようとしたら、こんな感じの作戦しか思いつかない」

「では、統率力の及んでいない範囲の兵士たちは？」

「わかりませんが、王が逃げ始めたのを見たなら、そいつについていくでしょう？ まあ、良い捨て肝というところですかな」

「……」

ジャクナ王は険しい顔をした。

「不満ですかな？」

「いや……それしかないのだろう？ ならばそれをするさ。おれはこんな所で死にたくはないからな」

ギャロップが頷くと、ジャクナ王は彼の胸に自分の拳をトンとつけて「頼んだぞ」と言った。それから彼は少数の近衛兵と共に自分の指揮する軍団の方に帰って行った。

「あーあ。これで……この成り行き上、敵を一か所に集中させる役目はおれらになつたわけだな」ギャロップは頭を抱えながら言う。言つて、騎馬に乗り上げる。「ウイスカ、おれの軍団に下知しろ。おれたちはこれから突破を試みるために敵陣に突撃すると」

「了解しました」

ウイスカは軍団の中を走りだした。とにかく多くの者に今回の作戦を伝えて、一人でも多くの兵士を集めなければならない。突撃する兵が多いほど、敵兵は突破されるという危機感を増幅させて、そのぶん一か所に兵を集中するようになるからだ。

一分で準備を完了させるとギャロップは槍を掲げ注目を集めた。

その際にも矢が煩わしい蠅のようにあたりを飛び回る。

「今からおれたちは突破を試みる。突撃する先はこの槍の指し示す先だ。敵を突破した後はそのまままっすぐに逃げる。敵の追手が見えなくなつたら、空をよく見て西へ進め。海岸線沿いに出たら、それに沿いながら北に進み竜の鼻の穴に辿り着けば無事生還となる」ギャロップは周りに集まつて兵士たちを見た。彼らは未だとして生きる希望失つてはいない。「よし、それでは」とギャロップが槍で敵陣を指し示す。兵士たちは身構えながら一斉にそちらを向いた。

「突撃！」

兵士たちは雄叫びをあげながら反撃に出る。その多くは、足も重く、肩ももう上がらない。彼らは脇を締めて、剣を、槍の様に腰の高さで構えながら駆けていく。おおおおお、と嘶いひなく彼らの声は、人としての性を忘れ、完全に獣と化しているかのようだった。ランウータ人は心の中でそれを嘲笑して、隊伍を組み、盾と槍を固く構えた。

ギャロップ隊の先頭を走っていた兵士たちは槍に突き刺さつて死ぬ。しかし、次から次にサウルス兵は押し寄せきて、槍は何人もサウルス兵を突き刺して使い物にならなくなった。目の前で戦友が簡単に死んでいるというのに、彼らは物怖じしてないかのように突撃を繰り返した。一人が敵の盾の壁に乗り上げ、敵陣に切り込ん

だら、ほかの者たちもそれに倣って敵陣に飛び込む。

ランウータ兵もこれではまずいと判断して、ギャロップたちが突撃した場所に兵を集中し始めた。それを後ろから見えていたジャクナ王たちはすぐに薄くなつたところへの突撃を開始する。ギャロップ隊の方へ移動途中だったランウータ兵は敵の意図に気が付いたが、対応に間に合わなかった。

ジャクナ王やアレックスの率いる軍団は敵陣を突破すると近くの道路に向かって走っていった。対して、中に残されたギャロップたちや、指揮者のいなかった歩兵たちはランウータ軍の中に取り残された。

敵兵はほんの少しだけ兵を割いて、逃げたサウルス軍に向けて出発させると、あとの大多数はギャロップ隊を滅殺するために包囲を狭め始めた。その時、敵兵のだれかがあることに気が付いた。

「ランウータが燃えている！」

と小ウアズマ語で叫ぶ声が聞こえた。ギャロップたちは彼らの言っていることはわからなかったが、敵兵がこちらへの攻撃をやめ、一斉にランウータの方を見始めたのに違和感を抱いた。ギャロップは息を切らしながらランウータの方を見た。

ランウータからは火の手が上がっていた。煙がどんとどんと空中に上っていき、炎の熱気が空の模様をゆらゆらと歪めている。

「どういうことだ？」「わからない」「勘違いしたのか？」「わからないってば」と敵陣はにわかに慌て始める。いつの間にか、戦場は完全に鎮静化している。それからしばらく、状況を把握するため、敵兵はざわざわとしていたが、急に静まり返った。ギャロップは空を見上げながら、耳を澄ましていた。

彼らの耳には地鳴りのような音が聞こえていた。それは足音だった。幾百もの騎兵、幾千もの歩兵の足音。

「どこからくる？」とギャロップは誰に問うでもなく呟いた。何が近づいてくるのかわかったのか、どうなのか、とにかく彼の顔は笑みで満ちていた。「ふん、何となく……おれはこの状況を知ってい

る気がする」

「ははは、私もです」といつの間にかギャロップの近くまで来ていたウイス力が言った。彼は耳からだらだらと血を流し、よく見れば手の指も二本ほど失っていた。けれど、彼の顔も笑みで満ちている。「私は、まさにこれとほとんど同じ状況を経験しました」

「おれは、違うな……おれは」ギャロップは懐かしさに押し潰されそうになった。「あの時、おれは助ける方だった」

次の瞬間、敵兵が爆発のような叫び声をあげると共に、シャンティたちの軍勢が現れた。一万ほどの軍勢の中、先頭を走っていたシャンティと彼の乗る愛馬ルルディファイロは、その多くの兵士たちの中には埋もれず、ことさら輝いて見えた。

意気高らかな彼らはギャロップたちを包囲するランウータ兵に突撃を繰り返し、敵の円陣を数個の少集団に分解すると、次はそれらを各個撃破し始めた。各個撃破の際には敵円陣内に取り残された兵士たちもシャンティたちの軍団に入り込んで隊伍を組み、さっきまで自分たちを攻めていた敵兵を駆逐した。

敵兵全てが死ぬか逃げるか、それとも降伏するかした後になつて逃げたジャクナ王の軍団が戦場に戻ってきた。シャンティは一角獣ユニコーンの面甲シヤフロンを付けた愛馬ルルディファイロから降りてジャクナ王を出迎える。ジャクナ王も馬から降りて、涙と鼻水を流しながら久しぶりに見る弟を力いっぱい抱きしめた。

抱擁が終わるとシャンティは、ゆっくりとギャロップの方に近づいて「思ったより元気そうだ」と言った。ギャロップは、ぷつと吹き出した後、大きく息を吸い込んで大笑いをし始めた。

「ははは。だがな、それ以上調子に乗るなよ、シャンティ」ギャロップは愉快そうにそう言った。「今回のおれのように痛い目を見ることになるからな」

「ふむ、どんなことがあったのかは後で聞くことにしよう」シャンティは言いながら隣にいる近衛隊長のシェイバスを見た。シェイバスは自分の父親と睨み合っていた。「シェイバス、まあ、親子の感

動の再会は後にとつておいてくれないか。それよりも、みんなに物資を配ってくれ」

「いえ……ははは。はい」

シエイバスは馬に乗って後方に走って行った。

やがて、彼は物資を積んだ輸送部隊を引き連れてきて、それを余すことなく兵士たちに配った。兵士たちは久しぶりに栄養価が高く、なおかつ旨い物を腹いっぱい食べて満足そうに腹をさすっていた。援軍の兵士たちは近辺をパトロールして、彼らの食事が終わるのを待っている。

「シャンティ」ウサギの丸焼きを立ち食いしながら、ジャクナ王がシャンティに質問した。「お前が来たということは……その、サウルス国は？」

「ああ……いえ、さすがにジャーニには任せていませんよ」

シャンティは困ったような顔をしながら言った。

「いや……それならいいのだが」とジャクナ王は不安そうな顔を作る。が、すぐに晴れやかな顔になって、小ウアズマに来た方法を聞いた。「何で来たんだ？ 馬で竜の鼻の穴を通って？ それとも船か？」

「船です。モンモは落とされていませんでした。だから、兄上たちをこれからモンモにお連れいたします。そこから船に乗ってサウルス国に戻って頂くつもりですが、船の都合上から全軍をいっぺんに運ぶのは無理です。モンモまで八十隻でやってきて、モンモに来ても数隻ほど手に入れたのですが、一度に運べる量はおそらく八千前後」シャンティは飯をバクバク食べている兵士たちを見渡す。サウルス兵の数は彼の思っていた数よりも、ずっと少ない。「ここにいる兵士、モンモに駐屯している兵士……小ウアズマにいる兵士の合計数を三万五千ほどとすると……全軍を退却させるのに四回は往復しなければなりません。ああ、もちろん、兄上は最初の船で早急に本国に復帰していただき、王都に向かってもらわねばなりません」

「わかった」ジャクナ王は微笑みを弟に返す。「お前はとうせ残るんだろう？ でも、二回目、三回目の船で帰ってくるのだぞ。必ずだぞ」

「ええ、わかっています」

シャンティは屈託のない笑みを返した。

37. いつかのお返し (後書き)

あとがきで書くことは特にはないです。

ああ、いや、33話に絵を追加。よくわからん服を着たギャロプン。ネットにあげられてた写真を参考に。

> i34002—4057<

「兄上、次は王都で会いましょう、それでは！ お元気でー！」

シャンティは港から離れていく五段櫂船に乗っているジャクナ王に手を振りながら叫んだ。彼以外にも、多くの兵士たちが王や戦友たちに向かって手を振っている。

第一回の船団で帰るのは、主に位の高い者と怪我や病気の重い者である。小ウアズマ地方にいたサウルス軍は三万八千人ほどだったので、これで残りは三万人ということになる。

船団が見えなくなると兵士たちはぞろぞろと散らばり始めた。サウルス兵士たちには港町モンモを守る役目があったが、今のところ敵部族の動きがないので、市城壁の守りもそれほど多くなくてもよく、兵士たちはこの時間を休養にあてていた。

シャンティやギャロップ、シエイバス、ウイスカも十数人の近衛兵たちと共に港町を後にした。

「おい、シャンティ」とギャロップが頭の所で手を組みながら尋ねる。「やつぱり、モンモは壊すのか？」

「君もいきなりだね。少しは戦争のことを考えるのをやめて、頭を休ませたらどうなんだい。でも、まあ……そうなるだろうね」シャンティは頷く。「このままモンモを残しておくことは、小ウアズマ人にサウルス攻めの方法を与えるのと同じことだからね。だから、徹底的にこの町は壊さなきゃならない。修復不可能なぐらいにね」

「この町を壊すんなら結構な人数がいるぜ」ギャロップはモンモの街並みを見る。モンモはサウルス国の建築技術の粋を集めたような町だ。数階建ての建物もあるし、港も丈夫に作られている。城壁だつてそうだ。「それに時間も……さらに、この町を壊すために残る者は、おそらく船では帰れない」

「港を壊さなきゃならないしねえ」シャンティがげんなりしたように言った。「外に敵がいるだろうから、町を壊し始めたら船は近づけない。船ごと乗員がやられる可能性があるから」

「じゃあ、どうするんですか？」とシェイバスが訊く。「いえ……シャンティ様のやろつとすることはおれにもわかりませんが……」

ウイスカが言う。

「問題はモンモを破壊するために残った兵の陸路での帰還ですな」

「うん、そうだね。それでだけどね、ギャロツプは当然残るとして……」

「勝手に決めるなよ」

ギャロツプが彼の言葉を遮りながら言う。

「それに、残念なことに近衛兵団にも残ってもらつ」シャンティが言うつと、シェイバスや近衛兵団は嫌がる様子もなく、うんと頷いた。「それと……」

「一万は必要だぜ」ギャロツプが言った。「モンモを破壊して陸路で逃げるということは、モンモの外の小ウアズマ人たちを蹴散らしていくということだ。で、逃げながら竜の鼻の穴に辿り着く。これならば、一万でも少ないくらいだけど……二万、三万になると逃げのには不利になる」

「そうだね。食料のことなんかも考えると、三万は少しきつい。じゃあ、戦力差をどうすればいいか……簡単な話、精鋭を集めて軍団を作るしかない」

「さらに、ここからモンモへは道路が開通しているから、基本的には騎兵が良い」

ギャロツプがそういうつと、シェイバスが疑問を呈した。

「だが、道路にはすでに小ウアズマ人たちが待ち構えているんじゃないか？」

「それを瞬間的に撃滅して、逃げ去るために騎兵がいるんだ」

シャンティが補足する。

「シェイバス。それに一万人を連れていけば、森の中にいようが道

路にいようが簡単に見つかってしまつんだ。だから、どこを通ろうが敵兵には待ち伏せを食らうと考えていた方がいい」

「問題は精鋭をどうやって集めるかだ」ギャロップが腕を組みながら言った。「近衛兵団は全員連れてきているのか？」

「うん、いくつかの船に分けてね」シャンティが答える。「これで五百。カバルス騎兵は？」

「精鋭で……なおかつ元気なのは千五百くらいだろう。これで二千。それと、できるならばビッグフトス隊を呼びたい」

「そうか、本国から元気な人たちを呼ぶというのも良い案だね。でも、小ウアズマで戦いなれた人間の力に重要だし……ビッグフトス殿の隊は自警軍だから徴用できない」

「ま、そう来るだろうとは思ってたけどな。でも、（自分で言うのもなんだが）確かにサウルスから兵士を呼ぶのはありだ。次の船でジャクナ王に援護のための国軍を早急に作ってよこす様に言ってくれ。もちろん、その中にはビッグフトス隊もいれてもらわなければならない」

「そういうことか。オーケー」

それから彼らは市城壁の警備状況の確認をし、各自、適当な宿をとってその日を終えた。シャンティたちは次の日からはこまごました事務処理などをしながら日々を過ごした。市城壁の外には少しずつ小ウアズマ人たちが集まってきていた。彼らはこの港町を無傷で開放するなら、逃げるサウルス軍を攻めることはしないと説得してきた。

「つまり、ここにいる大量のサウルス兵を丸々逃がしてもいいくらい、この港は彼らにとって重要だということだね」

シャンティは市城壁から小ウアズマ人たちを見下ろしながら呟いた。

そうこうしているうちに船団がモンモに帰ってきて、二回目の帰還が始まった。これでまた八千の兵士が帰還した。残りは二万二千。その船団が持っていたジャクナ王からの手紙によると、彼はノドド

ンに帰ってすぐに王都へ出発したのだそうだ。それほどジャーニの王都乗っ取りが恐ろしかったのだろう。

シャンティたちは帰還する上級兵に王への手紙を渡す。彼はそれをジャクナ王のもとに送り届け、四回目に帰還用の船団がやってきた時、ジャクナ王は約束通りビッグフトス隊と二千の兵士を送ってきた。

少し話を戻して……。

二回目と三回目の間に小ウアズマ人たちの市城壁への攻撃が始まった。彼らはカタパルトを使って何度も攻撃してきたが、カタパルトの威力が弱かったせいではほとんど損害はなかった。

市城壁の上でギャロップは言った。

「相手のカタパルトは、多分おれたちのカタパルトを研究して作ったものだろう」

シャンティは頭を掻きながらため息を吐いた。

「厄介なことを……じきに彼らのはあのカタパルトを改良し始めるだろうさ。それが、ぼくたちの退却の後ならばいいんだけど」

帰還用船団が三回目の帰還を開始した後、小ウアズマ人たちの攻撃は収まり始めた。飽きたのだ、と言うのがサウルス軍の考えであった（それは正解である）。小ウアズマ人たちはそんなに攻城戦には慣れていないようだった。それでもシャンティは念を入れて市城壁の警備を増員させた。

さて、四回目の帰還用船団が来るまでの間にシャンティたちはモンモの港町の解体を始める。まずは民家を壊し、次に造船ドックを壊し、船の設計図を焼いた。と言っても、シャンティは興味深そうにそれを日記に写しており、図面は残っている。

四回目の帰還用船団がビッグフトス百人隊と二千の兵隊を連れてやってくると、兵士たちは最後の乗船を開始した。シャンティたちはそれらを見送ると、今度は港を破壊し始めた。この頃には小ウアズマ人の攻城戦熱が再燃して激しい攻撃を市城壁に加えていた。

あらかたモンモの町を破壊し終わったシャンティたちはしばしの

休息をとった。後は小ウアズマ人体が市城壁をボロボロにして破壊するのを待つだけである。

夜になると彼らは荒廃しきった町の中で薪を焚いて食事をとった。「シャンティ様、リュキウス様は王都でもちゃんと鍛錬に励んでいますかね？」と老戦士ビッグフトスは牛乳を飲みながらシャンティに訊いた。「リュキウス様はああ見えて才あるお方です。ちゃんとした鍛錬を積みめばサウルス国一の剣豪となることも不可能ではありませんからな」

「もちろんですよ！」本当は読書と馬術にはまっているけれども……。こう言わないと、リュキウスがかわいそうなことになるからなあ。「リュキウスは毎日二千回素振りしています」

「なに、二千回ですとな？ ははは、二千回……やや少ないんじゃないでしょうか」ビッグフトスが不満そうに言うのを聞いて、シャンティは心の中で、すまん、リュキウスよ！ と叫んだ。「ご子息ももうすぐ八歳。八歳と言えば四千回は素振りできるはずですよ」

「王子、爺さんは年齢かける八百回の素振りを弟子に課しますんでね」とフトスがにやにや笑う。「そういえば、將軍の息子は何歳なんで？」

「え？ ……」ギャロップはシャンティの方を向く。シャンティは顔をしかめながら八歳だと言った。「ああ、八歳らしい」

「らしい、って……あんたやっぱり最低だな」

「カバルス人の親はみんなこんなもんなんだよ。そんで、シャンティ……」ギャロップは少し頬を赤らめながら尋ねた。「あいつの調子はどうなんだ？」

「マスタングのことかい？ マスタングはねえ……驚くほど君に似てきているよ。最近カバルス人エクリプスの息子、コルトと仲がいいよ。ははは、毎日二人してリュキウスをからかって遊んでいるよ」

「シャンティ様、笑っていいんですか？」

とシェイバスが突っ込む。

食事が終わると彼らは分かれて各々の任された配置についた。シヤンティとギャロップは警備を怠っている者はいないかと市城壁を歩いて回った。その一環で城壁の上に登り、上から町の外にある小ウアズマの森を見下ろした。

「何かいるかい？」

とシヤンティが訊くと、ギャロップは首を振った。

「エムノンじゃねえんだから、こんなに暗くちや何も見えんさ」

「エムノンと言えば……ここ最近、モーキリニアの様子がすごいことになってるよ。イムサ国の將軍ネオツトスがモーキリニアを統一しかけているんだ。それで、兄上が王都に帰ったのだから、ぼくはまた北に行くことになるだろう。そうしたら統一されたモーキリニアとまた一戦交えるかもしれない。だから、君。手を貸してくれないかい？」

「……まあ、ネオツトスという奴には聞き覚えがないが……あのモーキリニア人とまた戦えるのは、面白いかもしれない」ギャロップは夜天を見ながら微笑んだ。「でも、そういうことはジャクナ王が決めることだろう？」

「小ウアズマの遠征が失敗してしまっただ。この先そう容易く再遠征には踏み出せない。だったら君は二トになるんじゃないのか？ それとも最初のように、血税を使って離宮内を散歩するだけの毎日に戻るのかい？ なに、心配することはない。君がキャンプトケフアレに来るといふなら、ぼくが兄上にそれを頼むさ」

「生きて帰れば、それもいいぜ」

ギャロップの頭の中には、すでに次の作戦が考えられ始めていた。

「よし、決まりだね」

「だから、生きて帰れたらだぜ？」

「生きて帰れるさ。君は亡国の幻将であつた男で、今はこのサウルス国の大將軍である男なのだから」シヤンティは白い歯を見せて笑った。「そう、生きて帰れるさ。君が慢心しなければね」

「それなら大丈夫だ」ギャロップは視線を空から森に移して、力強

く呟いた。「おれにはもう慢心なんぞない」

港町モンモの市城壁が破壊されると小ウアズマ人たちは一斉に町の中に駆け込んだ。彼らは無残にも破壊されつくしたモンモを見て驚愕した。

「前に見たときはあんなに栄えていたのに……」

と小ウアズマ人の男ががっくりしながらあたりを見渡す。

「おれたちの町を……あいつらは絶対に許せねえ！ あいつらを見つげ次第に殺せ！」

ひよろつとした男が言った。それに呼応して町の中に入った一人の小ウアズマ人たちは罵声を上げる。

その声を市城壁の外から聞いていたのが、シャンティとギャロツプ率いる陸路帰還軍であった。彼らは市城壁の門が破壊されると同時に、あらかじめ作っておいた抜け道からモンモの町を脱出したのだ。

「あいつら……モンモは基本的におれたちが作った町だってことを忘れてるんじゃないかねえのか？」

と元々大工をしていた兵士が呆れながら言った。

「おい」隣にいた兵士が彼の肩を叩く。「敵は大体が町の中に入ったから、もう行くつてよ」

「おう、わかった」

元大工は立ち上がって歩き出す。

彼らのとつた作戦は、市城壁の外にいた小ウアズマ人たち三万人を自分たちの思う通りの所に集めるために、ある城門をわざと壊しやすいようにしておき、そこから大量の小ウアズマ人たちが町の中に侵入し、相対的に外にいる見回りの小ウアズマ人が少なくなるとそれを見計らって退却を開始する……と言っものだった。

作戦はここまでは成功していた。シャンティたちは馬を走らせて道路に急いだ。途中に出会った小ウアズマ人歩哨は、自分たちの情報を持って帰らせないために全て殲滅する。

道路に出ると歩兵を騎兵の馬に二人乗りの恰好で乗せた。馬の体力を大きく削ることになるが、それも仕方なかった。とにかく、まずは小ウアズマ人の集まっている港町モンモから大きく離れなければならぬ。シャンティたちは石畳の道路が壊されていないかっただのに感謝しながら北に向かつて走った。

その日は夜通し走り、次の日の昼になってから初めて休憩を取った。休憩を取った理由は、滑稽であるが、シャンティの愛馬ルルデイファイロが動かなくなったからであった。

「いえ、ですが、ルルデイファイロのフラインプレーかもしれないぞ」とウイスカは言った。「シャンティ様、見てください。兵士たちはもうへとへとです」

シャンティも、自分がもう手綱も握れないくらい疲れ切っているのを感じながら、兵士たちを見渡した。彼らは皆、息を切らしながら地べたに倒れ込んでいる。馬だって、だらりと横になったまま近くの草を啄んでいた。

「でも、ウイスカ。休憩は点呼を取ってからだよ」とシャンティが言うと、ウイスカはすぐに点呼をとる準備を始めた。兵士たちを並ばせて点呼させると、ちょうど一万人だった。「よし、欠けた者はいないな。みんな、休憩を取ってくれ」

ウイスカが言うと、兵士たちはまた地べたに倒れ込んだ。

「王子」とフートスが倒れ込んでいる兵士たちを踏みながらシャンティの所にやってくる。ビッグフトスは兵士たちを軽やかによけながら寄ってくる。「ビッグフトスたちは後ろに乗ってただけだから、まだ動けません。おれたちに何か仕事をくれませんかね」

「ならば、警備を頼みたい」シャンティは森の中を伺いながら言った。「戦闘意思のある小ウアズマ人がいたら殲滅だ。一人も残さず……ね。でも、敵が大人数だったり、戦闘意思がなかったりしたら絶対に傷つけてはならない」

「戦闘意思というのはどうやって見分けるんで？」

とフートスは意地悪な笑みを浮かべながら訊いた。

「武器や防具を持っていない者、女、子供、老人」

シャンティが言うと、フートスは納得のいかなさそうな顔をする。「ですが、もし、おれたちのことをそいつらに見られたら？ 見つかったら、おれたち一人の命が失われることになりませぬ」「一万人が見つからないなんてことはない。絶対にいつかは見つかるんだ。それが早まるだけさ」

シャンティはあっけらかんと言った。フートスは当然、まだ納得していない。

「ですが、発見時期が早まるほどにおれたちの損害は……」

「フートス」ビッグフトスが彼の言葉を遮るように言った。「お前も偉くなつたもんだな。主君にご教授とは……」

「……」爺さん、しかしこれは大事なことなんだぜ、とフートスは苦笑しながら思った。「わかつたよ、王子の言う通りにしよう。必要以上には殺さない。たとえ、相手を生かしたことで、おれたちが死ぬことになつてもだ」

「わかつてくれたか。ありがとう」

シャンティはことさら晴れやかな笑みフートスに返した。フートスは彼の笑顔を見て、毒気を抜かれたような気になつて、困つたように頭を掻いた。

「それでは行つてきます」ビッグフトスは孫の服を引つ張りながら自分の隊の所へ歩いていく。「おい、ビッグフトス隊。わしらはこれから警備に向かう。ほら、シャキツとせんかい」

ビッグフトスたちはその声を聴いて、ゆらゆらと立ち上がる。騎馬兵の後ろについていただけとはいっても、さすがの彼らもへとへとのもようだった。ほかの兵士たちは何となく、彼らに向かって「おお」と感嘆の声を出しながら、拍手を送る。

その後、シャンティたちは騎兵の後ろについているだけだった歩兵隊を集め、彼らに食料を配るように頼んだ。食料は、二人乗りに使用しない騎馬の後ろに全員分を積んであった。歩兵たちは言われたとおりになんか配って行く。火は煙が立つせいで使えないので、

固パン、干し肉、ドライフルーツ、チーズなどの簡易的な食事しかできない。

食事をとり終わると、シャンティたちは日が暮れるまで休息することを命じた。兵士たちは森の茂みの中に入り、木に寄りかかって眠りについた。

数時間後、空がオレンジ色に染まり始めたころになって、彼らは出発の準備を始めた。シャンティたちは晩の分の食事を配って、兵士たちはそれを食べながら馬の具合を確かめたり、行く先に何もいないか調べたり、と言う風に準備を進める。

日が完全に落ち、空が燦然^{さんぜん}たる星空に変わった頃、シャンティたちは休憩地点を出発した。道路に沿って進むなか、昼間は警備を担当していた歩兵たちは前の騎兵の体に抱きついて器用に眠った。

「後方の歩兵は二、三回適当に矢を放つたら騎乗して逃げろ！」

ギャロップが叫ぶと、兵士たちは命令通りに矢を放った。それでも敵の猛烈な勢いは止まらないので彼らは慌てながら馬に飛び乗った。騎兵はすぐさま馬の腹を蹴って逃げ始める。

頃合いは夕方だった。小ウアズマ人の小部族に見つかったシャンティたちは道路を突っ走ったが、逃げた先には敵伏兵が待ち構えており、挟撃されることとなった。

敵歩兵は盾を持っておらず、剣と棍棒だけが武器だったので、ギャロップがカバルス騎兵隊を指揮して前方の敵を容易に追い払う。その間に後方から敵兵が迫ってきていたので、仕方なく歩兵を降ろして矢を放たせた。この時の矢はまだまだ長弓だったので、二人乗りであっても馬上での使用は困難だった。そういうわけで、ギャロップは一度歩兵を降ろして弓矢を使用させたわけである。

「ある意味新戦法じゃないのか？」

とギャロップの横を走るシャンティが言った。

「このくらいならカバルスでもやっていた。だが、騎馬への乗り降りがスムーズにいかないから、大体的場合はこの作戦は失敗に終わ

る。あの練度の敵を相手にしているからこの作戦が通用するんだ」
ギヤロップがシャンティに向かって先生よろしく、今回の戦法の欠陥を教授する。「やはり騎兵に乗ったまま矢を撃たせないとだめだ。そうだ！ おい、帰ったら弓を短くする研究を始める。それがいい」
「面白いじゃないか。やってみよう」

シャンティはルルディファイアの腹をトントンと蹴りながら言った。と、シェイバスが慌てて声を発する。

「シャンティ様、後方の二人乗りの騎兵が遅れ始めています」シェイバスは後方を見ながら言う。一人だけに乗せている集団と、二人乗りの集団との距離が広がるのは当たり前である。「少しスピードを落としましょう。後方の二人乗りの速さでも敵兵は追いつけないようですし」

「近衛兵団、カバルス騎兵隊、スピードダウンだ！」

シャンティが命令する。彼らは周りとの距離を見計らいながら、徐々に騎馬をゆっくりにしていく。シャンティたちは後ろを向いて後方の二人乗りの騎兵たちを待つ。たしかに、小ウアズマ人たちとの差は開いてきている。

後方が戦闘のシャンティたちに追いつくと、彼らは騎馬のスピードを調整して一塊となって逃げて去った。

彼らはそのまま走って夜になると休息を取った。その頃には、竜の鼻の穴は残り二日ほどの距離となっており、よほどのことがない限り帰還作戦は成功すると思われる。

それでも二人乗りに使っていた騎馬の疲労がたまっており、日に日に動ける距離が少なくなってきたし、小ウアズマ人との戦闘の回数も増えてきていた。

ギヤロップは暗闇の中で、木の上の太い枝に腰掛けながら悩ましげに言った。

「この調子だと、竜の鼻の穴に着くまでに一回中規模の戦闘をせいやならんかもしれん」

辺りには鈴虫の音が響いていた。

「ぼくたちが竜の鼻の穴に向かってるのは相手方もわかりきっているだろうしね。でも、どこでぼくたちを待ち受けているのか……」
とシャンティは草むらに寝転びながら言う。シャンティの所からは、鈴虫の声が騒がしいほど聞こえていた。

「それはわからなけど、たぶん明日ぐらいだろうな。遭遇するのはとなると……今日の休息は重要だぜ。残りの飯はもう全部配っていた方がいいんじゃないのか？」

シャンティは苦笑いしながら言う。

「残りの飯は後二食分しかないよ」

「なんだそりゃ、どこで間違えたんだよ？ おれたちは普通に食ってたはずだぞ？ まさか、お前が隠れて食ってたんじゃないだろうな」

「モンモで食料を補給するとき、ぼくはもつと食料があるんじゃないかと言ったけれど、君は、死ぬ奴が出るからこれくらいでいい、って言うってあんまり食料を積まなかったんだよ！」

「ははは、まさかおれとしたことが、この部隊を率いるのがこのおれ様であることを忘れていたようだな。うっかりミスだ、ははは」
ギャロップは笑ってごまかして、そして付け加える。「え？ じゃあ、今日の夜の飯は？」

「抜きだよ。おそらく、明日一食、明後日一食になるだろうね」
一日一食か、とギャロップは考える。馬にパンやらフルーツやらの飯を与えて元気づけるって手もあるけれど……戦闘があるなら、やっぱり人間に飯を食わせた方がいい。あと二日なら、明日中走りとおしたらいけそうな気もするから、明日二食分食ってもいいんじゃないだろうか。

「いや……」ギャロップはとあることに気が付いて呟く。「そもそもおれたちが戦わなくてもいいんじゃないか」
「え？」

「竜の鼻の穴に救援要請を出せば、食料問題も敵との戦闘の問題もすぐに解決する」

「確かにそうだけでも……それを誰に行かせるんだい？ 連絡に行く兵士たちはおそらく少数部隊になるから、敵にあつたら危険だよ。ここまで来たんだから、みんなと一緒に行った方が生存率は上がると思うんだけど……」

「んでも、バランスを考えれば伝令兵を出しておいた方が良いでしょう。もし、伝令兵を出さないでいて、この先敵の大軍と戦うとなると圧倒的な不利になっちまう。この場合は、伝令に行く複数の小部隊の安全よりも、全体の利益を取るべきだ」

「……それで？ その伝令兵は誰に任せるんだい？」

「カバルス騎兵だろうな」ギャロップがそう言うと、シャンティは君が？ と問いただした。「いや、確実に連絡を伝えるために複数の部隊を送り出す。だから、おれが指揮するわけじゃない」

その後、二人は誰を連絡班にするかを考えて、選ばれたカバルス騎兵たちを夜の内に連絡班を出発させた。シャンティたちは夜が明けけるまで休息を取って、日が完全に上る前に出発した。

一行は昼頃に食事を兼ねた休憩を取った。それもすぐに終わり、退却が再開される。

シャンティは連絡班の安否を心配していたが、それはおそらく明日の朝頃には確認できるだろうとされていた。なぜなら、彼らが無事に竜の鼻の穴についていれば竜の鼻の穴に駐屯しているサウルス軍が迎えに来るからだ。

カバルス騎兵が巧みな馬術と強靱な肉体で夜通し走れば、今日の深夜には到着し、深夜の内に駐屯軍がこちらに向けて出発するはずだけど……。とシャンティは考える。

「でも、小ウアズマ人がこちらに開戦を仕掛けてくる予想時刻は今日の夕方なんだよな」

とギャロップは苦々しく呟いた。

シャンティたちが竜の鼻の穴に向かっているのは小ウアズマの大軍も気が付いているだろう。ならば、彼らは竜の鼻の穴までの道に自陣を置くはずだ。それは竜の鼻の穴にあるサウルスの砦に近すぎ

れば後方（砦）と前方（退却軍）からの挟撃を食らってしまうが、遠すぎればサウルス軍の通るルートの数が増えてしまい自分たちの軍を分散させなければならなくなる。

さて……どこに布陣しているのだろうか。などと考えたものの、小ウアズマ人たちは夕方になってもシャンティたちの前には現れなかった。サウルス軍は小ウアズマ人たちが引き返したのだ、と樂觀的には考えなかった。サウルス軍は彼らの夜襲を予想した。

夜襲とはいっても、小ウアズマ人たちは歩兵でシャンティたちは騎兵である。移動するシャンティたちを追いかけながら、夜になったら攻撃……などということはまず考えられない。だから「ちょうど、夜頃にこのあたりを通るだろう」というところに待ち伏せしておき、そこを通ったら攻撃。その前で休憩していたら、休憩中のサウルス軍を攻撃。という風にするはずである。

石畳の道路を進みながらシャンティはギャロップに言った。

「夜襲をしてくるならばしてきていい。でも、できるだけ前に進んでおこう。そうすればその分だけ援軍が来る時間も短縮できると言うものだ」

「そう言うけどな、もし本当に敵軍が夜襲をする気なら、戦闘に備えてできるだけ兵士を休ませておいた方が良くんじゃないのか？」

いや、大体、本当に援軍が来ると決めつけて考えてもいいのか？」

「といっても、君もこのまま走り続ける方が良いと思ってるんだろう？」

「そりゃそうだ」

「じゃあこのままの状態で行く」

シャンティは全軍にそれを下知した。

シャンティたちは緊張しながら夜通し走り続けたが、小ウアズマ人たちは現れなかった。それどころか、次の日の朝になっても昼になっても援軍も到着しなかった。シャンティたちは怪しがりながらも、兵士たちが疲れ切っているので最後の食事と共に休憩を取ることとした。

夜もとつぷりと更けた頃、彼らは動きだした。シャンティたちは常に小ウアズマ人からの夜襲奇襲を警戒しながら竜の鼻の穴に向かつて突き進んだ。

数時間後。夜明けの、空にうつすらと赤みが増し始めた頃になると、シャンティたちの目視できるところに竜の鼻の穴は現れた。

竜の鼻の穴は皆であり、東の蛮族を遮るための長城でもある。カンプトケファレがモーキリニアの侵入を警戒して海と海を繋げて防衛線潮の川を作った様に、竜の鼻の穴は海と海との間の陸地を塞ぐ様にして長く長く作られている。

両端は小さな港の様になっており、駐屯軍はそこから船を出して海を渡つて密入国しようとする蛮族を取り締まっている。

「おや？」とシャンティは竜の鼻の穴を見て、少しおかしなことに気が付いた。竜の鼻の穴の門の一つにわらわらと何かが群がっている。「蟻？」

「蟻じゃない」ギャロップが目細めながら言った。「小ウアズマ人だ。なるほど、奴らはおれたちじゃなくて、竜の鼻の穴を狙ったらしい」

「……なんで？」

とシャンティが目点をしながらギャロップに訊いた。ギャロップは目を逸らしながら首を振った。

「あいつらのとる作戦はおれにはよくわからん」

この時、小ウアズマ人が取った作戦は心底よくわからなかった。

小ウアズマ人は文字を持たない部族が多く、だから彼らはどういう意図でそれを決行したのか、という記録を残してはいない。シャンティやウイスカ、その他後世の歴史家も資料が不足しすぎているので『作戦決定のための軍議がもつれて、着地点が大きくそれた。』とか『もともとシャンティたちを倒すための作戦として竜の鼻の穴を攻める作戦があった。しかし、自分たちが攻城戦を苦手としているのを、ちゃんと把握していなかった。』とか書いているくらいである。

なにはともあれ、もしその策を評するならば、その策は愚策だった。

それで、シャンティとギャロップたちはどうなったのか。

彼らは後ろから小ウアズマ人を攻撃し、カタパルトなどを破壊した後に戦場を逃げだした。小ウアズマ人たちの半分は彼らを追い始めるがやはり騎兵には追い付かない。竜の鼻の穴に残った小ウアズマ人たちは他の城門から出てきた駐屯軍に殲滅され、駐屯軍はそのままシャンティたちを追いかけている軍団を追い、こちらも殲滅している。

その後、シャンティたちは無事に竜の鼻の穴に到着し、その中で連絡班が大方この砦に到着していることを知った。シャンティたちは砦内で一日休んだ後、五千の軍団を連れて小ウアズマ地方に再び出発。辿り着かなかった連絡班を探したが、見つからなかった。

今回の、サウルス軍の小ウアズマへの遠征戦記はこれで終わりである。

二四〇年の初秋、シャンティは王都とギャロップに帰還した後、今回のことで論功賞を授与される。シャンティはその際に、ギャロップの北への派遣の件をジャクナ王に直々に伝え、それを受理されている。

生きてサウルスに帰ることのできた兵士たちは全員が地元に戻ることを許され、国軍は全て新しい兵士に置き換えられた。人々は自分の家族が戻ってきたことに喜び、また、家族や恋人を失った者は嘆き悲しんだ。

今回の遠征は客観的に見てどうだったのだろうか。『今回の遠征は驚くほどの失敗だった。』とある教師の日記に書かれているほか、従軍者やシャンティの日記にもあまりいい風には書かれていない。やはり、この時代の人々からは失敗だったと思われるようだ。

それは当たり前前の反応だろう。

数万に及ぶ兵士が死に、兵士などの食料のために国から多くの物が運び出され、税も上がり、食糧難になり、儲けたのは元から裕福だった商人だけ。それなのにサウルス軍が持ち帰ったものはほとんど何もなく、民への分配ももちろんない。これはサンジャヤ成敗の時と同じであったが、失った物の数はそれとは比較できないほど多かった。

シャンティたちも民の不満はひしひしと感じていた。だが、これからの行い次第で何とかそれを和らげることができるとも思っていた。

シャンティとギャロップ、またその家族たちは雪が降り出す前に北部カンプトケファレの都であるウチノホークに向かった。北部総督としての仕事が再び始まったわけである。

四か月後、年が明けてすぐの冬。ウチノホークにしんしんと雪が降っていたその日、シャンティはウチノホークの元王宮にある政務室で、ジャクナ王からの税金に関する書簡を受け取った。

「まだ年明けすぐだっというのに、税に関する書簡？」

とシャンティは書簡を運んできた官人に訊いた。彼もよくわからない、と言った感じに首をかしげていた。

同じ部屋にいて書類をまとめていたウイスカは何となく嫌な予感を覚えた。そういえば、小ウアズマの森にいるときに、王は仇を返すために再び小ウアズマに戻ると言っていた。

ウイスカは焦りながら言った。

「シャンティ様、すぐに内容を見るべきです」と。

「うん？ うん、そのつもりだけど」

シャンティは書簡を広げ、それに目を走らせた。読んでいくごとにシャンティの顔が険しくなっているのが、同じ部屋にいた官人たちにはわかった。そして、シャンティは震える手で書簡を机の上に置いた後、頭を抱えて大きくため息を吐いた。

「どういった内容だったんですか？」

とシェイバスが尋ねた。

「……兄上は」シャンティは顔をあげて、小さく首を振った。「馬鹿だ」

まだ今年の収穫量もわかっていないのに、書簡には、今年の全国の税を一律に重くするという内容が書かれていた。

やはり彼は、再び小ウアズマに向かおうとしていた。

38・後始末（後書き）

画像は馬に乗る將軍。馬は馬術の本に載ってた写真を模写った。元の写真にあった躍動感はゼロになった。別に内容に即してるとかではないです。

39・増税で重税

> i34027—4057<

二四〇年の冬の初め。北都ウチノホークのカンプトケファレ王族の建てた元王宮（現北部総督の職場兼館）の城門は、農民でこつた返していた。城門は閉められているものの、兵士たちは門の外に出て、農民たちを王宮内に入れないように体を広げ、必死になって押し返していた。

彼らは今年の重税に対して文句があつて元王宮を訪れた集団であつた。

サウルス王ジャクナ三世は、東部遠征の前から全国土の農民や商人に重税をかけ、それを遠征の費用にしていた。ジャクナ王率いる東部遠征が始まると税はますます重くなり、サウルス国内の食料も少なくなり、食料インフレも発生し、農民だけでなく市民や職人にもその困窮は波及していた。

彼らはしかし、大した不満も言わずに王の言う通り税を払い続けていた。それも、この遠征が成功すれば莫大な財がサウルス国に流れ込み、自分たちの生活を豊かにしてくれるからである。

だが、遠征は失敗した。国民たちは失敗自体にも納得できなかったし、失敗しても何の謝罪もない国王にも不満を抱いた。そして、今回の税が前年度までとほとんど変わらない現実を知った時に、ついに彼らの不満は爆発したのだつた。

これを前々から予想していたシャンティはジャクナ王への減税を頼み込んだが、にべもなく断られた。重税が避けられないとなると彼は自警軍、総督軍の兵士を密かに実家に帰したり、兵士の訓練を耕作に替えたりして対応した。それはギャロップたち軍部の反発もあつた上に、それほど成果を発揮しなかった。

また、その事実を知ったジャクナ王はシャンティを叱責し、さらにはシャンティが独断で減税を実施しないように監視役を送つた。

監視役は税に関する仕事をシャンティから奪い去り、ジャクナ王の決めた税率通りに農民、職人、商人、貴族などから穀物・金・その他物資を徴収した。

シャンティからしてみれば、この年の東部ヘドロケラスが不作でなかったことが不幸中の幸いだった。とはいえ、ヘドロケラスの市民も不満を抱いていることは間違なかった。

シャンティは憂鬱そうな表情を浮かべ、政務室から城門の様子を見ていた。政務室には官人のほかに近衛兵が数十人待機している。それだけではない、部屋の外にはさらに多くの近衛兵が待ち構えており、暴徒と化した農民たちがシャンティを殺そうとするのではないかと警戒していた。

シャンティはもうだめだ、というように首を振りながら立ち上がった。

「シャンティ様、行ってはだめですぞ」とウイスカが彼の前に立ちはだかった。「農民たちの所へ行っては何をされるかわかりません」
シャンティは黙って彼を避け、そのまま政務室から出て行く。シエイバスたち近衛兵団は彼の後について歩いた。

シャンティたちがぞろぞろと元王宮を歩いていると、リュキウスが待ち構えていた。彼の後ろには侍従のエクリプスがいる。エクリプスは「リュキウス様は私の言うことを聞きません」と言うように、首を振った。

「父上、ぼくもついていきます」リュキウスは九歳児らしからぬ、きびきびした感じで言った。「なぜって？ なぜなら、ぼくは北部総督の息子であるからです。するとぼくは未来の北部総督になるかもしれない。だからこそ、ここでカンプトケファレの農民たちと話すことは、ぼくの未来に大きな得になるはずですよ」

「リュキウス。未来に大きな得を望むなら、君は部屋に帰って勉強をするべきだ。農民たちの所に行けば未来に得どころか、君の未来自体がなくなってしまうかもしれないからね」

と言ってシャンティは彼の横を通り抜けた。リュキウスは勝手に

ついでに行こうとしたが、エクリプスによって羽交い絞めにされ、政務室に連れて行かれた。

シャンティたちが階段を下り、玄関から外に出たとき、城門は農民たちによって突破される寸前だった。が、彼らは元王宮内から出てきたシャンティ一行を見るとすぐに乱暴をやめ、前の者から跪き始めた。兵士たちは息を切らしながらも、農民たちが入れないように腕を広げた。

「シャンティ様！」と一番前に座る浅黒く焼けた肌の男が懇願するように手を合わせながら言った。「おれたちはあなた様が重税を課しているんじゃないことくらいわかっています。しですが……もう国王に貢げるものはないんです。おれたちには、自分たちを養う分の小麦粉もないのです」

「君た……」

「あんたの兄上はおれたちに死ぬというのか！」シャンティの声を遮って若い男が立ち上がりながら言った。「いや、死ぬと言ってるんだ。そうに決まっている。おれの弟を、あんな所に連れて行って……」

若い男は手を強く握り、肩を震わせながら、目に涙を貯め、ついにはわんわん泣き始めた。シャンティは居た堪れない様子でそれを見ていたが、何も言えなかった。

何が言えるというんだ、このぼくに……。新しい農作物だって見つけられない。農地の改良もできない。兄上の重税に馬鹿みたいな対処をして、監視役を呼び寄せてしまった。これなら何もせずには税収を迎えて、兄上にわからないくらいに適当にごまかせばよかったんだ。ぼくはなにを言えばいいんだ。励ましの言葉か？ ははは、馬鹿らしい。彼らのおなかには励ましの言葉じゃあ膨れやしない。じやあ、どうすればいいんだ。

「王を殺してくれ！」

不意に、どこかでそんな声が響いた。その場にいた全員が背筋を凍らせた。兵士たちはすぐに持ち場を離れ、農民の中に分け入り、

誰がさっきの言葉を言ったのか調べ始めた。王殺しを言葉にするのは謀反罪であり、もし犯人が見つければ死刑である。

「ま、待て」シャンティは慌てて兵士たちを止めた。「何をやっているんだ、一時の気の迷いじゃないか。これくらいは大目に見よう」
「それはまずいんじゃないのか」と兵士たちを止めるシャンティの後ろから声がかかった。シャンティが振り向けば、そこにはギャロップがにやにやしながら立っていた。彼は尊大な風に腕を組み、クニキ跪く農民を見下しながら言う。「王を殺すなどと……その発言はちよつくら見過ごせんくらい危険だ。そのみで重罪だ。それを言った奴に科せられる刑は死刑だ。そういう決りきまりだろ？ 法律だろ？ シヤンティ、法律には例外を作っちゃならないはずだ。そうだろ？ それに、この罪を犯した奴をお前がかばうというなら、お前が変な疑いをかけられることになるぜ？」

「変な疑い？」

シャンティは心底不快そうな顔をした。なぜ、ギャロップがにやにや笑いながらこんなことを言っているのかがわからなかった。

「お前が王への謀反を企てているって疑いだ」

「そんなことは断じてない！ 大体、それは今回のこととはまったくもって無関係だ。彼らは」シャンティは農民たちを指し示している。「一時の興奮であんなことを言ったに過ぎない。彼らには初めから兄上を殺すつもりなどないんだ。ぼくは兄上を殺そうとする人間をかばったのではない。気が動転してわけのわからない失言をしてしまった人をかばったんだ！」

「わかりました！」農民の一人が慌てながら言った。「私たちは、今回はこれで帰ります。だから……その……」

「ああ」ギャロップが門の外に座る農民たちに近づきながら言った。「今回のことは、何もかもなかったことにしよう」

農民たちはざわざわと騒ぎながら立ち上がり、兵士たちに陳謝してから城門から立ち去った。シャンティはにやにやしながら農民を見送るギャロップを見て、彼のしたことを理解した。

「……計画通りって感じだね」シャンティはむすつとしながら言った。「でも……あんな態度で彼らの望んだんじゃ、君は悪役になつたも同然だ。それとも、それも計画通りなのかい？」

「なんのことやら」ギャロップは一転してつまらなそうな顔で振り返る。「おれは事実と、おれの思つたことを述べただけだぜ」

「それならもつと言い方があつただろう。変な笑みを浮かべながら出なくてもよかつたんだ」

「変な笑い方なのは馬と育つたせいさ。だから文句なら馬に言うんだな。主に、ルルディファイロとか……」

ギャロップはシャンティの横を通り過ぎて元王宮の中に向かう。

「ルルディファイロは君と幼少時代を過ごしてないだろう」シャンティは彼の横に位置付けて元王宮に向かう。「何でもかんでもルルディファイロのせいにするんじゃない」

「別に何でもかんでもあいつのせいになっているわけじゃねえよ。この重税がルルディファイロのせいなら、おれはすぐにあいつを馬刺しにして食つてやるぜ」

「たとえ君でも、そんなことはさせないぞ！」

「いや、食わねえよ。あんな馬！」

二人が元王宮に入ると、二人の家族やら城中の官人やらが玄関に勢ぞろいしていた。彼らは二人が口喧嘩をしながら戻ってきたのを見て、ほつと胸を撫で下ろし、それから職場に戻って行った。

他方、リュキウスはどんとどんと足音を立てながらシャンティのもとに寄ってくる。

「父上、次こそはぼくも一緒に行きます」

「いやあ、それは……」とシャンティは慌てて首を振る。「危ないからね」

「それならば、ぼくがビッグフトス師匠直伝の剣技で父上をお守りいたします」

「九歳の子供に守られる父親なんて、古今東西どこ探してもいないよ」

「父上がその初めての御方になるのです」

「いやいや」

親子の会話をはたから見ているエクリップスは、同じように彼らの会話を見ていたギャロップに話しかけた。

「大将軍殿、一体全体、どのように收拾をつけたんですか？」

「ま、適当に……はぐらかし、だな。根本的な解決にはなっていない」
ギャロップはつまらなそうな顔をしながら、エクリップスの方を見た。

「農民の怒りやら不満やらを解消する策はあるのか？」

「今のところは、ないです」エクリップスは首を振った。「王の命令通りにしてこのようになったわけですからね。あの方をどうにかしないと……。いや、農民をこのまま力で押さえつけることもできませんがね……シャンティ様がお許しにならないでしょう」

「おれが裏でそれをやってもいいぜ」

「それもシャンティ様がお許しになりませんよ」エクリップスは嘆息する。「全く、あなたも御変わりになられたもんだ」

「はあ？」

どういう意味だ、とギャロップがエクリップスを睨みける。エクリップスは半目で將軍を睨み返す。ギャロップは、ふん、と鼻息を馴らしてからどこかに向かつて歩き始めた。

「どうせ、あなたのことだから勝手に何かをするんでしょうがね、シャンティ様の不利になるようなことをしては絶対にいけませんよ。いえ……言うまでもないことでしょうがね」

ギャロップは大した返事もしなかった。彼は廊下を折れ曲がってどこかに消えた。エクリップスはしょうがない奴だな、と思いつながらシャンティたちの方に振り返った。二人はまだワーワー問答を繰り返していた。

「はいはい、終わりですよ」エクリップスは手をパンパンながら二人の会話を制した。「二人共、やるべきことをやりましょう。シャンティ様は政務を、リュキウス様は勉強を」

この時代の農民はとにかく弱い。いや、いつの時代もそうだろう。しかし、確かに農民個人個人には小さな力しかないが、彼らは大挙して領主の所に押し寄せることによって……つまり、小さい力を終結させることで大きな力と変えることによって、王族、貴族、官人たちを揺るがし、交渉することができる。彼らはそうやって自分たちの劣位を和らげてきた。今回のケースもその例の一つに過ぎない。

そこで、ギャロップは彼らのその能力を低下させることを考えた。ギャロップがしたことは大したことではない。

彼は自分に任せられた一個軍団を引き連れて北部、東部中の農村を練り歩いた。それだけであるが、彼の引き連れる一万の軍団を見ただけで農民たちの心は挫かれ、彼らの集結能力は弱められた。

彼らは集団で行動できなければほとんど何もできないも同然で、これによって今回の各地農民たちの反乱はまだ小さな火種のうちに消し止められた。

シャンティはギャロップがこんなことをしていることは知らなかったが、ともかく、農民たちの怒りが一時的にでも収まったことは喜ばしいことだと思った。

二四二年の年明けの冬。彼は各地の農場主などから馬や牛を集め始めた。北都の政府はそれを北部カンプトケファレの貧困層の農民や、東部の農民、新規農業参入者に貸し与えた。貸す……のだからもちろんレンタル料は取る。しかし、それは重税の中に入っているものとした。こうなると、牛馬を借りなかつた農家、裕福などの理由で審査が通らず借りることのできなかつた農家などからは不満が出てくるわけだが、シャンティはそれを無視することにした。今はとにかく、貧困層の改善である。

やはり例年の不作などの都合上からか、牛馬のほとんどは東部に貸し出された。この年の東部は豊作で、税金も何とか自分たちの生活を困窮させない程度には払うことができた。

実際のところ、この政策は何がよかつたのだろうか。

現代の外交などでも、先進国が発展途上国に対していろいろな支援を行うことがあるが、その中の一つに「肥料の支援」と言うものがある。それはその名の通り、栄養を含んだ堆肥などを地味の貧困な国に送り届けて、その国の農業を振興させる……と言つものだ。

今でこそ、いろいろな方法で堆肥は作られる。機械により湿度などを調整することで堆肥化を促進させたり、生物の力を借りたり、空中窒素固定法などで人工肥料を作り出したり……。だが、二〇〇年代の堆肥と言えば、基本的には人や動物の糞である（人の糞を肥料にしなかつた国はいくつもある）。その中でも特にいいのが牛の糞で、これはもみ殻やらほかの家畜の糞と混ぜ合わせることで上質の肥料になる。そのせいか、今でも健康志向、自然志向の間たちに頻繁に活用されているくらいである。

つまるところは、大地を耕すために送り届けた牛馬の糞を、農家たちが堆肥という形で有効に活用したおかげで東部の地味は一時的に豊かになり穀物などの育成を促進させることができたわけだ。

とはいえ、肥料だけで農作物がいっぱい取れるなら苦労はしない。ここで登場するのがアルファルファである。アルファルファとはマメ科の植物であり、栄養価が高いのもあつてか、騎馬民族には馬の食料として広く常用されていた。なので馬肥やしとも呼ばれる。

東方遠征の最中に馬の糧秣に困っていたギャロップは、このマメ科の植物をカバルス以外の他所でも育てるようにシヤンティに進言していた。シヤンティはすぐにアルファルファをカバルスから取り寄せ、カバルス同様に乾燥している東方でそのマメを育て始めた。

ところがその計画はさほど順調でなく、東方遠征も失敗に終わったのですぐにアルファルファの栽培は次の年度から取りやめになった。だが、実はこのアルファルファには地力を回復させる能力があつたのだ。

特定植物（クローバーやアルファルファなど）が地力回復効果を持つと広く知られるようになったのは、千年以上あとの農業革命の時になつてからだ。この特定植物は、植物に栄養を吸い上げら

れて地力を失った農耕地に植えられ、地力を回復させる。それによつて耕地の地力回復を待つ必要がなくなり、ほぼ絶え間なく農耕地を使用できるようになった。

もし、これを栽培し続けていたら、東部は食糧難の悩みに頭を抱えずにいられたのかもしれない。それでも、特定の植物が地力回復に効果があるなどということ、まだ知りようもなかった時代だから、しょうがないことではある。

一番重要なものを忘れてはいけない。それは水である。

水量の少なさは東部のネックであった。しかし、シャンティとウイスカの日記を見る限りでは、この年には都合よく雨が降り、それを大地に吸収することができたようだった。

シャンティは農学者ではないので、今回の豊作は肥料や地力回復植物を有効活用したせいで起こったということに頭が回らなかった。だから、この年のことを考察した日記では『牛馬を貸し出して農地が増えたところに慈雨が降った。このことは、運がよかったとしか言いようがない。』としか書いていない。

さて、この年、二四二年を始めから見えていく。

まず年明けの冬。シャンティの所にアストロラーボンが骨折したとの報が入ると、シャンティは農地視察のついでに彼の所に訪れた。アストロラーボンは彼の予想以上に衰弱しきっていた。

彼を世話する女性奴隷の話によると、アストロラーボンは最近寝たきりの生活が続いており、しきりに腰が痛いと言っていたらしい。それで調べてみると、どうにも腰が骨折しているらしいということが判明したそうだ。

三日ほどアストロラーボン邸に宿泊した後シャンティは北都ウチノホークに帰っている。

夏になるとカバルス地方がまた騒がしくなり始めた。今度はイハテリオ地方からの攻撃などではなく、カバルス地方の現存反抗部族が活動を活発にし始めたそうだった。この時、カンプトケファレの北にある内海ではモーキリニアのイムサ国の軍船が頻繁に目撃され

ており、ギャロップたちはそつちにかかりきりだった。さらに、カバルスの反乱部族の数がそれほど多くないのを知ったジャクナ王はカマラ・アレックスに二個軍団を授け、カバルス鎮定軍として送り出した。

アレックスのカバルス鎮定軍はそつなくそれを成功させている。では、北での戦闘はどうだろうか。

シャンティとギャロップは大工に軍船を造らせ、それを使ってイムサ国の軍船と何度か戦闘を行った。だが、もともとモーキリニア人は船が不慣れであることや、例の兵器コルブスがあつたおかげですべての戦闘で勝利している。一対一での戦闘を三回、複数対複数での戦闘を二回した後、イムサ国は北の内海には現れなくなった。

秋には前述のとおり、この年の実りが上々なのがわかっている。収穫を行うと、税の監視役が再びこの地に送られてきて、税を徴収した。

冬にはこれと言ってほとんど何も起こらず、シャンティは次の著作を作るための準備を始めていた。彼はサウルス国史を作る計画をたてており、そのためにサウルス国各地方から情報を集めていた。そこでこの年の中央、南部、西部の収穫が思いのほかよくないことに気が付いた。

『農耕がまだまだ発達しきっていない西部カバルスはまだしも、中央も、それに南部すらも不作とはどういうことだろうか。』

シャンティは各地の友人にこのような書簡を出した。各地から戻ってきた返事からすると、一昨年の遠征の失敗の件、前年度の重税の件、重税は今年度も続く件、などのことに不満を感じた農民たちが耕作地を放棄したのだそうだ。

東部へドロケラスを実質的に統べていたシャンティは、農民による耕作地の放棄に関してはそれなりに経験があり、対処方法もある程度心得ていたが、中央部や南部の官人たちはそれへの対処方法を知らず、農民たちを耕作地に戻すことができなかつたのだ。

シャンティはアドバイスを書いた書簡を友人に返信しているが、

この事態は重税が収まるまで続くであろうと予想していた。

「やはり、根本的な解決をしないといけないようだ」と言っても、シャンティにはその根本にある問題を解決する案はなかった。「なにせ、この問題の根本にしているのは兄上だからなあ」

彼は元王宮にある広間で家族と一緒に昼食をとっている最中だった。季節はまだ冬なので暖炉をつけ、床には絨毯を敷き詰めて、部屋の中を温かく保っている。

「父上」シャンティの隣の席に座っているリュキウスが険しい顔をしながら尋ねた。「ジャクナ叔父上はやはり東方への再遠征を考えておいでなのでしょうか？」

「そうだろうね。ぼくは直接聞いたことはないけれど……兄上は、小ウアズマに森の奥地にいたときから、そのつもりだったらしいよ」「ならば……」

「兄様、今は家族揃ったの食事中ですよ」と二人の会話を遮った者は長女レオネラである。彼女もすでに七歳になっており、中々しっかりした女の子に育っていた。「だからお父様もお仕事の話はよしてくださいな」

言われたリュキウスは肩をすぼめながら、小さな声で「ごめんなさい」と謝った。

あまり関係のないことだが、シャンティたちの年齢はいくつなのかを書きたいと思う。まず、シャンティはすでに三十六歳で、エレも同じ歳である。嫡男リュキウスは十歳になっており、長女レオネラは前述のとおり七歳、次女バルシネは六歳、そして二二九年……つまりは、サウルス遠征軍が小ウアズマにて食料買占めを行い、原住民を虐殺した年に生まれていた三女ヴァシリカは四歳である。

リュキウスはシャンティによく似てまっすぐな少年に育った。対して下の三姉妹は多様であり、長女レオネラは母親であるエレのよくな気の強い性格に育った。バルシネは無口でおとなしく、家の女たちに押され気味な兄を気遣える優しい女の子に成長した。ヴァシリカは豪放磊落（うちはうらやかく）に育ち、主に外で遊ぶことを好んだ。容姿に関して

は筆舌しがたい。が、シャンティがレオネラ誕生の時に書いたように、彼女たちは一様に美しかったようである。

さらに、そのほかの少年たちのことについても書いておく。

まずはマスタングである。マスタングはリュキウスよりも半年ほど早く生まれているが、この時点ではリュキウスと同じ十歳である。彼は軍人になることを決めたようで、馬術、剣術、指揮、戦術、地学、兵站、戦略、雄弁、多種多様な訓練を受けている。けれど、それらは全て家庭教師によってほどこされたもので、父親であるギャロップから何かを教授してもらったことはない。

次に、エクリプスの息子であるコルト。彼は十四才であり、ギャロップ配下の軍団に書記官としてすでに従軍している。リュキウスやマスタングは、やんちゃなコルトはてつきり軍人になる者だと思っていた。その予想を裏切った彼は、「偉大なる王の書記官に関する英雄伝を読んで影響を受けた」と言って書記官になることを希望した。もともと彼にはエクリプス譲りの学才があつたのか、書記官の仕事もすぐに覚えることができたようで、ギャロップも「普通」との評価をしている。彼の「普通」は上々のことである。

シエイバスの息子のボルドは六歳である。シエイバスとウイスカは彼をリュキウスの近衛兵にすることを生まれる前から決めていたようで、シエイバスたちはボルドとリュキウスを幼いころから何度も対面させている。そのせいか、二人はすっかり親友となり、ボルドもよくわからないなりに「近衛兵になります」と将来を語っている。

次は南部グナトウスのシユラク二世についてである。彼は八歳になっっているが、父親のジャーニイはそれほど気にかけてくれず、実の母親も物心ついた時には傍にいなかった。そのせいで当初は屈折した性格に育っていたが、おおらかで優しいタイスの献身的な世話のおかげで少しずつ心根は更生され、今では王族であることに強い誇りを持つようになっっていた。性格は人一倍負けず嫌いで、責任感と正義感も強かった。さらには、父親譲りなのか野心も強いようで、

育ての母であるタイスには「サウルス国の王様になる」などと言っている。

そして最後に、ジャクナ王の息子のジャクナ四世である。一時期は魯鈍ではないかと言われた彼も、この年には十四歳になっている。

彼のいる王宮の廊下は暗澹あんたんとしていた。ややデコボコした板ガラスのはめ込まれた窓から見える空は、昼間であるにもかかわらず真っ黒な雲に覆われており、時々稲光が廊下を激しい光で照らした。光の後、大地を揺るがすような音が王都センチュリオン中に響いた。「いやあ、でかい……びりびり来て恐ろしいですな」と坊主で髭面の近衛隊長ゲオネスが耳に耳栓代わりの指を入れながら言った。「大丈夫ですか、王太子様？ 平気ですか。ああ、それはすごい。いやはや、なんと勇敢なお心を持つておられるのか」

「私は嵐が好きだよ」ジャクナ四世は鮮やかなオレンジ色の髪の毛を揺らしながら言うと、視線を王宮内に移して廊下を歩き始めた。嵐のせいで今日の軍事訓練が中止になった。なので彼らは部屋の中でそれに類することをしようとしている。「隊長、早く行こう。せつかくエラルジス大將軍が来てくださっているんだ、待たせては悪い」

「行きましよう、行きましよう」

ゲオネスは手をこねこねしながら彼の後について歩いた。

ジャクナ四世はジャンティの言っていた通り、聡明な少年だった。学問でも優秀な成績を修め、軍事訓練でも初めて息を合わせる兵士たちを意のままに動かした。けれども、彼はいつも無感情な目をしていて。その目で人を見て、風景を見て、本を見て、死体を見た。彼はそのすべてを、まるで自分には全く関係ないかのような目で見ている。

「王太子様の目は氷で作られているようですわ」

とはジャンティの娘のレオネラのセリフである。ジャクナ四世は自分を侮辱ともとらえられる言葉で評した女をも、そんな無感情な

目でもって見ていた。

ジャクナ四世は目を閉じて、稲妻の振動を感じるために心を澄ました。ドーン、ドーン、と稲妻がどんどん大地に降り注ぐ。この世の終わりの音楽のようだった。音波は耳から入り、脳を刺激し、心をざわつかせた。

一階廊下を折れ曲がり、一番奥にある部屋に二人は入った。その時、ゲオネスが「大將軍様、ジャクナ王太子様とその近衛隊長ゲオネスが入ります」と言った。

ジャクナ四世はゲオネスによって開けられたドアをくぐる。部屋に入ると、椅子に座っていたエラルジスを見つめた。エラルジスは何となく自分の血の気が失せるのを感じながら椅子を立った。

「王太子様、いやあ、今日は残念でございます」とエラルジスは体を広げながらジャクナ四世の方に寄って行った。で、彼の体を捕まえて弱く抱く。「戦さのことは体を動かして教えるのが一番なのですが……あいにく今日はこの天気ですので。しかし、王太子様の軍才と言えば南部グナトウスの田舎にも伝わってきており、今も、もしかしたら私なぞ王太子様に教えることなどないのじゃないかと不安にも思っております……」

「いえ、そんなことはありません。私の軍才など大將軍の足元にも及びません」

「大將軍などと、私はもう軍を引退した男でございますので」エラルジスはかしこまりながら言った。「さあさあ、まあ、椅子に座ってください。隊長殿はその、ドアの近くに用意した椅子にでも腰を掛けておいてください」

言われたゲオネスはドアの近くに置いてある椅子を見た。そこはエラルジスやジャクナ四世らが座る場所からはそれなりに離れている。

「ああ、ありがとうございます……それでは、あの、私も王太子様と大將軍様のお近くで……」

ゲオネスが何かを言おうとした。すると。

「隊長」ジャクナ四世はすぐさま冷たい目を彼に向けていった。「大將軍の言う通りに」

「は、はい！」ゲオネスは真つ青になりながら、ドアに近くにおいてある椅子にちよこんと座った。「王太子様、これで！」

大丈夫ですよ、と首をかしげる。

「うん。それでは、君はそこで……」ジャクナ四世は頷いてから、エラルジスと部屋の中央のテーブルの所に向かった。テーブルにはジオラマが置いてあり、エラルジスの後ろにある長机にはさらに数個のジオラマが置いてある。いま、ジャクナ四世たちの目の前にあるジオラマには木を模したフィギュアが何十個も置かれており、つまるところ、このジオラマは森林での戦闘を想定したものである。

「王太子様」エラルジスは椅子に腰を下ろしながら言った。「今回は退却戦のシミュレーションをします」

エラルジスが退却戦をジャクナ四世に教授しようと思った理由はいくつかあるが、主な理由は三つである。

一つ目の理由は、ジャクナ四世の軍才が本当に素晴らしいものだったからである。だが、そのような高い軍才を持つ者は、得てして負けた時のことを考えていない場合が多い。だからこそ、もし逃げることになったらすぐに退却用の作戦が思い出せるようにその状況でシミュレーションしておく必要があるのだ。

二つ目の理由は、彼の父のジャクナ王のことである。彼はカバルス戦役、サンジャヤ成敗、小ウアズマ遠征の三回で壮絶な退却戦を繰り返している。

三つ目の理由は、やはりカバルス戦役で自分がそれをしたことがあり、その時にいち早く事態に気付き、シユラク王を逃がしたことがあるからだ。

長く戦い続ける者に、勝ち続けることのできる者などいない。それがエラルジス元大將軍の考えだった。

「退却戦ですか」ジャクナ四世は冷たい目をジオラマに向けながら椅子に座った。「私の得意のシチュエーションですね」

「ははは、退却戦が得意などではいけませんぞ、王太子様」エラルジスはジャクナ四世の冗談に哄笑する。「さあ、それでは始めましょうか」

「ええ」ジャクナ四世は微笑んで見せた。「始めましょう」

「それで？ ジャクナ四世の作戦は完璧だったって？」

サウルス国南部グナトウスにある離宮の一室で、エラルジスはジャーニイにそう尋ねられた。ややしまった顔になったジャーニイはクツシヨンに座っていた。エラルジスはその近くのクツシヨンに座っている。

「いえ、完璧ではありません。王太子様の作戦には穴があります。

ですが……王太子様はその穴をもともせず自分の立案した作戦を成し遂げてしまうような……いえ、何と言ったらいいのか」

「少し無理な作戦でも、指揮する武将の能力によつては無理やり成功に導くこともできる。おれはそれを間近で見たこともある」ジャーニイはカバルス鎮定期のギャロップの指揮を思い出しながら言った。「けれど、ジャクナ四世にそれほど軍才があるとは思えん。あいつは魯鈍とも言われていた男だぞ」

「あのお方は聡明な方です」エラルジスは首を振る。「底知れぬほど」

「それでも、まだガキだ。今ならば……」

「本当に王位を篡奪なさるおつもりなのですか？」

とエラルジスは現王に対して後ろめたい気持ちを抱きながら言った。

「篡奪？ ふん、奪うのではない。王位が持つべき者の手に帰るだけだ」ジャーニイは白い歯を見せて笑った。「そうだ、全ては……あるべき場所に帰るのだ」

ジャーニイはクツシヨンに体重をかけ、目を閉じる。そして、うつとりしたような表情で自分の未来を頭の中に描いた。

美しい妻ユルシュ、頼もしき大將軍ギャロップ、まだ見ぬ嫡男ジ

ヤーニイ二世、国政を取り締まる右腕のシャンティ、雄々しき千軍万馬、困難な東方遠征、夢の大王国建設、世界の中心にある美しき都、歴史に名を残した者に与えられる後世からの称号。

その一つ一つが幸せに溢れていて、華やかさに目を奪われてしまうようで、威厳に満ちていて、名誉と栄光と充実感があり……。

「だが、それへの道のりは血と涙に溢れている。いいや、それすらも血と涙に汚れているんだぜ？ ジャーニイ」

そんな声がして、ジャーニイは目を見開いた。

「望むところだ」

ジャーニイはそう言って、自分の心に返事をした。

「そうかい……それなら」心の中の彼は言った。「それを手伝わなければならぬ。何よりジャーニイ、おれのため^{おまえ}にさ」

39・増税で重税（後書き）

画像はリユキウス。デカくなったもんだな、しみじみ。

あんまりやる気の出なかった東方遠征も終わり、IKEMEN少年も描けて、おっさんは嬉しいです。

40・主、新年会にて防衛策を発表する

> i34100 — 4057 <

二四三年の年明けすぐのこと。シャンティやギャロップたちは、国王に新年の挨拶をするために家族を連れだつて王都センチュリオンに向かつていた。

彼らの護衛にはギャロップの任されていた軍団がつき、シャンティの持つ総督軍は四分の三を北部カンプトケファレに残すことになった。

シャンティはがたがたと揺れる馬車の中で言った。

「今年に限つて、新年の挨拶にこい……だなんて、兄上はどうしたんだらうね」

馬車にはシャンティとリキウス、ギャロップ親子が乗っている。

「知らねえよ」とギャロップは窓の外を見ながら言った。「お前がなんか悪いことしたんじゃないのか？ それよりも、なんでこいつと一緒に馬車に乗らなきゃならないんだ」

ギャロップは息子のマスタングを指差しながら言った。マスタングはじろりと睨みながら言い返す。

「シャンティのおっさんよお。この馬鹿のさつきのセリフは暗に、女たちの馬車に乗りたいつて言ったんじゃないのか。それなら望みどおりにしてやろうじゃねえか」

「はあ？ おれが？ なんで？ お前の方があつちの馬車に乗りたんじゃないのか？ だつてえ、あつちには許嫁のレオネラちゃんがいるもんねー」

ギャロップは舌をべろりと出し、首を左右に振りながらマスタングをからかう。

「……あの女は、別に、おれの許嫁じゃねえ。それはこいつらが」マスタングはシャンティたちを指差す。「勝手に言ってるだけのことだろ！」

「それにあつちの馬車にはフェミニナさんもいるしね」
リュキウスが微笑みながら返す。

「お前、おれの話聞いてたか？」

「マスタング、別に照れることじゃない」シャンティがさわやかな笑みを浮かべながら言う。「ギャロップもマザコンの気があるんだから。考えてもみる、ギャロップは何かと言えば馬の乳をちゅーちゅー飲んでるだろう？ あれは、母親への屈折した……」

「お前はなんでそんな風に間違つた風にしか考えることができるんだ！」ギャロップが立ち上がって、その拍子に馬車の天井に頭を打ち付ける。「大体、おまえはどうなんだよ。お前だつてマザコンだ。母親はすぐに亡くなつてるわけだし、妻にはあんな巨乳を選んだわけだし」

「馬鹿言うな、サウルス王家は代々マザコンだ」シャンティはきりつとしながら言う。横ではリュキウスがうんうんと頷く。「まあ、驚くことはない。だがね、ぼくが言っていることはおそらく本当だよ。ぼくは最近サウルス国史を作ろうとしているだろう？ そのために資料を集めている最中、この事実気が付いたんだ。ああ、でも言っておくけど、ぼくがエレにプロポーズした時、彼女の胸はそれほどなかつたんだよ」

「……」ギャロップは顔を真っ赤にした後に、高笑いを始めた。「ははは！ おい、マスタング。もう、お前は許嫁と結婚しちまえ。あの魔女の娘なんだから、きつと巨乳になるぞ！ ははは、そして毎日巨乳搾み放題だ」

「お前は馬の乳でもしゃぶってるよ。そしたら頭冷えるぞ」

マスタングは厭世感溢れる瞳を窓の外に向けながら呟いた。

「おい、シャンティ。いまずぐ馬車を降ろせ。おれは愛馬に乗って王都まで行く」

ギャロップは馬車のドアを開けながら言う。外からは冷たい風がびゅーびゅーと入ってきた。

「もつ足で走っていけよ」

とマスタングが言うと、ギャロップはドンと音を立ててドアを閉めた。

「よく考えたらなんでおれが出にゃならん。お前が出ていけばいい。お前は若いんだからな」

「若いというよりも」シャンティが極悪非道を見るような、蔑みと恐怖を携えた眼をギャロップに向ける。「幼いと言った方がいいよ。うな気もするけれど」

「んー？」

レオネラとヴァシリカが馬車のドアを開けて、前方の馬車を見ていた。

「寒いから閉めなさい」

とエレが注意すると、二人は前方の馬車を訝いぶかりながらドアを閉める。レオネラは自分が座っていた所に座り、ヴァシリカはエレの膝にちょこんと座った。エレがレオネラに訊く。「何かあったのかしら？」

「いえ、いま見ましたところ、お父様たちの乗った馬車が左右に揺れているし、なにやら騒がしいようです……」レオネラが首をかしげながら言う。「それになんだか私、名前を呼ばれた気がしましたの」

「どうせ、馬か馬に似た何かがあるの事を恋しんで名前を呼んだのでしょうか」

「う、馬に似た何かってなんですか？」

「ウマモドキよ」

「な、なんですか、それ？」

「さあ……でも、ウマモドキの声に耳を傾けてはだめですよ。耳を傾けてしまうと、このフェミナのように不幸になってしまいますから」エレはフェミナの方を見ながら言った。フェミナは苦笑しながら顔を赤くする。

「フェミナ様と何か御関係が？」レオネラは探偵よろしく、あごに

指を当てながらフェミナの顔を覗き込んだ。フェミナは一層顔を赤くして、否定するように手を振る。「一向にわかりませんわ。バルシネは何かわかりました?」

「……お姉様は鈍感です」

バルシネはほそりと言うと、後は黙りこくったままだった。

「私が鈍感?　ますますわかりませんわ!」

と言いながら、レオネラは頭を抱え込んだ。

一万人以上の軍勢が石畳の道路の上を歩き、ヘドロケラスに多数存在する山や森を抜け、サウルス地方の中央に存在する豊かで穏やかな平野を過ぎ、小高い丘に登ると、目の前には王都センチュリオンの美しい街並みが広がっていた。

運動のために騎馬で移動していたシャンティたちは一番景色のいい場所に立って王都の白い壁建物や赤瓦を見た。空は数えきれぬほどの雲しかないくらい晴れやかで、陽光はシャンティたちを温かく照らしていた。けれども、からからに乾いた冬の風は、やっぱりまだ肌寒かった。

「ここからの景色は格別だけれども、どうにも今日はまだ寒すぎる。みんな、早くセンチュリオンに帰ろうじゃないか」

とシャンティはよく通る声で軍勢に命令し、愛馬ルルディファイ口の腹を蹴った。そろそろ老馬ともいえるルルディファイ口はゆっくりと丘を下り始めた。ルルディファイ口の娘に乗っているリュキウスもそれに続く。ギャロップたちは少し後方に戻って行軍の様子を見てからシャンティを追った。

シャンティたちは丘を下り、近くの兵舎で一万人に及ぶ兵士を駐屯させた後、千ほどの兵士を連れて王都センチュリオンの中に入った。センチュリオンのミーハーな市民たちは道の端に寄り、わーわー騒いで、押し合いへし合いしながらシャンティたちの集団を見ていた。うら若き乙女たちは、まだ十歳の貴公子リュキウスに黄色い歓声を上げ、リュキウスが気を利かして手を振ると、卒倒してしまう

者までいた。隣にいたマスタングは意地悪な風になやにやしなから
「モテモテだな」と呟き、シャンティは困ったような笑みを返した。
千人中二百人が城門を潜り、王宮の敷地内に入った。そこから王
宮内の中に入れるものはもつと少ない。

シャンティたちは馬を降り、適当な者に預けると王宮の中に入っ
て行った。

先ほどシャンティが言っていたように、彼らは自分が呼ばれた理
由を全く知らなかった。

「いや、思い当たる節はあるけれど……」シャンティは回廊を歩き
ながら、一昨年北部で徴兵たちを密かに実家に帰していたのを思い
出しながら呟いた。「いや、それが原因ならば去年の新年に呼んで
いたはずだよなあ。うーん……」

「考えても仕方のないことだろ？」ギャロップがつまらなそうな顔
で言う。「もうここまで来ちまったんだ。ここからじゃあ、逃げよ
うにも逃げられない。ジャクナ王が何かを命令するなら、甘んじて
それを受けるしかないさ」

「まあ……君の言う通りだね」

シャンティはうんと頷いた。

シャンティたちは侍従たちによって王宮の一階にある食堂に導か
れた。部屋の中に入るとき、彼らは腰に剣を帯びることを許された
ので、おかしなことは起こらないだろうかと判断した。

シャンティとその家族、ギャロップとその家族、そして近衛兵数
人が食堂の中に入った。中にはすでに大勢の先客がいた。各地方の
貴族の中でも特に位の高い者や、それほど高くない身分でも、宮廷
や軍部では高級な役職についている者……それにジャーニイとその
家族も集められていた。部屋の奥に座っていたジャーニイはシャン
ティたちを見ても大した反応はせず、葡萄酒をぐびぐびと飲みなが
ら視線をほかに向けた。対して、その妻であるタイスはエレたちを
見ると、手を祈るように組み合わせた。彼女にとってエレは守護聖
獣のようなものだろう。

「あらあ、エレ様あ」タイスが嬉しそうな顔をしながら席を立った。
「ほら、シユラク様。この人がエレ様ですよ。覚えてらっしゃいますよね」

タイスはシユラク二世の背中を押し、貴族や官人、軍人たちを掻き分けてエレヤシャンティの所に歩いて行った。シユラク二世はシャンティたちの前に来ると、きちんとお辞儀をして快活に「お久しぶりです、叔父上。お久しぶりです、皆様」とあいさつした。

「本当にお久しぶりですことお。私、エレ様たちが来るなんてことは聞いていませんでしたから」

タイスは相変わらず大きな体を揺らしながら、ほほほと笑った。相変わらず……とはいえ、確かに以前よりかは少々小さくなっていくようではあり、頬の肉あたりに彼女の苦勞の成果が表れていた。

「いいえ、このことは私も知りませんでしたの」とエレが言った。

「去年の暮れにいきなり、王都に挨拶に来い……という書簡が届きました。私は行くつもりはなかったんですが、良人が滑稽な踊りを舞いながら、行こう行こうと言うので、可哀そうになってついてきてあげたんですの」

「いや、ぼくは踊ってはないよ」

シャンティが吃驚しながら言った。エレは娘たちの方を振り向いて言う。

「ほら、レオネラ、バルシネ、ヴァシリカ、あなたたちも挨拶しなさい」

「無視しないで」

シャンティが涙目になりながら懇願した。その間に三姉妹は一人ひとり丁寧に挨拶をしていく。

「とにかく、座ろっや」

とギャロップは不躺な感じに言って適当な所に腰を下ろす。テーブルの上には適当なフルーツが置かれており、まだ本格的には食事は始まっていないようだった。そのフルーツを手取るギャロップの横にマスタングが座った。なんだかんだ言って父親の隣に座るの

か、と思ひながらリユキウスはそれを見ていた。

シャンティたちもとりあえず上座を開けておいて、後は適当に腰を下ろすことにした。

「それで、今日はどんな集まりなんですか？」

とレオネラがタイスに質問すると彼女はフルーツをつまみながら、首を横に振った。

「さあ、それがあ、私にも詳しいことはわかりません。ジャクナ王様からの手紙には、家族で来るようにと書かれていたから」

レオネラは首をかしげながら言った。

「いったい何かしらね」

そうこうしているうちにシャンティたちの方に各地方の貴族が集まりだしてきて、近況を報告しあったり、お互いの子供の結婚のことを話し合ったりするようになった。

そんな風に部屋の中の人々が雑談をしていると、不意に部屋の外が騒々しくなり始めた。シャンティたちはジャクナ王たちが来たんだな、と思ひながら席を立ち、ドアの方に注目した。

ドアは王の侍従が開け、外からジャクナ王、ジャクナ四世王太子、ユルシュ、クラティラが入ってきた。彼らは部屋の中の一人一人に短く挨拶をしながら上座につき、一堂に着席するように促した。

「さあ、すぐに料理が来る。だから、みんな、給仕の邪魔にならないように一旦席に着こうじゃないか」

一同は言われたとおりに席に着いた。同時に部屋の外から料理が運ばれてくる。肉の甘辛煮や、チーズやフルーツを入れたパン、東の香辛料で味付けしたスープ、各地の瑞々しく甘いフルーツ、新鮮な牛乳、クジャクの丸焼き。第一陣はこんなもので、これらが運び終わると一旦料理の追加が止まり、一皿空くごとに違う料理が運ばれるようになった。

シャンティは今日呼ばれた理由を一刻も早くジャクナ王に問い正したかったが、ジャクナ王はすでにギャロップ親子の所へ遠征しており、それに割り込んでいくのも悪いような気がして、なんとなく

タイミングが掴めなかった。

もしかしたならば、重要な用事で呼んだのかもしれない。もし、それを問い正したなら、この場の和やかな雰囲気壊してしまうかもしれない。ぼくたち兄弟がこうやって揃うのなんて久しぶりだし、家族を連れて揃うのなんてもうないこともかもしれない……。そう思うと、なんだがうかつに質問できないな。とシャンティはチーズ入りのパンを食べながら思った。

リュキウスは自分の目の前に並べられた料理を一通り食べると、大粒のイチゴの入った皿を手にとって席を離れた。彼は人ごみを器用に掻き分けながら、ジャクナ四世の所に挨拶に向かった。

「従兄上、お久しぶりです。このイチゴ食べましたか？」とリュキウスはにっこり微笑みながら、大粒のイチゴが入った皿を差し出す。「甘くておいしいですよ」

「リュキウス、二年ぶりだな。いや、大きくなった」
ジャクナ四世はリュキウスに抱きついて見せる。

「ははは、何を親父臭いことを。大きくなってるのは従兄上も同じですよ。この前よりもかなり背も伸びたようですが」

「まあ、背に関してはそれなりだ。成長期だからな」ジャクナ四世はイチゴを頬張る。「それよりも……ちゃんと勉学に励んでいるか？ 私が王位についたら、リュキウスには私の右腕となって国家の要職をやってもらわねばならないからな」

「ええ、従兄上がそれを望むのならば、ぼくも最大限それに協力しましょう」

リュキウスは胸に手を当てて、任せてくださいと言う感じに返事をした。

「ああ、頼んだぞ」ジャクナ四世は首を傾げながら、その冷たい目をリュキウスに向けた。「頼んだからな？ リュキウス」

「はい」

リュキウスは彼の中にある得体の知れない物を感じながら、それでもそうやって率直で無垢な返事をした。

「リュキウス、何の話だ？」不意に二人の頭上で声がして、見てみると、マスタングがつまらなそうに頭をぼりぼり搔いて二人の後ろに立っていた。マスタングはギャロップとジャクナ王、それに軍閥の男たちが集まっている方を見ながら言った。「いやなに、あつちが心底つまらんからな。酔っぱらったおっさんがいい歳こいて騒いでいるだけだ」

「それより先に、君」リュキウスはジャクナ四世の方をちらりと見る。「とりあえず……ほら、従兄上に挨拶をしないかい」

「……ああ、久しぶりだな」

マスタングはいっそう激しく頭を搔いた。彼が何となく焦っているのがリュキウスにはわかった。

「マスタング、君は軍人になるための訓練を受けているそうだな」ジャクナ四世がマスタングを見つめながら言う。マスタングはひやりとしたものを感じながら正直に返す。

「そうだな」

「じゃあ、軍人になるんだらう？ ならば、私の臣下になるということだな」

「……さあな、それはどうだろう」

ギャロップはとぼけたような顔をしながら言う。

「それなら」ジャクナ四世は一貫して優しい口調で話している。「どこか、サウルス国以外の所で雇われの軍人でもするわけかい？」

「知らねえよ」

「なら、なぜ軍人としての訓練なんてしているんだい？」ジャクナ四世は、マスタングの瞳を食い入るように見た。「父親がしているからかい？ 軍人を」

「おれは、ただ自分の進む道を広げる一環として軍人の訓練を受けているだけだ！」

マスタングは思わず声を荒げる。部屋にいた者が一斉に彼らの方を見た。

「ムキになるな、宴会の席だよ」それでもジャクナ四世は冷ややか

な目で、微笑を浮かべながら、落ち着いた調子でしゃべる。「ちなみに、私は優秀な人材を早め早めに集めておきたいと思っただけだし……それに、ここでの君の答えが君の将来を全て決めてしまうというわけでもないのだ。気楽に返してくれればいい」

「……お前は」そこでマスタングは一旦息を呑み、続ける。「お前は王になつたら何をしようと思っっているんだ？」

「特別なことをするつもりはない」ジャクナ四世はやはり微笑を浮かべたまま、ことさら明瞭そうに言った。「けれど、なんでそんなことを？」

「無謀なことを考える馬鹿には使える気はないからな……」

マスタングは震えながら彼を見ていた。彼自身、その震えがどこからやってきたのかもわからず、けれどもそれは当たり前のことであるのを本能的に理解しながら、それでも王太子から目を離せずにいた。

人は、暗闇の中で得体の知れない鳴き声や音に出くわすと震えてしまう。自分のすぐ近くにいるモノがいったい何であるのかを理解しきれない時、硬直してしまう。到底理解できないモノに出会ってしまうと、怯えてしまう。

マスタングには、目の前のジャクナ四世が途方もなく底知れず、そして呆れるくらいに虚無的に見えた。彼の感じたそれは、まだ畏怖と言う感情には育っていないだろうが、近い未来に確実にそれに育つであろうという予感をリュキウスは覚えていた。

マスタング、君はあまり従兄上と接したことがない。いや、意識的に従兄上を避けてきたからわからないのだろうけれど……従兄上と正面から向き合おうとしちゃあ、だめなんだ。リュキウスはそう思いながら友の震える姿を見ていた。

皆は、リュキウスたちの方を見て、いったい彼らが何をしているのかを理解しようとしていた。けれど、ジャクナ王はそれをただの子供の喧嘩と断じると、彼らのもとに愉快そうに歩み寄って笑顔を作って話しかけた。

「ジャクナ、いったいどうした？ お前が不敬なことを言ったのかい？ マスタングは名将ギャロップの息子で、後はこの国の大將軍になる男だ。いつかは手を借りねばならない相手なのだから、仲良くしてもらっていた方が何かと都合がいいぞ」

「ええ、すいません。私の不注意な言葉が彼の心の琴線に触れてしまったようです。でも、大したことではないのでお気になさらないでください」

ジャクナ四世は大人な対応と微笑みを父に向けて返した。リュキウスはジャクナ四世の一挙一動と、その瞳に目を配っていたが、父に対して向けられる彼の眼は、いつも通りに冷やかだつた。

「それならば良いけれど……」とジャクナ王はそう言いながらマスタングの方を見た。マスタングはフイと顔を逸らした。「まあ……この際、ついでに言ってしまうか？」

「言ってしまう……とは？ なんですか？ 叔父上」リュキウスが首を傾げながら質問した。「もしかして、今回ぼくたちが呼ばれた理由を言ってしまうのですか？」

「やはり、気になっていたか？」

とジャクナ王は優しいげな眼を彼に向けた。

「はい、それはもう」

「ならば言おう。リュキウスの様に、皆も気になっているのだろうしな」ジャクナ王は声を張り上げ、部屋の人々を見渡しながら言う。

「さて、ここにはサウルス王族とその仲間たちがいるわけだが……今回、皆に集まって貰ったのはほかでもない。私にある構想があり、それを伝えたかったからだ」

部屋の中がざわざわと騒がしくなり始めた。臣下の一人が「王、構想とはいったいなんですか？」と義務的に聞いた。ジャクナ王はうんと頷いてから、その質問に答えた。

「私は未来のサウルスを担う子供たちと、各地方の有名な教師を一か所に集めて英才教育を施そうと思っっているんだ。有能な子供たちだけの学校を作るんだ」言うと、部屋がさらに騒がしくなり始めた。

ジャクナ王は騒音を消すために、パンパンと手を打った。「教師たちからすると、私の息子のジャクナ四世はそれなりに出来の良い生徒だそうだが、私は、国というのはたった一人の力では動かせないのを知っている。さらに、たとえ有能な人材が多く集まったとしても、その力が真に結集せねば大きな力を発揮できないことも知っている。そこで、子供たちに基礎的な英才教育を施すと共に、集団の中での団体行動に関することも是非とも学ばせたいと思った。友との絆は大事なものだ。それがあからこそ、私が今ここにいるのだと言ってもいい。そして、そのことをいち早く我が子供たちに伝えたいのだ」

おいおい、と思いつながらギャロップは遠くにいるシャンティの方、ジャーニイの方を見た。これはムチャクチャ暗あんに、裏切らないように人質を取るって言っているようなもんだぜ。わかってんのか？

「シャンティ、私の構想に乗ってくれるかい？」

ジャクナ王が有無を言わさない笑顔でそう聞いてきた。

「ええ……と」シャンティはエレの方を見た。エレは眉間にしわを寄せてシャンティを睨む。猛烈に反対の意を表していた。「すみません、妻としばし相談を……」

シャンティは気まずそうに言つて、エレと何やら話し始めた。

「王の意図、わかっていますか？」

エレがそう聞いた。シャンティは頷く。

「まあ……ね。だから、ぼくはリュキウスを兄上の所にやりたくはないけれど……この場の雰囲気はそうは言えない状況なんだよね。なにせ、ぼくが断ってしまうと生徒を集めるのに支障をきたすだろうからね」

「そんなことは関係ありません。あなたが断れないのなら、私が断ります」

「ちよ、ちよつと……」

待ってよ、と言おうとした瞬間、部屋の中に声が響いた。

「父上、母上、相談する必要などありません。ぼくを学校に送つて

ください」リュキウスが、瞳を爛々と輝かせながら言った。「心配する必要はありません。ぼくなら大丈夫です。ぼくはもつと多くの人と触れ合いたいと、多くのことと触れ合いたいと、そう思っているのです。だから、叔父上からのこの提案は渡りに船という感じなのです」

ジャクナ王がリュキウスの肩を抱きながら笑った。

「ははは、シャンティ。息子が自らこう言っているんだ。どうだ？ 学校にやっってはどうか？」

「……うっ」シャンティは仕方がない、というように頷いた。「わかりました。リュキウスを学校にやらせましょう」

「ははは、よし……では、次だが……ジニー」

とジャクナ王は愉快そうに指名を続けた。

その横で、解放されたリュキウスは顔に汗を浮かべながら、深呼吸をしていた。マスタングはその光景の意味を理解していた。

こいつ、ただの探究心や好奇心なんかでさっきの言葉を言ったわけじゃない。親元を離れてジャクナ王の監視下の学校で暮らすことが、人質と同じ意味を持っているのをちゃんとわかっている。親にいらぬ疑惑を掛けられないために、自ら人質になりに行ったのか。それよりも、こいつが指名されたのなら、おれも指名されるだろう。その時、親父はどうするんだろうか。彼は少し、好奇に満ちた目でギヤロップの方を見た。親父は、自分の不利を顧みず、おれをかばうのだろうか。そうしたら、おれはリュキウスの様に……。

「リュキウス」ジャクナ四世が、大分落ち着いたリュキウスの肩を抱きながら言った。「お前ならそうすると思った」

「……」リュキウスは、目を細めて笑った。「ええ、従兄上との生活が今から楽しみです」

「ああ」リュキウスは彼の肩を二回、ポンポンと叩いてからその場を離れた。その時、マスタングとすれ違う時、彼は小さく呟いた。

「恐ろしい少年だな、リュキウスは。まったくもって底知れない」

「……！」

マスタングは目を大きく見開きながらジャクナ四世の方を見た。が、彼はそれ以降何も言わず、どんとどんと遠くに離れていくだけだった。マスタングは彼を訝りながらも、リュキウスの方を見た。リュキウスは、彼が見たこともないような、異様に皺の寄った顔を浮かべ、地面を睨みつけていた。

40・主、新年会にて防衛策を発表する（後書き）

4世「くそー、もう嫌だー！」

3世「どうした息子よ。何を嘆いている」

4世「父上。私はどうして今の世に生まれてきたのですか」

3世「今の世に不満があるのか」

4世「ありますよ、ありますとも、ありますともさ。父上、なんで私は学校がある時代に生まれなかったのですか。学ランとかブレザーとかを着て、セーラー服とかブレザーとか、そんな服をきた幼馴染の女の子と一緒に、肩を並べて坂道を上り、桜散る並木道を通じて、学校に通学したかった。悪友・一学年下の後輩・一学年上の先輩・同じクラスで学園のアイドルである女の子とともにスクールライフをenjoyしたかった。胸を締め付けるような淡い恋愛をしたかった。それなのになんで！　なんで……なんで、なぜなのか……父上！」

3世「息子よ……」

4世「憐れむのはやめてください！　父上が私を憐れんだって、通路にある十字路で私が転校生の女の子と衝突することはないし、うっかりスカートの中に顔を潜り込ませてしまうこともないし、修学旅行先で浴衣姿の幼馴染に見とれてしまうようなこともないんだー！」

3世「……わかった。お前がそこまで言うんだったら学校を作ろう

！」

4世「マジでっ？」

3世「ああ、マジだ」

4世「うおおおおおおおおおおおおお！」

3世「生徒は男だけだな」

4世「ふぎけるなああああああああああああああ！」

|||||

||
||
||
||

画像はジャクナな4世さん。

41・アンチ口の学園

> i34148—4057<

二四三年の春。まずは十五人の子供たちがアンチ口という土地に建てられた学校に集められた。

アンチ口は王都センチュリオンの近くにあるなだらかな山や川に囲まれた土地である。体を鍛えるための山もあり、生活に欠かせない水もあり、自然もあつたので教育にはうってつけだとジャクナ王も考えたのだろう。

彼らが集まつた時点では、学校の建物はまだ完成しきっていないが、王太子たちが住む住居はすでに完成していたが、教室や馬小屋はまだまだ完成には程遠かった。だから、それが完成するまでの間は青空教室か、空いている居住スペースで授業をするしかない。

さて、アンチ口の学校に集められたのは、ジャクナ四世、リュキウス、マスタング、シユラク二世、カマラ・アネル、スタコイス・サウラー、その他書き記す意味のない少年たちである。

基本的に一人一部屋であつたが、身分の高い者はその部屋の前に警備兵を数人立たせていた。もちろん、王太子であるジャクナ四世の部屋は一番大きく、警備兵の数も多かった。それでも、それは王太子が望んだものではないようで、彼は自分に用意された部屋を見た瞬間、「別に、こんなに広くなくてもいいのだけれどね」と学友に言っている。

教師は各地から名高い者が集められ、彼らには多額の報酬が与えられていた。また、時々特別教諭がやってきて彼らに勉強を教えた。アンチ口ではいったいどんな勉強をしたのか。

それを紹介する前に、先に言っておかなければならないのは、この貴族の子弟たちの学校が、北の偉大なる王を生み出した学校の模倣であることということだ。ジャクナ王は偉大なる王がそこで受けた学科をほとんど忠実に再現しており、違つるところと言えば、こちら

の方が少しだけ学科数が多いことだけだ。

それではその学科に関する説明をしよう。

まずは座学である。

動植物に関する授業では、実際に人や動物の死体を解剖して見せ、中の臓器などの場所を生徒たちに丹念に写させた。

天候、気候、地形に関する授業ではどのような土地がどのような風土になるのか、そしてその風土はどんな天候になりやすいのか、さらにはどんな気候になりやすいのかを説いた。

天文に関する授業では星の名前と、意義ある使い方を説いた。ここまででは基本的な学問である。

これら自然科学のほかにも、算術や幾何学に関する授業も行う。

次の官房学（つまるところの経済学と財政学のこと。または、国庫に関する学問）では、書記官などのする王宮での雑務、従軍先での雑務の方法を教え、高貴な身分であっても自分の財政基盤を把握しておくように注意した。

また、哲学や論理学で物事の考え方を教え、政治学では法律の重要性を説いた。

文学、修辞学などの文学も教授された。これらのことは現在では考えられないほど重要視されており、特に修辞学の中の雄弁術は兵士たちの士気を鼓舞するためには絶対不可欠だと考えられていた。で、次に各地方のことを勉強した。まずはサウルス地方から入り、サウルス地方の歴史、中央サウルス、南部グナトウス、北部カンプトケファレ、東部ヘドロケラスの風土などを学ぶと、次はカバルス地方、北の偉大なる国の歴史、風土を……次はウアズマ、次は小ウアズマ、次はイハテリオという風にできるだけ重要な地方から教えていった。

次は戦闘技術に関する座学である。戦争の歴史では、聖獣と人の時代に起こった原初の戦争から始め、誰がどこでいつ、どんな作戦をとったのかを教えた。もちろん、カバルス戦役などの戦争も教えられた。

そして、次はそれで得た知識を使ってジオラマ上に展開された戦闘に関する生徒たちの考えを戦わせるのである。

それが終わらと軍法などを教えていく。

さて、実技系統に移る。

まずは簡単なランニングから、馬術（サウルス流、カバルス流）、重い石を使つての筋力トレーニング、相撲や拳闘それに剣闘、弓矢の訓練、集団歩行訓練、騎馬での集団歩行訓練、指揮訓練。

とはいえ、戦闘に関することは温室でいくら励んでも無駄なことである。歴史を見ても、部屋の中で勉強を熱心にし、ありとあらゆる戦いを勉強した將軍より、叩き上げの將軍の方が役に立つ場合が多い。というよりも、両者が戦った場合、叩き上げの將軍が勝つことの方が多し。やはりギャロップの言っていた通り、戦争とは実際にそれが起こつた状況でどれだけ柔軟に対処できるかなのである。

生徒たちの成績はどうだったのだろうか。

この時代に今のような厳密なテストはなかったが、授業中、教師がどれだけ頭に入っているかを確かめるために質問し、生徒たちに口述での解答を求めることがよくあった。

生徒の中で一番賢かったのはジャクナ四世だったと言われている。学友の皆が王太子に気を使っていたかのように思えるかもしれないが、そうではなかったようだ。ジャクナ四世だけは何のような質問にも、よどみなく答えることができたとのことである。例をとれば（上記した学問は簡略している書いているが）植物学の中には薬学と言う項目があり、薬の調合時の材料の分量から、その薬効、薬草の生えている場所や気候、ほかの草との違いなどを教師は事細かに聞いてくるのだ。これをジャクナ四世はすらすらと答え、学友たちは目を丸くして感嘆する。

座学に関して言えば、二番目はリュキウスだった。彼も知識量だけで言えばジャクナ四世にも負けはしなかったが、それには偏りがあったそうだ。つまり、彼は自分の興味あることしか覚えられない

のだ。

座学の三、四、五番目はとある生徒で、六番目はシユラク二世だった。彼はジャクナ四世にも対抗意識を燃やしながら勉学に励んでいたが、いかんせんまだ若すぎた。で、七番目はカマラ・アネルである。

実技関係で言えば、馬術はやはりマスタングが一番うまかった。一人での馬術だけでなく、集団での騎馬歩行訓練も彼は上手だった。リュキウスは父への手紙に『まるで、ギャロップ大將軍の指揮を見ているような指揮ぶりです。彼も、馬の歩き方だけで集団の速度を自在に操ることができのです。』と書いている。

では、指揮が一番うまいのはマスタングか、と訊かれたらそれはノーである。指揮はジャクナ四世が一番うまかった。

剣闘などの格闘技もジャクナ四世が一番だったが、これはさすがに皆が遠慮していたのだろう。輿のつもりで開いた剣闘トーナメントはジャクナ四世とリュキウスの戦いになったが、僅差でジャクナ四世が勝利した様だった。ところが、ジャクナ四世はリュキウスがわざと負けたと考えており、ことあるごとに「あの大会の本当の優勝者はリュキウスだ」と言っている。

ジャクナ四世は王太子という身分であるから他の生徒から一目置かれる存在だったが、そのジャクナ四世はリュキウスに一目置いていたようだった。そして、リュキウスも彼が自分を目に懸けているのを知っていた。このことに関しては、語る機会があればいいとしか言いようがない。

二四三年の秋、先に書いた剣闘大会もまだ開かれていない時のことである。

父シャンティから届いた手紙をリュキウスは自分の部屋で丹念に読んでいた。すると、部屋の外から兵士の声がして「マスタング様が来ました」と言った。

「通してくれ」とリュキウスが返事をする、部屋の中にマスタン

グが入ってきて、勝手にベッドの上で寝転がってしまった。「やあやあ、お暇なようだね」

「王太子におべっか使うのに忙しいのよりはましだろ」彼はぶつきらぼうに言った。「糞、むかつくぜ。あの、カマラの野郎」

「また喧嘩をしたのかい？」

「喧嘩？ 馬鹿な、おれがあんな低能な奴と喧嘩するわけねえだろ」マスタングは足をバタバタして鬱憤を発散している。「糞、糞……早くこんな所出ていきてえぜ。癢しゃくだけど、親父に手紙を出してみようかなあ、いまから従軍できねえかって」

「でも、ここでの経験は得難いものだよ。来てみて思ったんだけど、ここはそれなりに良い所だ」

「まあ、色々知れるのは良いんだけどな」マスタングは呟いた。「カマラの馬鹿もまだいい、やけに喧嘩を売ってくるシユラクも別にいい、他の奴も。けどな、ジャクナだけは……なんか違うだろ？」

「……まあ、ね」

心底彼の言う通りだ、と置いていながらもリュキウスは曖昧に返事をした。

「あいつは変だ。全く考えが読めないっていうか、なんとというか……。そうだ」マスタングは何かに気が付いたような声で言った。「そうだよ。あいつは何考えてんだ？ 依然として、戴冠後も特別なことをするつもりはない、って言ってるけど……絶対に嘘だろ。何か企んでいる目だけ、あれは」

「ぼくにもわからないよ」リュキウスは首を振った。「でもね……ぼくには、従兄上も自分自身の心根なんてわかってないような、そんな気がするんだ」

「あいつ自身も？」

「まっ、ぼくがそう感じたただけなんだけどね」

リュキウスはそう言うと、またシャンティからの手紙を読み始めた。

「おい、さっきから、何読んでんだ？ まさか、母ちゃんからの手

紙とかじゃないだろうな？　おい、マザコン」

「惜しいね、父上からだよ。大体、母上は手紙なんてめつたに書かないよ」リュキウスは書簡の一枚をマスタングに手渡した。「どうやら、サウルス国は今年も不作の所が多いらしい。一昨年おととし、ウチノホークの元王宮に農民たちが押し寄せてきただろう？　今年ももしかしたら同じことが起こるかもしれないってさ」

「けっ、ジャクナ王の敷いている重税のせいだろ。大体、お前の親父は総督なんだから、税率をなんとかできるんじゃないのか？」
「総督つてのはあくまでも、任官地の全権限を任されている、つてだけだからね。任されている、ということとは、実際に権限を持つているのは王であるということだよ」リュキウスは書簡に目を走らせながら言った。「父上もその制度の隙を突いているいろやつているわけだけど、そのせいでジャクナ王には警戒視され始めているし」
マスタングが渋そうな顔をする。

「だから、お前は親父がこれ以上不利にならないようにジャクナ王の所に来たのか？　ふん、逆にお前は親父を追い詰めちまった様にも思えるけどな。これでお前の親父は王に逆らえなくなっただぜ」
「そんなことはない。この学校へ入学する意思をジャクナ王たちの前で父上に伝えた時、ぼくの命のことなど考えずに父上の好きな風に行動していいと……ぼくは、そう言っただつもりなんだよ」リュキウスは憂いを含んだ表情をマスタングに向けながら言った。マスタングは口をだらしなく開けて、啞然としている。「まあ、その後にもとにそのことについて話さなかったから、ちゃんと通じたかはわからないけれどね」

「なんで、そこまでするのかよくわからんね。なんで」マスタングはつまらなそうな顔をしていった。「誰かのために自分を犠牲にできるんだ？」

「それは根本的な思想の違いとしか言いようがないよ。ぼくはそれでも良いと思っっているんだ。君は違っただろう？」

「当たり前だ。それで？　今年の不作に対して、お前の親父はどう

するつもりなんだ？ 書いてないのか？」
「書いてないね」

サウルス国東部へドロケラスで始まった農民たちの暴動は冬の到来と共に始まり、北部カンプトケファレ、中央部サウルス、南部グナトウス、西部カバルスという順番に広がっていた。そのうちカバルスの暴動は例の組織が関与していたのだろうと思われる。しかし、例の組織がカバルス内で活発化し始めたことよりも、サウルス国王のお膝元である中央部で国民の暴動が始まったことの方が事態の深刻さを的確に表している。また、暴動が広がるに際して農民だけでなく、職人などの一般市民も暴動に参加するようになった。

ジャクナ王や各地総督たちは軍隊を派遣して暴徒たちを押さえつけた。その際に暴徒と軍隊の正面衝突が起こった地域がいくつもある。シャンティが大きな力を持つ北部では総督である彼や、暴動が起きた現地に派遣されたギャロップの冷静な判断によって衝突が起きることはなかった。一方、シャンティがある程度の権限を持つ東部ではサウルス国内最大の正面衝突が起こり、数回の戦闘で国民が数百人も死んだとされている。

「やはり、策はなかったか」

とマスタングは学舎の中庭にある花壇の所に座って言った。各地では暴動が起きているというのに、アンチロは別世界のようにのどかだった。

リュキウスが苦笑しながら言う。

「この病気を癒やすための特效薬は見つかっていないんだけどね……。いかんせん、その特效薬は使用禁止ときている」

「特效薬とは……」亡きリザドス大將軍の末子であるサウラーがのんびりした口調で言う。彼はジャクナ四世よりも一歳年下の十四歳である。「やはり減税のことでしょうか」

「そうだよ」リュキウスが言う。「暴動の原因は増税・重税、そして特效薬はその逆の減税。でも、その減税という処置はとることが

できない。さて……どうすればいいのか」

「国民の不満を解消すればいい」

と急に声がして、三人が声の方を向くと王太子ジャクナ四世が彼らの方に歩いてきている所だった。マスタングがわけもなく気まずそうに目を逸らす。

リュキウスが反応を返した。

「従兄上おにいさま。では、国民の不満を解消する方法は？」

「リュキウス、では国民の不満の原因は？」

と王太子は質問を質問で返した。

「……そうですね」

リュキウスがあごに手を当てて考えていると、横にいるマスタングがぶつきらばうに答えた。

「さっきも言ってたじゃねえか、重税が国民にとっては不満なんだよ」

「マスタング、私はそんな簡単な質問をしないよ」

とジャクナ四世が冷たい笑みを浮かべる。マスタングはいっそう気まずそうにし始めた。

「重税の何が不満なのかを考えればいいわけですよね？」リュキウスがジャクナ四世に言った。「重税の何が不満なのか……。ううむ、重税になると、多くの食料を国に渡さなければならぬ。同時に、自分たちの分がどんどん少なくなっていく。つまりは飢えてしまう。そんな、将来への不安が大きくなると心が病んでしまう。それを引き起こした国に不満を抱いてしまう」

「それだけじゃないはずだけれど？」

とジャクナ四世が首を傾げる。リュキウスが続ける。

「これ以外？ ……あまりに重税が過ぎると国民は仕事をするやる気をなくしてしまい、それが耕作地の放棄にもつながり、最終的には食糧難にもつながることとかですか？」

「ですが」とサウラーが口をはさむ。ほかの三人がサウラーに注目する。「同じ率の税でも遠征前はこんな暴動は起こらなかった、と

先生たちは言っていました。いや、まあ、重税が続いたから不満が爆発したのだとも考えられますが」

「いや、それも重要だ」ジャクナ四世が指を立てていう。「遠征前はまだ希望があったのだ。国に食料をいっぱい送れば、遠征先でサウルス軍がいろいろな物を手に入れて、サウルス国内にもたらしてくれるかもしれない……という希望があった。だから重税にも耐えられた。けれども、今は違う。前回失敗したのだからどうせ次も失敗するさ、という考えが国民たちの脳裏に渦巻いている」

「付け加えれば」リュキウスが言う。「あの遠征で一番恩恵を受けたのは、自分たちで物を作っていない商人なんだ。それが農民や職人たちには不満だったんだろう。右から左に物を流すだけの奴らなんで自分たちよりも良い暮らしをしているんだって」

ジャクナ四世がリュキウスを見ながら言う。

「市民たちは外国への遠征がそれほど自分たちの理にならないことを知り、失敗してもまだそれを続けようとする国に対して不満を持っている」

リュキウスは快活そうな笑みを浮かべて、うんと頷いた。

「結局、どうすりゃいいんだよ」とマスタングは腕を組みながら言った。「解決策が出てねえじゃねえか」

「一番良い解決方法は減税だ。だが、それもできない」ジャクナ四世が、自分の父王を批判するように言う。「そして、暴徒を武力で鎮圧するのは問題の先送りだ。では？」

「いくつか、解決策はありますね。全部、ギャンブルですけど」リュキウスが言った。「まず、遠征は有益なものだと国民に知らしめればいいんだ。どこか適当な国に遠征して、瞬く間に攻め落として、国に富みをもたらせばいい。でもそれは、さつきも言ったようにギャンブルだ。これが成功すれば、食料問題も次のウアズマ遠征費用も全部解決するかもしれないけれど……失敗すれば国が壊れる」

「他には？」

「飢えに関する問題は、国庫に貯めていた古い穀物を配ることによ

つてどうにかなるんじゃないだろうか。ほかにも税がかからない農作物を増やすとか……いや、穀物は重要だから、それ以外の果実とか……」

「それは君の父上の？」

考えた解決策かい、とジャクナ四世は聞いた。

「ええ」よくわかったな、とリュキウスが手をぎゅつと握る。「ぼくの父上が手紙でこのようなことを……でも、これは、ええと」

「ジャクナ王、私の父上によって許可されなかった」

「はい」

「他にも策はあるはずだが？」

「いえ、ぼくは……今はまだこれくらいしか」

リュキウスが首を振る。振ったが、彼の脳裏にはちゃんとほかの案もあつた。

「本当に？ まだ色々あるはずだ。もつとたくさん浮かんでいるはずだ。あの遠征で唯一稼ぎまくった商人たちに罪をなすりつけるとか、浮浪者を奴隷の位しやくに落とし耕作地を耕させるとか、いや、奴隷ならば、小ウアズマからだって連れてきてもいい」

「野盗を装って大富豪の倉庫を襲い、奪った食料を農民たちに配るとか？」

と、マスタングが無情な風に言った。

「それはいい」

ジャクナ四世が優しげな眼をマスタングに向ける。マスタングはフイと顔を逸らした。

「でも」リュキウスが言う。「奴隷や罪人を無理やり農業に従事させるのは……長期的に見れば、損ではないのでしょうか。ぼくは東部の大教師であるアストロラーボン先生に指導を受けたことがあるのですが、望んでやる仕事とそうでない仕事ではやはり、その質が全く違うモノになるのです。だから農業は農民にさせるべきです。はい、確かに、彼らも好きでやっているわけではないかもしれませんが、けれども、彼らの頭には農業に関する知識が蓄積されており、

年中農業のことを考えていることによつて、思わぬ新しい技術を考へ付くこともできるのです。これは、自分が生きることだけを考へ、指導者のいう通りに作業をこなすだけの向上心のない奴隷や罪人では無理なことです」

「そうだろうか？ 農具などは自分が楽になるために編み出されたものではないのかな？ だったら、奴隷たちは自分の充てられた作業を少しでも楽にするために、新しい道具を生み出したりするのはないのかな？」

「収穫量が増えても自分たちに得はなく、作業効率が上がってもその分だけほかの仕事を任されるだけなのに、そんなことをするでしょうか？」

「そこまで頭が回らない者もいるよ。……とはいうものの、確かに農具の改良を考へ付く癖にそこまで頭が回らない者よりも、代々農家を営んできた普通の農民の方が農具の改良は期待できる。だから、浮浪者たちを捕まえて無理やり従事させるよりも、彼らの意思で農業を再開するように促した方が長い目で見れば得かもしれない」

ジャクナ四世が勝手に納得したところに、阿諛者あゆアネルがやってきて王太子に声をかけた。

「王太子様、どうかなさいましたか？」

と彼は犬のように従順そうな目をジャクナ四世に向けながら言った。

「なんでもない。彼らと少し話をしていたんだ。いやなに、国についての話だね」

「そうですか、しかしそれならば私が御相手をしたのに」アネルはキツと三人組をにらんでから言う。マスタングはペツと花壇に唾を吐いた。アネルは目ざとくそれを見つける。「おい、お前、なんだその態度は」

「ああ？ 花に水やってただけだよ」

マスタングが立ち上がつてアネルを威嚇する。アネルの方が二歳年上だが、マスタングの方が背は大きかった。

「ふん、お前の国ではそうやって花に水をやるのか。ははは、さぞかし臭い花が咲くのだろうな」

「馬鹿言うな、北国の人間の唾はさわやかな匂いなんだよ。東部の田舎者と一緒にするな。お前なんか半分小ウアズマ人じゃねえか」

「私の先祖は確かに、小ウアズマ人だったが……」

アネルは顔を真っ赤にしながら言う。彼はカマラ家の東方風の顔を色濃く受け継いでいる。

「アネル、もうよさないか」

ジャクナ四世がそう言うのとアネルはぐっとした唇をかんでから、怒りを抑え込んだ。

「わかりました」

アネルはジャクナ四世の袖を引っ張って、部屋の中に戻りましょと促した。

「ああ、わかつたよ。リュキウス、マスタング、サウラー、それじやあ夕食時にでも、また会おう」

ジャクナ四世は笑顔を浮かべながら、手を振った。

リュキウスは「ええ、夕方」と手を振りかえした。ジャクナ四世はすぐにアネルと話し始め、部屋の中に消えていった。

「けっ、あーあ、早くここを出ていきたいぜ。ほんとに」

マスタングはこのごろ癖になっている一言を言いながら、首を振った。

「その声は！」と不意に、近くの木から鳥たちが飛び出すくらいに怒鳴り声が聞こえてきた。マスタングは舌打ちしながら声の方を見た。そこにはシュラク二世が立っていた。彼は小さな体を揺らしながら、のっしのっしとマスタングの方に歩いた。「探したぞ。馬の所に行っているかと思っていたがこんな所にいたのか。さあ、今日は何の勝負にする？ お前の得意な馬か？ それとも、棒や木刀での勝負か？」

「次から次に……狭い環境だからしょうがねえが。おい、リュキウス、サウラー。さっさと行こうぜ」

マスタングは立ち上がって、リュキウスたちを招きながら言った。「待てよ！」シユラク二世はマスタングの服を掴みながら言った。二人の体格は二、三回り違う。「逃げるのか？ 逃げるのか？ 卑怯者」

「……………」マスタングは額に血管を浮き上がらせながら言った。「ああ、逃げるんだよ。だから、おれを解放してくれや」

「それはだめだ。おれは、戦ってお前に勝ちたいんだ。お前に実力で勝って、おれは強いのだと証明したいのだ」

「はあ？ 誰に？」

「ちちう……………」ジャ、ジャクナ王にだ。もしくはジャクナ四世に。まあ、おれは将来、お…………いや、大將軍になりたいのだから」シユラク二世はあせあせしながら言う。「だからだなあ」

「お前さあ、お前の親父の境遇知ってんのか？」とマスタングが言った。「お前の親父はジャクナ王に嫌われてんだよ。だからな、例えお前が立派に育っても、王から重用されることなんてないんだよ」
「マスタング！」

リュキウスが怒鳴る。マスタングは、おれは悪くねえ、と言う感じに鼻を鳴らす。

「そんなことはない！」シユラク二世は一転して涙目になりながら訴えるようにマスタングに怒鳴った。「お、おれの父上は、最近になってやっと自分を陥れた人間を見つけたんだ。だから、それをジャクナ王に訴えて…………それが…………認められたら…………また、大將軍とか、総督とかに任命されるんだ」

「……………」そうか」マスタングはつまらなそうに呟きながら、リュキウスの方を見た。リュキウスは悲しそうな目をして俯いている。マスタングは知っている。ジャーニイの訴えがジャクナ王に認められなかったことを。リュキウスがシャンティから受け取った手紙によって、知っているのだ。けれど、それをシユラク二世に言うほど彼は無情ではなかった。「なら、もっと力をつけてからおれに挑むんだな。たとえ、一回勝ったからといって、その前に百回負けが記録さ

れるんじゃ、アピールにならないぜ」

マスタングはシユラク二世を引きはがして歩き始めた。涙をポロポロ流すシユラク二世の横を通るとき、リュキウスたちは気まずそうに頭を掻いていた。マスタングは常時開放されている書庫に入り、リュキウスたちも後に続いた。

「どうしたんですか？」

サウラーはジャーニイの事情をよく知らず、さっきの雰囲気の理由がわかっていなかった。

「……まあ、色々だ」マスタングが机の上に腰掛けながら言った。

「おい、リュキウス。なんでシユラクの親父の訴えは受け入れられなかったんだ？」

訴えつてなに？　と言う風な顔をするサウラーに、リュキウスは初めから話すつもりで説明を始める。

「シユラクの父上であるジャーニイ様……ぼくの叔父上はサンジャヤ成敗の時、カバルス地方での兵站を担当していたんだ。けれど、それは何者かの妨害のせいであまくいかなかった。ジャクナ王は兵站があまくいかなかったのは、叔父上が自分を殺そうとしたせいだとして叔父上を南部グナトウス監督に左遷したのだけど、左遷先でも叔父上はめげずにサンジャヤ成敗時の情報を集めていたんだ。それがここ最近になって叔父上の邪魔をしていた犯人が分かった。犯人は、カバルスにある闇の組織に所属する者たちだった。そこで、叔父上は数十名の名前が書かれた犯人のリストを作り、証拠を集めてジャクナ王に提出した」

「証拠を……。それでもあまくいかなかったんですか？」

とサウラーが言った。

「うん、あまくいかなかった。ジャクナ王はそのリストも証拠も見もしないのに棄却したらしい」

「だから、なんでそうなるんだよ」

マスタングが納得いかないように声を荒げた。

「もともとジャクナ王と叔父上は仲が悪いんだ。叔父上も、御爺様

の生前には、自分が王になる、としきりに言っていたようで……つまりは、叔父上はジャクナ王に信用されていないわけさ」

「そつえば……おれの糞親父も、ジャクナ王は猜疑心の塊だあ、とか言つてたな」

「じゃあ、本当にシユラク様も不遇な人生を？」

サウラーがリュキウスに尋ねた。

「それはないよ。従兄上の治世になればね」リュキウスは意味深な顔をしながら言う。「まあ、本当にシユラクが実力をつければ……つて話だけど」

マスタングはフンと鼻を鳴らした。

「それよりも、マスタング」リュキウスは打って変わって、怒ったような顔つきになって言う。「君はもう少しシユラクの気持ちを考えてられないのか」

「おれの周りに妙にまとわりつくあいつが悪いんだよ。大体、なんであいつはあんなに勝負馬鹿なんだよ」

「それは……」言っているのだろうか、と思いつつもリュキウスは言う。「シユラクは叔父上に気を懸けてもらえないから……。少しでも実績を残して叔父上に褒めてもらいたいんじゃないのかな？」「なーにが」父親に褒めてもらうだ、とマスタングはつまらなそうに言った。「そんなのどぞのリュキウスくらいのもんだ」

「いいえ、父上に褒めてもらいたいのは誰でもそうですもの」とサウラーはのんびりした調子で言う。

「……そうだね」

リュキウスはサウラーを見つめながら言う。彼の父親のリザドスは小ウアズマで死んでしまっている。だから、彼はもう父親に褒めてもらうことなどできないのだ。

「そうかい」

マスタングは頭を掻きながら言った。

「そうだよ」

君だってそうじゃないのかい？ 君だって、ギャロップ大將軍に

褒めてもらいたいんじゃないのかい？

そう思いながらリユキウスは、マスタングを見ていた。

それから三人は適当に時間を潰した後に食堂に向かった。食堂には十人ほどが座れる長い机が二つあり、すでに何人かの生徒は席についていた。席に決まりはないので彼らは空いている所に固まって着席する。少ししてシユラク二世が食堂に姿を現すと、一目散にマスタングの所にやってきて隣に座った。

「なんだよ、隣に座んなよ」

とマスタングが言うのと、シユラク二世はムツとした。いや、初めからムツとはしていた。

「見てろ。今日こそはおれが一番の早食いだからな」

シユラク二世は机を握った拳の側面でどんどんと叩きながら言った。

「はあ、だから早くここを出ていきたいんだよ」

さっきのいじらしさはどこに行ったんだ、とマスタングは溜息をついた。

やがて、全員が食堂に集まって着席すると食事が運ばれてきた。

成長期の少年たちがほとんどなので、食事はタンパク質の多い肉類が中心だった。しかし、冬季になると中々獣は現れない、だから燻製肉や栄養価の高いキノコが頻繁に出されるようになる。

「また、キノコか」マスタングは言いながらもキノコを口に入れる。口の中でキノコを噛みながらシユラク二世の方を見た。シユラク二世はキノコとにらめっこをしている。マスタングはにやにやしなからキノコを呑みこむと、シユラク二世の方に顔を寄せた。「ああ、キノコ食べられないのー？　もしかして嫌いなー？」

「う、うるさい。食べられるに決まってるだろ」

シユラク二世はキノコを口の中に放り込むと、二、三回噛んだだけで飲み込んでしまった。

「シユラク、よく噛まないで胃に悪いと先生に習ったじゃないか」

リュキウスがやんわり注意する。シユラク二世はそれを無視したままキノコをごくごくぐんと飲みこんでいき、ついには皿の上のキノコがすべてなくなつた。

「どうだ」

シユラク二世は勝ち誇つたような顔をマスタングに見せながら言つた。

「だから？ おれはこの皿を食い終わつてもおかわりするつもりだけど？」

マスタングはそつけなく言つた。

「ははは、負けそうになつたら今度は大食い勝負というわけか」

「ああ」

「……おい、そんな率直に言われたら言い返せないじゃないか」

アンチ口の田舎に建てられた学校では、夕食を食べた後は特にできることはない。学校の門なども警備兵が嚴重に警備していたりするから、夜に外へ出ていくこともできないし、周りには山や原っぱしかないから出ていく理由もない。

生徒たちは自分の部屋に帰るか、他の生徒や教師の所に行くか、書庫に行くかである。

その日のリュキウスは自分の部屋に帰つてシャンティ宛の手紙を書いていた。最初の内は近況を書いて、授業で習つたことなどを書いていたが、徐々に国勢のことを質問する手紙になつた。はつと気が付いてみると、手紙の後半はまるまる質問だけで埋め尽くされていた。リュキウスはこのまま出そうかどうか悩んだ後に、それを送らないことにして新しい手紙を書き始めた。

やっと手紙が書き終わつた時にはもう真夜中で、灯心の火の音が聞こえるくらい静かだつた。リュキウスは頬杖をついて、ぼおつと灯心の火を見つめていた。

なんとなしに王太子について考えた。

あの人は何者なのだろうか。どんな想いを胸に秘めているんだろ

うか。王位についたならば、サウルスをどんな国にしていくつもりなのだろうか。そして、ぼくたち学友を、サウルス国民を、いったいどこに連れて行くつもりなんだろうか。………。

それは考えても考えても結論が出ない問いばかりだった。

ああ、だめだ。やめよう。正面からあの人に向き合っちゃあ、だめなんだ。あの人を理解しようとするのが無理な話なんだ。

リュキウスはふっと息を吐いて灯心の火を消した。部屋の中が真っ暗になり、その中で少しの間座っていた。頭の中は空っぽで、視線は闇の中をさまよっていた。頭がどんどん冷えていくのがわかった。

41・アンチ口の学園（後書き）

王太子「おーい、学友のみんな、集合」

学友一同「なんだ、なんだ」

王太子「これから課外活動を始めます」

マスタング「いきなり呼び集めたと思ったたらそんなことかよ」

リュキウス「で、従兄上あにいもうと。何をするんですか？」

王太子「サークルを作ります」

シユラク2「活動内容は？」

王太子「サウルス国で大ヒットするような娯楽たっぷりな物を作ります」

シユラク2「具体的には？」

王太子「美少女攻略ゲームを作ります」

学友一同「!?!」

マスタング「ふざけ……」

王太子「反論は聞きません。はい、リュキウスはシナリオ担当でお願いね」

リュキウス「わかりました。任せてください」

マスタング「順応速いな」

王太子「シユラク2はイラストね。キャラクターも描くんだよ」

シユラク2「二号っていうな。っていうか、おれがイラスト担当なのか？ そいうのはあんまり描いたことないけど……」

王太子「最終的には金髪ロング巨乳エルフを描いてもらうからね。

承知しておいてね」

シユラク2「……」

王太子「で、カマラ・アネルはプログラムお願いね」

アネル「なんとかやってみます」

マスタング「……ねえ、おれは何をすれば」

王太子「スタコイス・サウラーは音楽……musicお願いね」

サウラー「引き受けました。エンディングは女性歌手に歌ってもらいましょう」

王太子「それ、いいね」

マスタング「おれは何を……」

王太子「馬でも乗ってる」

マスタング「頼む……おれにも何か仕事を」

王太子「じゃあ、雑用でもやってもらおうかね」

マスタング「やったああああ」

学友一同（仲間に入りたかったのか）

リュキウス「ところで、従兄上は何をなさるんですか？」

王太子「企画と制作進行」

学友一同「ふざけるなああああああああああああ！」

|||||

画像はマスタング。子供たちはIKEMENが多いので、一人くらはいそうじゃないのがいても良いかなと思って描いてたら、思った以上に微妙になりました。体の所も絵的にボロボロだし。

というか、ここからはなんだか言って、それなりに絵があります。

ちよつとずつ描き足したりしたので、当初の予定よりも絵が多いです。

42・西から始まる

> i342551-4057<

二四四年の春。シャンティは総督軍一万と自警軍二千を率いて東部からやってくる野盗との戦闘を何度も行った。

二四三年から各地で始まった暴動はこの年まで断続的に続いていた。軍を率いてどこかを鎮静化すると、すぐに他のどこかが暴動を起こすので、軍隊に休み暇はなかった。

さらに軍隊にも徴兵がいることを忘れてはいけない。彼らは自分たちの地元が暴動を起こした際、現地に駆け付けるとすぐさま敵に味方することがあった。シャンティもその裏切りのせいで何度か危機に瀕していた。

シャンティは長い行軍と無意味な戦いの合間に総督としての仕事を行い、浮浪者たちを耕作地に戻す施策を何度も試みたが、それはほとんど成功しなかった。

戦っていたのはシャンティだけではなく、ギャロップもそうだ。ギャロップは一個軍団を率いてサウルス各地を走り回った。彼はシャンティの反感を意に介さず、暴徒たちに対して冷酷を貫いた。

サウルス国南部の一地域であるドーン平野において、彼は騎兵を使い、暴徒を包囲。最後に、カバルス戦役時の様に予備隊を敵決勝点に送り込むことでドーン地方の暴徒たちを殲滅した。史家によっては、このドーン平野鎮圧戦は虐殺とも捉えられる戦いである。なぜならギャロップは、「武器は農具、防具はなし」の二千の平民を一万の屈強な兵士で相手取って、さらに彼らが劣勢時に申し込んだ降伏すら受け入れず、そのまま戦闘を続行したからだ。

だが、この虐殺ともとれる戦いがあったおかげで、南部ではこのあと大規模な暴動が起こっていないのも事実だ。

ギャロップが見せしめのためにそんな戦いをしたのだということ はシャンティも理解していた。けれど、彼への怒りを自分の中で貯

め込んでおくことは到底できなかった。

シャンティはギャロップが北部、東部に来た際に自ら時間を割いて会いに行き、彼に苦言を呈した。

「なぜ、そうやって悪役になろうとする」シャンティは野営地に建てられた大将軍用のテントの中でそう怒鳴った。「なんで、ぼくに相談もしなかった」

「……」ギャロップはつまらなそうな顔をシャンティに向けていた。「相談してどうなるって言うんだ？ お前は、奴らを口先だけで止めることができたっていうのか？」

「それはできなかったかもしれないが、それでもあそこまでやる必要はなかったはずだ」

「お前はそう言うが、あのおかげで南部にはもう大規模の暴動は起こっていないのだ。大体、各地に起こる反乱をのらりくらりと鎮めて行ったんじゃない、じり貧で最終的にはこっちがつぶれることになる。わかるか？ 国がつぶれるんだぞ？ ふん、そうしたらこの国は他国からの餌食にされるだけだ。北部はイムサ国に襲われ、東部は小ウアズマ人に襲われ、西部はイハテリオの諸国に奪われる。それでもないってのか？ シャンティ、大を取るために、非情に徹して小を切り捨てるべきだ」

「だからと言って……」シャンティは泣き出しそうな顔をしながら、呻くように言った。「なぜ、君がする」

「誰も実行しなかったから、おれがしたまでだ」

「ギャロップ、誰かのために悪役になろうなんて思うな。安易に自分を犠牲にして誰かを救おうなんて思うな」

「それをお前が言うな！」ギャロップはカツと顔を真っ赤にしながら怒鳴った。「シャンティ、お前こそ安易に自分を犠牲にする癖に、なぜおれはだめなんだ？ 別にいいじゃないか、おれはこれが好きなんだ。おれは戦争に狂っているんだ。虐殺も、おれの愛する戦争の一面に過ぎないんだよ」

「確かに君は戦争を愛している。しかし、君は悪役には向いてない

よ」シャンティが呟いた。「だって、君は人の痛みをわかってしま
うから。それに、ふん、君は……自分が思っているよりも優柔不断
だ。今だって自責の念や不快感と戦っているんじゃないのか？ 後
悔や敗北感に押し潰されそうなんじゃないのか？」

「何を知ったような口を……」

ギャロップは俯いて、小さく、囁くように言った。シャンティは、
彼が泣いているのじゃないだろうかと思っただ。

「ギャロップ、ぼくを君の軍に入れる。それか、君がぼくの軍に入
るんだ。なに、司令官などすぐにほかの者が見つかる」シャンティ
は彼のテントを出ながら、彼の方を見ずに言った。「君が悪役を担
うなら、ぼくもその半分を担うさ」

「意味が分からん。なんでそんなことをする。お前が……おれを戦
争に引き戻したからか？」

ギャロップは、カバルス鎮定軍を作った時のことを思い出しながら、
震える声で言った。

「馬鹿な。友達だからだ」シャンティは兵舎を出る瞬間に叫んだ。

「何度も言わせるなよ！」

ギャロップは独りテントの中に残された。歯がカチカチと音を鳴
らしていた。その音が煩わしくて、彼は下唇を噛んだ。

気が付けば涙が溢れていた。ギャロップは前を向いて、シャンテ
イが出ていった方を見た。恥ずかしくて、感謝の言葉も考えたくな
かった。けれども、頬を伝い、あごから零れ落ちるその涙は明らか
に、その言葉に代わる、純然たる謝意の表れだった。

「なんだよ、あのアホは……」ギャロップは涙も拭かず呟いた。

「友達だって？ ……そんな者のために、自分自身を無駄にしよう
とするんじゃないよ」

ギャロップの率いていた軍はシャンティの手によって解体され、
各地方の総督軍や自警軍に加えられた。ギャロップは二千のカバル
ス騎兵を指揮する将としてシャンティの軍に加えられることになっ

た。

これは全てシャンティの独断であった。シャンティはギャロップを自分の軍に加えた後に、その事実をジャクナ王に報告した。ジャクナ王は軍の権力がシャンティに集中され、さらにはギャロップのような独立した軍が消えるとなると、各地で次々に起こる暴動に柔軟に対処できなくなるとして、すぐに元の形に戻すように命令したが、シャンティは「現場のことは現場に任せてほしい」とし、これを断固として受け入れなかった。

ジャクナ王はこれに対応すべく、アンチロから十五人の生徒を呼び寄せた。これは、シャンティとギャロップへの脅迫状である。もし自分を裏切ったら、すぐにお前の息子たちを処刑するぞ、と言う脅迫状である。が、名目上は、各地の反乱が大きくなってきたので子供たちを安全な場所に移す、とされていた。だから、彼らの教育は王都の近くの古い離宮で続けられることになる。

マスタングは新しい学舎である離宮のテラスからぼけつと外を見ながら言った。

「ははは、親父たちも思い切ったことをやったな。軍を解体したのは、どういう意味があるのかわからないけど」

離宮は高い城壁で囲まれており、いくつかある城門は全て厳重に警備されている。これでは逃げることはできないだろう、とマスタングは思っていた。

リュキウスがシャンティからの手紙を読みながら言う。

「まあ、父上たちにもいろいろ考えがあるんだよ。それよりも……これに危機を感じたジャクナ王が減税を実施してくれたならいいんだけど」

彼の持つ手紙はジャクナ王の目に通され、問題なしとされたものである。リュキウスが手紙を出すときも、同じようにジャクナ王の検閲が入る。

「あーあ」マスタングは大きなため息を吐きながら、けだるそうに言った。「多分、今から減税しても無理なんじゃねえのかなあ」

「やっぱり、君もそう思うかい？」

二人の予想は当たっていた。

ジャクナ王は、二四四年の冬までにこの問題をどうにかしなければ、もう国民との全面対決しかないと思っていた。いや、ほとんどの者も同じように思っていた。だから、二四四年の秋の初めにジャクナ王が「今年は減税処置をとる」と発表した時、地方の官人たちは「ああ、これでやっと混乱が収まる」と胸を撫で下ろした。

ところが、完全に火がついていた国民の反抗心はそう簡単には収まらなかった。減税の由が各地に伝えられた後も暴動は続いた。彼らはすでに反サウルス国団体、もしくはサウルス国転覆組織に成長していたのだ。

彼らの先頭に立ったのは各地方の一部貴族や富豪……つまり有力者、と学者などの思想家である。有力者はサウルス王族を打ち滅ぼし、自分が新たな王族となることを望んだ。思想家たちは、やはりサウルス王族を打ち滅ぼして、自分たちで住みよい新国家を作ろうと考えた。

彼らは豊富な物資や話術によって人を集め、武器などを作成して武装した。そして、自分たちの住む地域の近隣から自警軍や貴族などを追いだした後に、表立って軍事訓練を行い、ジャクナ王を挑発した。彼らは各地の要塞都市を本拠地とし、独自に政治を取り始める。

ジャクナ王は顔を真っ赤にしながら、各地の反乱軍を鎮圧するようになんて命じた。ジャクナ王は追い出された自警軍や貴族をまとめて各地に派遣。その際の軍策などはギャロップが提示し、派遣された軍団は反乱した国民の籠る要塞都市を陥落させた。

ジャンティたちは特に勢力の強い要塞都市に赴いて、決戦、攻城戦、和睦などの方法でそれを開城させた。

二四五年の年明けすぐ、攻城戦を終え都市を解放したばかりのジャンティたちのもとに衝撃的な情報が届いた。北部の要塞都市であ

り港町でもあるスピノが、モーキリニアのイムサ国と結託していることが分かったのだ。

シャンティたちは雪の積もったカンプトケファレの大地を行軍してスピノに向かった。要塞都市スピノは数百人の兵士たちによって守られていた。シャンティたちは和睦を進めようとしたが、スピノの有力者たちは使節を殺し、二日後にそれを市城壁にぶら下げてシャンティたちに見せつけた。シャンティたちは即日攻城戦を開始する。

スピノはシャンティたちからの使節を殺すと同時に、モーキリニアのイムサ国に対して救援要請を依頼していた。イムサ国はすぐに船を出して救援に向かう。だが、シャンティたちはスピノ側が和睦に応じなかった時のことを考えて海からも兵士を送り込んでおり、スピノは陸と海の両方から攻撃されてあっけなく陥落した。シャンティたちは有力者、先導者たちを処刑した。

このスピノでの戦いにおいてビッグフトスが戦死している。彼らは海側からスピノに攻め込んでいた。彼らは軍船を港につけ、そこから都市の中に入り込んだ。街中での激しい攻防戦の末に、ビッグフトスは敵の矢に心臓を射貫かれて絶命すると、その後のビッグフトス隊の指揮はフトスに引き継がれることになった。フトス隊はビッグフトスの死体を置き去りにしたまま街中を駆け抜け、市城壁の城門を開いた。外からは数千の兵士たちが一斉に侵入し、スピノは陥落。シャンティはビッグフトスの死を前にして崩れ落ちた。

シャンティは雪の中の行軍のせいで風邪をひいていたらしく、二日後には全快したが、その時にはもうビッグフトスの死体は火葬されていた。シャンティはこのことを手紙にしたためてリュキウスに送った。

二四五年の春の初め、カバルスでも反サウルス国を謳う組織がいくつも立ち上がっていた。カバルスのそれはまとまりがなく、一つ一つの組織の大きさを見ればかなり小さなものばかりだったが、そ

れは無政府主義であった例の組織からすれば望むところだった。

このままサウルスが崩れてくれれば、カバルスは今ある小規模な反サウルス国組織を基本とした国になるはずだ。そうすれば、太古のような、自由で幸福な時代が訪れることになるだろう。例の組織の幹部であったヒツパリオン・ハンスは仕事場である元王宮を歩きながらそんなことを考えていた。仕事場へ出勤する彼の足取りは軽やかであった。

それも仕事部屋に着くまでの間までだった。仕事部屋に着いた彼の前には十数人の兵士たちが待ち構えていた。部屋の中には震えながら立ち尽くしている同僚もいる。

これはなんだ？　と思っていると、仕事仲間の一人がハンスに気が付いて、彼の方を見ながら「ハンス、お前……何をしたんだよ？」と泣き出しそうな顔で訊いた。

「……」何かがばれた……。でも何が？　そして、誰に？　とハンスは血の気が引いていくのを感じながら思った。兵士たちはハンスを羽交い絞めにする。彼は他人事のような面持ちで、なすがままにされていた。「これは……これは、いったいなんですか？」

「ヒツパリオン・ハンス、確保しました！」

と兵士たちの中にいたベアードが大声を出した。ハンスはベアードが声をかけた方を見た。そこには、彼の椅子に座るジャーニイがいた。

「ご苦労」ジャーニイは満面の笑みでハンスを見ていた。「おれの前の席にでも座らせてくれ」

兵士たちは命令通りにハンスを引っ張っていき、ジャーニイの前の席に無理やり座らせた。

こいつは王族のレジェム・ジャーニイ。ハンスはジャーニイの顔を見ながら考えた。なんで今頃、おれの前に……いったい、何をしに来たんだ？　いや、いやいや……何をしに来たのかなんて、ほとんどわかつていることだ。ああ、糞、糞糞糞！

「そうだぜ、お前に復讐しに来たんだ」ジャーニイは口角をひくひ

くさせながら言った。彼の顔には、以前カバルス総督として任官していた時のような若々しさはなく、年にも不相応ないっぱいの皺しわが刻まれている。その皺を見てハンスは、ああ、おれは死ぬのだな、と感じた。ジャーニイは自分の顔を見られているのに気が付いて、ぱつと自分の顔を触った。「おれも、苦勞したということさ。もちろん、この苦勞はお前にも担になってもらわないと割に合わない」

「監禁でもするつもりか？」ハンスは震えることと言った。顔には反抗的な笑みを無理やり浮かべている。「ふん、矮小で陳腐な考えだぜ」

「確かに、監禁して少しずつ苦しめて殺すなんてのは、使い古された……陳腐な復讐方法だ。とはいえ……ははは、おれも南部で鬱屈した生活をしていた時は、そればかり考えていたよ。しかしなあ……実際問題、今のおれにはそんな時間はないんだ。お前に構ってられる時間はないんだ」

「何をするつもりだ？」

「お前をどうにかした後で何か？ それは別にお前にいうことじゃない」ジャーニイは席を立ち、懐から短刀を取り出した。それをこれ見よがしに見せつけながら、鞘から剣をすらりと抜いた。「大体、おれはこうやってお前の顔をじかに見るまでは、お前にあつたらさつさと殺して次に移ろうと思っていたんだ。それなのに……お前ときたら、もう」

ジャーニイは刃をハンスの頬に当てる。刃のひやりとした感覚がハンスの頬に伝わる。ハンスはぶるぶる体を震わせながら、痛みと死に怯えながらジャーニイを見た。

「おいおい、もう震えてるのか？ もう少し意地を張ってくれよ。おれはてつきり、組織のためならば、思想のためならば死をも恐れない奴なんだと思つてたんだから」

「組織を知っているのか？ いったいどうやって？」

「知っているのかって？ 知っていなけりゃ、こんな時にそんな単語を言やしねえよ。ふん、お前のことを知つた時はたいそう驚いた

ぜ？　なんてつたつて、堂々と敵の腹の中に潜り込んで、金まで貰ってる奴がいるんだからな。で、何食わぬ顔で今日もこんな風に出勤してきたんだからな。でもこうやって死を目の前にすると、だめか。おい、震えがさつきから止まんねえぞ」

「馬鹿を言うな、ははは、死を恐れるはずがない。ふん、馬鹿め、馬鹿め馬鹿め！　おれは笑いをこらえているんだ。今頃になって、自分を貶めた男を知ることができた馬鹿を目の前にして、笑いをこらえているんだ。今頃になって、十年も前の復讐をしに来た馬鹿を目の前にして、笑いをこらえているんだ」

ははは、ははは、とハンスは甲高い笑い声を発しながら、自分を困む兵士たちを見た。兵士たちは彼に対して憐れむような目を向けていた。

「ああ、笑え笑え」ジャーニイは短刀の切っ先を彼の頬にぶすりと差し入れた。途端にハンスは笑うのをやめて泣き叫び始める。兵士たちは暴れるハンスを取り押さえる。ジャーニイはゆっくりとハンスの顔に傷を刻み込んでいた。片手で自分の顔の皺をなぞり、その通りにハンスの顔に傷を刻み込んでいく。ハンスの顎からはぼたぼたと血がしたたり落ちる。ハンスは獣のような叫び声をあげ、彼の同僚たちは、次は自分が餌食にされるのだろうかと怯えながらも、それから目を離せずにいた。「ヒツパリオン・ハンス、お前は大した男だよなあ。本当に、本当に……お前の親父もそうだ。大した男だ」

ハンスの顔に傷を刻み終えたジャーニイは短刀の血をふきながらそう言った。ハンスは俯き、息を切らしながら呻いていたが、ジャーニイのその言葉に反応して顔を上げた。

「ど……う……いう……意味だ」

ハンスはとぎれとぎれ言った。

「お前の父親、なんで王族をやめたか知ってるか？」ジャーニイは近くの兵士に向かって、あれを持って来いと言う。ハンスは黙ってジャーニイを見ていた。「知らないみたいだな。初めから話してや

るう。お前の親父はな、サウルス国をカバルスに招いた張本人だ」

ハンスは訝りながら彼の言葉を聞いていた。ジャーニイは続ける。「サウルス国がカバルスに攻め込むことを決めた時、サウルス国はまずカバルス同盟国内にスパイを送った。すると、お前の親父はどういう方法を使ったかは知らないが、そのスパイのことを突きとめて、サウルス国と接触を図ってきた」ハンスは目を見開く。おそろく顔中に傷がなかったら、もっと驚いた顔をしていただろう、とジャーニイは悔やんだ。「お前の父親はサウルス国にカバルス同盟国の情報を送ったり、カバルス同盟国内を混乱させたりして協力するから、サウルス国がカバルスを征服した暁にはカバルス地方の総督に自分を押し付けてくれと願い出たんだ。王族を辞めたのだから、サウルス国は征服したところの王族を殺す決まりごとがあったからだ。お前の父親が王族を続けていたら、カバルス征服完了時にお前の父親も殺さなきゃ、他に示しがつかなくなるだろ？」

「で……も……」

「お前の父親はカバルスにサウルス国を引き入れたはいいが、その途端に死んじまった。そのせいでサウルス国は大分苦勞をしたんだ。あの三本の角トライコーン戦術のこともそうだ」その時、ジャーニイの手に松明が渡された。ジャーニイはその松明の火に短刀の刃を当てる。「まあ、これらは、おれも後から知ったことだがな」

「そ……んな……」

ハンスは絶望したようにうなだれた。まさか、自分の父親が裏切り者だったなんて。

ハンス自身は無政府主義者であるからして、父親がカバルス同盟国のことを嫌っていたとしてもどうも思わなかったが、けれど、父親がいま以上の権力を握るためだけに、仲間を裏切ったなど……そんな薄汚い男だったなどと知ってしまったては……。

「父親を軽蔑したのか？ いいや、違うね。逆だ。お前は地獄でそれを誇るべきだ。地獄でお前の父親を敬うべきだ。なぜなら、お前の父親のその行動がサウルス国にはそれなりの貢献をしているんだ

からな」ジャーニイは熱せられた刃をハンスの傷に押し当てながら言う。辺りにはジュージューと肉の焼ける音が響く。ハンスのうめき声も。ジャーニイの侍従のベアードも、ハンスを取り押さえている兵士たちも顔を背ける。「お前自身も誇っていい。お前は、サウルスを内から揺すぶり続けることで、おれにこんなチャンスを与えてくれたんだからな。ははは。ありがとうと、精一杯言わせてもらう」

ハンスの顔に刻まれた傷は全てふさがれ、彼の顔には物々しい焼け跡が残った。ジャーニイはすっきりした表情を浮かべながら、兵士たちの方を見た。

「市場に持つて行って公衆の面前で処刑しろ。その際、ここまでのカバルスでの混乱は全てそいつのせいだったと言っただ。なに、カバルス人は馬鹿だからな、簡単に信じるさ」ジャーニイが命令すると兵士たちはハンスを引きずりながら連れて行った。ジャーニイはもうハンスのことなど忘れたかのような顔をしながら、その部屋から見ることでできるカバルスの澄んだ空を見上げながら言った。「さあ、国を取り戻しに行こうか」

ハンスは市場の中央で処刑された。

シャンティの日記内で初めて名前を記され、歴史に名を残すこととなったヒツパリオン・ハンスは、その後、この事件についての備忘録の中でその名前を書き記されるまで、表舞台には全く出ていない。だから、その間、彼が裏で何をしていたのかはほとんどわかっていなかった。

しかし、近年カバルス地方で発見された書類の中に、彼の名前で書かれた論文がいくつか発見されると、彼に対する研究が一気に進むことになった。とはいっても、彼は基本的に西都ヒツパリオンに鎮座して、各方面の仲間たちに指示を与えるだけなのでこれと言った話も残っていない。

彼の書かれた論文は文学者などの間で読まれることになったが、

現代の評論家は彼の残した論文については酷評しかしていない。

彼は、正直なところ才能のない人間だった。彼の書いた『自由人の思想』と言うしようもない内容の論文を見れば、彼の学術的な才の無さを垣間見ることが出来る。結局、彼は歴史に埋もれ、再発見されても「評するに値しない人物であつた」と評されただけであつた。

問題はここからである。

ハンスへの復讐を終えたジャーニイはその時のカバルス総督と手を組んでカバルスを鎮定に乗り出す。ジャーニイが動いたという情報は、総督の情報操作によってジャクナ王の所には届かなかつた。

ジャーニイが左遷されていた南部グナトウスでは、元大將軍のエルジスが他の貴族たちをまとめ上げ、密かに総督らの権限を掌握していた（総督だつたカマラ某は地下牢に閉じ込められた）。このおかげでジャーニイの情報は洩れる心配がなかつた。

ジャーニイがカバルスの反乱軍を全て打ち倒したのは夏になつてからである。後顧の憂いを絶つたジャーニイは西部カバルスにて発起した。彼は、自分をサウルス真王と称し、二万のカバルス兵を率いて東への進軍を開始した。同時に、南部グナトウスではエルルジスらが挙兵した。

ジャーニイやエルルジスの起こしたクーデターは、現王に反感を保持していた国民に歓呼を持って迎えられた。だから、彼らの発起した地域では国民は彼らの味方となつた。敵の敵は味方……に似ている。

さらに、王族のジャーニイが中心となつていたので保守的な国民たちには受け入れられた。

血筋というのは大事である。単に王族の血を引いているだけで、こういう時の求心力が格段に上がることもあるし、大義や正当性も確立しやすい。何よりも、圧倒的で、大義も正当性もあるシンボルに全ての罪をかぶせてしまえば、現王朝を打倒するという後ろめたさも少なくてすむ。

西部と南部での反乱軍同時発起。ここまではジャーニイの予定通りだった。しかし、彼には大きな懸念があった。それは名将ギャロップのことである。

とはいえ、現時点ではギャロップはジャクナ王の下ではなく、シャンティの下にいる。つまりは、シャンティを自陣に引き入れてしまえば芋づる式にギャロップも味方になるということだ。

ジャーニイはカバルス地方での野営のテントの中で、独り布団にくるまってこう呟いた。

「各地で反乱が起こり始めた頃、ヒツパリオン・ハンスを断罪するために作った人脈を駆使すれば、もしかしたら王座を取り返せる可能性があるかもしれないと思っていた。だが、王都にいる圧倒的な兵力と大將軍ギャロップの存在に目を当てれば、それは到底無理な話だった。そんな中で、シャンティがギャロップを自分の配下に置いた時、おれはこの構想がうまくのだと直感した。これは聖獣からの贈り物だ。幸運なのだ。おれはやるぞ、取り戻すぞ。全て全て、取り戻すのだ。たった一枚の紙切れであの憎いジャクナに奪われた国を、王座を、女を、夢を……誉れある孤独を、取り戻すのだ」

……しかし、忘れてはならないことがある。

ジャーニイが謀反を起こしたということは、実質的に人質とされていた彼の息子のシユラク二世は、命を奪われるということだ。そして、シャンティがジャーニイに同調したならば、リュキウスたちの命さえも……。

42・西から始まる (後書き)

ジャーニ男というか、体が描けんです。

43・王宮の反応

> i 3 4 3 2 7 — 4 0 5 7 <

西部カバルス、南部グナトウスが一斉に反旗を翻したと言う事實は、まもなくジャクナ王に伝わった。

西部からジャーニイが駆けつけるのを待つ間、南部グナトウスのエラルジスらは海路を使って東部ヘドロケラスに王国への謀反を呼びかけた。次に東部から北部カンプトケファレにその誘いが伝わった。ところが、東部の反乱軍も北部の反乱軍も、ジャーニイと手を組んで謀反を起こすには乗り気ではなかった。

というよりも東部に限れば、群を抜いて先導力のある指揮者がいなかったせいで、まとまりと決断力に欠けていたのだ。

自分が王座に就く姿を夢想していた有力者たちは、もちろんこの作戦には肯定的ではない。とはいえ、この作戦に協力すれば、ジャーニイのもとで開かれるであろう新王国で、自分たちの立場が向上するのも目に見えている。逆に、反乱軍が王国に勝てるわけがないと考え、ここで王国側に協力して、ジャクナ王に取り入ろうと思っていた者も多かった。割合で言うと、両者は半々くらいであった。対して、市民たちの意見はある一点において一致していた。

誰にでも分け隔てなく接し、民草には際限なく優しさを振りまくあの王族……王と市民の板挟みになりながらも多種の政策を考え、身を粉にして力を尽くしてくれたあの総督……ジャンテイが、もし反旗を翻すのならば、自分たちの総力を挙げて彼の軍団を支援しようという、その一点において彼らの意見は一致していた。

ジャンテイはもともと人に好かれやすい性質をしている男で、なおかつ一度知り合った者を見捨てられない性質も持っていた。市民からの敬意、そして大將軍ギャロップ。ここに至って彼のその性質は、彼を現王国存亡のキーパーソンに仕立て上げた。

しかし、誰の目にも、彼が反旗を翻す可能性は低いのはわかりき

っていることだった。

なぜなら、彼の愛息はジャクナ王の手の中にあつたからだ。

正統性の高い反乱軍が発起したのを聞いたジャクナ王は、すぐに兵士と食料などの物資を集めるように命令し、王都内には続々とそれらが運び込まれていた。

ジャーニイが謀反を起こしたということはすなわち、彼の子供であるシュラク二世は処刑されるということであった。それでも、もし、その情報がデマだった場合、さらにシュラク二世をすでに殺してしまっていた場合……そうなるとジャクナ王はジャーニイと交渉をすることができなくなる。だから、ジャクナ王はジャーニイが本当に謀反を起こしたのかどうかを確認しきれるまで、シュラク二世の生殺を保留にしていた。

保留と言つても、シュラク二世に逃げられては困るので、彼はほとんど軟禁状態に置かれ、彼のために用意された部屋の外に出ることはできなくなった。

が、ずっと一人にしておくかと自殺をしてしまう可能性があり、そうなるとどうしようもない。そう言うわけで、シュラク二世の精神の安全を保つために、その部屋に人を招くことはできるように処置した。

春の中頃のある日、リュキウスとマスタングは彼の部屋に訪れていた。シュラク二世は彼らを気にもかけず、椅子に座ったままでずつとがたがた震えている。マスタングは部屋の中を行ったり来たりして、落ち着かない様子でしきりに舌打ちをしていた。

「糞、馬鹿じゃねえのか！　なんで、いきなり兵を起こすんだ」マスタングは怒気のもつた声で叫んだ。「も、もう少し、やり方があつただろう。例えば、表立って行動するのは、リュキウスの親父が反乱に協力するのが決まってるからにするとか」

「いや、ぼくにしてみれば、さすが叔父上、と諸手を打って叫びたいぐらいだね。はあ、さすが叔父上……父上の双子の兄だけあつて、

父上の扱いには慣れている」リュキウスはドアにもたれ掛り、シユラク二世が変なことをしないように見張っていた。「こうでもしないと、ぼくの父上は決心なんてつかないだろうからね」

「決心つて……反乱軍を起こす決心か？ お前、本当に死んでもいいつてののか？」

「なんで？ 現在貧困で苦しんでいる人の命と、ぼくの命を比べて……ぼくの命の方を取るなんて、その判断は馬鹿げているよ？」リュキウスは心底わからない、といった感じの表情をマスタングに向けていた。「大体、ぼくは進んでここに来たんだ。死ぬ覚悟なんてすでにできているよ」

「お前は……」シユラク二世が齒をガチガチ鳴らしながらしゃべり始めた。「お前はいいのかもしれない。だって、お前はあの父親のもとでずっと幸せに育ってきたんだものな。けれども……けれども、おれは嫌だ。なんで？ なんでなんだ？ なんで、父上はおれのことを、まるでいないかのように………わからないよ。なんで、父上はこんなことができるんだ」

シユラク二世は痩せこけてしまった顔で、深い絶望の色を含んだ隈を携えた目で、リュキウスを睨んだ。彼の眼には悲しみと憎悪が込められ、それらはゆらゆらと煌めいていた。その目は、ぼくに向けるものではないのじゃないか？ とリュキウスは困ったような顔をしながら思った。

「……この後、どうなるんだ？」マスタングはシユラクを気にしながら尋ねた。「こいつも……シユラクもこの後に起こるであろうことを聞いていた方が、気が楽だろう」

「まあ、皆目見当がつかないというわけではないけれど……。というよりも、考えられることは一つだけだろうけれど……」

「おれは」シユラク二世が齒をかみしめながら言った。「殺されるのか」

リュキウスは彼から目を逸らしながら言う。

「……だね」

マスタングが訊く。

「逃げられねえのか？」

「無理だよ。君は六十人から百人の警備兵をかいくぐって、城門を開け、相手が追いつけないほど遠くに逃げられるのかい？ しかも、こつちには地の利はないだろうし、準備する十分な時間もない」リユキウスがそう言うと、マスタングは苛々しながら舌打ちした。「でも……それ以外の方法で、命は奪われなくてすむ方法があるかもしれない」

「なんだと？」

マスタングが言う。シユラク二世は目を見開きながらリユキウスを見た。リユキウスはシユラク二世を見つめながら、苦しそうな顔で言う。

「シユラク……ここは、ぼくに任せてくれるだろうか？」

シユラク二世に否定する理由はなかった。彼は青い顔を縦に振った。

二日後の夜、月の映える夜。シユラク二世は離宮から連れ出され、王都センチュリオンの王宮にいるジャクナ王のもとに向かった。シヤクナ四世、リユキウスはシユラク二世が乗っている馬車とは別の馬車に乗って王宮に向かう。

シユラク二世は外からカギを掛けられた馬車の中に押し込められている。彼は建てつけられた椅子の上で三角座りして、鉄格子の窓の外にある黄色い月夜を見ていた。

思えば、なんでおれは死ぬのが怖いのだろうか……。彼はがたがたと揺れる馬車に腹立たしさを感じながら考えていた。死ぬのが怖いということは、死ぬ際の痛みが怖いのだろうか……。そうかもしれない。できれば痛みなく死にたい。そう懇願すればそうしてくれるだろうか。……。できれば……。痛みなく？ そんな馬鹿な。おれは、おれは英雄になることを、王になることを望んでいたんだぞ？ そんなわけあるか、そんなわけあるものか！ 英雄とは痛みと苦

しみと悲しみを友とする者のことだろう。ならば、おれが死を恐れるはずがない。おれは……おれは、じゃあなぜ。

彼はごろんと寝転んで、月夜を見た。黄色い月を見た。

黄色……。そう考えた彼の脳裏には、太陽の光に反射して美しく輝く金髪が、風に吹かれてそよそよとなびく情景が浮かんだ。この髪は？ ああ、これは父上の髪だ。……父上。そうだ、おれはだから……英雄になりたいのだ。あの人に認められたいのだ。あの人に、父上に認められる人間になりたかったのだ。あの人が英雄にあこがれるから、おれは英雄になろうと思ったのだ。あの人に振り向いてほしくて、見てほしくて英雄になることを考え始めたのだ。おれは英雄に……。そうなんだ、だから生きたいのだ。おれはまだ、あの人に振り向いてもらってははいない。でも……なんで、全くおれのことを気にかけてくれない父上なんか認められたいと思ってるのだろうか。決まっている。憧れていたのだ、ただただ一点のみを見つめているあの瞳に、父上の瞳に、父上の姿に。例え、それが他の者の目にみじめつたらしく映った姿であったとしても、おれにはこの上ないくらいに恰好の良い姿だったのだ。おれはあの瞳に見てほしいと思っただのだ。

「だから、おれは死にたくない。まだやり残したことがあるから」
シユラク二世は微笑みながら呟いた。「リュキウス、助けてくれたら感謝はするさ。でも、おれにはそれ以上お前に何かを返したいなんて思わないぜ」

それでも、お前はおれを助けるんだろうな。まったく、お前は……。

「損な性格だ」王宮に向かう馬車の中でジャクナ四世は目の前に座るリュキウスを見ながら呟いた。「お前は、呆れるくらいに損な性格をしている」

「いきなりなんですか？」

馬車がかたがたと揺れる。少し驚いたような顔をしたリュキウス

は、次に困ったような笑みを浮かべながら、そう質問した。

「リュキウスは損で、困った性格をしていると言ったのだよ」ジャクナ四世は微笑を浮かべながら、冷やかにも見える目をリュキウスに向けた。「今回の申し出には驚いた。何に驚いたのかと言ったら、こんなにも自分の命を簡単に捨てられる人間がいるのかと驚いたんだ」

「この前のことですか……」

「これからのことでもあるがな」

「従兄上はどう思います？ ジャクナ王はぼくの願いを聞いてくれるでしょうか」

「聞くだろうな。それに……私も頼み込むのだ。聞かねばならないさ」

「それなら安心です」

リュキウスは満足そうに、にこりと笑う。

「だがな」ジャクナ四世は付け足した。「お前のしようとしていることはその場しのぎにしかならないのじゃないか？ だって、シャンティ叔父上が裏切ってしまったえ……」

「そうだったなら、仕方ないことです」リュキウスは諦めた様にした。「いいんですよ、ぼくは。それが父上の決めたことならね」

「ふーん。それにしても、シユラクを助けてどうするつもりだ？ たいして才のあるようには思えないけれど……」ジャクナ王が窓の外に目を移しながら訊く。リュキウスはどう返事をしようかと頭を掻いた。「ふふ、いやいや、愚問だったな。お前には、人の命を助ける理由など必要ない。それが知己ならばなおさらだ」

「理由ならあるんですがね……。だって、ほら」リュキウスが人差し指をピンと立てる。「人が死んでしまうと寝つきが悪い。ぼくはぼくの安眠を守るために人を、友を守るんですよ」

「死ぬかもしれないギャンブルを前にしてその軽口か？ ははは、大した心臓だ。まあ、お前のその度胸に免じて、そういうことにしておこう。だが、わかっているな？ 今回のことは貸しだぞ。忘れ

るなよ、この貸しは必ず返してもらおう」

「……何やら、怖い人に借りを作ってしまったようですな」

リュキウスは微笑みながら、けれども心中ではぞつとしながらそう言った。

「なに、気にするな。貸しはすぐに返してもらおうことになるだろうさ」

「え？」

どういう意味だ？ リュキウスはそうは尋ねなかった。彼の言葉の意味を聞くと、彼に借りを作るのが嫌になってしまう可能性があると感じ、瞬間的にそれを忌避したのだ。リュキウスは自分の背中に、急に嫌な汗が流れ始めたのを感じた。この人は……何を考えているんだ。

ジャクナ四世は冷やかな目で窓の外を見つめていた。彼の顔は、いつも通りの、不気味な微笑みを携えている。

シュラク二世たちは馬車に乗ったまま王都の市城壁を潜り、街中を通って城壁を潜る。夜の町はひっそりとしていた。リュキウスが窓から見た市民たちは、何か厄災が通り過ぎるのを、息を殺して待っているような雰囲気を感じていた。

シュラク二世は、馬車から降りると十人ほどの兵士たちに囲まれて王宮の中に入っていく。ジャクナ四世やリュキウスは数人の護衛と共にその後を追う。彼らは玉座の置かれている部屋に招かれた。

部屋の中にいたジャクナ王は険しい顔をシュラク二世に見せた後、後ろにいるジャクナ四世たちに気が付いて、顔をしかめた。

「我が息子ジャクナはわかるが……リュキウス？ なぜ、君がここにいるのだ？」

「はい、ジャクナ王。実は、私はシュラクの命を助けていただけのように上申に参ったのです」

リュキウスがきびきびと言った。

「それは……無理だ」ジャクナ王は眉間に深い皺を刻みながら言っ

た。吊り上った眉毛の下の眼光は鋭い。明らかに怒りを発している。「彼の……シユラク二世の父親であるジャーニイは私に反旗を翻したのだから。彼を生かしておく理由はない」

ジャーニイが反抗したのを受けてジャクナ王が彼の子供を殺した、という事実がシャンティの反抗意思を挫くのだ。ここでシユラク二世を生かしておいたなら、シャンティに「反乱軍を起こしても息子は死なないのか」と思われてしまうかもしれない。そうなるなら、キウスの存在は彼への脅しにならない。

「王よ。あなたが彼を殺すというのならば、ぼくも死にます」

リュキウスは数歩前に進みながら言う。ジャクナ王が思わぬ発言に慌てふためいた。

「ちょ、ちょっと待て。どうしてそうなるのだ。なぜ君が死なねばならない」

「ぼくは最近になって、とある事を思い始めていたのです。それは……ぼくたち学友は、初めから人質として集められていたんじゃないのか、ということですよ」リュキウスは、初めから知っていたことを、さも最近思い至ったかのように言った。「そして、今の王の行動を見ると、言葉を聞くと、明らかにそうとしか思えません」

「たまたまこういうことになっただけだ」

「たまたまだったとしても……こういうことになってしまったのです。ぼくたちは人質同然になってしまったのです。この先、ぼくは人質として生きていきことはとてもできません。ぼくは父上の重荷になるのなんて嫌なんです」

「重荷……じゃあ、君の父親は、シャンティは私に逆らう意思があるというのか？」

「それはわかりません。でも、もしそうだとするのなら、ぼくは父上の……」

「そうでない可能性だってある」

「そうである可能性もあります」

リュキウスは駄々をこねるように返した。ジャクナ四世は、後ろ

で笑いをこらえるのに必死になっていた。

「全く……子供はこれだから……」ジャクナ王は苛々し始めた。「だがな、だからと言って君がここで死んでしまう理由は？ もしかして、柔軟な対応をシャンティがとれるようにするため、君は死ぬと？ ただそれだけで？」

「ええ」リュキウスは即答した。ジャクナ四世は鋭い目で、後ろから彼を見た。「ぼくは、ただそれだけのために死にます」

「……死ぬるのか？ 本当に」

ジャクナ王は真面目な顔で訊いた。

「死ねます。ぼくは先の忌まわしい考えが浮かんでからずっと、死ぬ覚悟をし続けてきました。だから、今、ここであなたが死ぬというのなら死ぬこともできます。それによって父上は、父上の思った通りに動くことができるようになるのですから」

「……」ジャクナ王の顔色が変わる。「君は……錯乱しているようだがな、私は、シャンティは私を裏切らないと信じている。だから、君がここで死ぬのは困る」

「ぼくは今、ぼくが生きていることで困っているのです。王よ」

リュキウスは冷たい瞳をジャクナ王に向けながら言った。ジャクナ四世は後ろからその姿を凝視し続けている。

「しかし……」

ジャクナ王は逡巡する。

「それならば！」と後ろからジャクナ四世が声を上げた。「父上。

それならば、シュラク二世を生かしておけばいい。学校に子供たちを集めることを、父上がどう考えていたかは知りませんが、けれども……現状を見れば明らかに彼らは人質です。そして、リュキウスは人質になることを嫌がっている、死ぬとまで言っている。そうならば、彼らを入質ではなくしてしまえばいいのです。どうすればいいか？ 簡単なことです。今ここで、シュラク二世を生かしておくだけではないのです。そうすれば、集められている彼らは、事実上人質ではないということになり、シャンティ叔父上がどのような思想を

抱くかは自由となります。これでリュキウスは納得してくれるでしょう。え？ ……いいえ、父上、大丈夫です。シャンティ叔父上は裏切らない。なぜそう思うかと？ なぜなら、父上がさつきそう言ったではないですか」

ジャクナ王は呆然となつて立ち尽くした。確かに彼はさつきそう言ったが、それはリュキウスに気を使っただけのことだ。

「大体」ジャクナ四世が微笑みながら言った。「ここでシユラク二世を殺すのだから、シャンティ叔父上たちに、裏切つたなら君たちの息子はこうなるのだぞ、と伝えるためでしょう？ シャンティ叔父上たちが裏切らないようにするためでしょうか？ それならばここでの選択は一つだけだ。だってシユラク二世を殺してしまうと、もれなく聡明なリュキウスまで死ぬのだという。そうになると、シャンティ叔父上は必ずと言っていいほど謀反に走るでしょう。それに叔父上の後ろには、なによりも……子煩悩のイレ様がいますから」

「まあ、そうだが……。そうだがな」だからって、なぜリュキウスが死ぬ。今のままでは、いまいち納得できない。けれども、くそ。ジャクナ王は応じざるを得なかった。「……わかった」

そう言つてジャクナ王がシユラク二世を殺さないことに決めた瞬間、リュキウスはふうと息を吐いた。

ジャクナ王は子供相手にうまくやり込められたことを悟っていた。それでも、どちらかと言えば、これはやり込められた、脅されたと言つよりも取引と云つてよかつた。

シユラク二世を殺さない代わりに君たちは下手な工作をしてはいけないよ。そんな感じの取引。

で、ジャクナ王はあくまでも自分の方が優位に立っているという事をはつきりさせるためにこう続ける。

「だが、君たちを離宮の外に出すことはできません。もしかしたら、こちらに関する重要な情報を持っている子供もいるかもしれないからな。それを相手に伝えられたら困るのだ。そこは承知してくれ」

「ありがとうございます」

リュキウスは晴れやかな笑顔を作ってジャクナ王に感謝した。ジャクナ王はその笑顔を見て、なんとなく不安を胸に抱く。

「……ああ、それなら、君たちは離宮に帰ってくれてもいい。シユラク二世、悪かったな。君をここまで呼んだりして。重ねて、もう一つのことでも詫びよう。すまなかつた」

「いいえ。ご恩情、ありがとうございます」

シユラク二世は血の気を取り戻した顔を左右に振った。

ジャクナ王はあごをくいっと振り、彼らを離宮に返す様に兵士達に指示する。三人は兵士に連れられて部屋の外に出るが、ジャクナ四世だけは呼び止められた。

「ジャクナ、少しいいか？」

「ええ」ジャクナ四世は振り向いた。彼は後の二人をドアの外に残して、再度部屋の中に入った。「なんででしょうか？」

「まあ……その、引き続き彼らの監視を頼みたいわけなんだが……今回、リュキウスを連れてきたのは、お前なのか？」

「ええ、そうです」

ジャクナ四世は当たり前前の様に言った。

「なぜ連れてきた？ おかげで、シユラク二世を……それよりも、お前。明らかに、リュキウスに何かを頼まれていたんだろう」

「彼は私にも同じ脅し文句を使ってきましたので。とはいえ、彼の場合によつては本当に死ねたと思えますが。まあ、私が彼に協力したのは、つまるところ、リュキウスがここで死ぬのはもつたいたいと思つたからなのです」

「……お前をもつてしても、奴の才能はそれほどか？」

「彼をそこら辺の物差しで測るのは無理です。普通ではないのです」ジャクナ四世は、少しうつとりするような表情で言った。「ええ、彼は異常です」

「異常……」

確かに、リュキウスと話していた最後の瞬間、まるでお前と対峙しているような感覚を覚えた。……どこか、心が壊れているよ

うな。……重要な感情・感覚が欠けているような。

「ですが、父上。正直、今回の判断は正解だと思いますよ。」

ジャクナ四世は微笑を浮かべながらジャクナ王を見た。

「どういう意味だ？」

「そのうちわかる 때가 来ます。ふふ、その時を楽しみに待っていてください。」

ジャクナ四世は微笑みながらそう言うと、身を翻して部屋を出ていった。ジャクナ王は、その後ろ姿に不安感を覚えながらも、何も言うことが出来なかった。彼は息子の方に手をちよっと伸ばして、途中で、諦めた様にその手を止めた。

何をするつもりなのだ、お前は。

ジャクナ王は、息子がまだ幼かった頃、魯鈍だと言われていた時のことを思い出した。その時の彼と、今の彼を頭の中で見比べてみた。成長した……などと、そんなありふれた父親のようなことは、思いはしなかった。

お前はどこに行くのだ。

ジャクナ王は、日々不明瞭になっていく息子に、手に負えなくなっていく息子に、若干の恐怖を抱いていた。否や、それは、リュキウスの言葉で言えば畏怖なのかもしれない。

43・王宮の反応（後書き）

画像は2世。

44・戦いは守るといふ行為をもって初めて生じる

> i34424—4057<

二四五年の夏の終わり。シャンティとギャロップの鎮定軍（一万数千人）は北部と東部の堺で野営をしていた。シャンティは、ジャーニーから届いた書簡を自分の天幕テントの中で読んでいた。その書簡にはジャクナ王への謀反を促す内容がびっしり書き込まれていた。ジャーニーからの謀反の催促はこれで三度目だ。

シャンティはここまでそれを受け入れずにいた。彼は各地の反乱を治める鎮定軍を率いて、北部・東部の反乱組織を一つずつ叩いていたが、彼がそれをするのは、それが正しいことだと考えていたからである。もちろん、リュキウスが人質に取られていることも謀反を起こさない理由の一つだが、それが第一義ではない。

「それに、リュキウスは今や人質ではないからな」

シャンティは、同じ天幕の中で書類を読んでいるギャロップに言った。ギャロップは高級クッションの上に寝転びながら、書類に書かれている軍費の欄を見ていた。彼は言葉を返す。

「そうか？ お前が裏切ったらリュキウスはすぐに殺されるんじゃないのか？」

「じゃあ、なぜ今のタイミングでシュラク二世を殺さないんだ？」

このタイミングでシュラク二世を殺さないとぼくへの脅しにはならないはずだろう？ これは、彼らは人質ではないという証明じゃないか？」

「どうか、何かの都合があつて殺せなかったんじゃないの？」

それよりも、リュキウスからの手紙は来たのか？ ふん、もしかしたら、すでに殺されているのかもしれないぜ。ジャクナ王はそれを公表してないだけかも……」

シャンティは嘆息しながら言った。

「手紙は来てないけど……。全く、君は兄上を呆れるほど信用して

ないみたいだね」

「おれと王は信頼関係じゃなくて、損得勘定で繋がっているんだよ。それよりも」ギャロップが勢いをつけて起き上がる。「今はこの東部での反乱をどう鎮圧するかだ」

そうである、シャンティたちは東都アナポリスにて起こった大規模な反乱軍を鎮めるために州境に野営しているのだ。

「そうだね」シャンティはしかめ面をしながら言う。「東部反乱組織の大きな芽は潰してきたはずなんだけど……ここにきていきなり大組織が誕生してしまった」

東都には大勢の自警軍が駐屯していて、まずそこを拠点とした反乱組織は誕生しないだろうと高をくくっていたが、大規模反乱組織は駐屯していた大勢の自警軍を一気に取り込んで突然誕生した。もちろん、実際の所は突然ではなかったと思われる。公にならないところで色々な結びつきがあり、アンダーグラウンドで徐々に組織を大きくしていき、準備が整った瞬間にそれを公にしたのだろう。

「指導者は東部自警軍の將軍の一人で貴族出身者だと言っているが……」ギャロップはそこで少し口ごもる。「まあ、正直なところ、そんな男に求心力があるとは思えないんだよな。だから、この組織には黒幕がいると言ってもいい」

「もうちょっと正直になってもいいよ、ギャロップ」

シャンティは困ったような顔をしながら言う。ギャロップは、それなら、と思っていることを率直に言った。

「この組織の真の指導者は例のアストロラーボンだろ？」

「おそろくね」シャンティは近頃寝たきり生活をしているらしいアストロラーボンの顔を頭に描きながら言う。「東部貴族の子弟は、子供のうちに一度はアストロラーボン先生の所に教えを乞いに行くと言われているくらいなもんで、つまり先生は東部で絶大な影響力を持っているから……。自警軍の將軍も貴族出身者だと言うし、先生の教え子の一人なんじゃないのかな」

「相手の戦力はどれくらいだと予想してる？」

「自警軍が三千から五千。ほか戦闘熟練者が四千以上。熟練してなくても戦闘に参加したことがあるのが八千くらい。戦闘をしたことがなくても、いま戦闘訓練を積んでいるのが……はあ、言いたくもないね」

「その見積もりでも、まだ少なめだろ？ おれが思うに、相手は三万人つてところだな。まあ、個々の戦闘力の差もあるから、こつちがそれほど不利つてほどでもないけど」

「それでも、この戦いは戦わずに終わらせることができるかもしれない。なぜって、相手の指導者があのアストロラーボン先生だからね」

「話せばわかるつか？ 話せばわかるんなら、初めから武装発起なんてしてえんだよ」ギヤロップは苛々しながら言う。「覚悟を決める。おれたちは奴らを殺さなきゃならん」

「これが終われば、次はジャーニイかい？ それが終われば？」

シャンティは厭世的な表情を浮かべる。

「それならどうするつもりだ？ ……やはり」

「わからないよ。でも、兄上はすでに減税を実施している。国民の声にこたえているんだ。だから……」

「こたえるのが明らかに遅すぎたけどな……」

ギヤロップはシャンティを睨みつけながら言った。

ギヤロップ。まるで、ぼくに反乱軍を起こして欲しいような言い方じゃないか。とシャンティは思った。そんな風に言っておきながら、もし、ぼくが反乱軍を起こしたら君は……。

「ギヤロップ。話す機会があるならば、ぼくにその時間くらいはくれるだろうか？」

シャンティがそう聞くと、ギヤロップは仕方なく、うんと頷いた。

シャンティの率いる鎮定軍は東都アナポリスまでの行軍中、ゲリラ攻撃を受けなかった。東都への道のりは、あたかもアナポリスの反乱軍がシャンティたちを自分たちの所に導いているかのような静

けさだった。

シャンティはこれらの事実から、この反乱軍の指導者が師アストローボンであるという予感を強めていた。同時に、安心感をも強めていた。なぜなら敵がアストローボンならば、おそらく話し合いだけで解決できるのであるからだ。

「大丈夫だ。先生はきつとぼくのいうことをわかってくださる」
行軍中となりを歩くシェイバスにシャンティはそう言った。

東部の真つ平らな地形の先に東都が見え始めた頃、反乱軍の伝令兵が三名、シャンティたちの陣営にやってきた。彼らは、風にたなびく旗を掲げていた。それを見たシャンティは彼らを撃とうとする弓兵を制止して、彼らを自分たちの陣営に引き入る。

鎮定軍の人ごみが円状にひらけ、その中央にシャンティと近衛兵団が立っている。反乱軍の伝令兵は雄々しく肩を揺らしながらシャンティの前にやってきて、書簡を手渡した。

シャンティはそれを開け、中をじっくりと読んでいく。その光景を、シェイバス、ギャロップ、ウイスカ、フートス、その他の将軍たちは緊張の面持ちで見ている。

シャンティはその書簡を読み終えると、それを閉じ、うんと頷いた。

「わかった、君たちの指導者と会おう」

シャンティがそう言った瞬間、鎮定軍の兵士たちがおおっ！と驚きの声を上げた。近くのシェイバスがやや狼狽しながら質問する。「シャンティ様、私たちはもちろんついて行っていいのでしょうか？」

「ああ。でもね、私がこれから行くのは友人の所だ。わかるかい？友人宅にいきなり大勢でお邪魔するわけにはいかない。だから連れて行けるのは百人ほどだ」

「そんな！」

兵士たちは驚きやら、悲しみやら、怒りやらの感情を含んだ声を上げた。

兵士が慌て始めたのをよそに、ギャロップはシャンティの所に近づいて行って、彼の持つ書簡を奪い、読み始めた。読み終わると、「こいつならおれも会ったことがある。ならば、おれもこいつの友人だ。そう言うわけで、ついていかせてもらおう」と言った。

「会ったことがあるだけで友人だって？」シャンティは冷やかすような表情をする。「ぼくの時とはずいぶん態度が違うじゃないか」「なに、こいつとは気があったのさ」ギャロップは冷やかしをものともせず、書簡を指差しながら返した。「さて、あと九十九人だな」

「おれも行くぞ」

とシェイバスが声を張り上げる。

「うん。シェイバス、後の人選は君に任せる。できるだけ早く選んでくれ」

シャンティから頼まれたシェイバスは、即座に護衛兵を集め始めた。その中には、ウイスカもいたが、フートスは選ばれなかった。「なんでおれが選ばれないんだよ。戦闘力一つとったら、おれはこの軍のだれにも負けてない自信はあるぜ？」

とフートスは、同じ百人隊の仲間と羽交い絞めにされながら怒鳴った。

「馬鹿が」シェイバスが返す。「奇襲される可能性がないわけじゃないんだ。指揮の上手な者をできるだけ残しておくのは当たり前だ」「じゃあ、お前が残れよ」

「嫌だし無理だ。おれはシャンティ様の近衛兵だからな。シャンティ様を守るのが仕事だ」シェイバスは言い終わると、シャンティの方に歩いて行って人選が完了したことを伝えた。「隊伍はすでに組みまっています。今すぐにでも動けますが」

「それはありがたい。すぐに出発しよう」

シャンティは書簡を届けに来た伝令兵の方を見た。彼らは頷いてから、また旗を掲げ、シャンティたちを先導し始めた。シャンティを含む百人の鎮定軍は彼らについて進み始めた。留守を託されたフ

トトたちは恨めしそうな顔を彼らに向けながら、彼らの生還を祈った。

石畳の道路を百歩も歩けばシャンティたちは東都アナポリスの城門に着いた。道路の左右にある平原には数十人単位の小部隊が配置されており、彼らはシャンティに手を振っていた。

伝令兵が市城壁の門番に何事かを伝える。数十秒後に城門が開けられると、シャンティたちは厚さ二、三メートルの城壁を潜ってアナポリスの中に入った。すると、彼らを待っていたのはアナポリス市民の歓呼であった。

彼らは嬉しさのあまりに顔を真っ赤にしながら口々に叫んでいた。「シャンティ様が来て下さったぞ!」「我らが旗印、シャンティ様だ!」「王位を奪って下さい!」「あなたが次の王だ! あなたが本当の王だ!」「うおー!」「決戦だ、増税王ジャクナと決戦だ!」「悪王の首を我らの手に!」「真実の王! 優しき王!」

シャンティたちは啞然としながら彼らを見ていた。前を行く伝令兵が「シャンティ様、こちらに」と言って彼らをなおも先導する。

シャンティたちは敵市民から花びらを投げかけられることに違和感を覚えながら町の中を歩いた。

「シャンティ様、どうぞ」と花屋の奥から小さい女の子が走ってきて、シャンティに鮮やかな黄色の花を差し出す。シャンティはそれを笑顔で受け取りながらも、これは全てアストロラーボン先生の作戦なんじゃないのだろうか、と考えた。

少し歩くとシャンティたちは広場に着いた。伝令兵はそこで、広場に作られたステージの上に座るちよび髭の男性を指差した。その、ちよび髭を蓄えた壮年の男性はにこやかな顔で近づいてくる。

「東部貴族工才家の……」

シャンティは呟く。

「ハランです」エオ・ハランは大きな手でシャンティの手を無理やり握った。「来てくださって、大変うれしゅうございます。ですが、手紙の通り、あなたを呼んだのは私ではありません」

「ええ、でも、会えて光栄です」

シャンティは晴れやかな笑顔で言った。

「ふむ」ハランはシャンティが連れてきた九十九人の兵士たちを見る。皆一様に、シャンティに何かをしたらタダじゃ済まさんぞ、という目を彼に投げかけている。ハランは身震いしながら思った。私にはあんまり会ったことはなかったが、どうやらこの御方は先生の言っていた通りの御方らしい。「……それでは、案内します。とはいっても、先生は引越してないんで、あなたたちを案内する必要ありませんがね。まあ、形式ですから」

「ええ、お願いします」

ハランとシャンティを先頭にして彼らは再び目的地に向かって歩き始めた。シャンティは歩きながらハランに質問した。

「この騒ぎはなんですか？ 先生やあなたたちは、市民らにぼくのことをどう説明したんですか？」

「あなた様に反乱軍の指揮を執ってもらいたい、ということをお先生が市民の一人に話しまして……次の日には、あなた様が我らの指揮官になる、という風に間違っただけです」ハランは飄々と言った。「勘違いしないで下さいね。私たちはたいして何もしていませんよ。私たちはこの都市の市民たちの機運に乗っただけなのです。つまりは……市民たちの熱気はあなたが引き起こしたモノ」

「それはそれは……」

シャンティは困ったように頭を掻いた。

「それだけ市民に親しみを持たれているということですか。まあ、おかげで、王位を狙っていた嫌味な貴族たちを一掃できましたので、私としても嬉しい所です」

「あなたも王位はサウルス王族が引き継ぐべきだと？」

「その方が国内の混乱が少なくていいでしょう？」ハランは打算的な風にする。「東からは小ウアズマ人、北からはモーキリア人、南西からはイハテリオ人……新王はこれに対応しなくちゃならないわけですからね。新王朝や新王族が誕生する際には、内輪もめが起こるも

のです。でも、こんな状況で内輪もめなんてしていると、この国がほかの地方の者たちに破壊されてしまいますからね」

「あなた、やっぱりアストロラーボン先生の教え子ですね。先生も、物事を客観的に判断する能力がおりでした。どうやら、あなたもそうらしい」

「私が先生に似ていると？ ははは、あの人は、自分がその事件の中心にいたとしても、主観を捨て去り客観的に事件を分析するような人ですよ。私なんか近づける人間じゃありません」ハランはシヤンティを見た。「あなたは逆に、自分勝手な主観で考えることのが天才だ」

「へ？」

「……と先生は評していましたよ。ふーむ、私からしてみれば、その方が不思議だ。偏屈なあの先生に教えを乞いながら、どうしてそのようになるのか」

「……自分勝手な主観、ですか」
とほほ、と思いつながらシヤンティは呟いた。

長々と話をしている間に彼らはアストロラーボン邸に到着する。アストロラーボン邸の警備兵は頭を下げながらシヤンティたちを屋敷の中に引き入れた。以前に見た時よりもがらんとした庭を通ってシヤンティたちはアストロラーボン邸に入った。護衛の兵士たちは庭の所にとどまるように言われ、シヤンティだけがアストロラーボンの所に案内された。

「おい、シヤンティ」アストロラーボンの部屋に行く前に、ふと、シヤンティはギャロップに呼び止められた。シヤンティはなんだい、と言いつつ振り向く。「お前は戦争嫌いだ」

「……なんだ、いきなり」
ギャロップは無視して続ける。

「それでも何度も戦争をやってきた。それはしかし、いつだって、誰かのためだったはずだ。その誰かというのは、一人や二人や三人やら……そんな少数じゃない。カバルス鎮定の時だって、あれはおれ

やユルシユ姫のためでもあったが、カバルス人全員のために戦ったんだし。潮の川でだって、小ウアズマの時だって……」

「……ギャロップ。やめてくれないか」やはり君は、ぼくに兄上を裏切ってほしいのか？ でも、そうすれば君は……。」「ぼくの決心を揺るがすのは、やめてくれ」

「ああ、けれども……言わせてもらおう」ギャロップはほかの兵士たちにも聞こえるような声で言った。「あの王を救うために奔走するお前はよ……おれのために悪役を半分担うお前はよ……とてもじゃないけど、見てられないぜ」

「ぼくは……」
国のためを思って！ と、彼は叫ぼうとした。なのに、その言葉はなぜか喉に引っかかって、出てこなかった。兵士やアストロラーボン邸の住人たちは、シャンティとギャロップの二人を見ていた。妙な緊張感が漂う中、ギャロップが言葉を発する。

「国を救うなんてことは、反乱軍を率いていたってできることじゃないのか？」

「王都の人々が……」

「そんなのは救いようがある。十分と言えるほどな」

「王国に忠義を尽くす貴族たちは……」

「それだって、まだ何とかなる」

「兄上だって……君だって！」

「ジャクナ王のことは、おれにはわからない。でもな、おれに關して言えば……ああ、おれは助けや救いなんて求めてないのさ」ギャロップは悲しそうな顔で言った。「まあ、いいさ。早くあいつの所に行ってきたな。どうせ、アストロラーボンの爺さんに会ったらお前だって……さ」

「……！」

シャンティは自分の中で何かがつくつく煮立ってくるのを感じながら、ギャロップから目を逸らした。シャンティはイライラを発散させるかのように、大きな足音を立てながら先生の部屋に向かった。

なぜ、今頃あんなことを言うんだ。なぜ、ぼくに兄上を裏切らせようとするんだ。ぼくは、本当に、国のために……。

シャンティはアストロラーボンの部屋の前に着いた。部屋の前には女性の奴隷が立っていて、「ご主人様は中で寝ています。入ってください」と丁寧に言った。シャンティは言われた通り中に入る。

アストロラーボンはベッドの上であおむけに寝ていた。彼は少し頭を持ち上げて、シャンティが来たのを見ると、ひどく聞きづらい声で「こっちに」と言った。シャンティは、自分の頭が急激に冷えていくのを感じながら師のもとに歩み寄った。

「先生、来ましたよ」と面倒くさそうな演技をしながらシャンティは言う。「いつたい、何の御用で？」

「ん？」

アストロラーボンは耳に手を当てて、もう一度言うように催促する。

「……何の用ですか！」

「ははは、聞こえ取るわい」

アストロラーボンは愉快そうに、けれどひどく小さい声で笑った。「まったく……先生、この反乱軍はなんですか？ まさか、ただの暇つぶしにこんなことをしたんじゃないでしょうね？ もしそうなら、ぼくは怒るだけじゃすみませんよ。ちょっと本気を見せちゃいますよ」

「まさか、ただの暇つぶしでこんなことはやりやあせんよ。ちゃんと目的はある」アストロラーボンは真面目な調子になって言った。

「君は……今のサウルス国をどう思う？」

シャンティは苦しそうに言う。

「荒れています。そして、貧しくて……病んでいて……」

「ならなぜ君は何もしない？ 王族なのに、何かができる立場であるのに」

「ぼくは精いっぱいやっています。毎日毎日、軍隊を率いて、北に南に東に西に……それでも、国は一向に良くなりません」

「不思議かい？ わしにも不思議なことがあるんじゃない。それは……なぜ、君はジャクナの増税を止めなかったのか、ということじゃ。君がすぐに止めさせていけば、こんなことにはならなかったのに」「何度も言いましたが、兄上がそれを認めてくれなかったのです。だから、ぼくはぼくで、独断で国民たちの負担を減らそうと思つて……」

「なぜ、君は妄信的にジャクナの言うことを聞く。明らかな悪政を兄王が敷いているというのに、なぜ君はその通りに動くのじゃ。まさか、それが国のためなどとは言わんよな？ もし言うのだとしたら、わしはとんだ馬鹿者を育てたことになる。あーあ、天才のわしも教育者としては二流だったのか」

アストロラーボンは自分の、教師としての愚鈍さに頭を抱えながら言う。

「でも……」

アストロラーボンが尋ねた。

「王を殺すのは怖いか？」

「肉親を殺すなど許しがたいことです」

「へえ……じゃあ、他人を殺すのは良いのか。確かにそうじゃな、君は幾度となく他人を殺してきたものな。そういう思想を持つていたとしてもおかしくはない」

「人を殺すこと自体罪ですが……でも、今はそういうことを言っているのじゃありません！」

「シャンティ、君はなぜ、今まで人を殺してきた？」

「ぼくは……」だって、仕方なく……。仕方ないだって？ 仕方ないだって？ 何が仕方のないのだ。いや、でも、殺さなければ……すべてを奪われる。そうだ。「守るために、ぼくは……」

「愛する者を、愛する国を……。だから仕方なく人を殺してきた。これは確かに、仕方のないことじゃ。相手の命を奪わねば、こちらのすべてが奪われる。だから守らねばならない。殺さねばならない。そこに許しはない。死人から施される許しなどあるはずがない。死

人の家族から施される許しなど気休めや自己満足に過ぎない」

「許しは……ない」

「肉親を殺すのは許しがたいと、君は言ったね。全ての殺しは初めから許されるものではない。君はそれを知っていたはずだ。知ってなお、戦っていたはずだ」アストロラーボンは溜息をついた。「君はつらいね、本当につらい。つらいつらい。君は自分勝手な主観的にしか生きられないから、その人以上にその人の感情を考えてしまふ。そのせいで、いつも君は板挟みだ。もっと打算的に生きられたなら、もっと客観的に生きられたなら、なんとも楽なことだろうか。それでも、君にはそれはできない」

「ぼくは、どうすれば……」

「思考を停止するんじゃない、考えろ」アストロラーボンはガサガサでしわくちやの両手でシャンティの顔を挟んだ。「私は君にとてもつらいことを頼もつとしている。だから私は、悪意ある獣たちの支配する地獄に落ちたとしても、それは道理に沿ったことだ。けれども、それは納得の至りだ」

「頼みとは？」

いや、聞かなくてもわかっていった。

「許されぬことを承知で、君はジャクナを殺しなさい」

わかっていった！

「……殺さねば、ならないのですか？」

「殺さねばならない。殺さねば、国民の怒りは収まらない」

「兄上は悪くありません、なにも！」シャンティは大粒の涙を流しながら言う。「兄上はただ、少し道を踏み外しただけなのです。まだやり直せるはずなのです」

「主観的だよ、シャンティ。国民は君のように考えていない。あの王のもとでやり直したいなど思っていない」アストロラーボンはシャンティの涙をぬぐいながら言う。「主観の強い君は、近い人のことを強く考えてしまう。だから、相手が罪を犯しているとしても、それを断罪することはできなかった。だから、間違ってい

ると分かっていても、相対的に関係の薄い国民の方を攻めた」

「ならばぼくが罪を償うべきです。国民を苛めた罪を償うべきです」
「殺しは許されないように、罪は本当の意味では絶対に償えないのだよ。君が自刃することで、今まで君が直接的にも間接的にも殺した人間が生き返るなら、どうぞそれをするがいいさ。でもそんなことは起こりえない。君は、一生罪を償うことはできない。君にできるのは、少しでも良い未来を作ることだ」

「なぜ、その役目が兄上ではないのですか！　なぜ、その役目がぼくなのですか！」

「それはわからない。人々の心の流れが組み合わさって、大きな潮流となり、それを決定したとしか言いようがないのだ」

「……でも」

「守るために殺す。国を守るために殺すのじゃ。そう……これも同じことじゃ、同じことなのじゃ」それでも、君の心はかつてないほど傷ついてしまうのだろう。わしはそれを承知で言っているのじゃ。ああ、くはは、わしは君のことになるとどうしても、自分勝手な主観で考えてしまうのだ。君はつらい、本当に……。できるならば、こんな老いぼれた体でないならば、わしが代わってあげたい。「だからシャンティ……君は、自分の許さぬ殺しをせねばならない」

そしてそれをした後、君は、自分を責めて責めて……どうか、それでも壊れなくておくれ。君はわしの希望なのだ。わしに最後の美しい夢を見せておくれ。わしに……兄を殺すと誓っておくれ。国を守ることを誓っておくれ。

「……」

シャンティは、何も言わなかった。

頭はずいぶん重かった。まるで、鉛が入っているかのようなだった。いや、鉛が入っているのは頭だけではない、全身、鉛だらけだった。シャンティは重い体を揺り起こして、アストロラーボンから離れた。アストロラーボンは、シャンティの言葉を懇願するような目で見ていた。

シャンティは「ぼくにはまだよくわからない」という感じに首を振った。

アストロラーボンは驚いた後、ふっと苦笑した。そうだな、君はそういう男だ。

「行きなさい。君は決めなさい。思考を停止しなければ、君だけでも決め……」

「いいえ、先生。もういいのです」シャンティは師の言葉を制しながら、絞り出すように言った。「ぼくは、あなたを許しません」
言った。

アストロラーボンは困ったように微笑んだ。

「なんだ、もう決めているのじゃないか」

シャンティは涙を拭いてアストロラーボンの部屋から出た。部屋の外で女性の奴隷にお辞儀をして庭に向かう。が、見てみれば庭にいる兵士の人数は明らかに減っていた。

「シャンティ様。あの……」シャンティを見たシェイバスは、慌てながら彼のもとに寄ってきた。「ギャロップ將軍が先に……」

「帰ったのか？」シャンティは苦々しい顔をして、次に鋭く言った。「ぼくたちも帰る」

シャンティは家の外に向かって速足で歩き始めた。兵士たちはざわつきながらシャンティの後に続く。

「シャンティ様」シェイバスが彼の横につけて言った。「それで、アストロラーボン様との話は？」

「終わった。けれど、今はその内容を話している場合じゃない」

シャンティは胸騒ぎを覚えながら怒鳴った。彼らは依然として歓声の鳴りやまない広場やメインストリートを通って、門の前まで来た。兵士たちはアストロラーボンとシャンティの話し合いがどういう結果になったのかわからなかったが、シャンティがすごい剣幕で開けると言うので、城門を解放した。

シャンティたちは外に置いてあった馬に乗り上げ、すぐに自陣に

引き返していった。アナポリスの兵士や国民たちはその行動を見て、交渉は決裂したのだと思い、絶望した。町の中は一気に鎮静化していく。人々は頭を抱え、シャンティの裏切りを嘆き悲しんだ。そんな中、ハランは独り、馬を駆ってシャンティたちを追いかけた。

平原の真ん中に留まっていた鎮定軍の所にシャンティが到着した時、ギャロップとウイスカは少量の荷物をまとめて、馬車の中から出てくるところだった。ギャロップはシャンティが返ってきたのを見ると急いで愛馬に乗り上げ、ぐんぐんと鎮定軍から遠ざかり始めた。

「將軍は、なにをしているんだ！」

とシェイバスが顔を真っ青にしながら叫んだ。ギャロップが進んでいる方向は王都の方向である。

「ギャロップ！」シャンティは鎮定軍から少し出た所で叫んだ。「ギャロップ！ 行くのか！」

「ああ」ギャロップとウイスカは立ち止まって、シャンティの方を向きかえりながら言った。「おれは行く」

「將軍、どこに行くのだ！」シェイバスは叫んだ。しかし、彼は答えなかった。シャンティは、少しシェイバスの方を見た。シェイバスはそれを沈黙せよ、と言っているのだと理解した。シェイバスは首を振りながら呻く。「何が何やら……」

「ギャロップ、君が兄上の所に行くのなら……ぼくたちは敵同士だ！」シャンティがそう言った瞬間、鎮定軍の兵士たちは驚いて目を見開き、耳を疑った。シャンティが兄上というのはジャクナ王だけだ。そして、ジャクナ王の所に行くギャロップとシャンティが敵ということとは……。ハランはすぐにアナポリスに向けて引き返していく。「こうなることをわかっていたんだな、君は！」

「ふん、お前こそ、こうなることをわかっていたんだろ！」

「わかっていたさ。でも、避けていたんだ」シャンティは眉を八の字にしてギャロップには聞こえないように呟いた。呟いた言葉は、シェイバスには聞こえていた。シャンティはもう一度大声で話す。

「ギャロップ！ 行くのなら行けばいい！ ぼくは君を追いかける
兵士など出しない！」

「そりゃ、どうも！」

「ギャロップ！」

「はっ、まだあるのか！」

「愛していると、言え！」

「シャンティはそう叫んだ。」

「は？」

ギャロップは、いきなりおかしなことを言うシャンティに驚いて
目を丸くする。

「君は、愛しているというんだ！ あの人に！」

「な、なにを！」

ギャロップが顔を真っ赤にしながら怒鳴る。

「思えば、君はいつだって彼女を守るために戦ってきた！ カバル
ス戦役の時も、カバルス鎮定の時も、潮の川の戦いだって間接的に
はそうだ！ 小ウアズマは少し違うが……いや、だから君は負けた
のかもしれないな！ だから！ ははは！」シャンティは笑い声を
あげる。「だから愛していると言え！ いつまで、ガキみたいに恥
ずかしかつているつもりだ！ こっちは、恥ずかしくて、苦しくて、
見ていられなかったぞ！ だから！ あの人に、彼女に会ったなら
！ 愛していると、言うんだ！」

「……何を言ってるのやら」

ギャロップは真っ赤な顔をまた王都の方に向けながら言い、そし
て、最後の挨拶も言わずに走り出した。

シャンティたちはそれを見送っていた。シエイバスは、不機嫌そ
うな顔つきでシャンティを見ていた。シャンティは気まずそうに、
頭を掻きながら言う。

「シエイバス、そんな顔をしないでくれ」

「あそこで、ギャロップを殺していれば……なんてことがこの先起
きなればいいのですけれど……」

「それは無理だな。彼は強い。あの人を守るときは彼は特に……」
シャンティは諦めた様に言った。「君はどうだい？　君はウィスカと共に兄上の所に行きたくないのかい？」

「ええ、いいですよ」当たり前です、と言うような顔をしながら彼は言う。「いつかシャンティ様と話したことがありますよね。国富みて民貧し、なんて糞食らえだつて……。そういうことですよ」

「……ぼくは、未だに国の定義なんてもの、よくわからないけれど……それでも」シャンティは、鎮定軍の方を振り向いた。彼らはシャンティをじつと見つめていた。「それでも、民はすぐにわかる。いつだって、ぼくのすぐ傍そばにいるのだから。とはいえ……みんな、すまないね。ぼくたちは反逆者だ。それでもついてきてくれるのかい？」

「もちろんだ！」フートスは満面の笑みを浮かべながら、剣を天に振り上げながら、いの一歩に言った。「ははは、実を言つとね。おれは、いつ王子がこう言い出すのかと待っていたんですよ！　さすがに今回は焦れましたがね」

フートの声を皮切りに、シャンティに賛同する声が続々と上がりだす。ギャロップを将としていたカバルス騎兵たちも、指笛を鳴らしたりしながらシャンティを肯定する。

それらはいつまでも鳴りやまず、兵士たちはお互いの士気を高めあうように声を出し合った。シャンティが次の言葉を言うために、ぱつと手を掲げて「静粛に」と言った。兵士たちは次第に声を小さくしていく。声が十分に小さくなって、シャンティが声を発しようとした瞬間、また爆音が聞こえてきた。

今や反乱軍となった鎮定軍は、音のする方向を……アナポリスを見た。アナポリスの市城壁の外や上には、大勢の市民や兵士がシャンティたちに歓声を上げていた。

「我らが盟主、シャンティ様！」彼らの一番前に立つハランが声を張り上げて言った。後ろの人々はそれ言葉をコーラスで繰り返す。

「どうか、我らに命令を！」

どうか我らに命令を！ と人々は返した。シャンティは、晴れやかな顔をしながら、快活に言った。

「君たちは近隣の反乱軍をまとめ上げる！ 私たちは北部カンプトケファレに行き、民と兵をまとめ上げる！ 両方の準備ができたなら、息を合わせて王都への進軍を開始する！ いいか、我々が合流するのは王都だ！」 シャンティは体を大きく広げながら叫んだ。「私は君たちとの再会を望む！ それでは……王都にて！」

「王都にて！」 アナポリスの人々は大きな声で返した。「シャンティ様に竜の加護あれ！ 我ら反乱軍に竜の加護あれ！」

声は町中に響いていた。誰も彼もが声を喜びで満たしていた。

アストロラーボンは部屋でその声を聴いていた。ひどく幸福な瞬間だった。彼は、女性の奴隷に頭を撫でられ、無限に染み出てくる汗をハンカチで拭いてもらいながら、その声を聴いていた。

アストロラーボンは心にいつぱいの望みを抱いて、その夜に死んだ。

「先生のことだから、地獄の釜湯の中で、平気な顔をして無限の問題を解いている所だろうさ」

その事実を知ったシャンティは、心底悲しそうな顔をしながらそう言った。

44・戦いは守るといふ行為をもって初めて生じる (後書き)

シャン太郎「ギャロポン。愛していると、言えー」

その他一同「愛していると、言えー!」「」

ギャロポン「そこをコーラスするんじゃないねえっ」

|||||

サブタイトルはクラウゼヴィッツという軍人さんの書いた本に書いてたことです。

「侵略サイドが攻撃した時点ではまだ戦争は始まってなく、侵略された側が防御行動をとって初めて、武力と武力の衝突・戦争が始まるのだ」と、そう書いてたはず。

よくよく考えてみたら、サブタイトルと内容は一致してないんだけども、別にいいや、と言う感じですよ。深く考えてはいけません。感じるんだ。(洗脳である)

あと画像はラファエロの「アテナイの学堂」のやつを元にして描いた。なのにこの体たらくですわ。

45・内乱加熱

> i 3 4 5 0 0 — 4 0 5 7 <

シャンティが発起した事実を、王都センチュリオンにいるジャクナ王に伝えたのはギャロップとウイスカだった。彼らは二人だけで昼前に王都に帰還すると、王がいるであろう政務室に向かった。政務室の前にいた警備兵に緊急事態であることを伝えると、簡単に中に入る事ができた。中には書類を片付けているジャクナ王と、それを手伝うアレックスの姿があった。ギャロップは王の顔を見ながら先の事実を伝えた。

シャンティが裏切ったことを知ったジャクナ王は顔を真っ青にし、口をパクパクと開けたり閉じたりしていた。彼の隣にいたアレックスは、ギャロップの方を睨みながら言った。

「あなたたちはシャンティ様の配下だったはずですが？ それが何で、二人だけでここに？」

「逃げてきた。おれは反乱軍になりたくなかつたのでな」ギャロップはつまらなそうに言った。「つまりは王の味方だ」

「本当か？」

ジャクナ王はほっとしたような顔をして言った。

「王、信じてはいけませんよ。彼らはシャンティ様の配下ではないですか。もしかしたら、相手のスパイかもしれません。大体、なんでも無傷で王都に帰ってこられたと思います？ それは、將軍とシャンティ様が結託しているからです」

「おれたちは取引をしたのさ」ギャロップがこともなげに言った。「おれたちを無傷で王都に返すことを約束する代わりに、おれは奴の息子たちを守らなければならぬ。というよりも、息子たちの安全を保障してくれることを王に承知させねばならない」

ウイスカは、そんな約束はしたかな？ とギャロップの方を見る。ギャロップは澄ました顔でジャクナ王たちの方を見ていた。

「あり得る話だな」とジャクナ王は頷いた。アレックスは横で苦々しそうな顔をする。「だが……アレックスの言う通り、將軍たちのことを信じきれんのも確かだ。將軍は何の理由があつておれの方に？」

「どうせ、何を言つても横のカマラ家の若造には信じてもらえなさそうだけど、それでも言う必要がありますかね」ギャロップがそう言うと、ジャクナ王は、もちろん、と返した。ギャロップは面倒くさそうに話し出す。「理由はいくつかあります。まず、王には責められる理由がないとおれは思っている。今回起こっている各地の暴動は王の重税のせいですが、すでに減税が実施されていますからね、現在の王には非はない。次に、おれはもう国を裏切るつもりはありませんから……」

「カバルスのことか……。今度は最後まで逃げないということだな」
「まあ、そんなところです。で……ふん」ギャロップは微笑んだ。

「正直、おれはこつちの方に分があると思つているわけだ」
「將軍、何か案があるのか？」

ジャクナ王が飛びつくように訊いた。アレックスがジャクナ王を注意する。

「王、待つてください。將軍が本当にこちらの味方なのかは、まだわかりません」

「カマラ家の……お前、間違つてるよ」ギャロップがどすを利かせた声で言う。「この際はつきり言おう。ジャクナ王、あんたはこの戦い、おれ抜きで勝てると思つているのか？」

「……思わない」ジャクナ王は、やや弱弱しくいった。アレックスも彼の隣で、その通りだと感じてしまった。「將軍、おれたちには君の力が必要だ」

「そういうことさ。カマラ家の若造」

「わかった。ひとまず、お前を信じることにしよう」アレックスはしぶしぶ承諾した。「それで、將軍はどんな作戦をとるつもりだ？」
「それよりも先に、シャンティたちの子供の安否を確認させてくれ。」

おれは奴に借りを返さなきゃならん」

「いや、先に作戦を言ってくれ。もちろん、無いなら無いでもいいが」

ジャクナ王は、主導権はこちらにある、という感じに言った。

「それでガキ共に会えるなら、まあ、お安い御用だ。今のところは簡単な案しかないがな」ギャロップは腰に手を当てた。「まず狙うのは南だ。なぜなら、南には豊富な物資がある。さらに、敵将は老骨の元大將軍エラルジス。それに南部グナトウスは領地も少ないからな。支配も簡単だし、占領すれば他部族からの背撃も恐れなくていい」

「西部カバルスは……確かに広すぎて、敵を倒してもその後ろに多勢の敵がいる可能性もある。北はイムサ国が恐ろしいし、東部は北部の脇を通らねばならない……合理的だな。それで？」ジャクナ王は質問した。「具体的な作戦はあるのか？」

「作戦というよりも、方針はある。それは、できるだけ兵数を減らさないように戦うことだ。ジャクナ王、こちらの兵員数は？」

「三万の兵士と、訓練中の者が最高一万」

「それで十万もの敵を相手取らなきゃならんだから、普通に戦っていたんじゃ難しい。それに相手は兵も物資も補給が難しくくない。なんせ、全国民が戦いたくもうずうずうしてるんだからな。まったく、あんたの仁徳のおかげだぜ」

「ふん、言ってくれるな。つまりは、こちらは兵を節約しながら大勢の敵を削っていくかなければならないということだな」

「ああ、で、そういう意味でもエラルジスは標的として順当な男だ。なぜなら、防御力の強いシャンティ軍と戦う場合、こちらは兵力をじりじり削られることになる。同じような理由から、カバルス騎兵を率いるジャーニイ軍との戦いも厳しい」

「資源、相性。この二つの観点から考えて、南部への攻撃しかない……というわけだな」

「これでいいか？ そろそろ、ガキ共に会わせてくれないか？」

ギャロップが催促すると、ジャクナ王は思い出したようにリュキウスたちのいる所を教えた。

「マスタングやリュキウスは王都の外の古い離宮にいる。將軍、馬車で送らせるから少し待っていてくれ」

それからギャロップとウイスカは馬車が来るまで王宮の玄関で待った。すると向こうから馬車が来て、彼らのちょうど目の前で動きを止めた。ギャロップたちが乗り込もうとしたら、馬車のドアが勝手に開き、中からアレックスが顔を出した。

「私が案内を務めます」

と彼は言った。

ギャロップはあからさまに嫌そうな顔をしながらも、仕方なくその馬車に乗り込んだ。ギャロップとウイスカが乗り込んだら、馬車はごとごとと動き始めた。終末感が漂っている町の中を過ぎ、市城壁の外に出る。外の平野に出て十数分ほど石畳の道路を走ると、リュキウスたちのいる古い離宮に着いた。

「お前はあいつらと会う時もおれらのそばにいるのか？」

城門を潜る際にギャロップがアレックスに質問した。

「もちろん、そうします」アレックスは素直に言う。「私はあなたを信用していませんからね。……それと、今回、リュキウス様への面会を承知しましたが、それでも、これからも自由に会いに来られるというわけではありませんので」

ウイスカが言った。

「ということは、やはり、リュキウス様とシユラク二世様は解放されないわけですか」

「ええ、リュキウス様やシユラク二世様は交渉になった際、重要な役割をしてもらわねばなりませんから」

「ふん、利用すると言えればいい」

ギャロップはしかめ面をしながら言う。言うと同時に、馬車が停止して運転手が「着きました」と声をかけた。三人は馬車から降りて離宮の石畳の上に降りる。

ギャロップたちが玄關に向けて歩いていると、中からリュキウスが走り出してきた。彼はギャロップたちの前で立ち止まると、息を切らしながらまずは挨拶をした。

「お久しぶりです、ギャロップ大將軍。今回は何の御用ですか」

「マスタングは？」ギャロップがそう聞くと、リュキウスは上を指差しながら、上の階にいますと言った。「ならいい。リュキウス、お前に言わにやならんことがある。実はな、お前の親父がジャクナ王に背いて反乱軍を作りやがった」

「ええ、父上ならそうするだろうと思っていました」

「お前は……まあいい。あいつの息子なんだから、いまさら驚きはしないさ。それでだな、お前やシユラク二世は何とか生き延びることが出来る。しかし、いざという時の交渉道具としてまだここにいなきゃならん」

「父上は何と言っていましたか？」

「ああ、それは……」アホ、そんなこと訊くな。ぱぱつと逃げてきちまったんだから、そんなこと知るわけないだろ。「忘れちまったとにかく、お前は依然としてここにいなけりやならん。だから逃げようなんて思うなよ。そうなったら、おれもかばいきれん」

「一つ質問良いですか？」リュキウスがアレックスやウイスカの方をちらりと見た後言った。「ギャロップ大將軍は……どういう経緯でここまで？」

「おれはシャンティに見切りをつけてここまで来た。おれは、賊軍じゃない。官軍だ」

「へえ……」さすがに、リュキウスも驚いたような顔をした。「それはそれは」

「意外か？」

「いえ、よくわかりません」リュキウスは首を振った。「ただ、父上の相手が大將軍では……ぼくには、父上の勝つイメージができません」

「そりゃあ、そうだ」ギャロップは、はははと笑うと、リュキウス

の頭に手を置いて別れの挨拶を言った。「おれはもう王宮に帰る。マスタングの奴によるしく言っておいてくれ」

「会っていかれないのですか？ なぜ？」

「時間が惜しいからだよ」

ギャロップは馬車の方に歩いて行く。リュキウスはそれを黙って見送ることにした。

「おや、大將軍。もう帰られるのですか？」とアレックスがギャロップに近づきながら訊いた。「別に時間制限などはありませんが」「言うことはもう言った」ギャロップは馬車に乗り込んだ。あとの二人もそれに続く。ギャロップは馬車が動き出した時にぼそりと呟いた。「さて、こっからだ。先手はとらせてもらうぞ、シャンティ」

シャンティは強行軍で北都ウチノホークまで帰ると、まずは各都市にジャーニー・シャンティを主とする反乱軍を創設する由を伝えることにした。だが、そのことは一時間もしないうちにエレのもとに伝わり、彼女は廊下をどんと音をたてながらシャンティのいる政務室までやってきた。

彼女はドアを蹴り破ると、各都市への書簡を書いているシャンティのもとに歩み寄った。彼の出す手紙を待っていた伝令兵たちは、エレが近づいていくことにシャンティの顔が青白くなっていくのを見た。

「反乱軍を創設するのですってね」エレはシャンティの首根っこを掴みながら、すごい剣幕で言った。「じゃあ、あの子は……リュキウスはどうするおつもりですか！ あなたは、リュキウスを見殺しにするつもりですか？」

「そのつもりはない。だから、兄上にも書簡を送るつもりだ」シャンティは苦しそくに頭を振る。エレはそんなことはお構いなしにどんどん締め上げていく。「ちょよ、ちょつと待って……エレ……」

「待てるものですか。いいえ、待つのはあなたです。あなたが、反乱軍を作るのを待つのです」

「待つてどうなると言うのだ」シャンティはエレの手をほどく。「待つていても事態は好転しない。その、好転しない理由は分かっている。解決方法も。それなのに待てと言うのか」

エレは恨めしそうにシャンティを見た。

「そのためにリュキウスを犠牲にするというの？」

「そうだ」シャンティは力強い眼差しで、声で、言った。「そうなんだ」

「裏切り者。あの子は……あの子はきつとあなたを許さないわ」エレはシャンティから顔を背けながら言った。「それは私事です。私もあなたを許さない。一生、恨み続けます」

「エレ。リュキウスはまだ死んでいない。死ぬと決まったわけでもないんだ」シャンティはエレに寄り添いながら言う。「約束する、ぼくは最善を尽くすと。リュキウスを助けるために尽力する」

「死ぬと決まったわけではない？ それでも、あなたが反乱軍を起こすことによつてその確率は高まったわ。あなたは、そして、あの子が死ぬ確率が高まることを知っているくせに……」

エレは、悔しそうに歯をかみしめて、涙の一杯たまった瞳でシャンティを睨む。シャンティは悲しそうな困ったような顔をした。

「ぼくは馬鹿だ、ほんとに馬鹿だね。ぼくは、君が傷つくことを考えていなかった。ぼくは、君を説き伏せることだけしか考えていなかった。ぼくがそれでいいなら、それでいいと……一番身近な君のことも考えずに……」シャンティはそれでも、と続けた。「それでも、ぼくは今回のことをやらなければならぬ。やり遂げなければならぬ」

恨んでくれてかまわない……なんて言いはしない。ぼくが自分の口でそう言ったとしても、楽になるのはぼくだけだから。それでも……恨んでくれて構わないんだ、エレ。君が僕を恨むことで楽になると言うのなら、ぼくを存分に恨んでくれ。ぼくは甘んじてその恨みや呪いを受けよう。

「わかったわ……」エレは、目の端にたまっていた涙をぬぐう。「

あなたは最善を尽くすと……力を尽くすと言ったわよね？ ふん、それならそうして貰いましょう。あなたは最善を尽くすのよ」

「ええ……ああ、うん」

シャンティは、眉間にしわを寄せながらも口元は微笑んでいるエレの顔を見た。

「あなたは今日から一睡もせず、誰よりも誰よりも苦勞をして、リキウスを助け、なおかつサウルス国を平和に保つための策を考えるのよ。そうじゃないとだめよ。あなたはさつき、最善を尽くすと言ったのだから」エレはキツとシャンティを睨みつけながら、彼ににじり寄った。「あなたはそれをしなくてはならないわ。何より、私にそう約束したのだから」

「あ……ああ」シャンティは苦笑いしながら言った。「ぼくの命を賭けて、全てを最善に導いて見せる」

「……条件はあと一つあるわ」エレは澄ました顔で、ぴんと人差し指をたてながら言った。「あなたもついでに生きて帰ること……これがもう一つの条件よ」

「それこそ、望むところさ」

シャンティは白い歯を見せながら、笑みを浮かべた。

「それなら、いいわ」

それを聞いた彼女はすっきりした顔になると、ここにはもう用はない、と言うようになりと踵を返し、トントンと軽やかそうな足音を立てながら部屋の外に出ていった。伝令兵は途中のしおらしさはどこに行つたんだ、と思いつながら彼女を見ていた。

「さあ」シャンティはパンパンと手を叩きながら言った。「再開しようじゃないか。早くしないと君たちも彼女の恨みの対象になってしまうよ？」

「と、言うものの……」

伝令兵たちは頭を掻きながら、シャンティの机の上の書きかけの手紙を指差した。

「そうか……今は、ぼくの手紙待ちか……」シャンティは顔を赤く

しながら言った。「ふむ……何を書こうとしていたのか、まるつきり飛んでしまった」

北部の各都市の反乱軍指導者に向けてシャンティが送った書簡は無事に彼らのもとに届いた。各反乱軍の指導者はすぐにシャンティへの協力を決め、その由を書いた書簡を伝令兵に預け、自分たちは北都ウチノホークに向けて進軍を開始した。

また、その頃にはジャーニイのもとにも、シャンティ謀反の事実が伝わっていた。ジャーニイはシャンティの所に書簡を送り、嘘か本当かを確かめた。

秋の中頃、北都には数万の兵力が集結していた。その中から、イムサ国からの攻撃に対処する分だけの兵力を割く。さらにカンプトケファレに残って兵站部門を管轄する兵力を割く。そうしたら王都へ進軍できるのは二万五千となった。

東部へドロケラスでは王都への距離が北部よりも遠い分、先に進軍を開始していた。シャンティたちは一度彼らと連絡を取ってから出発することに決めた。その待ち時間にジャーニイからの手紙が届いた。

手紙の中のジャーニイはやけに興奮しているようで、『シャンティが発起してくれて嬉しい。』とか、『さすが弟だ。』とかの賞賛の言葉がつつらと記されていた。で、最後に……一番重要なことなのに最後に、『ギャロップはもちろんいるんだろうな。』と濃く太い字で書いていた。

いないんだよ……。シャンティはジャーニイが激怒する場面を頭に描きながら、そう思った。いないんだ、ジャーニイ。亡国の幻將はいない。ぼくらはあの恐ろしく戦争に長けた男と戦わねばならない。君のことだから、率直にぼくのことを罵倒するだろうけれど……今の所、ぼくに後悔はないよ。なに、心配いらぬ、大丈夫さ。ぼくは彼を打ち倒す作戦をいくつもいくつも考えたんだ。勝算はどれも薄いけれどね……。

シャンティはその事実をどういふ言葉で装飾して伝えようかと悩んでいたが、結局そのまま事実を伝えることにした。ギャロップは反乱軍におらず、王国軍にいるのだと。

シャンティは簡潔なことだけを書いた書簡を伝令兵に渡した。が、シャンティの手紙を受け取る前にジャーニイは、ギャロップが反乱軍にいないと言ふ事実を知ることになる。

シャンティがジャーニイに手紙を出した四日後、エラルジス率いる南部反乱軍がギャロップ率いる王国軍と交戦し、大損害を被ったのだ。

45・内乱加熱（後書き）

こっから展開遅いです。

46・各人の思惑

> i 3 4 5 5 1 — 4 0 5 7 <

「今頃、こんなことを教えられたって……遅い、遅すぎる！」ジャーニイはシャンティイからの手紙をぐしゃぐしゃにして投げ捨てた。

彼は手紙を指差しながら近くの兵士に命令する。「燃やしておけっ」

ジャーニイは苛々しながら野営している草原を右往左往した。少しして落ち着いてきたら、自分の率いる反乱軍とジャクナ王の率いる王国軍の兵数の差が大した問題ではなくなっているという事実をしっかりと受け止めながら息を吐いた。

彼は思考する。

味方兵数が相手の二倍という数的有利は、ギャロップが向こうにいただけでなくなっても同じ。けれど、こちらはあちらに比べて物資が楽に調達できるうえに、あっちの兵士や市民は王都センチュリオンから出ることができず、閉塞的な環境に置かれるのだから、徐々に焦燥に駆られるようになっていくはずだ。ならば内部分裂だつて十分にありうる。そうだ、土気の点から見てもこちらの方が高いはずだ。いや、でも……もし、東西南北のどこか一軍でも完全に敗北させられたなら、この有利は簡単に無くなってしまふ。

「どうしますか？」シャンティイからの書簡を拾い上げていたベアードがそれを読みながら訊いた。「四方から息を合わせて王都に向かうと言うのを中止したらどうでしょうか？ 我々が率いているのは機動力の高いカバルス騎兵です。なので、まずは我々だけでも王都に向かい、王都からギャロップたちが出てこないように見張りをするというのは……」

「悪くない案だが……シャンティイやエラルジスが来るまでそれで待つとなると、かなりの時間を敵前で過ごさねばならない。こちらの兵士の疲弊はすごいことになるし、何よりも補給線が伸びきってしまふ。いや……騎兵が中心であるということを考えると、補給線は

何度も物資輸送の往復を繰り返すことでどうにかなるか？ いやいや、逆に、騎兵が中心なんだから馬が物資を食らうことになる。やはり、それは無理だ」

「そうですか」

ベアードは腕を組み、新しい作戦を考えるようなポーズをしながら言った。ジャーニーが代案を述べる。

「まずはカバルス兵をエラルジスの所に送って、あちらの兵員を増やそうと思う。カバルス人であるからと言っても、騎兵でなくて良い。エラルジスの所に行つてすることといえば、当面防衛行動だけだからな」

「それではそのように命じましょう」

「頼む」

とジャーニーが言うと、ベアードは短く返事をしてどこかに歩いて行つた。ジャーニーは引き続き右往左往しながらこれからのことを、作戦を考えていた。

やはりまずは防御を固めねばならん。その一方で、長期戦に持ち込むこともできない。サウルス国の外から攻撃が加えられる危険性もあるからな。短期でこの戦いを終わらせるとなると、なんと行つても決戦が一番だが……相手がそれをしてくれるのだろうか。いや、あのギャロップがこちらの誘いに乗るときは、すでに決戦での勝算が立った時なのだろう。ええい、糞。つまりは、おれたちは最終的に攻城戦をせねばならん。王都を陥落させ、玉座から憎きジャクナを引きずり落とさねばならん。とはいえ……今はまだ攻撃を開始する時期ではない。全面攻撃を開始するのはシャンティの方が準備を整えてからだ。シャンティ……あいつもあいつだ。なぜ、ギャロップを無理にでも引き止めなかった。引き止めないならば、殺さなかつた。

ジャーニーは蒼天を仰ぎながら、拳を固く握りしめた。

今度会つたら、一発殴つてやらねば気が済まん。

南部グナトウスのエラルジス軍がダメージを受けたのは、シャンティの所にも伝わっていた。その頃、シャンティはすでに北都を出発しており、彼は兵士たちに敵軍がすでに動き始めていることを教えた。なおかつ、奇襲を食らわないよう、兵士たちに警戒を促した。兵士たちは相手がギャロップであることを知っているので、そのことを聞いた時、ごくりと息を呑んだ。おれたちは、あの人と戦わねばならないのか……と皆が戦慄した。

「大丈夫だ」シャンティは兵士たちの前で叫んだ。「ぼくらが彼と正面切つて戦うことはほとんどあるまい。なぜって？ あちらは兵員数に限りがあるせいで、できるだけ損害が少なくなるように戦わねばならないからだ。だから、もし平野での会戦が行われた時は、密集隊形を取るように。そうやって身を固め、少しずつ敵の兵力を削り取つていけば、ギャロップも割に合わないと感じてすぐに王都に帰つてしまつたらう」

兵士たちはおおー、と腕を振り上げながら歓声で応えた。が、その演説が終わり、行軍が始まると彼らは隣の兵士と「そんなに、うまくいくと思うか？」と話し合った。

うまくいかないだろうなあ、とシャンティは苦笑しながら思った。ルルディファイロの上で彼はうんうん唸りながら策を練っていたが、ギャロップに勝てる作戦をそう簡単に組み立てられるはずもない。ああ、もう……こんなことをしている間にカンプトケファレの山々を超えてしまつぞ。とシャンティは焦った。

その夜の野営にて、シャンティはルルディファイロの世話をしながらぶつぶつと作戦を練っていた。

「このままいっても、おそらくぼくたちは勝てるはずだ。……王都を陥落させ、兄上を……」シャンティはルルディファイロがむしゃむしゃ大麦を食べるのを見ながら、ごくりと唾をのんだ。「でも、ギャロップだつて自分たちのじり貧をわかっているはずだから、それを打開するために策を練ってくる。それはどんな策か？ その策の一端が見えたのが、エラルジス大將軍を攻めた戦いだ。彼は包囲

ではなく、奇襲と突撃を組み合わせてエラルジス大將軍を退却させている。つまり、彼の目的は敵の殲滅ではない、と考えていい。同時に、土地が欲しかったとも考えていい。ギャロップは自分たちの物量的不安をなくすために南部グナトウスを攻めたんだ」

「そうなるよ、東部は襲われる心配はない」不意に後ろから声が聞こえた。シャンティが後ろを振り向くと、フートスがにやにやしながら立っていた。「さっきから、独り言の声が大きすぎますぜ」

「ご忠告ありがとうございます」シャンティはルルディファイロを撫でながら言う。「話を戻すけど……君の言う通り、東部は襲われない。なぜなら、東部には満足の物資がないからだ。それに、東部に行こうとするなら北部の脇を通らなければならぬしね」

「ですが、東部を攻めるのにだって利点はありますぜ。あっちを攻め倒すことができれば、あちらに逃げることもできる」

「それはどうだろうな。今の時点で重要なのは、王の命よりも王座なんじゃないだろうかと思うんだ。王座のあるセンチュリオンから逃げ出した王を誰が信用するのか、誰が彼を正当だと認めるのか。王座という正当性を失った兄上は、おそらく大軍団を維持できない」

「確かにそうですね。おれも、もし嫌いな上司がおれらを捨てて敗走したら、そいつを信用できなくなっちゃう。ほかの上司の下に鞍替えしたりすることも考える」

「敗走という面なら、ぼくらにも考えられることだけねど？」

「嫌いな上司の話ですぜ？」

「ふむ、この反乱軍の皆がそうだといいのだけだね」シャンティが言うと、ルルディファイロが嘶いた。「ははは、わかっているよ、君だけは絶対にぼくを裏切らないだろうね」

そんなこと言っていないだろう、とフートスは嘆息しながら思った。というより。

「そいつが一番怪しいもんですがね」

シャンティはルルディファイロが大麦を食べ終わるのを見届けると、フートスと共に焚火の方に向かった。兵士たちは暇そうに焚火

を囲んでおり、焚火の上やすぐ近くには焼き魚やら鍋やらが設置されていた。

「まだできないのかな？」とシャンティが訊くと、兵士たちはまだまだ、と笑い返した。「ふうむ、パトロールでもしてくるかな」

シャンティが腹をさすりながら言うと、兵士たちはぞろぞろと立ち上がって「行きましよう、行きましよう。暇でしようがない」と陽気に言った。そんなところに、エクリプスの息子で書記官をやっているコルトが走り込んできた。彼は息を切らしながらシャンティに書簡を渡した。

「どうした？ 北都で留守をしているエクリプスからかい？」と訊くと、コルトは首を大きく横に振った。とにかく中を、と彼は手紙を指差す。シャンティは急いで中を見た。「……は、はは」

シャンティは思わず笑ってしまった。彼の周りにいた兵士たちがシャンティの持つ書簡を覗き込む。字が読めない者は、読める者に「なんて書いてあるんだい？」と尋ねた。兵士の一人が言った。

「東部の反乱軍が、ギャロップ將軍が率いているであろう軍団から攻撃を受けたんだよ、馬鹿！」

「へえ……南を攻撃したと思ったら、次は東か」
兵士は感嘆したように言う。

「お前ら。ちよつと、黙ってる」フートスが怒鳴り、彼らを黙らせる。「王子……やっぱり、ギャロップ將軍だぜ。ははは、おれたちの予想通りには動かねえみたいだな」

「……」シャンティはもう一度書簡を読み始める。「数千の騎兵軍団が……弓兵での攻撃を仕掛けてきた。その後、追撃もせずに戻った」

「遅滞行動」コルトが呟くと、シャンティは頷いた。「南部を攻め落とす時間を稼ぐための行動でしょうか？」

「普通に考えたらそうだろうけど……」兵士の一人が言う。「ですけど、なんで東部なんスか？ 西部のカバルス騎兵軍団の方が近い危ねえじゃんよ」

「おそらく」シャンティが説明する。「ギャロップは騎馬に二人乗りして奇襲をかけたんだと思う。いや、実際には、弓兵は地面に降りておき、騎兵はそれを回収し逃げることだけをする。これは、ぼくとギャロップが小ウアズマにいるときにも使われた戦法だ」

「そういえばあったな」

とフートスが言う。

「ギャロップが言うには、この作戦は弓兵が騎乗する際に時間がかかるし、二人乗りをすると騎馬の機動力も下がる。つまりはそういうことさ。騎兵ばかりの西カバルス方面反乱軍を狙うと、たちまち追いつかれてしまう。でも、東部を攻めれば騎兵の割合も低いだろうから逃げられる確率は高くなる。ああ、いや、逃げられる確率が高くなると言うのは少し違う。なぜなら、ギャロップたちは、敵兵にいる……つまり反乱軍にいる騎兵の数が多ければ攻撃をせずに逃げるつもりだったのだから」

「つまりは、無駄足を踏まない確率の高い東部への攻撃を選んだと……」コルトは言いながら、なるほどと思った。「ですが、そうやってカバルス方面を避けてもいってしまうかもしれないでしょう？　ずっと避けられるわけじゃないんですから」

「いや、カバルス方面を避けようが避けまいが、どうせ、ぼくたち各方面の反乱軍は同時に王都に向かって進撃する作戦をとっているんだ。だから、一軍でも行軍スピードを遅らせればそれで他のすべての軍の行軍スピードも遅らせることになる」

「シャンティ様、それでも……」

「その通りにはならないだろうね。ジャーニも基本的には我慢強いタイプじゃない。そんなことをしていると、彼だけでも王都に攻め入ってしまう。でも、それが目的なのかもしれない。王都に攻め入らせて、西部方面反乱軍の糧秣を減らす作戦なのかもしれない」
「ややこしくなってきたところで、兵士の一人が質問する。」

「結局、相手は何しようとしてんですかい？」

「わからない」シャンティは首を振った。「まだ、情報が少なすぎ

る」

シャンティたちはすぐに軍議を開いた。シャンティの天幕テントに集まった将たちは、ギャロップが何をしようとしているのかを必死になつて考えた。けれど「これだ」と言うものは思いつかなかった。敵が何を目的としているのかが分からなければ、対策を立てるのも難しい。とりあえず、その日の野営の歩哨の数を増やすことにして軍議をお開きにした。

次の日、兵士たちはきびきびとした行軍を行った。偵察騎兵も各地に派遣され、王国軍が潜んでいないかを探り続けた。

「こうしてみると、ギャロップは嫌な武将だ」とシャンティはルルディファイアの背の上で文句を言う。「毎日こんな風な緊張が続くんじゃあ、王都に着く頃にはへ口へ口になつてい」

「それも奴の作戦なんですよ」とシェイバスが返す。「だから、あの時に……」

「わかった、わかった」シャンティは慌てて話題を変える。「それより、東部反乱軍が詳しい現状を送っていたけれど、君は読んだかい？」

「ええ。といつても、弓兵だけの攻撃だったから、大した損害はないと書いていましたが。それがどうかしました」

「そこじゃなくて、兵站の所が重要なんだ。東部の兵站事情はやはり厳しいらしい。もしかしたら、ギャロップはこれを狙っているのかもしれない。各方面の反乱軍の内部瓦解を。一か所が瓦解したら、全軍を持つて南部を攻め落とし物資を調達する。そこから少しずつ弱い方面の敵を削りながら反乱軍を鎮圧する、と言う具合に……」

「でも、それでは長期戦になりませんか？ 長期戦になると、他国がサウルス国に攻め込んでくるではないですか。いえ、でも……それは王国軍にとっては良いことか？」

「そうだ！」シャンティははつとしたように声を上げた。「なんで……そうだ、そうなんだよ。なんで、こんなことに気が付かなかった」

周りを歩いていた兵士たちがぎよつとしながらシャンテイの方を向く。シェイバスは、驚きながらも何に気が付いたのかを問いただした。

「シャンテイ様、いったい何に気が付いたのですか？」

「馬鹿なことに気が付いたのさ」シャンテイは嘆息しながら言った。

「そうだよ。ぼくらはずっと、兄上たちが自分たちの戦力、サウルス国内だけの戦力で戦うのだと考えていた。しかし、どうだ。本当に追い詰められた状況で、まだ意地を張って自分たちだけで解決しようと思うだろうか？」

「つまり……」

「そうだ、兄上たちは他国の協力を取り付けるはずだ」

二日後、アレックスは書簡を懐に抱えて王都内にある兵舎に向かっていた。兵舎の中に入るとすぐに二階の一番奥の部屋に向かい、そこにいるジャクナ王に「イムサ国からの書簡が届きました」と報告した。ジャクナ王は彼から書簡を受け取り、読み始める。少し読むと、クツシヨンに座っているギャロップの方を向いて険しい顔で言った。

「イムサ国のネオットス將軍は……こちらの頼みを断ってきた。彼曰く、今のサウルス国ならばおれたちの提示してきた分譲地以上の領地を手に入れることができるんだとよ」ジャクナ王は書簡をギャロップに手渡す。「これでいいんだろう？」

「ああ、これでいい。もちろん、敵がこちらの条件を呑んでくれてもよかったが、こっちの方が良い。無理やりとられたとする方が、後々（あとあと）攻め入りやすくなるからな」ギャロップは書簡を眺めながら言った。「それでもこの提案を出したおかげで、敵さんも、サウルス国はそれほど切羽詰まっている、と思っただことだろう。まあ、こちらへの侵略を早めることに成功したのは確実だ」

アレックスが訝りながら訊いた。

「南、東と来て、今回のことで北への牽制は済んだが、本当に西へ

は何もしなくていいのか？」

「ま、ジャーニイの率いるカバルス軍だけが相手なら、負けやしねえからな」ギャロップは立ち上がって机の上にある地図に目をやる。「というよりも、ジャーニイがカバルスに残してきた兵士を倒せそうな国がイハテリオにはない。奴らにまた同盟軍を作れと言うのも無理な話だしな。それでもって……できれば、ジャーニイとは一軍対一軍で戦いたいところだ。奴の軍隊が、シャンティの軍勢、もしくは南軍プラス東軍と合流したらどうなるかはわからんからな……」アレックスが納得しない様子でまた質問する。

「將軍、あなたは以前に南部と東部は敵ではないと言いましたが、それならばなぜそこから攻めないのですか。南だけに集中して攻めないのですか？」

「確かに、南部と東部は敵じゃあない。けれど、相手が防御に回ったら今の兵力では攻めきれない。攻めている間にほかの反乱軍が王都に来るかもしれない。どこか一地域に攻め入るなら、他の三地域を進撃不能にしてからだ。で、他の三地域が回復する前に攻め落とせそうなのは南と東だけ」

「東は北部の脇を通らねばならないから難しいとなると、やはり南を責めるわけだな」ジャクナ王が言う。「だが、他の三地域を進撃不能になどできるのか？　もし、王都が囲まれ、イムサ国の侵入でシャンティが前線から遠ざかっても、ジャーニイとほかの二地域が合流している。食糧難の東部は南部からの物資補給で何とか戦えるし」

「そこが問題ですな」ギャロップは大きな溜息を吐く。「今は王都を早々と囲まれないように遅滞行動をとり、東部を物資難で引き揚げさせ、堪忍袋の緒が切れたジャーニイ軍と一度決戦しカバルスに引き返させた後、イムサ軍の進行にシャンティが手間取っている間に全軍を持って南部に攻め込み、攻め落とす……というのがプランですが」

「無理だろ」アレックスは顔を青くしながら言う。「絶対に無理だ」

「ははは、おれもそう思うね」ギャロツプは快活そうに笑って見せた。大体、本当の話をするれば、初めからこちらの分が悪すぎるんだよ、とギャロツプは心中で怒鳴った。物資がそれほど多くないせいで、この先の行動がまずは物資補給のための南部鎮圧に絞られる。そして、南部鎮圧を成功させ、なおかつ空っぽの王都を攻められなないようにするためには三つの地域を進撃不能にしておかなければならない。このプランは絶対に曲げられない。ほかに方法がないのだから。しかも、今の作戦も穴がある。それは、ジャーニー率いるカバルス軍を倒す際にこちらが大損害を食らってしまえば、南部鎮圧にかかる時間が増えるということだ。「まあ、正直……反乱軍が完全に合流して、でもって会戦を行うと決まったとしても、おれには勝てる自信がある。んでも、そんなことをすれば、こちらは甚大な損害を被ることになるだろうから、敵を追撃して反乱軍を鎮圧、という一番重要な行動ができないわけだ」

「そうだな。勝利ではなく鎮圧が最終目的だからな」ジャクナ王が地図を見ながら呟く。「北はどうにかなる見通しが立った。では次に、もう一度、西の反乱軍について考えたいと思うんだが」

「意義はないですね」

とギャロツプは頷く。もし、倒せる策が浮かぶなら、その方がいい。

「そつえば、將軍」アレックスが部屋の中を見渡しながら言う。

「侍従殿は？」

「あいつは情報収集に向かわせている」

ギャロツプは地図から目を離さずに言った。

「ああ、そうですね」

アレックスは興味なさそうに呟いて、地図に目を移した。

その日の夕方、ウイスカとはある店の階段を下りていた。降りた先は居酒屋になっており、その日一日の仕事を終えた者たちが顔を赤くしながら沈鬱ちんうつに酔っぱらっていた。彼らが沈鬱なのは東西南北、

各地域から押し寄せてくる反乱軍を恐れているからだ。王都市民は王の圧政を憎みながらも、反乱軍をも恐れていた。自分たちの富が反乱軍に略奪される可能性があるからだ。

ウイスカはそんな光景を横目で見ながら居酒屋を出て、ギャロツブやジャクナ王の待つ兵舎の方に向かって歩き始めた。彼の目指す兵舎本部は王宮の近くにあり、王宮で何かがあればすぐに駆けつけられるようになっていた。

「おや？ あなたは……」ウイスカが城壁の近くを歩いていると、不意にそんな声がかかった。ウイスカはどきりしながらと跳ね上がり、声の方を見た。そこには騎馬したジャクナ四世と近衛騎兵たちがいた。ジャクナ四世はウイスカに手をさし延べた。「さあ、掴まってください。兵舎に行くのでしょうか？ ならばお送りします。いえ、心配なさらずに。私も父上に用事があるので」

「ありがとうございます」
ウイスカはお辞儀をした後にジャクナ四世の馬に乗り上げた。

「ウイスカ殿はどこに？」
ジャクナ四世が前を見ながら言った。

「情報収集に行っていました。情報を集めるのにはいろいろな所を回らねばなりませんし、近場を回るだけでは十分な情報を集められません。なので、自分の部下を密かに遠くに送り込んだりと……まあ、いろいろ忙しくしております」

「例えば今はどこに部下を送っているのですか？」

「今は各地域の都市に……勇敢な者ならば敵軍に潜り込んでいます。ウイスカはすらすらと答える。「ところで、王太子様はジャクナ王様に何の御用がおりのですか？」

「ぼくも情報を父上に伝えに行こうと思っただけ」

「情報、ですか」この御方が集められる情報はそうないはずだ。まあ、普通に考えれば、リュキウス様やシユラク二世様の現状のことだろう。「それはそれは……王太子様がまさか私と同じことをしているとは」

「私にできることをやろうと思ひましてね。ほら、国がこんなことになっていきますから、王太子として少しでも役に立たねば……」

「ははは、殊勝な心がけですね」

「ええ、ははは」

一行は兵舎に着くとすぐに馬を降り、中に入った。ジャクナ四世が玄関の所にいる兵士に「父上は？」と訊くと、兵士は「二階の軍議室にいます」と返した。ジャクナ四世、ウイスカ、近衛兵たちは軍議室に向かった。

軍議室の前でジャクナ四世は近衛兵たちを止める。彼はノックを二回して「入ります」と言った後に、ウイスカと共に部屋の中に入った。中に入るとジャクナ王とアレックスが地図を睨みながら作戦を考えている所で、ギャロップはすぐそばのクッションに寝そべっていた。

「父上、定期報告に来ました。と言うものの、私は大して言うこともないので、ウイスカ殿に先に報告してもらいましょうか？」

「そうだな」ジャクナ王はアレックスとギャロップとウイスカを見た後に言う。「お前は後にしてくれ」

「はい、わかりました」

ジャクナ四世は後ろに下がってウイスカにさあ、どうぞと言うポーズをした。

「將軍。情報を集めてきましたが、なにぶんこつちも相手の方に目立った動きがないので報告のしようがないという感じです」ウイスカは懐から書類を取り出してギャロップに渡した。「東部反乱軍を襲撃したことによって、各地方軍の行軍スピードをやや抑えることには成功しています」

「確かに……」ギャロップは書類をちらつと見ると、すぐに床に置く。それほど内容が無かったのだ。「さて、稼げた時間で何ができるか」

「いっそのことジャーニイ率いるカバルス軍と戦ってみたらどうでしょうか？」とアレックスが言う。「戦うことによってこちらの兵

数は減ってしましますが、その分、勝利という事実を突きつけることよって相手方の離反を誘うこともできます。それができたならば、こちらの兵力は復元できる可能性も高い」

「それは考えたことがある。だが、相手の離反に期待するのは危険だ。わかるだろうか？ それとも、懇切丁寧に説明しようか？」

「わかった、もういい、わかってるさ」

アレックスは苛々しながら返した。

ジャクナ四世王太子は軍議場の風景を見て、大分参っているな、と感じた。私の予想ならば、おそらく父上は負けるだろう。でも、ギャロップ大將軍がいるせいで私の予想通りにことが運ぶかどうかわからない。ギャロップ大將軍がシャンティ叔父上の軍勢なら、趨勢は決まっていたのにな。まあ、どちらに転んでもいいようにしておかないとな。

「ジャクナ」とジャクナ王が四世のことを呼んだ。「もういいみたいだから、とりあえずお前の報告をしてくれるか？」

「はい」ジャクナ四世は苦笑しながら言う。「さっきも言ったように、何も報告することはありません。私も夜に見回りなどをしますが、あそこではやることもないし、昼は厳しい訓練がありますので、夜になるとみんなぐっすりですよ」

「そうか。わかった」ジャクナ王は微笑みを返す。「ありがとう。帰ってもいい」

「はい、では……」と言ってジャクナ四世は部屋を出た。彼が外に出ると廊下に一列に並んでいた近衛兵たちが寄ってきて彼の周りを囲う。ジャクナは掌を差し出して、それを制した。「ここにいると邪魔だから、君たちはとりあえず、下の階で待機していてくれ」

「王太子様は？」

と近衛隊長のゲオネスが頭を傾げながら訊いた。

「私はウイス力殿に様があるから彼を待つ。だからまあ、下の、邪魔にならないところで待っていてくれ」

近衛兵たちは訝りながらも、主であるジャクナ四世の命令通りに

下の階に降りていった。

ジャクナ四世はウイスカが出てくるのを待つ間、廊下でから外を眺めていた。夕焼け色だった兵舎の庭が徐々に薄暗くなつていく。彼は時が流れていく風景を一时间もじつと見つめていた。兵舎にいた兵士たちがずっと動かないジャクナ四世を心配し始めた時、ウイスカが軍議室から退出してきた。

「やあ、待ちました」

とジャクナ四世は部屋から出てきたウイスカに話しかける。ウイスカはぎよつとした後に、窓の外を見る。

「待ったつて……一、二時間は経っていますよ？」

「どうだろうね。窓の外を見ていたら、いつの間にかそれくらいの時間は経っていたんだろうか。まあ、別にどうでもいいことだ」ジャクナ四世は、その冷たい目で彼を見つめる。「少し、話をできますか？」

「はい、もちろん」

ウイスカは緊張しながら頷いた。

「じゃあ、ついてきてください」ジャクナ四世はそう言うと、近くにいた兵士に二人きりになれる部屋はないかと尋ねた。兵士は探してきます、と姿を消して数分後に帰ってきた。ジャクナ四世とウイスカは彼の後について兵舎の中を歩き、一回の奥から二番目の部屋に通された。その部屋は小さい大きい部屋で、机の上には酒などが置かれていた。「ははあ、これは、さっきまで使われていたね。まったく、空いている部屋でいいと言ったのに、いちいち先にいた者たちを外に出すなんてね」

言いながら、彼は無造作に椅子に座った。

「ウイスカ殿も座ってください。できれば近くが良い」と彼が続けて言うと、ウイスカは彼の隣に座った。ジャクナ四世はウイスカの方を向いてから言う。「呼ばれた理由はわかりますか？」

「いえ、よくわかりません」

本当に、よくわからない、と彼は思っていた。だが、彼は最悪の

事態を考えた。計画が露見したのではないのか……。ウイスカは背中を触る。ひやりとする。背中に汗をかき始めていた。

「私はあなたを苛めるつもりは毛頭ないから、すぐに言ってしまうけれど……君は王都内の地下組織を束ね始めているようだね？」

そう言われた時、ウイスカは口の中の肉を噛んで目を見開いた。

そして、肩をがっくりと落とし、手を合わせながら「シャンティ様」と呟く。ジャクナ四世はふうと嘆息してから、ウイスカの肩に手を置く。ウイスカはびくりと震え、ジャクナ四世の顔をまじまじと見た。

「君に頼みたいことがあるんだ」

ジャクナ四世は、にんまりと微笑みながら呟いた。

46・各人の思惑（後書き）

ジャクナ四世「君には私と学友一同が作った『ラブサウツ！』(0) (ラブ) から始まるサウルス異世界帝国ツ！ 侵略から始まる恋もある？』のテストプレイをやってもらおう」

ヒゲ「は、はい……（ぴこぴこ）」

マスタング「ジャクナアアアアア！」

ジャクナ四世「なんだいきなり、なにか問題でもあったのか？」

マスタング「テメエ、おれの頼んだケンタウロスっ娘（上半身は人、下半身は馬）出てねえじゃねえか！ ふざけんなよ！」

ジャクナ四世「その代りミノタウロスっ娘（本来は頭が牛）が出ているだろう」

マスタング「ミノタウロスにしても全然違うじゃねえか、これはホルスタインっ娘（ぼっちゃり系巨乳）だ！」

ジャクナ四世「シユラクの趣味なんだから仕方ないだろうが！」

マスタング「マニアーアツツク！」

ヒゲ（うるさいなあ……）

47・追い詰められる王都、もしくは、追い詰める王都

> i 3 4 6 2 7 — 4 0 5 7 <

王都の民衆たちは日々高まる略奪の恐怖に怯えながら日常生活を営んでいた。だが、常時恐怖を抱いているような精神状態では日常的な仕事もまとみにできず、小さい失敗を繰り返してはますます苛立ちや焦燥を募らせていた。

そんな中、ある地下組織が王都の中で誕生していた。その組織は王の圧政を憎み、ジャクナ重税王を倒すべく立ち上がった反乱軍を解放軍と称した。組織は、反乱軍を王都内に引き入れるための計画を練っていた。

秋の終わり。ある本屋の二階では反乱軍を引き入れるための会議が今日も行われていた。若い男が三人、壮年の男が三人いた。一階には本屋の女房が一人いて、見張りをしている。本屋の女房はドアをトントンとノックする小さい音に気が付いた。女房は棍棒こんぼうを手に握りしめて、ドアの方に向かった。

「奥さん、私です。ウイスカです」
と外からウイスカが声をかけた。

「ああ、よかった。ウイスカ様ですか……どうぞ、お入りください」
本屋の女房はドアを開ける。「あ……あの、後ろの方は？」

本屋の女房はウイスカの後ろにいるフードをかぶった青年を指差した。

ウイスカが言う。

「友人です。だから、この人も入れてあげてください」

本屋の女房はウイスカを信用しきっているから、信用している人の友人なら大丈夫だろう、と思って店の中に入れた。

「どうぞ、主人たちは二階にいますんですぐに言ってください。飲み物が必要なからお持ちしますが……」

本屋の女房は少し興奮しながらそう言った。

「いや、いい。ありがとう」

ウイスカたちは言って、二階へ上がっていく。すると、二階の方から店の主人たちが顔を出して、ウイスカたちを見ていた。

「ウイスカ様、後ろの方は誰ですか？」

と店の主人が尋ねる。ウイスカは、とりあえず部屋の中に入って、という仕草をしてから階段を上りきる。で、部屋に入る前にフードをかぶった青年を紹介する。

「どうも」青年はフードを取った。「レジーム・ジャクナ四世です」

部屋の中の六人の男たちは啞然としていた。啞然とした後、一人が息を吹き返して、誓うにあつた棍棒を手に取った。ウイスカは慌ててそれを制する。

「この人は、私たちの味方になってくれる人です」

ウイスカは棍棒を持った男を押さえつけながら言う。

「そうです」ジャクナ四世は物怖ものおじせず一歩踏み出した。「私もあなたたちと志を同じくする者の一人です。同志なのです」

男たちは顔を見合わせていた。未だに何が起こったのかを理解できないといった様子だった。ジャクナ四世は首を横に振ってから、言葉を発した。

「理解できないのはしょうがないことです。なぜなら、実の父親を打ち倒すべく立ち上がった反乱軍の応援をする息子などいない。ですが、事実、ここにいます、そんな人が」ジャクナ四世は演説するように、男たちを魅惑するように言った。「私は父の圧政を苦々しく思っていました。思っていて、私にはまだ何もできない。革命を起こそうにも近衛兵団もまだ百人前後しか与えられていないのです」

「お、お前が短刀を持ってジャクナ王を殺せばいいじゃないか！」

と棍棒を持った男が言う。王太子の方にぐいぐい頭突き出す彼を、ウイスカが必死に抑え込んでいる。王太子はうんと頷いた。

「それも考えました。でも、それをしてしまつとあなたたちは私をどう思いますか？ 父殺しの新王を受け入れることができますか？

いいえ、民衆には心が広い者が多い。だからそれを受け入れることができる人も十分いるでしょう。だが、軍人はそれを認めないのです。官人はそれを認めないのです。軍人と官人とは今の王に共感し、そして今の王から恩恵を受けている者です。では、考えてください。私がもし、父上を殺せばどうなるか」

「サウルスに平和がやってくるだけだ！」

「浅はか」

ジャクナ王太子は呟いた。

「なんだと？」

「もし、私が父上を殺したなら、多くの人は、あなただつて、私が父上の考えに賛成できなくなったから父上を殺したのだ、と思うはず。その時、軍人や官人たちはどう思うでしょうか？ こう思うのです。まさか、ジャクナ王に共感していた自分たちも排斥されるのではないのか……。権力の座から退けられる恐怖に支配された彼らは、捨て鉢になって王都を略奪するかもしれません。国を蹂躪するかもしれません」

棍棒を握りしめた男ははつとして、棍棒を手放す。王太子は雄々しく続けた。乱世に突然現れた太平の創造主のように。

「だから、その危険性を排除するために、解放軍の力を借りて王を、我が父を討たねばならないのです。彼らが武力を持って、現王朝の軍人や官人たちを制してくれてこそ、今とは違う世が作れるのです」

男たちはまたあつけにとられていた。ジャクナ四世が早口ですらすらとまくしたてる言葉の意味もまだ理解できないのに、何となくジャクナ四世が全面的に正しいような気がしていた。暴れていた男も、ウイスカもジャクナ四世の変わりよう様に驚いていた。何事かと、本屋の女房も一階から昇ってきて、部屋の前に立つ貴公子を前にして大きな口を開けた。

「ま、まさか……」本屋の女房は半分失神しながら言う。「王太子様？」

「はい、これからよろしくお願いします」

ジャクナ四世はへりくだった様に頭を下げた。

その日からジャクナ四世は王都内の地下組織の一員……というよりも長おほとなった。百人ほどが集結した次の集会の時にはジャクナ四世は正式に組織の長として認められ、それによって勢いづいた同志たちはものすごい勢いで、しかし呆れるくらい密かに仲間を増やしていった。ジャクナ四世も何度かに一回は集会に参加して演説にて同志たちを励ましたり、自分の考えた計画を発表したりした。

そして冬になったある日の夕方、ジャクナ四世は自分の部屋にリュキウスとマスタングを呼び出してこのことを打ち明け、なおかつ彼らに協力してくれるように申し出た。リュキウスたちは、ジャクナ四世が自分たちをはめようとしているのではないかと怪しんだ。ジャクナ四世は彼らから向けられている猜疑心に気が付くと、苦笑して言った。

「別にお前たちをはめようとしているわけじゃない。私はただ、自分と同じ程度に求心力のある人間が欲しいだけだよ」ジャクナ四世は微笑みながら、冷たい目を彼らに向ける。「それに、リュキウスには貸しがあるはずだけれど？」

「それを言われたら……依頼を受けるしかないでしょう」リュキウスは観念したように頷いた。なるほど、このための貸しだったか。

「おいおい、まじかよ」リュキウスの隣に座っているマスタングが険しい顔をしながら言う。「絶対に畏だつてわかつてんに、それでもこいつの言うことを聞くのかよ」

リュキウスは、仕方なさそうに言う。

「シユラクを助けてもらった恩があるしね」

ジャクナ四世が微笑みながら訊く。

「絶対に畏だ、などと……それよりマスタング、君は？」どうする？

「お前の言うことなんぞ聞けるか」

マスタングはにべもなく断った。

「マスタングはこの戦争をどう思っている？」ジャクナ四世がさら

に訊いた。「どちらが勝つと思っている？」

「……とれる戦略の柔軟性に優れている反乱軍が断然有利だ。だが」
マスタングは言うのが癪だ、というような感じになる。「親父なら
どうにかできるんじゃないだろうか」

「どうにか？」ジャクナ四世の冷たい瞳が輝く。マスタングは、やはり軍事に関しては高い能力を持っているのだろうか。「具体的に
どんな作戦を取るのか、予想できるか？」

「あの糞親父のことだから、とてつもなく普通の作戦をとってくる
んじゃないのか？ ふん、おれに言えるのはこれくらいだ」

「普通の作戦……」

そう呟くジャクナ四世の頭の中にはいくつもの作戦が浮かんでいた。
た。

「ギヤロップ大將軍が取るであろう普通の作戦……それなら、何と
なくわかる気がするよ」とリュキウスが言う。「各方面の敵と小規
模の戦闘を数多くこなす。これでどうだい？ 答え合わせはなしか
い？」

ジャクナ四世が質問する。

「リュキウス。私はギヤロップ大將軍のことをあまり知らないのだ
が、あの方はそんな非効率的なこともするのか？」

「ぼくもあの人の戦史や父上からの話を聞いただけですが、ギヤロ
ップ將軍は非効率的でも確実であるならば戦いを実行するようです。
もちろん、代替案の中に確実に効率的な作戦があるならばそちらを
実行しますけど。従兄上、あの人は思った以上に我慢強い人ですよ」
「ふむ……。それで、答え合わせは結局なしか？」

とジャクナ四世がマスタングの方を見る。マスタングは顔を青く
しながら虚空を見つめていた。

「どうやら、正解らしい。しかもマスタングは、自分にしかわから
ないと思っていた父のとる作戦を簡単に見破られたのでお怒りのよ
うだ」ジャクナ四世がそう言うと、マスタングはカッとして立ち上
がるが、リュキウスがそれを抑える。「ともかくマスタング、お前

も手伝え。お前、この先何が起こるかわからんだろう。なぜなら、全てが私たちの手の届かぬところで、干渉できぬところで起こっているからだ。このまま傍観者を気取って最後には命を落とすなど、自分の運命を全て他人の手に任せておくなど……そんなのは馬鹿らしいぞ。今、お前の目の前には、お前がこの事件に介入するルートがあるのだぞ。そう、自分の命をつなぐための可能性がお前のすぐそばにあるのだ。このまま時代の波に流されたままでもいいのか？船を作ってこの時代に乗り上げ、自分の手で自分の運命を操作したいと思わないのか？ マスタング、お前は才のある男らしい。ならば、生きねば損だ。そうだ、お前が運命に翻弄された拳句に死ぬなど……私にとつて損なのだ！」

「……な、何が！ お前にとつて損だ！」マスタングは少々あつけにとられながらもやつのこと言葉返した。それと同時に、自分の胸の中で心臓が熱く煮えたぎる血潮を体中に送り出しているのが、感じられていた。彼は悔しく思った。今の一瞬間、目の前の不気味な王太子に魅せられていたのだ。それが悔しかったのだ。「ああ……ああ！ お前の申し出を受けてやる。しかしな、これは、おれがおれの運命を切り開くために、だな。なんというか……」

「仕方なく従兄上に協力すると？」
リュキウスがにやにやしながら助け舟を出した。マスタングはうんうんと頷く。

「そ、そういうことだ」
「ともかく」ジャクナ四世がまともに入る。「これからお前たちには働いてもらわねばならない。どっちに転んでも自分だけは助かるように予防線を張って置くのは忘れないように」

話は以上だ、と彼は締めくくった。

リュキウスたちは椅子から立ち上がって部屋から出た。外には数人の警備兵が立っており、彼らはじつとリュキウスたちを見つめていた。まるで、何の用があつて呼ばれたのかを知りたがっているようだった。リュキウスたちは軽くお辞儀をしただけでそこを後にし

た。

夜なので廊下は暗く、灯心を持って歩かなければまともにも前も見えなかった。

「あいつはいったい何を考えているんだ？ 本当に」廊下を歩いている時、マスタングが小さい声で言った。「自分の父親を殺してもいいのか？」

「殺すと決まったわけじゃないさ。この事件で自分も功をたてることができれば、事後の処理を担うことができるからね。王都内に反乱軍を引き入れた功績者として、父親の命を守ることでもできるよ」リュキウスは半ば自分の希望が含まれている予想を述べた。「それに、自分の命ももちろん守ることができる」

「それは反乱軍が勝った場合だろ？ 負けたらどうするつもりだ。あいつは裏切り者として王都内の地下組織じゃ知らない者もいなくなってるんだぜ」

「調査員として侵入していたとでもいえばいいさ。なにせ、従兄上はサウルス王の嫡男で今のところの唯一の男児だからね。少し怪しくてもどうにかなるさ」

「ふん……お前も結構えげつないことを、つらつらと言っもんだ」マスタングはぞつとしながら言った。

「これでえげつないなんて言ったら、君は王宮内ではまともになんていけないね。それに」リュキウスは友から目を逸らしながら言った。「従兄上はもっとえげつないことを考えているかもしれないんだから」

「……」マスタングはさっきのジャクナ四世のことを思い出しながら、息を呑んだ。「それなら、おれたちは本当に大丈夫なのか？」
「なあに、きつと大丈夫さ」

従兄上に見放されない限りは……おそらく。リュキウスはそう考えた瞬間、自分の持っている灯心が震えているのに気が付いた。馬鹿、収まれ、恐れを気取られて、いらぬ心配をかけさせるんじゃない。彼がそう念じると、少しずつ腕の震えが止んできた。くそ、死

ぬ覚悟はいつだって出来ていると言つのに……なんでこう、従兄上のことを考えると不安や恐れがにじみ出てくるのだろうか。いや、だから、いつも言っているじゃないか！ 考えるんじゃない。それは無意味な問いなのだから。

「ただ……従兄上の性質それをほとんどの確に表している言葉をぼくは知っている気がする」

リュキウスはぼつりとつぶやいた。マスタングが驚きながら訊いた。

「え？」

「水清き所に、魚は住まぬ」

「清い？」

「そう、ぼくは、従兄上とは途方もなく澄んでいる人間なんだと思う」

「どこが。おれには逆に濁にごりきつているように思えるね」

マスタングはきっぱりと彼の説を否定した。それでも。

「いや、そうなんだ。リュキウスは心中で首を横に振る。従兄上は考えられないほど澄んでいるんだ。悪も、善さえも、完璧に純化してしまえばそれは歪なモノに見えるから、ぼくたちには彼が怖ろしく映るんだ。……あの人の性は善と悪、そのどちらなのだろうか。いや、そのどちらでもないのかもしれない。でも、ぼくにはこれだけははつきりとわかる。ぼくたちを通してどこか遠くの虚空を見つめるあの人のあの目が、ぼくたちは怖ろしいんだ。リュキウスは小さく歯ぎしりした。震えがまた強くなり始めていた。馬鹿が。だから、考えるなど言っているのに。彼は自分自身にいらいらしながら唇を噛んだ。

震えが完全に止まると、リュキウスは大きなため息を吐いた。その瞬間、ふっと灯心の炎が消えてしまい、辺りは真っ暗になってしまった。いや、星影が、青白い光を窓からかすかに差し込ませていた。

「割と明るいな」

マスタングが言った。

本格的に冬に入ってから、ギャロップは猛烈な勢いで各地方の反乱軍を攻めた。少量の食料しか持たないうえ、主に騎兵のみで行動する彼らの機動力は非常に高かった。そんな中でも北部と東部はあまり被害を受けなかった。なぜなら、緯度の高い両地域は、冬になり気温が下がったおかげで雪が降り積ようになってきたからである。それにより騎兵の機動力が低下したのだ。

それでも、東部反乱軍が雪の降り積もった地域を抜けると、またギャロップたちの脅威にさらされることになった。続いて北部が雪のエリアを抜けると、他の地域と同様に騎馬兵での攻撃が加えられた。

ギャロップは、大勢の敵兵を相手にする場合に弓兵でしか攻撃を仕掛けてこないが、少数の偵察兵などの時、敵が寝静まった時などは歩兵や騎兵で奇襲を繰り返した。

また、物資が豊富にある南部にはたびたび進撃を繰り返し、南部反乱軍の抑えていた村を手中におさめ、そこで略奪行為を行った。

そこまでコケにされていたのに、ジャーニーたちは何も対策を取らなかったのか。いや、実際の所、ジャーニーはギャロップたちが好きに行動できないようにするための別働隊を出していたが、それらはギャロップたちと正面衝突して散々に敗れている。

「どういうことだ？」ジャーニーは親指の爪を神経質そうに噛みながら呟いた。「戦術単位の勝利を積み重ねて戦略面の劣勢を覆そうつてのか？」

ギャロップはまさにそれをしようとしていたのだ。小さい戦闘を繰り返し、小さい利益を積み重ねることにより最終的に訪れるであろう主戦をできるだけ有利に導こうとしているのだ。

「気の遠くなるような作業だ」ジャクナ四世は彼の勝利を聞くたびにそう思った。「もしかしたら、ギャロップ將軍はその気の遠くなるような作業を、一度のミスもなくにやり遂げるかもしれない。け

れども、それではだめだ。だめなのだ。それでこの戦いに勝ったとしても、サウルスに残るのは戦争で疲れ果てた民だけなんだから」

ジャクナ四世の率いる王都内地下組織は王都の市民のほとんどを傘下にしていた。だが、彼らは表立ったことはせず、時が満ちるのを静かに待った。考えてみれば、おかしいことだった。各地域からじりじりと反乱軍が攻めてきているのに、王都の市民たちは不満を誰にぶつけることもせずじっと押し黙っているのだ。地下組織のことを知っている人は、この静けさが、嵐の前のそれだということを知っていた。

年明け前、北部にネオツトス將軍率いるイムサ軍が攻めてくると、シャンティは、撤退するか、このまま進撃を続けるかを迫られることになった。シャンティは迷った末に進撃続行を選択する。同時に、北部のエクリプスに向けて王都を攻め落とした北部軍が戻ってくるまで防御に専念するように命令した。

「ははは、恐ろしく酷な命令ですね」

とエクリプスは独りごちた。彼はすでに戦場についており、潮の川を挟んで激しい戦いを繰り広げている。イムサ軍の進行はそれだけではない。今回は海路を使つての攻撃も繰り出してきている。イムサ海軍の標的になった港町スピノだった。理由は簡単で、以前、イムサ国と密通していた時に町の防御機構を見せていたからだ。因果応報というか、そのせいで大分苦労しているようであった。が、小ウアズマ遠征の時にノドドン・モンモ間の海路で海賊を討伐していたサウルス海兵が到着すると一気に戦況は逆転した。この時行われた海戦で敵将コローネが行方不明（おそらく海に落ちて溺死）になっている。

各地反乱軍は王都への進撃を続けた。王都に大分迫った時、シャンティ率いる北部反乱軍とハラン率いる東部反乱軍が合流する。だが、北部の物資はイムサ国との戦線でも使われていることもあり、東部の糧秣事情が格段に改善するようないことは起こらなかった。それでも、東部の兵士たちが食料不安を若干軽減させたのは事実であ

る。

北部と東部の反乱軍が合流したことを知った南部グナトウス反乱軍の長であるエラルジスは王都への本格的な進撃を開始する。

王都センチュリオンの王宮すぐそばにある兵舎本部は静かだった。誰も戦争の行く末を案じていた。敗北時の自分たちの待遇を案じていた。平民出の下級の兵士たちは兵舎の庭にある木にもたれ掛って地面を見つめながら、突然竜が空から降りてきて反乱軍を食い尽くしてくれるような奇跡が起こらないものかと空想していた。

上級の兵士、つまりは将校クラス以上の兵士たちは軍議室に集まって毎日毎日、現状を打開するための作戦を考えていた。そんな中で、ギャロップはつまらなそうに窓の外を見て呆けている。

それを見たアレックスがいらいらしながら言った。

「ギャロップ大將軍、さっきから窓の外ばかり見ていますが、ちゃんと何かを考えているのですか？ まさか、さっきの案で本当に大丈夫だと？」

「思っていない。確実にギャンブルになる。だが、今や各地からの反乱軍に王都が囲まれるのは決まりきっている。だから、囲まれた後のことを考えて色々しておくべきだと思うが？」

「囲まれてしまったのは誰のせいだと思っている！」アレックスが怒鳴った。「お前がもつとちゃんとした作戦を立てていれば……」

「馬鹿な、おれは今の戦力での最善の作戦を立てたつもりだぜ？正直、今回のことに関しては、シャンティの英断としか言いようがないだろう。まあ、本当に英断になるかはまだ決まっていけないがな」ギャロップはつまらなそうな顔で返す。「とにかく、この期に及んで王都を包囲させないための作戦を考えるなんぞ、愚の骨頂よ。それよりも、囲まれた後のことを考えて作戦を組み立てる方が現実的で実用的だ」

「……！」

アレックスはやみくもに怒鳴りたい気持ちを抑えながら握り拳を

他方の手で握りしめた。

「とはいえ、ギャロップ」ジャクナ王が憔悴ヒヤクしきつた顔で言う。「本当にさっき言った作戦をとるのか？ 本当に、五千人の騎馬兵団を先んじて王都の外に出しておき、王都包囲をした敵に背撃を行うのか？ わかっていると思うが……かなり危険だぞ。ほかに策はないのか？」

「現段階では兵力を分散させて中央サウルス地域の各都市に送ることとはできない。そういうわけで王都内での戦いを決めただけですが、だからと言って全員が市城壁の中にももっていたも、しょうがないでしょう。こちらは糧秣リョウモクのことがあるから、長期戦は狙えないし……」

「……」ジャクナ王はその案を採用するかどうか迷っていた。自分一人では決められそうもなかったので、諸將軍にも聞いてみようと思っていたが、彼らは重そうな頭を抱えており、これではまともな判断もできないだろうとジャクナ王は思った。「一旦休憩を取ろう。その後にギャロップの作戦を取るかどうかを採決したい」

「採決？」ギャロップが首を傾げた。「なんでここにきて、採決なんて方法を取るんですか？ 今までは、王が全てを決めていたじゃないですか」

「今回ばかりは独断で作戦を決めることはできない」ジャクナ王は明確な理由も言わずにそう言った。ギャロップは、王は気弱になっ
ているんだと感じた。「それでは、解散」

ジャクナ王が言うと、諸將軍たちは席を立って部屋の外に出ていく。もちろん、部屋の中に残っていた者もいたが、それは少数のみだった。大体は兵舎の外に出て新鮮な空気をいっぱい吸い込んで気分転換をしていた。

ジャクナ王、アレックス、ギャロップは部屋の中に残っていた。彼らは黙って天井を見上げているだけで、一言も話さなかった。

ジャクナ王は、本当にギャロップの作戦でどうにかなるんだろうかと考えていた。

アレックスは、どうにかして現状を打破できないものかと考えていた。

ギャロップは、ぼおっとして頭を休ませていた。

アレックスはギャロップが何も考えてなさそうな顔をしているのを見て、徐々にイラつき始めた。本当に何とかしようと考えているのか、あの男は……。そう思いながらギャロップを見ていたら、瞬間、ふとあることに思い至った。ギャロップは、本当に現状を打破するためにさっきの作戦を提示したのだろうか……。もしかしたら……。

アレックスは疑惑を募らせながらこの休憩が終わるのを待った。

二十分後、休憩の時間を厳密に決めていたわけではないけれど、全員が部屋に戻って着席したことにより休憩が終わった。直ちに軍議が再開される。

「それで、ここに戻ってきたということは、皆はギャロップ大將軍の案に賛成するかどうか決めることができたのだろうな。私はそういう風に考えて軍議を進ませるがいいか？」ジャクナ王が言うと、諸將軍たちは各々、うんと頷いた。「わかった。それでは……」

「少し待ってください、王。私にとある不安があります」アレックスが進行をぶった切って口を挟んだ。諸將軍たちがどうしたんだ？ というような目で彼を見る。ジャクナ王も同様だった。アレックスは構わず続ける。「ギャロップ將軍は騎馬軍団を率いて外で敵を背撃する任務につくと言うのですが……本当にそれを実行なさるのでしょうか。いえ、將軍を疑っているわけではありません。ですが、もし敵の数が圧倒的であった場合、無条件降伏の方に心が揺れ動いてしまってもおかしくはない話です」

「それならば、信用できる奴を別働隊にすればいい」ギャロップはこともなげに言った。「お前が別働隊を率いればいいだろう。別に、おれはおれが別働隊を率いた方が勝率が良いと思っただからそう言っただけだ。別働隊の将としてのおれをお前が信用できないなら、お前が率いたらいいじゃないか」

「そ……それは、しかし……やはり、ギャロップ大將軍でなければ無理な仕事ですのぞ」

アレックスはジャクナ王の顔色をうかがう。彼の顔は、やや青白くなっていた。アレックスはそれを見ると、心中でガッツポーズをとった。

ギャロップはとげとげしい口調で言う。

「てめえはいつたい何なんだ？　なんで、ここにきて結束を乱すような事を言うのか説明を願いたいもんだ」

この期に及んで足を引つ張り合おうとするのは、貴族特有の嫌な性質だぜ、と舌打ちする。

「いえ……もう気になさらず」アレックスはへらへらしながら言った。「王、それでは採決を取りましょう」

「……わかった。採決を取ろう。ギャロップの案に賛成の者の挙手を願いたい」ジャクナ王が言うと、諸將軍たちはおずおずと手を挙げた。その中にはアレックスもいた。「反対の者……出来れば意見と共に……」

反対には、誰も手を挙げなかった。賛成と反対、その両方に手を挙げなかった者もいる。

「どちらにも手を挙げなかった者は？　なぜ、手を挙げなかった？」

ジャクナ王がそう聞くと、一人の將軍が小さな声で、震えながら返した。

「降伏という道はないのでしょうか？」

「降伏だと！」ジャクナ王が急激に顔を赤くしながら怒鳴った。「お前、そんなことをしてみる。お前の家族はあの反乱軍によって慰み者にされ、果てには殺されるか、奴隷にされるかだ！　お前はそれでもいいのか？」

「いや、そんなことは起こらないんじゃないのかね。とギャロップは思う。なんてったって、相手はあのシャンティだぜ。」

將軍が「すいません」と返すと、ジャクナ王は息を切らしながら「それでは、ギャロップ大將軍の作戦を採択する」と机を叩く。ギ

ヤロップはアレックスの方を見た。アレックスは、自分の作戦が失敗したにもかかわらず、にやにやとしていた。ギャロップはその笑みに一抹の不安を抱いた。

騎馬兵五千を揃えたギャロップ別働隊が王都から出発すると同時に、古い離宮に軟禁されていたリュキウスたちが王都の中に移された。ウイスカは地下組織から離れなければならなくなったわけだが、彼の代わりはリュキウスらが立派に果たした。

ジャクナ四世やリュキウスらは地下組織をグループ分けし、反乱軍が王都を包囲した際にどのような行動をするかを決めていった。

「例えば、いきなり門を開けた場合、反乱軍はそれを畏だと思って容易には入ってこないんじゃないのか？」

とギャロップが集会の時に行った。葡萄酒店の貯蔵庫で行われた集会には五十人ほどの男女が集まっていた。中には、ジャクナ四世やリュキウスを見るために集会に参加している娘もいる。

「それはもう向こう側と事前に連絡を取るしかない。」リュキウスは微笑みながら言った。集会に来ていた女たちがうんうんと頷く。

「実際、ウイスカ殿は父上とすでに数回連絡を取っているらしい。だから、王都内に反乱軍を受け入れる地下組織があるのも知っているし、王都内に入った時、王都の富を略奪しないように兵士たちにも言い聞かせてあるらしい。あつちは苦労せずに王都内に入る気満々だよ。とはいえ……城門を開けるといことは、こちらもある程度戦わなくちゃならない運命にあるってことだ」

「城門にいる兵を倒して城門を開けにやならんからな」マスタングが頷く。「それでも、サウルス人は一般市民でも戦闘経験あるのがあるからな。なあ、あんたたちも戦えるんだらう？」

今度は男たちがうんうんと頷いた。

「ま、老人は必要ないけどな」マスタングが言うと、歯の抜け落ちた老人が杖を振り上げてマスタングに怒鳴り出し、周りの者が老人を羽交い絞めにして彼の暴走を止めようとする。「ははは、まあ、

声の馬鹿でかい爺さんには音頭でも取ってもらおうとして……」

「問題は、どれくらい兵力があればいいか、だね」リュキウスが
あごに手を当てる。「五千人の精鋭をギャロップ大將軍が外に連れ
出してくれたのは運がよかったという。だから、残りは二万弱と考
え、さらには市城壁を守る任務は交代交代で……」

「王宮の警護はどれくらいいる？ そちらが多ければ多いほど、精
鋭が市城壁から遠のくはずなんだけどよ」

「相手は馬鹿じゃないよ。直接的な戦闘がそれほど行われない王宮
に兵力を集めるとは思えない」

「だろうな。それに、外の反乱軍へ反撃することを考えると、それ
なりの人数を市城壁に集めることになるだろうな」

「ありえるね」リュキウスが苦笑する。「ともかく、百人や二百人
の戦力ではきついつてことか」

「大体、こっちは王都の数十万人が味方なんだからよお。全員で攻
めればなんとかなるんじゃないのか？」

「ぼくの計算では、そのうち戦えるのは二パーセントくらいだよ。

それに、ぼくたちには未熟な青年たちを戦史に育てるだけの場所と
時間がない。それにそれに、将校もない。それにそれに」

リュキウスがマスタングにズイズイと顔を寄せる。

「わかつてるよ。できるだけ無傷で終わらせたいんだろっ？」

「そういうことさ」

リュキウスが笑い返すと、マスタングは腕を組みながらため息を
吐いた。

「お前の一族は、自ら進んで物事の難易度を上げているような気が
する」マスタングは、シャンティがギャロップを無傷で逃がしたの
を思い出しながら言った。「わかつてるか？ 今ならもつと非人道
的で、しかし確実性の高い作戦を立てることもできるんだぞ？」

「市民の命はできるだけ守る。それがぼくたちの使命だよ」

リュキウスは泰然として返した。娘たちが黄色い声を上げながら
倒れ込む。

「ふん……まあ、つまりはそういうことだ」マスタングが同志たちに向かって言う。「お前たちの将はお優しいことだね。それが原因で負けなければいいけれど……」

「マスタング、引ッ込めー」

と女性たちが声を上げる。マスタングは口角をヒクヒクさせながら、ぷいと顔を逸らして無視する。マスタングの生意気な態度はどうにも女性には不人気のようなだった。

そんなわけでジャクナ四世やリュキウスが先導する内部反乱計画は着々と進んでいた。この地下組織はこの時にはすでに十万に近いほどの同志を集めていたのにもかかわらず、その情報が全く外に漏れていないのは、賞賛に値することである。とはいえ、完全に歪さを封鎖できたわけではなかった。

ジャーニイの息子であるシユラク二世だけは、ジャクナ四世やリュキウスらが裏で何かをしているであろうことに勘付いていた。

それは普段のリュキウスらの態度から嗅ぎ取っただけの根拠のないものだったが、それでも彼は鬱屈とした日々の中でこれを無理やり確信に変えた。

しかし、その頃には幼い彼の心は疲弊しつくしていた。

そんな、そつと打っただけでも粉々に砕けてしまいそうな心のみまで、彼はリュキウスに頼み込んだ。リュキウスらのしようとしていることに、自分も参加させてくれと。

47・追い詰められる王都、もしくは、追い詰める王都（後書き）

画像は元大將軍。入れるところがなかったからここに。

たぶん「えっ、これが私の年収？」って言ってるんだと思います。

48・激突！

> i 3 4 7 3 0 — 4 0 5 7 <

東西南北から押し寄せてきた反乱軍はその圧倒的兵員数にて王都センチュリオンをぐるりと囲い込み、そこで腰を下ろした。それから二日間、彼らは、周りの木々を切り倒す作業、運んできた材料を使つて攻城兵器を組み立てる作業、王都市城壁の周りの堀などを埋める作業を同時進行しながら軍議を重ねていた。

市城壁の正門の正面一キロの地点に建てられた野営の^{テント}大天幕の中でシャンティとジャーニイは今後の計画を練っていた。ハランとエラルジスは自分たちの連れてきた反乱軍を指揮すると共に、双子王子が連れてきた反乱軍も一時的に指揮している。

「本当に城門が中から開くんだろうな？」ジャーニイは猜疑心に満ちた目を向けながら訊いた。「それが嘘か本当かでこれから先にとる戦略は大分違ったものになるんだから、ちゃんと答えてもらわないと困るぞ」

「それが……よくわからないんだ。交信が途絶えている」シャンティは申し訳なさそうに首を振った。「実際、ぼくもウイスカと数回手紙でのやり取りを行っただけだから」

この王都内部からの反乱計画はシャンティが考案したものではない。シャンティはウイスカがこんなことを企んでいることは全く知らなかった。この計画を知ったのは、まだ北部の反乱軍をまとめ上げている最中だった。北都にいた彼はウイスカのスパイからこの内容を記した手紙を受け取ったわけだが、最初は畏ではないかと疑つたくらいである。だが、結果としてシャンティは彼を信じることにした。ジャーニイにはあれこれ言つて納得のできるような説明をしたが、実際の所、ウイスカを信じるまっとうな理由はなかった。

「どうにかして中と連絡を取れないのか？」

ジャーニイが言うと、シャンティは渋い顔をしながら皮肉交じり

な感じで返す。

「手紙の付いた矢を撃ち込むとか？」

ジャーニイは苦笑する。

「……それでは無理だろう。まあ、確かに、ここまでは内部反乱組の計画がジャクナたちに洩れていないからな。無理して内部と連絡を取るうとして、そのせいで内部反乱のことがジャクナたちにはばたんじゃあ、どうしようもない。だがな、このままじゃ埒が明かんぞ？ おれたちはこのまま熾烈な攻城戦を開始して、内部班の力を借りずに王都を陥落させることもできるが……お前は十分な兵力を持って北部に取って返さなきゃならんからな」

「うん。王都攻めはできる限り速やかに、かつ苦労もなくすませたい」

「まあ、ともかく。堀が埋め終わるまでに中からの連絡がなければ攻城戦を開始する。もともと、こちらが攻城戦を開始すれば内部班が行動を起こす計画なのかもしれないしな」

ジャーニイは嘆息しながらそう決めた。

「ジニー」シャンティは周りに人がいないのを確認してから言う。

「一つ質問していいかな？」

「なんだ？」

「やはり、兄上は殺さなきゃならないのかい？」

ジャーニイは眉間に皺を寄せる。こいつ、まだそんなことを言うてるのか。

「シャンティ、それはお前も納得したことだろう？ 大体、この前の軍議でもそう決まって、お前も賛成の方に手を挙げていたじゃないか。まさか、今更になって心変わりしたとでも？ おいおい、お前はジャクナの前してきたことを全てその目で見てきて、その体で感じてきたんだろ？ それならば、ジャクナの首を刎ねなければ国民が納得しないのはわかってはいるはずだ」

「少し言ってみただけだよ」シャンティは、自分の中に後ろめたさが残っているのを感じながら言った。そして、まだ決心がついてな

いのか、この意気地なしめ。と自分で自分をなじった。「それとも一つ。ギャロップはどうするんだい？」

「あいつは生かしておく」ジャーニイは即答した。「あいつはまだ生かす理由がある。ギャロップの軍才は比類なきものだし、カバルス人という所も重要だ。お前も言っていただろう、カバルス人が国家の中核で重用されていることによつてカバルス人たちの心が安定すると」

「本当に助けられるんだろうか」

「助けて見せるさ。なに、大丈夫だ。あいつの息子はジャクナの下にいるからな。人質となつた息子のために気に入らない重税王の下についた優しき將軍とでも公表すれば、国民は納得する」

「そうか」

シャンティはほつとすると共に、ジャーニイの説明の仕方がなぜか気に入らなかつた。まるで、ギャロップを物のように考えているみたいだ。

さらに、彼にはもう一つ聞きたいことがあつた。兄上の子供の、ジャクナ四世はどうするつもりだい？ と、そう聞きたかつた。けれど、ジャーニイは、質問はもう受け付けなと言つるように地図を睨み始めていた。

シャンティは自陣に戻ることを告げてからテントを出た。テントの外にはシャンティとジャーニイの近衛兵団が集まつており、シエイバスはシャンティが出てきたのを見ると歩み寄つてきた。ウイスカがシャンティのために内部反乱を企てていると知つてからのシエイバスの顔は晴れやかそのものである。

「シャンティ様、何か新しいことが決まりましたか？」

「これと言つて何も……。あの堀が埋め終わる頃までに内部班からの連絡がなければ攻城戦を開始すると、そんなことが決まつたくらいだよ」

シャンティが歩きながらそう言つと、シエイバスはやや悔しそうに返した。

「まあ……仕方のないことですね。できれば、親父殿の作ったであろう組織を有効活用したいところですが、連絡がうまく取れないんじゃないですかね」天幕から離れ、周りの邪魔にならないくらいにボディーガードを開始する。「それで、シャンティ様はこれからどうする予定ですか？」

「自陣に帰って各部門の進行状況を確認しようと思う。で、偵察兵からの報告を聞いて、問題があれば対策を練る」

シャンティたちはその後、木を切り倒す班、攻城戦を組み立てる班、堀を埋める班を抜き打ちでチェックして、皆が皆十分に働いているのを見て満足しながら自陣の野営の中に戻った。

「食料はどれくらいあるのかな、できれば褒美を上げたいもんだけど」

シャンティが言うと、シエイバスは首を振った。

「長期戦を覚悟しておかなければなりませんので、士気を上げるためとはいえ、食料を必要以上に使うのは得策ではないですよ」

「長期戦ねえ、北部は大丈夫だろうか」

シャンティはエクリプスやエレのことを考えながら言った。

シャンティたちが食料班を手伝ってお粥かゆを作っていると、各地に派遣していた偵察兵が続々と戻り始めた。シャンティたちは戻ってきた班から各地の様子を聞いたが、大した情報はなかった。だが、日が暮れ始めてから戻ってきた班は、王都近くにある古い離宮に数百人の歩兵がたむろっていたという事実を掴んで帰ってきた。シャンティはすぐにそのことをジャーニーに伝え、千人から二千人数の兵士を派遣することに決めた。

反乱軍が王都を包囲してから三日目。朝日が昇り始めると、先の前衛隊は、すでに完成していたいくつかの攻城兵器を携えて古い離宮に向かって行軍を開始した。一日もあればそれを陥落させることができるだろうと皆が思っていた。

シャンティ、ジャーニー、ハラン、エラルジスの各司令官は自陣

に残って前日までと同じ作業を続けた。時々、市城壁内から矢や火矢が撃ち込まれて作業を妨害されもしたが、シャンティたちが反撃すると、敵からの攻撃は止んだ。

夕食時、シャンティたちがいつも通り夕食を作っていると、偵察班が続々と帰還してきた。彼らの話によると、古い離宮での戦いは反乱軍側が押しはいるものの、全体としたら難航しているのとこのとだった。それでその夜、シャンティはジャーニーと相談して追加で兵士を送ることを決めた。

相談はジャーニーの陣営で長いこと行われたので、シャンティは深夜の戦場を帰らねばならなくなった。

ルルディファイロに乗ったシャンティを中心にして五百人の近衛騎兵が整った足音をたてながら歩く。すると、一番外にいた者が「誰かいます！」と声を上げた。兵士たち一斉に身構えて「誰だ」「誰だ」「名前を言え」「王子を守れ」と声を上げる。

「おれだ。偵察兵をしている者だ」闇の中から現れたのは兜と剣をなくした騎兵の姿だった。彼と馬は息を切らしながら、よろよろと近衛兵団に近づいてきた。近衛兵団は警戒を解かない。一番外の者が彼に向かって槍を突きつけながら近づいていく。騎兵は叫んだ。

「だからおれはお前たちの仲間だって。お前らこそなんだ？」

「シャンティ様の近衛兵団だ」

と槍を突きつけている兵士が答えた。

「なんだと！」男は絶望したような表情をしながら言った。「早く逃げる！ シャンティ様、早く逃げてください！ 後ろから、大勢の騎馬軍団がやってきます！」

「み、皆の者！」シエイバスがすぐに声を張り上げる。「シャンティ様を守れ！」

「おお！」

と兵士たちががちゃがちゃ慌ただしく密集隊形を作る。

その間にシエイバスが指示を出す。

「バルクはジャーニー様にこのことを伝えてこい。それ以外は自陣

に戻るために襲步前進」

近衛兵団の後方を指揮していたバルクと言う名の騎兵は短く返事をすると、踵を返して走り出した。彼の傘下の近衛兵たちも一斉に駆け出す。

「あとその戦友を保護しろ！」

シャンティが付け足す。さっきまで槍を突きつけていた近衛兵はすぐに偵察兵を自分の騎馬に移して密集している近衛兵団に戻る。

シャンティはルルディファイ口を操りながら耳を澄ませた。確かに、自分たちの騎兵の足音ではない、小さい足音が聞こえてきていた。

騎兵……それならば、彼しかいないだろう。

「ギャロップだ！」シャンティは叫んだ。「この敵はギャロップ。しかし、恐れるな。ぼくたちは彼の攻撃の効果を減ずるために働かねばならない」

「シャンティ様に夜襲をかけるとは、憎々しいにもほどがある！」と古参の近衛兵がカバルス鎮定軍の時のことを思い出しながら叫んだ。

「気にするな。ぼくたちはその分だけ貴重な経験を積んでいるということだ」シャンティは周りを見渡しながら命令する。「ぼくたちは自陣に帰還した後、兵士を集めてすぐさまギャロップ隊迎撃に取って返す。兵士を集めている時間はあまりないぞ。精鋭のみを集めるのだ」

彼らは自陣に戻るとシャンティを守るための最小の兵士だけを残して、散開した。シャンティたちは焦れるような思いでそれを待っていたが、やがて遠くで赤々とした光がともり始めるようになった。シェイバスが誰にもなく言う。

「火矢を撃っているのか？」

「おそらく矢は使っていない。松明か何かを投じているんだ」シャンティが妙に冷静に返す。「相手は騎馬の機動力を最大限に生かそうとしていることを考えるんだ。それから考えると今回は二人乗り

などをしてないはずだ」

シエイバスが質問する。

「なぜ、機動力を最大限に生かすと？」

「丁寧に時間をかけて夜襲をする奴はいない。さらに、前々からの傾向などを見ても、ギャロップたちはできるだけ自分の損害を少なくしようとしている。だからある程度ぼくたちにダメージを与えた後はすぐに逃げ出すはずだ」

「どこに逃げるんです！」

「それは……逃げない？」 シャンティがはつとする。「ここでぼくたちをほとんど殲滅するつもりなのか？ ならば、内からの攻撃もあり得るぞ！」

そう言ったと共に、王都内部から大きな声が響き始めた。城門が開いて中から敵兵たちが飛び出してきたのだ。

「シエイバス、今の兵数は！」 シャンティが怒鳴ると、シエイバスは四千、と答えた。「わかった。ぼくたちはこれからギャロップ隊迎撃に打って出る。それ以外の者は内からの攻撃に対処するようにシエイバス」

「おい、お前たち」 シエイバスがついさつき帰ってきたばかりの十人ほどの近衛兵の集団に命令する。「この由をまだ野営内にいる者たちに伝えてこい」

「違う、君がここに残る兵士たちを率いるのだ！」

「ですが、私はシャンティ様を……」

「くどいぞ、主の命令に應ぜられんのか！」

シャンティは険しい顔でシエイバスを見た。シエイバスは手綱をぎゅっと握りしめながら、短く返事をした。

「はい」 シエイバスはさつき命令した兵士たちに声をかける。「おい、お前たち、ついてこい」

「わ、わかりました」

兵士たちは集団から離れるシエイバスについていく。

「シャンティ様、それでは。必ずやまた会いましょう」

シエイバスはそう言っつて自陣内に走つて行つた。

「それでは……」シャンティは一度深呼吸して、剣を天に掲げた後に声を張り上げた。「皆の者、行くぞ！ 我らが敵は、サウルス国最強の將軍エウクス・ギャロップだ！」

シャンティが叫ぶと兵士たちも叫ぶ。

「我が主君に、竜の加護あれ！」

シャンティたちがギャロップを撃退するために声を上げた頃、ジャーニイは燃え盛る自陣内で兵士たちを集めていた。彼はシャンティの近衛兵から騎馬兵団が奇襲をかけてきたことを知ると、すぐにベアードに命令して兵士を集め始めた。その際、シャンティの近衛兵たちは少数で帰すと危険なので、自分の近衛兵団の中に組み入れている。

それで現在、おおよそ三千の兵士を集め終わったジャーニイはそれを持つて外から襲つてくる騎馬兵団を迎撃しようとしていた。

「ジャーニイ様」とベアードが声をかける。「ですが、外にいるのが騎馬兵団ということは、つまりはそれらを指揮しているのはギャロップであると考えられます。ならば、それは同時に、王都内にはギャロップがいないということです。この隙に中に攻め込んではどうでしょうか。中に入ってしまえば、内部の反乱組織の協力を取り付けることもできますし」

「……ああ、わかつた」ジャーニイは即決した。「ギャロップと戦うのは避けた方が良いのは確かだし、敵の急所はどちらかと言えば王都だからな。よし、ベアードの意見を取り入れて内部への攻撃を開始する」

「皆の者、聞こえたか！」ベアードが大声を出す。「我々はこれから王都内部より進撃してくる兵士たちをなぎ倒し、王都内への侵入を試みる。敵を殺すことではなく、進むことを第一とせよ」

兵士たちは短い返事を出す。

「それ、反撃開始だ」ジャーニイがさういうと、兵士たちがぞろぞ

ると動き始める。「どうした遅いぞ、密集隊形にこだわるな。進め進め」

ジャーニイとその兵士たちは徐々に歩く速度を高めていく。それに伴って歩調も同調し始める。ジャーニイが「良いぞ」と声を出し兵士たちの士気を上げる。

近衛騎兵の一人が言う。

「ジャーニイ様、前方に敵兵多数」

ほかの近衛兵も報告する。

「右方向にも敵がいます」

ジャーニイが命令を下す。

「正面の敵はそのまま前進して圧殺せよ。槍歩兵、堅固な槍衾やじりを作れ。右方の敵には剣歩兵を当てる。どうせ士気の落ちた弱兵にすぎん。対する者は少数でよい。さあ、突撃い！」

兵士たちは一斉に攻撃を開始する。正面にいた兵士たちは串刺しにされ、敵の後方にいた兵士たちは抵抗する気配も見せずに逃げ出した。右方にいた敵も、統制のとれた兵士たちが自分たちに向かつて突き進んでくるのを見ると、一目散に逃げ出した。ジャーニイの剣歩兵は追いかけてよとしますが、それをジャーニイが制止した。

「捨て置け、それよりも兵団からあまり離れるな。よし、このままいくぞ」

「おお！」

この頃になると、最初は敵の奇襲に混乱していた反乱軍陣営の体制が整い始めてきた。東軍司令官ハランや南軍司令官エラルジスも兵士を集めながら敵への迎撃を始める。だが意外なことに、外から襲ってくるギャロップを迎撃しようとしていたのはシャンティが率いる四千だけだった。

ハランの陣営ではほかの所に比べかなり大勢の敵が押し寄せていた。ほかの三軍と合流したことによってハランの率いる東部反乱軍の糧秣事情などは解消されていたが、それでも東部反乱軍は東西南

北の反乱軍の中で穴であると思われていたようである。

敵の攻撃の激しさは尋常ではなかった。数千の兵士たちが一斉に東側の城門から飛び出してきてあつという間に野営を覆い尽くしたのだ。こちらを包囲する敵の集団をハランたちは隊伍を組んで打ち破り、返す刀で敵を殲滅し始めた。

そんな東軍を率いるハランの所に、若い兵士が混戦を掻き分けながら近寄ってきた。彼はハランのすぐそばに来て言う。

「ハラン様、シャンティ様はどうやら外から襲ってくる騎馬兵団を迎撃に出たそうです」

「……騎馬兵団？ おいおい、その兵団を率いているのはギャロツプ大將軍じゃないだろうな」

ハランは耳を疑いながら訊いた。兵士はおどおどしながら言う。

「それが……騎馬兵団の将は、その、ギャロツプ大將軍である可能性が高いそうです」

「あの人はやつぱり少し変だぞ」ハランは苦笑いを浮かべる。「わかった、お前は私の兵団に入れ。ええい、糞。それと誰かギャロツプ大將軍と戦いたいと言う無謀な奴はこの中にはいないのか！」

南軍のエラルジスの所にはジャーニイが王都内に侵入しようとしているという情報が伝わっていた。

「それは本当か？」と言ったエラルジスの頭上を数本の矢が飛び去っていく。騎馬してなかったエラルジスは頭を抱えてしゃがみこむ。ジャーニイのことをエラルジスに伝えた兵士もしゃがみこむ。「それで、ジャーニイ様はいつたいどれくらいの兵士を率いて王都の中に侵入しようとおられるのだ？」

「四千くらいだと思います。が、詳しいことはよくわかりません」兵士は城門の方の敵兵を見る。敵兵は弓矢だけを持ち、横並びになつて一斉に矢を放っている。それだけでなく、市城壁の上からも矢が飛んでくる。

「わかった」その怒鳴るエラルジスの頭上をまた矢が飛び交う。「

すぐに駆けつけたいところだが……何をしている、矢を打ち返せ」

エラルジスはやや退却した後、盾を持った槍歩兵を前に並べ、そのすぐ後ろに弓兵を配置して迎撃した。だが、城門側は明りがなく、なおかつ自陣側はテントに移った火のせいで明るい。そのせいで弓矢での合戦は敵の方が圧倒的に有利だった。エラルジスは負傷覚悟で槍歩兵隊に突撃を指示したが、敵兵たちはそれを見るとすぐに王都の中に逃げ込んだ。兵を收容した城門はどんどん閉まっていく。「入り込め、入り込むんだ！」

エラルジスの声に背中を押されて兵士たちが次々に閉まっていく城門を潜る。だが中に入った瞬間に敵兵士に槍で突き殺されてしまう。それを見たエラルジスの兵士たちは前進を止め、城門が閉じられるのを見送った。

自陣に残った北部反乱軍を任されたシェイバスはまず兵士を集めることから開始し、十分な兵士が集まった頃になると敵への反撃を開始した。槍歩兵を密集させての突撃により敵兵はどんどん押し戻される。そのさなか、炎の向こうにフートの率いる百人隊が隊伍を組んでいるのを見つけた。

「あそこだ」シェイバスは剣をシェイバスの方に向けて叫ぶ。「フートス隊がいるぞ、助けに入る！」

「おおー、と兵士たちは叫びながらフートス隊が戦っている騎馬兵にあいたい相対する。敵騎馬兵はこちらの攻撃にひるまず反撃してきたが、槍歩兵たちは盾を固く構え、それをしのいだ。敵の突撃力をゼロにした槍歩兵は一瞬だけ密集隊形を崩し、その隙間から軽装剣歩兵を突入させた。彼らは次々に騎馬の足を切って回る。騎馬が倒れると槍歩兵たちは地面に倒れこんだ騎兵を串刺しにした。

「おい」敵騎兵から解放されたフートスがシェイバスのもとに駆け付ける。「王子はどうした？ まさか、王子が見つからないんじゃないだろうな？ 何してやがんだ、おれよりも先に王子を探さねえか！」

「馬鹿野郎。シャンティ様とおれは一緒にいたんだ。シャンティ様はこの夜襲を外側からかけてきたのがギャロップ將軍だと思い、兵を率いて迎撃に出たのだ」

「馬鹿はてめえだ。お前は近衛兵なのになんでここにいるんだよ」

「知るか！ おれが指揮をとれるからだろっさ」

「何が何やら」

フートスは頭を掻きむしりながら地団太を踏む。

「後ろから敵歩兵がきているぞ。フートス隊長、槍歩兵の中に入れ」

シエイバスが剣でフートスの後ろを指し示しながら叫ぶ。槍歩兵

たちは自分たちの間にフートス隊の入ることができる隙間を作つて見せた。

「なんだと？」フートスは後ろを振り向く。後ろには数十人の敵歩兵がおり、皆軽装である。「あんな敵に隊伍を組む必要なんざねえんだよ！ おめーら、突撃だ。好き勝手にやっつていいぞ。敵を倒した後はおれに向かつて集まれ。集まった後は、王子を助けに向かう」

「フートス隊長、シャンティ様の所に行く気か？」

シエイバスが驚きながらそう聞いた。

「当たり前だ！ お前もここが鎮静化してきたら適当な奴に指揮権を任せて、王子を探せ。お前は近衛隊長なんだろう？ それならお前が王子を守らずして誰が守るんだ！」

フートスは言い終わると敵兵に突っ込んでいった。

「お、お前に言われんでもわかつている」シエイバスは舌打ちした後、周りを見渡して敵兵が集まっている所を見つけるとその方向に剣を向けて突撃を命じた。「フートス隊はもう放つておけ、それよりも早くこの場を治めるのだ。そうだ。一刻も早くシャンティ様の所に急がねばならん。なぜなら、あの人が戦っている相手こそがこの国最強の將軍なのだから！」

シエイバスの率いる兵団が向こうに見える敵兵に突撃を開始しようとした瞬間、天幕の炎を突き抜けて敵兵が彼らの側面に奇襲をかけてきた。シエイバスたちは統制を失う。

「邪魔するんじゃない！」

兵士の一人が盾で敵を殴りつける。それを見た敵兵は一瞬たじろいだ。数十の兵士たちは後ずさった敵兵へ一斉に飛びかかり、覆いかぶさる。目の前の味方兵を押し分けて奇襲してきた敵兵を剣で突き刺す。敵兵が顔もわからないくらいにくちやぐちやになると、兵士たちは怒りからくる皺を顔いっぱいにつけて、向こうの敵兵を睨んだ。

「よし、次だ、次！」シエイバスは兵士たちが持ち直したのを見ると、再度突撃の命令を下した。「だが頭を冷やせ、密集隊形を取れ、固く、強く……行け、突撃だ」

おあー、と叫びながら兵士たちは一丸となって走り出した。

同時刻、ギャロップは反乱軍の陣営を襲撃し、十分に攪乱した後、反乱軍の陣営から大きく離れ、まずは古い離宮に向かった。古い離宮に押し寄せてきていた数千の反乱軍兵たちはすでにギャロップたちの手によって殲滅されている。

「おれだ、ギャロップだ」固く閉じられた城門の前でギャロップは、中にいる兵士たちに声をかけた。「早く城門を開ける」

中からは何の音沙汰もなかった。ギャロップは、まさか自分がない間に何者かの手によって落とされたんじゃないやあるまいな、と思った。ギャロップは後ろの者に声をかける。

「おい、離宮を回って隠し通路から中に入れ」

兵士は首を振る。

「將軍、この離宮の隠し通路は、マスタング様やリユキウス様が連れてこられた時に、すでに閉じられています」

「そうだったな……」ギャロップはあごに手を当てて考える。「疲れている兵士を元気な者と交換したかったが……それより、いったいどういう理由で城門は開かないんだ？」

兵士が恐る恐る言った。

「ウイス力殿が裏切った可能性があるのでは？」

「ウイスカが？ ……いや、いやいや…… ははは、ありえないことではないな」ギャロップは嫌な笑みを浮かべる。「そういえば、あいつはもともとシャンティの侍従だ」

「もしそうならば、どうしますか？」

「もし、だなんて。門を開けない時点で、裏切ったと考えてもいいさ。んで、どうするか？ ふん、できれば火矢でも撃ちこんでやりたいが、弓矢の持ち合わせはないからな。仕方がない……本当に、仕方がないが……王都への帰還だ」

「王都へ？」

兵士たちがざわつき始める。体勢を立て直しつつある反乱軍が囲んでいる王都に侵入するには、多大な損害を覚悟しなければならぬ。

「そうだ。王都へ帰るぞ」ギャロップは奇妙な笑みを浮かべながら、手綱を引いて愛馬の顔を城門と反対方向に向ける。「その後のことはその時に考える」

兵士たちは不安そうな顔を浮かべた後に、ついに行くしかないんだと決断し、ギャロップについて歩き始めた。この時のギャロップの兵力は四千二百ほどであった。

ギャロップの隣を走る兵士が問う。

「將軍。そう言えば、どの城門から帰還するのですか？」

「南部反乱軍のいる所から入る。あそこが一番、敵が弱いだろうからな」

王都は闇夜に盛る炎によって不気味に照らされていた。ギャロップたちは呪われた牢獄に向かうかのような心持でその方に向かった。馬が力強く地面を蹴る音が辺りに響く。遠くからは、ぱちぱちという炎の音や、死を前にして怯える兵士たちの声や、密集隊形を仲間ととるときに出るウォークライが聞こえてくる。そのほかにも、命令を含んだ怒号、ついに心が壊れてしまった者の笑い、馬の嘶き…。

ひどいことになったもんだ、とギャロップは思った。まだカバル

スにいた頃は、どんな状況でも絶対に負けなかつたと思つていた。しかし、どうだ。このざまだ。今や、おれが率いている王国軍は危機に陥っている。とはいえ、今でもおれは、呆れるほどにおれの軍才を信じている。そうなのだ。おれはまだ、戦術単位での戦闘では負けていない。

あと数分で城門の所に辿り着くと言つところまで迫つた頃、その城門は妙に人気がないのに気が付いた。

「エラルジスはどうしたんだ？」とギャロップは辺りを見渡した。実はこの時、エラルジスは自分のいた城門から王都内に侵入することを諦め、ここに少数の兵を残して自分はジャーニイのいる正門に向かつていたのだ。「よくわからんが、とにかく運がいい。無傷のまままで帰還できるかもしれんぞ」

「將軍！」

兵士が叫ぶ。

「どうした？」

「後ろから兵団が来ます。おそらく敵軍です」
見れば兵士たちは一様に後ろを向いている。

「おい、お前」ギャロップは近くの將校に命令する。「お前は騎兵二百を連れて城門に迎え。反乱軍を突つ切り、今すぐ城門を開けるようにと門番に伝えてくるんだ」

「わかりました。おいシナシュ隊、行くぞ。城門を開けるのだ」
將校はすぐに二百人を連れて城門の方に駆けていった。

「おれたちは後ろからくる兵を迎撃する。騎馬を反転させる」
ギャロップが命令すると、兵士たちはくるりと騎馬の頭を敵の方に向ける。

闇の向こうで、ダダダと言ついくつもの足音が響いている。兵士たちは固唾を呑んで、敵の姿が現れるのを待った。緊張の高まりと共に、体の感覚が薄くなり、なんとも得物があるかを確認する。早く来い、という想い。来るな、という想い。それらが交じり合つて、混乱し、脳が自分の物でなくなつたかのよう。

そんな中、ギャロップは冷静だった。ダダダの中に馬の足音もある、とギャロップは敵騎兵の数を五百から八百と推測した。

「身構えろ、そのまま突っ込んでくるかもしれないぞ」

ギャロップが兵士たちに注意を促す。兵士たちはギョツと槍や剣を握りしめた。

長い五秒の後、敵のシルエットが見え始める。天幕を焼く炎の光に照らされて、徐々にその姿も明確に見え始める。整然と盾を並べた槍歩兵、隙のない密集隊形、中央の騎兵团、中央の……一等大きな体の、一角獣ユニコーンの面甲シヤフロンをつけた白馬、それに乗る金髪の男。

「シャンティ」ギャロップは、自分の顔に思わず笑みが浮かぶのを感じた。「まさか、ここでお前と戦うことになるとはな」

ギャロップとシャンティはお互い、兵士に構えを取らせて睨みあっていた。敵味方共に兵力四千。しかし、攻撃の要である騎兵の数は騎馬兵团であるギャロップの方が圧倒的に有利である。

「だが、シャンティ。おれはこれから王都内に帰還するつもりなんだ」ギャロップがシャンティに聞こえるくらいの声で叫ぶ。「お前は、おれが外から襲撃してくるのを止めさせるために迎撃隊を作ったんだらう？　じゃあ、おれをここで逃がせば、当初の目的は達成したことになるんじゃないのか？」

「いいや」シャンティも相手に聞こえるほどの声で返す。「ぼくはここから先の戦いを有利に進めるために、君を捕縛するつもりだ」

「ふん、はは。当初の目的以上のことを望むなよ、シャンティ。痛い目を見るぜ？」

「もう痛い目は見てるよ」シャンティが周りの炎を見ながら返した。「ギャロップ。ジニーが言っていた。君を生かすと……だから、ぼくたちは、君が降伏するなら受け入れるつもりだ。どうだい？　悪い話じゃないと思う。降伏しないか？」

「前は無傷でおれを逃がしたくせにな」ギャロップが苦笑する。「まあ、良い提案だけどな……けれど、王はどうなる？　王が降伏した場合は？　おれのように生かしてもらえるのか？」

「いや、悪いけれど……殺さなくちゃならない」

「王太子は？ 王妃は？」

シヤンティが苦悶の表情を浮かべ、首を横に振る。

「わからない」

「ふん、どうせ、お前たちの法則にのっとって、先の為政者の血族は殺してしまうのだろう？」

「そんなことはしない。大体、先の為政者の血族と言うならば、ぼくも兄上とは同じ血を引いている。だから、シハルク王が作った法則が持ち出されるとは限らない！」

「限らない……か。つまりは現実ではないんだな。ははは、現実でないなら戦うしかないだろう？」ギヤロップは槍を天に突きだした。兵士たちは身構える。ギヤロップは深呼吸をした後、槍を敵の方向に向けた。「突撃！」

「我が大將軍に加護あれえ！」

兵士たちが一斉に馬の腹を蹴る。馬が嘶き、駆け、加速し、猛烈な勢いで反乱軍の方に走っていく。

「両翼展開、敵包囲開始！」

ギヤロップが続けて命じると、左右の騎兵たちはどんどん広がっていく。中央の騎兵は徐々にスピードを落としていく。シヤンティも兵士たちに命令を出す。

「両翼の弓兵、中央に向けて数回斉射した後、すぐ近くの槍歩兵と交代。敵の突撃の力を消した後は中から弓での攻撃を再開」弓兵たちは狙いもつけずに数回敵騎兵に矢を放つ。それでもブスブスと矢は命中した。先頭の敵騎兵たちが馬のコントロールを失い倒れ、隣の者を巻き込む。「敵が混乱していない状況での正面突撃は愚策だよ。さあ、弓兵はすぐに中に隠れる」

弓兵は言われたとおりに槍歩兵と交代する。槍歩兵は外に出て、盾を敷き詰める。左右に展開していた敵騎兵は構わずに槍歩兵に突っ込む。槍歩兵たちは盾で馬の突撃を無効化し、馬を串刺しにする。「馬は乗り捨てろ」

騎兵の一人が叫んだ。兵士たちは次々に馬から飛び降り、槍歩兵をヒョイと越えていくが、中にいた軽装剣歩兵によつて殺される。それでもギャロップの騎兵団は恐れを覚えるようなことはなかった。彼らは勇猛果敢に敵陣に飛び込み、シャンティの陣営を攪乱した。シャンティは混乱が広がらないように指示して回る。

ギャロップの騎兵隊が突撃を繰り返すにつれて槍歩兵の槍が馬に突き刺さったまま抜けなくなり、どんどん失われていく。それを見た騎兵たちは馬の前足を大きく上げて、槍歩兵たちを踏み潰していく。

シャンティは突出してきた騎兵隊の所に向かい、剣で攻撃する。しかし、彼の一撃はすんでの所で敵に避けられ空振りする。敵騎兵が恐怖をまとった顔で剣を振り上げる。その剣が振り下ろされる前に、ルルデイファイロは鼻息を荒くしながら敵の馬を角で突き刺した。敵騎兵が崩れ落ちる。槍歩兵が崩れ落ちた兵士を突き刺す。

「剣歩兵は盾を拾って盾の壁を再構築しろ」シャンティが叫ぶと剣歩兵たちは短い返事をして盾の壁を再構築し始めた。シャンティは辺りを見渡す。敵騎兵がどんどん自分たちを攻撃してくるが、その分防御に徹しているシャンティたちよりも消耗が激しい。「といっても、騎兵と歩兵の戦力差から考えて、損害は同じくらい。それに、こつちの目的は……」

ギャロップの捕縛。そう思いながらシャンティはギャロップを探した。あれ？と思う。見つからない。城門の方に逃げたのかと思っていたが、そちらの方を見てもギャロップの姿は見えなかった。見落とした可能性は高いけれど……いや、彼のことだ。きっと何かをするつもりなのだ。

「シャンティ様。います、ギャロップ大將軍が」

兵士の一人が叫んだ。シャンティが見てみると確かにギャロップはいた。彼は、こちらの一歩脆い所に向かって猛烈な攻撃を仕掛けていた。

「なるほど……自分を予備兵に見立てて、戦闘が開始されてから敵

の弱い所を見極め、突く。そういえば、それが君の基本戦術だったね」

シャンティは弓兵に命じてギャロップの攻めてきた自陣背面に矢を放らせる。

「同時にこれは敵決勝点への攻撃ともなる」ギャロップは愛馬を盾にして矢を受け止める。その傷ついた愛馬は乗り捨てられ、將軍は地面に降り立つ。着地と同時に歩兵二人を串刺しにし、シャンティに向かつてゆつくりと近づき始める。「反乱軍の要は、お前とジャニーという二人の王族だ。それが反乱軍に正当性を与えている。つまりは、お前たちを捕えればおれの勝ちは決まる」

「まずは一人目と言いたげな感じだけねど……ぼくは捕まらない」シャンティの下のルルディファイロが角をギャロップに向ける。

ギャロップは構わずシャンティに近づいていく。シャンティの近衛兵たちが顔いっぱい汗を流しながら、ギャロップに向かって攻撃を開始するが、ギャロップは彼らの攻撃をひよひよいとかわすと槍で馬や兵士の腹を一突きし、いとも容易く戦闘不能に追い込む。彼はその反撃の間も歩みを止めない。

ギャロップがシャンティたちの腹の中に入ったのを見ると騎兵たちの士気は倍増し、次々にシャンティの槍歩兵を突破し始める。

「シャンティ、降伏するなら受け入れるぞ」ギャロップがにやにやしながら、さつき彼に言われたことを言い返す。「優柔不断なジャクナ王のことだ、命は生かしてもらえるだろう。おそらくな」

「そのセリフ、なにか君らしくないね」

シャンティは剣をぎゅつと握りしめながら言う。すでに、盾の壁はほとんど打ち破られており、劣勢なのはシャンティだということ。誰の目にも明らかだった。一瞬だ、とシャンティは思った。一瞬にして均衡が崩れた。

反乱軍の兵士たちが、次々に騎馬兵に殺される。首を槍で突かれ、内臓を踏み潰され、呻き、泣き、叫んでいた。

状況を打開する作戦は？ とシャンティは自分に問いかけたが、

答えは返ってこなかった。頭はすでに正常に回転しない。否や、正常に回転していたとしても、彼の考えられる作戦はギャロップには通用しないだろう。

「作戦を考えているな？　ははは、カバルス鎮定の野営で、お前には言ったはずだ。機転を利かせることのできない者に、将たる資格はない」右を向けば狂奔があり、左を向けば喧騒があり、耳を澄ませば叫びが聞こえる。そんな中を、ギャロップは、一人だけ全く時間を生きているかのようにゆっくりと近づいてくる。「戦場における自分の柔軟性をいかに高くするか……そんなところに作戦や戦術の要点は集約されるはずだ。お前の作戦は柔軟ではない。お前はきつと、防御に徹して、おれの隊が隙を見せたり疲れを見せたりした瞬間を狙って攻撃に転じようとしていたんだろうが、しかしそれはあまりにも敵に依存している作戦だ。敵の行動に依存するならば、まず、自分の思った通りに敵を動かす努力をせねばならん」

シャンティは唾を呑んだ。全てが、悟られていた。まったく……こんな奴にどうやって勝てばいい？　シャンティは齒噛みしながら思った。それでも、ギャロップ。やっぱり、どこか君らしくないね。君は、今にも倒せるはずの敵の前でそんな風に悠々とお話をするような奴だったかい？

「降伏しろ」ギャロップは険しい顔つきになって言う。「降伏しろ、シャンティ。おれはお前を殺す気にはなれん」

そう、ギャロップはシャンティを殺したくはなかった。ああやって長々と実力の差を論じること、シャンティに敗北感を植え付け、なんとか殺さずに彼を捕えようとしていたのだ。

馬鹿野郎、とシャンティは思った。彼は言う。

「降伏すれば……反乱軍に迷惑がかかる。彼らはすごく優しいからね。きつと、ジニーの選択肢を無理やり狭めてしまふ。ははは、柔軟性を奪い取ってしまう」シャンティは困ったような顔つきになった。「もし君に負けるなら、ぼくは死を選ぶ。これがぼくの作戦だ」
「ふん。お前やっぱり、馬鹿だろう」

ギャロップは諦めたような溜息を吐いた後、矛先をシャンティに向けた。

ギャロップがじりじりと近づいてくる。シャンティも剣を構えて敵の攻撃をはじく準備をする。自然と二人の息が荒くなる。

ギャロップの顔は、自分が相手を追い詰めているのにもかかわらず、汗がびっしょりだった。槍を握る手も小刻みに震えていて、自分の手ではないようだった。経験したことのない出来事だった。

ついさっき、決めたはずだ。おれはこいつを殺す。殺す殺す殺す。この槍の先で突き刺し、そして抜く。奴の傷口からはドボドボと血が出るはずだ。おれは傷口を抱えながら倒れ行く奴を見て、達成感を覚える。敵将を倒したのだと……。さあ、殺せ。ギャロップ、殺すのだ。この槍で一刺しすれば、奴はこの世から……。

「王子い！」不意に、聞きなれた声が戦場に響き渡った。「王子！助けに来たぞ！」

「フートスカ」煩わしそうに呟いたギャロップの心中に、なぜか安堵が広がった。「しょうがない、おれは引き上げることにする。目的以上のことをしようとする痛い目を見るからな。それに、城門の方も……」ギャロップは城門を見た。すでに開いており、いくらか兵士たちが走り込んでいる。「開いていることだしな。よし、ギャロップ隊、引き上げるぞ！」

彼がそう叫ぶと騎兵隊は波が引くようにその場から下がっていった。シャンティたちは傷だらけの、疲れ果てた体でその場に残されていて、王都に去っていく騎兵隊を無感情に見つめている間に、自分が助かったのだとやっと理解した。

騎馬兵団が王都の中に消えた後になって、フートスカやシエイバスたちがシャンティの所に辿り着いた。

「シャンティ様、お怪我はありませんか？ 損害は？」とシエイバスが尋ねると、シャンティは無言で首を横に振った。「おい、お前ら。どれだけ兵士が残っているのかを調べる。点呼だ」

シャンティが連れていた兵士たちが、向こうで点呼を始める。

「いち」「に」「さん」「し」「じ」「ろーく」……。

「それで、將軍は逃げたんですか？」

とフートスが肩に剣を乗せながら尋ねた。

「逃げたと言うよりも……」

シャンティはその続きを言わなかった。シエイバスとフートスは顔を見合わせて、よくわからない、と首を振りあう。

ギャロップが入って行った城門はすでに固く閉じられていた。市城壁の上からは弓兵たちが矢を放っている。エラルジスの配下である兵士たちは木の板を並べてそれを防ぎ、時たま攻撃を返していた。気が付けば、金属がぶつかり合う音、悲鳴、叫び声、怒鳴り声、馬の嘶き、足音……それらの戦場音楽は止んでいた。戦場はすでに鎮静化しているようだった。王国軍の兵士たちもほとんどが王都の中に戻っており、天幕の火も消えかけていた。シャンティは、これから寝るのは無理だな、と思いながら、天幕の火から生じ、天に昇っていく煙を見ていた。煙を見てみると、さっきよりも空の色が薄く、明るくなっているのに気が付いた。そろそろ夜が明けるのだろうか。

「そっといえば、ジニーは？」

シャンティは思い出したように訊いた。

「正門からの侵入を試みたらしいのですが、王都の中に入った後に猛攻を食らって退散したようです」シエイバスが説明した。「正門も閉じられたようで……」

「王子、点呼が終わりましたぜ」

と、いつの間にか向こうに行っていたフートスが言う。

記録によると、シャンティとギャロップの小競り合いの死傷者の数は三千にもものぼったとのことである。もちろん、全てが死んだわけではなかったが、それでもその事実がギャロップの軍才の高さを改めてシャンティたちに知らしめるものだった。

ギャロップたちは王都内の石畳の道を常歩のスピードで歩いてい

た。ギャロップ隊の損害は、ウイスカと共に古い離宮に残った兵士の分を除くと、あまり多くはなかった。

「將軍」隣を歩いてきた兵士がぼそぼそと話しかける。「ほら、周りの王都市民、なにかおかしくないですか？ 嫌に鋭い目を向けていると言っか……」

すでに早朝ともいえる時刻で、太陽こそは昇っていないものの、飲食店などを営む者はすでに起きて、店の前の道路をきれいに掃除していた。しかし、彼らは一様に掃除の手を止め、なぜか隈のできた目で騎馬軍団を睨んでいる。そんな大人達の前で、早起きな子供たちは騎馬兵にワイワイと歓声を上げている。

ギャロップがそれを見ながら言った。

「王都のすぐ外で戦争をしてるんだ。そりゃあ、兵士たちのことを悪く思うのもおかしくないさ」

兵士が返す。

「おれたちは市民のために戦ってるんですから、逆に感謝してもらうのなら納得できますが……」

「平和ボケした奴らにとって、自分たちの日常を騒がせる者は全て敵なんだよ」

ギャロップは兵士をそう嗜めた。けれど同時に、市民の様子がおかしいのには気が付いていた。

ギャロップは以前より、内部反乱の計画を立てている者がいてもおかしくはない、と考えていた。じゃあ、それならばなぜ、今の夕イミングで謀反を起こさなかったのか。王都内の兵士たちが外に出撃していた今なら、謀反を起こすのに良い夕イミングだったのに。それとも、もっと確実に謀反が成功するような状況を狙っているのか？

ギャロップはそんなことを考えながら町の中をもう一度見渡した。二階の窓のそばにいた市民の目は矢で射る様な視線を騎馬兵団に投げかけていた。対して、店の前を走り回り親の掃除を当たり前のように邪魔している子供たちは戦争中だというのに、いつもと変わら

ず無邪気なままだった。

王都の大人たちは、兵士への文句を子供に愚痴らないのか？ だから、子供たちは兵士に敵愾心てきがいしんを持つていないし、いつもと変わらず兵士の前で遊びまわっているの难道うか？ ……いや、どうだろうな。深読みのし過ぎか？ ……いや、いやいや、それでもこれは、大人たちが子供に対して兵士への敵愾心を含んだ言葉を言っていないと捉えられる。そしてそれは、大人たちの間で高度な情報統制に似た何かをしているってことになるんじゃないのか？

王都内にはすでに、大規模で、統率のとれた組織ができています。ギャロップはそう直感した。

ならばどうする。王都内はすでに飽和状態。いつ市民が攻撃を仕掛けてくるかはわからない。そんな所にユルシュを置いておけるのか？ ならば…どうするってんだ！ 何をすればいい。攻撃される前に市民を攻撃するか？ そんなことができるわけがない。いや、待て……反乱組織などできていないかもしれないじゃないか。

「將軍、どうかしましたか？」

と騎馬兵士が尋ねる。気が付けば、ギャロップの顔は汗でいっぱいだった。ギャロップはマントで汗をぬぐう。

さつき拭いたはずだったが？ 何考えてる、そんなことはどうでもいい。それよりも、現状を打破する方法を考えなければならぬ。市民を落ち着ける方法……そうか、糞！ もし本当に反乱組織があるとしたら、これを組織したのはウィスカに違いない。そういえば、あいつは度々（たびたび）情報収集に出ていて、おれの前から姿を消していた。そうだ、糞野郎。内外の情報伝達ができていますから、さっきのタイミングでは内部組織は攻撃に出なかつたんだ。外からの攻撃要請がなかつたから……となると、次に反乱軍が攻城戦を開始するときは、中でも何かが起こるに違いない。そうなれば……ええい、決断しろ。決断するんだ。カバルス戦役の時のように。

ギャロップの脳裏に過去の記憶がよみがえる。

カバルス戦役……また逃げるのか？ ユルシュを連れて。いや、

だから、まだ市民を押さえつけられないと決まったわけじゃない。どうかできるはずだ。市民が暴動を起こさないように各地に兵士を置くか？ でも、そんなことをしていたんじゃあ市城壁を防衛する者の数が相対的に減ってしまうし、下手に市民を突いたりしたらどうなるかわかったもんじゃない。糞、ウイスカめ、よくもやりやがったな。いつから、おれを裏切ることを決めてたんだ？ あ、そういうえば、ウイスカと言えば、あいつはこちらの情報をほとんど把握しているからな。離宮から出てシャンティたちに合流したら、こちらの物資の量が敵にばれることになる。そうなれば、敵はこちらが飢餓するまでの計算が立つ。

ギャロツプは天を仰いだ。

おいおい、有効な作戦なんて……ありゃあしねえぞ。

いやいや、今回の奇襲で敵にも大損害を与えたはずだ。だから、もしかしたら引き上げてくれるかも……。馬鹿が、それは違う。こちらの物資事情を知るだろうから、引き上げる可能性はない。こうなれば王都から全軍を突撃させての決戦しかないか？ いや、だから！ それでは最終的な勝利は得られない。……待てよ。ユルシユ一人ならば、生き残る方法がある。そうだ、なんで気が付かなかった、こんな簡単なことに。

「おい、お前」ギャロツプが兵士に声をかける。兵士は驚きながら返事をした。「おれは王宮に用事がある。だから、今回のことはお前が王に伝えてくれ」

報告を頼まれた兵士が質問する。

「王宮に何の用ですか？」

「物資がどれだけ残っているのかを確かめたいんだ」

「それならば私が行きますが」

「いや、次の作戦のために色々調べねばならんからな。それを説明するのは面倒だ。だから、おれが直々に行って調べてこようと思っ
ている」

兵士は納得したように頷いた。

「そういうことなら、はい。わかりました」

「ああ、頼んだぞ」

ギャロップたちは馬の歩く速度を常歩から少し上げて速歩にした。整然と列をなして歩いていく騎馬兵団を……子供たちはあこがれの眼差しで見えており、逆に、大人たちは疎んじるような眼差しで見えている。

頼むから、ユルシユが王都から脱出するまでは何も起こさないでくれよ。と、ギャロップは祈るような思いで馬を走らせていた。

48・激突！（後書き）

「ローマ人の食事」みたいな感じの本を見かけました。
欲しい。

> i34800—4057 <

ギャロップがシャンティとの勝負を終わらせて、城門を潜った頃。兵舎本部はざわざわと騒がしかった。ギャロップ隊のうち、城門を開けるために先に出された二百の騎兵が兵舎に戻り、外の様子を事細かに将校たちに伝えていたからだ。

ジャクナ四世王太子は兵舎本部にきており、廊下の窓から右往左往している兵士たちを観察していた。

「ジャクナ」

と声がした。彼のことをジャクナと呼ぶのは父親のジャクナ王だけだ。王太子は振り向いて、短く返事をした。

「なんですか？」

「休んでもいいぞ。兵舎で寝るなり、王宮に帰るなり好きにしる」
げっそり痩せ、赤かった髪もほとんど真っ白になってしまったジャクナ王が微笑みかける。

王太子は、今回の王都防衛戦が始まる前に軍務に就くことを志願し、ジャクナ王から書記官を任せられている。だから、彼は兵舎本部にいるわけだ。

彼はついさつきまで兵士の数や糧秣の量、今回の兵士の減少で糧秣がどれだけ相対的に増えたことになるか、どれだけ長く戦えることになったのかを計算し、それを資料にしていた。

ジャクナ四世は快活そうな笑みを浮かべた。

「いいえ、まだこれからです。ギャロップ將軍の騎馬兵団が返ってきたのですから、私の仕事はこれからです」

「だが、お前は昨日からずっと寝ていないだろう？」ジャクナ王が息子を心底心配しているような表情で言う。「いい加減に休め」

「他の者たちが働いているのですよ？」

「それでも……だ」ジャクナ王はかたくなな感じに言った。「王宮

に戻って休むんだ」

「……わかりました。それでは休息を取らせてもらいます」

ジャクナ四世はお辞儀をしてからその場を去り、近衛兵を連れて王宮に向かう。

ジャクナ四世は、一人だけ休憩を取ることに後ろめたさなど感じてはいなかった。彼は逆に、やっと休憩か……と不機嫌そうに思っていた。彼には、王宮にいるリュキウスらの所に行つて聞かねばならないことがあった。

王宮に帰還すると、彼はリュキウスの所に向かおうとした。その際、近衛兵たちもついてこようとしていたので、ジャクナ四世はそれを制した。

「私はこれからリュキウスたちの監視を行うから、君たちは休憩を取っていてくれ」

ジャクナ四世は、あくまでも配下の兵士たちの体調を気遣うような感じに言った。兵士たちはやや嬉しそうな顔をしたが、近衛隊長ゲオネスは首を横に振った。

「いえ、王太子様を守るのは私たちの役目ですので」

彼の後ろにいる兵士たちが一斉にゲオネスを見る。いらんこと言うな。と言う感じだった。

「……そうか。まあ、それでもいいか」ジャクナ四世は優しげに返したが、内心では煩わしく思っていた。「よし、それならば隊長とその他十人ほどでいい。なに、王宮内を歩くだけなんだから、そんなに護衛はいらない」

「はっ、わかりました。それでは、私が適当な者を選び出しますので」

とゲオネスはすぐに十人を選び出した。

「それでは行こう。それ以外の者は、休憩を取ってくれ」

ジャクナ四世が歩き出すと、ゲオネスと十人の近衛兵が彼について行く。王太子が去つた後、近衛兵士たちは緊張の緒が切れた様に嘆息した。

「選ばれた十人は悲惨だな。丸一日休憩もなしだぜ」兵士たちは玄関から遠ざかりながら話し始める。「なあ、お前、今日はなにした？」

「書類運びとか、馬の世話とか」話しかけられた兵士はげんわりした様子で返す。「大体さ、おれたちは誉れ高い近衛兵士だぜ？ もつと、近衛兵らしいことをしたいもんだよな？」

「まあ、ジャクナ王様が四世様を大事にしすぎているからな」

兵士は王宮の城壁内に入るためのドアを開けながら愚痴る。兵士たちはその中にある部屋で休憩を取るつもりなのだ。

「とはいえ、そのおかげでおれたちは生きている、ともいえる」違う兵士が言った。「この負け戦で前線に出されたんじゃあ、絶対に生きて帰れないからな」

また違う兵士が言った。

「王太子様はあれで責任感の強い人だからな。おれはさ、王太子様がジャクナ王様に向かって、前線に行くのが王太子の役目です、なんてことを言いやしないかいつもひやひやしてんだ」

「確かに……」話を始めた兵士がその場面を頭に掻いて、体を震わせる。「おれたちはまだ運がいい方なのかもしれないなあ」

リュキウスの所に向かったジャクナ四世たちは、すでに彼の部屋の前に到着していた。リュキウスやシユラク二世は軟禁されているが、ジャクナ四世の取り計らいで王宮内をある程度自由に動けるようになってきている（警備兵には、書庫に行っていると報告している）。そういうわけで、彼の部屋を訪れてもたまたまにリュキウスがいない場合もある。ジャクナ四世は部屋を警備する警備兵に「リュキウスはいるか？」と訊いた。兵士たちは「います。ですが、さっきまで書庫に行っていたようです」と答えた。

「書庫に？」

とジャクナ四世は訝る演技をした。

「はい、この非常事態に呑気に書庫に行っていたようです。王太子

様、このままりユキウスらに王宮内を自由に歩かせていいのでしょうか？」

「……うーむ、まあ、大丈夫だろう。外に父親がいるから増長している節はあるだろうが、自分たちで何かをする勇氣はないはずだ。彼らの待遇はこのままでいい。変に縛り付けると、何をするかわからんからな」

「はっ、わかりました。そのように致します」

警備兵は頷く。

それからジャクナ四世は部屋の前に立ち、二回ノックすると後ろを振り向いて「君たちは部屋に入ってこなくていい」と言った。ゲオネスたちは頷く。

「どうぞ」

と中から声が聞こえた。ジャクナ四世はドアを開けて部屋の中に入る。入るとすぐにドアを閉めた。リキウスはドアのすぐ前に立っていたが、その服装はどこか乱れている。それは当たり前だ、ついさつき、王都の組織集会場から走って帰ってきて、王族しか知らない隠し通路を王宮内に入り、ここまで戻ってきたのだから。

「従兄上、さっきの演技は上々でしたね」

とリキウスが軽口をたたく。

「なぜさっきのタイミングで内部からの攻撃を開始しなかった？」

ジャクナ四世は軽口を無視して、開口一番に問いたです。リキウスは彼を部屋の奥に導きながら、困ったような顔で返す。

「思った以上に王国軍の退却が早かったです。攻撃が始まる前から同志たちを集めていたんですが、王都内の兵士が十分に外に出る前に、出ていった兵士たちが戻ってきてしまっ……」

「まあ、反乱軍の立て直しが思った以上に早かったらしいからな」
ジャクナ四世も嘆息しながら言う。「が、あれ以上の好機がこのさき訪れるかどうかからんぞ？」

「そう言われても、先のような状況で攻撃を仕掛けたら、こちらの被害が大きくなってしまいます」

「この期に及んで民草の体の心配か？」

「というよりも、それはつまり確実性も低いということ……。せつかく育てた組織なんですから、大事に使いましょうよ」

「そうだがな……」ジャクナ四世は辺りを見渡す。「マスタングは来ていないのか？ あいつは自由に行動できるはずだが？」

「いや、特に用事はなかったのので来ていません。あんまり一緒に行動していると変な風に思われますからね」

「お前たちがホモだと疑われようが、おれとしては二人一緒の方が楽なんだがな」

「変に思われるってのはそういうのじゃないですよ」リュキウスは目を細め、眉を八の字にして言う。「それでも、まあ………すぐに来るんじゃないですか？」

「来るように言っているのか？」

「マスタング自身が後でこっちに来るって……」

言っていましたよ、と言おうとした瞬間、ノックもなく不躰にドアが開いた。二人は慌ててドアの方を見たが、部屋に入ってきたのはマスタングだった。

「……」ドアを閉め、彼らにゆっくりと近づいてくるマスタングは険しい顔をしていた。「まずいことが起きるかもしれない」

「顔を見ればわかる」とジャクナ四世は言った。「いったい何が起ころう？」

マスタングは苦しそうに言った。

「……親父が、ジャクナ王を裏切るかもしれない」

「この時期に？ なるほど、ギャロップ大將軍はカバルス戦役の時もほかの者よりも先に逃げ出したらしいからな」

「お前……」

マスタングが顔を引くひくさせている。リュキウスは眉を顰^{ひそ}めながらジャクナ四世を見た。ジャクナ四世は苦笑する。

「勘違いするな、お前の父親を馬鹿にしているわけじゃない。ただ、お前の父親が合理的な行動をとると言いたかったただけだ。前回は、

カバルスが負けそうになつたから逃げた。今回は、王国軍が負けそうになつたからシャンティ叔父上の軍に寝返る。そうだろうか？」

「ふん、そうだ。だが、よくわからんがな。親父は、お前の母上を連れて逃げると言っていたんだ」

「へえ……」ユルシユ母様を……。母様は將軍と同じカバルス人だからか？ …… まあ、別に理由などどうでもいいけれど、とりあえず聞いておくか。「それはそれは。どういう理由で？」

「親父がシャンティのおっさんに訊いた話だが、この戦争に負けたらジャクナ王の首は確実に刎ねられるらしい。それで、お前の母親ももしかしたらその犠牲になるかもしれないってことらしい。だから逃がすんだとよ」

「私と妹のクラティラは？」

「マスタングが首を横に振る。」

「お前のことは全く何にも……」

「なるほど」もつと個人的に、母様を逃がしたい理由があるのか。「その話から一つわかったことがある」

「なんだ？」

「たくまれ類稀なる軍才を持つギャロップ大將軍が、負けを予想して、なおかつ、主君の王妃を今すぐ逃がさねばならないほど事態は窮迫しているということだ」

「でも」リュキウスが返す。「ついさつき反乱軍に大打撃を与えたんじゃないんですか？ それとも、攻撃は失敗したんですか？」

「いや、成功だ」ジャクナ四世が首を振る。「それなのに、王妃を逃がそうとしている。つまり？」

リュキウスとマスタングが同時に返す。

「要因は外ではなく、内にある」

そういうことだ、とジャクナ四世は頷いた。

「おそらくギャロップ大將軍は、内部に大規模な反乱組織がいることを掴み、それをどうすることもできないと結論付けたのだ」

「じゃあ……この戦争は？」

とリュキウスが訊いた。

「反乱軍の勝ちですぐに終結する」ジャクナ四世が笑う。「私たちはギャロップ大將軍と母様を外に逃がす手伝いをした方が良いのか？ マスタング」

「知らん」

マスタングは不機嫌そうに言った。

「なに？」

「おれは親父とは一緒には行かないことにしたから、詳しいことは知らん」

「……複雑なんだな親子関係というのは」ジャクナ四世は理解できない、というように首を横に振った。「それならば傍観を決め込む方がいいかな？ どう思う？ リュキウス」

「やはりギャロップ大將軍ですからね。無計画にユルシユ様を連れ出そうなんてことはしらないと思いますし、もしかしたら、ジャクナ王の命令なのかも……」

「いや、それはないな」ジャクナ四世は首を振る。「もしこれが王の命令なら、私とクラティラも一緒に連れて逃げるように命令するはずだ」

「それは、そうですね。……でもこれがギャロップ大將軍の独断行動であるとしても、ぼくたちはできるだけ手を出さない方が良いでしょうでしょうか」

「お前はそう思うわけだな。ふむ……とはいえ、情報が少なすぎてジャクナ四世はマスタングの方を見る。マスタングはフィと目を逸らした。「わかった。私がギャロップ將軍に話を聞きに行こう。もし、こちらの有利に働きそうならば、將軍を内部反乱組織に引き入れる」

リュキウスが質問した。

「ぼくたちは何をすればいいですか？」

「お前たちは自分の部屋でおとなしくしていてくれればいい」

「おとなしく、ですか。わかりました」

「それじゃあ、私は將軍の所に行くてくる」

ジャクナ四世はそう言うのとドアに向かって歩き始めた。

「ちよつと待て」

マスタングが呼び止めた。ジャクナ四世は顔だけ動かしてマスタングの方を見る。

「なんだ？」

「もし、親父がおれたちに役に立たないとしたら、お前はとうするんだ？」

「役に立たないなら、どうもしない。けれど」ジャクナ四世は顔の前に向けてから言う。「私たちの不利な風に動くのなら、殺すのも致し方ない」

「……そうか」

マスタングは一言だけ返した。顔は暗く沈み、目は焦点が合わないように小刻みに震えている。

ジャクナ四世はドアに手をかけて、外に出て、ドアを閉めた。外に出ると、近衛兵たちが集まってきた。

「悪いがこれから母上の所に行く。母上は家族以外の男と会うのを嫌うから、できれば中庭で待っていてほしい」

とジャクナ四世はいま作った嘘を言う。

「そうですか」ゲオネスはそれを疑う理由もないので、難なく信じた。「ですが……」

「頼む、母様のためなんだ。いま、王都がこのような状況だから、母様は少々ナイーブになつておられる。だから変に刺激したくないのだ。わかつてくれるかい？」

「……はっ、わかりました」

ゲオネスもついに納得したようで、兵士たちに中庭の方に向かうように命じた。近衛隊長自身は少しだけ王太子に頭を下げて部下の後について行った。

それを見送ると、ジャクナ四世は母ユルシユの部屋に向かって歩き始めた。

ジャクナ四世がユルシユの部屋に向かって歩き始める少し前に、ギャロップは彼女の部屋に到着していた。

ギャロップはノックもせずにはドアを開けて部屋の中に入った。部屋の中にはユルシユとそろそろ九歳になるクラティラの姿があった。ユルシユは椅子に座ってクラティラに本を読んでやっていたが、ギャロップが突然部屋に入ってきたのを見て、驚いたように椅子から立ち上がった。

「なん、ですか？」と彼女は訊いた。訊いた彼女の服をクラティラは掴んでいて、早く続きを読んで、と彼女を急かした。それでもユルシユは黙ってギャロップの顔を見ていた。そして、困ったような顔になって言った。「また、逃げるつもりですか？ また、私に逃げることを強要するつもりですか？」

「ご明察。逃げるぞ」ギャロップはユルシユに一歩一歩近づいていく。「今度は確実な所に逃げるんだ。シャンティの所だ」

「シャンティ様？」

「ああ、お前はシャンティのもとに下る。そして、シャンティと結婚するんだ」ギャロップはすらすらと淀みなく言いながら、ユルシユの前で立ち止まった。「反乱軍の司令官の一人であるシャンティの庇護下に入れば、お前の命は無事を約束される。なに、お前は奴の妻であるエレと仲がいいから、奴の妻になってもそれほど不自由することはない。それに奴はカバルス人にも良心的だし、全国民からも好かれる良い王族だ。だから……」

言う彼の頬に、軽い衝撃が走った。同時にパシンと言う音が部屋に響く。ユルシユは涙を目にいっぱい貯めながら、平手でギャロップの頬を叩いていた。ギャロップは自分の頬に遅れて痛みがやってきたのを感じながら、何事もなかったかのように続けた。

「だから、お前は幸せになれる」

「あなたはいつもそうです！」ユルシユが叫んだ。彼女の服をつかんで離さなかったクラティラは驚いて手を放してしまう。「そうや

つて、勝手に自分だけでなんでも決めて……それを私に押し付けようとする。何が亡国の幻将ですか、何が大將軍ですか」

「馬鹿言うな、おれはエウクス・ギャロップ。カバルスの王族ヒツパリオン家を守る軍人だ。そのおれが、お前を守るうとして何がおかしい」

「守る？ 守るとは？ あなたが守るのは私の何ですか？ 私の体？ 私の幸せ？ 本当は……あなたの自尊心じゃないのですか？」

ユルシユはギャロップをきつとにらみつけながら言った。「いいえ、自尊心を守ろうとしているのでもない。あなたは……そう、満足感が得たいだけなのです」

「おれは、お前のために」

「これが私のためなのですか？ こうやって、私を振り回すことが？」

「……おれは」なんなんだ、この女は……。糞、おれはお前を守るうと思つて……。それなのに……。「おれは」

「あなたは何の目的があつて、私を苛めるのですか。あなたは、本当に……自分の役目を全うするためだけに……私を……」

彼女の目は涙でいっぱいだった。少しでも彼女に触れば、その瞳から涙の大粒が零れ落ちそうだった。

ギャロップは無感情にそれを見ていた。どうすればいいのかわからない。この涙をこぼしてしまえば、自分はどうなってしまうのだろうか、意味のないことを考えていた。

「あなたは私をどう思っているのですか」

とユルシユが歯を食いしほる様にしながら言った。涙はこぼれなかった。

よくこぼれなかったな、などと思いながら、自分は目の前の女をどう思つていのかを考えた。そうしたら、あることを思い出した。思い出すと共に、口いっぱいに苦さが溢れてきた。

ふん、何が……何が愛しているだ。と彼は毒づいた。彼の頭の中に再生されている思い出は、東部にてシャンティが彼を逃がした時

のことであつた。愛しているだと？ おれが、こいつのことを？
ふん、糞……糞、そうだよ。そうなんだ。悪いか、悪いのか。それ
でも、おれとこいつは交わつてはいけない決まりなんだ。そうなん
だ。おれは軍人で、奴は王族だ。ああ、そうだ。カバルスはもう滅
んだ。だがな、だけれどな、今になつても、おれはこいつとは一緒
になれない。結局、そういう運命なんだと諦めてしまった方が楽な
んだと、ずつと思つていたんだ。それなのに、あいつは……。何が
見ていて恥ずかしいだ。糞、糞糞糞。口の中が苦い、顔が熱い、体
が震える。

「おれはお前を愛しているんだ」ギャロップは自分でも驚くくらい、
突然に言つた。彼は、言つた後に驚いて、心底情けなくなり、それ
でも続けていつた。ぼつりぼつり。「昔から、今まで、ずっと」

ユルシユの目が大きく見開かれ涙が零れ落ちた。大きな大きな粒
が、左右の目の端から流れ落ちた。そのあと彼女は、眉間にしわを
寄せて、睨むような目で彼を見た。

「なんで今頃になつて言うのですか」ユルシユは鼻をすすつて、涙
を拭いた。「なんで……もう遅すぎます。遅すぎるのです。私はあ
の人の妻です。ジャクナ三世の妻なのです。あの人の子を産み、今
は二児の母親なのです。ギャロップ、あなたは遅すぎます」

「承知の上さ」

君がおれの申し入れを断ることも……。

「私は行けません。私はあの人やこの子を置いていくことはできま
せん。馬鹿、遅すぎます。なんで、いま言えるのに……もつとずつ
と前に言えなかつたのですか」

二人はその後、少し黙つた。お互い、顔の温度は烈火のように熱
かつた。

やがて、窓の外から朝日が差し込み始めた。二人は黙つてお互い
の顔を見た。

すでに、ユルシユの涙は止んでいた。ギャロップは、どうである
うとこの女を生かさねばならないと思つていた。だから、彼女の手

を取って無理やりにも連れていこうとした。

ギャロップは震える手で彼女の手を掴んだ。ユルシユは自分の胸が高鳴っているのを感じた。何からくる高鳴りか。命の危機を感じてのそれか？ 良人を裏切る罪悪感からくるそれか？ 愛しい人の誘いからくる喜びからくるそれか？ とにかく、その瞬間の彼女には、彼の手を振り払えなかった。

「逃げるぞ」ギャロップは言った。「大丈夫、お前の娘も連れて行く」

ユルシユの息が荒くなった。ここで、うんと言ってしまったと、彼女の中で誰かが囁く。

それでも……それでも次の瞬間の彼女は、ジャクナ王を裏切ることはしないと決めた。

だめです、もう遅すぎる。と彼女はもう一度そう言うために、口を開こうとした。

「ギャロップ、ユルシユ」

ギャロップのすぐ後ろで声がした。ギャロップは驚き、後ろを振り向こうとするが何かが腹につかえて腰が捻れなかった。同時に、激痛が走る。呻き声を漏らしながら見てみれば、腹には剣が突き抜けていた。

「ギャロップ、やはりそういうことだったのか……」彼は……ジャクナ王はギャロップの腹から剣を引き抜きながら言った。ずるりと抜けて、トクトクと血が出始める。「ユルシユも……」

「違います」たじろぎながら、ギャロップが言った。「私が連れ出そうとしたのです」

「ギャロップ……」

ユルシユが苦しそうな顔をしながら言う。

「信じられるか……そんなこと！」

ジャクナ王は剣を一閃してギャロップの腹や腕や……とにかく防具に鎧われていない個所を次々に突き刺した。ギャロップは一刺し

ごとに呻きを漏らす。それでも彼は、ユルシュを救うために声を出そうとした。

「私が……勝手に」

ギャロツプはジャクナ王に手をさし延ばす。

「うるさい！」

ジャクナ王が剣を思い切り突くと、それはギャロツプの肩を貫き、彼は剣に引きずられるように壁にぶち当たる。彼は、ジャクナ王が剣を抜くと共に崩れ落ちた。血だらけのギャロツプを見たクラティラが赤ん坊のように泣きわめいていた。ジャクナ王はそんなことを全く気にしていない様子で、自分の剣についているギャロツプの血を恨めしそうに見ていた。ユルシュがジャクナ王の前に立ちほだかっつて叫ぶ。

「あなた、違うのです。わ……私が、この人に」頼んで……と言おうとした瞬間、彼女の胸の少し下をジャクナ王の剣が貫通していた。彼女は驚いたように夫を見た。ジャクナ王は能面のような顔で彼女を見つめていた。「あ……」

ジャクナ王が剣を引き抜くと、ユルシュは壁の方に後ずさり、しりもちをついた。彼女の手についた自分の血は熱く、それが抜けていくことに自分の体がどんどん冷たくなっていくのを感じた。

「やはり、やはり、やはり……思った通りだった」ジャクナ王が厭世感たつぷりに呟いた。「ユルシュも、ギャロツプも、おれを裏切っていたのだ。ふん、全く……低能な奴というのは、つくづく裏切りが好きなものだ。夫や主君を裏切ることに背徳感やらスリルを見出し、悦に入っていたんだらうな」

ギャロツプとユルシュの二人は息を切らしながら彼の言葉を聞いていた。

「さて……さて！ これからどうするか。さてさて……たくさん殺さねばならんぞ。ジャーニイも、シャンティも、エラルジスも、マスタングもリユキウスも……皆、殺さねばならん。おれを、このおれ様を裏切ったのだから！」ジャクナ王は頭を掻きむしりながら叫

んだ。「そつだ、糞、何なんだ。なぜ、こんなことになる。なぜ、こんな風にしかならない。全部が全部、まるで初めから……何もなかったかのように！」

ジャクナ王は歯を食いしばりながら、顔を覆う。

「お母様」

とクラティラは、虫の息の母親のもとに近寄り、震える声で言った。

「……クラティラ」いたのか、と言う感じにジャクナ王は言った。疲れ切った王は、彼女のもとに行き、顔を寄せて、彼女の瞳を覗き込みながら言った。「お前は本当におれの子か？」

「……あ、あの」クラティラは明瞭な返事ができなかった。なぜ、そんな質問をするのかも、理解できていなかった。「私は……」

「そつ……」

ジャクナ王は悲しそうな顔をして、手に持っている剣を握りしめた。クラティラはこの先に起こることもわからずに、ただただ父親を純粋な目で見ていた。ジャクナ王はクラティラを憂いながら剣を振り上げた。

「父上」

ジャクナ王は剣を振り上げたまま振り向いた。開け広げられた部屋のすぐ外にはジャクナ四世がいた。

「なんだ？」

ジャクナ王はそのままの体勢で問う。邪魔するなよ、と言う感じ。「ギヤロップの息子のマスタングは王都から逃げる計画を立てていましたので、私が処分しました。それとシャンティの息子のリュキウスですが……あいつはまだ生かしておいた方が良いと思っていたのですが……」ジャクナ四世はそこで少し困ったような顔をした。

「ですが、すいません。父の負担になりたくないなどと言って自殺を図ってしまい……それと、申し訳ないのですが、すでに死体は外で燃やしております。彼らへの、せめてもの弔いです」

「そつか」ジャクナ王は剣をそつと降ろした。次にクラティラを見

て、すぐに目を逸らしたが、再度彼女を見て、抱え込んだ。クラティラは母から離れたくはなかったが、今の父に抵抗しようという気はなぜか起こらず、されるがままにされていた。王は彼女の小さな体を抱えたまま、部屋の外に向かって歩いた。「外の状況はどうだ？」

「先とほとんど変わっていません。何しろ」ジャクナ四世はギャロップを見てから言う。「まだギャロップ將軍やリュキウスらの死亡は軍に伝わっていませんから。リュキウスらが死んだのを知っているのは私とごく少数の者だけです」

「わかった。わかったが、お前は今度こそちゃんと休憩を取れ。それと、すまないが、クラティラを頼んだ」ジャクナ王は息子に娘を託しながら言う。ジャクナ四世はクラティラを抱く。「おれは……私はもう一度、兵舎の方に行くのでな。ああ、それと、ギャロップ將軍が死んだことは誰にも言うな。王都内の兵士たちの士気に関わる」

「わかっています。父上、それでは」

ジャクナ四世はお辞儀をした後に踵を返して、自分の部屋に向かい始めた。少し歩いた時、ジャクナ四世の後ろで、ドアが閉まる音がした。ジャクナ四世は、まさかこんなに早く、こんな形で決着がつくとはな……と苦々しく思っていた。

「お兄様」クラティラが彼の服を強く握りながら言う。「お母様はどうなさったのですか？ お父様は……」

「母上は死んだ。父上はすぐに死ぬ」

「……」

クラティラは、ジャクナ四世の冷たい瞳を覗いた後、俯いて黙り込んだ。

なるほど、これが普通の反応か。とジャクナ四世は思った。思いながら妹の頭を撫でてやった。

遅かったと言うのなら、いつならよかったのだ。

部屋に残されたギャロップは傷だらけ、血まみれの体でそう思った。隣にはもうすぐ息途絶えそうなユルシユがいた。ユルシユは力のない目で虚空を見つめていた。

「ユルシユ」

ギャロップの口から出る声は、不思議と詰まることもなかった。名前を呼ばれたユルシユは、少しだけ頭を動かしてギャロップを見た。

今にも果てようとするその姿は、ギャロップには昔と変わらないユルシユの姿に見えた。

彼と彼女が初めてであったのは、もう三十年以上も前のことである。お互い子供だった。その時もユルシユはポニーテールで、ギャロップはツンツンの短髪だった。

少年だったギャロップは父親のトロットに連れられてカバルス同盟国王都ヒツパリオンの王宮に行き、中庭にある花畑の中央にいる彼女と出会った。彼は一目見て彼女が好きになった。

ならば、あの時に？ それでも、あの時は、カバルスの掟があったじゃないか。

ギャロップはそう思いながら彼女の顔に手を伸ばした。けれども、届かない。かろうじて届いたのは、彼女の小さな手だった。彼はそれを力いっぱい握りしめた。

「それでも、それでも……言えばよかった」彼は泣きながら言った。言うたびに激痛が走った。「カバルスの掟があったとしても、それでもおれはお前に愛していると言えはよかった。初めて会った時に、お前を連れて逃げればよかった」

ユルシユは青い顔で、優しげな瞳で、ギャロップを見て、微笑んだ。

ああ、そうだ。そうなんだ。そうだよ。考えてみれば、今からだつて……お前を連れて……たとえ、お前に拒否されようとも……たとえ、誰に恨まれようとも……。

お前を連れて……。

49・告白（後書き）

これと言ってあとがきに書くことにはないです。

50・底知れぬ優しさの底

> i34910—4057<

ジャクナ四世はクラティラを乳母に預けて、自分の部屋に軟禁した。外に出て変なことを言われたら困るからだ。

それから彼はリュキウスの部屋に行つて、律儀に二回ノックして部屋の中に入った。リュキウスは腕を組んで部屋の中を行ったり来たりしていて、ジャクナ四世が返ってきたのを見るとぱっと顔を明るくさせた。

ジャクナ四世は歩み寄ってくるリュキウスを無視して、マスターグを探した。マスターグはリュキウスのベッドに座っていて、じつと彼を見ていた。

「少し時間がかかりましたね。それでどうでした？ あれ、その手に持っているのはなんですか？」

と王太子の後ろからリュキウスは尋ねる。

「フードだ」

ジャクナ四世はフードを見せながら言った。

「フード……ああ、いや、それでどうでした？ ギャロップ将軍とユルシュ様は逃げるのができましたか？」

「ギャロップは死んだ。私の父上に殺された」

ジャクナ四世はためらいもせずと言った。

リュキウスははつとした後に、マスターグの方を見た。マスターグは床を見ながら、がたがたと震えていた。次に、何かに気が付いたように立ち上がって、顔を真っ赤にしながら、烈火のように怒り出した。

「お前が殺したんだろう！ きつとそうだ！ お前、おれの親父がお前の損になるような行動をとるからって！」

「私の母上も殺された」ジャクナ四世は嘆息しながら言った。「つまりはそういうことだ」

「……」マスタングは怒りのぶつけ先をなくし、胸の中が急にざわざわし始めたのを感じた。「ジャ、ジャクナ王を……殺す」

「やめておけ、馬鹿が。そんなことをした次の瞬間には、お前が父上の側近らに殺されることになる。大勢の兵士が王都内にいる状況で王を殺せば、その兵士たちがどのように行動するかわからん。先に王都を乗っ取り、敵を無気力にしてから王を殺すのだ」

「じゃ、じゃあ、王を殺す役目はおれが……」

「そこまでは私は決められない。シャンティ叔父上かジャーニイ叔父上と言っただな」

「従兄上^{あにじょうえ}」リュキウスが口を挟んだ。「これからどうするんですか？」

「お前たちは私の手で殺されたことになっている。だから、まずはこの城から出ていってもらわねばならん。城から出た後は内部反乱組織に合流しろ。わかったか、マスタング？」

ジャクナ四世は虚脱しているマスタングに向けて訊いた。マスタングは何の反応も返さなかった。

「ぼくがちゃんとわかっていきます。従兄上、続けてください」

リュキウスが胸に手をあてて任せてくださいと言っように言った。「お前たちが内部反乱組織と合流した後、私は兵士を鼓舞するとか、夜襲を食らった相手の様子を見るとかの名目で市城壁にのぼる。で、そこからギャロップ将軍が死んだことを外に伝える」

「簡単に言いますが……そう容易くできますか？」

「言っのと同じくらい簡単なことだ」

「なるほど……」リュキウスは愚問だったかな、と頭を掻く。「で、情報伝達が成功した後はどうすれば？」

「頃合いを見て私が父上に王都外への出撃をけしかける。相手の司令官、ジャーニイとシャンティを打ち取れば相手の求心力は激減するとも言え、簡単に言っ通りにするだろう」

「ぼくたちは兵士たちが出た隙に王都を占領するんですね。わかりました」リュキウスはマスタングの方をちらりと見てから続ける。

「二人でやりきって見せます」

「よし、それならば……」ジャクナ四世はフードをリュキウスに手渡した。「フードを被れ、まずはお前たちを王宮から出す」

リュキウスはフードを受け取ると、まずはそのうちの一つをマスタングに渡す。彼は先にフードを羽織るが、マスタングはぼけっとしていて、動こうともしなかった。リュキウスは仕方ない、と言う風にマスタングにそれを羽織らせる。

本当に大丈夫なんだろうな、とジャクナ四世は思っていた。

「従兄上。できました、準備」リュキウスはマスタングにフードを羽織らせると、ははは、と笑いながら言った。「では、行きましよう」

三人は外に出た。外に出るとジャクナ四世はまず、警備兵に「この二人を移動させることになった」と説明した。

「移動ですか」警備兵は汚いフードをかぶっているリュキウスとマスタングを見た。リュキウスはいつもと変わらないが、マスタングは嫌に落ち込んでいて、警備兵はこれからこの二人は殺されるのだなと思った。「はっ、わかりました」

ジャクナ四世は王太子らしい、社交的な顔つきをしながら言った。「お前たちの任務は終わることになると思うが、ここを離れてもいいと言われるまではその仕事をまっとうしてくれ」

一行はリュキウスの部屋を後にした。階段の所に差し掛かると、ジャクナ四世は二人に向かって「フードを深くかぶって、誰かわからないようにしろ」と注意する。リュキウスは言われたとおりにフードを深くかぶり、マスタングのフードもぐいっと引っ張り深くかぶらせる。

三人は王宮の門に着くと、門番に呼び止められた。ジャクナ四世は、周りに自分の近衛兵がいないな、と思いながらも門番の方に寄って行った。

「王太子様、後ろの二人は誰で？」

と門番が怪しみながら質問する。ジャクナ四世は臆することもない

く返す。

「後ろの二人は官人の子供だ。実は、懇意の官人から逃がすように頼まれてな」

「ああ、そうでしたか」

門番は納得して門を通した。

三人は門をくぐり、街中に出る。ジャクナ四世は、市中の奥に行くのは適切でないと思い、リュキウスに向かって「もう別れるぞ。近くの路地裏に入って姿を隠せ」と命じた。リュキウスはフードの中で小さく頷いてからマスタングの手を引っ張って路地裏の中に入ってしまった。

ジャクナ四世はそれを見送ると、すぐに王宮に帰った。門番には「もう終わりましたんで？」と不審がられたが、ジャクナ四世はいつも通りの感じで「ああ、すぐに別れたからね」と短く返した。

それから中庭に行つて時間を潰していた近衛隊長ゲオネスを見つけると、彼に近衛兵隊を数十人集めるように言い、ジャクナ四世は一度自分の部屋に戻った。部屋の中には約束通りクラティラたちがいた。

「どうかなさいましたか？」

と乳母が尋ねた。

「いや、少し書き物をしなくてはならなくなつてな」ジャクナ四世は机に座つて紙に、ギャロップが死んでしまったことを書き始める。そして、ジャクナ王をけしかけるから、反乱軍はジャクナ王をなんとか王都から引つ張り出す方策を考えてくれと書き綴つて、最後に短い挨拶の言葉で締めくくつた。

ジャクナ四世はそれを折りたたんで懐にしまい、全く違う内容の手紙をもう一枚書いて、それも懐に閉まってから部屋を出た。玄関まで行くと彼の近衛兵団が列をなして待っていた。ゲオネスが一歩前に出て大声を出す。

「王太子様、この通り近衛兵団は揃つております」

「ご苦労。私はこれから市城壁にのぼろうと思つている。昨日のこ

とがあるから外にいる反乱軍の様子も少し違っているだろうと思つてな。そういうわけで、君たちにはついてきてもらう」

近衛兵たちは、寝不足だったのであくびをかみ殺しながら彼の話を聞いていた。近衛兵たちは、王太子は元気だな、などと思いなからジャクナ四世の言葉を右から左に聞き流していた。

「それでは行こう」

ジャクナ四世は歩き出すと、兵士たちははつとしてジャクナ四世の周りについた。一人の兵士が隣の兵士に、小さい声で「どこに行くんだ？」と訊くと、隣の兵士はそのまた隣の兵士に「どこに行くんだ？」と訊いた。

ジャクナ四世の耳にはその会話が聞こえていた。思った通り、外に伝令を伝えるのは簡単そうだ。とほくそ笑む。

門番と「またですかい」「まただ」と言う風な会話をしてから門を出ると、彼らは一直線に市城壁へ向かった。

市城壁にはいくつも塔があり、王都の内側からは入れるように入り口が取り付けられている。その入り口にはもちろん見張りがあり、見張りにはジャクナ四世たちが姿を現すと身分を確認することもなく市城壁の中に通した。彼らはらせん状の階段をのぼって市城壁の上に出た。

市城壁の屋上からは、王都を囲む反乱軍のおびただしい数のテント、火、兵士たち、馬、そして向こうの空や山が見えた。兵士たちは結構景色がいいな、などと思いつながらあたりをきよるきよる見回していた。

市城壁には時々思い出したように矢が一本か二本くらい飛んでくる。暇そうな警備兵は同じ数だけ矢を打ち返す。もちろん、それだけの矢ではあたるはずがない。

「王太子様、風が強いですな」ゲオネスが風にたなびくマントを抑えながら言った。冬真っ盛りの風は、刺す様に冷たい。近衛兵たちも何人か寒そうに体を震わせている。「はは、反乱軍には昨日までの元気がないようですね。堀を埋めるのはそろそろ終わりそうですね」

が、昨日の夜に攻城兵器は燃え尽きてしまったようだ。それで……あの、王太子様、少し質問をしていいでしょうか？」

「なんだい？」

ジャクナ四世は反乱軍の方を凝視しながら言った。

「ギャロップ大將軍は、この後どうするつもりなのでしょう。攻城兵器を壊しても、我々の糧秣も残り少ないから長期戦はできませんし……」

「そうだなあ」まあ、ギャロップ將軍はもつけないけれど……そう言うわけにもいかないし、とりあえず答えてやるか。「まあ、糧秣がなくなるぎりぎりまで攻城戦……というよりも、防城戦をやるのだらうな。こういう場合、通常は攻撃する側のほうが人的な損害は大きい。だから、敵の戦力を削りに削ってその後決戦を行い、追いつつもりなのだらう。追いつく際だっただただ見送るのじゃない。追撃こそ相手にダメージを与えるチャンスだから。私などでは將軍の考えを見通せないが……おそらく、將軍はその追撃戦で捕虜を手に入れてこちらの兵士にするつもりなんじゃないだらうか」なるほど、それでもう一合戦行こうってことですね」

「ああ、そうだらうな」

本当に、そうだらうか……。とジャクナ四世は自分の発言に違和感を覚えた。本当に、あの將軍がこんな浅はかなことを？……ギャロップ將軍は、内部反乱組織の存在を知ったからあれほど慌てていたはずだ。つまり、内部反乱組織がない場合ならば、微かな勝利へのビジョンは見えていたということではないのか？……ふむ、気にはなるな。あのギャロップ將軍が考えていた、勝利へのか細い道筋。もちろん、それは内部反乱組織の存在によって無為に帰されたが………マスタングに訊いてみるか。ふん、奴は親父マニアだからな。きつと親のつたであるう作戦を言い当てることができるだらう。けれども、この内乱を生き残れるか。生き残っても、死に体から脱することができるか……。

「王太子様？」ゲオネスは急に黙り込んだジャクナ四世の顔を覗き

込んだ。「どうかしましたか？」

「なんでもないよ」ジャクナ四世は頭を切り替える。で、市城壁の上に弓兵を指差しながら、ゲオネスに言った。「隊長、弓兵に弓矢を借りてきてくれ」

「はあ……わかりましたが。いったいなぜ？」

ゲオネスは訝りながら訊いた。

「実は、反乱軍への降伏勧告を書いた手紙を書いてきている。まあ、気休め程度にな」

ジャクナ四世は懐から手紙を出してゲオネスに見せた。

「ええと……我々の王は汝らのような愚かな逆賊をも許すことのできる器を持つている。』それで……『愚かなことは恥じることはない。我々が王も子供のころ……』……ははあ」ゲオネスは頭を掻きながら手紙を返した。彼にはその手紙でこの状況をどうにかできるとは思えなかった。「ですが、少し……相手を見下しすぎなのは」

「しょうがないさ。下手に出ると相手は、こちらが劣勢なのだ勘違いし、増長してしまうかもしれないから」ジャクナ四世は手紙を懐にしまう。「だから言っただろう？ 気休めにすぎないと」

「そうですね。気休め程度に。では行つてきます」誰かほかの者に行かせればいいのに、ゲオネスは自分が命令されたものだから自分で弓矢を借りに行った。案の定いくらか悶着があったようだが、それでも弓兵の弓矢を借りることができたようで、彼は弓矢を握りしめながら、笑顔でジャクナ四世の所に帰ってきた。「なんとか、借りることができました」

「ありがとう」

ジャクナ四世は矢の方を先に受け取ると懐から手紙を取り出した。今回はギャロップが死んだことと内部反乱を行うことを書いた手紙である。それを矢に括り付ける。

「王太子様、どうぞ」

ゲオネスが弓の方を渡す。

ジャクナ四世はそれを受け取り、手紙を付けた矢をつがえ、弦を引き絞った。近衛兵士たちは王太子を見守っていた。ジャクナ四世が矢を持っていた右手を開くと、矢は空に射込まれた。それは徐々に勢いをなくし、天幕テントの一つに突き刺さった。近衛兵たちはおおー、と声を上げる。

「王太子様、見てください。天幕の中から兵士が出てきました」と近衛兵の一人が言った。

「よし。もう帰ろう」ジャクナ四世は急かす様に言った。「外の状況はもう十分に把握できたし、矢文も届いた。もうここにいる理由はないから市城壁を降りよう」

「そうですね、寒いし」

と近衛兵の一人が言った。ああ、寒い寒い、とほかの者が返事をする。兵士たちは王太子の奇行を訝る様子もなく市城壁を降り始めた。

ジャクナ四世に弓矢を貸した市城壁の警備兵は、つまらなそうな顔をしながらその集団が降りていくのを見ていた。

「けっ、遊びに来ただけかよ」と兵士は独りごちる。すると、向こうから険しい顔のゲオネスがずんずんと歩み寄ってきた。「やばい、聞こえたか……」

「すまん」ゲオネスは照れたような顔をして弓矢を差し出した。「返すのを忘れる所だった」

「ああ、いえ、いいですよ」

警備兵が受け取ると、ゲオネスはペコペコしながら市城壁を降りていった。

警備兵はほっと胸を撫で下ろしながら、何となく反乱軍の方を見た。すると、一騎の騎兵がすごいスピードで野営内を駆け抜けている。警備兵は、何だろう、と思った。矢を撃ってみようかな、と思ったが、当たりっこないのでやめにした。

ギャロップ死亡。

その情報がジャーニーに伝えられたのは、ジャクナ四世からの手紙が天幕に射込まれてから十分もしない頃だった。

手紙を持ってジャーニーの所に向かった騎兵は、天幕の中にいたジャーニーに手紙を渡す際「ギャロップ將軍が死んだと書いています」と報告した。

「ギャロップが？ この手紙は誰からのものだ？」

とジャーニーは手紙を開きながら尋ねた。兵士は息を切らしながら言った。

「ジャクナ様……いえ、ジャクナ王の息子の、ジャクナ四世様からの物だと……。最後に署名が書かれています」

「ジャクナ四世？ ……すまないが、お前はそのままシャンティの所に行つてくれないか。そして、シャンティと……ウイスカをここに呼んできてくれ」

「は、はい」

騎兵は天幕から出てすぐに馬に乗り上げ、シャンティの指揮する北部反乱軍の野営に向かって走り出す。

ジャーニーはじつと手紙を読んでいた。ギャロップが死んだ？

なんだと？ しかも、王妃ユルシュを王都から連れ去ろうとして、そこをジャクナ王に見つかつて殺されただと？ ……なぜ、ギャロップがユルシュを連れ出さねばならない？ 待て、こんな手紙を信じていいのか？ 差出人はジャクナの息子だぞ？ だが、なぜジャクナ四世がこんな手紙を？ その上、ジャクナ四世が内部反乱組織のまとめ役をやっているって？ まあ、それもウイスカが来ればわかることだろうけれど。

ジャーニーは落ち着かない様子だった。足を上下に揺らして貧乏ゆすりを激しくし、やけに乾く喉を潤すために水をがぶ飲みした。

やがてシャンティとウイスカが来た。シャンティは近衛兵団を外に待たせておき、眉間にしわを寄せて、険しい顔をしながらジャーニーの天幕の中に入ってきた。

「王都内から手紙が届いたんだって？」

とシャンティは言った。続いてウイスカが中に入ってくる。

ウイスカは例の古い離宮に立てこもりギャロップ隊をやり過ぎした後、朝になると共に古い離宮を出て、シャンティたちのもとに帰還した。そして、シャンティに王都内の状況と内部反乱組織の現状を伝えたのである。

ここで少しウイスカの心境の移り変わりについて話をしておかなければならない。

ウイスカはサウルス地域の貴族の出であり、もとはシユラク王の侍従である。彼はシユラク王から軍隊の教育を任され、それで良い評価を得た。彼に教育者としての才能があることを見出したシユラク王は彼をシャンティの家庭教師と侍従長と近衛隊長に任命する。

ウイスカはシャンティを實の息子のように可愛がり、日記などを教え、シャンティを筆まめに育て上げている。

シャンティが成長してくると、ウイスカの役目は侍従長、近衛隊長の方に比重が寄ってくる。密集隊形が得意なシャンティの近衛兵団を鍛え上げたのは彼である。

カバルス戦役時には侍従長、近衛隊長の役目を十分に果たした。しかし、カバルス鎮定軍時にギャロップの軍才に惚れ込んだ彼は、幼い日の夢を再び抱くようになる。これで彼の心がギャロップに移ったかと思われたが、彼は例の夜襲時のシャンティの奮闘を見て、シャンティを今生の君主とすることを誓った（これは日記にも書いてある）。

現に、この件の後の彼の日記にはギャロップに対して度を越した評価をしていないし、シェイバスとの表立った親子喧嘩もなかった。また、東方での危機の際、最終的にはシャンティに事態の打開を要請していることから、彼が心の拠り所としていたのはシャンティであることがわかるし、ギャロップの比類ない才覚を盲目的に信仰することはなかったことを証明しているようにも思える。

ならばなぜ彼はギャロップの配下になったのか。それは単純な話である。恐るべき軍才を持つギャロップが、シャンティの敵になる

ことを恐れたからである。幸い、実の息子のシェイバスは侍従兼近衛兵団副隊長を務められるまでに成長していた。シャンティを守る役目が、絶対に自分でなくてはいけないという理由はなくなっていたのだ。だから、彼はギャロップの配下に収まり、彼を監視し続けていたのだ。

もちろん、ギャロップがシャンティの敵にならない限りは、將軍に忠実な侍従であろうとし、それを果たしてきた。が、恐れていたことは現実となり、ギャロップはシャンティの敵になってしまった。そこで、彼は当初の予定通りギャロップを裏切ることを決定し、それを行動に移したのだ。

それでは話を戻す。

「ジャクナ四世からの物だ」ジャーニイはシャンティに手紙を渡した。シャンティは疑わしそうにその手紙を見た。ジャーニイが続ける。「ウイスカ。なぜジャクナ四世が王都内反乱組織の頭目をしているんだ？ あいつの父親は、反乱組織の敵の親玉であるジャクナ王だぞ？」

「ジャクナ四世様は、父親の悪政を止めさせたいと思っていたそうで……。私に計画をお話になった時にあの人は、父上を止めるにはもはやこの方法しかないのだ、と言っておられました」

「この方法って……父親を殺すしか、父親の悪政を止める方法がないと？」

「まあ……現に私たちも同じことをしていませんか？」

「おれたちは、実の父親を敵にしているのではない！」

ジャーニイは気味悪そうに言った。

「しかし、実の兄を敵にしているんだ。大して変わらないさ」シャンティが言った。もう何度も同じ文章を繰り返して読んでいる。「ねえ、これ……本当かい？」

「やっぱり、お前も信じられんか？ おれもそう思う。畏じゃないだろうか？」

「シャンティ様、少し手紙を見せてくださいますか？」とウイス

力が言った。シャンティは手紙を渡す。「……ふむ……いや、ジャクナ四世様らしい文章です。これは本物だと私も思います」

ジャーニーが仏頂面で言う。

「おれたちは手紙が本物かと訊いているのではないぞ、ウイスカ。ジャクナ四世が本当に父親を裏切っているのかと訊いているんだ」

「それは本当です。おそらく」ウイスカは不安げに付け足した。「ですが、王都内部反乱組織を一網打尽にしようとするなら、我らが王都を囲む前にもできましたし」

「ジャクナ四世の目的は王都内部の反乱組織ではなくて、外のぼくたちなのかもしれない」シャンティは、この手紙の内容を信じたくないと言つような感じだった。「とにかく……この手紙は……」

「ウイスカ、大体なんでギャロップはユルシュ様を連れ出そうとしたのだ？」

とジャーニーが訊いた。訊かれた瞬間、ウイスカはちらりとシャンティの方を見た。

「それは……」

シャンティは、はっとしたような表情で虚空を見つめていた。ユルシュ義姉様を……。そうだった。ギャロップは、死ぬ間にユルシュ様を連れ出そうとしていたと書いてあった。これは危機的状况に陥ったギャロップが絶対取る行動だろう。だが……ジャクナ四世は、ギャロップの心境を知っていたんだろうか。ギャロップがユルシュ様のことを好きだと知っていたんだろうか。……到底知っていたとは思えない。それならば、答えは簡単じゃないか。これは、現実にあつたことを書いてあるから、こんなにも現実的なんだ。ならば……本当に……。

「死んだのか……ギャロップは」シャンティはがくりと前のめりに倒れ込んだ。ウイスカは慌ててシャンティを支える。シャンティは自分の力で立とうとしたが、体にはうまく力が入らなかった。よろよろとぐらつきながら、彼はジャーニーの方を見た。「ジー、信じよう。この手紙を……」

「……糞」ジャーニイの理解の範疇を超えていたが、それでもシャ
ンティが異常に取り乱したのを見ると、この手紙の信用度が急激に
増したように思えた。「わかった、信用しよう。だが、それならば、
それ相応の処置を取らねばならない。王都内から、あの恐るべき軍
才を持つ男がいなくなっただ。これは好機だ、計画を立て直す必
要がある。おい、誰か！ 各方面の司令官を呼び寄せろ。すぐに軍
議を始める！」

エラルジスやハラン、その他將軍格の貴族がジャーニイの天幕に
集まるとすぐに軍議が開始された。

ジャーニイはまず、ギャロップがジャクナ王の手によって殺され
たことを説明した。そして説明者をウイスカに代え、彼に王都内反
乱組織についての説明をさせた。司令官や將軍たちは今回の敵であ
るジャクナ王の息子が、王都内の反乱組織を率いているのにかなり
驚いたようで、中には「父親を殺そうとするなどけしからん」など
と言う者もいた。

「そう言うが、奴のおかげでおれたちが優位に立っているのも事実
だ」ジャーニイは將軍たちを嗜めなるように言った。「さて。それ
で、これから先どうするか……だが。手紙の中にはジャクナが決戦
を行うように仕向けると言っていた。だが、ブレーンであり歯止め
役であるギャロップをなくしたからと言って、ジャクナがそう簡単
に決戦・会戦を挑んでくるかは……疑問だな」

「ならば、このまま攻城戦を？」とハランが訊く。「攻城兵器は燃
やされてしまいました。これから作るのならば時間がかかります。
堀の方はもうすぐに埋まるでしょうから、堀を埋めていた班を攻城
兵器を作る班に回せば、前回よりかは作業短縮できますが……」

「そちらの方が堅実だ」
とジャーニイが頷く。

「でもでも、決戦を仕掛けてくるように仕向けてくれると言ってい
るんですよ？」

貴族が納得できないという風に言った。エラルジスが言い返す。「攻城戦の準備をしても決戦はできる」
貴族が言う。

「準備をしている間に敵が城門から突撃をかけてきたらどうするんですか？　こちらはバラバラのまま奴らと戦えるんですか？　準備をしながらも、敵の攻撃に備えるなんて無理ですよ。大体、中の反乱組織のリーダーが、ジャクナ王に決戦をさせると言っているんだから、こちらはその準備だけをするべきです」

ジャーニイが呆れながら言った。

「こちらが決戦の準備をし始めたら、あちらがそれを止めたくなくなるかもしれないだろう」

「攻城戦の準備をして、その隙を突かれて突撃されるのに比べたら、決戦の準備をして敵が突撃を駆けてこない方がましです」「北部にイムサ国が攻めてきてるんですよ？　早くこちらを終わらせないとだめなのに……」「なら、代替案を出したらどうだ？」「そういうあんたこそ」「やめないか！」「ジャーニイ様、あなた様が決めるべきです。この反乱軍を起こしたのはあなたなのだから」「ちよつと待て、そんなのは許さない」「黙ってる！」「お前が黙れ！」「やめると言っているだろう！」「ぼくに……策がある」「投票だ、投票で決めよう。攻城戦の準備か、決戦の準備か」「二者択一にする必要は？」「そうだ。第三の選択もあるはずだ」「話を戻して悪いが、この手紙が本当だとする根拠はなんなんだ？」「ここでそれを疑ってどうする」「ぼくに策がある」「攻城戦の準備を進めていても、城門から出てくる敵兵を抑える班がいれば大丈夫じゃないのか？」「それならば、決戦の準備をする一方で、昨日負傷した者たちに攻城兵器を作らせると言うのはどうだ？」「折衷案が一番危険なんじゃないのか？」「だから代替案をだな」「そういうお前こそ」「しつこいぞ。やめないか」

「ぼくに策があると言っている！」

シャンティが耐えかねた様に怒鳴ると、軍議に参加していた人々

は一斉にシャンティの方を見た。ギャロップが死んだと知ってから安心していったシャンティのことを皆は忘れていた。

「シャンティ……本当か？」とジャーニイが怪しみながら訊いた。「言ってみる」

「言ってもいい。それでも、一つ条件がある」
シャンティはやさぐれた様に言った。

「何を……お前、遊びじゃないんだぞ。条件など付けなくていい。案があるなら早く言ってくれ」

「条件を呑んでくれないなら、言わない」

「おいおい」ジャーニイは將軍たちを見渡した。將軍たちはやれやれと言う風に首を振って、とりあえず頷いておこう、という風な視線をジャーニイに投げかけた。「わかった……で？ その条件というのは？」

「この作戦の中心をなすのは、ぼくの率いる軍団だ」

軍議が終了して三十分後、シャンティは自分の天幕に自軍の中心人物を集めていた。ウイスカ、シエイバス、フートス、カバルス騎兵隊長、サウルス騎兵隊長、槍歩兵隊長、剣歩兵隊長、弓兵隊長……彼らは、なぜ自分たちが集められたのかを知らなかったし、ギャロップが死んだということも知らなかった。

「それで、王子」フートスがにやにやしなから言う。「おれたちをここに集めたのは何の用があつてのことだ？ まあ、周りが騒がしくなってきたのを見ると……そろそろ大規模な戦闘が起こるんだつてことは、わかるけれどもさ」

シャンティは彼らの前に立って、静かに言った。

「ぼくらはこれから決戦を行う」

「待ってました」とフートスが言った。「それで？ おれたちはどこを任されたんですかい？ 右翼？ 左翼？ 正面？ まさか、予備？ それとも、そういう形式では戦わないんですかい？」

「ぼくたちは正面であり、右翼であり、左翼でもある」

「どついう」意味？

フートスは首を傾げながら言った。シェイバスはとげとげした感じで注意した。

「フートス隊長。シャンティ様が、順を追って説明してくださいから少し控えている」

フートスはそこでやっと場の空気がいつもと違うのに気が付いた。あれ？　と言う感覚だった。いつもの軍議と何かが違う。

「反乱軍は……」シャンティが前置きもなく説明を始めた。「反乱軍の大半は、今日の昼にここを退散する」

「なに？」

フートスが眉をひそめる。ここまで来て退散なんて、馬鹿のやることだぜ。とそう思ったが、彼はそう言わず、シャンティの次の言葉を待った。

「そして、この王都に残るのは、ぼくたち北部反乱軍だ。ぼくたちは二万の兵力でこの王都を包囲する。その後の夜、篝火を灯したらぼくたちも退却を開始する。あまりに早くばれないように、しかし、確実にばれるように退却するのだ。たった二万の兵力が逃げるのを見た兄上は、求心力のある王族たるぼくを倒すために追ってくるだろう。敵は絶対に重装騎兵、ぼくたちは歩兵を混ぜた軍勢。機動力はあちらの方がやや高い。この時、ぼくたちは退却方向に向かって槍歩兵、弓兵、近衛兵団、槍歩兵、軽装剣歩兵、二人乗りのサウルス騎兵（後ろには槍歩兵か剣歩兵）、一人乗りのカバルス騎兵の順番で並ぶ。さらに、弓歩兵と近衛兵団のすぐ両翼には槍歩兵と剣歩兵を混ぜた集団を配置しておく」シャンティはそこで彼らを見渡した。彼らは、シャンティの目が鋭い光を灯しているのに気が付いた。「兄上の率いる重装騎兵が襲ってくると、後方の騎馬兵団はぼくらを追い越して逃げていく。剣歩兵も一旦逃げる。槍歩兵は逃げない。槍歩兵は方向転換して盾の壁を作り、敵の突撃力をなくす。なくしたところに剣歩兵が入り込んで重装騎兵の騎馬を倒していく。その間に弓兵が敵の大軍に矢を射る。敵は包囲を仕掛けてくるかもしれない

ない。だが、ぼくたちは両翼につけた集団を広げてそれをさせない。先に逃げた騎兵隊は途中でターンして遠回りし、敵の側面、背面に忍び寄り、逆に包囲を完成させる。側面を突くのはサウルス騎兵、背面はカバルス騎兵だ。わかっていると思うが、この時、完全に包囲しきつてはいけない。絶対に、王都方向は穴をあけておき、敵が逃げられるようにしておくんだ。うまくいけば包囲が成功し、敵は王都に向かって逃げ始める。ところが王都はジャーニイの軍勢と内部反乱組織によって奪取されている。ぼくたちは逃げる兄上たちの後を追い、王都の外にて……兄上と決着をつける」

「かなり難しい作戦ですよ」と槍歩兵隊長が言った。「敵はおそらく、三万ほどで攻めてくるだろうし……それに、平地での決戦が得意な重装騎兵団」

「それでもだよ」シャンティは強く言った。「それでも、やらねばならない」

ここに集まった彼らはすでに、シャンティが何らかの理由で激怒し、殺気立っているのを感じていた。彼らは思った。いったい、何があつて、この人はこんなに怒っているんだ。いったいどうやってジャクナ王はこの、天賦の……天から与えられたような底知れぬ優しさを持つ男からそれを根こそぎ奪い去つたというのだ。

「これでやらねばならない。ここは、ぼくの流儀で……」否や。「ギヤロツプの流儀で通さねばならない」

「王子、何があつたんですか？」

フートスが恐る恐る尋ねた。すると、シャンティは胡乱な目を彼に向けて小さく言った。

「ギヤロツプが兄上に殺された」

フートスたちはつばを飲み込み、黙りこくつた。

シャンティは鋭い目つきに戻つて、彼らを見渡した。彼らは一様に背筋を伸ばし、シャンティの次の言葉を待った。シャンティは握り拳を、さらに強く握りながら言った。

「今回の策の名は『逆鱗作戦』」

ドラゴンスケイル

名前から一目で瞭然と言えた。

ジャクナ王は絶対に触れてはいけないとされる、逆鱗を触ってしまったのだ。この呆れるくらいに優しい男の、小さな小さな逆鱗に触れてしまったのだ。

「ぼくには加護など一切いらぬ。ぼくが欲するはただ一つのみだ。この世において一つのみだ。ぼくの親友ギャロップを殺した……」
シャンティは犬が唸るような声で言う。「兄上の首だ」

シャンティの前に集まった彼らの口からは、掛け声は出なかった。彼らは目の前の男が本当に、自分が愛し、尊敬したシャンティなのかを確かめるように目を何度もしばたかせるだけだった。

「皆、どうしたんだ？」
シャンティの暖かな心は、どうしようもなく凍てついていて、シャンティはそれから感じるものを熱だと勘違いしているようだった。だから彼は、他の物との温度差を適切に感じることができず、不思議そうに質問を繰り返した。「なんで、返事がないんだ？」

「王子……それでいいんですか？」
とフートスが訊いた。

「それで……いいって？」
シャンティは質問の意図がわからない様子だった。シエイバスが改めて訊いた。

「ジャクナ王の首を討ちとれと言いましたが、本当にいいんですね」
「いいのさ」
シャンティはさらりと言った。「ぼくはそれを欲し、望む」

「それならば、わかりました」
シエイバスはフートスの方を見た。
フートスはしぶしぶと頷く。「私たちは、あなたについて行きます。あなたの作戦に命を預けます」

「そうか」
シャンティは白い歯を見せてにこりと微笑んだ。「よかったよ」

その日の昼、シャンティの率いる北部反乱軍を王都に残し、ジャ

ニー、エラルジス、ハランは自軍を連れて退却を開始した。その情報はすぐにジャクナ王のもとに伝わった。

50・底知れぬ優しさの底（後書き）

シャン太郎「作戦名は『逆鱗ドラゴンスケイル作戦』」

兵士一同「ド……ドラ……え？ なに？ え、え？」

兵士一同「ざわ……ざわ……」

フートス「王子。ちょ、ちょっと、いいですかい？ ブフッ」

シャン太郎「なんだ？」

フートス「そ、その……ド、ドラゴ……くひひ、ドラゴン、スケイル作戦つてのは、いったい誰が命名したんですか？」

シャン太郎「……ぼくだ」

兵士一同「ざわ……ざわ……」

（地獄）

ギヤロポン「シャン太郎よ。さすがに、その作戦名はないだろう」

シユラク「それ、君が言えたことじゃないよね」

逆鱗げきりんをドラゴンスケイルと読むのは『悪1013』というマンガから拝借しました。

僕は格好いいと思うんですが、賛同はえられん。

51・決戦の前

> i35044—4057<

「なんだと？ 王都の外にいる反乱軍が引き揚げ始めた？」仮眠をとっていたジャクナ王はすぐに起き上がり、兵舎本部の庭に向かった。「視察に行く。馬を」

ジャクナ王が命令すると同時に、アレックスが彼の愛馬が連れてやってきた。ジャクナ王はすぐにそれに乗り上げ、市城壁に向かった。アレックスや近衛兵たちが慌てて彼を追いかける。

ジャクナ王は市城壁の、一番近くの塔に辿り着くと警備兵に目もくれずに塔の中に入り、階段を駆け上った。市城壁の屋上から彼が見た光景は、長い列をなして帰っていく反乱軍の姿だった。彼らはおそらく自分の来た方向に帰っていた。

「帰ろうとしない軍もある……」ジャクナ王は市城壁から見下げながら言う。「よくはわからんが、北部への道には軍が見えない。ということはおそらく、この場に留まるのはシャンティの北部反乱軍。……しかし、待てよ？ 退却するとしたら、真つ先に帰らねばならないのはシャンティのはずだ。なぜなら、北部にはイムサ国が攻めてきているのだから」

「王、それよりも、なぜ奴らは退却を開始したのでしょうか」と兵士が尋ねた。

「昨日の夜襲があつたからだろうか。それとも、もしかしたら追いかけてくるのを誘っているのかもしれない」ジャクナ王は疑り深い視線を逃げていく反乱軍に投げかける。「シャンティが残っているのを見たら、その可能性の方が高いかもしれない」

兵士たちは眉間にしわを寄せながら退却する反乱軍を見ていた。いったい、奴らは何を意図しているのだろうか……皆が皆、そのことを考えていた。

「正門の方に行くぞ」

ジャクナ王が正門に向かって歩き出しながら言った。兵士たちは反乱軍の方を見ながら彼について行く。

彼らが連れだつて歩いていると、「おい、ジャクナ王がいるぞ」と下から聞こえてきた。ジャクナ王がちらりと下を見てみると、下にはすでに大勢の反乱軍兵が集まっていた。彼らはジャクナ王を追いかけるように顔を動かしていた。

ジャクナは居心地の悪さを感じながらも、彼らを見無視するように歩き続けた。

「ん？ なんだあれは」

西門の方の市城壁にはすでに兵士たちが集まっていたが、よく見るとそれはジャクナ四世と近衛兵団だった。

「父上」

ジャクナ四世の方もジャクナ王に気が付いた。

「どんな感じだ？」

とジャクナ王は彼の隣に位置付けながら訊いた。

「見ての通り、反乱軍は退散しています。残っているのはシャンテイ叔父上と北部反乱軍」

ジャクナ四世は下に見える光景を指し示しながら言った。

「本当にシャンテイと南部反乱軍が残ったのか？ いったい、なぜ？」

「残るといえども、おそらく北部反乱軍も後から逃げるつもりでしょう。全方面の軍団が一斉に退却すると危険ですからね。まあ、他の軍勢を安全に逃がすためにシャンテイ叔父上たちが残ったわけでしょうが……なぜ、シャンテイ叔父上が残ったかという点、後から逃げるのに適任なのはシャンテイ叔父上の軍しかないからだと思います」ジャクナ四世はほかの反乱軍の行列を指差す。「南部反乱軍は本拠地にいちばん近いですが、いかにせん弱すぎます。東部も同様。西部に関しては、騎馬兵という事で戦力も十分、逃げるための機動力も十分ですが、もし……何らかの方法で追いつかれた場合、騎馬兵団には防御力がなさすぎます」

「相手は退却途中で、こちらと戦うと考えているのか」

「まあ……」ジャクナ四世は父王にしか聞かえないような小さな声で言う。「相手にはギャロップ将軍が死んだことは知られていませんから」

「そう、だったな」

「……」なんだ、父上は全く頭が働いていないじゃないか。「それで、シャンティ叔父上と北部反乱軍は防御力もあるし、ギャロップ将軍が鍛えていた騎兵团も持っている。攻撃力、防御力、機動力、兵站のバランスが取れているのはあそこくらいですから、必然的に残るのは北部反乱軍となります」

「退散する理由はやはりイムサ国などのことがあるからかだろうか」
「それもあります、昨日のことも大分堪えているのだと思います。现阶段では勝機が見いだせないのです、とりあえず一旦戻って後顧の憂いを絶つなどして、体勢を立て直そうとしているのではないですよ」

「そうか……」

ジャクナ王は腕を組んで嘆息する。

「父上は逃げるシャンティ叔父上を追いかけられるおつもりですか？」
「当たり前だ。敵将が、しかも求心力の高い王族が大きな隙をこちらに見せてくれるのだぞ。ここで叩かんでどこで叩く」

「確かにそうですね」

ジャクナ四世は、説得する手間が省けたとほくそ笑んだ。

「その……」とそこにアレックスが口を挟んだ。「奴らのことなのですが……なぜ奴らは北部反乱軍だけを戻そうとしないのでしょうか。北部だけを返せば、他の者たちはここで攻城戦を続けてもいいのに……」

「それはですね」ジャクナ四世が微笑を浮かべながら説明する。「相手は、昨日のことで一万以上の被害を出した。で、アレックス殿の言う通りにしたならば、北部に兵を送るのにまた一万から二万の兵士を失う。これによって王都の外に居座る反乱軍の兵力を六万ほ

どと見積もる。では、こちらの兵力はどうでしょうか。こちらの兵力は最大四万。ですが、あくまでこれは現段階で兵士として取り立てられている者の数。いざとなれば王都内の数十万の人々が兵士になる。さらに、王都を守るのはサウルス国で一番堅固な市城壁。極めつけは、それらを巧みに使いこなす稀代の名称ギャロップ將軍「なるほど、わかりました」アレックスは納得したように掌を打った。「現段階では、あちらには勝機はないということですね。そう言われれば、確かにそうですね」

ジャクナ王は少し苦々しそうな顔をしながら息子に尋ねる。

「それで、お前はと思う？ シャンティたちはいつ退散し出すと思う？」

「え？ ええ……そうですね」

ここまで、ほとんどの疑問を私に応えさせているぞ。この人は本当に大丈夫か？ いや、そんなことよりも……私はここで反乱軍の思惑を父上に言ってもいいのか？

ジャクナ四世は反乱軍の野営を見つめながら悩んでいた。

反乱軍の作戦はわかっているつもりだ、詳細はさすがにわからないが。おそらく、夜陰に乗じて王都から逃げ出し、追いかけてきた父上の軍隊を倒すと言っのだろう。ならば、逃げ出すことをこちらに気付かれなければならぬが……あまり早くに気付かれると不都合だろうか？ しかし、王都内の兵士たちの士気を見る限りでは、そのまま相手が逃げだしたのを見逃しそうな気もするが……。

「父上はどのようにお考えで？」

ジャクナ四世はとりあえず父王に質問を返すことにした。

「私は……まあ、普通ならば夜に逃げるな」

「私もそう思います」それくらいのことでは考えられるのか、と彼は思った。「ま、おそらく、それも今日中でしょう」

「そうだな。相手は対局時の一時的な防御戦以外の決戦を考えていないだろうからな」

「北部以外の各地方の反乱軍が見えなくなったら、すぐに門から出

て、残っている北軍を攻撃してはいかがでしょうか」とアレックスが言った。「相手は二万から三万程度、こちらから攻撃を仕掛ければ、相手の将を一人捕えられるかもしれませんが」

「逃げる際に攻撃を仕掛けた方が確実ですし、こちらの損害も少なくてすみませう」とジャクナ四世が答えを返した。「たとえば、それが夜戦でも」

「は、はあ……」

夜戦でも？ 夜戦での攻撃は成功しにくいと……いつか、ギャロップが言っていたが……。こんな風のアレックスが訝っているとジャクナ王が王太子に賛同する。

「ジャクナの言う通りだ。敵が逃げた時に攻撃した方が良い」

「……はい、わかりました」

畳みかけられたアレックスはさつき感じた疑問をすぐに棄却することにした。

それから今後の大まかな作戦の意見を市城壁の上で交換し合っていると、城門の方に数百の騎兵団がやってきた。

「あれは」とジャクナ王が市城壁から身を乗り出した。「シャンテイ」

騎兵団の正体はシャンテイとその近衛兵団だった。彼らは市城壁の前をこれ見よがしに練り歩く。ジャクナ王は攻撃の命令も出さずにただただシャンテイを見ていた。ダカ、ダカ、ダカ、ダカと騎兵たちが大きな音を立てて歩く。シャンテイは何事かを周りの近衛兵たちに伝える。そして彼らは市城壁から離れ、離れたところからジャクナ王たちを見た。

「何をしているんだ？」とアレックスが、意味が分からないと言うように顔をしかめた。「まさか、ただ挑発しているだけじゃあるまいな」

「いいや、違うな」とジャクナ四世は思った。あの人の顔を見ればわかる。あれは、宣戦布告だ。わかっていますか？ 父上。と彼は父王の方を見た。ジャクナ王は鋭い目でシャンテイの方を睨んでいる

た。

「おれを馬鹿にしている」

ジャクナ王は齒を噛み締めながら呟いた。

違いますよ、とジャクナ四世は人知れず口角を上げた。でも、あちらは本当にどんな作戦をとってくるのか……。まさか、シャンティ叔父上が主力の指揮を執るんじゃないだろうな。もしそうなら危ういぞ。頭に血がのぼった指揮官は危険だ。今だって、こんな無駄な宣戦布告を行っている。本当なら、こんなことはしない方が良い。王太子はそういう意思を含んだ眼差しをシャンティに向ける。しかし、シャンティがそれに気付くはずもない。彼はずっとジャクナ王を睨んでいたのだ。ジャクナ四世は嘆息してから、兵士に声をかけて市城壁を下りる支度を始めた。

「なんだ、下りるのか？」

とジャクナ王が険しい顔のまま訊いた。

「ええ、下ります。父上も下りましょう。相手の……挑発行為をそのまま見ても仕方がないでしょう？」

「そう、だな。おい、私たちも下りるぞ」ジャクナ王が言うと、兵士たちは短く返事をして彼の後について行く。「そうだ、ジャクナ。お前に頼みがある」

「はい、何でしょうか」

「シユラク二世のことだが、他の二人と同じように……」
「……わかりました」

ほかの二人……リウキウスとマスタングのことだろう。まあ、つまりは殺せというわけか。もう用済みなんだな。もう交渉なんてするつもりはないんだな。

「王、どうかしましたか？」とアレックスが隣にやってきて質問する。「面倒なことならば、王太子様の代わりに私がしますが」

「いや、いい」

ジャクナ王は首を横に振った。リウキウスとマスタングが死んだことは（ギャロップが死んだことも、であるが）誰も知らなし、腹

臣であるアレックスにも伝ええない。これから先、それを公表しても兵士たちに影響が出ない時期が来るまで、それを隠し通さねばならない。こういう時に、真に頼りになるのは身内だけである。なぜなら、血という絆が二人を繋いでいるからだ。

ジャクナ四世は心中で苦笑いしていた。

自分が討たれば、子も討たれる。だから、私があなたの隠してほしい秘密を隠し続けると……そう思っているんでしょうけれど……。

ジャクナ四世は王宮の回廊を一人で歩いていた。シュラク二世をどうにかするのに邪魔な近衛兵たちはすでに休憩させている。

実際の所、彼はシュラク二世を殺すかどうか迷っていた。有用な人材であるならば、未来のために是非とも残しておきたいと思っていた。しかし……。

「アンチ口の時のことを思い出す限り、そうは思えない」ジャクナ二世は独りごちた。「リュキウスがいたならば、おそらく生かすことを強要するだろうが……」

彼はそうこう考えているうちにシュラク二世の軟禁されている部屋に辿り着いた。部屋の前には槍を持った警備兵が数人立っている。ジャクナ四世は彼らに「やあ」と声をかけ、中にシュラク二世がいるかどうか尋ねた。

「もちろんいます。いないと我々の首が飛びますからね」

と警備兵は軽口で返事をした。

「うん、そうだな。それで……だな。少しの間、ここを離れていてくれないか？」

「は？ ……あ、いや、わかりました」警備兵は事情を察したのか、顔を青くしながら了承した。「あの、一人くらいは残っておいたほうがいい……」

「いや、できれば全員離れてほしい」

「はっ、わかりました」

警備兵の一人が返事をする。そして、「おい、行くぞ」と、渋る警備兵を引つ張つてどこかに退散し始めた。

ジャクナ四世は彼らが見えなくなるまで見送ると、ドアを三回ノックして、返事が来る前に部屋の中に入った。

シユラク二世はベッドの上に座つて、ジャクナ四世の方を見ていた。彼は十一歳であるが、背が低いせいか、その年齢よりもやや幼い印象を受ける。

「今度こそおれを殺すのか」

とシユラク二世は、落ち着いている風を装っていた。

「どうだろうな」

これはだめだろう、と思いつながらジャクナ四世は彼の方に歩み寄る。シユラク二世が訊く。

「リュキウスとマスタングはどうした？ 一緒じゃないのか？」

「どうしてあの二人のことを聞くんだ？」

「お前……おれのことを馬鹿で行動力のない無能だと思つていよう」シユラク二世はジャクナ四世を睨みつける。「おれは知っているぞ。お前がリュキウスやマスタングと共に王都の内部反乱組織を作っているのを……」

「どうせ、二人のうちのどちらかに問い詰めたら、素直に話してくれただろう？」

「……」

シユラク二世は顔をぶいっと逸らした。

「正解か。つまらんな、つまらなすぎる。行動力？ ふん、ないではないか。話を聞いただけではないか。まったくもつて、ありやあしないじゃないか。お前、そのことを聞いたのなら、なんでその場でその組織に入れるように頼まなかつたんだ？」

「頼んだ！」

「なるほど、頼んだか。ならば、それを言った時、その場にはリュキウスがいたんだな。奴のことだから、お前を巻き込みたくはないと思つたのだろう」ジャクナ四世がそういうと、シユラク二世は目

をきよるきよるさせ始めた。どうやら、これも正解らしい。「その安っぽい行動力と、リュキウスの悪意のない、しかし害のある過保護さに免じて、お前にチャンスをやろう」

「ふん………いらぬ。そんなものは、もう要らない」彼は二ヒルな感じに笑って言う。「おれはもう、ここで死ぬんだ。これでいいんだ。ふん、おれは………おれの父上に見捨てられ、処刑される。これでいい。例えこの先、父上が英雄になろうと、奴は、子を見捨てた男として生きていかなばならぬ。人々は父上に向ける尊敬の眼差しの中に、一筋の侮蔑を混ぜる。それでいい、それでいいんだ。いつかは父上も気が付くだろう。おれの存在に。おれの呪いに………そしてそれに気が付いた時、父上はおれの亡霊と向き合わねばならない。そうなのだ。おれは父上に、そうやって初めて父上に………あの英雄しか映そうとしない瞳に、見てもらえるのだ」

なに？ ジャクナは軽く混乱する。こいつ、何を言ってる？

短い間のうちにシユラク二世が厭世的になってしまったのは、おそらくリュキウスが関係しているだろう。そのことはジャクナ四世にも察しがついていた。

シユラク二世が王都内反乱組織に入れてくれるように頼んだとき、リュキウスは彼の体を気遣ってそれを拒んだ。

が、そんな親切心から来た優しい言葉は、閃く鋭剣となってシユラク二世の心を貫いた。少しの振動でも崩れ落ちたであろう彼の心はその衝撃には耐えられるはずもなかった。

心が瓦解した彼は、そこから再び思考を開始して、なんとか自我を保つための結論を得るまでに至った。

しかし、その過程が明瞭にわかっていながらジャクナ四世はそれが実行されたという現実を理解できずにいた。

彼に、出所でところのわからない怒りが生まれた。彼はそれをそこはかとなく言葉に乗せた。

「お前がそれでいいなら、私もそれでいいさ」ジャクナ四世は冷ややかな瞳で彼を見た。「所詮この世は暇つぶし。どう生きようが、

どう死のうが、そいつの勝手だ。死してこそ完成される崇高な理想もあれば、生きていなければ成就しない困難な大願もある。お前が満足できるのならば、お前がそれでいいと言うのなら、私はそれでいいと思うのだ。私とお前は他人だ。どうしようもない他人だ。私はお前のことなどわからないから、お前が私の邪魔をしない限り、お前のやることにケチをつけるつもりはない。そのはずだったのだが……ふん、気に入らん。だから、お前に注意しておこう。諦めと満足というのは心で受ける感じは似ているが、それらは全く非なるものだ。一つは餓えていて、もう一つは字の通り満ち足りている。シユラクよ、シユラク二世よ。私の目には、お前がどうしようもない虚無的な存在に見える。そう、お前は空っぽだ。お前は諦めていて、そのくせ餓えていて、そして……失望している。何よりも自身にな

「何が言いたいのかわからないな」

シユラク二世は王太子の言った通り、虚無的に返答した。ジャクナ四世は笑う。

「お前は何もかもを諦めた空虚な野郎だ、と言ったのだ。今の腑抜けたお前に比べれば、生きることを惨めったらしく嘆願した時のお前の方がよっぽどましだ」

私は何を言っている。ジャクナ四世は思った。いいや、理解できないのは目の前のこいつだ。この前までは生きること強く望んだくせに、なんでちよつとの間にその想いを覆してしまうのだ。望み、乞うならば、ただただそれに向かって一直線に進んでいけばいいだけではないか。何を迷う必要がある。そこには無駄な深慮など要らないのだ。深慮は目的の達成のためだけに使えばいいのだ。なんでそれを他のことに使って目的までをも変えてしまうなどという愚拳を犯す。理解できん。なぜだ、なぜだ？

「諦めたのではない。これが正解だと、知ったのだ」シユラク二世はやや怒りながら答えた。「ふん、それにしても、お前は悪趣味なのだ。そうやって、殺す相手を絶望させてから殺すのが好きなの

か。悪趣味、外道、畜生、糞野郎」

「なんだ、怒りはあるのか。何も無いと思っていたのに、怒りはあるのだな。ならば、なぜ立ち上がらない。心臓から全身に激しく送り出されるその怒りに身を任せない。その爆発的な感情に体を預けてしまえば、お前は何かのために歩み始めることができるのに」

「なんで、お前なんぞにそんなことを……」

ついさつき怒り始めたシユラク二世は、今度は悲しいような、辛いような顔を始める。彼の顔はまるで街中の雑踏の中で親から貰った子供のように、しわくちやで、さびしくて、心細くて……そんな感情を表している。

「気に入らん、気に入らんぞ。お前は心底気に入らん。目的があるのに……なぜ？」

「……無理だと分かっているからだ」

「違う。お前は断じてそうではない。無理ならば無理で満ち足りているものだ。お前は違う。そうやって、口では無理だと言っておきながら、心のどこかで望みが叶うと信じているのだろう」

「お前に何がわかる！」

シユラク二世は立ち上がる。

「父親を振り向かせることもできぬお前のことなど、わかるものか！ お前の望むことなど、この世界を変えることに比べて、なんと容易いことか！」

「それがお前の望みか！」

「馬鹿にするな、それすらも手段にすぎぬ！」

「……そ」シユラク二世は呆れ果てた様な顔をして、ジャクナ四世を見た。「そんな、ことがあるのかよ……」

「お前はとうするのだ」ジャクナ四世は腰に帯びた剣に手をかけながら訊いた。「虚無の果てに死ぬか？ それとも、満ち足りた最悪の道を生きるか？」

シユラク二世は眉を八の字に垂らし、怪訝な顔で相手を見る。目の前の王太子の顔は、彼に選択を促している。シユラク二世は考え

た。生きるか、死ぬか。その二つから一つを選び出すのは容易かった。同時に、その二つは二つとも苦痛を伴うものだった。同じ苦痛ならば、短い方がよい。そう思いながらも、彼は死を選択できずにいた。さつきまで、心は決まっていたのに。

死を選べないならば、残った道は一つしかなかった。

愛していた父に裏切られたという最悪から一步を踏み出さねばならないという選択。それは考えたくもないほど不確定でデコボコな道歩むという選択だった。それでも、その汗みどろの生を認められる心持こころもちに彼はなっていた。

「……生きるさ」ジワリと滲み出てくる感情を胸で受け止めながらシユラク二世は答えた。言った後、歯を食いしばった。言葉には鋭い痛みが伴っていた。けれど、一等爽やかな痛みだった。彼は続ける。「おれは生きる。だかな、おれの生きる道は最悪なんか満ちた人生じゃない。おれはきつと、望みを叶えてみせる」

ジャクナ四世は剣から手を離して、ドアの方に向き直った。

「ならば、ついてこい」

「どこに行くんだ？」

とシユラク二世は彼について歩きながら言った。ジャクナ四世はドアに手をかけながら言う。

「内部反乱組織の所だ。お前は殺さねばならん予定だったからな。」

この王宮に長居してもらっては困る」

「ああ、そうか」そこで逡巡して、結局尋ねた。「……ところで、あんたの目的はいつたい、何なんだ？ さつき、世界を変えると…

…」

「この、殺風景で穏やかすぎる世界を変えることなど手段の一つでしかない」

「じゃあ？」

「私はただ……この世のすべてを壊したとしても……」

ジャクナ四世は呟きながらドアを開けた。

太陽が傾き始め、辺りが暗くなり始めると、王都の市城壁の周りに建てられていた野営のあちこちで焚火や篝火の炎が灯される。市城壁の上の警備兵たちは火の回りに集まる反乱軍兵を見張っていた。市城壁の内側には伝令兵が待機しており、伝令兵が敵の退却を察知すると、伝令兵がそれを兵舎本部や王宮やメインストリートに整列している兵士に伝えることになっている。

ジャクナ王はメインストリートの広場で用意された椅子に座って、腕を組み、貧乏ゆすりをしていた。

「王」アレックスが声をかけてきた。彼は不安そうにあたりを見渡している。「ギャロップ将軍がいないようですが」

「や、奴は前回の戦いで傷を負っていてな。それがどうにもあまり良くないらしい」

「では、今回の戦いには参戦しないのですか？」

「ああ、今回は休みだ。次からは通常通り騎馬兵団を指揮してもらうが……なに、今回は敗走する二万の軍団が相手なのだ、心配することはない」

ジャクナ王はアレックスに笑いかけるが、頬がヒクヒクと痙攣して、どうにももうまく笑えなかった。

「……はい、わかりました」アレックスは違和感を覚えながらも、あることを思い出して言う。「そう言えば、さつき王太子様に会いました。王都内は任せてください……と」

「そうか、それは頼もしいな」それよりも連絡はまだか。と彼は思った。体ががたがたと震える。武者震いなのか、恐怖からくるものなのか、それともこの寒空のせいなのか……自分でもわからなかったが、とにかくその心地の悪い震えを止めたかった。まさか、おれが恐怖に震えているなどと思われやしないだろうな、と彼は辺りを見渡したが、皆が皆一様に体を震わせていた。「お、おい、アレックス。暖かい飲み物を……重装騎馬兵団だけにでも配れないか？」

「手配してみます」

アレックスは近くの者にその由を伝えて、使いに送った。

ふうふう、とジャクナ王は深い溜息を吐いた。溜息は空気中で白く濁って、やがて透明になりながら空に消えていく。

この戦いは大きな意味を持つ一戦だ。この戦闘でシャンティを討ち取ることができれば、この先の戦いをずっと楽にすることが出来る。例え、ギャロップがいなくなっただとしても、十分に敵に対抗できるようになる。

空にのぼっていく息を何度も見ていたら、そのうちに注文していた温かい飲み物が来た。牛乳に蜂蜜や小麦粉を入れて混ぜ合わせたものだ。ジャクナ王や兵士たちはそれを少しずつ飲んでいく。体は確かに温まるのだが、震えはあまり収まらない。で、それが飲み終わると、ジャクナ王は急激に不安になってきた。

「遅い。遅くないか？」

と近くのアレックスに訊いた。アレックスは確認にやります、と言った後、市城壁に向かって兵士を送り出した。

送り込まれた兵士は伝令兵に「何事もなかったのか？」と話を聞いた。

「おれの所は何もない。のぼって警備兵に訊いてみたらどうだ？」

「わかった」兵士は市城壁の上にあがり、近くにいた警備兵に話しかける。「敵はまだ動かないのか？」

「ああ、あれを見てくれ」と警備兵は火を指差した。「焚火や篝火がまだ燃えているだろう。それに、馬の嘶きも聞こえる」

「ああ、確かに」兵士は頷く。しかし。「人の姿が見えねえけど…」

…

「え？ あ、ああ……確かそうだな」警備兵は嫌な汗を顔に浮かべ始める。彼は十数メートルほど隣に待機していた警備兵に向かって質問する。「おい、ここ十分ぐらいの間に人影を見たか？」

向こうの警備兵は暗闇の中で首を振った。

「いいや」

「これって……」警備兵と兵士は顔を見合わせた。「もういないんじゃないのか？」

「矢を……いや、火矢を相手に天幕に撃ちこめないか？」兵士が言うくと、警備兵は火矢用の矢を取り出して近くの篝火の火をそれに灯し、それを敵のテントに向けて撃つ。が、焦って撃つたせいで外れしてしまう。新たな火矢をつがえる警備兵の手が極端に震えている。

「あ、あれ、おかしいな」

「おい、何してんだ？」

向こうの警備兵がやや焦り気味に聞いてきた。彼らはそれを無視して反乱軍の天幕に火矢を打ち続ける。そのうちの一本が命中した。火は瞬く間にテントに燃え移り、大きな炎は辺りを照らし出した。「荷物はあるみたいだけど……やっぱいいねえ」兵士が叫び声をあげた。「反乱軍はもういない。外に残されているのは、焚火と篝火と馬とテントだけだ。それ以外は……逃げちまつてる！」

その情報はすぐに伝令兵によって伝えられる。広場の兵士たちやジャクナ王にも伝わり、敵が予定していた以上に遠くに逃げているだろうという予想も彼の耳に届いた。

「警備兵め……」ジャクナ王は唸りながら兜を被り、鎧をまとった騎馬に乗り上げる。彼は騎馬の背の上で町中に響き渡るような声を出した。「皆の者聞け！我らは、あの安寧の日々を取り戻すために、今宵、かつての友を打たねばならん！臆するな、奴らはすでに逆賊ぞ！そう、我らは逆賊を討伐するのだ！臆するな、我らには竜の加護がある！そう、正しさはこちらにあるのだ！者共、剣を振るいて切り殺せ！者共、騎馬を駆りて薙ぎ払え！者共、その血にまみれた手によって平和を手繰り寄せるのだ！そうだ、平和は血の海の先にしかありはしない！この戦いはなければならぬ戦いだ！そして、勝たねばならぬ戦いだ！この戦いの先に、この血の海の先に、我らが望む平和があると思え！さあ、行くぞ！」

「我らサウルスの正統軍団」三万強に及ぶ兵士たちが。「我らの前に血の海あれども」整然とした足音を鳴らしながら。「太平樂土を望むなら」王都内を行進する。「我らのこの身が血反吐に汚れど」

市民たちは恐ろしいものを見るような目で。「歩み」彼らを見て。
「進もう」彼らを憎んだ。「我らが理想に！」兵士たちはそんなこ
ともわからず。「我らを守りし守護聖獣よ」甲高い声を上げ続ける。
「我らを助けし守護聖獣よ！」そして、先頭集団が正門に着くと。
「我らに加護を！」正門が大きな音をたてて開かれた。「加護を！」
「我らに！」

ジャクナ王が夜天に剣を突き上げながら叫んだ。

「我らに、守護聖獣の加護あれ！」

数万の兵士たちが一斉に城門から飛び出した。

51・決戦の前（後書き）

王都の少女「お母さん、兵隊さんたちがダサい歌を歌ってるよお」
母親「しっ、黙ってなさい！ あれは不承不承いやいやながら歌ってるの！ 作者
であるモアイ・イースター・タヌキの趣味でね！ しょうがなく歌
ってるのっ！」

王都の少女「兵隊さんたち、可哀そう」

母親「そうねっ！」

画像は怒ってしまった王太子。
もはや別人。

52・もう一つの戦場

ジャクナ四世王太子は出撃する軍勢を市城壁の北門の上から見送っていた。三万強の大軍での突撃なので、列も長く、足音やウォークライも耳障りなほどやかましかった。ジャクナ四世は地響きのよくな振動を足の裏に感じながら、シャンティが逃げていったであろう北部の方を見ていた。

本当にこの軍団に勝てる策があるんだろうな……。

やがて北門をくぐる兵士が重装騎兵から歩兵に代わる。歩兵たちは自分の足を使って必死に騎兵を追いかけていた。

あれでは戦場に着いても戦えんなあ。

「隊長。出撃する兵の最後尾はあとのくらいでここを通過するだろうか？」

とジャクナ四世が隣できよろきよろしている近衛隊長ゲオネスに訊いた。ゲオネスは王都内の方を見た。最後尾を行く騎兵には松明を持たせているのですぐにわかった。

「最後尾は、現在メインストリートの広場あたりにおりますから、まだまだかかりそうですなあ」ゲオネスが数個の光を指差しながら言った。「王太子様、最後尾が出たら城門を閉めるのですよね？」

「そのことだがな。やはり城門は開けておいた方が良いと思う」ジャクナ四世は周りの近衛兵にも聞かせるように言った。「父上たちが帰ってきた時だつて、すぐに中に入れるようにしておいた方が良いし。シャンティたちのような大部隊が、父上たちをやり過ごして王都に近づいてきたとしても、おそらく簡単に気付くことができる気が付いてから城門を閉め始めても十分に間に合う」

「そうですね。なあ、みんな」

とゲオネスはほかの近衛兵たちに同意を求める。彼らはうんうんと力強く頷いた。

それを見てジャクナ四世は心中呆れた。

誉れ高い近衛騎兵が揃いも揃って阿諛者ばかり。こいつらは、身分を除けば、他の者と比べて群を抜くような長所もないわけだし、私が王位についたならすぐに大半を入れ替えねばならんな。が、そうなると、逆にこの者たちをどこの部隊に編入するかが悩みどころだが……。

「さて……」ジャクナ四世は王都の中を見ながら呟いた。「うまくやれよ」

外から聞こえる足音が、馬の蹄のそれから人間の履く靴の足音に変わった。葡萄酒の貯蔵庫に隠れていたシユラク二世は酒屋の主人に目配せした。

「そろそろか？ 外の様子を見てきてくれ」

「ホイホイ」と言つて主人は階段を上がり店頭に出る。店頭の部屋の窓から向こうを除くと、息を切らしながら走る歩兵たちの姿が見えた。「シユラク様、すでに騎兵は出たようです」

「わかった。じゃあ、そのことを伝えてきてくれ……ええと」

シユラク二世は貯蔵庫の中にいる内部反乱組織の同志たちを見渡す。

「王子様は新参者なんだからあんまり出しゃばらないでください」と酒屋の、体のかい女将が掌を広げながら彼を制した。「ちゃんと決めてありますので……。ジョニー、あんたの番だよ。うちに貯めてあるツケの分だけちゃんと働きな」

酒屋の女将に名前を呼ばれたジョニーが階段を上っていく。シユラク二世はむすつとしながら酒屋の女将の方を見た。

「なんですか？」酒屋の女将も眉間にしわを寄せて睨み返す。「私は正しいことを言つたままでです」

「新参者と言つたが、お前よりもおれの方がこのようなことには慣れていると思つのだがな。おれはアンチ口の学園で……」

「それでも実践はしたことないんでしょう？」

「お、お前はあるのか？」

「あるわけないでしょう」

酒屋の女将は当たり前だと言う感じに言った。シュラク二世がいらいらしながら返す。

「それでは、なぜそのような態度をとる？」

「あーあー、もうそこらへんで」と酒屋の主人が貯蔵庫に帰ってきて言う。「ですが、王子様は休んでいてくださって結構です。もしかしたら、街中での戦闘になるかもしれません。その時に王子様には活躍してもらわねばなりませんので」

「十一歳のガキが大人を倒せると思うのか？」

とシュラク二世はむすつとしながら訊いた。

「ジャクナ様は……王太子様は、こう言っておられました。シュラクは今日この計画の詳細を知ったばかりなので、細かい命令を奴にさせてはならない。その代わり、街中での戦闘になったら、自分たち市民の指揮権を奴に任せよ……と」

「指揮に関しては、おれのことを認めているということか？」シュラク二世は満更でもないようだった。「まあ、そういうことなら……」

「そうですね。わかって頂けたなら嬉しく思います」本当は、シュラクがごねだしたらこう言え、って言われただけなんだけどね。王太子様に。「そ、それじゃあ、おれたちは見張りを続けようか」

ジョニーが酒屋を出発してから十分ほど後、彼は市城壁近くにある集会場に辿り着いた。彼は顔の汗を拭きながら本屋の裏側に回って、ドアをノックした。

「あれは？」

と中から男の声がした。

「えーと……竜の、加護は……我らにこそありし？」ジョニーは額を掻きながら、合言葉を言った。するとドアは開き、中から手招きする男が現れた。ジョニーはとりあえず店の中に入る。「おれは酒屋の集会場にいるジョニー。王都内の兵士のことだけど……騎兵が

もうすぐいなくなりそうだ」

「それだけか？」

「それだけって……えーと、それだけだな」ジョニーはうんうんと頷く。「十分前、酒屋の前を走っていたのは歩兵だったから、もしかしたら、もうすぐ歩兵もいなくなるかもしれない。いなくなれば、たぶん城門近くの集会場から人が来ると思うから」

「わかった。おれたちは市城壁を襲う準備をしておけばいいんだな？」

「そういうこと」ジョニーは階段の上を見つめながら言った。「ここにはマスタング様がいるんだって聞いたんだけど……」

「ああ。それでも、父上が亡くなったらしくてな。それで……いや、それよりもお前は大丈夫なのか？ 酒屋に戻ったりしなくてもいいのか？」

「これからほかの所を回って酒屋に帰るつもりだ」

「なら、すぐにそうしろ」本屋の主人はジョニーの背中をぐっと押し始める。「マスタング様はちょっとナイーブになっておられるかな。何があの人の心の琴線に触れるかわからんから、一緒にいるおれらも内心びくびくしている。だから、変なことを考えずに、さつさと帰っておけ」

「わ、わかった」

ジョニーはすぐに本屋を出ていった。

本屋の主人はジョニーを押し出すと、階段を上ってみんなの集まっている部屋に入った。部屋の中には、鎧を着た男たちが床や椅子やベッドの上に座って待っていた。皆が皆、戦争を経験した者であるから、その佇まいには風格があった。中でも一等、落ち着き払っているのがマスタングだった。

彼はまだ十三歳の後半であると言つのに、大人顔負けの体つきをしていた。その大きくて屈強な体に鎧をまとい、腕を組み、目をつぶって、精神を集中させている。

「誰が来たんだい？」

と戦士の一人が本屋の主人に尋ねた。

「酒屋の集会場のジョニーと言う奴だ。なんでも、騎兵はそろそろ王都からいなくなりそうらしい。それと、もうすぐ他の連絡も来るかもしれない」

「いよいよおれたちの出番になるかもしれんってことだな？」

「死ぬなよ」

本屋の主人がなぜか悲しそうな顔で言った。

「死なねえさ」マスタングがふいに口を開いた。で、眉間に深い皺を寄せ、短く切り揃えられた髪の毛をいっそう逆立てながら言った。

「あいつを殺すまではな」

本屋の主人は息を呑んだ。マスタングを中心にして部屋の空気がビリビリと震えているのがわかった。本屋の主人にとっては、いや、戦争を経験したことのある戦士たちにとっても部屋の空気は痛く、重かった。

マスタングはまた目をつぶった。

マスタングがいたのは王都の西側の市城壁近くの本屋であった。

一方、シュラク二世がいたのは中央メインストリートに沿いの酒屋の貯蔵庫。では、リュキウスはどこにいたのか。わかりきったことだが、王都の東側の市城壁近くである。

リュキウスは路地裏にある宿屋兼酒場の中にいた。彼は一階の酒場のテーブルの周りをぐるぐると回っている。

マスタングは大丈夫だろうか。従兄上は、シュラクは、ジャーニイ叔父上は、父上は……。

リュキウスがテーブル周りをぐるぐる回りながら考え事をしていくと、入り口の所で騒ぎが起こった。見ると、一人の男が強引に店の中に入ろうとしていた。

「ええい、竜の加護は我らにこそありし！ さっさと、通せ」男が合言葉を言う。その店の主人はさっさと言えはよかったんだ、と思いつつ男を中に入れた。男は急いでリュキウスのもとに行き、叫

んだ。「リュキウス様、ジャクナ王の率いる軍隊の最後尾が王都から出ていきました。今すぐ出撃してください！」

リュキウスは酒場のテーブルの周りの席に座っている男たちを見た。彼らは鎧をガチャガチャいわせながら立ち上がり、準備ができている、という風に頷く。

「わかった」リュキウスはテーブルの上の兜を取って頭にかぶる。次に、剣が腰にあるかを確認し、つばを飲み込んだ。初めての実戦だ。彼は一度深呼吸した。「……よし、行こう。ぼくらが目指すのは一番近くの塔だ」

リュキウスが歩き出すと、彼の周りに男たちが集まった。さながら近衛兵である。リュキウスは自分の心臓が異常なほど高鳴っているのを感じた。

死は覚悟している。そうだ、覚悟はできている。それなのに……実践はこんなにも違うものなのか。ああ、糞。ぼくの周りには鎧に身を包んだ戦士たちがいる。ぼくの一声で彼らが死んでしまうかもしれないのだ。糞、この事実を覚悟しておくのを今まで忘れていた。喉に何かが詰まっているのを感じて、リュキウスはコンコンと咳払いしたが、何もなかった。

しゃべりにくい。声が出しにくい。いや、プレッシャーに負けちゃだめだ。

リュキウスたちは酒場を出て裏路地から市城壁沿いの通りに出た。リュキウスの心臓の高鳴りはその勢いをどんどん増していた。

リュキウスは自分の口の中がカラカラなのに気が付いた。

52・もう一つの戦場（後書き）

王太子「さて、騒がしくなってきたけれど、ここでいったん私たちが作ったゲームのアンケートを見ていこうじゃないか」

リュキウス「プレイして下さった方の意見を聞くのも大事ですよね」
シュラク二世「どっかのモアイ・イースター・タヌキにも聞かせてやりたい言葉だ」

王太子「まず…… シャンティ さんからだ」
マスタング「本名での投稿かよ」

王太子「『キャラクターはみんな可愛くてとても素晴らしい。ゲーム性も満点。ただ、惜しくらむはあのロリータっ娘を攻略できなかったこと』」

リュキウス「ぜひ参考にしましょう」

王太子「次は、亡国の幻将 さんから」

マスタング「おい、本名を隠してる意味ないぞ」

王太子「『ふざけんじゃねえよ。なんで、ケンタウロスっ娘がいねえんだよ。次出すときはポニーテールのケンタウロスっ娘を出せよあと、ロリータの攻略も可能にしる』」

マスタング「おiiiiっ！ あの野郎、なに、死ぬ前に妙な恥を残して行ってやがんだ！」

王太子「次は おれが真実の王 さんから」

シュラク二世「なんだ、不敬な名前だなあ」

王太子「『あれ？ これって生徒会長とか校長の座を篡奪さんだつできないんですか？ できるのだと思って何周もしちゃった。あと、あの口りっ娘は攻略できるようにするべきです』」

シュラク二世「生徒会長の座をとるって……何を言っているんだこの人は」

王太子「次は 現王の左腕と呼ばれていた男 さんからだ」
リュキウス「レフティスさんだね」

マスタング「言うなよ」

王太子「ロリータっ娘が巨乳になる展開を希望」

一同「却下」

王太子「次は まだまだ現役大將軍 さんから。これはエラルジス さんからのハガキだね」

マスタング「だから言うなよ」

王太子「登場人物はみんな好き。中でもロリータっ娘が一番好き。それは孫みたいで可愛い的な意味ではなくて、性的と……」

マスタング「黙れ」

リュキウス「あっちの方もまだまだ現役と……」

マスタング「黙れ」

王太子「次は 現モーキリニアの將軍 さんから」

マスタング「誰だ？」

王太子「ロリータを攻略できないなんて世の中間違ってる。この 事実を知った時、イライラしすぎて近くの文官たちに八つ当たりし てしまった。この責任は取ってもらう。そういうわけで、次作では 主人公の名前をネオツトスで固定してくれ」

マスタング「お前か」

シユラク二世「それにしてもロリータ関連の文句が多いなあ」

マスタング「この国のやつらは病んでやがる」

シユラク二世「いっそのこと、次回作ではロリータは出ないことに するか？」

一同「それは嫌。というか、全員ロリータでファイナルアンサー」

|||||||

まだ戦闘は始まらないです。

次がやっところさ『^{ドラゴンスケイル}逆鱗作戦』です。

53・逆鱗作戦 前篇〜激動の中

シャンティたちはジャクナ率いる王国軍をできるだけ王都から引き離すべく後退を続けていたが、後方から重装騎兵軍が迫っていることを知ると、後退のスピードを緩めた。シエイバスは後方に下がりを、カバルス騎兵や二人乗りのサウルス騎兵と情報を交換し合った。「そろそろだな」シエイバスは自分の騎馬の手綱を騎馬術に長けたカバルス兵に託し、後方を確認した。実際、暗くてよくは見えないが、王国軍は夜道において集団をばらけさせないために所々に松明を持った兵士を配置しており、それによってシエイバスたちには彼らの居場所を知ることができた。「敵の兵種がわかる者はいるか？」騎馬兵だけとのことでした。「と遠くのカバルス騎兵が教えた。「歩兵は大分遅れを取っているようで」

「よし、ここまでは計画通りだ」シエイバスが自分の馬の手綱を受け取りながら言う。「この先も計画通りで頼むぞ」

彼は言い終わると馬の腹を蹴って騎兵隊を追い抜いた。その際、近衛隊長、シャンティ様を頼みます」と騎兵隊が声をかけた。シエイバスは前を向いたまま答えを返す。

「任せておけ！ それがおれたちの役目だ！」
シエイバスは小走りの軽装剣歩兵隊の中に入る。すぐにフートスが寄ってきた。

「どうだった？」

とフートスは要領を得ない質問をしてきた。

「何を聞いているのかわからんが、敵重装騎兵团ならすぐに後ろにきている。もうすぐこちらの騎馬軍団は一時退却を開始するぞ」

「敵兵種は？」

「重装騎兵のみ。歩兵は騎兵のスピードについてこれていない」

「よっしゃ！ これならいけるぞ！」フートスが走りながら自分の百人隊に声をかける。「てめえら、北部特製のごんぶと剣は持った

か？ 今日は大忙しだからな。刃こぼれを研いでいる時間はないぞ！」

「任せろ」「おおあー」「バキバキに折ってやる」「勝つのはおれらだ！」「走るの疲れた」「まだかまだま？」「行くぞ！」「おらおら！」「誰が一番敵を倒すか勝負だ」「おれだ、おれだ」

シェイバスは馬の腹にけりを入れながら言う。

「フートス、頼んだぞ」

「お前こそな！」

シェイバスは剣歩兵、槍歩兵を追い抜いて近衛兵団に戻る。彼はその中心にいるシャンティのもとに辿り着くと現状を説明した。

「なるほど、すぐそこまで来ているのか」シャンティはルルディフアイロの手綱を握りしめる。「兄上が、すぐそこまで」

「シャンティ様、こちらの騎馬兵団が動き出したようです」

シェイバスが言うと自軍の両翼の外から足音が聞こえ始めた。反乱軍の騎馬兵団がシャンティたちを追い抜く音である。

カバルス騎兵とサウルス騎兵はともに兵数五千ずつである。サウルス騎兵には兵士が二人乗りしているので、騎馬に乗っているのは一万五千人ということになる。シャンティの率いる反乱軍の兵数は二万五千なので、つまりは五分の三が一時的に戦場から離れ、残りの一万人で敵兵力三万強を防御せねばならないことになる。

シャンティはその事実と意味を理解していながらも、躊躇ためらいなく叫んだ。

「騎馬隊を除く一同、退却止め。ついで反転して迎撃態勢を取れ！」
軽装歩兵はそのまま後方に下がり、槍歩兵は立ち止まってターンする。体と盾を密集させて隙間から槍を突き出す。近衛兵団は徐々にスピードを落として馬をゆっくりと反転させる。

振り返ると、闇の中に敵重装騎兵のシルエツトが見えた。それは黒い波だった。力の塊だった。敵の重装騎兵突撃を受け止める最前列の槍歩兵たちは体に力が入らなくなるのを感じた。

「おい、誰か、背中を叩いて気合を入れてくれ。力が入らねえ」兵

士の一人が震える声で言うと、後ろの兵士がその兵士の尻を蹴った。「おい、何しやがんだ。背中を叩いてくれって言ったんだぞ」
「うるせえ、こっちも両手がふさがってんだ。叩いてやっただけでもいいと思え」

それを見た兵士たちが次々に自分の尻を蹴るように後ろの者に頼みだした。

「混乱するな、落ち着け。前の奴が尻を蹴ってほしいと言うのなら蹴ってやれ。この戦いの英雄の尻を蹴ることなぞ、今を置いてないぞ」シエイバスが苦笑いしながら言った。自陣のどこかで爆笑が聞こえる。「よし、そうだ。落ち着いてきたな。足と腕に力を入れる。敵の衝突力を殺せ。敵の攻撃を無効化するとすぐに軽装歩兵が入るからな」

自陣正面から嘶きが聞こえてくる。足音の軍勢も、その主も近づいてくる。闇を裂く足音、嘶き、ウオークライ、ウオークライ。最後に闇を裂いたのは、彼ら自身だった。

「我らに竜の加護あれ！」

鉄の騎馬軍団は叫びながら姿を現した。

槍歩兵たちは体中に力を入れる。目をつぶり、歯を食いしばり、足場を何度も確かめる。

「来るぞ！」

誰かが叫んだ。槍歩兵たちは祈りながら身を強張らせた。

次の瞬間、敵騎馬が槍に突き刺さる感覚がしたが、それでも馬は止まらない。手に持っている槍が徐々に押され始め、最後には手を離れ、柄つかが後ろに押し戻される。後ろにいた兵士はその柄に腹を打たれて悶絶しながらも盾を構えるのを止めない。が、衝撃は次々に襲いかかってくる。何人かが宙を舞い、槍歩兵たちの中に落ちる。

「押し返せ！」

シャンティが叫んだ。

兵士たちは「おおー！」と叫び声をあげながらじりじり前に進み始める。一步前に進む。敵騎馬兵との激突、そして後退。一步前に

進む。敵騎馬兵との激突、そして後退。仲間が何人も地面にたたきつけられ、重く猛々しい馬に踏み潰される。ある者は敵の突進に耐え切れなくなり宙を舞う。地に崩れ落ちる。ある者は敵の騎兵の槍によって突き殺される。

「おおー！」

兵士たちは恐怖心を追い払うように声を上げた。

「弓歩兵」シャンティが叫ぶと同時に弓歩兵は矢を射込む。ヒュ、ヒュ、ヒュ、と空中を駆けながら敵に襲いかかる矢は、けれども重装騎兵には大した効果はないようだった。それでも、シャンティはそれを続けさせた。なぜなら、これは目くらましに過ぎないから。

戦場からいったん退いていたフートス軽装歩兵隊は踵を返し、突撃力を失った敵騎兵への攻撃を始める。

「食らえや！」フートスはごんぶとの剣で敵騎馬の足を切り取り、へし折る。足を一本壊しても頭の上で馬が嘶くだけである。「もう一丁」フートスは怒鳴りながらももう一本、足を壊した。騎馬はバランスを保つ手段を失って倒れ込む。フートスは適当に騎兵の頭を兜ごと押し潰すと、次の敵を探した。「野郎共、馬は息切れしてやがる。今がチャンスだ！」

フートス百人隊を含む軽装歩兵たちは敵騎兵の中にどんどん潜り込んでいく。そこで馬の足をぶち壊し、次に直接騎兵を切り殺す。敵からも自分からも血が噴き出し、彼らは血まみれになって戦った。「振り上げては降ろす、振り上げては降ろす」軽装剣歩兵の一人が独りごちる。そう言っている間にも着実に敵を破壊していく。「これの繰り返しよ！」

戦場には血の霧や、力の抜けた死体が漏らした糞便の臭いが立ち込め始める。

「ちよつと待て」フートスが何かに気が付いて叫んだ。「敵の攻撃が止んでいる」

「逃げたか？」

と兵士の一人が訊いた。

「いや、違う。包囲だ、包囲するつもりだ」フートスが叫ぶと共に、敵騎兵は突撃を再開してきた。「地面を見てみる。死体だらけだ。つまり、突撃には向いていない」

「ならこの突撃はなんだ？」

「おれたちを外に追い出すための策だ」フートスが慌てる。周りの兵士たちは、次の突撃に備えての外への退避を行っている最中だった。彼は呼びかける。「おい、聞け。おれの話を聞け」

兵士たちには彼の言葉など耳に入っていない。彼らは前持った約束通り、一目散に中央の戦場から両翼に逃げる。彼らの思惑では、一旦逃げて槍歩兵が敵の突撃力を殺したら、また中央の戦場に戻ってくるつもりだった。だが、彼らが逃げた先には、待ち構えていたように敵騎兵が走り込んできた。

「やめてく……」

れ、と言う前に軽装歩兵の胸が敵の槍で貫かれる。

シャンティたちは敵が包囲を試みってきたのを見ると、両翼にいた槍歩兵、剣歩兵混合の集団をすぐさま広げ始めた。彼らはぞろぞろと動き、逃げてきた軽装剣歩兵を引き入れながら陣を広げていく。反乱軍を包囲しようと思っただけで走っていた敵騎兵は、思わぬところに槍歩兵がいるのに驚いた。

「反応が早いのは良いが、まだ展開途中のようだぞ！」

王国軍の勇敢な兵士が周りの兵士を鼓舞しながら展開途中の槍歩兵たちに突撃する。強固な密集隊形を組み切れていなかった槍歩兵は彼に突破を許すが、軽装剣歩兵が馬に飛び乗り敵騎兵の首を切り裂いた。

「早く隊伍を組みなおせ」

槍歩兵が叫んだ。槍歩兵は肩と盾を並べて盾の壁を形成する。重装騎兵たちは槍歩兵たちの速さにたじろいだ。

「何をしている」重装騎兵の後ろから、上級兵らしき重装騎兵がやってくる。「突撃を続ける。それが王の命令だ」

「ですが、混乱状態に陥っていない敵に正面から突撃するのは無謀

です」

兵士の一人が反論する。

「おれたちが敵を攪乱かくらんと殲滅せんめつを同時にこなせばいいだけの話だ」

上級兵は唾を飛ばしながら、反論してきた兵士の騎馬の腹を蹴った。

騎馬が興奮して勝手に走り出す。「うわぁ」と叫びながら兵士が手綱を操るが、騎馬はもう止まらなかつた。彼は無意味に盾の壁に突撃し、倒れ、突き殺された。

「さあ、行くぞ」と上級兵はさっきのことはなかつたかのように声を張り上げる。それには周りの騎兵たちも顔を青するばかりだつた。上級兵が自分勝手に辟易しながら怒鳴り上げる。「走れ！ 馬鹿者共！」

騎兵たちは仕方がないと言つように馬の腹を蹴り、突撃を仕掛けた。彼らの後ろで上級兵が「突撃！ 突撃！」と何度も繰り返す。

あまり意味があるとも思えない突撃が何度も繰り返される。王国軍の被害は明らかに大きかつた。それでも、拡張した右翼への攻撃が徐々に激しさを増すようになると、均衡が破られ始めた。シャンティはやつとあることに気が付いた。

「敵の片翼への重点的な攻撃……。斜行陣の応用か」つまりは、攻撃の重心を一方に取ることで敵を片翼から撃破していくということである。シャンティは相手のとつた作戦に拍手を送りたい気持ちになつた。「サウルスのお家芸」

そう、ジャクナ王が取つた作戦はサウルス王族の得意技である。「右翼へ兵を回すんだ。あのままでは騎兵隊が戻ってくるまで持たなくなるぞ」

シャンティが命ずると、中央の後方にいた槍歩兵が少しずつ右翼に動き始める。これでは中央が手薄になるので、左翼の兵士が中央に回る。

移動の最中も敵は熾烈しつれつな攻撃を繰り返してきた。何度か中央の盾の壁が突破されたが、それらはすぐに修復される。

「糞、死体が邪魔で戦いにくい」

中央の盾の壁を形成する兵士の一人がイラつく。足元には馬やら人やらの死体が敷き詰められていて、彼ら動くたびに足元に死体がグニグニと揺れた。彼は地面を踏む感覚を忘れそうになっていた。

死体は障害物となって敵の突撃のスピードを減少させる効果があった。同時に、盾の壁を築く兵士たちの足場を悪くする効果もあり、盾の壁が突破される頻度が増え始めたのはそのせいであった。

敵騎兵の突撃の度に一步前進してその場で戦っていた兵士たちはより良き足場を求めて自然と後退を始める。シャンティは陣営の前方がやや窮屈になってきていたのを感じていたが、そのことには大した危機感を抱かなかつた。彼にとっては、陣営の自然後退よりも激しい攻撃が加えられている右翼への兵力集中の方が重要だった。

「騎兵はまだか？」

とシャンティは無意味に辺りを見渡した。その時、近衛兵団までもが徐々に窮屈になり始めているのに気が付いた。ルルディファイ口も前方から馬の尻がじりじり下がってきていることに腹を立てている。シャンティは後ろを振り向いた。後ろにはまだまだ余裕があった。シャンティが声をかけようとした瞬間、前方から大声が聞こえた。

「下がれ、下がれつたら！」窮屈な前列にいる兵士の一人が狭さに耐え切れなくなつて叫んでいた。「下がれつて言つてんだ！」

「下がれえ！」ほかの兵士も声を上げる。「こっちは押されまくつてきてきついんだから、早く下がりがやがれ！」「そうだ、早く！」「息が苦しい！」「前からくるぞ！」「なんで下がらない！」「おい、おい！」

前の槍歩兵たちが背中ではるかに兵士を押ししていく。

シエイバスが叫んだ。

「後方、下がれ」

「下がれつて？ まさか、退却ですか？」

と弓兵が訊き返す。すると、他の兵士たちの顔色が変わり、前線

はずでに負けているのではないだろうか、などとおどおどし始めた。「違う。槍歩兵の足場が悪くなったので、一旦下がるだけだ」シェイバスが首を大きく振る。「とにかく下がれ。このままでは前線が窮屈だ」

後ろの方にいる兵士たちは少しずつ下がりはじめ、十分なスペースができたシャンティたちも少しずつ下がる。「後ろに下がるときに密集隊形を緩くするなよ」と槍歩兵たちが声をかけあう。「一步、ほい。一步、ほい」と最前線の兵士たちは一歩ずつ息を合わせて後ずさる。最前線の兵士の足が地面に触れ、ザツザツと砂と足が触れ合う音が鳴った。「よし、地面の感触だ。この調子でもうちよつと下がってくれ」

その間も敵騎兵は断続的に突撃を仕掛けてくる。シャンティは、兵士たちが息を合わせてじつくりと後退するのを見てまだまだ主力は耐えることができると思った。けれど、中央はそうであっても、他の場所が持ちこたえられなかった。

シェイバスが伝令兵に伝えられた情報を報告する。

「シャンティ様。右翼破られそうです」

「何！」シャンティは背筋に寒気が走るのを感じながら指示を出した。「フートス百人隊は？ できるのなら右翼に回せないのか？」

「無理です。現在位置はわかりません。探している時間もありません」シェイバスが周りを見渡しながら言った。「シャンティ様、我々が行きましょう」

「中央は持つか？」

「この分なら持ちます」

「わかった」シャンティはルルディファイロを飛び降りる。近衛兵たちは何をしているんだ、という顔をした。「馬で行くには混雑しすぎている！」

シャンティは彼らの疑問に対して短く返事をする。シェイバスも近くの者に自分の馬の手綱を任せて地面に降り立った。自分たちもと馬を降りようとする近衛兵たちに近衛隊長は命令する。

「全員はいけない。だから、おれと共に来るのは一から三中隊だけだ。そのほかはここに残って援護を続ける」

「はっ」

と、兵士たちが返事をしながら馬を降りる。

シャンティたちは戦場の人ごみを右翼に向かって突っ切りながら、目ぼしい者を引き抜いていく。けれどもその中にフートス隊はいない。

「ということは、左翼にでも行っているのか？」

とシャンティは独りごちながら右翼に急いだ。

シャンティたちが駆けつけた時、右翼はすでに分断され、各個撃破される寸前だった。右翼左半分は中央主力との連携を保つ分被害は少なかったが、右翼右半分はほぼ孤立している状態で、今にも敵騎兵によって小さく包囲されようとしているところだった。

シャンティたちは敵の包囲を外から打ち破る独立部隊を編成する。シャンティの指揮のもと、近衛兵と槍歩兵と弓兵で構成された独立部隊はじりじりと近づきながら敵騎馬の鎧に覆われていない部分を矢で射撃する。

「敵騎が崩れ落ちたらそこから敵の包囲の穴を広げていけ。なんとかでも孤立している部隊との連携を取り戻すんだ」

シャンティは敵騎がドミノ倒しで倒れている所を見つけると、そこを剣で指し示した。独立部隊は叫び声をあげながらそこへ突撃する。足に矢を射られた馬を切り、馬上の騎兵を槍で突き刺す。

「右から騎兵が来ているぞ」

シャンティが叫んだ。槍歩兵たちがすぐに盾を並べる。弓歩兵が突撃してくる敵騎兵に矢を射込むと、そのうちの一本が頭に命中して騎兵は絶命した。操縦者を失った馬は徐々にスピードを緩め、最後には走るのをやめた。

シャンティはその馬の手綱を引いて敵のいる方向に頭を向けさせると、近くの死体の靴で馬の尻を強く打った。馬は興奮して王国軍の方に突撃を駆けていく。

「シャンティ様、向こうからなにかきます」

シエイバスが包囲されている右翼の右半分の方を指差す。

彼の指差した方向からは猛々しい怒鳴り声が響いている。その声は熱気と共にだんだんシャンティたちの方に近づいてきた。シャンティは独立部隊に迎撃態勢を取るように命令した。弓兵が矢をつがえる。

「いえ、これはおそらく仲間です」シエイバスが言った。「弓矢での攻撃はよしたほうが」

「本当に？」

「おそらく……」

シャンティは弓兵に目配せして矢を撃ち込まないように注意し、声の聞こえる方に前進するように独立部隊全体に命じる。

独立部隊は隊伍を組んでざっ、ざっ、ざっ、と歩んでいく。向こうからの音と熱気はさらに強まる。独立部隊は緊張感を高めながら確実に前進する。ざっ、ざっ、ざっ。

「王子」と不意に、敵兵の向こうから聞こえた声はフートのそれだった。フートスは邪魔な重装騎兵の腹にこんぶとの剣を突き立て押しのけると、向こうから姿を現した。彼の後ろには数百人の兵士たちがいる。「出張ご苦労さんだな。後ろにいるのは右翼の奴らだ」「フートス、こんな所にいたのか」シャンティが思わず緩む。「いや、それよりも、それで包囲されていた右翼の兵は全部か？」

フートスは頷いた。

「生きている奴はな。それより早く中央主力に戻れ、こいつらと右翼の連結はおれたちが援護するから」

「わかった、頼んだぞ」シャンティは踵を返し、兵士に叫んだ。「それでは、ぼくたちは中央主力に戻る」

シャンティたちは中央主力に戻りだす。それを見送ったフートスたちは右翼の左半分との合流を果たして、再度盾の壁を築き始めた。シャンティたちは引き抜いてきた兵士たちを元の隊に戻して中央に帰った。中央主力の様子はほとんど変わっていないようだった。

「変わったことはあったか？」

とシェイバスが愛馬に乗りながら尋ねた。残っていた近衛兵が顔いっぱい汗の玉を浮かべながら報告する。

「盾の壁を突破される頻度が上昇しています。なぜでしょうか？」

「疲れが出始めたんだろうな」とシェイバスは呟いた。「糞、騎兵隊はどうした？」

前方で兵士たちの叫び声が上がった。最前線は敵騎兵に突破されていた。槍歩兵たちはよろよろと起き上がろうとしている間に、敵騎兵に突き殺される。その敵騎兵をほかの槍歩兵が付き殺して、また盾の壁が構築される。ところが今度はそう簡単にはいかなかった。構築される途中の盾の壁に向かって敵騎兵が突撃を繰り返し、ついには大きな穴をあけたのだ。

「突撃、我に続け！」

と敵の上級騎兵が槍を掲げながら雄叫びを上げる。後ろの騎兵たちも意気軒昂になって雄叫びを上げながら突撃してきた。

「近衛騎兵、自陣に侵入してきた敵を押し返せ。盾の壁を再構築するだけの余裕を槍歩兵たちに与えるんだ！」シャンティが怒鳴りながらルルディファイ口の腹を蹴る。ルルディファイ口は小さく嘶き、頭を揺らしながら前に進みだした。「ぼくに続け」

反乱軍の腹の中に入り込んできた敵重装騎兵とシャンティたちの近衛騎兵がぶつかり合う。敵騎兵の槍がシャンティの兜をかすめると、シャンティは剣を突き出して反撃する。その剣先が騎兵の喉にすつと入る。シャンティはそれほど奥に差し込まずに引き抜くが、騎兵の喉からは噴水のように血が噴き出し始めた。騎兵は槍を放り捨てて、傷口から血が出ないように喉を抑えこんだ。

シャンティは次の敵を探して首を左右に振った。目の端で槍歩兵たちを捉えて、そちらの方を見れば彼らはすでに盾の壁を再構築仕掛けていた。

「いいぞ、もうすぐで防御が完成する。もうひと踏ん張りだ」

シャンティの体が揺れる。ルルディファイ口が勝手に動き出す。

シャンティは手綱を握って愛馬が勝手な動きをしないように制御する。

前方で再度声上がる。先ほど盾の壁を突破した敵騎兵が踵を返して槍歩兵を攻撃始めたのだ。シャンティは現場に駆けつけようと思ったが、盾の壁がまた崩壊したのを見ると、愛馬を止めた。前方からは津波のように重装騎兵が突撃してくる。

彼らは盾の壁の穴を食い破り、広げながら反乱軍の陣内に侵入してくる。辿り着いた先で、手あたりしだいに兵士を突き殺す。

「撤退だあ！」

その声を聴いてシャンティははっとした。次に自分の口を確認した。いや、ぼくは叫んでいないぞ。シャンティはそう思いながら誰がそんなことを言ったのかを探した。結局それはわからない。この騒然とした戦場では、そんな些細なことがわかるはずもない。

主君の命令ではない。それでも、反乱軍の兵士たちは一目散に逃げ始めた。ある者は剣を捨て、ある者は盾を捨て、ある者は兜を捨て、ある者は恥も外聞もなく……誇りを捨てて逃げ出す。そんな兵士たちも、呆然と立ち尽くしているシャンティとルルディファイロだけは器用にさらさらと避けながら逃げる。

趨勢は決まった。ぼくも、逃げるべきだろうか。逃げたとしても、王都はすでに奪還しているだろうし……。けれども、逃げたところでどうなる。逃げたって捕まえられて殺されてそれで終わりだ。けれども……けれども……。

「逃げましょう、シャンティ様」

いくらか後ろでシェイバスが叫んだ。

シャンティの目前にはどんどん敵騎兵が迫ってきていた。彼らは敵を敗走させたたち成感に酔いながら、顔を弛緩させて、次はどんな榮譽を手に入れてやるうかと思いつきながら剣や槍を振る。と、その中の何人かがシャンティの存在に気付き、満面の笑みを浮かべた後に馬の頭をシャンティの方に向けさせた。

けれどもなんだと言うのだ。ここで死ねばすべては終わりだ。だ

からこそ、ここは生き永らえるために逃げるべきなのだ。

シャンティはぶるぶる震える手で手綱をぎゅっと握り、ぐっと引き寄せた。ルルディファイロ、反転して逃げるのだ。と彼は心中で叫んだ。が、ルルディファイロは一向に動く気配を見せなかった。シャンティは何度も手綱を引き、腹を蹴った。どんどん敵の重装騎兵がシャンティに近づいてくる。シャンティは歯をぎりぎり噛み締める。目を大きく見開く。何度もルルディファイロを叩く。彼は微動だにしない。

「シャンティ様、何をしていますか」シエイバスが逃げ惑う元兵士たちを掻き分けながらシャンティのもとにやってくる。「作戦は失敗したのです！ 早く逃げましょう」

「逃げろと言われても、ルルディファイロが動かないんだから仕方がないだろう」シャンティは怒りながら、ぐいぐいと手綱を引っ張る。「なんで、なんでこんな時にいうことを聞かない。逃げなければ、君だって死ぬんだぞ。ルルディファイロ」

シエイバスはシャンティの手を掴んで引っ張る。

「もういい、もういいでしょう。今はあなたの命の方が大事です。だから、どうか、私の馬の背に乗ってください」

「もう遅い！」

そう叫んだ敵騎兵はすでに十歩もない離れていない距離にいた。

彼は槍を逆手に持ち替えて、投げる姿勢を取った。

「ルル！」シャンティはルルディファイロの腹を蹴る。「前に！」ルルディファイロは地面を力強く蹴って跳躍した。十歩ほどの距離を一気に詰め、相手の後ろに位置付けると、シャンティは上半身だけ振り向いて敵騎兵の首を刎ね飛ばした。

シエイバスやほかの近衛騎兵もシャンティの方に駆け、シャンティを襲おうとしている敵騎兵たちを撃滅した。

「ルルディファイロは動くようになりましたか。ならば、早く逃げましょう」

とシエイバスがほっとしながらシャンティを呼んだ。

「いや、このままだ。このまま前に進む」シャンティは眉間に皺を寄せ、ほとんど自棄^{やけ}になりながら返した。「そうだ！ 損害の大半は逃げる際に負うものだ。この作戦だって、確かに勝利を目的としているわけだが、勝敗自体はジャーニイたち別働隊の手によって決められる。そして、実際、この作戦は、困となつたぼくたちの生存率を上げるためのものに過ぎない」

「じゃあ、逃げれば生存率は下がると？」

信じられないと言つたようにシェイバスは顔を歪ませた。

「今も下がっている最中だ」シャンティはそう皮肉を言つた後、前を向いて叫んだ。「逃げるな。逃げるんじゃない。まだ負けたわけではない。進め、前に進め。ぼくたちにはまだ策が残っているだろ」

シャンティは戦場の真ん中で意気を吐く。だが、兵士たちには全くそれが通じていないようで、彼らはシャンティに目もくれずにシャンティを抜き去っていく。シェイバスが心中で舌打ちしながら近衛兵たちに命令した。

「おれたちだけでもシャンティ様を守るぞ」

兵士たちがしょうがない、という感じにシャンティの周りに集まる。

「そう来なくては困る」

シャンティは周りに集まつてきた近衛兵たちに言った。

「今日は傍若無人ですね」シェイバスは苦笑する。「さあ、行きましょ」

「前へ！」

シャンティは声を張り上げ、愛馬の腹を蹴った。ルルディファイ口はゆっくりと歩き出す。それにつられて周りの近衛騎兵たちも歩く。この混乱しきつた自陣の中で、そこだけが奇妙に整然としていた。

反乱軍の陣の中に突撃していた重装騎兵たちは夢でも見ているのか、亡霊でも見ているのか、というような感じでシャンティたちを

見ていた。

この戦場の中の違和感に気が付いたのは敵だけではなかった。未だ前線に残っていた反乱軍兵士もはるか後方に逃げていた反乱軍兵士も、敵の渦の中にゆっくりと浸かりに行くシャンティたちの姿を見て、何らかの終末観を感じていた。

降参するのだろうか……。ああ、それなら全てが終わるのだ。と彼らは思った。

現実には彼らの思った通りにはならない。シャンティたちは近づいてくる敵騎兵に剣を振るい、槍をぶち込んだ。てっきり降参するのだろうと思っていた敵騎兵は一撃のもとに臥ふされ、地面に転がった。「まだ戦争は終わっていないぞ！」シャンティが剣先を前方に突き出しながら猛然と叫んだ。「前へ！」

近衛騎兵たちも同様に「前へ」と叫ぶ。

「諦めやがれ」

と敵騎兵が襲い掛かってくるが、彼は近衛騎兵の一人に突き殺されて命を落とす。

「前へ！」ダカツ、ダカツ、ダカツ、と足音が鳴り響く。「前へ！」彼らはゆっくりと、一定のリズムで前進する。「我々は負けてはいない」逃げていた兵士の一人がわなわなと体を震わせた後、地面に落ちていた剣を拾い上げて、前線に向かって走り始めた。他の者たちは一瞬顔を見合わせた後、うんと頷きあつて前線に戻り始める。

「前へ！」

「守れ！」誰かが叫んだ。「守れ！」兵士たちは地面を蹴つて、息を切らして、前方に向かって走っていた。「守れ！」剣を持った手を前後に振り、腰もぶんぶん振り、マラソンランナーのように胸を張って走っていた。「守れ！」あつという間にシャンティたちを追い抜いて、前線に残っていた兵士たちの横に立ち、地面に落ちていた盾を拾い、密集させて並べる。「シャンティ様を守れ！」

その他の者も元の位置に戻り、先んじて逃げた恥ずかしさに顔を赤くしながら剣や槍や弓を構えた。シャンティたちは自陣を見渡し

た。瓦解していた軍は復活していた。元のように。
「総員」シャンティは命じた。「官軍よろしく、敵かに前へ」

53・逆鱗作戦 前篇〜激動の中〜（後書き）

前篇後篇に分けなくてもよかったけど、なんとなく分けました。

54・逆鱗作戦 後篇〜彼は命を乞うたか〜

「そう簡単にはいかんか」王国軍の真ん中でジャクナ王は顔をしかめていた。「だが、どうやって軍を立て直した？」

「わかりませんが」アレックスが返した。「こちらの方が押しているのは依然として変わっていません」

彼らは騎乗したまま、前方で重装騎兵が繰り返している突撃を眺めていた。

普通、騎兵というのは機動力をいかして逃げる敵を殲滅したり、混乱した敵を撃滅するために投入したりするものだ。

重装騎兵はそうした機動力という面に着目したのではなく、馬の持つ強靱な足腰から繰り出される突撃力を生かすものだ。それでも実際の所は防御が盤石である敵に対しては使用するべきものではない。今回のように防御されて、逆に襲撃者の被害が大きくなるからだ。

とは言っても、ジャクナ王たちは進軍についてこられない歩兵を置き去りにしてきたので、それ以外の方法がなかった。騎兵を馬から降ろせば歩兵になるわけだが、盾の持ち合わせなどがなかったせいで柔軟な対応はとれない。

ジャクナ王が腕を組んで次の作戦を考えていると、アレックスのもとに伝令が届いた。アレックスは伝令から情報を聞くと、すぐにジャクナ王に伝えた。

「やはり側面で敵騎兵が発見されたそうです」

「やはりな。大体、相手はこちらと戦うことを想定していたんだ、何らかの策を取るのわかっていた」

「最初に逃げ出した騎馬に目を付けるとは……さすがですね、王」

「他軍（例えば、東軍など）の増援も考えていたが……まあ、こちらでなくてよかった」ジャクナ王は口角を上げる。「それで対処法だが……言っまでもないな。敵は軽装の騎兵なんだから、こちらの

重装騎兵にはあまり相性はよくないはずだ。重装騎兵の部隊をいくら派遣しろ」

「はっ」

アレックスはすぐにその由を伝令に伝えた。

それから彼らは最前線同士の戦いを見守っていたが、いつこうに戦況は変わらなかった。アレックスはさつき、自分たちの方が押ししている、と言っていたが、見る人によってはその逆に見えたり、大體の人にとっては引き分けのように感じられる戦況だった。一進一退ではない、本当に硬直しているのだ。

「それにしても歩兵が遅い。何をもたもたしているんだ？」ジャクナ王は舌打ちしながら言った。「歩兵が到着すればこんな戦いすぐにどうにでもなると言っのに……」

それなら……とアレックスは先ほどから抱いていた一抹の不安をジャクナ王に言う。

「もしかしたら、敵騎兵が大きく迂回してそちらを襲っているのかもしれない。後方にも重装騎兵を送った方が良いのではないのでしょうか」

「それもあるな。よし、後方にも重装騎兵を送ろう」

ジャクナ王が即決すると、アレックスはその由を下知して重装騎兵を送り出した。

はたして、これで大丈夫だろうか。とアレックスは重装騎兵を後方に送り出した後、ジャクナ王の所に戻りながら考えた。相手はあのシャンティだ。軍才に関しては、ギャロップの陰に隠れていたせいで、どれほどのモノなのかわからない。でも、ジョイ方がないわけではない。カバルス戦役時には防御を得意としていたと言う。今回も防御から入り、おそらく、こちらが隙を見せたならそこを突くつもりなのだろう。しかし、それだけではなく、逃げたはずの騎兵をこちらの側面に迂回させるなどの策を繰り出してきて、こちらの隙を作る努力も行ってきている。やはり……彼はギャロップからある程度の知識や策を施されていて、將軍としてもそれなりに成長し

ていると考えるべきなんじゃないだろうか。ま、しかし、だからと言ってなんだと言うのだ。相手は、こちらにギャロップがいると思っ
ているんだ（実際は休んでいていないがな）。ギャロップ仕込み
の作戦が、ギャロップ相手に通用すると思っっているのか？

アレックスはそう考えた時、違和感を覚えた。

「相手は、こちらのギャロップがいないことを知っていて、この作
戦を組み立てている？ いや……まさか。だって、ギャロップが今
回参戦しないのは、おれだって事前になるまで知らなかったことな
んだから……」

アレックスはうんうんと唸りながらジャクナ王の所に戻った。ん
？ と思っ
て見てみると、ジャクナ王は騎乗したままで伝令兵の胸
ぐらを掴んで何度も何度も殴りつけている。騎馬している伝令兵は、
上半身を王の方に引き寄せられている。不安定な体勢のせい
か、彼はなすすべなく殴られ続けている。周りの者は必死になっ
てそれを止めようとしているが、相手が王であるだけに手荒な真似は
できない。

アレックスは慌ててジャクナ王の所に駆け付けた。

「いったいどうしたんですか？」

彼は周りの者に質問する。近衛兵はおどししながら「この伝令
兵が……その……」とジャクナ王に殴られている伝令兵を指さす。

伝令兵はすでに顔の形が変わっており、血もいたるところから噴き
出している。アレックスは事情を知るより先に、この暴行を止めな
ければならないと感じて、ジャクナ王を止めに入った。

アレックスは、ジャクナ王が振り上げたこぶしを握る。

「アレックス、離せ。糞！」

ジャクナ王はふうふうと荒く息をしながら怒鳴った。

「な、何があつたのです？」

「こ、この伝令兵が……」そこで彼は少し冷静になり、さっきまで
の自分の行いを恥じるかのように、小さな声になって言った。「敵
の側撃を止めるために送り出した重装騎兵が壊滅していると……」

「なんですつて？」アレックスは片方の眉を上げる。「だって、彼らはほんの数十分前に送り出して……」

「私が言います」と一人の重装騎兵が顔を真っ青にしながら言った。「わ、私は敵の側撃要員を……敵騎兵を打ち倒すべく派遣された者です。私たちは、相手の兵種は軽装騎兵であると聞かされていたのですが、実際は槍歩兵が待ち構えておりました。私たちは少し交戦した後に、今の数では勝てないと思い、いったん引き揚げようとしたのですが、敵の騎兵に回り込まれておりまして……私は命からがら逃げだしてきた者の一人です」

「他の者は？」

「わかりません。ですが、私が彼に」と言つて、重装騎兵はジャクナ王に胸ぐらを掴まれている伝令兵を指差す。「彼にこのことを伝え、で、詳細を説明するために王の所まで同行したのですが……」

ジャクナ王は重装帰依日の視線に気づき、はっとした後伝令兵を離れた。伝令兵はそのまま地面に崩れ落ち、他の兵士たちがすぐに彼をどこかに運び去った。

「それで？」とアレックスは続ける。「つまりは、敵の側撃は止められていないんだな？」

「……はい」

「なぜ槍歩兵があんな所にいると言つのだ」ジャクナ王は唾を飛ばしながら重装騎兵を怒鳴りつけた。「前線で戦っていた奴らにそんな時間があったとでも言うのか？」

「王、落ち着いてください」アレックスがジャクナ王をたしなめる。「とりあえず、今はこの事態への対処を考えるべきです。相手はすでに我々の横に位置付けている。そして、着々と私たちを包囲しようとしている。さらに、正面の戦いは硬直状態」

「……どうすれば」

「今は、この包囲を打ち破る方が先決です」

「わかった。ならば、側面の囲みを解くために重装騎兵を送ろう。先の兵数では足りなかったのだったら、増やせばいい」

「それなりの兵数を割かなければならないかもしれませんが。もしかしたならば、正面を守るための兵士が足りなくなる恐れが……」

「この数の重装騎兵が足りなくなることなどあるか。いや、それに、もし、本当にそんなことが起こったとしても、歩兵が到着すればすべて解決する」

「でも、作戦の決定を歩兵の到着まで延期する余裕は私たちにはない。そういうことですね？」

「そういうことだ」

「では、そのように致します」

アレックスはその場を離れて敵の側撃に対抗する兵力を集め始めた。ジャクナ王はその場に残って、馬の上で苛々しながら歯ぎしりしていた。

正面前線の戦況はほとんど変わらず。一方、側面での戦闘はいつの間にか劣勢。なんでこんなことになった。おれは別に相手を舐めていたわけじゃない。敵の騎兵が逃げだしたのを知った時、シャンティがそれを使うのであろうことも瞬時に理解したし、正面での戦闘も一時的には相手を瓦解させることができた。それなのに……なぜ。

ジャクナ王はちらりと後方を振り向いた。置いてきた歩兵たちが追いつく気配は全くない。まさか、すでにやられているのでは……とそんな考えが頭をよぎる。ジャクナ王は頭をぶんぶんと横に振ってネガティブな思考を振るい飛ばした。

それよりもこれからのことを……。これから……。正面の戦闘はおそらくこのままやってもどうにもならないだろう。ならば、他からの攻撃で活路を見出さねばならん。短期決戦になるであろうと思っていたから、迂回作戦を取らなかつたが……。まあ、今から迂回作戦を試みても、大丈夫だろう。側面の攻撃を打ち破ることができたら時間は無制限にあることになるんだから。

ジャクナ王はとりあえず、側面の戦線が動くのを待つことにした。正面前線はやはり硬直している。ジャクナ王の重騎兵軍団は何度

も突撃を繰り返すが、シャンティの槍歩兵たちの盾の壁に突撃を無効化されると、彼らは剣歩兵たちの餌食になるほかない。

勇猛な何人かは盾の壁を突破するが、そこから先が続かない。盾の壁を突破しても、その先では、盾の壁を作る槍歩兵同様の屈強な兵士たちが群れをなしているからだ。

実際の所、ジャクナ王は負けることを考えていなかった。だから、必死になって考えることもなかったし、一つの打開策が思いつけばそれ以上のことを考えもしなかった。そして、彼がこの時用意していた打開策は、重騎兵での迂回であり、それはシャンティの行った側面からの攻撃を打破せねばとすることはできない作戦だった。

ところが、シャンティの送り込んだ槍歩兵たちは、この時すでに堅固な隊伍を組んでジャクナ王たちを包囲し始めていた。

側面から攻めてくる槍歩兵を打倒するべく送り込まれたジャクナ王の重装騎兵は、闇の中にうごめく影を見つけると一直線にそちらの方に向かった。彼らのもった戦術は正面突破であった。正面突破後、反転して挟撃。彼らは彼^{ひが}我の戦力差を比べ、自分たちの方が強いと知るや、このような単純な戦術でも必ず成功するであろうと考えたらしかった。

重装騎兵たちは二列横隊に並ぶ槍歩兵たちに向かって馬を走らせると、そのまま馬に突進させて彼らの一列目を突破した。突破先で彼らは手綱を操って馬を反転させようとする。

「ははは、ははは、突破は成功だ。なんだ、簡単じゃねえか」重装騎兵が叫んだ。「おい、早く……」

来い。と仲間たちに言おうとした瞬間、彼の首は空中にスライドして、闇の中に消えた。彼の後を追って馬を走らせていた重装騎兵たちは、何が起こったかわからなかった。突撃をかけていた者のうち半分は途中で馬を止めた。突撃を続行していた重装騎兵は後ろを振り向きながら「馬鹿、そんなところで止まってたら敵の標的になるだけだぞ」と叫んだ。

槍歩兵たちはほくそ笑む。どちらでも同じさ、と。

彼らは堅固な密集隊形を崩し、隙間を開けると、突撃を続行する重装騎兵を難なく通した。重装騎兵が通り過ぎると、再度密集隊形を取り、突撃を中止した重装騎兵に襲いかかった。重装騎兵たちの叫び声がこだまし、まだ側面前線に到達していない重装騎兵たちの不安をあおる。

槍歩兵たちを突破した者はどうなったのか。彼らは剣歩兵隊の十歩後ろに構えていた別の槍歩兵や、前後の槍歩兵の間に走っていたサウルス騎兵たちに首を刎ねられたのであった。

シャンティは五千のサウルス騎兵の背に同じく五千の槍歩兵、剣歩兵を乗せていた。彼らはサウルス騎兵と共に戦場を逃げ出し、ある程度逃げたところでターンして大きく迂回しながらジャクナ王軍の側面に迫った。振り分けは敵右翼方向に二千五百。敵左翼方向に二千五百でちょうど半分ずつである。

この時点でシャンティの派遣した槍歩兵や剣歩兵、サウルスとカバルスの両騎兵たちはすでにジャクナ王軍を包囲していたといってもいい状態だった。彼らはジャクナ王の送ってきた殲滅部隊を撃破すると、包囲をより強固なものとするために前進を始めた。

密集隊形は相手に向かって進むごとにその堅固さを増した。もはやばれたとしても何の問題もなかった。彼らは一歩一歩、足音を高く鳴らし、敵軍の中心にいるジャクナ王に向かって歩いた。

側面に送られた反乱軍別働隊を倒すのを諦めた重装騎兵たちはジャクナ王の所に逃げ帰った。彼らはジャクナ王が激怒するのを承知で今回あったことを正直に告白した。

ジャクナ王はやはり激怒した。王は逃げてきた騎兵の馬を突き殺し、次に彼ら自身を突き殺そうと槍を振り上げたが、アレックスがそれを制止したので、何とかその場は収まった。

「それよりも、この先どうなさるおつもりですか？」とアレックスがジャクナ王に問いかけた。「この状況を打開する策がありです

か？ もしないなら……」

「逃げてどうなると言うのだ」ジャクナ王は彼を睨みつける。アレックスは自分が言おうとしたことを先読みされて、ややたじろぐ。

「逃げたら、シャンティを討てない。ここで奴を討てないのなら、おそらくこの先、おれたちに逆転のチャンスはない」

「まだないと決まったわけではありません。もしかしたら、シャンティは北部でのイムサ国との戦闘で戦死するかもしれませんが。そうしたら、北部と東部はおそらく反乱軍どころではありません。その際に我らはジャーニイを討ち、敵の求心力・正当性を打ち砕いた後に南部を鎮定し、次に西部、次に東部と北部を取れば……」

「お前、本当にそんなことができると思っっているのか？」

「難しいですが、おそらくできるでしょう。我らの將軍ギャロップは、未だ、平野での戦闘では敗北していませんので。戦術単位の明瞭な敗北は、してはいけないのだから」

「そんなものは当てにならない！」ジャクナ王は震えながら叫びをあげた。「ギャロップは、もう死んだのだから！」

「……なに？」アレックスは自分の耳を疑った。彼だけではない。

この会話を聞いていた者たち、偶然ジャクナ王の声が聞こえた者たちは、一斉に息を呑んだ。まるで、時間が止まったように、彼らは身動きできずに、ただ耳だけを澄ましていた。なんだった？ ギャロップは死んだって？「いったい……どういう意味ですか？」

「……」ジャクナ王はしまった、というような顔をして、自分の口を覆い、右を見て侍従と目があい、左を見て重装騎兵と目があい、最後に正面を見て、アレックスと目が合うと、彼は観念したように口を開いた。「奴は、死んだ。すでに……」

「なぜ？」

アレックスは簡潔に聞いた。だした。

「おれが……殺した。奴は、おれの妻を奪って逃げようとしたから」ジャクナ王は懇願するように、目に涙をいっぱい貯めながら周りの人々を見た。おれは悪くない、しょうがなかったんだ、と彼はその

全身で表現する。「奴をあの時に殺さねば、きっと奴はシャンティの……」

「……」アレックスは自分がジャクナ王に植え付けたギャロップへの猜疑心を思い出す。まさか、こんなに早い形で実を結ぶとは思ってもしなかったのだ。たとえ、どれだけ王が將軍への不信感を募らせようと、この騒動の最中は何の影響も与えないだろうと踏んでいたのだ。アレックスはジャクナへの嫌悪、自分への嫌悪からくる皺を顔中に作りながら言った。「いつ殺したのですか」

「……昨日の夜というか……今日の……朝というか」

ジャクナ王は心細さを感じながら呟いた。

「なぜ、今になるまで言わなかったのですか」

「周りの者たちに影響が出るから……」

アレックスは思い切り手を握りしめた。手に激痛が走り、爪が食い込んで、そこから血がしたたり落ちるようになっても彼は握力を強め続けていた。アレックスはジャクナ王とぶん殴るつもりでその拳を固めたのだが、なぜかそれで目の前の肩くすを殴りつける気も起きないまま、彼はジャクナ王に命令するように言った。

「退却だ。それしかない」

アレックスはシャンティによって完全に包囲が完成する前に逃げることを選択した。話を聞いていた周りの侍従や隊長格の兵士たちもその言葉を受け入れ、すぐに退却の準備が始められた。

前線の重装騎兵たちは後方が何やら騒がしくなってきたのを感じると、伝令兵を送って、事情を探った。伝令兵は後方に控えていた重装騎兵たちに「何事が起こったのか」と尋ねたが、彼ら是要領を得ない返事しか返さなかった。その光景を目の端でとらえたアレックスはそこへ歩いていき、伝令兵にこう言った。

「我々は退却する。王を逃がすためにな。お前たちはそのまましがりとなりて、敵との交戦を続け、我々を逃がす手助けをするのだ」
「退却？ な、なぜですか？」

「それを聞いてどうするつもりだ？ お前に何の利益がある？ 私

には？ お前は私に言われたことをやればいいのだ。それが兵士だろ？」アレックスが厳しい口調でそう言うと、伝令兵は放心したような表情で彼を見つめ続けていた。「何をしている、早く行け！」
「……は、はい」

彼は力なく返事をして元いたところに戻って行った。

アレックスは鼻をふんと鳴らしてからジャクナ王の所に向かった。ジャクナ王は心が燃え尽きた様にうなだれ、ふぜん 慚然としていた。アレックスは彼にも聞こえる様な音で舌打ちをした後にジャクナ王に命じた。

「あなたの近衛兵はすでに準備ができていますので、すぐ逃げなさい」

ジャクナ王は周りのいた近衛兵たちを見まわしてから、力なく頷いた。アレックスは掌でジャクナ王の馬を叩く。ジャクナ王の馬はそろそろと動き出した。アレックスは彼の近衛兵団に「後は頼みましたよ」と言っただけで去った。

さて、私も逃げねばならないが……。と彼は歩きながら考えていた。どのタイミングで逃げるのが一番良いか。

アレックスは自陣を見た。すでにほとんどの人々が退却を開始していて、自陣はすごい勢いで縮小していた。逃げる者は重装騎兵ばかりだから、途中でぶつかり合っただけで、ドミノ倒しのようになってしまう者たちもいた。彼らは短く文句を言いあつた後は、すぐに体勢を立て直して退却を再開した。

アレックスは少しの間そこにとどまり、王都の方面に少し目を凝らした後に呟いた。

「そろそろ行くか」

アレックスは退却を開始した。

彼は未だに自軍の歩兵が到着していないことから考えて、後方にはすでに敵が待ちかえっているのだと予想していた。彼が退却する際に様子を伺ってみれば、確かに反乱軍兵が待ち構えていたが、それは大軍で逃げるこちらには全く歯が立たないほどの少数で、彼らは

一、二度攻撃するとすぐに逃げ出していた。

数分ほど歩いた後、アレックスは自分の騎馬の足元に大量の人の死体があるのに気が付いた。それは、自分たちについてこられなかった歩兵たちの死体であった。歩兵の死体は地面を覆い尽くすほどの量が、長く長く続いていった。

この量の歩兵を倒したのだから、シャンティは大量の兵士が送ったはずだが……それなのに、その姿は見当たらない。じゃあ？ アレックスは嫌な予感を感じながらも馬を走らせ続けた。

彼の予感は当たっていない。シャンティは前述のとおり、逃げるジャクナ王たちを倒すための兵士は送っていない。王都から出撃してきて、重装騎兵団に辿り着く前に死んでしまった歩兵たち。彼らはカバルス騎兵によって撃滅されたのである。カバルス騎兵にしてみれば、息切れして力も出ず、隊伍も組んでいない……そんな歩兵を倒すのなど容易いことだった。

必死になって逃げるジャクナ王一行が死体の川を抜けると、遠くにぼつりと小さな光が見え始めた。「王都の光だ」と誰かが叫んだ。アレックスはちらりと後ろと振り向いて、敵はついてきていないことを知ると、ほっと息を吐いた。ここまでくれば安心だ、と全員が漏れなく思った。

両手の指ではもちろん数えきれない重装騎兵の大軍が、敗残兵であるのに高らかにダカツ、ダカツ、ダカツ、と足音を鳴らしながら走る。彼らは王都が、自分が出発した時の姿のままだと疑うことなく思っている。

大軍は王都の正門の前に辿り着く。城門は締め切られており、中はひっそりとしていた。「おい、帰ってきたぞ。開けてくれ」

と誰かが言った。すると市城壁の上から一人の兵士が顔を出した。「おい、おい。帰ってきたぞ」重装騎兵がそう言うのと市城壁の上の兵士は頭を引っ込めた。そして、次に彼が顔を出した時、その横には数十二の弓兵がいて、彼らは矢をつがえ、照準を下の重装騎兵に定めて、弦を引き絞っていた。

重装騎兵たちは驚きながら馬から降りて、馬の下に隠れた。隠れるとほぼ同時に、頭上からは矢が次々に撃ちこまれた。矢除けの屋根にされた馬は自分の背中に矢が突き刺さると、痛みを驚いて足をバタバタとさせる。下に隠れていた者はそのせいで骨折などの重傷を負ったり、打ち所が悪くて絶命した者もいた。

「どういうことだ。どうして……」とジャクナ王が馬の下で、真っ赤な髪をくしゃくしゃと掻きむしりながら叫んだ。彼はわけのわからない言葉で呻いて、地面を拳で何度も叩き、最後には嗚咽が交じった泣き声を漏らし始めた。彼の醜い泣き声を重装騎兵たちは暗い気持ちで聞いていた。彼らはわかっていた。ジャクナ王の命がものすごい勢いで死に近づいていることを。ジャクナ王がそれに耐え切れなくなっていることを。彼は子供のように呟いた。「助けて……誰か……」

アレックスは冷静な目で彼の醜態を見ていた。ふと、思つて馬の下から這い出てみると、頭上からの矢の攻撃が収まっている。彼は立ち上がって辺りを見渡した。

ダ、ダ、ダ、ダと足音が聞こえた。アレックスは音のする方を探して、その方向が後ろであることに気が付いた。ダ、ダ、ダ、ダ。これは、誰かの死が近づいてくる足音だ。と彼は思った。それとも……私のそれも交じっているのだろうか。こんな風に、心の安静を保っているのはおかしいことなのだろうか。

「反乱軍だ」

誰かが、明らかな涙声で叫んだ。兵士たちは馬の下から出てきて、後方を臨んだ。ジャクナ王はビクツとした後、そのまま両手を組み合わせ、祈るような格好で何かを待ち続けた。

その時、ジャクナ王は自分の服をグイッと誰かが引っ張っているのに気が付いた。初めは馬の脚が引っかかったなどと思つていたが、そうではない。彼は何が自分の服を引っ張っているのかと振り向くと、そこには苦笑いする侍従の姿があった。

「何をしている？」

とジャクナ王は恐る恐る尋ねた。侍従は黙って彼を馬の下から引きずり出し、彼の服を握りしめたまま、周りの兵士たちに向かって叫ぶ。

「こいつを、こいつを、シャンティ様の前に突き出せばどうにかなるかもしれないぞ！」

その言葉を聞いたジャクナ王は自分の中に怒りが込み上げてきたのを感じた。が、周りの兵士たちがその従者の言葉を聞いて「そうだ、その手があった」と言う風に歓声を上げたのを見て、彼の怒りの感情は急速に収まった。

彼は地面に尻をずりずり擦りながら大男に引つ張られ、途中で唾を吐きかけられたりしながら、軍勢の最後尾に突き出された。

ジャクナ王は前を見た。

そこには、高らかに足音を鳴らせながら歩いてくる歩兵、馬の上で戦勝者の誉れを感じながら胸を張る騎兵、そして、一等巨大な、しかも角のついた白馬にまたがって、怒りに満ち溢れた真っ赤な目をジャクナ王に向けている、シャンティの姿があった。

「シャンティ様、ばんざーい」

とジャクナ王の後ろの重装騎兵隊が諸手を上げてシャンティを迎え入れる。

シャンティは途中で大兵団を止め、数人の近衛兵と共にジャクナ王のすぐ目の前にやってきた。ジャクナ王は自分の体が上下左右にぶるぶる震えているのを感じながら、シャンティの前で両手両膝両足を地面につき、こうべを垂れた。

「許してください」彼は目から熱い涙をこぼしながら言った。「シャンティ様」

「兄上」シャンティの顔はジャクナ王からは見えなかった。けれど、明らかに怒っているのはわかった。それくらいに鋭い声だった。彼は訊いた。「ギャロップは、そのように命を乞いましたか？」

ジャクナ王ははっとして、顔を上げた。

「なんで、それを……」

「兄上」「シヤンティは自分の中で気持ちの悪い物体がせりあがって
くるのを感じながら、宣告した。」「だめだ」
> i 3 3 5 1 5 6 | 4 0 5 7 <

54 逆鱗作戦 後篇（彼は命を乞うたか）（後書き）

結局が薬局、シャンティがやった事は今までの総まとめみたいなもん。

敵の決勝点を王都と捉え、さらに自軍の主戦力をジャーニイらが率いていた退却軍としたわけです。

さて、決勝点たる王都はすでに内部に反乱組織を抱えているわけですが、その内部反乱組織だけの力ではどうしようもない。中にいる兵士たちをいったん外におびき出し、なおかつ、外から戦争に長けた人々を呼び込まなければ王都の制圧は難しい。

つまり、反乱軍は王都内の戦力を外に出さなければならぬ。

しかし、反乱軍が外で「出てこーい」と言っても出てくるはずはない。どうにかして「出て行っても大丈夫だぞっ」と言う状況を作らないといけない。さらに、王都から出て行くことに対して利益を^{インセンティブ}抱くような状況を作らないといけない。

「出て行っても大丈夫」と思わせる要素は反乱軍主戦力の退却で、それをさらに積極的にさせたのはシャンティ存在。

ジャクナ王の現状から考えると、城から出たの戦い・決戦は避けるべきだったが、と言って、このまま籠城戦をしていても勝てる見込みはなかった。

だから、ジャクナ王がこの機会に賭けたのはある意味で必然だった。

さらに、シャンティの率いる軍は退却途中の軍隊であり、それを襲うのならば自軍の損害もあまり大きくならないと考えた。そして、もし相手の大将であるシャンティを捕えることができれば一気に北部と東部は士気を失い、後は南部と東部を相手取ればいいことになる。そうなれば事態はがらりと変わる。

が、忘れちゃいけない王都のことを。

ジャクナ王が主戦力を連れ出せば城は手薄になってしまう。でも

敵が離れたところにいることを考えると、王都周辺に攻城兵器を持った敵兵がイキナリ出現することは少し考えにくい。

もし敵がやってくるならば、それは機動力の高い騎兵である可能性の方が高いだろう。が、攻城兵器が無いならば城が落とされることはまずないと言える。で、王都にやってきたジャーニイの軍を、ジャクナ王の軍と王都で挟み込みこみ（ジャクナ王は内部反乱組織の事を知らない）、ジャーニイ・シャンティの両大将を討ちとることによって内乱を終わらせる……と言うのが考えうる限りの最高の結果です。まあ、ありえんだろうとは思ってたんでしょうけど。

問題はその騎兵がシャンティと交戦中のジャクナ軍に向かってくること。

その場合は王都からの増援とジャクナ王の率いる軍での挟撃が考えられたが、それもシャンティを素早く倒しておかなければ難しく、逆に挟撃される結果に陥るかもしれない。

ここでギャンブル性が発生するが、それでもジリ貧の戦争を回避するためには打って出る方が得だとジャクナ王には思えた。

また、彼はシャンティにそれほど脅威を感じておらず、シャンティとジャーニイの挟撃があるにしても、それが始まる前にシャンティを討ち取れるだろうと思っていた。討ち取った後はジャーニイの騎兵との戦闘になるが、相手も騎兵だけの戦力ならばそれほど数は多くないだろうし、後ろには王都があったので連続した戦闘も何とかこなせると考えていた。

つまりは、連続戦闘になっても、基本的には「大を持って小に当たる」を実践できるし、それ以上の優位を持つこともできる、と考えていたわけです。追い詰められた人つてのは総じて楽観主義者になるね。

実際、ジャクナ王にとって戦闘に勝つ・負ける云々よりは、シャンティに逃げられてしまふとか、やってきた騎兵の中にジャーニイがいる・いないとかのほうが賭けだった。

どちらも討てないとなったら、今回の出撃によって受ける兵の損

害はほとんど無駄骨だから。

そう言うわけで、シャンティがジャクナ王の軍を迎え撃つ姿勢を見せた時、「もしかして罨じゃないか？」ということを感じる前に、「やった、敵を討てるかもしれん」と言う気持ちの方が先行してしまつた。

しかし、決勝点である王都への主戦力の投入が行われ、それが内部反乱組織の手引きによって速やかに遂行されるならば、シャンティは別に戦わなくてもいいのではないか。

それはカバルスでの夜襲の時と同じで、迎え撃つた方が自軍の損害が少ないと踏んだんですな。

んでも、カバルスでの夜襲の際はギャロップやジャーニーがすぐに救援に駆けつける事がほとんどわかっていた。

対して、今回はそれもあまり期待できない。なぜなら、十分な戦力によって王都を占領しておくことが重要だから。

が、前回は敵兵を倒すことが重要ではなかったように、今回も敵兵を倒すことはそれほど重要ではなかった。敵を王都まで押し返せば、王都占拠の事実によって敵軍の士気を削ぐことができるからですな。

なので、敵を追い払うことに主眼を置いたのであるけれど、それがつまるところの包囲作戦ですわ。本来は敵を殲滅するための作戦だけど、包囲作戦の効果を知っている敵ならば、相手がそれをやると分かっているればそれが完成する前に退却すること（もしくは、できるならば敵を倒すこと）を選ぶはず。

シャンティはある意味で兄王ジャクナの戦争のセンスを信じており、ジャクナの方もそれに応えた形になったわけだ。

んで、ジャクナ王の軍は見事に押し返され、シャンティの軍も退却を続けるよりかは消耗を少なくできて、さらには、王都にて敵の士気を砕くことにも成功したわけです。

まあ、ぶっちゃけますと、ジャクナ王の読み違いに助けられた感

もあります。漫画とかでよくある「敵がいきなり弱くなる現象」ですな。

それでもシャンティの生存と軍の消耗の少なさ、それによる敵の士気の瓦解はほぼ作戦のおかげ。

また、この逆鱗作戦は、ほとんどギャロップの考えた作戦の寄せ集めで、作中での將軍の発言とか作戦とかを繋ぎ合せばこれが組みあがる様になってるかも。……いや、組みあがらん、たぶん。うーむ、ちよつと足りんかなあ。

まあ、そこはシャンティが、なんとかしてくれたんでしょうぜ。

で、次の話ですが、この戦闘単体において勝敗を分けた要因は何だったのか。

戦闘を見ればわかる通り、シャンティが勝つて、ジャクナ王が負けたわけですが、それを決めた要因は「有機的な軍」であるかどうかです。

シャンティの軍には堅固な槍歩兵（重装歩兵）、機動力・攻撃力共に高いカバルス騎兵、小回りが利くし攻撃力もあるカンプトケフアレの軽装歩兵部隊がいました。

が、ジャクナ王の軍には重装騎兵しかいなかった（歩兵に関する部隊は置いてきた）。それでは刻々と移り変わる状況の中で柔軟な対処ができない。というか、できることが限られてしまう。

戦う前から負けていた……と言っただけでもありませんが、戦力差を十分に埋めるほどの差が両軍のあいだには初めからあったわけですね。

とまあ、長々と書いてきましたけど、おかしな点やら矛盾はいろいろあると思います。

でも、一つの所を直せばそのほかにも直さなきゃ、みたいなことが起こり得るので、間違いがあっても直せん場合が多いと思います。

それは先んじて「すまんのぉ……すまんのぉ……」と謝っておきま
す。それに時間もないし 本音。

それにしても、やっと終わりが見えてきた。

55・独りでも

> i35219—4057<

シャンティたちがジャクナ王を降伏させるのが王都内にあまねく知れ渡ると、捕縛されていた王国兵士たちはがっくりとうなだれて負けを認めた。

すぐに城門は開かれ、シャンティたちは市民たちから歓呼をもつて受け入れられた。

王都の中にはすでにジャ・ニイと彼が率いたカバルス騎兵たちがいて、彼らもシャンティたちの後ろについて王都内を歩いた。市民たちは町のいたるところに明かりをつけ、彼らの上から花を降らせ、時には酒を浴びせかけた。ジャーニイは戦闘を歩くシャンティの横にやってきて、小さな声で尋ねた。

「ジャクナは？」

シャンティは溜息を吐いてから、興味なさそうに言った。

「一番後ろだ。捕縛してあるから逃げられない」

ジャクナ四世だけではない。彼と共に戦っていた者たちは、全員一時的に捕縛されている。

「あいつの処分はお前がするのか？」

「しない。ぼくはギャロップの所に行く」

「そうか。なら、おれがするぞ」シャンティがジャーニイの方を見ると、彼は笑うのを堪えられない、といった表情でシャンティを見ていた。「いいんだな？」

「勝手にしなよ」

シャンティがそう返すと、ジャーニイはシャンティの横から離れて後方に下がっていった。

反乱軍はメインストリートを歩いて、広場に着く。そこでジャーニイはシャンティの横にまたやってきて「ここで、ジャクナの処刑をする」と一言だけ言ってまた後方に下がっていった。シャンティ

は苛立ちながら彼の後ろ姿を見送った。

ジャーニイは広場でジャクナ処刑の由を伝えた後、反乱軍を一時的に解散させた。彼らは町の各地に散らばっていき、歓迎の食事や酒を施されながら騒ぎ始めた。

シャンティたちは王宮に向かっていった。ジャクナ四世の手紙によって、ギャロップの死体が王宮内にあることを知っていたからだ。

シャンティと共に行動していたフートスは、同じくシャンティと共に行動していたシェイバスに小声で話しかけた。

「おい、王子は大丈夫なのか？ 自棄になってないだろうな」

「見ればわかるだろう。自棄にはなってるさ」とシェイバスは馬の上から返した。「だが……ここから先、もっと自暴自棄になるかはわからない」

フートスはややこしそうに頭を掻いた。

シャンティたちが王宮に着くと、王宮の玄関ではジャクナ四世とリュキウスとウィス力が待っていた。リュキウスはシャンティの表情を見て、彼がどのような状態なのかをすぐに把握した。

「父上……」リュキウスはルルディファイロから降りるシャンティのそばに歩み寄りながら自分の生存報告をした。「ぼくは、この通り無事ですが……」

「そうか。よかった」

シャンティは笑みを作ってから、リュキウスの頭に手をポンと置いた。リュキウスはシャンティの作り笑いを見て物悲しい気持ちになりながらも、自分も笑みを返した。

「お疲れ様でした」リュキウスの後ろからジャクナ四世が言った。シャンティは、複雑な境遇の彼に対してなんと返していいかわからずに、少し戸惑った後、うんと頷いた。ジャクナ四世は自然な作り笑いを浮かべて、王宮内を指し示す。「將軍の遺体は王宮の中です。私が案内しましょう」

「うん、頼んだよ」

シャンティは、やはり彼は死んだのか、と感慨深げに頷いた。

王都のメインストリートにある広場で処刑用のステージが組み始められていた。大工たちは嬉しそうな笑みを浮かべ、市民たちは彼らにパンを配り、人々は賑々しくステージを作っている。それが処刑用のステージを作っているのだということは、一目ではわからない光景だった。

ジャーニイは広場の中央に立って、ステージ建設の指揮をきびきびと執っていた。そんな彼のもとに、近衛兵がアレックスを連れてやってきた。

「ジャーニイ様、アレックスを連れてきました」

近衛兵はそう言っ、アレックスを前に突き出した。

「わかった。少しこっちに連れてきてくれ」と言っ、ジャーニイはメインストリートから少し離れた路地の中に歩いていく。近衛兵は訝ることもなくアレックスをその路地に連れて行っ。「ありがとう、これでいい。お前は仕事に戻っ、構わない」

ジャーニイが言っ、近衛兵は短く返事をした後にどこかに走り去っ。ジャーニイは彼の姿が見えなくなると、捕縛されたアレックスに笑顔を寄せる。

「お前……なんで呼ばれたかわかるか？」

アレックスは自虐的な笑みを浮かべながら返した。

「まさか、お前の男娼になれとでも？」

「んなことじゃないさ」ジャーニイは彼の軽口に対して、笑みを崩さずに首を横に振る。「もっと不名誉なことだ」

「不名誉？」

「お前、望みはあるか？」

「己の栄達」アレックスは真面目な顔で相手に返した。で、眉を八の字にしながらも、口角を上げて言っ。「……それで？ 何をすればいい？」

「ジャクナ四世を暗殺しろ」ジャーニイは彼も耳元で呟いた。アレックスは顔を引いて、ジャーニイの顔をまじまじと見る。こいつは

何を言っているんだ、という顔だ。ジャーニイはにやにやしながら続ける。「先に言っておくが、お前が捕まったら、おれは助けられん。それでもいいならお前を離してやるう」

ジャーニイの望みが王位であるのは説明するまでもない。がこの状況で、彼が王位につくには邪魔なモノが二つあった。

一つは今回のことで大功を立てたジャクナ四世である。普通に考えれば自分の父親を殺した不届きものであるが、考えようによっては国民のために父殺しと言う汚名を被った英雄ともいえる。もし、彼がジャクナ王の次の王位を望めば、国民もそれに不満を抱かないだろう。

もう一つがシャンティである。シャンティはかねてから王位を継がないと言っているが、以前話した際に、もし誰かに託されたなら次ぐ意思はあると語っていた。今回の件に関しても、シャンティはアストローラーボンや東部の市民の意を汲んで反乱軍を立ち上げたのだ。だから、王都の市民たちから推挙されたならば、彼も王位につく可能性があった。

「……少し質問がある」アレックスは怪しみながらジャーニイに訊いた。それでもこの時には、すでにジャーニイの申し出を受けるつもりではあった。「お前はどこまで人事を操作できる？」

「おれが王になれば、なんでも思いのままだ」ジャーニイは腰から短刀を引き抜いて、彼に見せた。短刀の刃が篝火の光を反射していた。「どうする？ いや、聞くまでもないか」

「ああ、やるさ」アレックスは当然、と言うように頷いた。「だが、おれの顔は城中に知れ渡っているからな。そこいらへんはどうにかしてもらわないと……」

「自由になったとかの内容を書いた書状なら、いくらでも書いてやる。その代わり……わかつているな」

「わかつている。もし、失敗してもあんなのことを言いはしない」ジャーニイはよろしい、と頷いた後、彼を締め上げていた縄を切った。

シャンティたちは王宮の中を歩いていた。

まだ夜で、しかもさつきまであんなことをしていたので、回廊は嫌に暗かった。先頭に行くジャクナ四世やシェイバス、フートスたちが松明を持っていたが、それでも何となくシャンティは心細い感覚を覚えていた。

「ギャロップの……」とシャンティがジャクナ四世に質問する。「遺体はどこに？ まだユルシユ義姉様の部屋に？」

「はい。動かす暇はありませんでしたからね。ですが、さつきマスタングが一足早くに父親の所に向かったので、もしかしたら動かし
ているかもしれません」

「リュキウス、君は現場に？」

とシャンティが隣を歩いて息子に話しかける。

「いいえ」リュキウスは首を横に振った。「実際に現場にいたのは
従兄上あにっえだけです。私は話でしか聞いていなくて……」

「マスタングもかい？」

「はい。話だけでもかなり落ち込んでいました……」

リュキウスは悲しそうに言った。

「いやはや、すみません」とウイスカが自分自身に落胆しながら言
った。「私がこんなことを企てたばかりに……」

「いや、ウイスカは大功を立てた」シャンティが励ます様に、彼の
肩に手を置きながら言った。「君がこの作戦を立てていなければ、
未だにぼくたちは無意味な戦闘を繰り返していたかもしれないんだ
から」

「そう言っていただけと……ですが、私のせいでギャロップ将軍
が……」

ウイスカの言葉の中には、シャンティの友人の命を奪ってしまった
後悔とよりも、やはり彼自身の憧れであったギャロップ将軍を自
分の策で間接的に殺してしまったことへの失望の方が多分に含まれ
ているようにシャンティには感じられた。

悲しんでいるのはぼくだけじゃない。ウイスカも、マスタングも……北部に残っているフェミナだつてこの事実を知つてしまえば、きつと……。ああ、嫌になる。彼女に対して、言い訳であることは明瞭ともいえる言葉を考えている自分が嫌になる。どんな風にぼかして、修飾して伝えたとしても、この事実は彼女にとっては耐えられないものであることは確実なんだ。それならば、ぼくはその事実だけを伝えるべきなのだろうか。ほとんど……ぼくが殺したようなものだ……。だつてそうだ。ギャロップが兄上の所に行ったのだつて、ぼくが離反したからだし、ユルシュ義姉様を連れて逃げようとしたのだつて……。そう、その時の彼の脳裏にぼくの言葉が駆けずり回っていたはずなんだ。それとも、これはうぬぼれに過ぎないのだろうか。ぼくは真に彼のことを友だと思つていたけれども、彼は彼の言う通り、ぼくのことを友だなんて思つてはいなかったんだろうか。ぼくの言葉など心に響いてなかったのだろうか。ふん、どちらにせよ……ぼくには、救いはないということだ。

シャンティたちは王や高級の官人のみしか入ることのできない階層にのぼると、一直線に奥から三番目の部屋に向かった。そこがユルシュの部屋だからだ。部屋の前に到着した時、ジャクナ四世は「着きましたよ」と部屋の中にも聞こえる様な声で言った。で、閉まっていたドアの扉を開けてシャンティたちに、中に入るようと言うポーズをする。

中に入ろうとしたのはシャンティとウイスカとリュキウスだけだった。その他の者は、聖なる場所に自分のようなものが踏み入れてはならないと言うような面持ちで、当たり前のように、じつとその場に立ち尽くしていた。

三人は部屋の中に入った。まず目についたのは、両ひざをついて、呆然としていたマスタングの姿だった。次に目に入ったのが、彼の視線の先にあったのがギャロップとユルシュの遺体だった。

「マスタング」とリュキウスは呟きながら彼のもとに歩み寄り、片膝をついて彼の肩に手を置いた。リュキウスは、やりきれない思い

を抱きながら、自分の無力を呪うように下唇を噛んだ。「マスターグ。もう、部屋から出よう」

リキウスはマスターグの腕を引っ張って無理やりに立たせると、彼を部屋の外に連れて行った。

シャンティたちは部屋に残った。シャンティも、マスターグのように腑抜けになりながらギャロップとユルシユの遺体を見ていた。

ギャロップの顔は、うつすらと微笑んでいるように見えた。よく見てみれば、彼は自分の大きな手をユルシユの手の上に乗せていた。「何か……君らしくないね」シャンティはギャロップに向かって言った。「ぼくはてつきり、君みたいな戦争狂は、戦場で相手に敗北することを悔しがりながら苦渋の表情で死ぬのだと思っていたよ。

それがどうだい？ 君はそれとはまったくもって逆ともいえるこんな莊嚴な城の中で、愛する女性と手を繋ぎ、幸福に満ちた笑みで死んでいる。でも、それも確かに君らしいと言えば君らしいかもしれない。ユルシユ義姉様は君が戦争のほかには唯一愛したものだからね。その人と共に逝けるのは幸福なことかもしれない。けれども、許せないこともある。君が勝手に逝ってしまったことさ。この、慌ただしくて苦しく重い時代に、ぼくを置いて君だけ勝手に逝ってしまったことさ。ぼくは君と共に生きたいと思っていったんだ。いいや、変な風に受け止めないでくれ。ぼくはただ、この嵐のような時代、剣と憎悪が梅雨時の雨のように降りしきる世界を生きる苦しさを、君にも肩代わりしてもらいたかったただけなんだ。そうだよ。これはぼくのエゴさ、どうしようもないわがままさ。それでも、君となら、この世界を生きていけると思っていたんだ。君となら、艱難辛苦ものともせず、やっていけると思っていたんだ。ぼくはどうしようもなく才能も能力もない男だからね。誰かの助けを借りないと生きていけない。だから、もしかしたら、ぼくの心奥を覗けば、君との関係だって、打算的なものが含まれていたのかもしれない。それでも……ぼくは、ふん、君のことを、他に類を見ない特別な友達だと思っていたんだ。この世界でぼくをぼくと見てくれるのは、お

そらくエレを置いたら君しかいないだろう。君は無神経で、無責任で、無頼漢で、無愛想で、不躑で、不遜で、不真面目で、不器用な奴だけど、君のそれは美德さ。そこまで徹底してぼくから王族と言う身分を抜いてぼくに接してくれた人はいない。いつも、奇妙に距離のある人間関係……ぼくはそんなのに辟易していたんだ。だからやはり……ぼくは君を利用していたのかもしれない。自分を安定させるための道具として、使っていたのかもしれない。だから……君はもしかしたらぼくを恨んでいるかもしれないね。これを聞いて恨みだすかもしれないね。それでも、ぼくは君からの恨みをどうしようとは思わないよ。許されないのだということはすでに知っている。だからと言って、ぼく自身がその事実を甘んじて受け、何も悔いしないのはおかしいと言うのもわかっている。それでね、君には謝らなければならぬ。ごめん、ギャロップ。本当にごめん。ぼくはね、これからもこの窮屈で今にも窒息しそうな広い世界を生きていかなければならないのさ。ぼくは数々の恨みをほつぽり出し、自分を痛めつけながらも、この世界と共に歩いていかなければならぬ。それがぼくの使命なんだ。王族として生まれたぼくの……ね。だから、ぼくは君からの恨みを忘れることにするよ。ぼくはまた君を使うのさ。君を忘却することによって、自分の心を安定させると言うことに使うのさ。これくらいのずるは許してくれるね？ いいや、許しはないんだったね。ははは、それとも、ぼくが君を忘却することなど、君は何とも思わないのかもしいね。どちらにせよ、救いのないことだ。それでもいいさ。ぼくはこの心が潰れても、生きてくしかないからね。生きていくと決めたのだからね。まあ……君のいない世界は心底つまらないかもしれないけれど……」

言葉は、一言一句漏れなく、ウイスカの私書録に残されている。そして最後に、彼の考察が残されている。『シャンティ様は、もしかすると、「自分にはもう君がいなくても大丈夫だよ」ということを、ギャロップ将軍に伝えたかったのかもしれない。』と、こんな考察が。もちろん、この考察が真実なのかどうかはわからない。け

れども、もしそうなのだとしたら、シャンティは自分の安定のためにギャロップを忘却しようとしているのではなく、ギャロップの御霊を安心させるために、ここでもなお自分自身を苛めぬいているのだということが理解できる。

それで……シャンティは友への言葉を言いきると、ふいつと後ろを振り向いて歩きだした。シャンティの疲れ切ったような顔がウイスカには見えた。ウイスカにはそんな彼にかける言葉が出てこなかった。ウイスカはシャンティの後ろについて部屋を出た。

シャンティは廊下にいた者に中に二人の遺体を丁寧に火葬するように命じた後は、王宮の中にある自分の部屋に向かって歩いて行った。彼の後を追う者は誰もいなかった。

55・独りでも (後書き)

絵が下手すぎて泣けてくらあ。

あと、シャントイのセリフはもっと長くなる予定でした。でも、なぜか長くできなかつた。

生きてる時にお前ら話しすぎやねん。

56 王太子の審美眼

> i35278—4057<

広場に建てられたステージは夜明けの少し前に完成した。ジャクナ王はそのステージの上に連れて行かれ、誰からもよく見える位置で正座させられていた。市民たちは容赦なく彼に罵声を浴びせかけ、危害を加えることは禁止されているのに、刑罰を覚悟で石を投げる者までいた。

ジャーニイはにやにやしながらその光景を遠くから見ている。彼は広場の、近衛兵に囲まれた一角で椅子に座って、優雅に葡萄酒を飲みながら待機していた。彼は朝日と共にジャクナ王の首を刎ねると明言していた。

その頃、熱気満ち溢れる広場から離れた王宮では、警備兵たちがジャクナ王の処刑を見られないことを悔しがりながらも職務を全うしていた。

「……おい、あれ」門番の一人が闇の向こうから近寄ってくるシルエットを指差しながら、隣の髭もじゃ門番に声をかけた。立つたまま眠りかけていた髭もじゃ門番ははつと眼をさまし、涎を拭いた後にそちらの方を見た。「あいつ、どっかで見たことないか？」

「んん？」髭もじゃの門番は目を細める。「あれは……確か、アレックス様じゃないか？」

「何？ アレックス？ でも、あいつはジャクナ王の側近だから、今頃、広場の近くで締め上げられてるんじゃないのか？」

「そんなことおれに言われても……」
とにかく門番たちはそのシルエットが近づいてくるのを待つことにした。

「やあ、ご苦労」とシルエットは闇から顔を出しながら言った。やはり、そのシルエットはカマラ・アレックスその人だった。「不審者はいたか？」

「いや……その……」門番たちは顔を見合わせた。自分はもしかして亡霊を見ているのかもしれないなど思いながらも、とりあえず彼にいつも通りの対応することにした。「何の御用でしょうか？」アレックスはにやにやしながら言う。

「その前に、なぜ私が自由なのかを聞かなくていいのか？」

「あ、ああ……そうですね。いったいなぜ？ あなたはジャクナ王の側近のはずなのに……」

「実は、反乱軍とは前々から繋がっていてな。つまり私も今回の件に一口噛んでいたと言うわけだ」彼はそう言いながら、それなりに有名な人間の署名が入った書簡を見せた。門番たちはその名前に覚えはなかったが、彼の態度が堂々としていたのでその書簡を本物だと思った。アレックスは続けて言う。「少し用事を頼まれてな。中に入ってもいいだろうか？」

「はい。もちろんです」

門番たちは左右に寄って道を開け、アレックスを王宮内に通した。

朝日が昇り始め、シャンティの部屋には鈍い陽光が刺し始めていた。うつすらと空を覆う雲の隙間から洩れる朝日の陽光を、シャンティは背中に受けながらベッドに座り込んでいた。彼の眼は床の絨毯うたんの模様をつつと追っている。

町の中から聞こえてくる大きな声がシャンティの耳に入った。兄上の処刑が始まったんだろうかと、そんなことを考えながら彼は頭を抱え込んだ。本当に殺さなければならぬのだろうか。この期に及んでそんな考えが頭の中に浮かぶ。

いや、いやいやと彼は首を振る。そんなことよりも、他に考えなければならぬことがたくさんある。ぼくはこれから軍を率いて北部に帰り、ネオットス將軍率いるイムサ国と戦わねばならないんだ。いつ帰ろうか……明日？ 今日の昼でもいい。いや、処刑が終わればすぐでもいい。処刑が終わる前でもいいんだ！ とにかく、この王都を離れたい。離れて、ここで起こった全てをもう忘れ去ってし

まいたい。北部に帰り、イムサ国をやつつけたら、エレヤリュキウス、レオネラ、バルシネ、ヴァシリカ、それにウイスカやシェイバスたち、みんなとのんびり過ごしたい。できることならば隠居したいけれど、そんなことは無理だろう。ぼくは王族で、つまりは誰よりも強い痛みを受けることを命じられた一族なのだから。この国のためにできることをせねばならない。ぼくは彼のように……死んでしまったわけではないのだから。

市外から割れんばかりの大歓声が聞こえてきて、シャンティの部屋の窓をビリビリと振動させた。歓声のわぁーだとか、太鼓の音のドンドンだとか、笛のヒューだとか、足音のダカダカだとかの音が次々にシャンティの耳に入ってくる。大きな音の集まりは空気を揺らして、王都中に広がる。

シャンティは煩わしそうに耳を塞いだ。

兄に最後の鉄槌を加えたのは自分であるも同然なのに、彼はこの歓声と兄の死を直接的に結ぶことができず、なぜ兄上が死んだのにあんなに歓声を上げているんだ、と胸を気持ち悪くしながら思っていた。

ジャーニイは広場のステージの上で、波のようにざわつく観衆たちを見渡していた。彼は達成感を胸いっぱいを感じながら、少し息切れたように、ふうふうと鼻で荒く息を吸ったり出したりしていた。頬に何かが垂れたのを感じて彼は袖でそれを拭いた。それは額から流れた汗だった。ジャーニイはその汗にさわやかさと解放感を感じた。彼は続いてジャクナ王の首を刎ね飛ばした剣を掲げて、それを観衆たちに見せびらかす。剣に付いたジャクナ王の血に観衆が沸く。

ジャーニイは声を上げた。

「我々はやつとあのジャクナ増税王を殺すことができた。だが、これは反乱軍だけの力ではできなかつたことだ。これは君たち、王都内部反乱組織がなければなしえないことだった。この功は君たちの

ものだ。そして、この国もやはり君たちのものだ」

歓声が再度上がった。人々は拳を掲げてジャーニイの名前を叫んだ。「ジャーニイ！ ジャーニイ！」子供を肩車している者もいた。よぼよぼの老人も歓喜に沸いていた。男も女も関係なしに、誰もが喜びを享受していた。すると、どこからともなくある言葉が聞こえてきた。「解放王！ 解放王！」誰が言ったのかはわからないが、その言葉は瞬く間に広がった。「ジャーニイ解放王！ ジャーニイ解放王！」

学のない庶民は面白いものだ、とジャーニイはにやにやしなから思う。王と言う言葉を付ければ、それが相手に対して最上級の褒め言葉になると思っっているんだから。それでも……解放王か。ははは、悪くないな。

「シャントイ様もだ！」これも誰かが言った。人々は口々に叫ぶ。「四世様は父殺しと言う苦渋を呑んで私たちに尽くしてくださった心強き人、心聖なる人だ。心聖王だ！」「四世心聖王！ 四世心聖王！」

この言葉も瞬く間に広がってしまう。

ジャーニイはこの光景を、表面的には微笑みながら見ていた。

市民たちの掛け合いはまだ続く。「シャントイ様は？」と女の甲高い声が誰にともなく問いかける。「シャントイ様は英雄だ！」「英雄王！」「シャントイ英雄王！ シャントイ英雄王！」

英雄王！ 英雄王！ と広場に声が響く。重なり合う声は辺りの窓ガラスをビリビリと揺らした。そんな中。

「英雄王ねえ」ジャーニイは誰にも聞こえないような小さな声で気分を害したようで、棘のある口調で呟く。「あいつには似合わない名前だ。それに……」ジャーニイはステージの上に落ちたジャクナ三世の頭を拾い上げながら呟く。「王は二人も三人もいらぬ。おれ一人で十分だ」

ジャーニイはステージに下にいた者に首を渡すと、王宮に向かって歩き始めた。それを見た近衛兵たちはすぐに彼の周りを取り囲む。

彼らは広場に集まった人ごみを掻き分けながら進んだ。

ジャーニイはにこやかに手を振りながらも、心の内を嫉妬の炎で燃やしていた。ついに彼は、血の繋がった弟を手にかけてようとしていた。

「終わったみたいだな」

ジャクナ四世は王宮の城壁の上から街中を見下ろしながら言った。彼の周りには近衛兵たちが立ちすくんでいた。

「これで……本当によかつたんですか？」

とおどおどしながら訊いたのは近衛隊長ゲオネスだった。

ジャクナ王率いる王国軍が王都から出た後、王都市内ではリュキウス、マスタングらの王都内部反乱が始まった。リュキウスは市民を率いて密かに市城壁の塔や東門を攻め落とすと、ジャクナ四世の所に向かった。その時には、西側のマスタングらも順調に西門などを攻め落としていた。

北門に陣取っていた近衛兵士達は、死んだはずのリュキウスがジャクナ四世のもとに現れたのを見て驚いた。が、遠くからカバルス騎兵団が迫ってきたのを聞いてさらに驚き、終いには恐怖で腰を抜かせてしまった。

ジャクナ四世は短い言葉で近衛兵団を説得すると、そのまま正門を開かせておき、ジャーニイとويس力率いるカバルス騎兵団を王都内に入れた。彼らは歓呼を持って迎えられ、同時に、王都市内が完全に反乱軍に制圧された。

王宮に留まっていた官人や兵士たちはジャーニイとジャクナ四世が反乱軍を率いて王宮に向かっているのを聞くと、王宮の玄関に集まり、正座して彼らを待っていた。彼らが目の前に現れるとこうべを垂れて一切抵抗しないことを明言した。

王都の内部反乱はリュキウスが危惧していたよりも被害が少なかった。市城壁ではそれなりの負傷者が出たが、王宮に向かった際には一人として傷つきもしなかった。

「いまを生きたいなら、そして、この先も無事に生きたなら、反乱軍を受け入れる」

このような言葉によって説得されたジャクナ四世の近衛兵団はシヤンテイが王都に帰ってきた後もそのままジャクナ四世に呆然と付き従った。中にはいまだに何が起こったのかわからなそうな者もいるくらいだった。

「これで良いに決まってるさ」とジャクナ四世は当たり前のように返した。父親が死んだと言うのに、何とも思っていないようだった。「それよりも……君たちは疲れているだろうから、一時的に解散するかい？」

ジャクナ四世がそう質問すると、近衛兵たちは顔を見合わせた。見合わせただけで何も言い合わなかった。一刻も早くベッドの上に寝っ転がって今日起こったことを反芻したいのだろう、とジャクナ四世は彼らのそんな態度を見て思った。

「いえ」しかし、ゲオネスは首を横に振った。「我々の仕事は王子様を守ることですので」

「私はもう王太子ではないが？」

ジャクナ四世がからかうような口調で言った。正直な所、早く解散させたかったのである。私が一人になるのを、待っている者もいるみたいだしな。と彼は思う。

「すいません。我々の使命は、ジャクナ四世様を守ることですので……」

ゲオネスはかたくなに解散を拒んだ。

「まさか、このまま本格的に君たちを解散させるとでも思っているのかい」

とジャクナ四世は微笑みながら言った。実際に彼は時期が来たら、彼らを解散させるつもりではある。

「いいえ」ゲオネスは、瞳に使命感からくる鋭い光を灯しながら言った。「ジャクナ様、今は王都中が沸きかえり、皆は冷静な思考を保っていません。こんな時に一人になるのは危険です。酒に酔って

あなたを襲う輩も王宮内にいるかもしれない。ジャクナ王様の息子であるあなたを反乱軍の長の一人として認めない者もいるかもしれないのです。ジャクナ様、今が一番危険なのです。この混乱に乗じてあなたを殺そうと企む者もいるかもしれないのです」

「正論だな」正論は困るな、と彼は思った。ふむ、しかし、この男は思った以上に頭が回るようだ。このまま近衛兵に置いておくのも悪くないかもしれない。「頭が回るのは良いが……人の気持ちをもう一步踏み込んで考える能力も持っていてもらいたいな」

ジャクナ四世は寂しげな瞳をゲオネスに向ける。ゲオネスははつとして、頭を掻いた。そうだ、王太子様だつて、悲しくないわけはないんだ。なぜなら、自分の父親を殺す手伝いをしたのだから……だから、王太子様にだつて少しは一人になって考える時間が必要なのだ。ゲオネスは慌てながら言った。

「わ、わかりました。では……」

「もうここで解散してもらつて構わない。私はすぐに自分の部屋に戻るから」

「はい。それではそのように致します」ゲオネスは後ろにいる近衛兵たちの方を向いて命令した。「おい、解散だ。すぐに兵舎でも城壁でもいいから部屋に戻つて休め」

近衛兵たちは無気力に「へーい」と返事をしながら、だらだらと城壁を降り始めた。ゲオネスはちらりとジャクナ四世の方を見てから城壁の塔の中に入っていった。

さて、どういうタイミングで来るのか。それとも弓矢で攻撃してくるかな？ とジャクナ四世はにやにやしながら考えた。

しばらくジャクナ四世が城壁の上で風にあたっていると、アレックスが塔から姿を現した。ジャクナ四世はやっぱりな、と思いがながら彼を見た。ジャクナ四世は、彼が誰の命令で自分の所に来たかの検討をつけていた。

「あなたが城門を潜るところを見てましたよ。まあ、なにせ、ずっとここにいましたからね」ジャクナ四世はアレックスの険しい顔を

見ながら余裕の表情で言った。「どのように私を殺すおつもりで？」
「何のことですか」アレックスは真面目な調子に返した。「私はある方の命令であなた様を迎えに来ただけです。ついて来て頂けますね？」

「どこに行くのですかな？ 地獄でしょうか？」

ジャクナ四世はにやにやと言う。アレックスにしてみれば、奇妙なほどの余裕だった。

「とにかく御同行を」

アレックスは城壁から降りることを促す。

「わかりました」ジャクナ四世は城壁を降りることを了承した。「では行きましょう」

二人は城壁を降り、王宮の中に入った。ジャクナ四世はすぐにご自分で自分を殺すつもりなのかを理解した。ジャーニー叔父上の部屋だ。あそこならば、ジャーニー叔父上以外誰も入ってこないから、私を殺して放っておいて、後から遺体を人知れず回収すれば誰が犯人かもわからない。いや、私がこいつに暗殺されたことすらわからないかもしれない。だが……そんなことをして、もし失敗したらジャーニー叔父上が今回のことを企てたことが、すでに気づいている私だけではなく、他の者にもばれてしまうのではないか？

アレックスはジャクナ四世の予想通り、ジャーニーの部屋に入った。なるほど、そうか。と彼は思った。失敗した時は、別にジャーニー叔父上が犯人だとばれてもいいということだな。その時は自分が死ぬのなど決まりきっているし、こいつはジャーニー叔父上に特別な恩など抱いてみたいだし……。

アレックスはジャクナ四世を部屋の奥に入れると、ドアを閉めた。ジャクナ四世が見た彼の顔は汗の玉が浮いていて、そのくせ顔は青かった。ジャクナ四世は少し彼をからかってみたくなった。

「もし……ジャーニーから私に鞍替えしろと言ったらどうする？」

ジャクナ四世は静かに言った。「君にはジャーニーが提示した以上の地位や金を与えると言ったら……」

「……」アレックスは疑るような眼差しでジャクナ四世を見ていた。彼の手は懐の中に入れられている。その中に短刀が入っているということは、ジャクナ四世にも簡単に判断できた。「つまりは？」

「緊張で頭が回らないのかい？ 君を使ってジャーニイを告発するのだよ。おそらく、ジャーニイはシャンティ叔父上も公に発表できる何らかの理由をつけて殺すつもりだろう。私も死に、そしてシャンティ叔父上も死ねば、生き残った王族はジャーニイだけ。王になつてしまえば、シャンティ叔父上を殺したことなどなんとでもなる。王を裁けるものなどいないからね」

「おれを使ってジャーニイを追い詰めるのか。だが、その際に、ジャーニイがおれのことをほかの者に言うかもしれない」

「私にこのことを教えてくれた恩人として君を扱おう。そうすれば誰も君のことを疎んじないだろう。それにジャーニイのもとで生きるよりも自然に生活することができる。ジャーニイの謀反を伝えた英雄としてね」

「英雄……か」アレックスは心の中のもやもやが晴れるような感じを味わっていた。「ジャーニイのもとでこそ生きるよりも……そちらの方が断然……」

「気に入ってくれたかい？ じゃあ、少し質問をしていいかな？」

「質問？ なんだ？」

「今、このタイミングでジャーニイを捕えれば、シャンティ叔父上は助かるのかな？」

「ああ、まだ全然大丈夫だと思う」アレックスは頷いた。汗が床にぼたりと落ちる。「あいつはまだ王宮には帰ってないだろうからな」

「そうかい。それなら君に一つの頼みがある」

ジャクナ四世は人差し指をピンと立てる。

「頼み？」

「そう、頼みだ。それはだね」ジャクナ四世は彼に歩み寄る。アレックスはびくりと体を震わせ、懐から短刀を取り出そうとした。ジャクナ四世はその手を抑えて、静かに囁く。「このジャーニイの事

件のことを周りに公表するときは、君が私の所に来た時間を實際よりも少し遅らせて証言してほしい……ということだよ」

「それにどんな意味があるんだ？」

「私はね、ジャーニーがシャンティ叔父上を殺してから訴えよう……捕えに行こうと……そう思うんだ」ジャクナ四世はその冷たい瞳を彼に向けながら微笑んだ。「だって、これはさあ…… unnecessary 王族を間引くチャンスだろう？」

「……あ、ああ」アレックスは混乱しながら頷いた。正直、ジャクナ四世の言っている意味がよく理解できなかったが、彼がとてつもなく冷酷なのは理解できた。「そうだな、そうしよう。おれは周りの奴にこのことを話すとき、少し時間を遅らせることにする。いや……そうします。そうした方が、あなたのためになりますものね」

「ふふ」

ジャクナ四世はつまらなそうな瞳を彼に向けた。

「なん……」

ですか？ とアレックスが訊こうとした瞬間、ジャクナ四世は腰に帯びていた剣を素早く抜いて、相手の胸を斜め上に切り上げた。アレックスは「ああ！」と驚いたように叫ぶ。ジャクナ四世は切り上げた剣を頭上で止めて、そのまま相手の頭にぶち込んだ。剣は彼の皮膚を割き、薄い肉をえぐり、頭蓋骨を砕いて中のふるふるの脳みそをグシャグシャに押し潰す。アレックスはあつという間に絶命したが、頭からは血がダバダバと溢れてきた。

感慨などを感じもせず、ジャクナ四世は近くにあった布で剣についた血をふき始めた。息一つ乱れてなかった。

「まったく……」彼は呆れたように独りごちる。「私がお前みたいな無能を手元に置いておくはずがないだろう？ それに、私は有能な二人の叔父上……ジャーニー叔父上を、シャンティ叔父上を、両方とも失うつもりはないのだよ。ま、リュキウスのこともあるから、是非ともシャンティ叔父上は残しておきたいしね。それにしても、いやはや、しかし、お前はこれから役に立つよ？」

彼がそう言った時、彼の頭からはすでに血は流れなくなっていた。「お前の死体はここに残しておくよ。ジャーニー叔父上はきつとこのことの意味を理解してくれるだろうから」

ジャクナ四世はそう死体に語りかけてから部屋を出た。

アレックスの死体はつまるところ、ジャクナ四世からジャーニーに送る脅迫状である。「自分を殺そうとしたことを、他の奴に言われたくなかったら、これから先自分に絶対服従するんだぞ」

という……文字のない脅迫状である。

「それでは、二人の叔父上の所に顔でも見せに行こうかな」ジャクナ四世は鼻歌交じりに言った。「それとも、シャンティ叔父上は私の手助けなどなくても生き残るだろうか……これはこれで楽しみだ」

56 主太子の審美眼 (後書き)

絵が、すごい、ヘタ。

57・シャンティとジャーニー

> i 3 5 3 4 1 — 4 0 5 7 <

ノックの音でシャンティは目を覚ました。いつの間にか彼は眠ってしまっていて、部屋の中は薄暗かった。ベッドから起き上がって、そのままベッドの端に腰を掛ける。窓の外を見てみれば、薄曇りだった空は真っ黒な雲によって包まれていた。どんよりとした空は、そのまま彼の心の内を表しているかのようで、シャンティはいつそう滅入った気分になった。

もう一度ノックがあった。シャンティは思い出したように「誰ですか？」と返事をした。

「おれだ……ジャーニーだ」

部屋の外から聞こえた声は確かにジャーニーの者だった。

「ジーニーか……どうぞ、入ってきていいよ」シャンティは頭を振りながら言った。ジャーニーはドアを開けて部屋の中を見渡し、誰もいないのを知ると、ドアを静かに閉めた。「何のようだい？」

「お前の様子を見にただけさ」ジャーニーは腰に帯びた剣を確かめながら言った。「調子はどうだ？ なんなら、北部への遠征はおれが行ってやるうか？」

「それはだめだ。ジーニーは北部の地理に詳しくないだろう？ それに、現地軍との連携だって取らなければならぬからな。ぼくが行かなければ……」彼は、そうは言うものの立ち上がる気配も一向に見せなかった。「そうだよ。行かなければ。エレも待っているし……」

「そう……」どうした？ ジャーニー。殺せ、今ならば、簡単に殺すことができるぞ。あんなに弱っているんだ。さあ、殺せ。剣を振り上げて奴に近寄って行って、そのまま振り下ろせ。そうすれば、簡単に奴を殺すことができるぞ。「行くのか」何を言っているんだ？ 話している暇はないぞ。ほら、こつやって話している間にも誰

かが自分を探しているかもしれない。シャンティを迎えに向かっているかもしれない。さあ、さあ！ 殺せ。ギャロップも死に、ユルシユも死んだ。いま、お前に残されているのは、王位だけだ。それを取らないでどうする。なに、気にするな。元々王位はお前のものだ。だからお前はそれを取り返すためならば、どんなことをしても、それは些細なことに過ぎない。シャンティもジャクナ四世も必要な犠牲なのだ。「カバルス騎兵を好きだけ連れていっていいぞ」

「ああ、ジニー」シャンティは頭を抱えて、次には搔きむしって言う。「本当を言つとね、もう嫌なんだ。考えるのも、戦うのも、殺すのも……全てが嫌なんだ。もう正直に言っしまおうか？ もう言っしまおう、ジニー。ぼくはね、生きていても、どうせ辛いだけなんだ。君の持つているその剣で、心臓と肺臓を貫かれることを今か今かと待ち構えているんだ」

ジヤーニイはびくりとした後に、剣に手を伸ばした。どうした？ 好機だぞ？ 奴は言ったぞ。殺してくれと、お前の剣で殺してくれと！ さあ、殺れ、リクエスト付きなんだ。そこは紳士的に望みを叶えてやろうじゃないか。奴の肺を突き刺して、引き抜き、次は心臓だ。そうすれば、奴は恍惚の笑みを浮かべながらこの世を去れる。お前は奴からも英雄としてあがめられることになるんだ。

「死にたいのか？ シャンティ」

ああ、まただ。お前はなんで尻込みしているんだ？ さっさと殺してしまえ。奴の気が変わる前に殺してしまえ。なんで、こんな簡単なことができないんだ。なんで、何かが誰かが自分を止めてくれるのを待っているかのように、つまらない時間稼ぎなんかをするんだ。「お前は弱いな」そうだ、弱いのだ。奴は弱い。父上の時にも取り乱して……あんな奴は生きる価値もない。何度も言っているだろう。お前が奴を殺しても悪くなんかないんだ！ さあ！ さあさあさあ！ 殺せ！

そうやって、頭の中のもう一人の彼が喉をからしながら、彼の耳元で叫びをあげる。ジヤーニイは腰に帯びた剣を握りしめた。

「おれが……殺してやるうか？」

「ジニー」シャンティはゆっくりと近づいてくるジャーニイを見上げて言った。「君に殺されるなら、悪くないね」

ジャーニイは鞘から剣を引き抜いて、その切っ先をシャンティの顔に近づける。シャンティは死を懇願するような顔で、ジャーニイを見た。相手のことをこれっぽっちも疑っていない無垢な瞳がジャーニイを見た。ジャーニイは心臓の鼓動がおかしな調子を刻むのを感じながら、自分の手が震えてもいないのを知った。

ジャーニイは息を整えた。この剣先をそのまま前に突き出すか、それとも振り上げて振り落すかすれば、シャンティは死ぬのだ。ジャーニイはそのことを心の中で反芻した。さあ、殺せ。と心の中の彼がまた叫んだ。ジャーニイは歯をぎりぎり、痛いほど噛み締めた。体中に汗が噴き出て、息の仕方がおぼろげになり、何をしているのかも理解できなくなる。

シャンティの瞳が細く、鋭くなった。そして、彼は結局、諦めた様に微笑んで、嘆息しながら立ち上がった。

「もういいんだ」シャンティは彼の剣の上にそっと手を置いて言った。「やはりぼくは生きなければならぬんだ。約束もあるし、使命もあるし、君を傷つけないし、何より、そうだ……ぼく自身がそう決断したのだったよ。心が潰れても、誰かのために生き続けるとね」

殺すなら今しかない、ジャーニイは心の中で思った。もう、シャンティは心変わりしている。生きなければならぬと思い始めている。早くしなければ……早くしなければ。

「何があるんだ。お前に……」ジャーニイは呟いた。「お前は生きていて幸せなのか？ 生きていて楽しいのか？」

「辛さ、辛いことだらけさ」

「ならなんで、お前は生きようと思ったんだ。何のために生きようと思ったんだ。ここで、死ねば楽になれたのに」ちょ、ちょっと待てよ。おいおい、何聞いてんだよ。何を聞いてんだよ。「まさか、

民のためとか言うんじゃないだろうな？ そんなもののためにも、自分を犠牲にして犠牲にして、奴らの暮らしを良くしたとしても、奴らから返ってくるのは感謝の言葉と想いだけ」何を言ってるんだ。そんなことを言っている暇があるならさっさと殺せと何度も言っているじゃないか。この馬鹿野郎。お前は王になりたくないのか？ 頼むぜ、奴に合わせて錯乱ひはっなんかするんじゃない。「そのくせ、失敗したら好き勝手に誹謗ひはっされ、嘲笑され……あんな馬鹿共のために自分を犠牲にすることなんかない」ああ、糞！ 糞野郎。もういい、それならば……もういい。所詮お前もそうなんだ。お前も、あのお人良しと同じなんだ。ふん、それなら、もういいさ。好きにすればいい。後悔するなよ。後悔したって知らないぞ。「うるせえ！ うるせえんだよ！」

叫んだ瞬間、ジャーニイの目からポロツと流れ落ちてきたのは大粒の涙で、彼は自分が泣いているのに気が付くと、急いで顔を隠した。

「ジニー？」シャンティは彼の顔を覗き込んだ。ジャーニイはその顔を向こう側にグイッと押しつけてから、涙を拭き始める。「どうかしたかい？」

「なんでもねえよ、馬鹿」ジャーニイは鼻をすすりあげながら言った。心の中は静かになっていた。ジャーニイはシャンティをキツと睨みながら言う。「お前は、結局なんで……」

「明瞭なことさだよ」シャンティは白い歯を見せながら無理に快活そうな笑みを作っていた。「託されたからさ、色々な人にね」

「……誰も、お前のそこまでの犠牲を望んでなんかいないだ」ジャーニイは険しい顔をしながら言った。こいつは、何とも哀れな男だろうか。何とも不憫な男だろうか。「お前が勝手にそうやって思いこんでいるだけなんだ……だから……」

「しょうがないっていう感覚もあるんだよ」シャンティは眉を八の字にして困ったような顔をしながら、やれやれと言う風に呟いた。

「これがぼくの性分だからね」

「ふん……」ジャーニイは手に持っていた剣を鞘に納めた。「死にたくなるのもわかる」

「そうかい？ そうだね。まあ、ぼくは生きているけれどね………さて！」シャンティはパンと掌を合わせた後に、溜息をついた。

「これからぼくは忙しい。北部にとんぼ返りして、そこで一合戦しなくちゃならないからね」

「……手伝ってやろうか？」

「なんだい？ 君はここに残って王位につくための算段を考えるんじゃないのかい？」

「王都奪還に加えて北部鎮定の功をなせば、おれの王位も固いだろう？」ジャーニイは笑みを作りながら返した。「なんなら、カバルス騎兵をすぐに集めるけれど？」

「それなら頼もう。お兄様がこんなに協力的なことはそんなにないからね。西部カバルス鎮定の時以来かな？」シャンティが軽口を叩くと、ジャーニイは目を細めた後にドアの方に歩き始めた。「ああ、ちよつと待ってよ。さっそく出発かい？」

「ああ、そうだ。お前もただだな」ジャーニイはドアを開けて、シャンティを手招きした。「おら、さっさと来い」「うん」

シャンティは引つ張られているような感覚を覚えながら、歩き出した。足は軽やかで、彼はそのことを不思議とは思わない。

明確な理由や動機や意味もなく善行を行う人など狂っているに過ぎず、明確な理由や動機や意味もなく悪行を行う人も狂っているに過ぎない。

ジャクナ四世はシャンティの部屋からそれほど離れていない空き部屋の中に隠れながらそう思った。廊下からはジャーニイやシャンティの足音が聞こえてきた。ジャクナ四世はドアに持たれながら考える。

大体、明確な理由や動機や意味もない善行悪行などほとんどあり

えない。

一見理由がなさそうな快樂的殺人犯だって、己の快樂を求めるといふ点で確固たる理由があるように、ほとんどすべての行為にはそれなりの理由がある。

しかし、それでも、この世界にはそれらの明確な理由やら動機や意味やらのない善行悪行もあるのだ。そしてそれはさつきも考えた様に、非情に稀にしかないとはいえ、もしあるとするならば異常としか思えないものだ。

それではシャンティ叔父上はどうだろうか。

彼の感情は明確な理由付けができない。彼自身、生まれつきそういう性質なのだからと決めつけて、それ以上のことを考えることもない。

いやいや、それでも彼は違う。彼は異常ではない。

彼はただただそれらの理由や動機やら意味やらを人一倍持つているだけに過ぎないのだ。そのせいで自分の感情がどこからくるのかうまく掴めないけれど、それでも彼は歴とした正常者だ。胸を張って町を歩いてもいいほどの善行者だ。

「それでも、私はそんな生き方を許容できないけれどね」

ジャクナ四世はくくく、と笑いながら部屋を後にした。

その日の昼。真っ黒だった空の色が少しずつ薄くなり始めると共に、シャンティたちは北部に向かって出発した。王都の市民たちはシャンティたちがもう王都を出ていってしまうことを惜しんだが、それでも市民たちは歓声や花びらを彼らに降らせて、彼らを送り出した。

記録によればリユキウスとシユラク二世はこの北部鎮定軍に従軍し、マスタングは王都に残ったとのことである。

また、ジャーニイもこの時には自分の部屋にあったアレックスの死体を知っており、すでにそれを処分させていた。このことは彼の侍従長ベアードが後年に書いた覚え書きに残されている（死

体はベアードと近衛兵が処分したらしい)。それでも、ジャーニイは王位への情熱をすでに冷ましていたのか、焦りや怒りなどの感情を表に出すことはほとんどなかったという。

さて、シャンティたちは強行軍を敷いて北部にとんぼ返りし、そこでハドロンを落としていたイムサ軍との戦闘を開始した。

この戦いでは両国ともそれほど損害を出していない。おそらく、イムサ国のネオットス將軍は、サウルス国側の内乱がすでに終結していることとシャンティたちの連れてきた軍勢が予想以上に充実していたのを見て、この戦いでは勝てないと踏んで退却したのだろうと思われる。

シャンティたちがハドロンを取り戻し、潮の川に駐屯兵を置くと、やっとサウルス国に平和が訪れた。

それでも、彼らはまだ休むことはできなかった。シャンティとジャーニイらは王都に再度向かい、そこで次の王を決める会議を行った。それはジャクナ四世、ジャーニイ、シャンティ、リュキウス、シユラク二世の五人の王族によって行われ、短時間の義務的な話し合いが終わると、次の王は簡単に決まった。

57・シャンティとジャーニー（後書き）

画像はシャンティのやや大人びたバージョン。二十代後半くらい？

登場人物の役割としてはシャンティがジャーニーを改心させるベキなんでしょうけども、こんだけ落ち込んでるシャンティがいきなり復活してジャーニーを説得するのが想像できんかったので、しよげてる弟を見てジャーニーがいきなり改心するという展開になりました。

んでも、人物の心情をちよつと無視してでもシャンティにジャーニーを説得させるベキだったんだろつかなあ……と今でも悩んでます。

ところで、あと2話。

> i35414—4057<

二四六年の年明けに内乱が終わり、それに関連した北部の鎮定も完了すると、次の王位が決まる。処刑されたジャクナ三世の持っていたサウルス国王位を継承したのは彼の子供のジャクナ四世だった。十八歳のジャクナ四世は戴冠を果たすと文武の官人の整理を始めた。彼は官人の数を減らし、さらに彼らが税を徴収することのできる特権、いわゆる封戸を少しずつではあるが王国に返還させるようにした。

また、経済や農業を活発化させるために徴兵の数を減少させ、減税も実施した。

これらを見たらすぐにわかるだろうが、ジャクナ四世の初期の政策はこれと言って特徴もないものだった。その反面、手堅い政策だったとも言える。

今回、サウルス国で内乱を起こしたのは基本的には一般国民であるが、一時的に各地方の貴族がそれらの指揮を執っていたのを忘れてはならない。先ほど、封戸を国に返還させたと言ったが、その対象となったのは王国を乗っ取るうとした野心を見せた貴族に限っている。ジャクナ四世はこれらの政策により、先の反乱で大きな勢いを得た国民の怒りを治め、なおかつ王国に牙をむいた貴族をやりわりと処罰したのである。

けれど、減税を続け国民を増長させるとそれはそれで貴族たちの立場が危うくなり、今度は彼らが先頭に立って反乱を始めるかもしれないという危険性が出てくる。だから、ジャクナ四世はこの減税政策をそれほど長くは続けなかったし、貴族を罰するのも同様だった。とはいえ、これらのことは後年の話である。

話を二四六年に戻す。さて、シャンティたちはジャクナ四世の王権下ではどのようなことをしていたのか。

彼らは総督として地方に派遣されることになった。シャンティは以前と同じ北部カンプトケファレに派遣され、ジャーニイは志願して西部カバルスに向かった。

北部総督として派遣されたシャンティは引き続いて東部にも影響力を持つことができた。彼はいつ起こるか分からない東部の食糧難に対応するための策を考え、それを実践していく。これらは少なからずの実績を残したらしいが、劇的な成果を上げたものはなかった。実際、内乱後の彼に関しては、政治家としてよりも、文化人としての方が高い評価を得ている。彼が記した著作物や建立した王立図書館は現在でも形を残しており、後世にも微弱ながら影響を与えている。

次に、西部総督ジャーニイであるが、彼は西部に着くとまずはハンスの所属していた例の組織を壊滅することに尽力した。けれど、そう簡単には壊滅させることはできなかったようで、この組織は長年カバルスの中で生き続けていくことになる。ジャーニイは組織壊滅に見切りをつける次にイハテリオへの対策を始める。彼はサウルスから大工を呼び寄せてカバルス南部に要塞を作り始めた。このことはカバルス地方の防御力向上よりも、カバルスへの最新建築技術流入の点で役に立ったとされる。

ジャクナ四世、シャンティ、ジャーニイときたら次はリュキウス、マスタング、シュラク二世である。

彼らはジャクナ四世の治世における主要人物とされ、各地方で一年ずつの実務経験を積むようにジャクナ四世から言い渡されていた。簡単に言えば「お前たちが大人になった時に王の役に立てるように修行して来い」ということである。彼らは三人まとめて一か所に派遣された。一年目の二四七年は温暖な南部に、二年目の二四八年は東部に、そして三年目の二四九年はシャンティのいる北部に、最後の四年目である二百五十年はジャーニイのいる西部に派遣される。

この育成方法にどんな効果があったのかは測定不能だが、彼らとジャクナ四世の治世は「征夷龍聖王と三騎士の時代」と呼ばれ、長

いサウルス国史の中でも屈指の繁栄期であることから、それなりの成果があったのだろう。

さて、次の時代の話は次の機会にすることにして、話を再開せねばならない。

このタイミングで言うのもおかしい話だが、まずは長い御付き合いに感謝しよう。

そう、長かったこの話も次で最後である。

時代はジャクナ四世の治世の最初期。二四九年。後の世に三騎士と称されるリュキウス、マスタング、シュラク二世が北部カンプトケファレに派遣された年の話である。

58・嵐の後に (後書き)

画像はあまりもの。
次で終わり。

59. この空を守ると決めた

>4057—i35505<

シャンティがジャクナ王との戦いで行った遊撃包囲作戦は隠れた名戦として後世でも知られている。一見、前後左右の視界が極端に狭められる夜間だけでしか効果がないように思われるかもしれないが、大規模戦闘では昼間であつても大体において、情報がうまく行きわたらないものであり、「いつの間にか敵に包囲されていて、気づいた時には逃げるにはもう遅い」などということが往々にして起こる。

ドラゴンスケール
この逆鱗作戦は、いわゆる鉄床かなど戦術と言つたもので、世界の戦争の歴史から見れば、これ以前にも似たような戦闘が二度行われている。一つ目のケースは北の偉大なる王の東方遠征時で起こつた。二つ目のケースは後継者の国の戦争で起こつた。その両方の場合で鉄床戦術の使用者が勝利しているのだが……何度も言つているように、包囲戦と言つのは失敗した場合、軍の損害が通常よりも大きくなつてしまふ。

「それに」マスタングがリュキウスの作つた戦史の資料を見つめながら言う。「瓦解の危機に陥つた様に、この作戦は兵士の状態が非常に重要になつてくる。その点で、ある意味ではギャンブルともいえる作戦だ。おれは危なかつかしくて使えないね」

マスタング、リュキウス、シユラク二世は丸テーブルを囲みながら座っている。それは北都ウチノホークの近くにある花畑の真ん中に置かれてあり、彼らは程よく照りつける陽光の中、夏の北国のさわやかな風に吹かれて飛んでくる花びらを一身に受けながらのんびりとくつろいでいた。

実務経験を積むために各地に派遣されるようになってすでに二年とちよつとが経つていた。

各地の官人らの仕事を一年間で覚えねばならないせいで若き三騎

士は思いのほか忙しくかった。それで、その日はたまにあるかないかの休日だったわけだが、それを知ったシャンティはそれならば、ということと彼らをここに招待したのだ。正直、彼らにしてみれば、たまの休日くらいは部屋の中で十分に休息を取っていたいと言っているところだったが……。

「へえ……なら、お前は同様の戦術は使わないんだな？」シユラク二世はマスタングの手から資料を取り上げながらからかう。「まあ、この作戦は叔父上のような仁徳のある御人だから成功したとも思える作戦ではあるからし、お前は兵士からの受けが悪いものなあ」

「はあ？ なんだって？」

マスタングは鋭い目でシユラク二世を睨みつける。

「……それにしても、どうやって詳細を調べ上げたんだ？」

シユラク二世は話を逸らす。

「それはだね」とリユキウスがにやにやする。「父上が東部に行っている間に、父上の日記を盗み読みしてなんとかかんとか詳細を詰めたんだ。いやはや、そのおかげでこの戦史は完璧なものとなったよ、ははは」

愉快そうに笑うリユキウスをよそにマスタングとシユラク二世は顔を見合わせて、はあとため息を吐いた。

「悪逆無道だな」

とシユラク二世はその資料をリユキウスに返す。

「それより、この資料は参考になったかい？」リユキウスは屈託のない笑みを彼に向けながら言った。「君は来年頑張らねばならないだろう？」

この次の年に彼らが派遣されるのはジャーニイのいる西部カバルスである。シユラク二世はそのことを言われて、ふんと鼻で笑った。「西部カバルスはすでに安定期に入っているから、戦闘が起こるかどうかも分からないし、起こっても大規模な戦闘は起こらないだろうね」

父上がそうしたのでぞ、と言うように胸を張りながらシユラク二

世は偉そうに言った。

「ならば、どうやってアピールするつもりなんだい？」

とリュキウスが不思議そうに尋ねた。

「ア、アピールなどと……おれはそんなことに興味ない。ただ、全体的に成長したおれ姿を見てもらうだけだ」

リュキウスとマスタングの二人は「ふーん」と呟く。

「大体、本番は来年じゃなくて再来年からだ」マスタングが何となくぶっきらぼうに言う。「この教育実習のような派遣が終われば、おれたちはあのジャクナ四世の腹臣同然として中央に迎え入れられることになるんだからな。何をさせられるやらわかったもんじゃないぞ」

「従兄上は君が考えているような悪人ではないよ」

リュキウスが言った。マスタングは首をふいと逸らしながら言う。

「どうだか……。おれは未だに奴が何を考えているのか、さっぱりわからんぜ」

「そう言えば」シユラク二世が何かを思い出したように呟く。「あいつに何が目的なんだ、と訊いたことがあるんだ」

「へえ……それは初耳だ。それで？ 従兄上は何と言ったんだい？」

「この世のすべてを壊したとしても、見たい景色があると……」シユラク二世は昔のことを思い出し、感慨深そうにしていた。「そう言っていた」

「見たい景色」マスタングは首を傾げた。「なんだそりゃ。ただ単に、行きたいところがあるってことか？」

「知らないさ」

シユラク二世は首を振る。その横で、リュキウスはあごに手を当てながら考え事をしていた。彼には、ジャクナ四世の言った言葉の意味が何となく分かったようだった。

「おーい」

不意に大きな声が聞こえてきて、三人は考えるのを中断すると声のした花畑の方を見た。花畑の中でシャンティは片腕いっぱい花

を抱えながら、無邪気な笑顔で手を振っていた。彼の横には十歳になったヴァシリカと十四歳になったレオネラが立っていた。

「おい、嫁のレオネラが待つてるぞ」

とシユラク二世はマスタングを肘で小突く。

「誰が誰の嫁だ」

マスタングは顔を赤くしながら怒鳴る。

シャンティと姉妹は花束を抱えてリユキウスたちの所にやってくる。で、彼らのテーブルの上に山盛りの花束を置いて愉快そうに笑い声をあげた。

「こんなに花なんかを育てて何になるんだよ」

とマスタングが花を一つつまみあげながら訊いた。シャンティが返す。

「このあたりにはミツバチもいるからね、蜂蜜を集めるのにもいいし……食べられる花もいくつかある。そのうえ油を取れるものだけである。さらには栄養価の高い花はルルディファイロ三世の餌にもなるのだ」シャンティははは、と笑いながら花を観察する。「良い花だ。穀物や果実もこれくらい簡単に育ってくればいいのにな
え」

「この花を育てている暇があったら、そっちを育てりゃいいだろ」マスタングが花を口を含みながら言った。彼は口の中でもぐもぐした後、後に外にぷつと吐き出す。「これは蜜がかなりあったな」

「あなたは品位と言うものを身に着けなければなりませんわ」とレオネラがぶすつとしながら言った。「私は夫になる人がそんな野蛮人なのは嫌なので、できれば北部にいる間に直していただきたいところですね……」

「お、おれはまだお前と結婚するなんていつてない」

マスタングはしどろもどろしながら反論する。

「けれども、あなたのお母様のフェミナ様はもう私たちのことを認めてくださっていますし、それに……」レオネラはシャンティの方を見た。シャンティは笑顔でうんと頷いた。「こちらの親も」

「お前の母ちゃんは了承してないと聞いてるぜ」

「それならばあなたが私を連れて王都にでも逃げてくださればいいですわ。王様の庇護下にでも……」

「そんなことできるわけないだろ！」

マスタングは顔を真つ赤にしながらそう叫んで、席を立ち、どたと足音を立てながら向こうに行ってしまった。レオネラは呆れたような顔をした後に、シャンティたちに向かって「あの方は見かけと態度によらず、ヘタレですよ」とマスタングの婦人よろしく囁き、彼の後を追った。

「マスタングは尻に敷かれるタイプですね」

とリュキウスがシャンティに言った。シユラク二世が口をはさむ。「いや、レオネラの前では誰だってそうなるさ」

「女傑だからなあ。ところで、リュキウス。君が持っているのはなんだい？」

とシャンティが見せてくれと言わんばかりに手を差し出しながら言った。

「これは見るに値しないものですよ」とリュキウスは数枚の資料を懐に仕舞い込む。「それよりも、父上。北方のイムサ国のことが……」

「ネオットス將軍のことかい？ 何やら、最近また活発に動き出したらしいじゃないか。今度の標的もサウルス国らしいとの情報も入ってきているよ」

「ネオットスつて將軍」とシユラク二世が苦笑しながら言う。「あの將軍は北の後継者の国々を攻めればもう少し名を上げられそうなのになあ。なんでこんなに攻めにくいサウルス国に執着するんだ？」
「こちらには因縁があるからね」とシャンティはマスタングが座っていた椅子に座りながら言う。彼らはなんとなしに花畑の方を見た。そちらではマスタングとレオネラがわんわんと言い合いをしている。
「仲の良いことだ」

シャンティは満足そうにほほほ、と微笑んだ。リュキウスは彼の

横顔をじつと見ながら、内乱後のシャンティのことを思い出していた。あの時も……息子であるぼくとは笑顔で接してくれていたけれども、今のようない屈託のない笑顔じゃあなかった。あの時は、本当に苦しそうで、本当に耐えられなさそうな様子だった。

「父上」リユキウスは意を決しながら父を呼んだ。シャンティは夏の晴れ空のような、はつきりとした青色の瞳でリユキウスを見た。リユキウスは一瞬たじろいだ。「あの……父上は、いま、もし……何か、なんでも一つだけ願い事がかなうなら、何を願いますか？」

リユキウスは自分で尋ねようと思ったことと、全く違うことを聞いた。ちがう、こんなことを聞きたかつたんじゃない。

「願いが叶うなら？」

シャンティは腕を組んで、真剣に彼の質問に対する答えを考え始めた。

「永久の平和じゃないの？」とヴァシリカが彼の膝の上に座りながら言った。「お父様はきつとそれを願うわ。お兄様」

「ヴァシリカはわかってないな」とシユラク二世は笑いながら言う。「叔父上は結構欲がないからな。なんでも願い事が叶うとしても、簡単なことしか願わないさ。そうだな……まあ、世界中の本が欲しいとかそんなことだろう」

「違うわ、ねえ、お兄様？」

とヴァシリカはリユキウスに同意を求めるような瞳を向ける。リユキウスは苦笑してからシャンティを見た。シャンティは、うんと頷いた。

「ぼくは、そうだね。もう一度……彼と横に並んで、同じ一つの方角を眺めたい」シャンティは優しい眼を遠くに向けていった。「それだけだね」

リユキウスは自分の喉の奥が急に狭くなっていくのを感じた。悲しみで、喉がふさがれそうだった。

「彼と？」とヴァシリカが首を傾げる。「誰ですか？」

「君も知っている人さ」シャンティはそう言うと、膝からヴァシリ

力を降ろして、立ち上がった。花畑の方に声をかける。「おーい、あんまり騒いでいると、蜂が怒りだすよ」

マスタングとレオネラは相手の方を指差しながらギャーギャーと怒鳴り始める。シャンティはやれやれと言うように頭を掻いた後、花畑の方に歩いていく。

「父上！」リュキウスは慌てながら立ち上がり、驚いて振り向いた。シャンティに向かって、本当に訊きたかった質問を投げかけた。「父上は、いま、満ち足りているのですか？」

シャンティは腰に手を当てて、ちよつと空を見上げた。その時、シャンティの鼻のてっぺんに花びらがふつと乗った。彼はにんまりと微笑みながらそれを摘みあげ、頭上に手を伸ばして、花びらを離れた。花びらは風に巻き上げられて、空の高い所までのぼり、ひらひらと何回か回転した後、どこかに流れていった。青い空の中には、両手の指でも数えきれるだけの雲が残った。

花びらを見失ってしまうと、シャンティは子供のような無邪気な顔をリュキウスに向けた。リュキウスは愛する父がなんとこのかを緊張しながら待った。シャンティは白い歯を見せながら、はははと愉快そうに笑って、快活に答えた。

「もちろんさ」

そう言つと、彼は目を細めてもう一度空を見た。リュキウスも彼と同じように空を見上げた。

青い空には、両手の指で数えきれるだけの雲しかなかった。

その空を見上げながら彼は思った。

真つ黒い雲に覆われた厳めしい空を美しいとは思えない。それにただただ果てなく青く冴えわたる雲のない空だって、言い知れない尊さや怖さを感じてしまうせいで、とても美しいとは形容できない。そう。だから、彼は今日の前に広がるこの空を美しいと、この上なく美しいのだと思った。この儂くも力強い、日常的な青空を……守りたいのだと思った。声を大にして伝えたいと思った。

彼は心が甘く痺れ始めたのを感じると、空から視線を落とした。

そして、懐から例の戦史の資料を出して、じっと見つめ、また懐に仕舞い込んだ。

つまりはそういうことなのだ。

彼はそう思いながら、シャンティのすぐそばに歩み寄り、意味もなく嬉しそうに微笑む彼の瞳の中を覗き込んだ。

そこには、誰もが愛する青空があった。

つまりはそういうことなのだ。

59. この空を守ると決めた (後書き)

オワタ……。

最後だからとうまい絵を上げようと思ったけど、無理でした。

60・あとがき

あとがきである。なまいきにもあとがきである。

別に書くつもりはなかつたんですけども、59話で終わるのはなんとなく決まりが悪い感じだったので、あとがきを書くことにしました。

まあ、妥当な所ならば自分の作品の成功点と失敗点を自分で書いていくべきなんですけど、それは別にいいか……とっています。自分で自分の作品を褒めまくって、卑下しまくったって、どうなると言つてもないですし。

「じゃあ、何を書くぞね」と言っ感じですが、まあ、あとがきを書く際にすぐに思いついた事である「書いている時の事」を書こうと思います。

書いている時の事というか、まずこれを書こうと思った理由はどこにもある話で、大まかな設定とストーリーが頭の中で完成してたからです。

まあ、「これは書き出さないと忘れてまうな」という強迫観念に背を押されて、人一倍ぐにやぐにやした脳みそからおぼろげな物語を引っ張ってくることに決めただけです。

これが失敗だった。

書き出す前際は400字原稿用紙が200〜300枚くらいの作品だろうなと思ってました。つまり、単純に言えば8万〜12万字くらいの作品ってことですね。

んでも、ふたを開けて見れば、あにはからんや！ 56万字の作品だったんですね……。……。

ふざけんなやつ！

とまあ、いま書いているのがそういう長々とした作品であるのに気が付いたのが、カバルス鎮定を書き終った頃で、その頃には10万字(たぶん)とかそのくらい書いてたわけですよー。

それで「いつ終わるねん」とか思いながらも、途中で終わるわけにはいかないので、話を書き続けていくわけですが、後半は本当に「早よ終われ、早よ終われ」とばかり思っていました。

「でも、終わってみるとここで終わるのが悲しかった……」などと言う感情は執筆後にもわかず、そのくせ作品の出来に納得がいかず、ちよつと文章を付け足したり、セリフを直したりしてました。それで、なんとかかんとか出来上がったわけです。

しかし、こういうのは黒歴史として残しておいて、老後に楽しむつてのが基本的な使用方法なわけです。

でもNHKドラマ『坂の上の雲』に出てくるオプティミズム楽観主義にまみれた登場人物たちに感化されていた僕は「そんな閉鎖的で行かんなあ。そうだ、ネットだ」と、ここに投稿し始めたわけだ。

この、若き日の情動に突き動かされた僕を誰が責められましょう。そして、反応がないことに夜毎涙を流し、枕に深いシミを付けてしまった僕を誰が責められましょう。

うん、まあ、そんなことはどうでもいいですわ。実際、読んでもらえた方から反応が頂けたわけだし。

さて、あとがきを延々と続けてもしようがないので、ここで終わりにします。

ここまで長々とした話を読んでくださった方々は本当にご苦労様です。

こんな拙作ですが、どうですかね。わりと楽しんでいただけたでしょうかね。

読むのに使った時間だけの価値はあったと思っていただけなら、まことにこれ幸い。そうじゃなかったなら、ぐへへ、マジすんませ

ん。
そんじきむけで、そねではいじねに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0693x/>

亡国の幻将

2011年11月21日22時12分発行